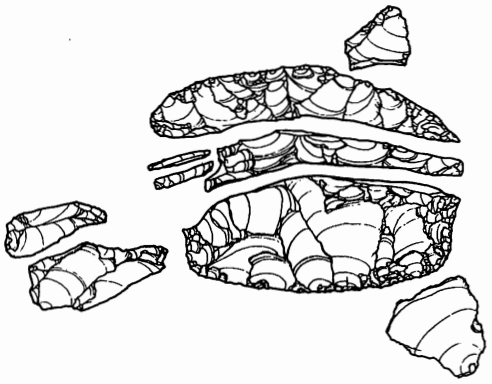
函館市

石川１遺跡

―一般国道５号函館新道道路改良工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―



昭和60・61・62年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

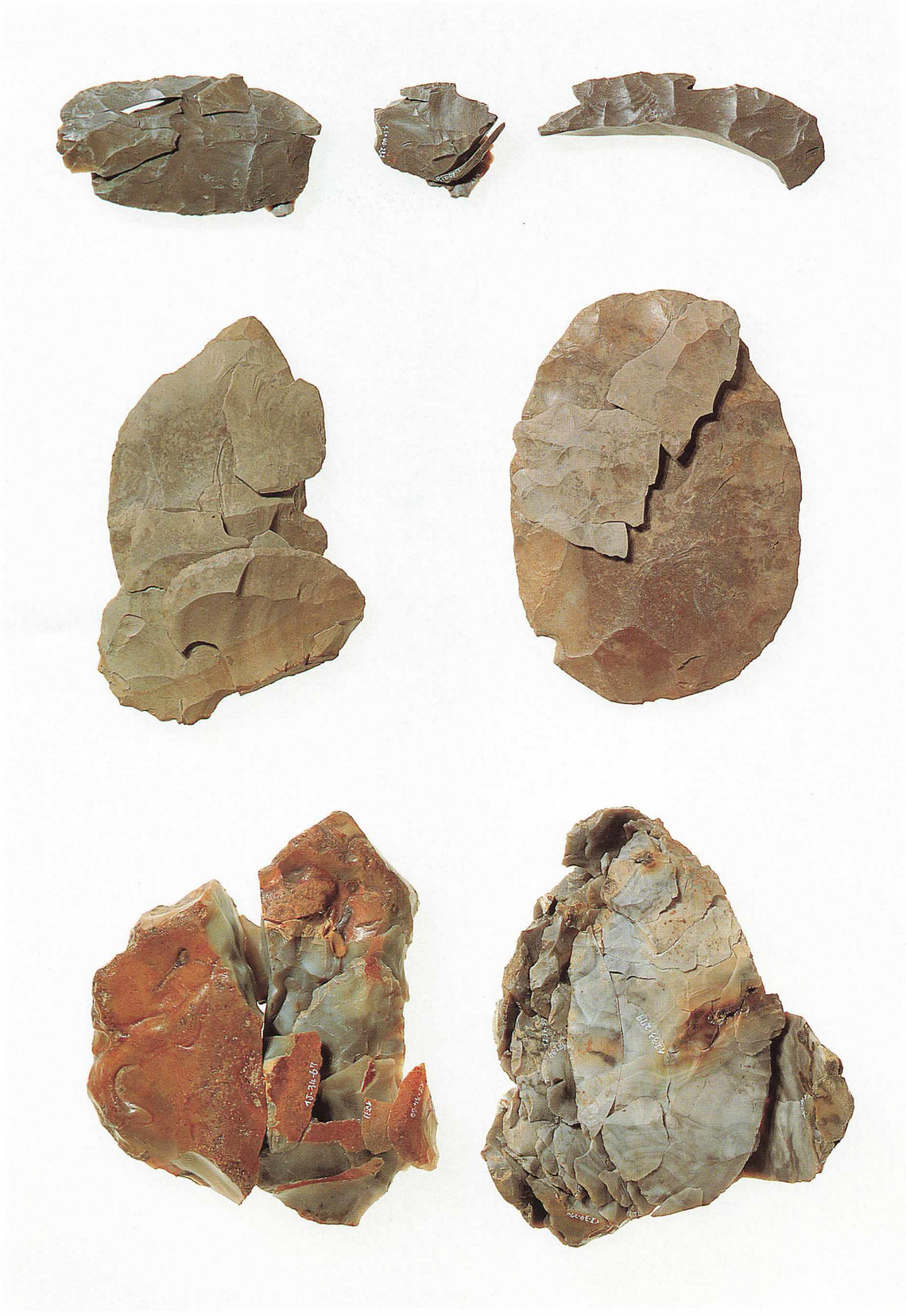
北埋調報 45

函館市
石川１遺跡

―一般国道５号函館新道道路改良工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―

昭和60・61・62年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター



旧石器接合資料

口絵　2



遺跡周辺の航空写真



遺跡遠景
（北から・稜北高校屋上から）



住居跡の分布状況（南から）

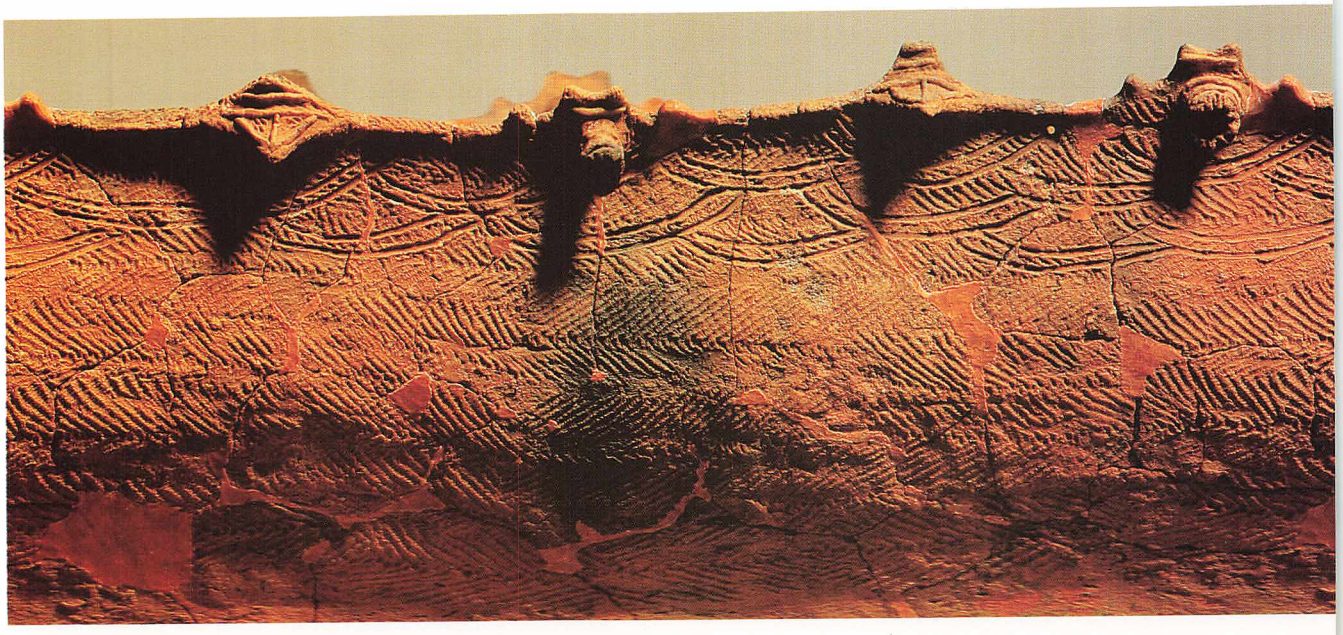
口絵　4



遺構調査状況
（北から）



H-1 調査状況
（西から）



土器の展開写真



土器の突起



土器の突起



H-3
出土の土器



旧石器調査状況
（北から）



Ｓｂ-2 中央焼土
（Ｆｂ-1)(北西から）



旧石器各種



尖頭器製作剝片接合資料

例　　言

1　この報告書は，一般国道５号函館新道道路改良工事に伴って，昭和60，61，62年度に財団法人北海道埋蔵文化財センターが実施した石川１遺跡の埋蔵文化財発掘調査に関するものである。

2　調査の概要については，すでに『石川１遺跡』昭和60年度調査概報，同昭和61年度調査概報などで説明しているが，記載については，本報告書が優先する。

3　本書の作成は，調査部調査第１課で行ったが，編集は長沼孝が担当した。各章または節の執筆は以下のとおりである。

Ⅱ２，Ⅳ１(2)花岡正光，Ⅲ１，Ⅴ１(5)長沼孝，森秀之，

Ⅰ，Ⅱ１・３，Ⅲ２，Ⅴ１(1)～(4)・２長沼孝

4　第Ⅳ章の各種分析，同定の結果については次の方がたに執筆を依頼した。

１(1)山田悟郎（北海道開拓記念館），１(3)三野紀雄（北海道開拓記念館），２(1)山田治（京都産業大学），３(1)興水達司（北海道大学）

なお，１(2)については花岡正光が分析，執筆した。

5　現地の写真撮影は，調査員で分担したが，遺物撮影は伊野正之が行った。また，土器の展開写真は小川忠博氏に依頼した。

6　遺構図は，調査員が作成したものを，長沼，森，石川朗が整理し，篠崎淑子がトレースした。

7　遺物のうち土器，土・石製品の実測，トレースは長沼，新庄素子，久末真紀子，三崎かおる，河口ひとみが，石器の実測，トレースは大場奈緒美，舟口直子がおもに担当した。

8　石器石材の肉眼的鑑定は，花岡正光がおもに行った。

9　遺構などの表記は以下の記号を用いた。

Ｈ：住居跡，Ｐ：土壙（フラスコ状ピット，円形・楕円形ピット，Ｔピット）

Ｆ：焼土，Ｓｂ：石器ブロック，Ｆｂ：焼土ブロック，Ｃｂ：炭化木片ブロック

10　遺構，遺物の図は，基本的に以下の縮尺に統一してあるが，分布図，出土状況図，集成図などは任意の縮尺である。

住居跡，土壙，焼土：1/40，一部については1/10，1/80，旧石器分布図など：1/80

土器実測図：1/4，土器拓影，礫石器：1/3，剥片石器・土製品・石製品・金属製品：1/2

11　遺構図中の方位は平面直角座標の北，レベルは標高（単位ｍ）を示す。

12　遺物分布図では以下の記号を使用した。

縄文時代住居跡　覆土出土　○：土器　△：剥片石器　□：剥片　▽：礫石器
◇：礫　☆：土・石製品

床面出土　●：土器　▲：剥片石器　■：剥片　▼：礫石器
◆：礫　★：土・石製品

旧石器分布図，接合図　▲：細石刃　△：細石刃核　■：両面調整石器　□：尖頭器
★：彫器　☆：錐形石器　◆：削器　◇：掻器　▼：縦長剥

片　▽：石核　●：礫石器　○：礫　●：頁岩ほか剝片　○：めのう質頁岩剝片　●：頁岩ほか砕片　○：めのう質頁岩砕片　●：頁岩ほか削片

また，分布図中で青色は黒曜石，赤色はめのう，黒色は頁岩ほかの石器類を示している。

13　旧石器について剝離順番を示した場合，矢印は加撃の方向を示し，三角マークはバルブの位置を示している。ただし，バルブがない場合は──▷──▶，▷のように白ぬきの三角マークで示した。

14　遺構の規模を記載している場合は，以下の内容である。

確認面での長軸長×短軸長／床(底)面での長軸長×短軸長／確認面からの最大深（単位m）

15　土層の説明中，土壌の混入量を大きく四段階に分け，「多量」「を含む」「少量」「微量」の四種類の表現にした。従って，「を含む」の場合は基調となる土壌と同程度の量の混入を意味する。

16　岩石名は以下の略号で表現した。

Aga.：めのう　Aga-Sh.：めのう質頁岩　And.：安山岩　Ba.：玄武岩
Bl-Mud.：黒色泥岩　Che：チャート　Diab.：輝緑岩　Diat.：珪藻岩
Gni.：片麻岩　Gr-Mud.：緑色泥岩　Mud.：泥岩　Obs.：黒曜石　Qua.：珪岩
Sa.：砂岩　Sch.：片岩　Ser.：蛇紋岩　Sh.：頁岩　Tu.：凝灰岩

17　調査にあたっては下記の機関および人びとの指導ならびに協力を得た（順不同，敬称略）

文化庁，国立歴史民俗博物館，奈良国立文化財研究所，大和市教育委員会，相武考古学研究所，北海道教育委員会，北海道開拓記念館，函館市教育委員会，市立函館博物館，七飯町教育委員会，株式会社工藤組，株式会社大竹組

河原純之，岡村道雄，春成秀爾，西本豊弘，設楽博己，大塚和義，佐原真，松沢亜生，宮本長二郎，松井章，吉崎昌一，林謙作，横山英介，興水達司，大島直行，木村英明，鶴丸俊明，加藤晋平，山田昌弘，金子浩昌，小林達雄，谷口康浩，織笠明，小島俊彰，松藤和人，稲田孝司，鈴木忠司，柳田純孝，本間元樹，相田薫，滝沢亮，小池聡，舘野孝，宮崎博，新井真博，小島正裕，橘口美子，小川忠博，中田節子，富樫泰時，大野憲司，三宅徹也，野村崇，平川善祥，三野紀雄，山田悟郎，赤松守雄，千代肇，長谷部一弘，柴田幸生，田原良信，鈴木正語，石本省三，小笠原忠久，落合治彦，高橋豊彦，久保泰，松崎水穂，斉藤邦典，藤島一巳，藤田登，三浦孝一，柴田信一，寺崎康史，上野秀一，羽賀憲二，高橋正勝，大野亨，杉浦重信，佐藤訓敏，北沢実，吉田周子，松下亘，吉田彰，川井藤五郎

目　　次

口絵1～8（カラー）
例　言
目次・挿図目次・表目次・図版目次
Ⅰ　調査の概要 …… 1
1　調査要項 …… 1
2　調査体制 …… 1
3　調査の経緯 …… 1
4　調査概要 …… 3
(1)　発掘区の設定 …… 3
(2)　調査方法 …… 4
(3)　土壌サンプルとフローテーション，水洗処理 …… 5
(4)　整理の方法 …… 5
(5)　遺構，遺物の分類 …… 6
(6)　遺跡の概要 …… 12
Ⅱ　遺跡の位置と環境 …… 13
1　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 13
2　遺跡周辺の地形・地質の概要 …… 17
3　基本層序 …… 18
Ⅲ　遺構と遺物 …… 19
1　第Ⅰ層～第Ⅲ層の遺構と遺物 …… 19
(1)　住居跡 …… 22
(2)　フラスコ状ピット …… 83
(3)　円形・楕円形ピット …… 102
(4)　Tピット …… 120
(5)　焼土 …… 143
(6)　包含層出土の土器 …… 147
(7)　包含層出土の石器 …… 162
(8)　遺構，包含層出土の土製品，石製品 …… 171
(9)　包含層出土の金属製品 …… 172
2　第Ⅳ層の遺構と遺物 …… 173
(1)　第Ⅳ層以下の土層について …… 173
(2)　焼土ブロック（Fb）と炭化木片ブロック（Cb） …… 174
(3)　石器と石器ブロック（Sb）の概要 …… 175
(4)　石器 …… 180
(5)　石器ブロック …… 214
(6)　母岩別分類 …… 230
Ⅳ　各種分析，同定 …… 241

1　環境 …… 241
(1)　石川１遺跡の古植生について（山田悟郎） …… 241
(2)　石川１遺跡の火山灰について …… 247
(3)　石川１遺跡より得た炭化木片について（三野紀雄） …… 255
2　年代 …… 260
(1)　^{14}C 年代測定（山田治） …… 260
3　遺物 …… 261
(1)　石川１遺跡出土黒曜石片の年代と原産地（興水達司） …… 261
Ⅴ　まとめ …… 265
1　縄文時代の遺構と遺物 …… 265
(1)　住居跡 …… 265
(2)　フラスコ状ピット …… 269
(3)　土器 …… 270
(4)　石器 …… 277
(5)　土製品 …… 277
2　旧石器時代の遺構と遺物 …… 278
(1)　旧石器の発見と遺跡の立地 …… 278
(2)　石器石材の特色 …… 280
(3)　石器の特色 …… 283
(4)　石器ブロックの特色と性格 …… 292
(5)　石器群の編年的位置と年代 …… 296
図版１～80（モノクロ）

挿図目次

図Ⅰ－1　年次別調査区域図 …… 2
図Ⅰ－2　発掘区設定図 …… 3
図Ⅰ－3　遺跡現況図 …… 4
図Ⅰ－4　遺構分布図 …… 9
図Ⅰ－5　発掘区出土遺物点数 …… 11
図Ⅱ－1　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 14
図Ⅱ－2　遺跡の範囲と周辺の地形図 …… 15
図Ⅱ－3　遺跡周辺の地質 …… 16
図Ⅱ－4　遺跡の基本層序模式図 …… 18
図Ⅲ－1　住居跡分布図 …… 19
図Ⅲ－2　住居跡(1)・H－1 …… 20
図Ⅲ－3　住居跡(2)・H－1 …… 21
図Ⅲ－4　住居跡(3)・H－1 …… 23
図Ⅲ－5　住居跡(4)・H－1遺物 …… 24
図Ⅲ－6　住居跡(5)・H－1遺物 …… 25
図Ⅲ－7　住居跡(6)・H－1遺物 …… 26
図Ⅲ－8　住居跡(7)・H－2 …… 28
図Ⅲ－9　住居跡(8)・H－2 …… 29
図Ⅲ－10　住居跡(9)・H－2遺物 …… 30
図Ⅲ－11　住居跡(10)・H－3 …… 32
図Ⅲ－12　住居跡(11)・H－3 …… 33
図Ⅲ－13　住居跡(12)・H－3 …… 34
図Ⅲ－14　住居跡(13)・H－3 …… 35
図Ⅲ－15　住居跡(14)・H－3遺物 …… 36
図Ⅲ－16　住居跡(15)・H－3遺物 …… 37
図Ⅲ－17　住居跡(16)・H－3遺物 …… 38
図Ⅲ－18　住居跡(17)・H－3遺物 …… 39
図Ⅲ－19　住居跡(18)・H－3遺物 …… 41
図Ⅲ－20　住居跡(19)・H－3遺物 …… 43
図Ⅲ－21　住居跡(20)・H－3遺物 …… 44
図Ⅲ－22　住居跡(21)・H－3遺物 …… 45
図Ⅲ－23　住居跡(22)・H－3遺物 …… 46
図Ⅲ－24　住居跡(23)・H－3遺物 …… 47
図Ⅲ－25　住居跡(24)・H－3遺物 …… 48
図Ⅲ－26　住居跡(25)・H－3遺物 …… 49
図Ⅲ－27　住居跡(26)・H－3遺物 …… 50
図Ⅲ－28　住居跡(27)・H－3遺物 …… 51
図Ⅲ－29　住居跡(28)・H－3遺物 …… 52
図Ⅲ－30　住居跡(29)・H－3遺物 …… 53
図Ⅲ－31　住居跡(30)・H－4，7 …… 54
図Ⅲ－32　住居跡(31)・H－4 …… 55
図Ⅲ－33　住居跡(32)・H－4遺物 …… 56
図Ⅲ－34　住居跡(33)・H－4遺物 …… 57
図Ⅲ－35　住居跡(34)・H－4遺物 …… 58
図Ⅲ－36　住居跡(35)・H－4遺物 …… 59
図Ⅲ－37　住居跡(36)・H－5 …… 60
図Ⅲ－38　住居跡(37)・H－5 …… 61
図Ⅲ－39　住居跡(38)・H－5遺物 …… 63
図Ⅲ－40　住居跡(39)・H－5遺物 …… 64
図Ⅲ－41　住居跡(40)・H－6 …… 65
図Ⅲ－42　住居跡(41)・H－6 …… 66
図Ⅲ－43　住居跡(42)・H－6遺物 …… 67
図Ⅲ－44　住居跡(43)・H－6遺物 …… 68
図Ⅲ－45　住居跡(44)・H－7遺物 …… 70
図Ⅲ－46　住居跡(45)・H－8，9 …… 72
図Ⅲ－47　住居跡(46)・H－8，9 …… 73
図Ⅲ－48　住居跡(47)・H－8遺物 …… 74
図Ⅲ－49　住居跡(48)・H－9遺物 …… 75
図Ⅲ－50　住居跡(49)・H－10 …… 76
図Ⅲ－51　住居跡(50)・H－10遺物 …… 77
図Ⅲ－52　住居跡(51)・H－11 …… 78
図Ⅲ－53　住居跡(52)・H－11遺物 …… 79
図Ⅲ－54　住居跡(53)・H－12 …… 80
図Ⅲ－55　住居跡(54)・H－12 …… 81
図Ⅲ－56　住居跡(55)・H－12遺物 …… 82
図Ⅲ－57　住居跡(56)・H－13，－13遺物 …… 83
図Ⅲ－58　フラスコ状ピット分布図 …… 84
図Ⅲ－59　フラスコ状ピット(1)・P－2 …… 85
図Ⅲ－60　フラスコ状ピット(2)・P－2遺物 …… 86
図Ⅲ－61　フラスコ状ピット(3)・P－2遺物 …… 87
図Ⅲ－62　フラスコ状ピット(4)・P－23，26 …… 88
図Ⅲ－63　フラスコ状ピット(5)・P－29 …… 89
図Ⅲ－64　フラスコ状ピット(6)・P－23，26，29遺物　90
図Ⅲ－65　フラスコ状ピット(7)・P－34 …… 91
図Ⅲ－66　フラスコ状ピット(8)・P－34 …… 92
図Ⅲ－67　フラスコ状ピット(9)・P－34遺物 …… 93
図Ⅲ－68　フラスコ状ピット(10)・P－34遺物 …… 94
図Ⅲ－69　フラスコ状ピット(11)・P－34遺物 …… 95
図Ⅲ－70　フラスコ状ピット(12)・P－56 …… 96
図Ⅲ－71　フラスコ状ピット(13)・P－56遺物 …… 97
図Ⅲ－72　フラスコ状ピット(14)・P－56遺物 …… 98
図Ⅲ－73　フラスコ状ピット(15)・P－56遺物 …… 99
図Ⅲ－74　フラスコ状ピット(16)・P－56遺物 …… 100
図Ⅲ－75　フラスコ状ピット(17)・P－56遺物 …… 101
図Ⅲ－76　円形，楕円形ピット分布図 …… 103
図Ⅲ－77　円形，楕円形ピット(1)・P－1，3，6，8 …… 104
図Ⅲ－78　円形，楕円形ピット(2)・P－9，12，14，15 …… 105
図Ⅲ－79　円形，楕円形ピット(3)・P－16，17，18，19 …… 106
図Ⅲ－80　円形，楕円形ピット(4)・P－21，22，25，27

…… 107
図Ⅲ－81　円形，楕円形ピット(5)・P－30，31，32，33，35 …… 108
図Ⅲ－82　円形，楕円形ピット(6)・P－37，38，41，42，46 …… 109
図Ⅲ－83　円形，楕円形ピット(7)・P－47，48，49，53 …… 110
図Ⅲ－84　円形，楕円形ピット(8)・P－55，57，58，61，62 …… 111
図Ⅲ－85　円形，楕円形ピット(9)・P－65，69，71，73，75 …… 112
図Ⅲ－86　円形，楕円形ピット(10)・P－76，77，78，79，80 …… 113
図Ⅲ－87　円形，楕円形ピット(11)・P－83，85，89　114
図Ⅲ－88　円形，楕円形ピット遺物 …… 115
図Ⅲ－89　円形，楕円形ピット遺物 …… 116
図Ⅲ－90　円形，楕円形ピット遺物 …… 117
図Ⅲ－91　円形，楕円形ピット遺物 …… 118
図Ⅲ－92　円形，楕円形ピット遺物 …… 119
図Ⅲ－93　Tピット分布図 …… 120
図Ⅲ－94　Tピット(1)・P－4，7，10 …… 121
図Ⅲ－95　Tピット(2)・P－11，13，20 …… 122
図Ⅲ－96　Tピット(3)・P－24，28，36 …… 123
図Ⅲ－97　Tピット(4)・P－39，40，43 …… 124
図Ⅲ－98　Tピット(5)・P－44，45，50 …… 125
図Ⅲ－99　Tピット(6)・P－51，52，54 …… 126
図Ⅲ－100　Tピット(7)・P－59，60，63 …… 127
図Ⅲ－101　Tピット(8)・P－64，66，67 …… 128
図Ⅲ－102　Tピット(9)・P－68，70，72 …… 129
図Ⅲ－103　Tピット(10)・P－74，81，82 …… 130
図Ⅲ－104　Tピット(11)・P－84，86，87 …… 131
図Ⅲ－105　Tピット(12)・P－88，90，91 …… 132
図Ⅲ－106　Tピット(13)・P－92，93，94 …… 133
図Ⅲ－107　Tピット(14)・P－95，96，97 …… 134
図Ⅲ－108　Tピット(15)・P－98，99，100 …… 135
図Ⅲ－109　Tピット(16)・P－101，102，103 …… 136
図Ⅲ－110　Tピット(17)・P－104，105，106 …… 137
図Ⅲ－111　Tピット(18)・P－107，108，109 …… 138
図Ⅲ－112　Tピット(19)・P－110，111，112 …… 139
図Ⅲ－113　Tピット(20)・P－113，114，115 …… 140
図Ⅲ－114　Tピット(21)・P－116 …… 141
図Ⅲ－115　Tピット遺物 …… 142
図Ⅲ－116　Tピット遺物 …… 143
図Ⅲ－117　焼土(1)・F－1，2，3，5，F－1，3遺物　144
図Ⅲ－118　焼土(2)・F－4 …… 145
図Ⅲ－119　焼土(3)・F4遺物 …… 146
図Ⅲ－120　包含層の土器(1) …… 148
図Ⅲ－121　包含層の土器(2) …… 149
図Ⅲ－122　包含層の土器(3) …… 150
図Ⅲ－123　包含層の土器(4) …… 151
図Ⅲ－124　包含層の土器(5) …… 152
図Ⅲ－125　包含層の土器(6) …… 153
図Ⅲ－126　包含層の土器(7) …… 154
図Ⅲ－127　包含層の土器(8) …… 155
図Ⅲ－128　包含層の土器(9) …… 156
図Ⅲ－129　包含層の石器(1) …… 157
図Ⅲ－130　包含層の石器(2) …… 158
図Ⅲ－131　包含層の石器(3) …… 159
図Ⅲ－132　包含層の石器(4) …… 160
図Ⅲ－133　包含層の石器(5) …… 161
図Ⅲ－134　包含層の石器(6) …… 162
図Ⅲ－135　包含層の石器(7) …… 163
図Ⅲ－136　包含層の石器(8) …… 164
図Ⅲ－137　包含層の石器(9) …… 165
図Ⅲ－138　包含層の石器(10) …… 166
図Ⅲ－139　包含層の石器(11) …… 167
図Ⅲ－140　包含層の石器(12) …… 168
図Ⅲ－141　土製品，石製品(1) …… 169
図Ⅲ－142　土製品，石製品(2) …… 170
図Ⅲ－143　金属製品 …… 171
図Ⅲ－144　J－29～37第Ⅳ層以下の土層断面 …… 173
図Ⅲ－145　焼土・炭化木片ブロック位置図 …… 174
図Ⅲ－146　発掘区別旧石器出土点数 …… 175
図Ⅲ－147　発掘区別・石質別旧石器出土点数 …… 176
図Ⅲ－148　旧石器の分布と石器ブロック …… 177
図Ⅲ－149　旧石器(1)・細石刃 …… 181
図Ⅲ－150　旧石器(2)・黒曜石剥片 …… 182
図Ⅲ－151　旧石器(3)・細石刃核接合 …… 183
図Ⅲ－152　旧石器(4)・細石刃核・削片接合 …… 184
図Ⅲ－153　旧石器(5)・削片接合 …… 185
図Ⅲ－154　旧石器(6)・両面調整石器 …… 186
図Ⅲ－155　旧石器(7)・両面調整石器ほか …… 187
図Ⅲ－156　旧石器(8)・両面調整石器接合ほか …… 188
図Ⅲ－157　旧石器(9)・両面調整石器接合ほか …… 189
図Ⅲ－158　旧石器(10)・彫器・錐形石器ほか …… 191
図Ⅲ－159　旧石器(11)・掻器・削器 …… 192
図Ⅲ－160　旧石器(12)・削器・縦長剥片 …… 193
図Ⅲ－161　旧石器(13)・尖頭器接合ほか …… 194
図Ⅲ－162　旧石器(14)・尖頭器接合 …… 195
図Ⅲ－163　旧石器(15)・尖頭器接合 …… 196
図Ⅲ－164　旧石器(16)・尖頭器接合 …… 197
図Ⅲ－165　旧石器(17)・尖頭器接合 …… 198
図Ⅲ－166　旧石器(18)・尖頭器接合 …… 199
図Ⅲ－167　旧石器(19)・尖頭器接合 …… 201
図Ⅲ－168　旧石器(20)・尖頭器製作剥片接合 …… 203
図Ⅲ－169　旧石器(21)・尖頭器製作剥片接合 …… 204

図Ⅲ－170 旧石器(22)・尖頭器製作剝片接合 …… 205
図Ⅲ－171 旧石器(23)・尖頭器製作剝片接合 …… 208
図Ⅲ－172 旧石器(24)・縦長剝片・石核接合 …… 209
図Ⅲ－173 旧石器(25)・縦長剝片・石核接合 …… 210
図Ⅲ－174 旧石器(26)・縦長剝片・石核接合 …… 211
図Ⅲ－175 旧石器(27)・礫石器 …… 212
図Ⅲ－176 旧石器(28)・礫石器 …… 213
図Ⅲ－177 Sb－1石器分布図 …… 215
図Ⅲ－178 Sb－2石器分布図 …… 216
図Ⅲ－179 Sb－2石器接合図 …… 217
図Ⅲ－180 Sb－3石器分布図 …… 218
図Ⅲ－181 Sb－3石器接合図 …… 219
図Ⅲ－182 Sb－4石器分布図 …… 221
図Ⅲ－183 Sb－4石器接合図(1) …… 222
図Ⅲ－184 Sb－4石器接合図(2) …… 223
図Ⅲ－185 Sb－5石器分布図 …… 224
図Ⅲ－186 Sb－5石器接合図 …… 225
図Ⅲ－187 Sb－6石器分布・接合図 …… 227
図Ⅲ－188 Sb－7石器分布図 …… 228
図Ⅲ－189 Sb－7石器接合図 …… 229
図Ⅲ－190 母岩別石器分布・接合図(1)(No.1，25～29) …… 232
図Ⅲ－191 母岩別石器分布範囲図 …… 233
図Ⅲ－192 母岩別石器分布・接合図(2)(No.3～6，14，21) …… 234
図Ⅲ－193 母岩別石器分布・接合図(3)(No.2，11，16，19) …… 235
図Ⅲ－194 母岩別石器分布・接合図(4)(No.8～10，24) 236
図Ⅲ－195 母岩別石器分布・接合図(5)(No.7，12，15，18，20) …… 237
図Ⅲ－196 母岩別石器分布・接合図(6)(No.22) …… 238
図Ⅳ－1 H－6住居跡から産出した花粉・胞子 … 246
図Ⅳ－2 火山灰層序 …… 247
図Ⅳ－3 ロームの重鉱物組成と粒度組成 …… 248
図Ⅳ－4 完新世火山灰の鉱物組成 …… 249
図Ⅳ－5 ロームの粒度累積曲線(1) …… 250
図Ⅳ－6 ロームの粒度累積曲線(2) …… 251
図Ⅳ－7 ロームの角閃石一斜方輝石一単斜輝石量比 …… 252
図Ⅳ－8 火山灰の層序と年代 …… 253
図Ⅳ－9 H－5平面図，炭化材 …… 258
図Ⅳ－10 炭化した木質遺物の組織顕微鏡写真 …… 259
図Ⅳ－11 本遺跡出土黒曜石片6個の分析結果 …… 263
図Ⅴ－1 石川1・桔梗2遺跡時期別住居跡集成図 267
図Ⅴ－2 発掘区，時期別土器出土点数 …… 271
図Ⅴ－3 石川1遺跡土器集成図(1) …… 272
図Ⅴ－4 石川1遺跡土器集成図(2) …… 273
図Ⅴ－5 石川1遺跡土器集成図(3) …… 274
図Ⅴ－6 桔梗2遺跡KH－14，19土器集成図 …… 275
図Ⅴ－7 発掘区，石器等種類別出土点数 …… 276
図Ⅴ－8 すり石，石錘発掘区別出土点数 …… 277
図Ⅴ－9 側縁有溝土製品・石製品，土偶 …… 279
図Ⅴ－10 頁岩とめのう質頁岩の分布 …… 281
図Ⅴ－11 黒曜石とめのうの分布 …… 282
図Ⅴ－12 細石刃核，削片，両面調整石器接合資料 285
図Ⅴ－13 尖頭器 …… 286
図Ⅴ－14 尖頭器製作剝離工程模式図 …… 287
図Ⅴ－15 器種別分布図(1) …… 289
図Ⅴ－16 器種別分布図(2) …… 290
図Ⅴ－17 器種別分布図(3) …… 291
図Ⅴ－18 石器ブロック別の石器組成 …… 293
図Ⅴ－19 石器ブロック間の接合，母岩共有関係 … 295

表 目 次

表Ⅰ－1 遺構数一覧 …… 7
表Ⅰ－2 出土遺物一覧 …… 8
表Ⅱ－1 周辺の遺跡一覧 …… 13
表Ⅲ－1 旧石器器種別，ブロック別総数 …… 179
表Ⅲ－2 Sb－1の石器組成 …… 214
表Ⅲ－3 Sb－2の石器組成 …… 220
表Ⅲ－4 Sb－3の石器組成 …… 220
表Ⅲ－5 Sb－4の石器組成 …… 226
表Ⅲ－6 Sb－5の石器組成 …… 226
表Ⅲ－7 Sb－6の石器組成 …… 230
表Ⅲ－8 Sb－7の石器組成 …… 230
表Ⅳ－1 石川1遺跡H－6住居跡から産出した花粉・胞子 …… 242
表Ⅳ－2 L－36区柱状試料から産出した花粉・胞子 …… 243
表Ⅳ－3 石川1遺跡（旧石器）出土の炭化木片樹種同定結果 …… 256
表Ⅳ－4 石川1遺跡H－5出土の炭化木片樹種同定結果 …… 257
表Ⅳ－5 黒曜石片のフィッション・トラック年代測定結果 …… 262
表Ⅳ－6 黒曜石片の水和層年代測定結果 …… 262
表Ⅴ－1 石器，石材別の点数と重量 …… 283

図版目次

図版１　遺跡の遠景・近景
　１　遺跡の遠景（稜北高校屋上から・北から）
　２　遺跡の近景（南から）
　３　遺跡の遠景（石川上流から・北東から）
　４　遺跡の遠景（石川対岸から・東から）
図版２　昭和60年度の調査
　１　表土調査（北から）
　２　遺構調査（北から）
図版３　昭和61年度の調査
　１　遺構確認（北西から）
　２　25％調査（北から）
図版４　昭和62年度の調査
　１　包含層・遺構調査（南西から）
　２　旧石器調査（北から）
図版５　住居跡・Ｈ－１
　１　Ｈ－１調査（西から）
　２　Ｈ－１床面（西から）
　３　床面の土器（北西から）
　４　床面の土器（北西から）
　５　床面の土器（北西から）
図版６　住居跡・Ｈ－２
　１　Ｈ－２全景（東から）
　２　覆土の土器（南西から）
　３　埋甕断面（北西から）
　４　埋甕（北西から）
　５　埋甕（北西から）
図版７　住居跡・Ｈ－３
　１　Ｈ－３調査（西から）
　２　覆土の遺物（東から）
　３　覆土の遺物（西から）
図版８　住居跡・Ｈ－３
　１　覆土・床面の遺物（西から）
　２　床面の土器（西から）
　３　床面の土器（北から）
　４　柱穴内の土器（南から）
　５　柱穴内の土器（東から）
図版９　住居跡・Ｈ－３
　１　Ｈ－３全景（北西から）
　２　Ｈ－３全景（人のすわっている前が焼土・北西から）
図版10　住居跡・Ｈ－４
　１　覆土中の炉跡（Ｆ－４）（北西から）
　２　Ｈ－４全景（北西から）
図版11　住居跡・Ｈ－４
　１　土層断面（南から）
　２　柱穴内の遺物（北西から）
　３　床面の遺物（北西から）
　４　床面・柱穴内の遺物（東から）
　５　埋甕断面（北西から）
図版12　住居跡・Ｈ－５
　１　Ｈ－５全景（北西から）
　２　床面の遺物（北西から）
図版13　住居跡・Ｈ－５
　１　炭化材（北東から）
　２　柱穴断面（ＨＰ－４）（北西から）
　３　柱穴断面（ＨＰ－３）（北西から）
図版14　住居跡・Ｈ－６
　１　Ｈ－６確認（北から）
　２　Ｈ－６全景（北から）
図版15　住居跡・Ｈ－６
　１　床面の遺物（北西から）
　２　床面の土器（東から）
　３　土壌のサンプリング（南東から）
図版16　住居跡・Ｈ－７・８・９
　１　Ｈ－７全景（北東から）
　２　Ｈ－８・９全景（北西から）
図版17　住居跡・Ｈ－10・11
　１　Ｈ－10全景（北西から）
　２　Ｈ－11全景（南西から）
図版18　住居跡・Ｈ－12
　１　床面の遺物（南東から）
　２　土層断面（東から）
　３　床面の調査（北東から）
　４　Ｈ－12全景（南から）
図版19　住居跡・Ｈ－13
　１　覆土の遺物（西から）
　２　覆土の遺物（北から）
　３　Ｈ－13全景（西から）
図版20　フラスコ状ピット・Ｐ－２
　１　上面確認（北から）
　２　土層断面（南から）
　３　覆土の遺物（南から）
　４　Ｐ－２全景（北から）
図版21　フラスコ状ピット・Ｐ－23
　１　土層断面（北から）
　２　Ｐ－23全景（南西から）
図版22　フラスコ状ピット・Ｐ－34
　１　土層断面（西から）
　２　覆土の遺物（南西から）
　３　Ｐ－34全景（西から）
　４　覆土の土器（西から）
　５　トレンチ調査（北東から）
図版23　フラスコ状ピット・Ｐ－56

1　P－56全景（北西から）
2　覆土の遺物（北西から）
3　覆土の遺物（南西から）

図版24　円形・楕円形のピット
1　P－1全景（西から）
2　P－3遺物（東から）
3　P－3全景（北東から）
4　P－8全景（北西から）
5　P－9土層断面（北西から）
6　P－14全景（北東から）
7　P－16全景（北西から）

図版25　円形・楕円形のピット
1　P－17全景（東から）
2　P－18全景（北東から）
3　P－19全景（南東から）
4　P－21全景（北西から）
5　P－22全景（西から）
6　P－25全景（北西から）
7　P－30全景（北西から）
8　P－31全景（南西から）
9　P－27遺物（北東から）
10　P－32全景（北東から）

図版26　円形・楕円形のピット
1　P－33全景（北東から）
2　P－38全景（北西から）
3　P－42全景（北西から）
4　P－49全景（北東から）
5　P－53埋甕（北西から）
6　P－55全景（北西から）
7　P－48遺物（南から）
8　P－57遺物（南東から）
9　P－46・47全景（北西から）
10　P－62全景（北から）

図版27　円形・楕円形のピット
1　P－75全景（北西から）
2　P－79全景（北西から）
3　P－71遺物（北西から）
4　P－89遺物（西から）
5　P－61全景（北東から）
6　P－69全景（北東から）
7　P－73全景（北東から）
8　P－76遺物（南東から）
9　P－83全景（南から）
10　P－85全景（南から）

図版28　Tピットの列
1　Tピットの列（北から）
2　Tピットの列（南西から）
3　Tピットの列（北西から）

図版29　Tピットの列
1　調査区北側Tピット列（北から）
2　調査区南側Tピット列（北から）

図版30　Tピット
1　P－4土層断面（南東から）
2　P－13土層断面（南から）
3　P－103土層断面（南東から）
4　P－109土層断面（南から）
5　P－110土層断面（南東から）
6　P－112土層断面（東から）

図版31　Tピット
1　P－36全景（南東から）
2　P－40全景（東から）
3　P－50全景（南東から）
4　P－64全景（東から）
5　P－67全景（東から）
6　P－72全景（北東から）

図版32　Tピット
1　P－88全景（東から）
2　P－93全景（南から）
3　P－97全景（南東から）
4　P－100全景（東から）
5　P－105全景（南から）
6　P－113・114全景（東から）

図版33　焼土
1　F－3上部の土器（東から）
2　F－3全景（東から）
3　F－4の位置・H－4覆土（北西から）
4　F－4全景（北西から）

図版34　住居跡の土器
1　H－1の土器（図Ⅲ－5－2）
2　H－1の土器（図Ⅲ－5－3）
3　H－1の土器（図Ⅲ－5－4）
4　H－2の土器・埋甕（図Ⅲ－10－1）
5　H－2の土器・埋甕（図Ⅲ－10－2）
6　H－2の土器（図Ⅲ－10－3）

図版35　住居跡の土器
1　H－3の土器（図Ⅲ－15－1）
2　H－3の土器（図Ⅲ－15－2）
3　H－3の土器（図Ⅲ－16－3）
4　H－3の土器（図Ⅲ－16－4）
5　H－3の土器（図Ⅲ－16－5）
6　H－3の土器（図Ⅲ－17－6）

図版36　住居跡の土器
1　H－3の土器（図Ⅲ－17－7）
2　H－3の土器（図Ⅲ－17－8）
3　H－3の土器（図Ⅲ－17－9）
4　H－3の土器（図Ⅲ－17－10）

5　H－3の土器（図Ⅲ－18－13）
6　H－3の土器（図Ⅲ－18－14）
図版37　住居跡の土器
1　H－3の土器（図Ⅲ－18－15）
2　H－3の土器（図Ⅲ－18－16）
3　H－3の土器（図Ⅲ－18－17）
4　H－3の土器（図Ⅲ－19－18）
5　H－3の土器（図Ⅲ－20－19）
6　H－3の土器（図Ⅲ－20－20）
図版38　住居跡の土器
1　H－3の土器（図Ⅲ－21－21）
2　H－3の土器（図Ⅲ－21－24）
3　H－3の土器（図Ⅲ－21－25）
4　H－3の土器（図Ⅲ－21－26）
5　H－3の土器（図Ⅲ－21－27）
6　H－3の土器（図Ⅲ－21－28）
図版39　住居跡の土器
1　H－3の土器（図Ⅲ－22－31）
2　H－3の土器（図Ⅲ－22－32）
3　H－3の土器（図Ⅲ－23－33）
4　H－3の土器（図Ⅲ－23－34）
5　H－3の土器（図Ⅲ－23－35）
6　H－3の土器（図Ⅲ－24－37）
図版40　住居跡の土器
1　H－3の土器（図Ⅲ－24－38）
2　H－3の土器（図Ⅲ－24－40）
3　H－3の土器（図Ⅲ－24－42・43）
4　H－4の土器（図Ⅲ－33－1）
5　H－4の土器（図Ⅲ－33－4）
図版41　住居跡の土器
1　H－4の埋甕（図Ⅲ－33－3）
2　H－5の土器（図Ⅲ－39－1）
3　H－6の土器（図Ⅲ－43－1）
4　H－6の土器（図Ⅲ－43－2）
5　H－7の土器（図Ⅲ－45－1）
6　H－13の土器（図Ⅲ－57－1）
図版42　フラスコ状ピットの土器
1　P－2の土器（図Ⅲ－60－1）
2　P－2の土器（図Ⅲ－60－2）
3　P－2の土器（図Ⅲ－60－3）
4　P－2の土器（図Ⅲ－61－4）
5　P－2の土器（図Ⅲ－61－5）
6　P－2の土器（図Ⅲ－61－6）
図版43　フラスコ状ピットの土器
1　P－34の土器（図Ⅲ－67－1）
2　P－34の土器（図Ⅲ－67－3）
3　P－34の土器（図Ⅲ－68－4）
4　P－56の土器（図Ⅲ－72－1）
5　P－56の土器（図Ⅲ－72－2）
6　P－56の土器（図Ⅲ－73－3）
図版44　フラスコ状ピットほかの土器
1　P－56の土器（図Ⅲ－73－4）
2　P－56の土器（図Ⅲ－74－6）
3　P－56の土器（図Ⅲ－74－7）
4　P－56の土器（図Ⅲ－74－8）
5　P－18の土器（図Ⅲ－79－12）
6　P－27の土器（図Ⅲ－80－25）
図版45　ピット・焼土の土器
1　P－48の土器（図Ⅲ－83－52）
2　P－57の土器（図Ⅲ－84－65）
3　P－76の土器（図Ⅲ－86－81）
4　P－77の土器（図Ⅲ－86－82）
5　F－3の土器（図Ⅲ－117－9）
6　F－4の土器（図Ⅲ－119－10）
図版46　包含層の土器
1　包含層の土器（図Ⅲ－120－1）
2　包含層の土器（図Ⅲ－120－2）
3　包含層の土器（図Ⅲ－120－3）
4　包含層の土器（図Ⅲ－120－5）
5　包含層の土器（図Ⅲ－120－7）
6　包含層の土器（図Ⅲ－120－9）
図版47　土器の展開写真
1　H－3の土器（図Ⅲ－15－1）
2　H－3の土器（図Ⅲ－15－2）
3　H－3の土器（図Ⅲ－15－3）
図版48　土器の展開写真
1　H－3の土器（図Ⅲ－15－4）
2　H－3の土器（図Ⅲ－18－14）
3　H－3の土器（図Ⅲ－19－18）
図版49　土器の展開写真
1　H－3の土器（図Ⅲ－20－19）
2　H－3の土器（図Ⅲ－23－35）
3　P－2の土器（図Ⅲ－60－1）
図版50　土器の展開写真
1　P－2の土器（図Ⅲ－60－2）
2　P－2の土器（図Ⅲ－60－3）
3　P－34の土器（図Ⅲ－67－3）
図版51　土器の展開写真
1　P－34の土器（図Ⅲ－68－4）
2　P－56の土器（図Ⅲ－72－1）
3　P－56の土器（図Ⅲ－72－2）
図版52　包含層の土器片(1)
1　縄文時代早期の土器(1)（1/3）
2　縄文時代早期の土器(2)（1/3）
図版53　包含層の土器片(2)
1　縄文時代早期の土器(3)（1/3）

2　縄文時代中期の土器(1)（1/3）
図版54　包含層の土器片(3)
1　縄文時代中期の土器(2)（1/3）
2　縄文時代中期の土器(3)（1/3）
図版55　包含層の土器片(4)
1　縄文時代中期の土器(4)（1/3）
2　縄文時代中・晩期，続縄文時代の土器（1/3）
図版56　包含層の石器(1)
1　石鏃，ドリル，やり先・ナイフ（1/2）
2　つまみ付ナイフ，スクレイパー（1/2）
図版57　包含層の石器(2)
1　スクレイパー（1/2）
2　スクレイパーほか（1/2）
図版58　包含層の石器(3)
1　石斧（1/3）
2　すり石(1)（1/3）
図版59　包含層の石器(4)
1　すり石(2)（1/3）
2　すり石(3)（1/3）
図版60　包含層の石器(5)
1　すり石，たたき石，砥石（1/3）
2　石錘(1)（1/3）
図版61　包含層の石器(6)
1　石錘(2)（1/3）
2　台石・石皿
図版62　土製品・石製品
1　各種土製品，石製品（1/2）
2　土偶ほか（1/2）
図版63　旧石器調査(1)
1　旧石器調査（昭和61年度）(南から）
2　旧石器調査（昭和62年度）(東から）
3　旧石器調査終了（北から）
図版64　旧石器調査(2)
1　土層断面（分析土壌サンプル地点）(南西から）
2　Ⅳ層以下の土層断面(1)（北から）
3　Ⅳ層以下の土層断面(2)（東から）
4　Ⅳ層以下の土層断面(3)（東から）
図版65　旧石器調査(3)
1　Sb－4の遺物（北西から）
2　Sb－4の遺物（北東から）
3　Sb－4の遺物（西から）
4　Sb－2の遺物（北西から）
5　Sb－5の遺物（西から）
6　Sb－6の遺物（南西から）
図版66　旧石器調査(4)
1　Sb－7の遺物（南西から）
2　Sb－5の遺物（北東から）
3　Sb－7の遺物（南から）
4　Sb－5の遺物（北から）
5　Sb－2の遺物（北から）
図版67　旧石器(1)
1　細石刃(1)・黒曜石（1/1）
2　細石刃(2)・頁岩（1/1）
3　黒曜石剥片（1/2）
図版68　旧石器(2)
1　細石刃核，削片接合資料（1/2）
2　細石刃核，削片接合破片（1/2）
図版69　旧石器(3)
1　両面調整石器（1/2）
2　両面調整石器，剥片同一母岩資料（1/2）
図版70　旧石器(4)
1　彫器（1/2）
2　掻器，削器ほか（1/2）
図版71　旧石器(5)
1　めのう錐形石器，削片（1/1）
2　ストーン・リタッチャー，砥石，台石（1/2）
図版72　旧石器(6)
1　尖頭器接合資料(1)（1/2）
図版73　旧石器(7)
1　尖頭器接合資料(2)（1/2）
図版74　旧石器(8)
1　尖頭器接合資料(3)（1/2）
図版75　旧石器(9)
1　尖頭器製作剥片接合資料(1)（1/2）
図版76　旧石器(10)
1　尖頭器製作剥片接合資料(2)（1/2）
図版77　旧石器(11)
1　尖頭器製作剥片接合資料(3)（1/2）
図版78　旧石器(12)
1　尖頭器製作剥片接合資料(4)（1/2）
2　剥片接合資料（1/2）
図版79　旧石器(13)
1　剥片，石核接合資料（1/2）
図版80　旧石器(14)
1　石核接合資料，原石（1/2）

I　調査の概要

1　調査要項

事業名　一般国道5号函館新道道路改良用地内埋蔵文化財発掘調査
委託者　北海道開発局函館開発建設部
受託者　財団法人北海道埋蔵文化財センター
遺跡名　石川1遺跡（北海道教育委員会登載番号：B－01－109）
所在地　函館市石川町172-2，172-8（昭和60年度調査区域），169-6，169-13，169-14，169-15，169-19，172-10，172-11，172-12，172-13，172-18（昭和61年度調査区域），169-13，169-14，169-15，172-10，172-11，172-12，172-19（昭和62年度調査区域）※地番はいずれも調査当時のもの
調査面積　10,460m²（昭和60年度700m²，昭和61年度3,432m²，昭和62年度6,328m²）
※昭和62年度の旧石器調査分1,072m²については，昭和61年度の調査分と重復し，最終的な調査面積は9,388m²となる。
調査期間　昭和60年9月1日～昭和61年3月31日（現地調査　9月17日～10月31日）
昭和61年8月19日～昭和62年3月31日（現地調査　9月1日～10月28日）
昭和62年4月13日～昭和63年3月31日（現地調査　5月9日～10月28日）

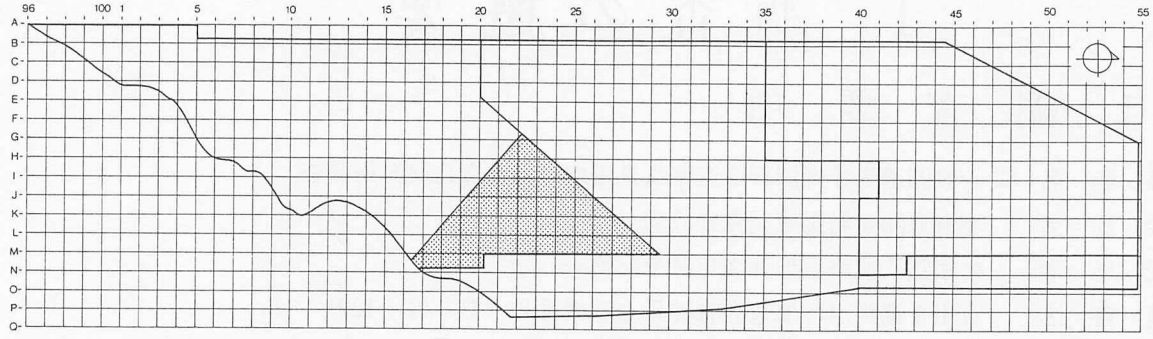
2　調査体制

財団法人北海道埋蔵文化財センター　理事長　植村　敏（昭和62年6月25日まで）
澤　宣彦（昭和62年6月26日から）
専務理事　山本慎一　　常務理事　藤本英夫（昭和63年2月3日まで）
業務部長　間宮道男　　調査部長　中村福彦
昭和60年度　調査部調査第一班長　畑　宏明
同文化財保護主事　長沼　孝（発掘担当者）
同嘱託　森　秀之　　同嘱託　森岡健治
昭和61年度　調査部調査第一班長　畑　宏明
同文化財保護主事　長沼　孝（発掘担当者）
同文化財保護主事　佐川俊一　　同文化財保護主事　野中一宏
同嘱託　森　秀之　　同嘱託　森岡健治　　同嘱託　中田裕香
昭和62年度　調査部第1課長　畑　宏明
同文化財保護主事　長沼　孝（発掘担当者）
同文化財保護主事　佐川俊一（発掘担当者）
同嘱託　前田正憲　　同嘱託　石川　朗

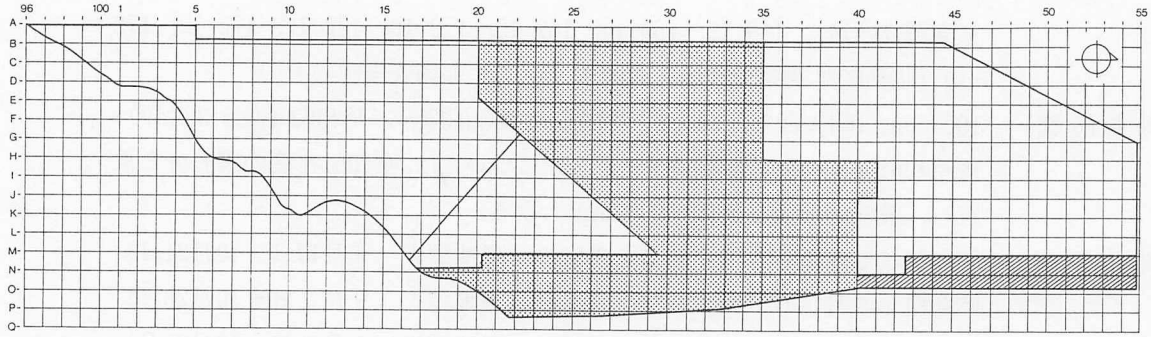
3　調査の経緯

一般国道5号線は，札幌と函館を結ぶ道内の主要幹線道路のひとつである。また，函館市を中心とし七飯，大野，上磯町を含めた函館圏の道路網の中でも重要な位置を占めている。函館市内の北部から七飯町の峠下にかけては，代替道路がなく，近年交通容量以上の

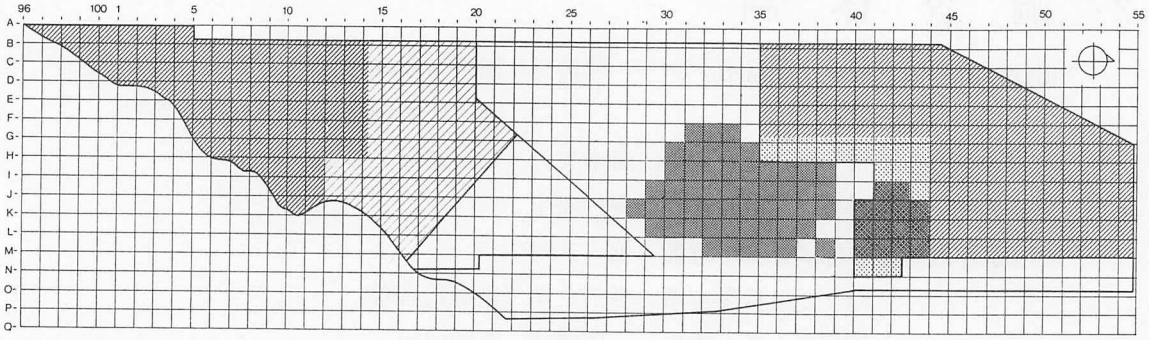
国道5号



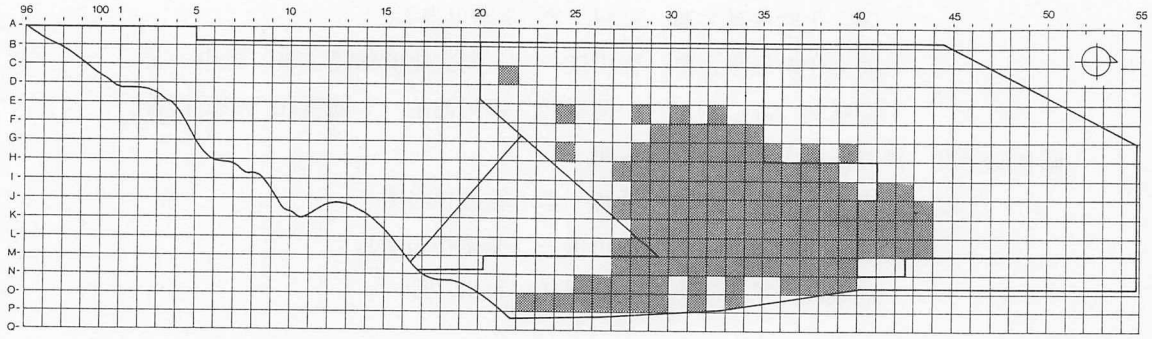
昭 和 60 年 度



昭 和 61 年 度



昭 和 62 年 度



昭和61・62年度旧石器

人力調査　重機調査

重機・人力調査　旧石器調査

図Ⅰ－1　年次別調査区域図

車が走行し，交通渋帯と環境の悪化が顕著になってきた。この国道５号線のうち亀田～大沼トンネル間約17kmの沿道には樹令100年を越すアカマツ約1,500本の並木がある。このアカマツは安政３年頃，佐渡から種子を仕入れ，育苗し，明治のはじめに天皇の行幸を記念して植樹したものと伝えられ，道南の名所のひとつとなっている。このような松並木も，環境の悪化で，損傷，立ち枯れが目立ちはじめ，昭和47年には北海道自然保護条例にもとづく環境緑地保護地区に指定され，保護されるようになった。

アカマツ並木　道南の名所　緑地保護

このような状況の中で，北海道開発局函館開発建設部（以下函館開建と記す）は，国道５号線の交通渋滞緩和と歴史的な松並木の保存などを目的に，函館新道建設を計画した。しかし，函館市内の工事区域は，サイベ沢遺跡などに近接しており，埋蔵文化財包蔵地の所在が予想されることから，昭和58年２月以降函館開建と北海道教育委員会（以下道教委と記す）の間でその取扱について協議が行われ，道教委は同年５月に所在確認調査，同年11月と昭和60年10月に範囲確認調査を行った。その結果，工事の緊急性から一部は範囲確認調査と並行しながら昭和60年度から発掘調査にとりかかった。当初，調査は二年次で終了する予定であったが，２年目に予想外の旧石器文化層が確認され，合わせて縄文文化層が拡大したことなどから，３年次にまたがる調査となった。各年度毎の調査面積はⅠ－１調査要項に記したとおりであり，調査区域と調査方法は図Ⅰ－１に示した。なお工事立会調査は道教委が行った。

函館新道　事前協議　調査の延長

4　調　査　概　要

(1)　発掘区の設定

発掘区は，アルファベットの大文字と数字の組合せで表示し，規格は４×４ｍとした。設定の基準は，工事用地の境界杭Ｒ－45，Ｒ－46で，それらを結んだ線を南北の基線（Ｍライン），その線に直交しＲ－45を通る線を東西の基線（20ライン）とし，図Ⅰ－２のように４ｍ間隔でラインを設定した。当初計画以上に調査範囲が拡大したため，南側の一部については，101，99……と変則的な数字の使い方をした。なお，Ｒ－45，Ｒ－46の測量成果は下記のとおりである。

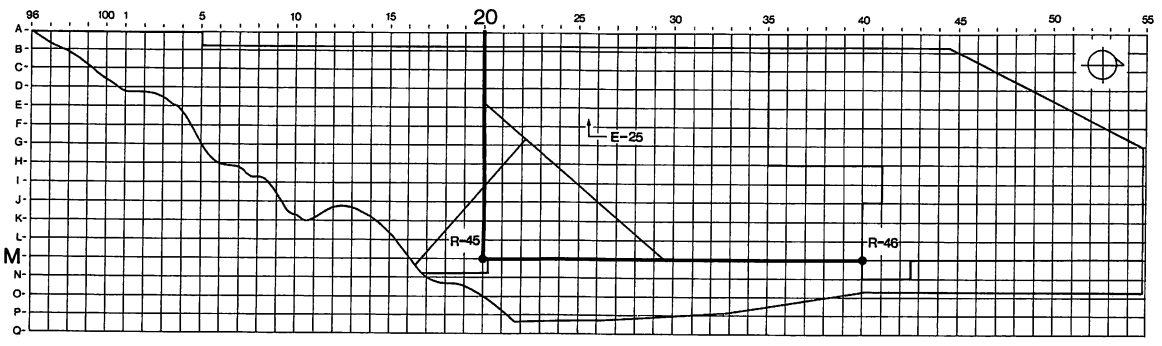
設定基準

Ｒ－45　　Ｘ＝－240,863.454m　　Ｙ＝40,752.259m

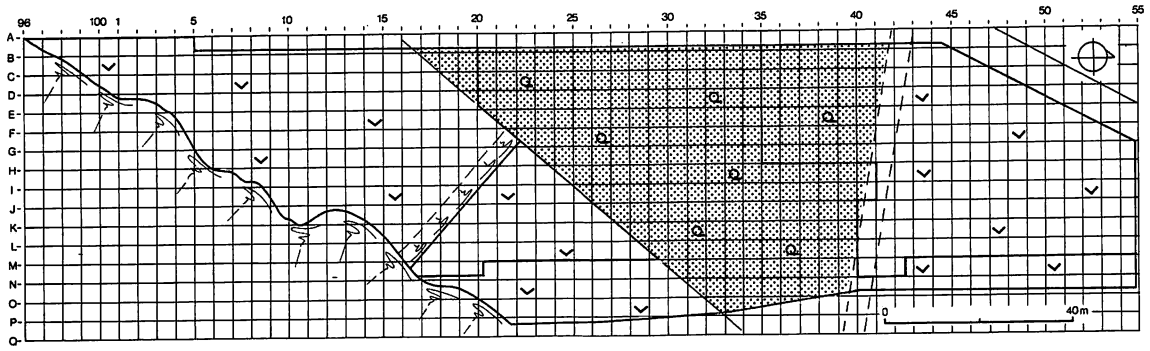
Ｒ－46　　Ｘ＝－240,783.456m　　Ｙ＝40,753.261m　　（平面直角座標　第Ⅺ系）

測量成果

発掘区の呼称は，４ｍ四方の区画の南西隅のラインの交点で表示した。例えばＥライン



図Ⅰ－２　発掘区設定図



図Ⅰ－3　遺跡現況図

と25ラインの交点の北東側がE－25区画ということになる。

発掘区の方向は，平面直角座標の南北方向とN－0°43′3.4″－Wである。したがって，遺構の作図にあたって方位は，南北方向のアルファベットラインと平行にした。

方　位

なお，各遺構の標高の測定にあたっては，遺跡の南西800mの比遅里神社境内に位置する一等水準点（24.76m）を利用した。

水準点

(2) 調査方法

昭和60年度の調査

700m²の調査区全域が畑地であったため，耕作土を除去した後に，遺構の平面形を確認し，調査した。

昭和61年度の調査

昭和60年度調査区に隣接する畑地部分は前年度同様，耕作土を除去した後，遺構の調査を行った。調査区域の中心である苗圃部分および北側の道路，畑地の一部については全体の25％を掘開した後，遺構や遺物の多く検出された区域を順次調査した。なお，Hラインより西側は表土層からの遺物の検出がほとんどなかったので，表土層を重機で除去した後に人手で調査した。

25％調査

旧石器調査

旧石器の調査は，まず遺物の分布範囲と下限層位やレベルの把握に主眼をおいて調査を進めるとともに，Mラインより東側については用水路工事の都合上部分的に調査を完了させた。また，掘り下げが必要な1,072m²については土を10cm程度被覆し，包含層の保護に努めた。

昭和62年度の調査

旧石器調査

前年度に引き続いて行った旧石器調査は，まず被覆土を全面除去することから開始した。また，前年度に道教委が行った工事立会で確認された住居跡（H－12）周辺からも旧石器が出土したので，旧石器調査の範囲が拡大した。

遺物取り上げ

第Ⅰ～Ⅲ層の遺物については，基本的に4×4 mの発掘区単位で取り上げた。しかし，第Ⅲ層からも旧石器が一部出土し，それらについては第Ⅳ層の遺物と同様の扱いをした。

住居跡や土壙内の遺物については，基本的に出土位置，レベルなどを記録したが，Tピットの覆土中から出土した遺物など，明らかに流れ込みとみられるものについては，遺構単位で一括して取り上げた。住居跡については，大きく覆土と床面に分け，さらに各層位に細分したが，一部層の認識や床面遺物の認定などで異なる点もある。なお，可能な限り

出土状況を示したので参照願いたい。

第Ⅲ，Ⅳ層から出土した旧石器については，基本的にすべて4×4 mの発掘区内での座標値（南からと西からの距離，レベル）を記録し，1点ごとに発掘区単位で遺物番号を付け取り上げた。しかし，微小な砕片などについては発掘区単位で取り上げ，さらに剥片，砕片の集中部分については土壌ごと取り上げて水洗処理を行った。　土壌採取

(3) 土壌サンプルとフローテーション，水洗処理

土壌サンプルは大きく二つの目的をもって採取した。一つはフローテーション，水洗処理をして土壌中に含まれている微細遺物を採取するもので，土のう袋またはポリ袋に収納した。もう一つは各種の分析を目的としたもので，地点，層位などを細かに記録し，ポリ袋に収納した。　目　的

フローテーション，水洗処理を行った土壌は乾燥状態で537.44kg，採取した炭化物，砕片，焼骨片，砂礫の総重量は2,343.1g（炭化物512.4g，砕片84.1g，焼骨片10.7g，砂礫1,735.9g）である。なお，砕片の点数は2,863点で，その他石器4点，土器の小片188点などもある。

フローテーション，水洗処理には基本的に土壌用分析ふるい（JIS規格メッシュNo.60（0.25m/m），32（0.5m/m），16（1.0m/m））を使用したが，水洗処理については，料理用の大型ふるい（径30cm，網目1.0mm）を併用した。　ふるい

フローテーションは，住居跡すべての焼土，フラスコ状ピットP－2，34，56の覆土の一部，H－6床面土壌，第Ⅳ層Fb－1，Cb－1～4などについて行った。そのうちH－6床面土壌については，1×1 mの単位で床面上5 mの厚さを採取すると同時に，各単位ごとに花粉分析試料も採取した。その結果，オニグルミの核片，アカザ科の種子，シダ類の胞子粒などが確認できた（Ⅲ－1(1)H－6，Ⅳ－1参照）。また，第Ⅳ層Fb－1，Cb－1～4で採取した炭化木片については，マツ属とトウヒ属の樹木があることが判った（Ⅳ－1(2)参照）。さらに，Fb－1，Cb－1から採取した炭化木片については，^{14}C年代測定を行った（Ⅳ－2参照）。　植物遺存体　マツ・トウヒ属

水洗処理は，旧石器の剥片，砕片集中区（G－31，J－33，K－29･30，K－40）の土壌などについて行い，剥片・砕片1,667点，石器4点などを採取した。

分析用に採取した土壌と地点は下記のとおりである。　分析土壌

1．火山灰分析試料：H－1覆土
2．ローム分析試料：L－36柱状，K－30石器出土地点
3．花粉分析試料：L－36柱状，H－6　床面上5 cmの土壌

今回の報告では，花粉分析・植物遺存体（Ⅳ－1(1)），火山灰・ローム分析（Ⅳ－1(2)），樹種同定（Ⅳ－1(3)），^{14}C年代測定（Ⅳ－2）などを掲載した。

(4) 整理の方法

遺物の水洗，注記は現地で行い，その後の接合，復元作業などは札幌のセンターで行った。土器は可能な限り復元し，図化した。また，文様の明確なものについては展開図を作成すると同時に，一部については展開写真を撮影した（図版47～51）。　整理場所

旧石器については，石質ごとに分類し，さらに明確に区別できるものについては母岩別分類を試みた。接合は，美利河1遺跡（財北海道埋蔵文化財センター 1984a）同様，瞬間　母岩別分類

接着剤　接着剤（ボンドアロンアルファ：コニシ株式会社発売）を使用した。接会は可能なものについてはすべて行っているが，状況によってはいくつかのブロックに分けているものもある。なお，分離する場合は，「はがし液」（ボンドアロンアルファ用：コニシ株式会社発売）でも可能であるが，熱湯に浸し，さらに煮立たせるのが簡便である。

分離

(5) 遺構，遺物の分類

遺構

住居跡　住居跡と土壙の二つに大きく分け，住居跡についてはH，土壙についてはPの略号を付けた。住居跡としたものは人が生活することが可能で，柱穴または炉などがあるものである。H－13は昭和60年度の調査で，P－5としたものであるが，昭和61年度の調査で，柱穴，炉などが確認されたため，報告書作成の段階でH－13に変更した。したがってP－5は欠番になっている。

土壙　土壙はその形状や特徴から，フラスコ状ピット，円形・楕円形ピット，Tピットの三つに分類した。

焼土　焼土(F)としたものは，住居跡に伴わずに単独で確認された炉跡で，屋外炉の可能性がある。また，一部のものについては掘り込みを伴わない平地住居と関連する可能性が考えられるが，そのような状況は確認できなかった。

遺物

土器，石器，土製品・石製品，金属製品などがある。

土器

縄文時代早期～晩期，続縄文時代のものがある。便宜的にⅠ群を早期，Ⅱ群を前期，Ⅲ群を中期，Ⅳ群を後期，Ⅴ群を晩期，Ⅵ群を続縄文時代相当のものにあて，それぞれについて二，三の類別を設けたが，基本的には木古内町建川2・新道4遺跡の分類（㈶北海道埋蔵文化財センター1987）に依っている。また，隣接する桔梗2遺跡（㈶北海道埋蔵文化財センター 1988）と比較できるように同一の分類基準を作成した。

建川2・新道4
桔梗2

分類は以下のとおりである。

早期　Ⅰ群土器（早期）

前半期の貝殻文土器：A類，後半期の縄文の施された土器：B類（東釧路Ⅱ・Ⅲ式，コッタロ式，中茶路式，東釧路Ⅳ式相当）

前期　Ⅱ群土器（前期）

前半期の縄文の施された尖底土器の主体となるグループ：A類（桔梗野式，石川野式，春日町式，大津2・3群相当），後半期の円筒土器下層各式：B類（C式およびそれ以前のもの・サイベ沢Ⅰ式：B_1，d式：B_2）

中期　Ⅲ群土器（中期）

前半期のもの：A類（円筒土器上層a，b式，サイベ沢Ⅶ式，見晴町式，あるいは森越式に相当），後半期のもの：B類（榎林式：B_1，大安在B式・ノダップⅡ式：B_2，煉瓦台式：B_3，およびこれらに伴う大木系土器群）

後期　Ⅳ群土器（後期）

前葉の土器：A類（天祐寺式・湧元式：A_1，トリサキ式・大津式・白坂3式：A_2），中葉の土器：B類（ウサクマイC式，手稲式，鮭澗（ほつけま）式），後葉の土器：C類（堂林式，三ッ谷式，

湯の里3式）

Ⅴ群土器（晩期）　　晩　期

大洞B・B－C式相当：A類，大洞C_1・C_2式相当：B類，大洞A，A′式相当：C類

これらのうち本遺跡で確認できたのはⅠ群A類，Ⅲ群A類，Ⅳ群A類，Ⅴ群C類である。Ⅰ群A類の土器は，特徴的な文様はないが，条痕文，連続押引文，腹縁文が施されたものが多く，沈線や刺突がみられるものはごくわずかである。器形は尖底が主体とみられる。Ⅲ群A類の土器は，本遺跡の大半を占めるもので，円筒土器上層a式をA_1，同b式をA_2，サイベ沢Ⅶ式以降の土器をA_3とする。A_1類とA_2類はごくわずかで，大部分はA_3類である。Ⅳ群A類の土器はP－89，95の覆土中のほか，包含層からわずかに出土した。Ⅴ群C類の土器はF－4および包含層，Ⅵ群の土器はP－14，F－1および包含層で少量出土した。　　Ⅰ群A類　Ⅲ群A類

石器

器種別の大分類を行ったのみで，記号による細分はおこなっていない。縄文時代の剝片石器には石鏃，ドリル，やり先・ナイフ，つまみ付ナイフ，スクレイパーなどがあり，礫石器には石斧，たたき石（くぼみ石を含む），すり石（扁平打製石器，北海道式石冠などを含む），砥石，台石・石皿，石錘などがある。このほか石核，剝片・砕片（フレイク・チップ），自然礫などがある。また，Uフレイクとしたものはutilized flakeとみられるものである。　　剝片石器　礫石器

旧石器時代の石器には，細石刃，細石刃核，尖頭器，両面調整石器，彫器，錐形石器，掻器，削器，縦長剝片，石核，ストーン・リタッチャー，台石のほか，剝片，砕片，削片，自然礫などがある。　　旧石器

土製品・石製品

土製品には，ミニアチュア土器のほか，注口や台などの土器の一部，棒状・スタンプ状・有孔・側縁有溝土製品，垂飾，土偶などがある。石製品は，自然石の形状を生かした垂飾とみられるものだけである。

金属製品

性格不明の銅製品と銭貨がある。

表Ⅰ－1　遺構数一覧

遺構／調査年度	住居跡	土壙				縄文時代焼土	旧石器時代焼土ほか
		フラスコ状ピット	円形・楕円形ピット	Tピット	小計		
昭和60年度	3	1	8	5	14	1	0
昭和61年度	9	5	37	24	66	3	0
昭和62年度	1	0	3	32	35	1	5
合計	13	6	48	61	115	5	5

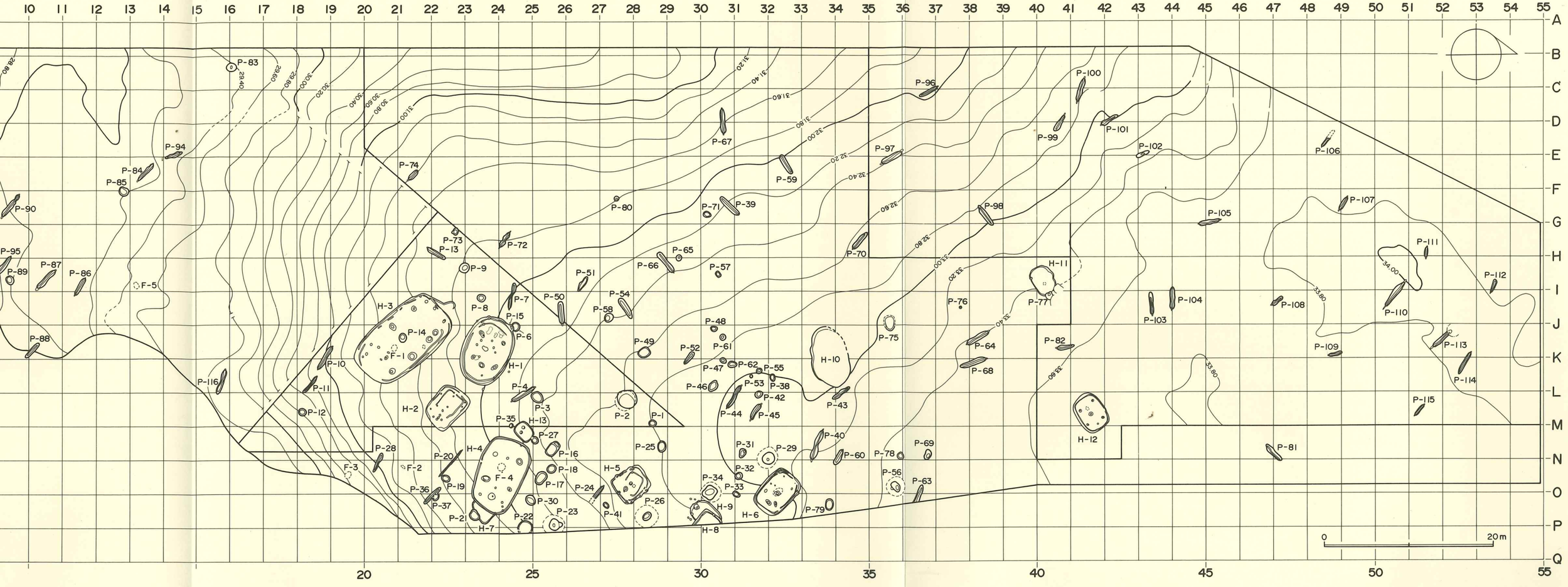
表Ⅰ－2　出土遺物一覧

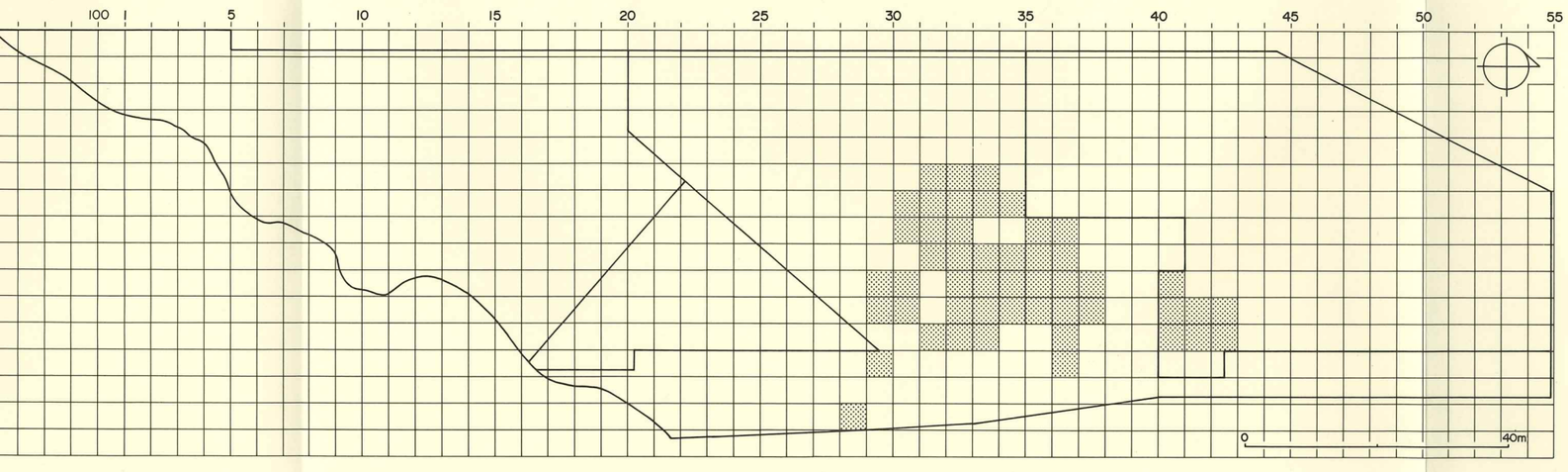
種類＼年次	60年度			61年度			62年度			小計			合計
	遺構	包含層	表採ほか	遺構	包含層	表採ほか	遺構	包含層	表採ほか	遺構	包含層	表採ほか	
縄文早期土器	29	36		169	605		1	6		199	647		846
縄文前期土器							1	7		1	7		8
縄文中期土器	4,720	3,160		5,444	13,152	45	69	237	48	10,233	16,549	93	26,875
縄文後期土器					4		88	2	1	88	6	1	95
縄文晩期土器				526	7					526	7		533
続縄文土器	109	13								109	13		122
不明・その他		16			15			63			94		94
小計	4,858	3,225		6,139	13,783	45	159	315	49	11,156	17,323	94	28,573
石鏃	9	2		16	16				1	25	18	1	44
ドリル		2		1	1					1	3		4
やり先・ナイフ	6			1	1					7	1		8
つまみ付ナイフ	2	1		4	4					6	5		11
スクレイパー	16	9		21	13		1	1		38	23		61
石斧	6	4		9	13	2		1		15	18	2	35
たたき石	9	12		9	6					18	18		36
すり石	20	11		37	50			1		57	62		119
砥石	2	1		1	5					3	6		9
台石・石皿	8			7	18			1		15	19		34
石錘	3	5		13	59					16	64		80
石核	2	4		3	16					5	20		25
Uフレイク	17	14		34	47	3	1			52	61	3	116
フレイク	665	160		1,772	921	4	69	66	22	2,506	1,147	26	3,679
礫	479	136		434	977	3	37	3	2	950	1,116	5	2,071
小計	1,244	361		2,362	2,147	12	108	73	25	3,714	2,581	37	6,332
土・石製品	10	6		12	2					22	8		30
金属製品ほか		2			8			7			17		17
旧石器				(1)	3,224		(5)	5,557		(6)	8,781		8,787
合計	6,112	3,594		8,514	19,164	57	272	5,952	74	14,898	28,710	131	43,739

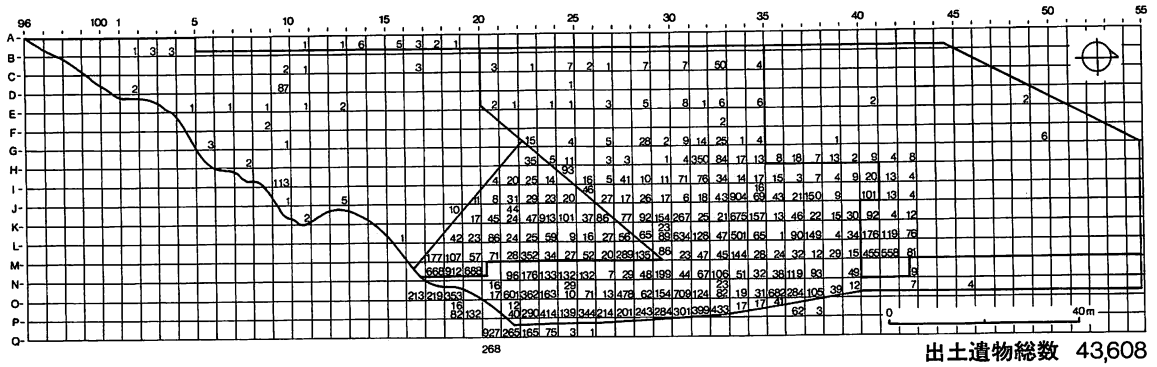
△遺構分布図

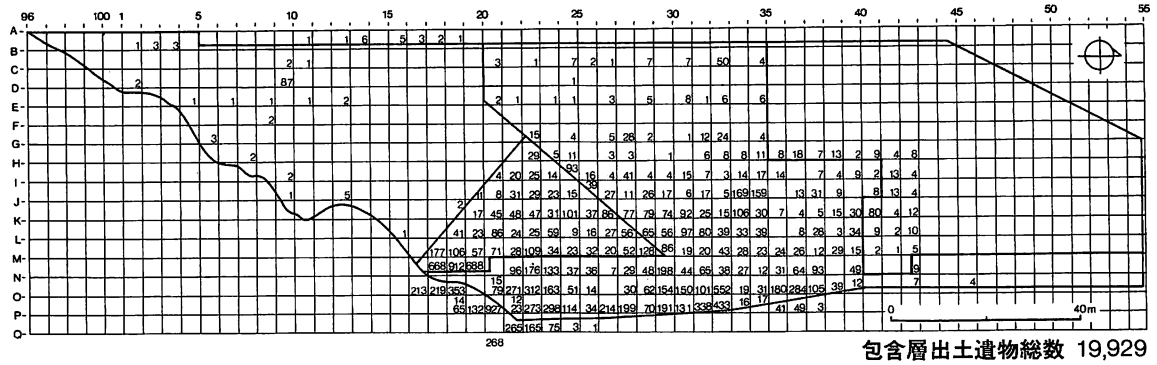
旧石器出土範囲▷

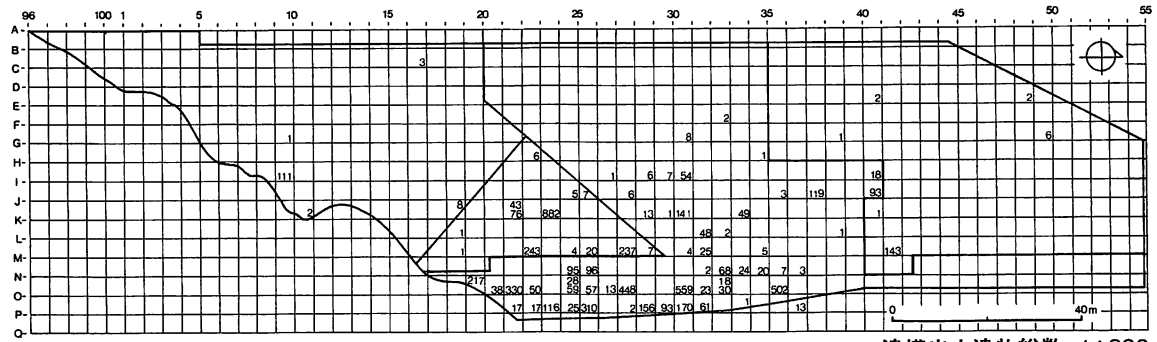
図Ⅰ－4　遺構分布図

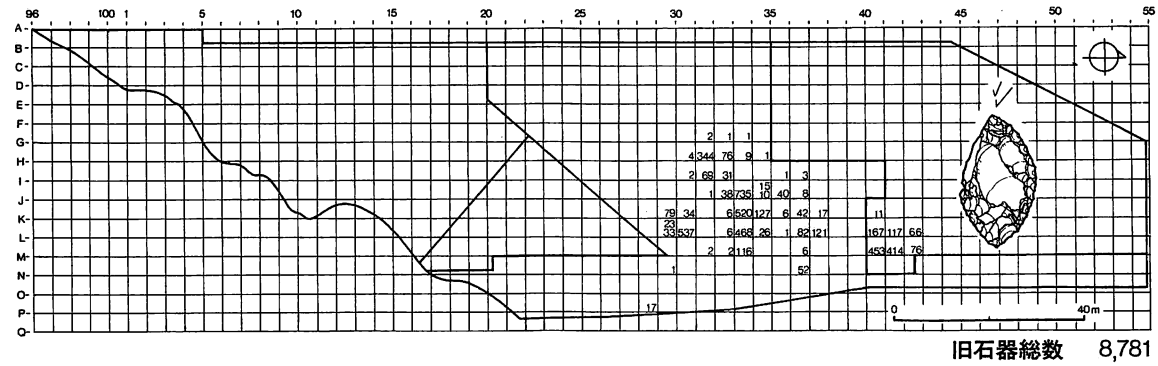

P-83
P-94
P-84
P-85
P-90
P-95
P-89
P-87
P-86
P-88
P-116
F-5
P-74
P-73
P-13
P-9
P-72
H-3
P-14
F-1
P-8
P-15
P-6
H-1
P-10
P-11
P-12
H-2
P-4
P-3
P-35
H-13
P-27
P-16
P-28
H-4
P-20
F-3
F-2
F-4
P-18
P-17
P-36
P-19
P-37
P-21
P-22
P-30
P-23
H-7
P-2
P-1
P-25
H-5
P-24
P-41
P-26
H-8
P-34
P-33
H-9
H-6
P-31
P-29
P-32
P-79
P-40
P-60
P-78
P-69
P-56
P-63
P-67
P-59
P-80
P-71
P-39
P-66
P-65
P-57
P-51
P-50
P-54
P-58
P-49
P-48
P-52
P-61
P-47
P-62
P-55
P-53
P-38
P-46
P-42
P-44
P-45
P-43
H-10
P-70
P-75
P-96
P-97
P-98
P-76
P-64
P-68
P-82
H-11
P-77
H-12
P-100
P-99
P-101
P-102
P-106
P-107
P-105
P-111
P-112
P-104
P-103
P-108
P-110
P-109
P-113
P-114
P-115
P-81
28.60
29.40
29.60
29.80
30.00
30.20
30.40
30.60
30.80
31.00
31.20
31.40
31.60
31.80
32.00
32.20
32.40
32.60
32.80
33.00
33.20
33.40
33.60
33.80
34.00
0
20m
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
20
25
30
35
40
45
50
55

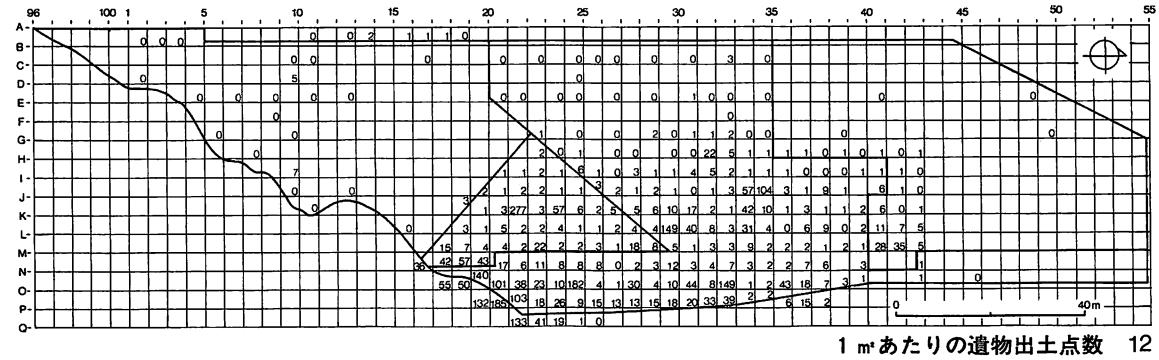

100
1
5
10
15
20
25
30
35
40
45
50
55
0
40m











図Ⅰ－5　発掘区別出土遺物点数

(6) 遺跡の概要

遺　構　発見された遺構と遺物は表Ⅰ－1，2のとおりである。縄文時代の遺構は，住居跡13軒，土壙115基（フラスコ状ピット6，円形・楕円形ピット48，Tピット61），焼土5か所で，旧石器時代の遺構は，焼土1ヵ所，炭化木片ブロック4ヶ所である。

住居跡の時期は，縄文時代早期前半（Ⅰ群A類土器）1軒，中期中葉（Ⅲ群A_3類土器）12軒である。なお，H－5の炭化材の^{14}C年代は4,130±150y.B.P.である。6基のフラスコ状ピットもⅢ群A_3類土器の出土が多いので，12軒の住居跡同様縄文時代中期中葉と考えられる。なお，P－34覆土中の炭化材の^{14}C年代は4,310±50y.B.P.である。円形・楕円形ピットの時期は，続縄文時代（Ⅵ群土器）1基のほかは縄文時代中期中葉（Ⅲ群A_3類）とみられる。しかし，早期前半（Ⅰ群A類土器）ものが含まれている可能性がある。Tピットについては時期を決定できないが，上面の凹みにⅣ群A類土器が流れ込んだ状態で出土した例があるので，縄文時代後期以前の可能性が強い。焼土の時期は，縄文時代中期前葉（Ⅲ群A_1類土器）1カ所，晩期後葉（Ⅴ群C類土器）1カ所，続縄文時代（Ⅵ群土器）1カ所で，他は不明である。

旧石器時代の遺構は，焼土1カ所，炭化木片ブロック3カ所が細石器を伴う石器群，炭化木片ブロック1カ所が尖頭器を伴う石器群とともに発見されているので，これらの石器群と同時期と考えられる。なお，Cb－1の炭化木片の^{14}C年代は13,400±160y.B.P.である。

遺　物　遺物総数は43,608点（表採などを加えると43,739点），そのうち遺構出土のものは14,898点で，遺構と包含層の遺物の比率は34：66，包含層は遺構の2倍である。また，包含層出土の遺物28,710点を時代別にみると，縄文時代など19,929点，旧石器時代8,781点である。

土　器　1 m^2あたりの出土点数は，調査面積全体で単純に計算すると4.6点であるが，1点以上出土している発掘区で計算すると12点になる（図Ⅰ－5），土器総点数28,573点，石器などの総点数は15,119点（縄文6,332点，旧石器8,787点），その比率は65：35であるが，縄文時代だけをみると，石器は6,332点で土器との比率は86：14となり，土器が圧倒的に多い。土器の点数を時期別にみると，縄文時代早期846点，前期8点，中期26,875点，後期95点，晩期533点，続縄文時代94点で，縄文時代中期が圧倒的に多い。

縄文石器　石器総点数は15,119点，縄文時代の剝片石器128点，同礫石器338点，同フレイク・礫など5,866点，旧石器8,787点である。

旧石器　旧石器は，細石刃を主体とし，湧別技法，美利河技法に関連した細石刃核の接合資料のほか，尖頭器製作の接合資料が多数ある。また，石器は出土状況から7つのブロックに分かれ，さらにそれらは，細石刃，両面調整石器，尖頭器それぞれを主体とする石器群に分けることが可能である。しかし，接合関係や母岩別資料の共有などで，相互に関連した石器群であることが判明した。

なお，黒曜石水和層年代では，12,700±900y.B.P.，フィッション・トラック年代では13,300±1,100y.B.P.の数値が得られている（Ⅳ－3参照）。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と周辺の遺跡

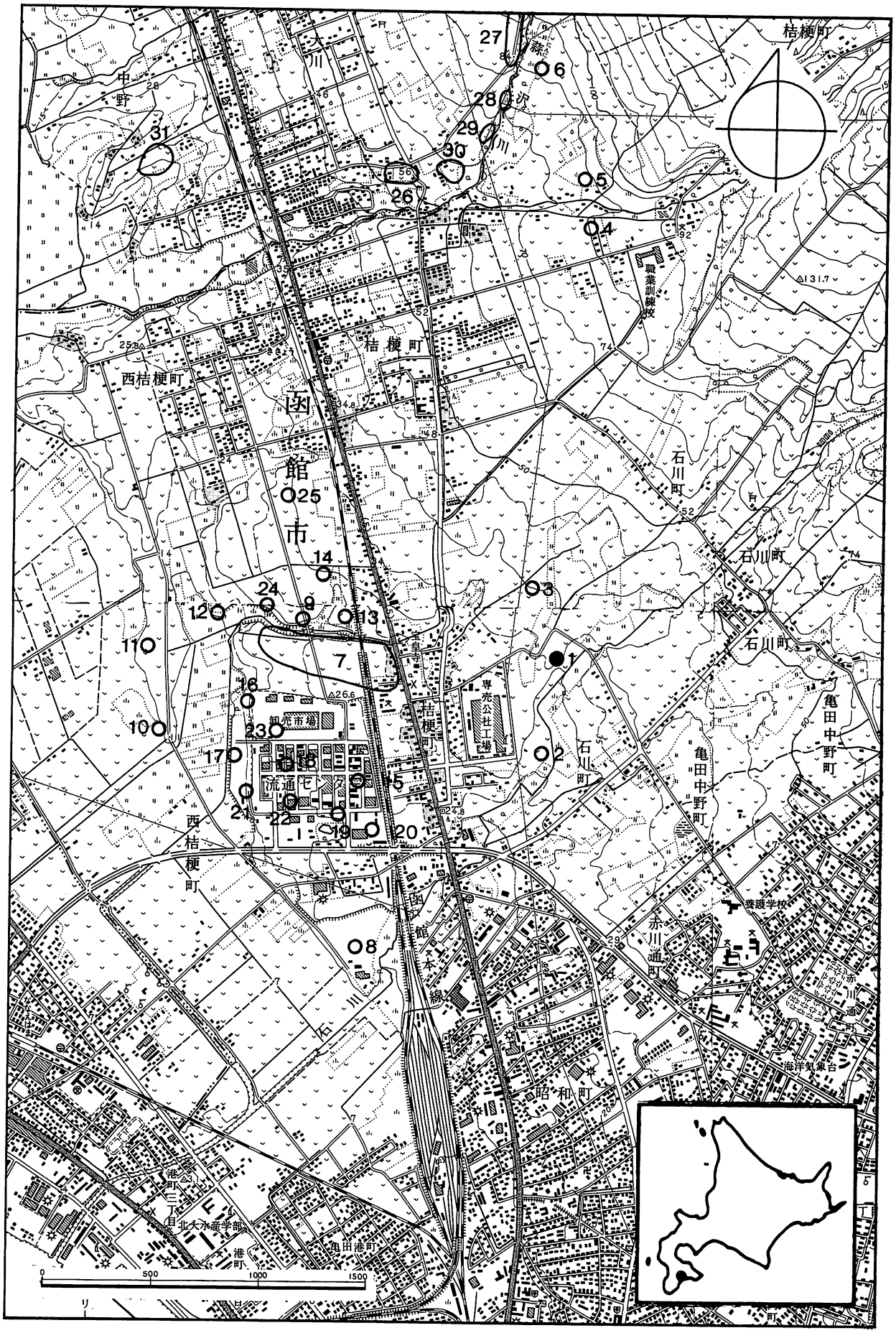
遺跡は，国鉄函館駅の北方6.5km，石川右岸，標高30～35mの段丘面に位置している。地形は北から南に向かって緩やかに傾斜し，南に函館山，北に横津岳などを望むことができる。遺跡の所在地は函館市石川町で，サイベ沢遺跡群のある桔梗町や西桔梗遺跡群のある西桔梗町に近い場所である。サイベ沢遺跡は石川１遺跡の西方700mにあり，貝塚を伴う縄文前～中期の集落遺跡として有名で，昭和24年に最初の発掘調査（児玉ほか 1958）が行われ，その後，昭和41年（吉崎ほか 1967），昭和59・60年（田原 1985，田原・鈴木 1986）などの調査が重ねられ，報告書が刊行されている。また，西桔梗遺跡群は石川１遺跡の南

サイベ沢

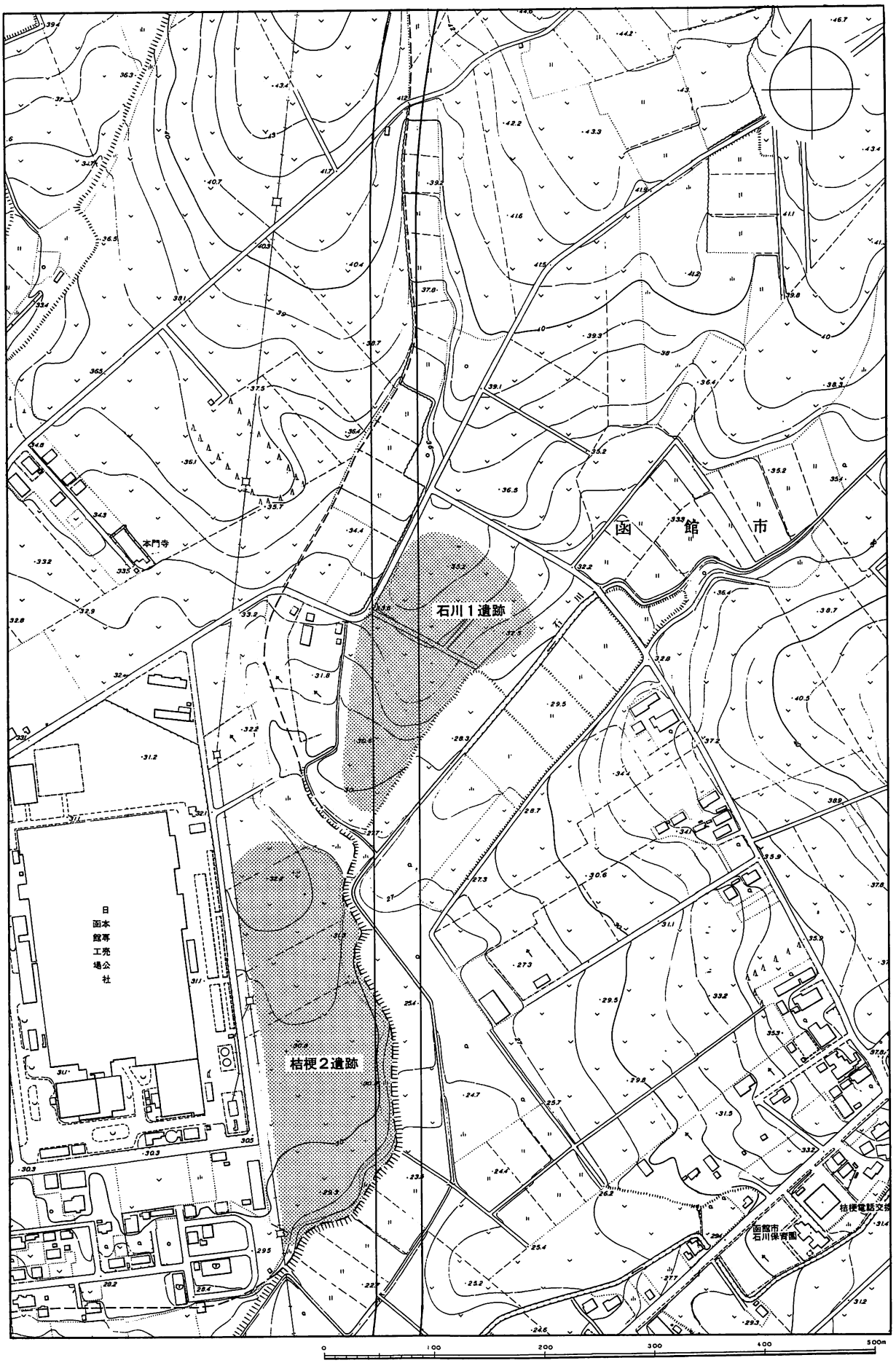
西桔梗

表Ⅱ－１　周辺の遺跡一覧

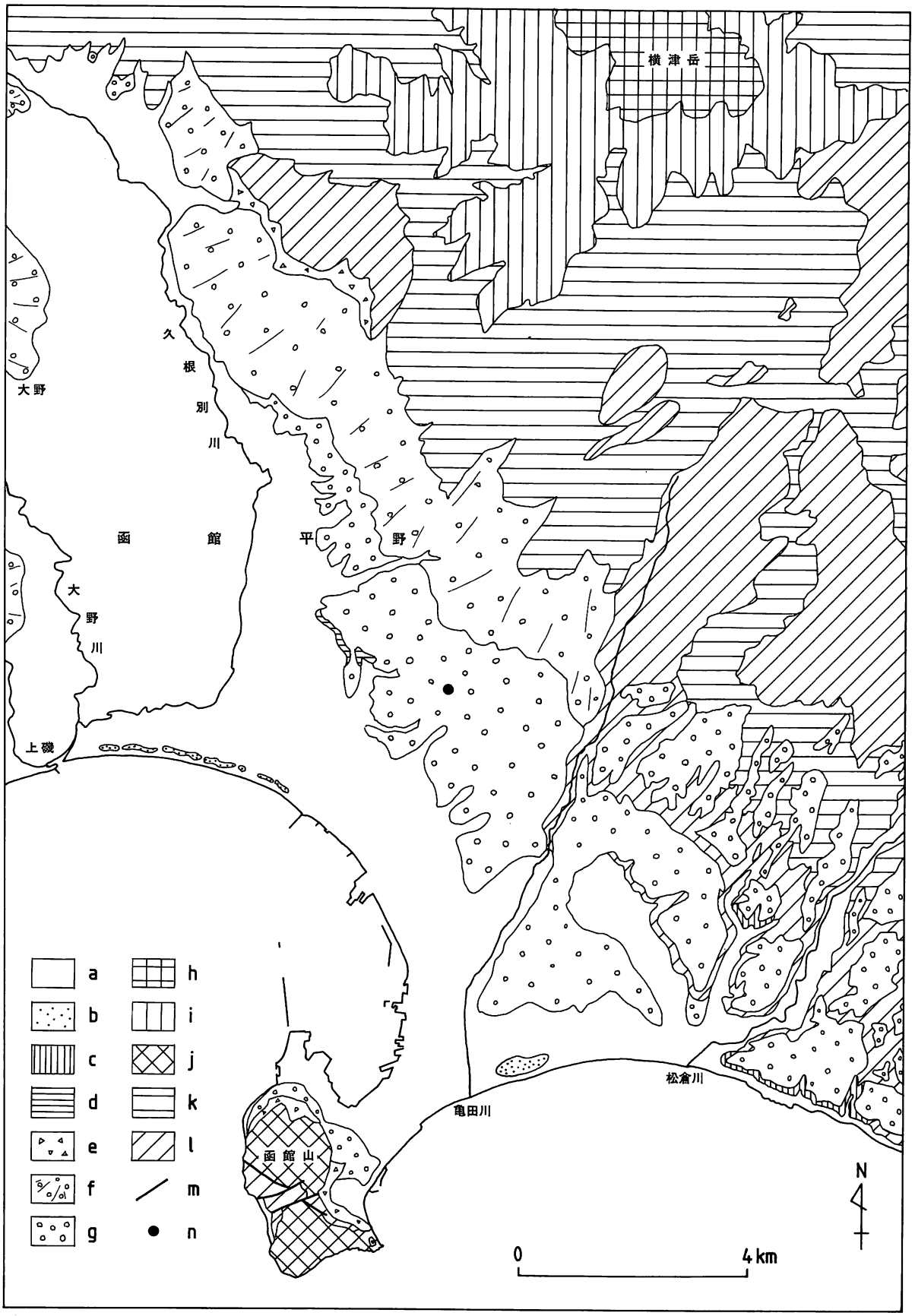
No.	名　　称	登載番号	所　　在　　地	時　　代
1	石川１遺跡	B・01・109	函館市石川町172-2　169-8	旧石器・縄文(早～晩期)続縄文
2	桔梗２遺跡	B・01・110	函館市桔梗町408-6	旧石器・縄文(早～晩期)続縄文
3	桔梗３遺跡	B・01・111	函館市桔梗町418-16,17,35	縄文(中期)
4	桔梗４遺跡	B・01・112	函館市桔梗町435-130,131,62	縄文(早・晩期)・続縄文
5	桔梗５遺跡	B・01・113	函館市桔梗町528-1	縄文
6	桔梗６遺跡	B・01・114	函館市桔梗町440-14,15,31	縄文
7	サイベ沢遺跡	B・01・ 82	函館市西桔梗町26-1,3,4,5,6,27,610-27～34-36,611-3,5,6,16 函館市桔梗町149,150-1,2,6	縄文(前・中期)
8	石川野遺跡	B・01・ 84	函館市西桔梗町555-8,9,558,559,563,567,574,575	縄文(早・前期)
9	サイベ沢Ｂ遺跡	B・01・ 85	函館市西桔梗町614,640-1,2	縄文(前・中期)
10	西桔梗Ｎ-1遺跡	B・01・ 86	函館市西桔梗町246-24他	縄文(早・前・中期)
11	西桔梗Ｎ-2遺跡	B・01・ 87	函館市西桔梗町503-1他	縄文(早・前・中期)
12	西桔梗Ｎ-3遺跡	B・01・ 88	函館市西桔梗町622他	縄文(早・晩期)
13	西桔梗Ｎ-5遺跡	B・01・ 89	函館市西桔梗町36-1	縄文(晩期)
14	西桔梗Ｎ-6遺跡	B・01・ 90	函館市西桔梗町39-3,41-1	続縄文
15	西桔梗Ｎ-7遺跡	B・01・ 91	函館市西桔梗町10-3	室町中期
16	西桔梗Ａ遺跡	B・01・ 92	函館市西桔梗町607-1,7,12他	縄文(早・前期)
17	西桔梗Ｂ１遺跡	B・01・ 93	函館市西桔梗町604-6,9,605-7,8,9	縄文(前・中期)
18	西桔梗Ｂ２遺跡	B・01・ 94	函館市西桔梗町598-4,6,9	続縄文(恵山式)
19	西桔梗Ｃ遺跡	B・01・ 95	函館市西桔梗町597-1,2,5	縄文(中・後期)
20	西桔梗Ｄ遺跡	B・01・ 96	函館市西桔梗町10-2	縄文(中・後・晩期)擦文
21	西桔梗Ｅ１遺跡	B・01・ 97	函館市西桔梗町598-13,14,18,19,35	縄文(早・前・中・晩期)
22	西桔梗Ｅ２遺跡	B・01・ 98	函館市西桔梗町598-19	縄文(中・晩期)続縄文(恵山式)
23	西桔梗Ｆ遺跡	B・01・ 99	函館市西桔梗町607-12	縄文(中期)
24	サイベ沢Ｃ遺跡	B・01・100	函館市西桔梗町615-1他	続縄文(恵山式)
25	桔梗１遺跡	B・01・105	函館市桔梗町44の1	縄文(中期)
26	大中山８遺跡	B・08・ 5	亀田郡七飯町字大川245	縄文(早・晩期)続縄文(恵山式)
27	大中山13遺跡	B・08・ 24	亀田郡七飯町字大川405～407,409,410,413,418	縄文(中期)続縄文(恵山式)
28	大中山14遺跡	B・08・ 25	亀田郡七飯町字大川273,275	縄文，続縄文(恵山式)
29	大中山15遺跡	B・08・ 26	亀田郡七飯町字大川272,273,275	縄文，擦文
30	大中山16遺跡	B・08・ 27	亀田郡七飯町字大川269,271,275	縄文
31	大中山27遺跡	B・08・ 57	亀田郡七飯町字中野117,118-1～5,119-1～4	続縄文(恵山式)



図Ⅱ－１　遺跡の位置と周辺の遺跡　（国土地理院発行２万５千分の１地形図、七飯・赤川・函館・五稜郭）



図Ⅱ－２　遺跡の範囲と周辺の地形図



図Ⅱ－3　遺跡周辺の地質

（長谷川・鈴木，1964；三谷ほか，1965；三谷ほか，1966；鈴木ほか，1969から引用。一部加筆・簡略化。）a：沖積低地　b：砂丘　c：銭亀沢火山灰層　d：文月層　e：崖錐堆積物　f：扇状地堆積物　g：段丘堆積物　h：横津岳上部熔岩　i：横津岳下部熔岩　j：函館山火山岩類　k：峠下火山砕屑岩類(松倉集塊岩層を含む)　l：その他の新第三系・貫入岩類　m：断層　n：石川1遺跡

西1 kmにあり，函館圏流通センター建設に伴い昭和47年にB_1，B_2，C，D，E_1，E_2，Fの各遺跡が調査され，縄文時代早期から続縄文時代の遺構，遺物が発見されている（千代編1974）。

遺跡の北方には，函館市内では桔梗3，4，5遺跡が確認されているにすぎないが，蒜沢川を挟さんだ北側の七飯町では，大中山8，13，14，15，16遺跡などの縄文時代から続縄文時代の遺跡が多数分布している（図Ⅱ－1，表Ⅱ－1）。

2　遺跡周辺の地形・地質の概要

本遺跡は函館平野の東部に位置している。周辺には，横津岳から函館平野へかけて，山地斜面，山麓の緩斜面または扇状地，段丘，及び沖積低地が発達している（図Ⅱ－3）。

山地部

山地部は標高1,100—150mで，横津岳を構成する安山岩の熔岩（鈴木ほか 1969）と，これらの下位の峠下火山砕屑岩類（三谷ほか 1966）とから成っている。横津岳山頂附近は，熔岩流堆積面の保存が良い。

山麓部

山麓部では，段丘との間，標高100—50mに緩斜面が発達している。この緩斜面は，崖錐及び扇状地として記載されている（三谷ほか 1966；鈴木ほか 1969）が，峠下火山砕屑岩類の露出地域にも分布するので，一部には他の営力によって形成された緩斜面も含まれていると思われる。

段丘

段丘は標高50—15mに発達している。瀬川(1974・1975)によれば，函館附近の平坦面は，鳴川面（標高460—360m），鱒川面（標高200m±），赤川段丘（鈴蘭丘面：標高170—100m，中野町面：標高100—90m），日吉町段丘(標高60—50m)，函館段丘(標高17—8 m)，沖積段丘（標高5 m±）に区分され，日吉町段丘は関東地方の下末吉段丘に，鈴蘭丘面は多摩丘陵のT_1面に，中野町面は同T_2面に対比されている。一般に，段丘面は降下火山灰起源のローム層に覆われる。

沖積低地

沖積低地は標高20—5 m，函館から上磯，大野へかけて発達し，函館平野の大部分を占める。砂礫・砂・粘土及び泥炭から構成され，沖積層の基底は，平野南部では海水準下40m±，南東部から中央部にかけては20m±，西部で10m±，北部で0—10m±と推定されている(三谷ほか 1966)。

黒ボク土

以上の地形を覆って，黒ボク土中に2～3枚の降下火山灰が認められる。

段丘の構成層

本遺跡は標高約30mの段丘面上に立地している。遺跡内のトレンチ断面の観察によると，この段丘の構成層は，下位から上位へ，礫及び粘土質砂である。礫は径7 cm±，凝灰岩や流紋岩の亜円～円礫で，扁平なものが多い。層厚は不明。粘土質砂は層厚35cm，下半部で橙色味を帯び，上半部で褐色味を帯びより細粒である。礫の形態や段丘の分布位置を考えると，本段丘は海成段丘である。段丘構成層はローム層に覆われる。ローム層からは旧石器時代の遺物，表層の黒ボク土からは縄文時代・続縄文時代の遺物が出土する。

ローム層

遺跡附近では，この段丘面は浅くて広い谷に開析され，緩やかな波状起伏を呈している。谷底平野との地形界が不明瞭なことが多い。この段丘は，瀬川（1974・1975）の日吉町段丘に対比される。瀬川（1975）は，西桔梗附近の日吉町段丘を西桔梗面と仮称し，西桔梗高位面と西桔梗低位面に二分した。本遺跡が立地している段丘面が，このどちらに対比されるのかは不明である。

3　基　本　層　序

遺跡の層序および層厚は，部分的に異なる区域もあるが，基本的には次のように整理される。なお，遺物が全く出土しない第Ⅳ層以下の状況についてはⅢ－2に土層図を示して説明する。

第Ⅰ層：表土・耕作土層　30cm 前後

第Ⅱ層：黒色腐植土層（縄文時代遺物包含層），10～20cm，調査区域のほぼ中央20～35ラインではほとんど存在せず，Fラインより西側およびL－18・19，M・N－16～20，O－20・21などの斜面などに厚く堆積していた。そのうち東側斜面のN－20，O－21では1,000点以上の遺物が出土した。

本来，この層の上位にはⅣ－2で詳しく説明されている完新世の3種類の火山灰が挟在するが，それらは少量であるため，斜面および住居跡の凹みなどで確認されるだけである。そのうち下位の黄褐色火山灰は「白頭山―苫小牧火山灰」に対比され，中位と上位のにぶい黄色，灰白色火山灰は，木古内町札苅，建川2・新道4，上磯町矢不来2遺跡などで確認されているものに対比され，ともに広域に分布する可能性がある（Ⅳ－1(2)参照）。

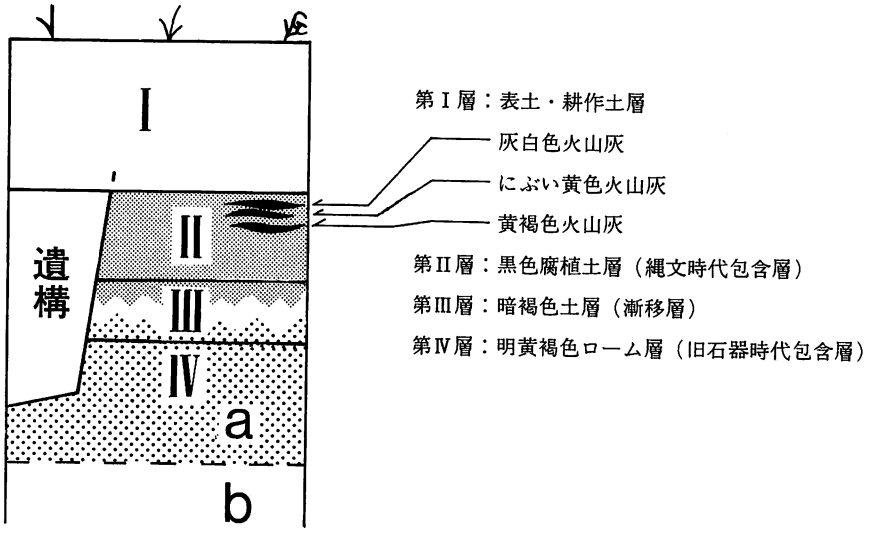
白頭山

第Ⅲ層：暗褐色土層，5～10cm，第Ⅱ層と第Ⅳ層の漸移層，縄文時代早期の遺物，旧石器が出土する。

漸移層

第Ⅳ層：明黄褐色ローム層，1m 前後，火山灰起源のローム層，上部の粘土質部分から旧石器時代の遺物が出土する。調査は上部50cm 程度を対象として，上部の粘土質部分をa，下部の砂質部分をbとして区分したが下部からは旧石器はほとんど出土しない。

ローム層



図Ⅱ－4　遺跡の基本層序模式図

Ⅲ　遺構と遺物

第Ⅰ層～第Ⅲ層（縄文時代およびそれ以降）と第Ⅳ層（旧石器）に大別して説明する。縄文時代の遺構は，住居跡，フラスコ状ピット，円形・楕円形ピット，Ｔピット，焼土の順で説明する。遺構出土の遺物は，住居跡およびフラスコ状ピットの一部については遺構単位で図示したが，他のものについては一括した。また，遺物の配列は，実測土器，土器拓影，石器，土製品・石製品の順で，それぞれについて床面と覆土を区別した。土製品・石製品については一括して説明する。なお，各遺構の大きさ，出土遺物，掲載遺物の出土地点や大きさなどは巻末の一覧表を参照願いたい。

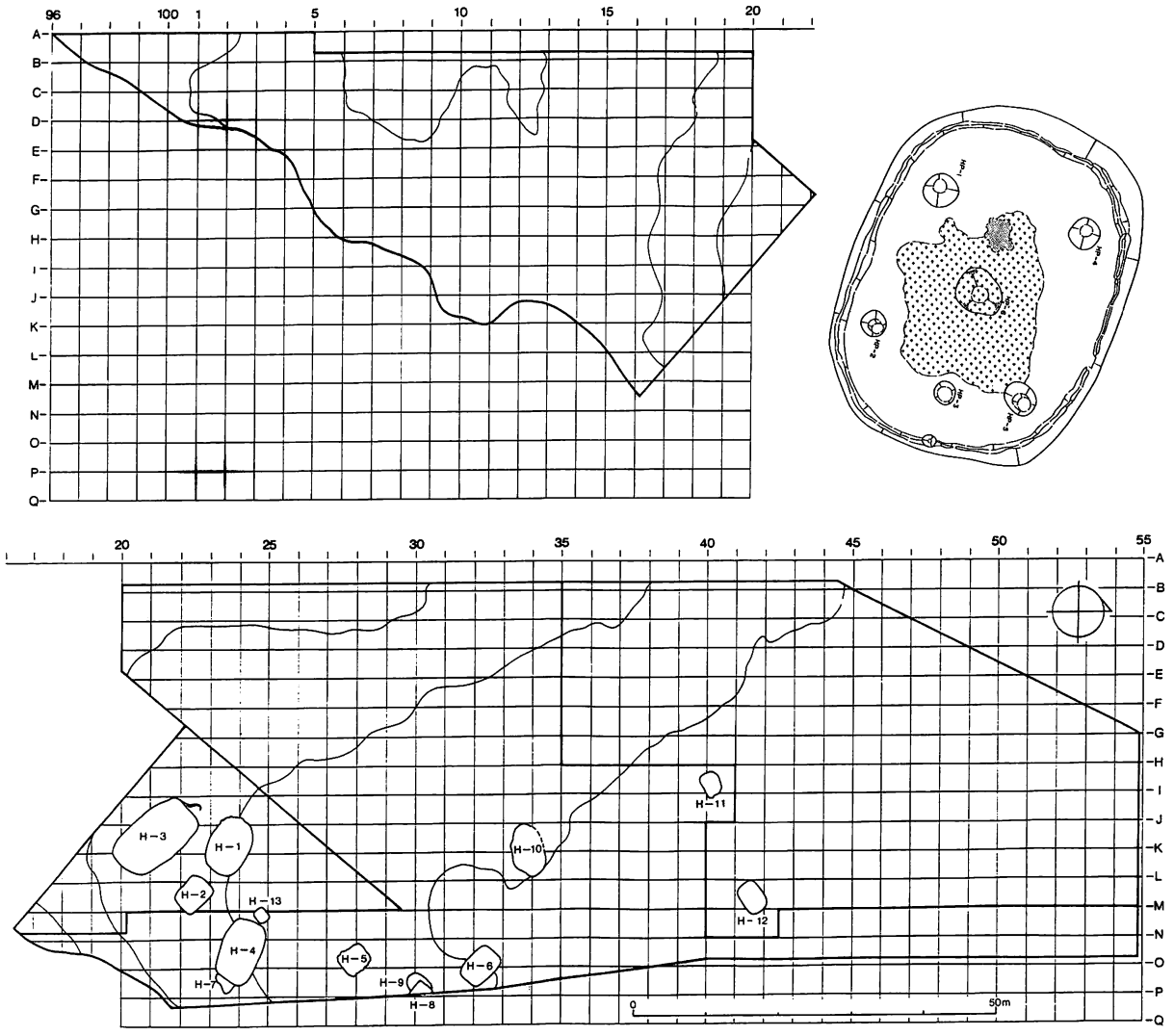
説明の順番

遺物の配列

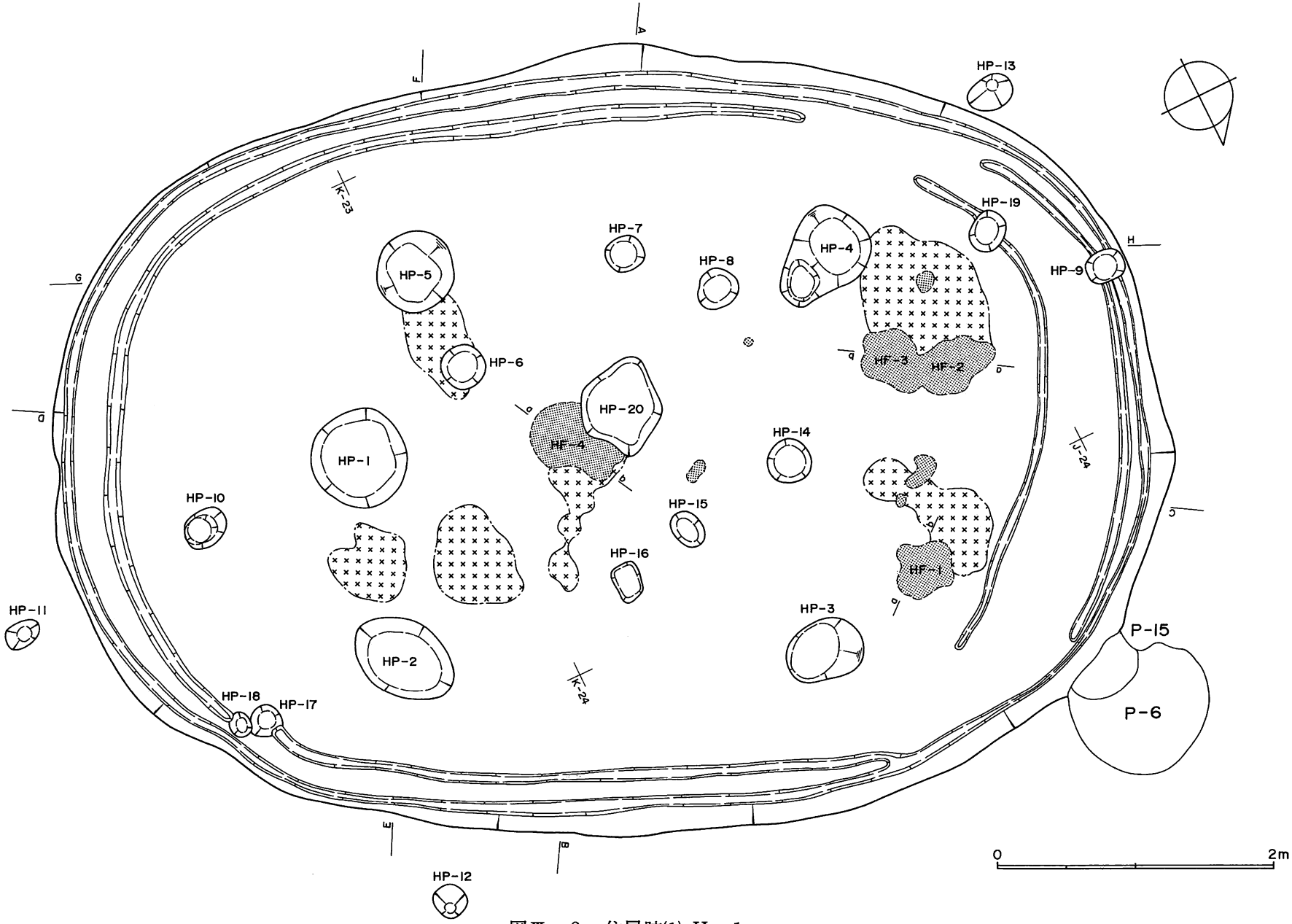
旧石器時代については，遺構，遺物の説明の後に，石器の出土状況をブロック単位で示し，さらに石材，母岩別資料，特色などを記した。

1　第Ⅰ層～第Ⅲ層の遺構と遺物

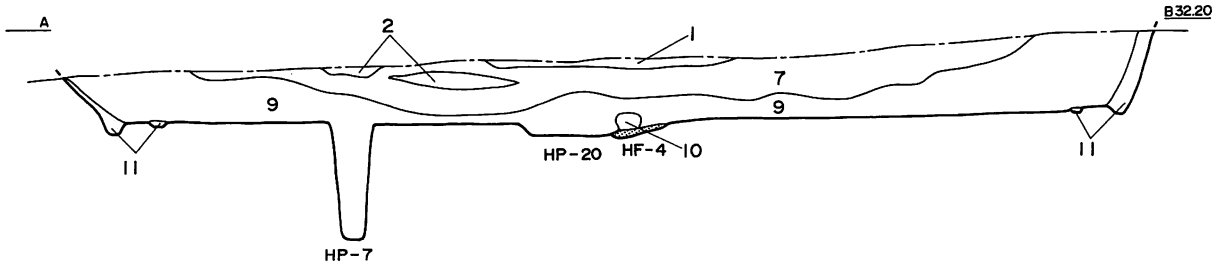
住居跡13軒，フラスコ状ピット６基，円形・楕円形ピット48基，Ｔピット61基，焼土５



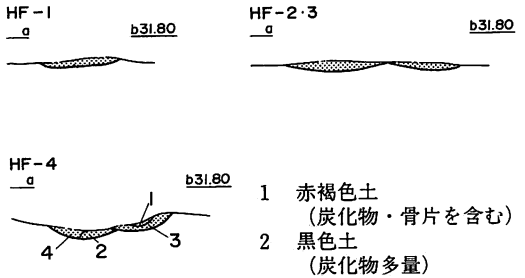
図Ⅲ－１　住居跡分布図


HP-13
HP-19
HP-7
HP-8
HP-4
HP-9
HP-5
HP-6
HF-3
HF-2
HP-20
HF-4
HP-14
HP-1
HP-10
HP-15
HP-16
HF-1
HP-11
HP-3
P-15
HP-2
P-6
HP-18
HP-17
HP-12
K-23
K-24
J-24
A
B
C
D
E
F
G
H
0
2m

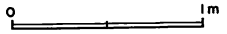
図Ⅲ－２　住居跡(1)・H－１



1 暗黄褐色土（灰白色・黄褐色火山灰を含む）
2 茶褐色土（黄褐色火山灰少量）
3 黄褐色土（火山灰）
4 灰白色土（火山灰）
5 黒色土
6 暗茶褐色土（黄褐色火山灰微量）
7 黒色土
8 暗茶褐色土
9 茶褐色土（炭化物少量）
10 黒色土（炭化物多量）
11 暗黄褐色土（ロームを含む）



1 赤褐色土
（炭化物・骨片を含む）
2 黒色土
（炭化物多量）
3 暗黄褐色土
（炭化物少量）
4 暗黄褐色土
（炭化物・焼土粒を含む）



図Ⅲ－3　住居跡(2)・H－1

カ所が確認された。以下それぞれの遺構ごとに説明する。

(1) 住　居　跡

説明項目

調査区域の中央東側，ライン20～35間，ラインI～P間に11軒，少し離れてH－40，L－41付近に1軒ずつ分布する。記載は住居番号順に従って，位置，規模，平面形，床面積，重複，確認・調査，壁，床，溝，柱穴，炉，覆土，炭化材他の各種遺存体，遺物出土状況，遺物，時期などについて行う。なお，柱穴および付属のピットの深さは巻末に一括して示した。また，床面積は，1/20の平面図をプラニメーターを使用して5回計測し，その平均値をとった（小数第3位以下を四捨五入）。

プラニメーター

H－1（図Ⅲ－2～7，図版5）

位置　I・J・K—22・23　　**規模**　8.70×5.76/7.88×5.36/0.55m

平面形　楕円形　　**床面積**　33.90m²

重複　北西側の上部がP－15に切られている。

確認・調査　第I層を除去した段階で，第Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みを確認し，長軸と短軸に各1本ずつ十字にセクションベルトを設定し調査した。

セクションベルト

壁　残存していた高さは北西部で40cm，南東部で10cm，傾斜は60～80°程度である。

床　全体に平坦であるが，南東部がわずかに高くなっている。全体に堅いが，柱穴や炉跡の周囲では部分的に特に堅いところが6カ所確認できた。

周　溝

溝　幅8～12cm，深さ3～6 cmの溝が1条床面を全周し，その内側に部分的に切れるがほぼ並行してもう1条めぐる。北西部にはその内側30～70cmの間隔をおいてさらに1条の溝がある。つまり，溝は南西，南東，北東部が2条で，北西部が3条である。

柱穴　床面上で検出したピットは17カ所，それらのうち40cm以上の深さのものはHP－1～5，7，8，30～40cmの深さのものはHP－9，10で，他は10cm以下である。大きさや位置からみて，主柱穴と考えられるのはP－1～5の5カ所である。住居外にも3カ所のピットを検出（HP－11～13）したが，木根痕の可能性もあり，住居跡に伴うかどうかは不明。

主柱穴

地床炉

炉　床面の中央部に1カ所（HF－4），北西部に2カ所（HF－1，2・3）地床炉がある。いずれも床面が焼けているのみで，石組や掘り込みなどはみられない。

覆土　十一層に区分した。1層は耕作による攪乱がみられるが2層以下は攪乱されていない。3層は黄褐色火山灰，4層は灰白色火山灰で，2，6層にもそれらが混じる。7層は第Ⅱ層と同一の黒色腐植土で，竪穴廃絶以降，黄褐色火山灰（800～900年前）降下までの間に堆積したものと思われる。9層は竪穴全体を覆っている層で，廃絶直後に堆積したものであろう。

遺物出土状況　出土遺物総数は882点，その内訳は土器724点，石器など154点，土製品・石製品4点である。

床　面

床面から出土したのは土器122点，石器など66点，土製品1点で，壁寄りの部分，特に東側から多く出土している。土器は北東部の壁寄りのところで出土した2個体（図Ⅲ－5－2，3）が復元できた。また，北西部の壁の近くで拳大の自然礫が32点まとまって出土している。

覆　土

覆土中から出土したのは土器602点，石器など88点，土製品・石製品3点で，平面的に特

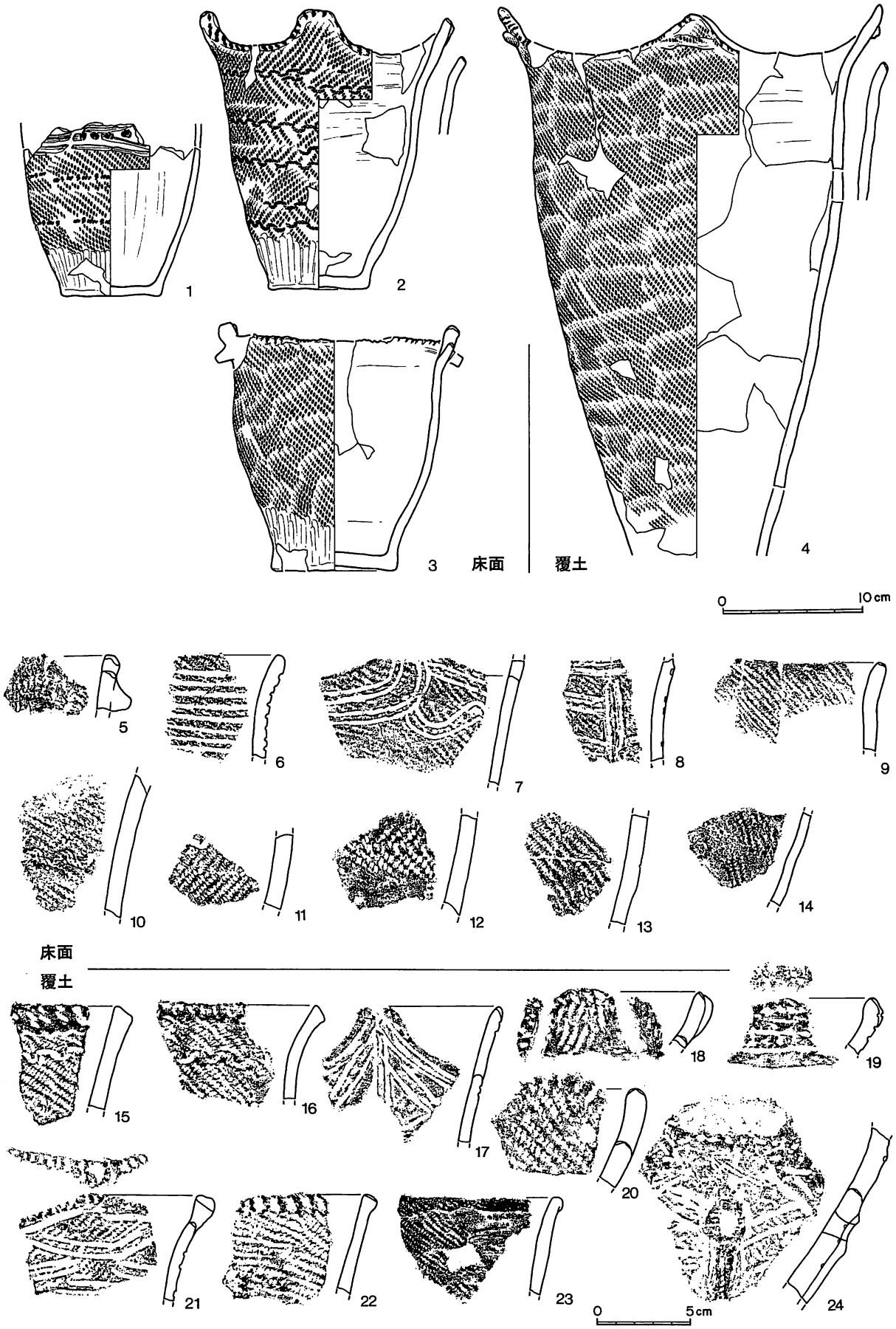


図Ⅲ－４　住居跡(3)･H－１

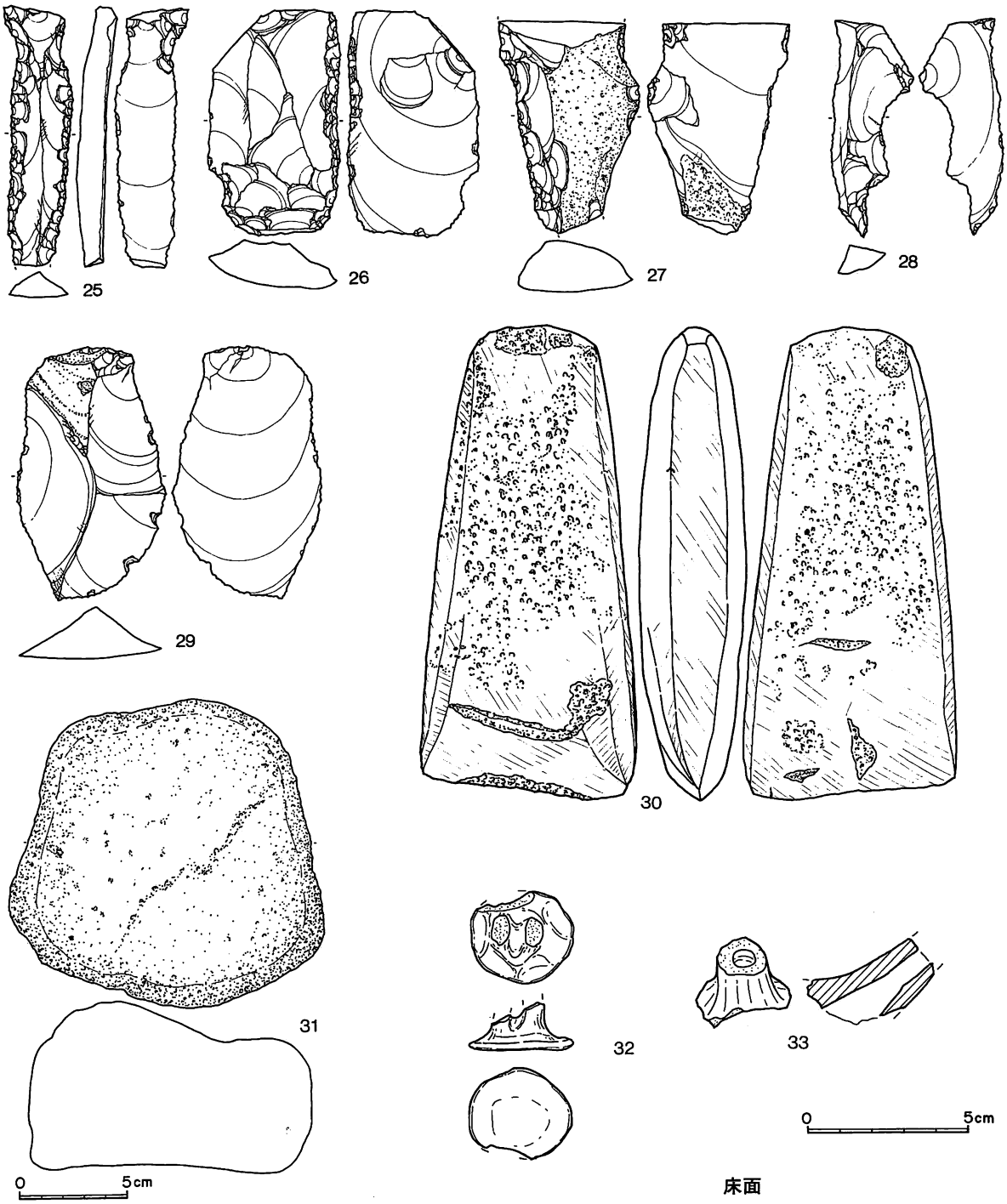
に偏りはみられないが，９層からの出土が多い。９層から出土している土器は，床面出土として取り上げた土器と接合した例も多い。

遺物　１～３は床面，４は覆土から出土したⅢ群 A_3類の土器である。１は胴部下半が復元できたもので，横走する沈線と縄文原体の刺突がみられる。地文は結束第１種の斜行縄文で，底部付近および内面は縦方向に研磨されている。内，外面ともに炭化物の付着がみられる。２は４つの単純な突起がみられるもので，口唇に縄の圧痕，胴部に結束第２種の羽状縄文が施されている。底部付近は縦方向に研磨され，縄文が磨り消された状態になっている。胴部上半および内面に炭化物の付着がみられる。３は２個の小さな突起があるとみられるもので平縁に近い。口唇は縄の圧痕，胴部は斜行縄文が施されている。底部付近は縦方向に研磨され，底部は上底気味である。４は，高さが40cm 以上になる大型の土器で，４個の山形突起のうち１個が欠損している。突起部には３ cm 程の長さの粘土紐が貼り付けられ，その上に撚糸圧痕が施されている。また，口唇部も縄が押捺され，胴部は全面に横

Ⅲ群 A_3類



図Ⅲ－5　住居跡(4)・H－1遺物



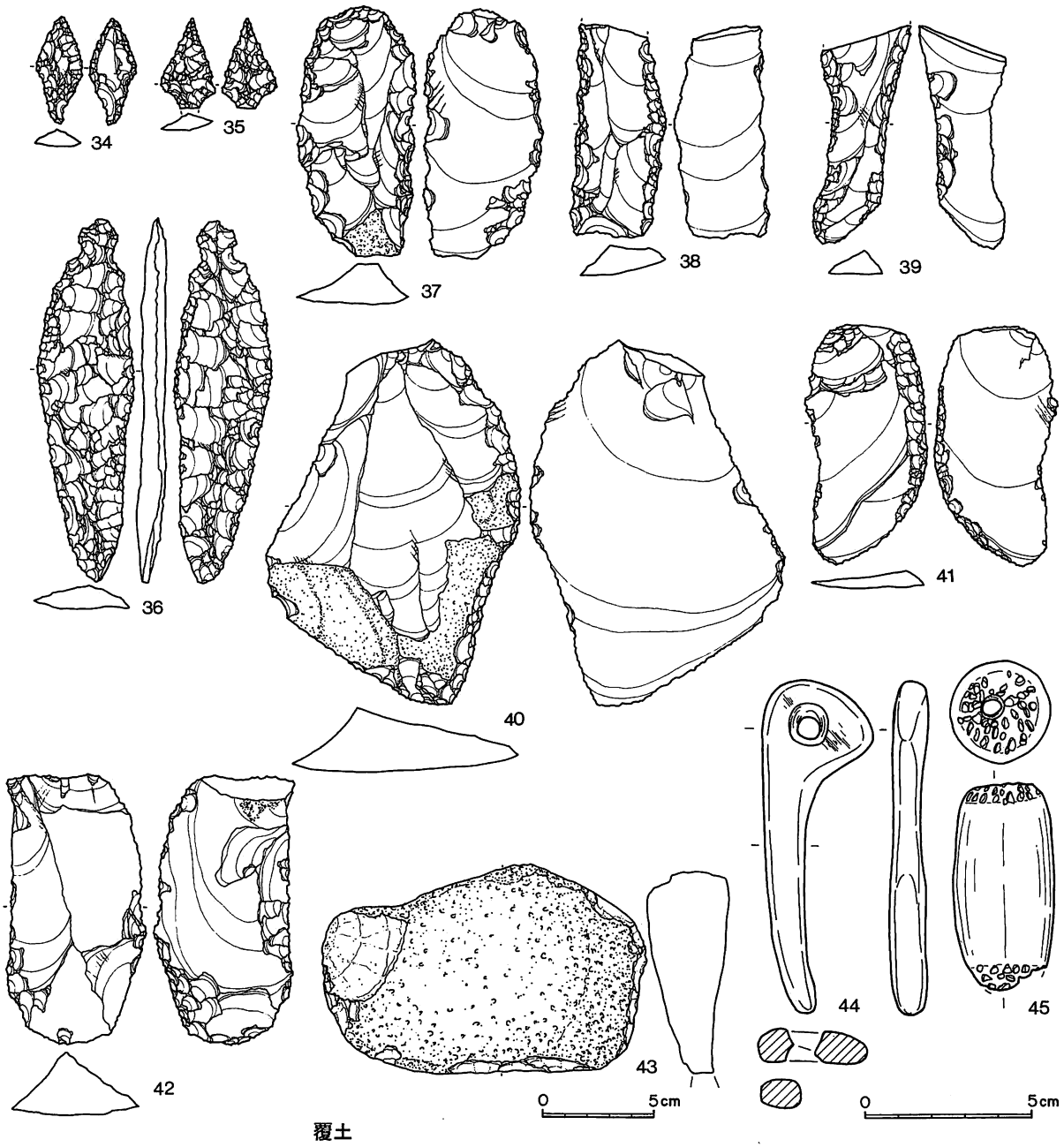
図Ⅲ－6　住居跡(5)・H－1遺物

回転で縄文が施されている。内面は下部縦方向，上部が横方向に丁寧に調整されている。

5～14は床面，15～24は覆土出土の土器で，Ⅲ群A_3類とみられる。　Ⅲ群A_3類

5～7，9は口縁部，8は口縁に近い部分の砕片で，横走沈線文(6)，曲線文(7)などがある。10～14は胴部砕片で，地文は結束，羽状，斜行縄文など各種みられる。

15～24はいずれも口縁部で，23以外は口唇部に縄の圧痕が施されている。17～20，24は弁状の突起部分で，17は沈線，19は沈線に刺突，24は沈線，刺突，粘土紐の貼り付けなどがみられる。



図Ⅲ－7　住居跡(6)・H－1遺物

石　器　25～33は床面出土の石器，土製品である。

25はつまみ付ナイフで，石刃様の縦長剝片を素材にして，背面の両側縁に加工を施したものである。26，27は縦長剝片の一側縁に加工を施したスクレイパー，28，29はUフレイクである。30は全面研磨された撥形の石斧で，敲打調整の痕跡が残っている。刃部は両刃に近く，中央部は潰れている。31は使用痕が明確でないが台石とみられる。25はチャート，

土製品　26～29は頁岩，31は安山岩製である。32はつまみ部の欠損したスタンプ状土製品，33は注口の一部とみられる。

34～45は覆土出土の石器，土製品，石製品である。

34，35は有茎の石鏃で，34は素材面が裏面に残っている。36は両面加工のつまみ付ナイフ，37～39は縦長剝片の両側縁に，40，41は一側縁に浅い加工が施されたスクレイパーである。42は，主剝離面の両側縁にやや不連続な剝離痕がみられる。43は扁平な礫の周囲をわずかに加工しただけのすり石である。44は自然石を利用し，表面をわずかに磨き，穿孔を施した垂飾である。34は珪藻岩，35～42は頁岩，43は安山岩，44は泥岩製である。45は筒状の土製品で両端に刺突が施されている。　石　器　土製品

時期　縄文時代中期中葉，Ⅲ群A_3類土器の時期と考えられる。　中期中葉

Ｈ－２（図Ⅲ－８～10，図版６）

位置　K－22，L－21～23，M－22　　**規模**　4.97×3.53/4.80×3.41/0.46m

平面形　隅丸長方形　　**床面積**　14.40m²

重複　なし

確認・調査　第Ⅰ層を除去した後，第Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みとして確認し，長軸と短軸に各１本ずつ十字にセクションベルトを設定し調査した。　セクションベルト

壁　残存していた高さは北西部で20cm，南東部で10cmである。

床　全体に平坦であるが，中央部がわずかにくぼみ，壁に近い部分が高くなっている。また全体に堅いが，中央部は特に堅い。

溝　溝は幅７～12cm，深さ４cm程度で，北西側の壁際を１条が半周し，その50～70cm内側に壁に並行してもう１条ある。内側の溝はちょうど４本の主柱穴の内側をめぐり，その内側は前述のように床面が堅い。　周　溝

柱穴　床面上検出したピットは13ヵ所，これらのうち，大きさや位置から主柱穴と考えられるのはHP－１～４，９の５ヵ所である。　主柱穴

炉　床面のほぼ中央に80cmの間隔をおいて２ヵ所の埋甕炉がある。埋甕は皿状のピットを掘った後に設置され，さらにその周囲はピットの掘り上げ土を埋め戻している。HF－１は，胴部下半を利用したもので，口縁部は欠損している。HF－２は口縁および底部を欠損した胴部破片を利用し，底には同一個体とみられる土器片を11点敷いている。　埋甕炉

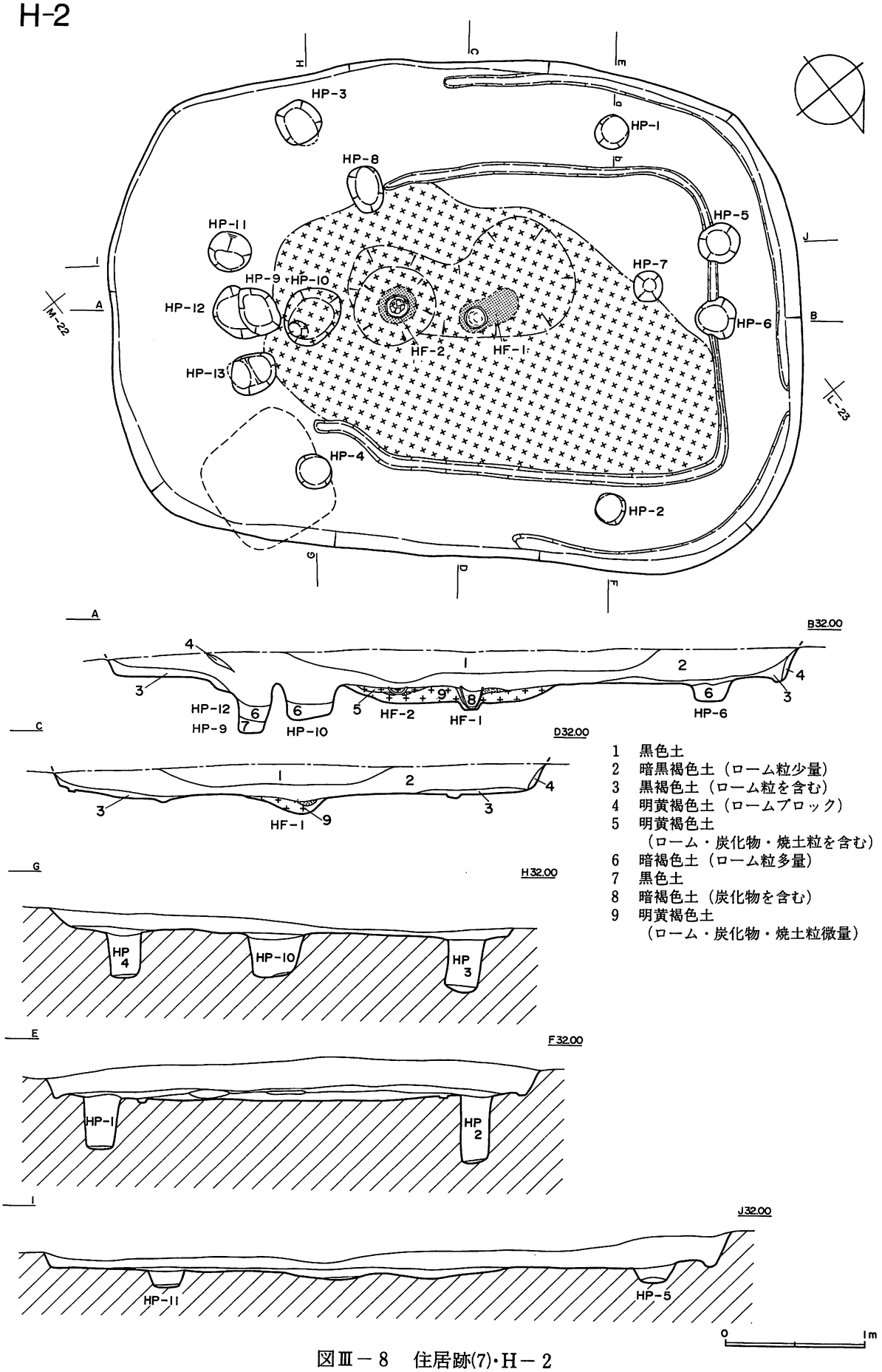
覆土　九層に区分した。１層は第Ⅱ層に対応する黒色腐植土で，２層は，竪穴廃絶直後に堆積したものとみられる。９層は埋甕埋設時の埋め戻しの土で炭化物や焼土粒が混じる。

遺物出土状況　出土遺物総数は243点，その内訳は土器176点，石器など67点である。床面から出土した遺物は土器22点，石器など４点，覆土中から出土した遺物は土器153点，石器など63点で，覆土が圧倒的に多い。しかし，覆土中の遺物は１層と２層に均一に分布している。床面に接した位置で出土したものを便宜的に床面出土と扱ったが，確実に本住居跡に伴うものは埋甕のみである。

遺物　１，２は埋甕，３は覆土中から出土したⅢ群A_3類の土器である。　Ⅲ群A_3類

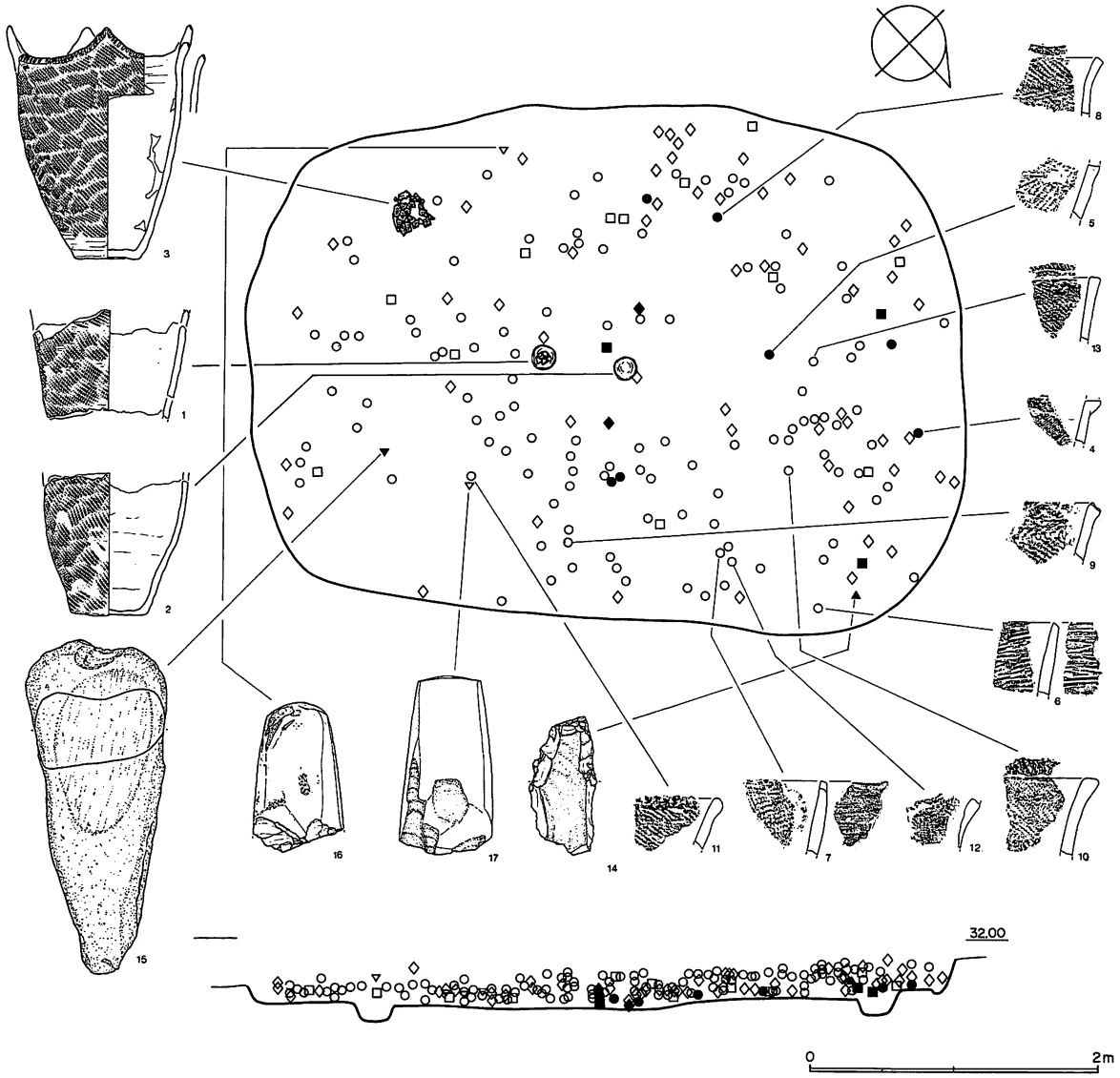
１はHF－２に使用されていたものである。口縁および底部が欠損した胴部破片である。口縁部側の割れ口は摩滅し，内外面ともに下半分が変色し，炭化物が付着している。２はHF－１に使用されていたもので，口縁部が欠損している。内面全体および外面上半部は黒色に変化し，炭化物が付着している。３は山形の４個の突起のうち２つが欠損しているが，その他は欠損部分が少ない。口唇部はヘラ状工具による刻みがみられ，胴部全体には斜行縄文が施されている。Ⅲ群A_3類でも新しい見晴町式段階のものとみられる。　見晴町式

H-2



1 黒色土
2 暗黒褐色土（ローム粒少量）
3 黒褐色土（ローム粒を含む）
4 明黄褐色土（ロームブロック）
5 明黄褐色土
（ローム・炭化物・焼土粒を含む）
6 暗褐色土（ローム粒多量）
7 黒色土
8 暗褐色土（炭化物を含む）
9 明黄褐色土
（ローム・炭化物・焼土粒微量）

図Ⅲ－8　住居跡(7)・H－2

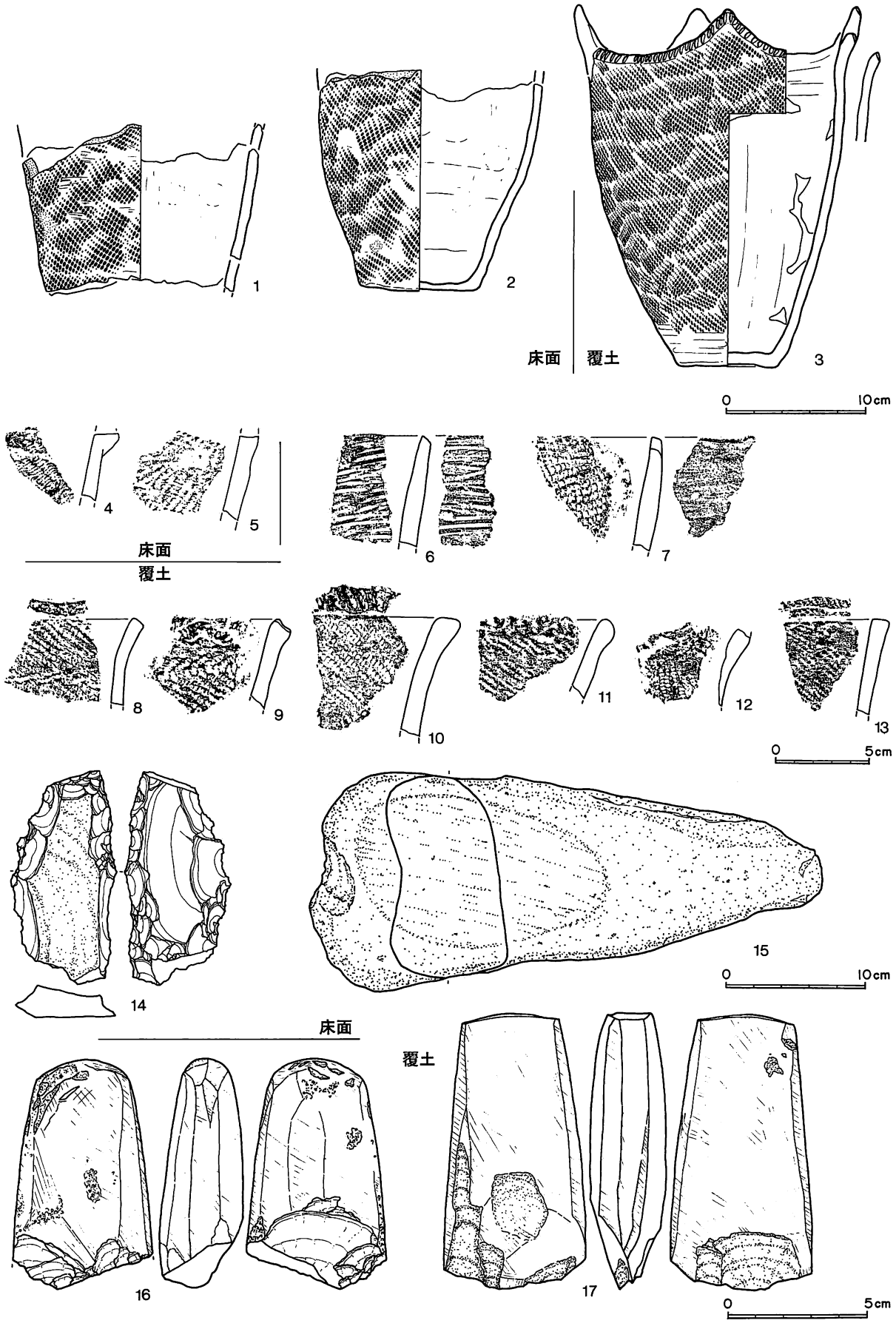


図Ⅲ－9　住居跡(8)・H－2

4，5は床面出土のⅢ群A_3類，6，7は覆土出土のⅠ群A類，8～13は覆土出土のⅢ群A_3類土器である。6は内外面ともに条痕，7は外面が連続押引，内面が条痕で調整されている貝殻文土器である。8～11，13はいずれも口縁部であるが，3同様文様は施されていない。　貝殻文

14，15は床面出土，16，17は覆土出土の石器である。14は背面に原石面の残る粗い加工のスクレイパー，15は部分的に滑沢面のある台石・石皿である。16，17はともに全面研磨の石斧で，16は刃部が欠損している。14は玄武岩，15は安山岩，16，17は緑色泥岩製である。　石器

時期　住居跡に確実に伴うのは埋甕のみであるが，覆土から出土した復元土器などからみて，縄文時代中期中葉，Ⅲ群A_3類土器の中でも新しい見晴町式段階の時期と考えられる。　中期中葉



図Ⅲ－10　住居跡(9)・H－2遺物

H－3（図Ⅲ－11～30，図版7～9）

位置　I－20～21，J－20～21，K－19～21　**規模**　12.77×6.97/11.60×6.67/0.57m

平面図　楕円形　**床面積**　51.68m²

重複　覆土中に本住居跡より新しい時期の続縄文時代の生活面があり，F－1とP－14が作られている。P－14は本住居跡の床面中央部を一部切っている。また，南東部は大型の風倒木痕で破壊されていた。　続縄文生活面

確認・調査　第Ⅰ層を除去した後，第Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みとして確認し，長軸と短軸に各1本ずつ十字にセクションベルトを設定して調査した。南東部は大型の風倒木痕があり，壁の状況がわからなかったが，周囲の状況から推定した。　セクションベルト

壁　残存している高さは北西部で50cm，南東部で12cm，傾斜は60～80°である。

床　全体に平坦で，中央部と南東部に特に堅い部分がある。

溝　幅10～15cm，深さ3～5cmの溝が，部分的に切れるが，2条めぐっている。　周溝

柱穴　床面上で検出したピットは19ヵ所，深さをみるとHP－2～10が60cm以上，HP－15が50cmで，他は15cm以下である。また，分布状況をみるとHP－2と10，3と9，4と7，5と6が対になって長軸方向に並列している。以上の点からHP－2～10，15が主柱穴と考えられる。ただし，HP－9の上面がローム層で覆われていた点や，HP－15がHF－5を切っている点などから，建替えの可能性がある。　主柱穴　建替

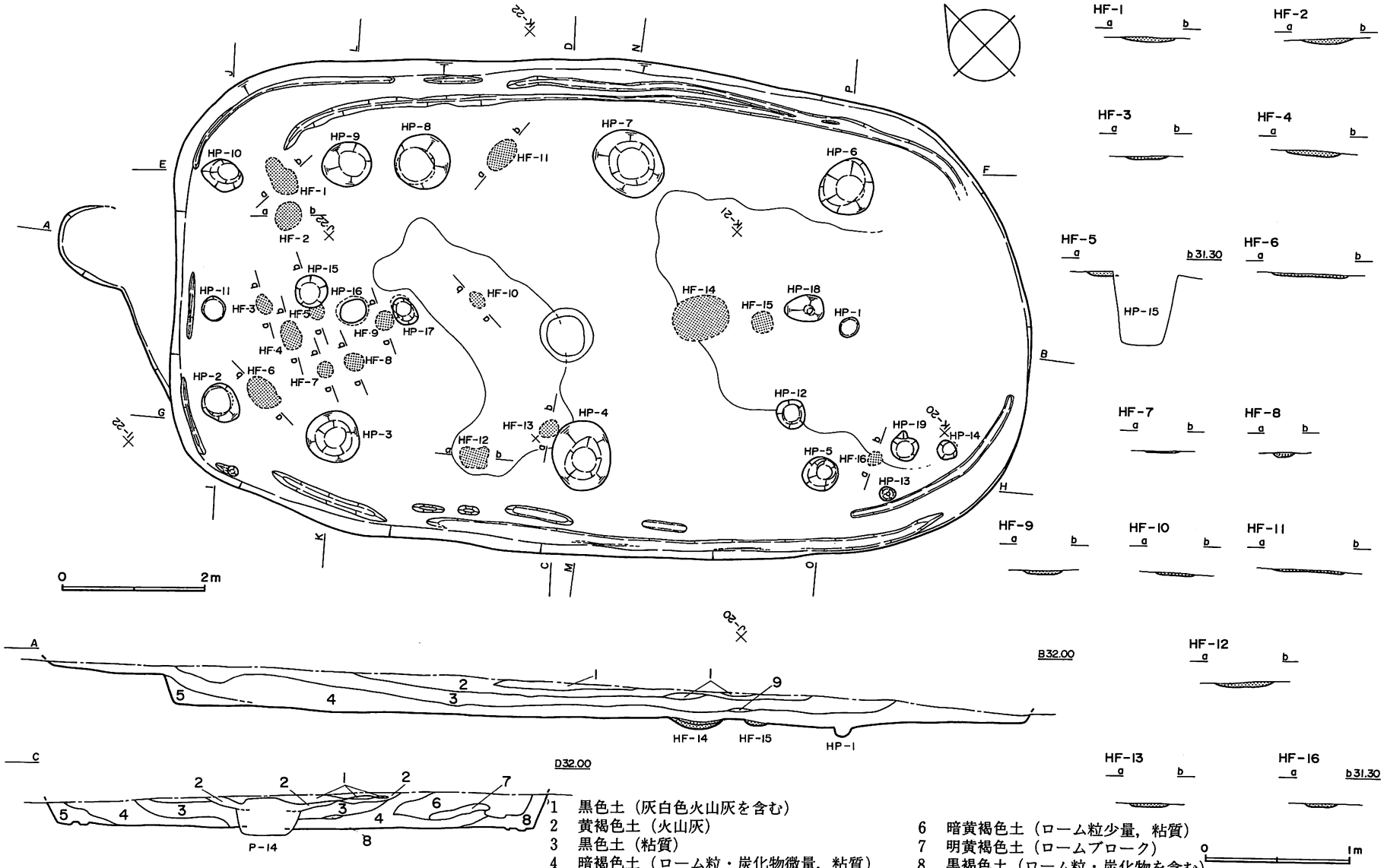
炉　床面で16ヵ所の地床炉を検出した。北西側に集中し，小規模なものが多い。　地床炉

覆土　1，2層は，灰白色，黄褐色などの完新世の火山灰を含んだ層で，その下の3層は第Ⅱ層の黒色腐植土である。4層は竪穴全体を覆い，遺物が最も多く出土した層である。

遺物出土状況　出土遺物総数は4,367点，その内訳は土器3,588点，石器など777点，土製品6点である。それらのうち床面から出土しているのは土器435点，石器など80点のみで，他はすべて覆土中からである。覆土中の遺物は大部分が竪穴全体を覆っている4層から出土し，床面として取り上げたものと多数接合している。また，それらの出土状況みると，4層の上位から中位にかけていくつかのブロックで出土し(図Ⅲ－14)，さらに床面近くでは，大型の柱穴周辺に集中し，中には柱穴内に落ち込んだ状態で確認されたものもある。従って，これらの遺物は，本住居跡に直接伴うものではなく，竪穴廃絶直後に，投棄されたものと考えられる。床面，覆土合わせて，43個体の土器が復元できた。

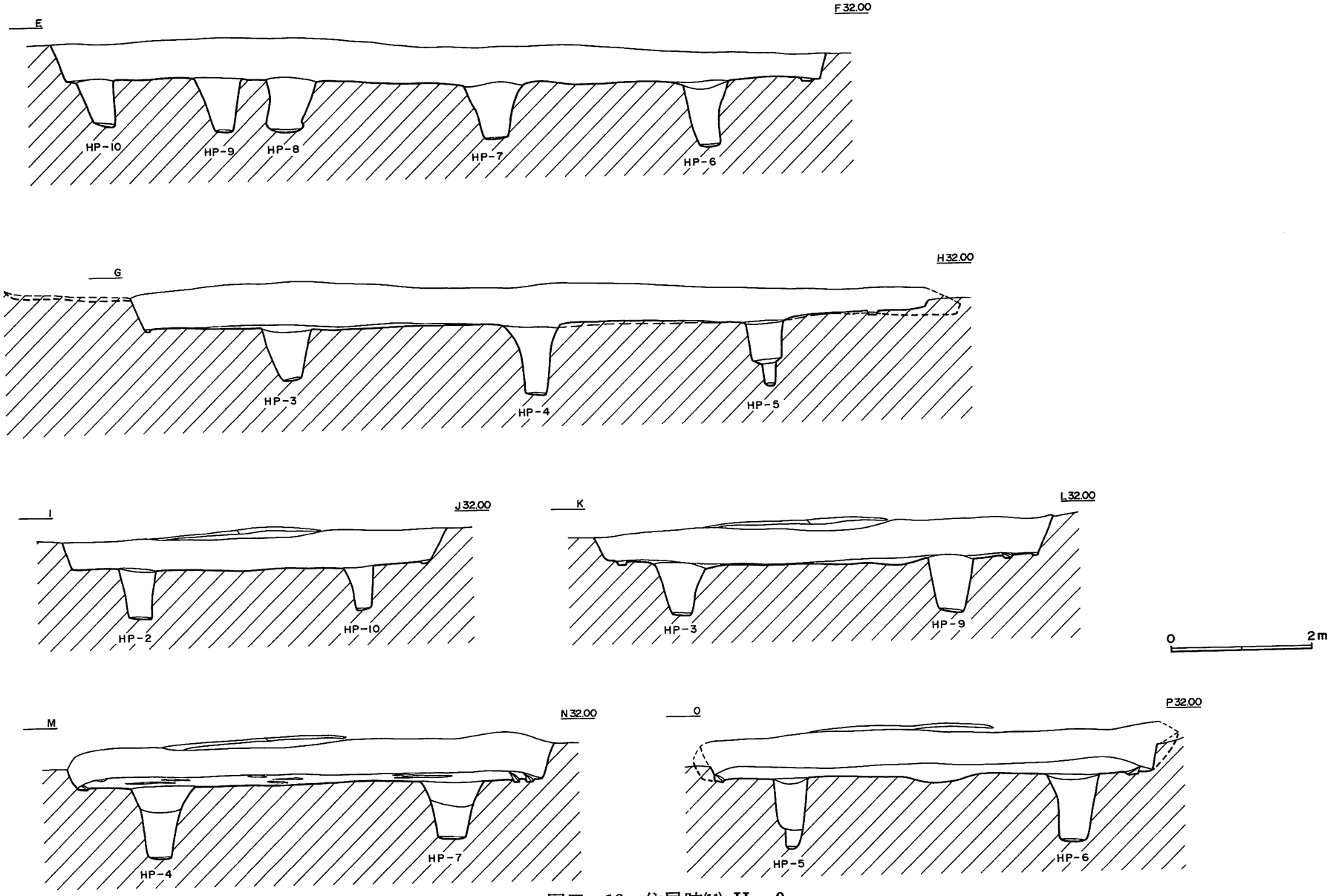
遺物　1～20は床面，21～43は覆土として取り上げた土器で，すべてⅢ群A_3類である。1は．2個対になった山形とM字形の突起のある土器で，胴部の地文は結束第1種の羽状縄文で，文様は，2本単位の弧線文が3段ないし4段施されている。また，突起部分には筒状と三角形の貼り付けがあり，いずれも内面に貫通している。2～13は結束第2種の原体による斜行または羽状の縄文が施された土器で，2～6は沈線による文様がみられる。2，3，6は2本単位の弧線文が3段ないし5段みられ，いずれも口唇に縄による圧痕がみられる。4は突起部分に2種類の耳状の貼り付けがあり，横走沈線が9本施されている。5は小型の土器で，3本単位の弧線がみられ，口唇にはヘラ状工具による刻みがある。7～11は文様がみられないが，8，10は突起部に耳状の貼り付けがあり，いずれも口唇には縄の圧痕がみられる。12は胴部下半の破片で，底部はわずかに蓆目の圧痕の痕跡が観察できる。13は浅鉢形の土器で，内面に厚く炭化物が付着している。14，15，17～20は単節，16は複節の縄文が施された土器で，14，15，18～20は沈線による文様が施されている。14　Ⅲ群A_3類　蓆目

H-3

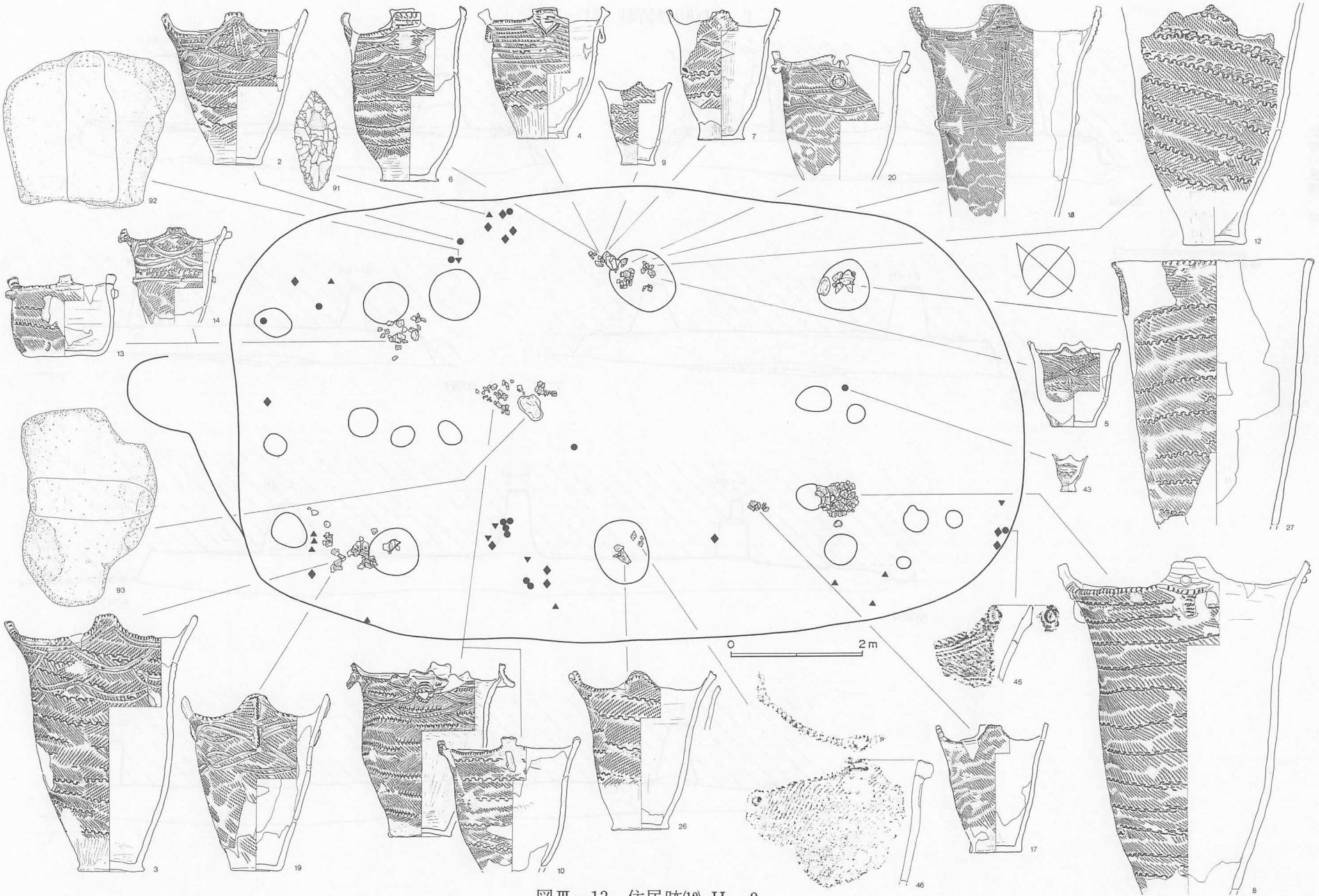


1 黒色土（灰白色火山灰を含む）
2 黄褐色土（火山灰）
3 黒色土（粘質）
4 暗褐色土（ローム粒・炭化物微量，粘質）
5 暗褐色土（ローム粒を含む）
6 暗黄褐色土（ローム粒少量，粘質）
7 明黄褐色土（ロームブロック）
8 黒褐色土（ローム粒・炭化物を含む）
9 暗褐色土

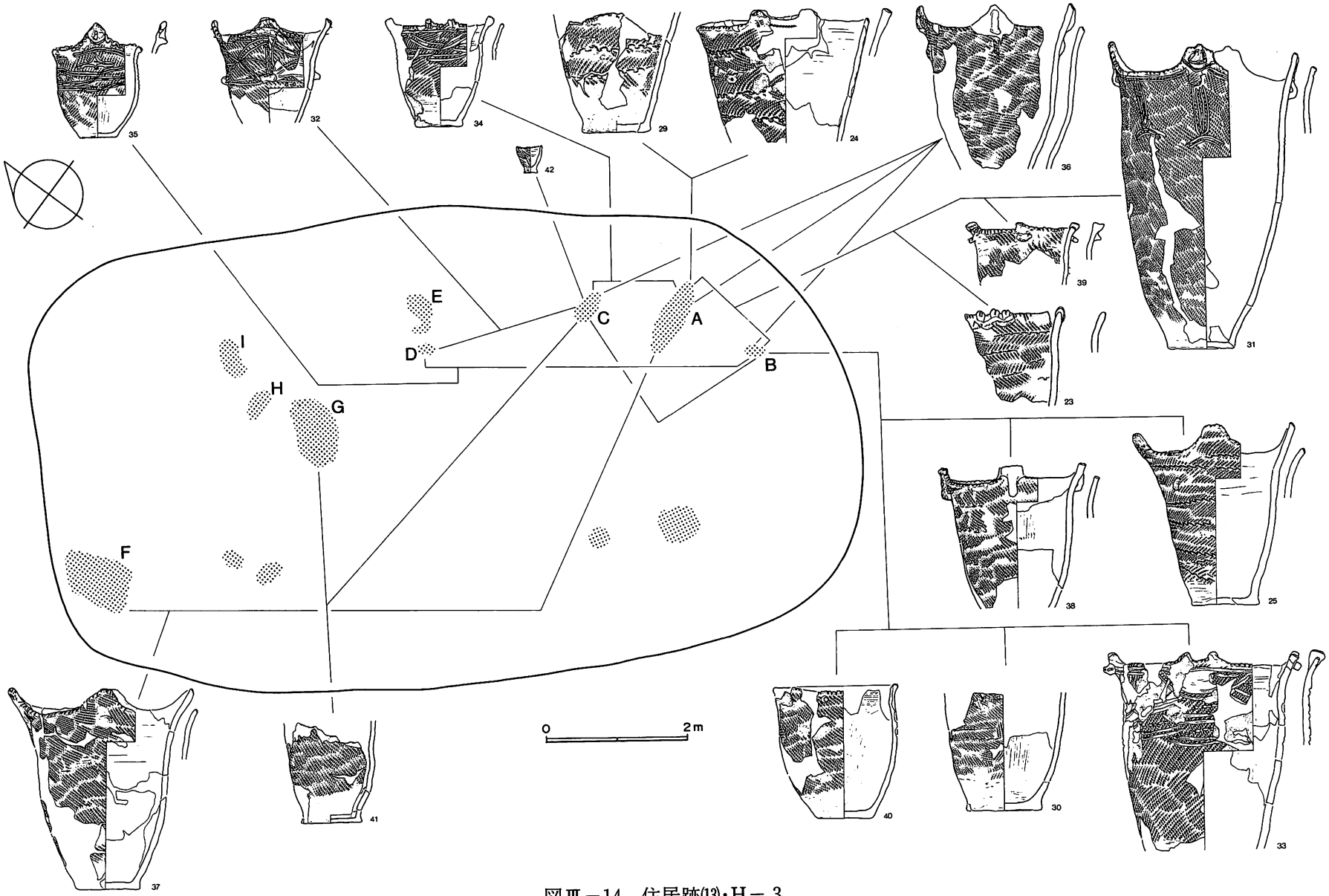
図Ⅲ－11　住居跡(10)・H－3



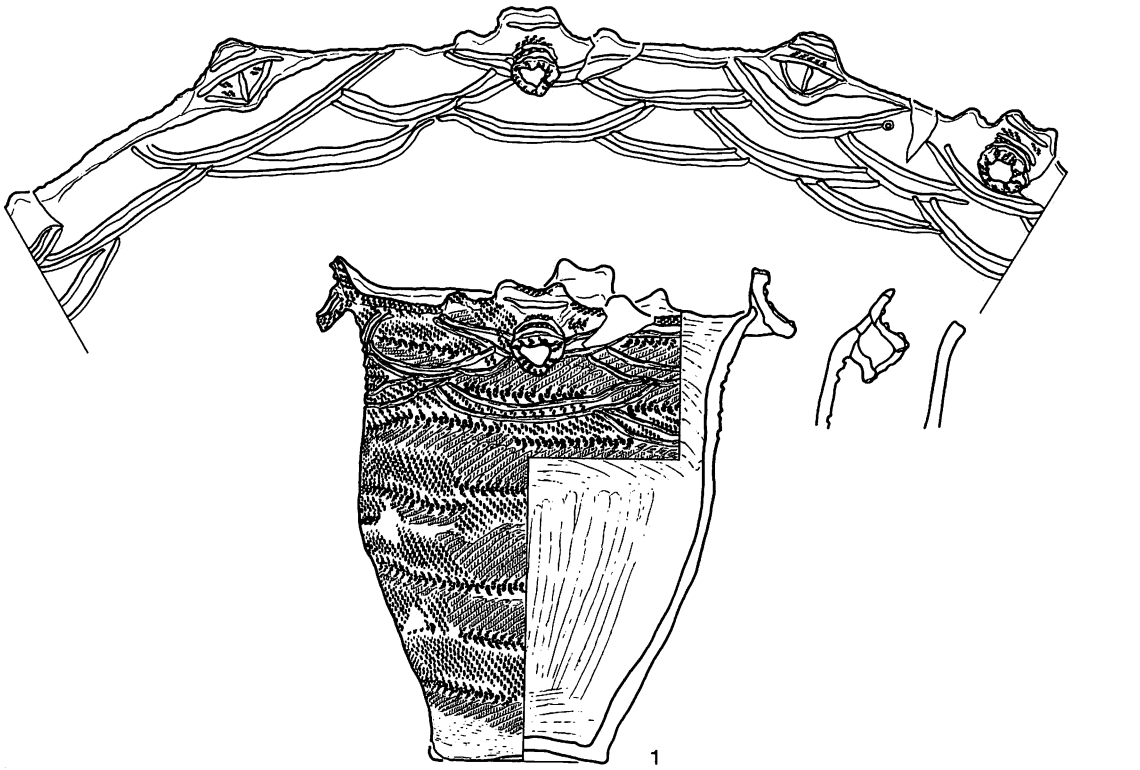
図Ⅲ－12　住居跡(11)・H－3

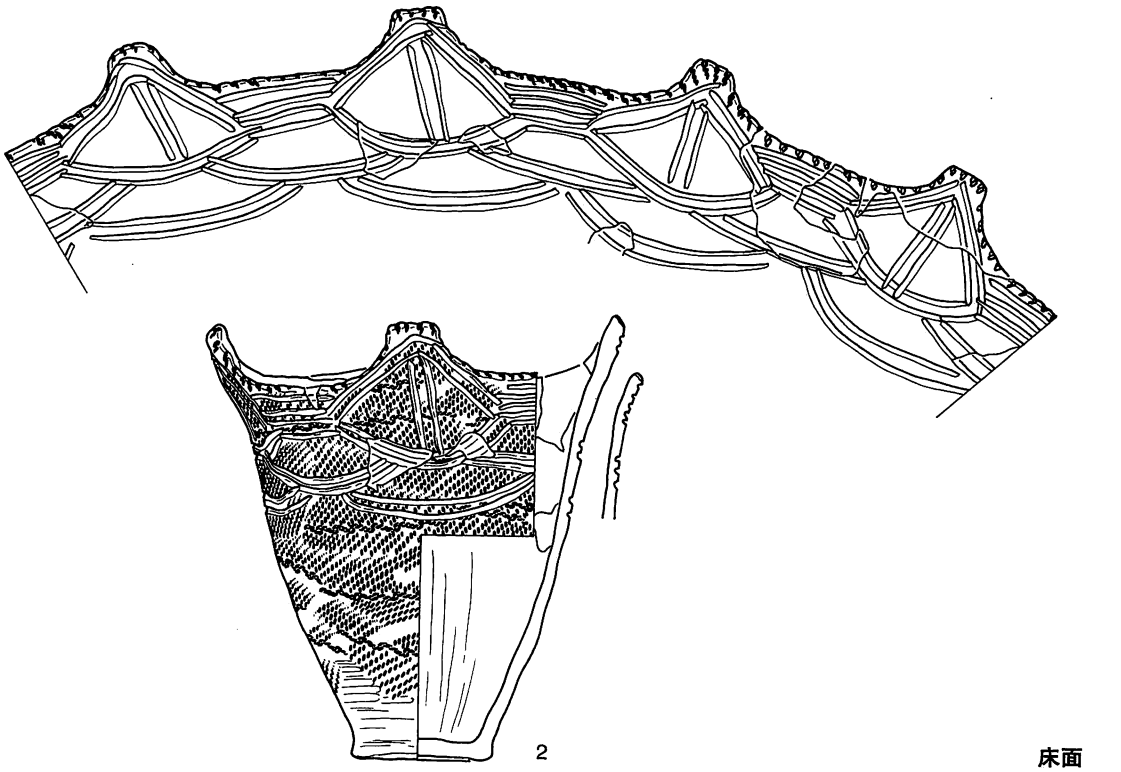


図Ⅲ－13　住居跡⑿・H－３

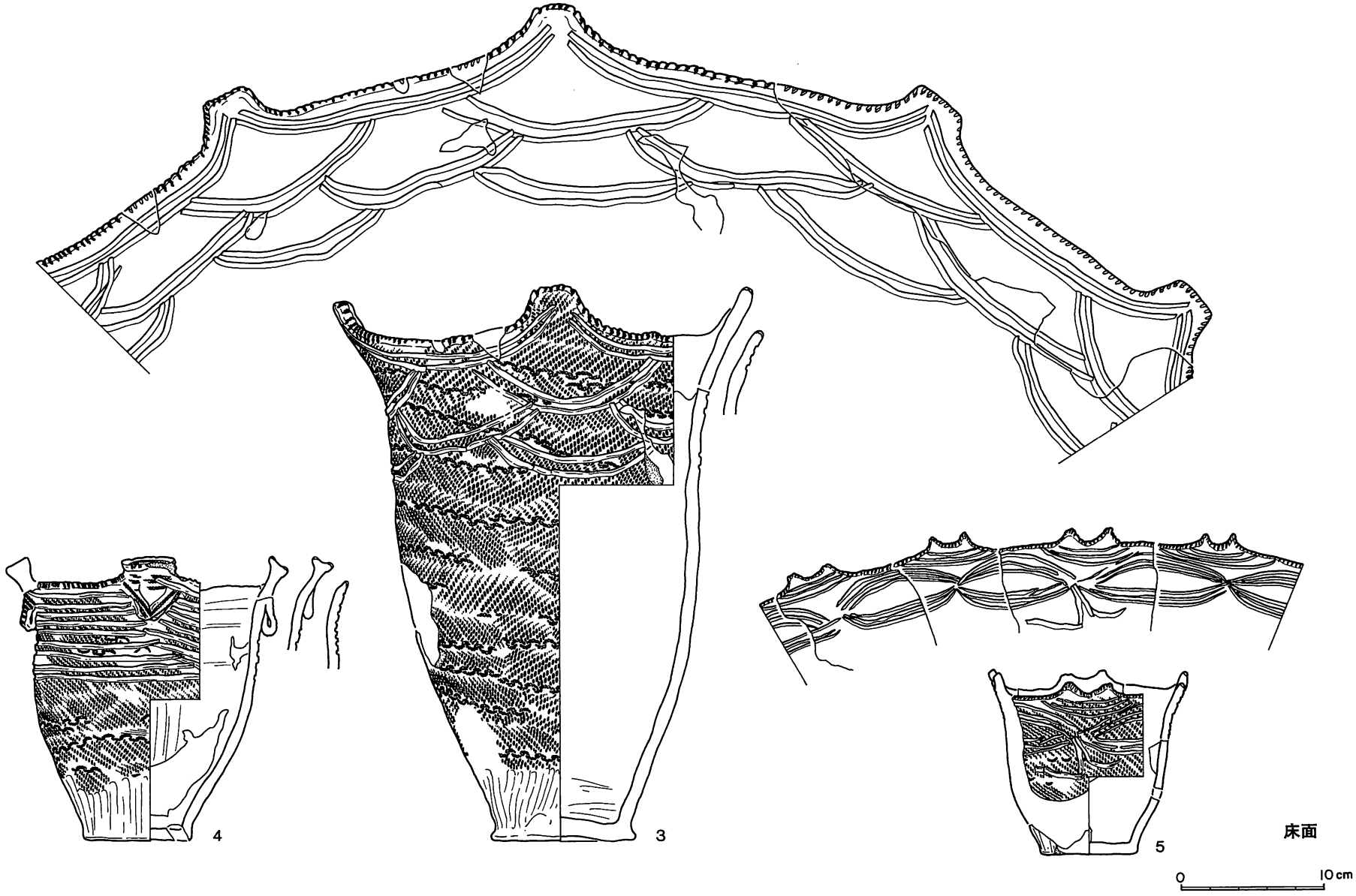


図Ⅲ－14　住居跡(13)・H－3

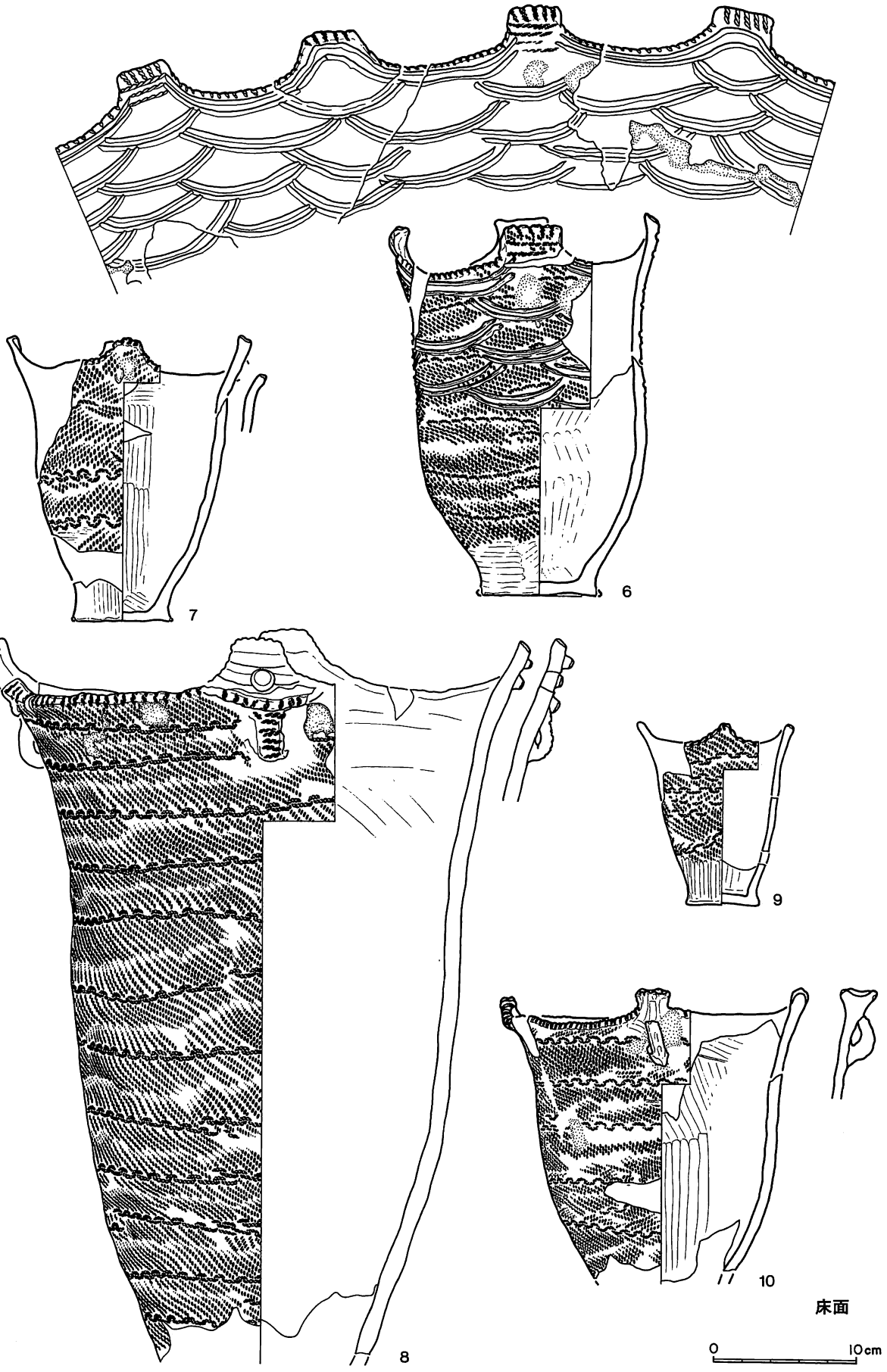




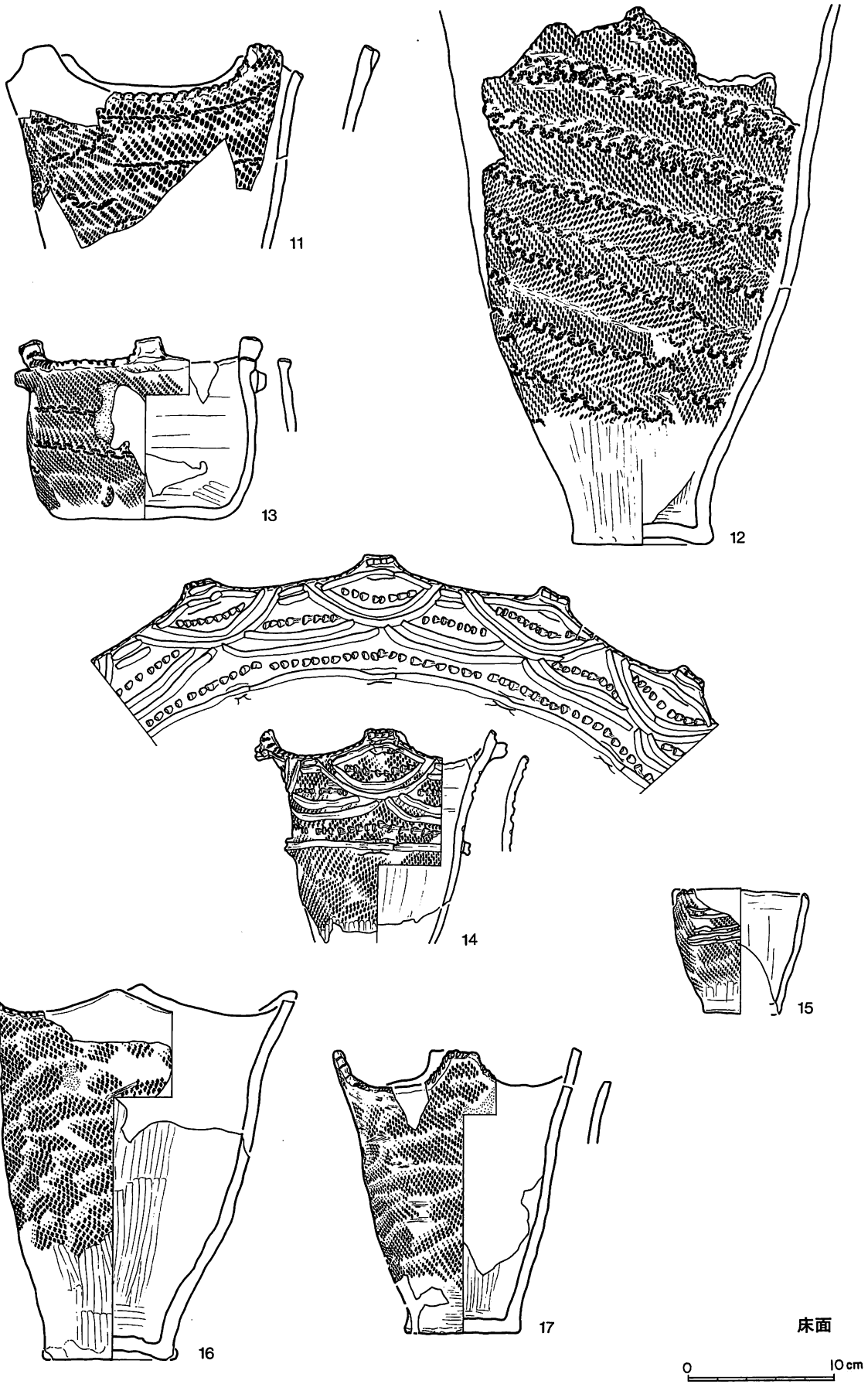
図Ⅲ－15　住居跡⑭・H－3遺物



図Ⅲ－16　住居跡(15)・H－3遺物



図Ⅲ－17　住居跡⑯・H－3遺物



図Ⅲ－18　住居跡(17)・H－3遺物

は，２本単位の弧線文が２段，その下に横走沈線が１本，そしてそれらの空間を刺突文でうめている。18は粘土紐の貼り付けと刺突文の施された大型の弁状突起と２本ないし３本単位の複雑な沈線文がみられる大型の土器で，底部および胴部の1/3程度が欠損している。19，20はともに突起部分に棒状，ボタン状の粘土の貼り付けがみられ，いずれもその上に撚糸の圧痕が施されている。

21～30は結束第２種の原体による羽状ないし斜行の縄文がみられるもので，文様が施されているのは21だけである。21は２本単位の鋸歯状の沈線文の間に縄文原体による円形の押捺がみられる。31は複節，32～41は単節の縄文が施された土器で，31～35には文様がみられる。31は口縁部に２本，突起部分とその中間部に縦に３本ないし４本，そしてその下に山形に２本沈線文を施している。32は突起部分とその下の貼り付け部分を２本ないし３本単位の沈線で区画し，さらに区画内を弧線と放射状の沈線でうめている。33，34は小さな２種類の突起があり，２本単位の沈線による弧線文が５段または３段施された土器で，33はさらに弧線の間に刺突文が施されている。35は突起が一つで，口唇には波状，突起部分とその対角に十字形の粘土紐を貼り付け，横走沈線に近い弧状の沈線文が施されたもの

大木系　で，大木系の土器の影響がみられる。42，43はミニアチュア土器で，43は弧状と鋸歯状の沈線文が施されている。

Ⅰ群A類　44～46は床面，47～90は覆土出土の土器で，47～53はⅠ群Ａ類，44～46，54～90はⅢ群

Ⅲ群A_3類　A_3類である。54～59は粘土紐の貼り付け上に細い撚糸の圧痕がみられるもので，A_3類の中でも沈線を主体とするものより古い可能性がある。本遺跡では復元されたものはないが，

桔梗２　桔梗２遺跡(財北海道埋蔵文化財センター 1988b)では主体を占める土器である。45，71～74は山形の突起部分の内外面に粘土紐の貼り付けがみられ，35の土器と関連が強いものであろう。81～86は各種の突起部，87～90は突起部に付けられた耳状の貼り付け部分である。

石器　91～93は床面，94～137は覆土中から出土した石器である。

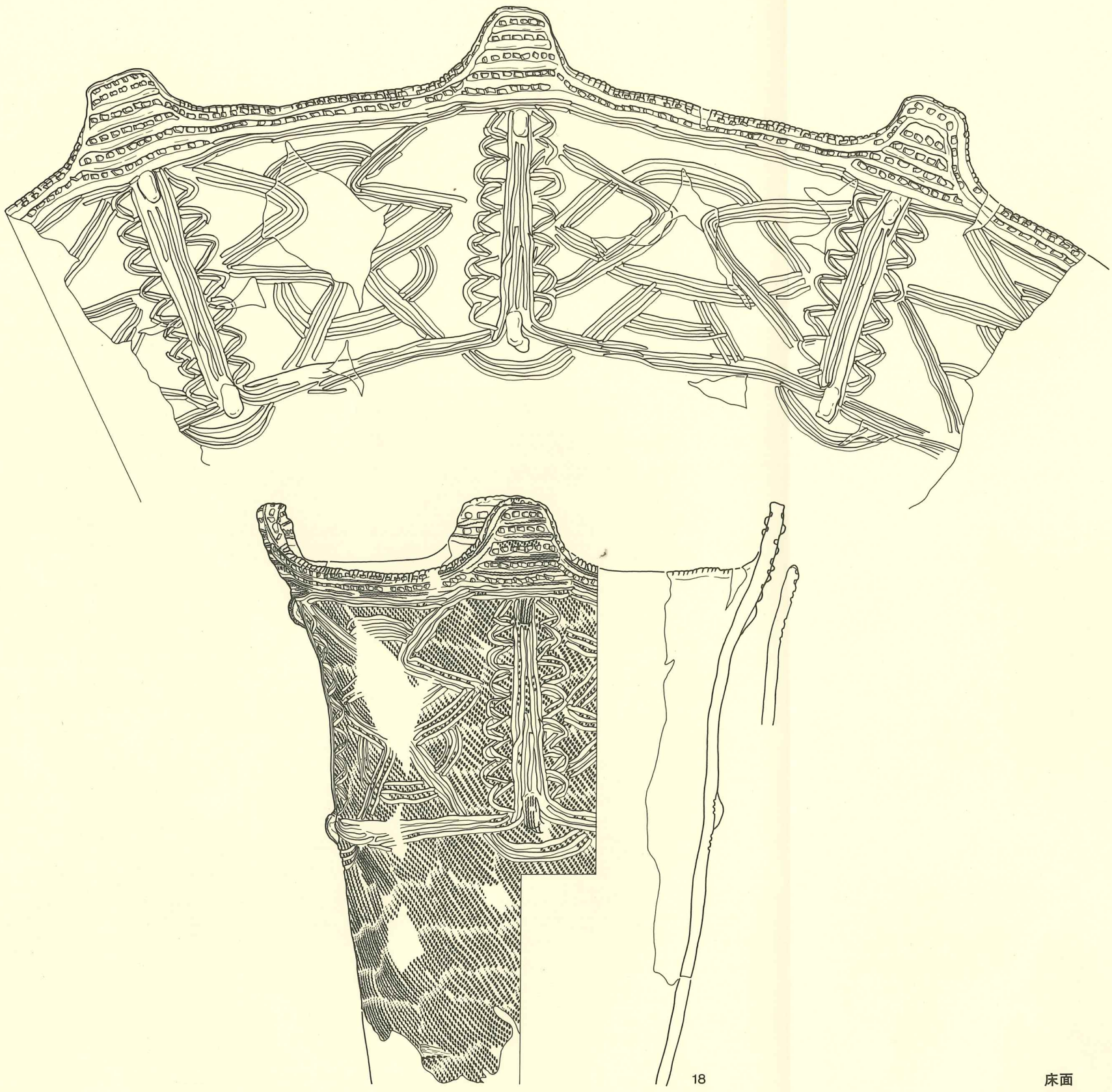
91はやり先・ナイフで自然面と主剝離面が残っている。82，83は大型の台石・石皿で，ともに完形品である。91はめのう質頁岩，92，93は安山岩製である。

94～97は有茎の石鏃，98～102はやり先・ナイフである。102は加工途中で破損したと思われ，Ｈ－１から出土したものと接合した。103～105は両面加工の小型のスクレイパー，106～114は縦長剝片の両側縁または一方の側縁に加工をしたスクレイパーである。いずれも剝離は不連続で粗い。115，116は全面磨製の石斧で，ともに片刃である。117，118は軟質の石材を利用したストーン・リタッチャーで，細い溝状の擦痕がみられる。119～123はたたき石で，119～121にはくぼみがみられる。いずれも周縁に敲打痕が観察される。124～130

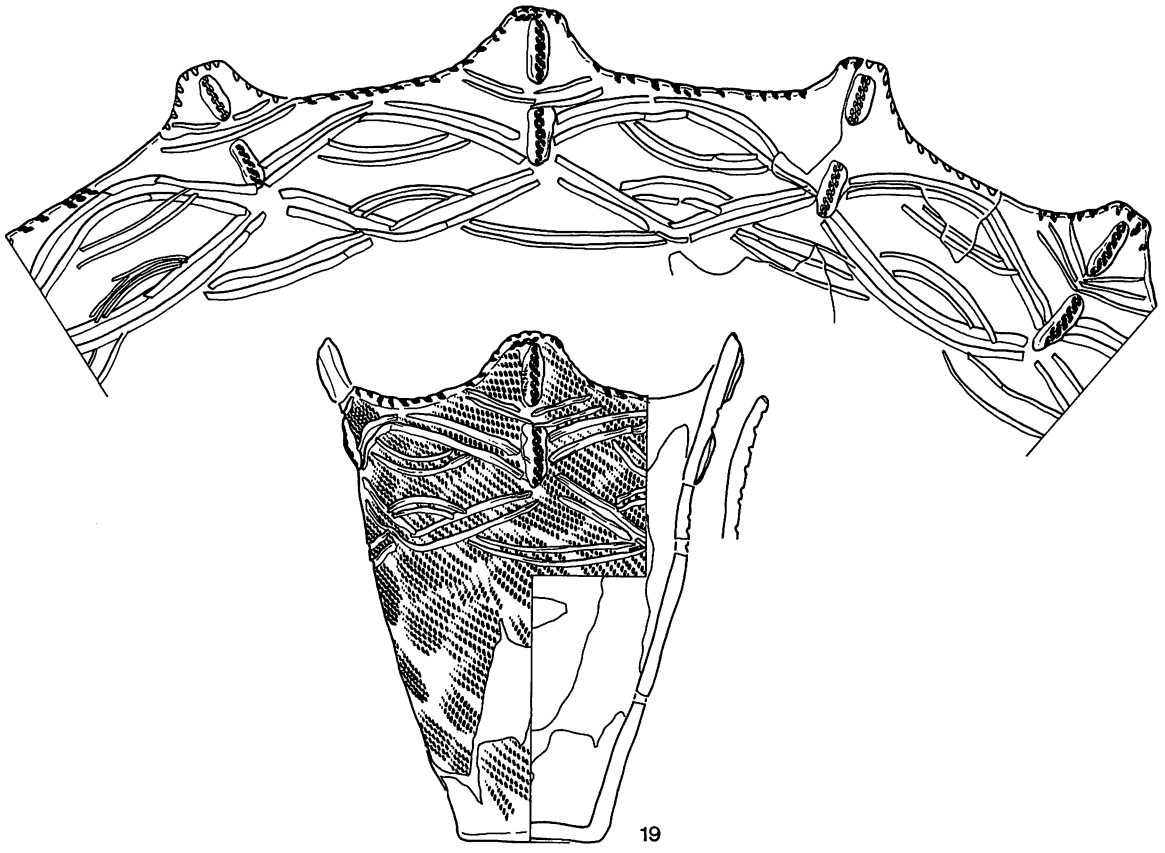
北海道式石冠　はすり石で，130は北海道式石冠である。131，132は長軸の両端に打ち欠きのある石錘，133～137は板状の自然石を素材とした台石・石皿の破片である。91，94，96，98，100～102，105，109，110，112はめのう質頁岩，95，117は珪藻岩，97，99，103，104，106～108，111，114は頁岩，113は黒曜石，115，116は緑色泥岩，118は凝灰岩，121は泥岩，92，93，119，120，122～124は安山岩製である。

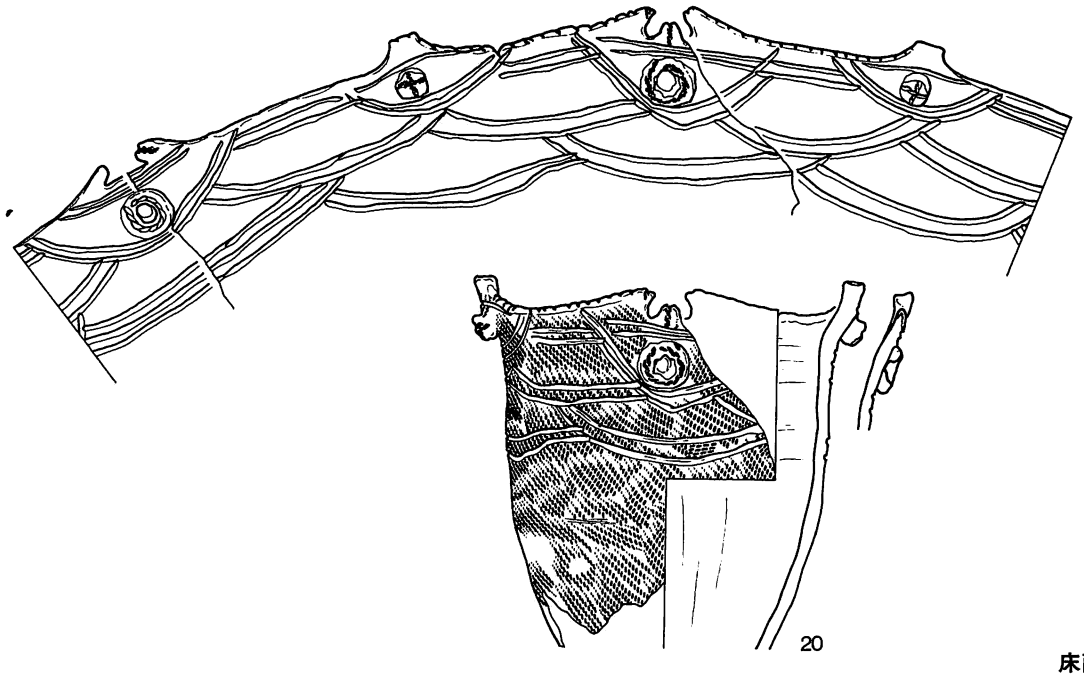
土製品　138，139はミニアチュア土器の一部，140は台の脚部，141はくぼみのある土製品，142は土偶の胴部破片である。

中期中葉　**時期**　縄文時代中期中葉，Ⅲ群A_3類土器の時期と考えられる。

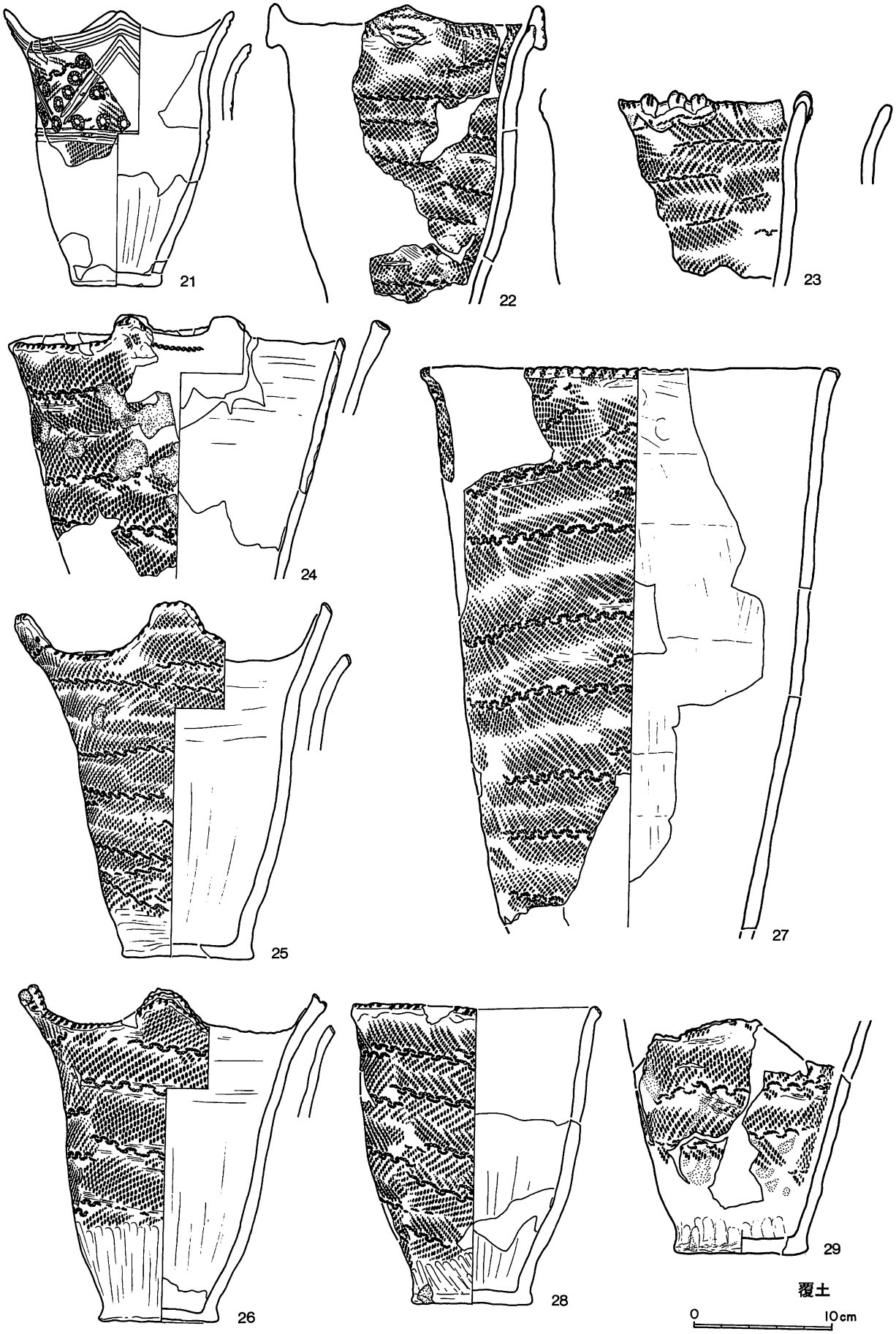


図Ⅲ－19　住居跡(18)・H－3遺物

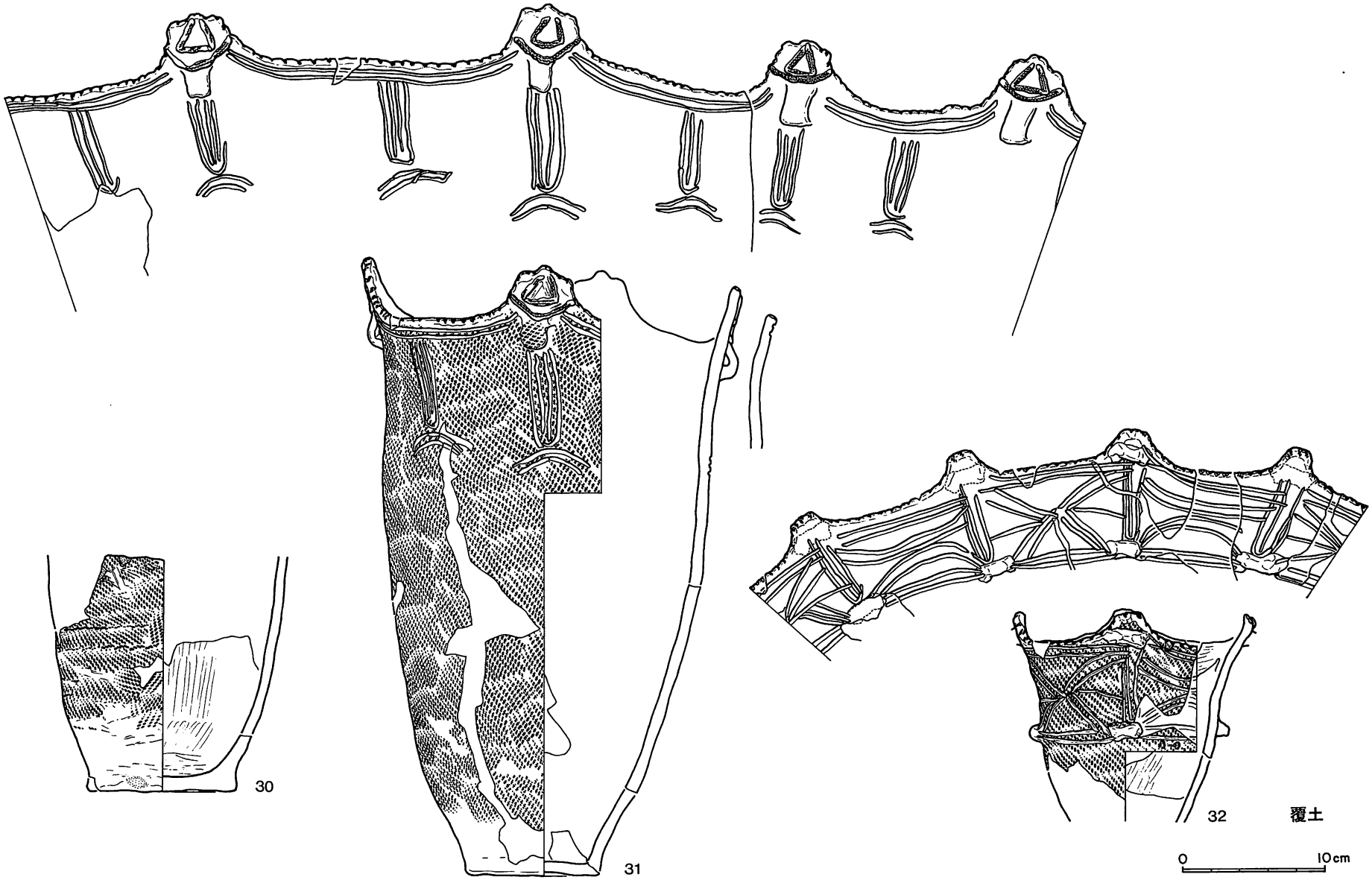




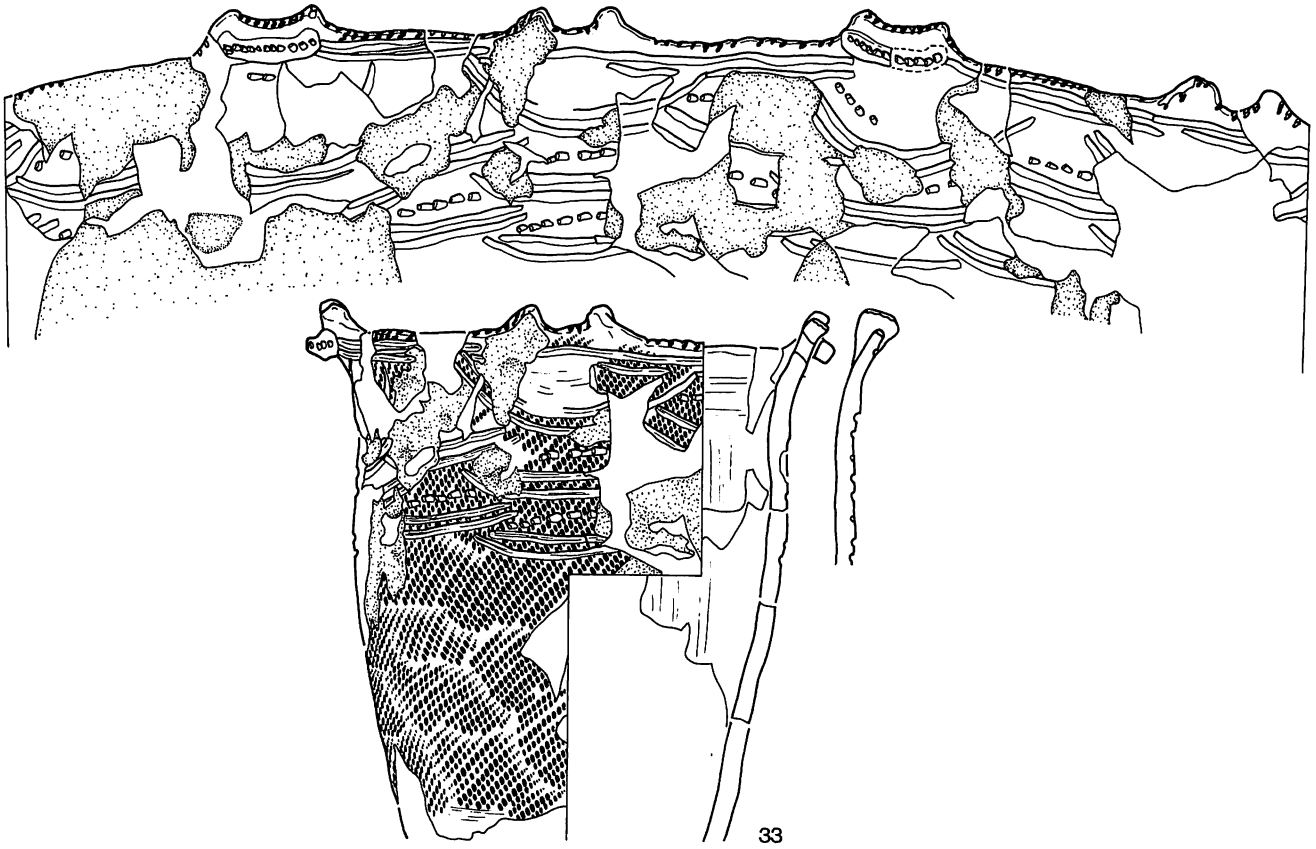
図Ⅲ－20　住居跡(19)・H－3遺物

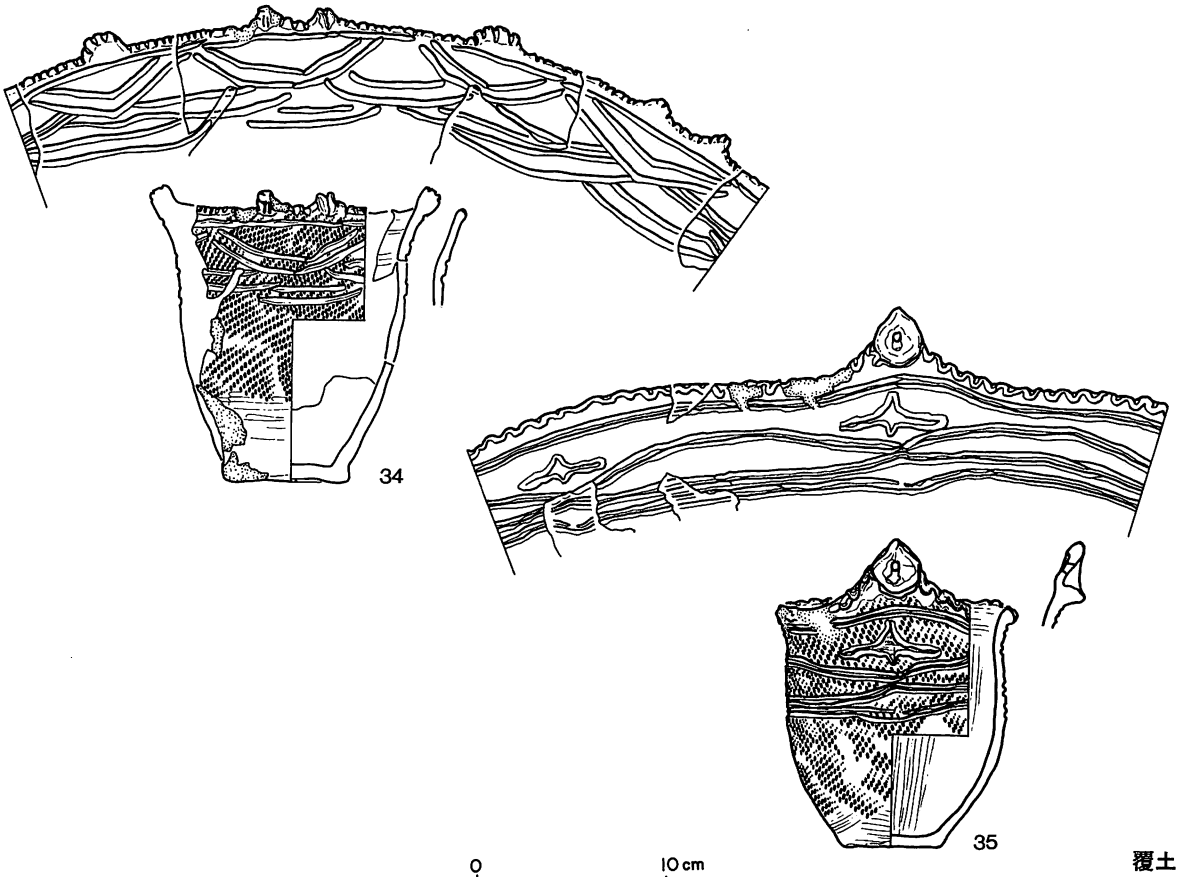


図Ⅲ－21　住居跡⑳・H－３遺物

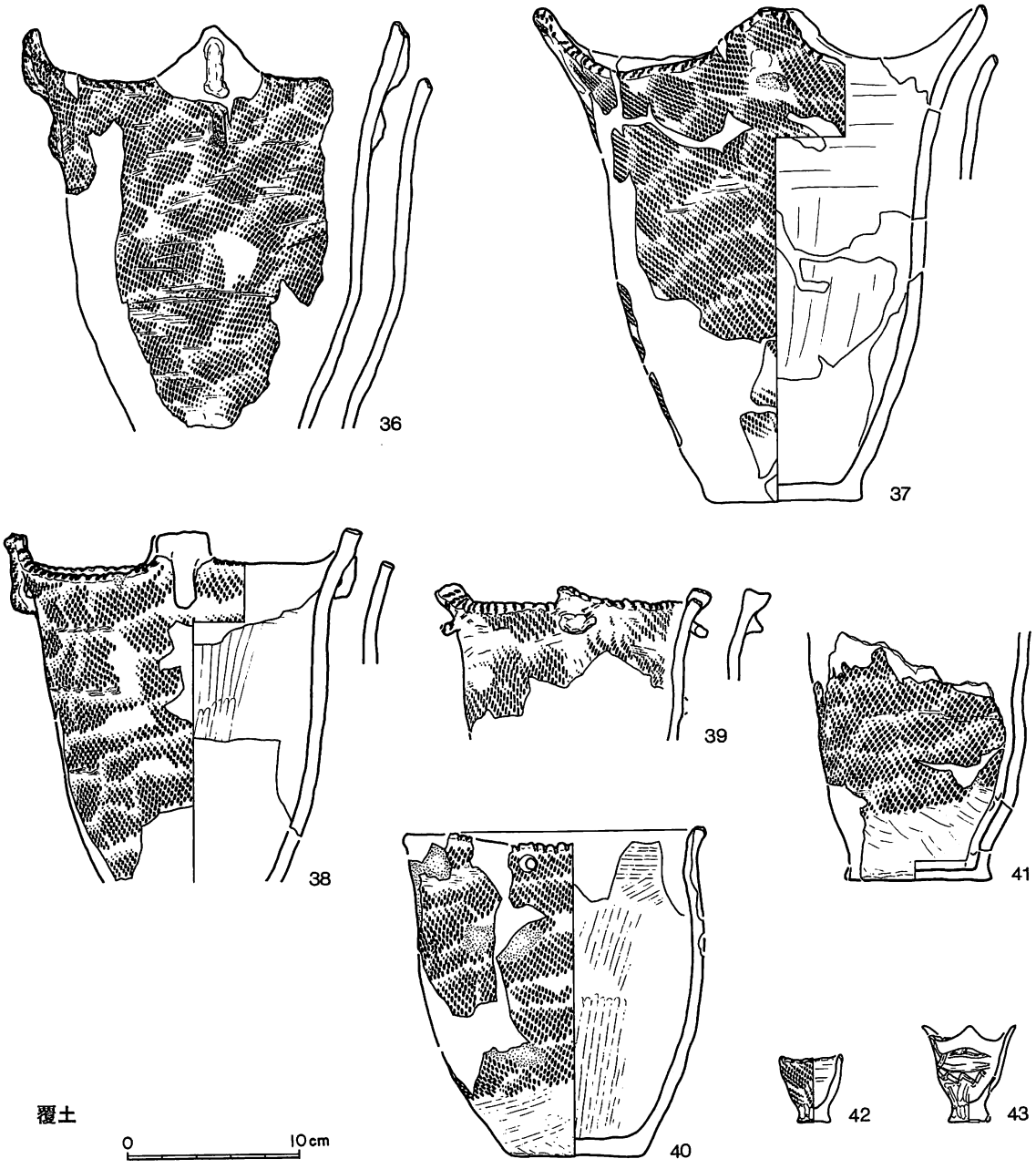


図Ⅲ－22　住居跡(21)・H－3遺物





図Ⅲ－23　住居跡(22)・H－3遺物



図Ⅲ－24　住居跡㉓・H－3遺物

H－4（図Ⅲ－31～36，図版10，11）

位置　M－23・24，N－23・24，O－23・24　　**規模**　8.52×5.37/8.32×5.21/0.50m

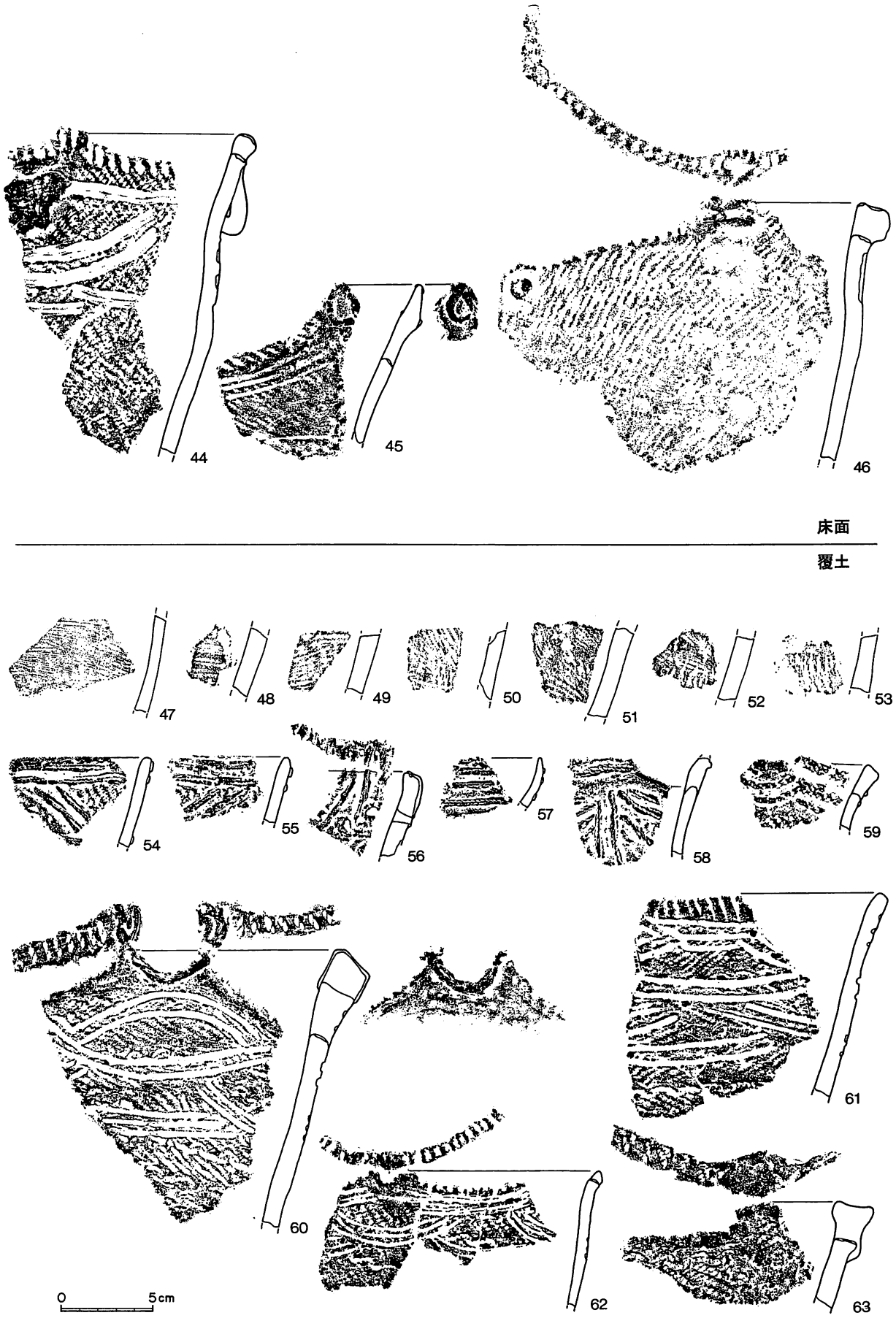
平面図　楕円形　　**床面積**　37.00m²

重複　H－7を切っている。また，竪穴廃絶後のくぼみを利用した縄文時代晩期の生活面があり，F－4が作られている。　晩期生活面

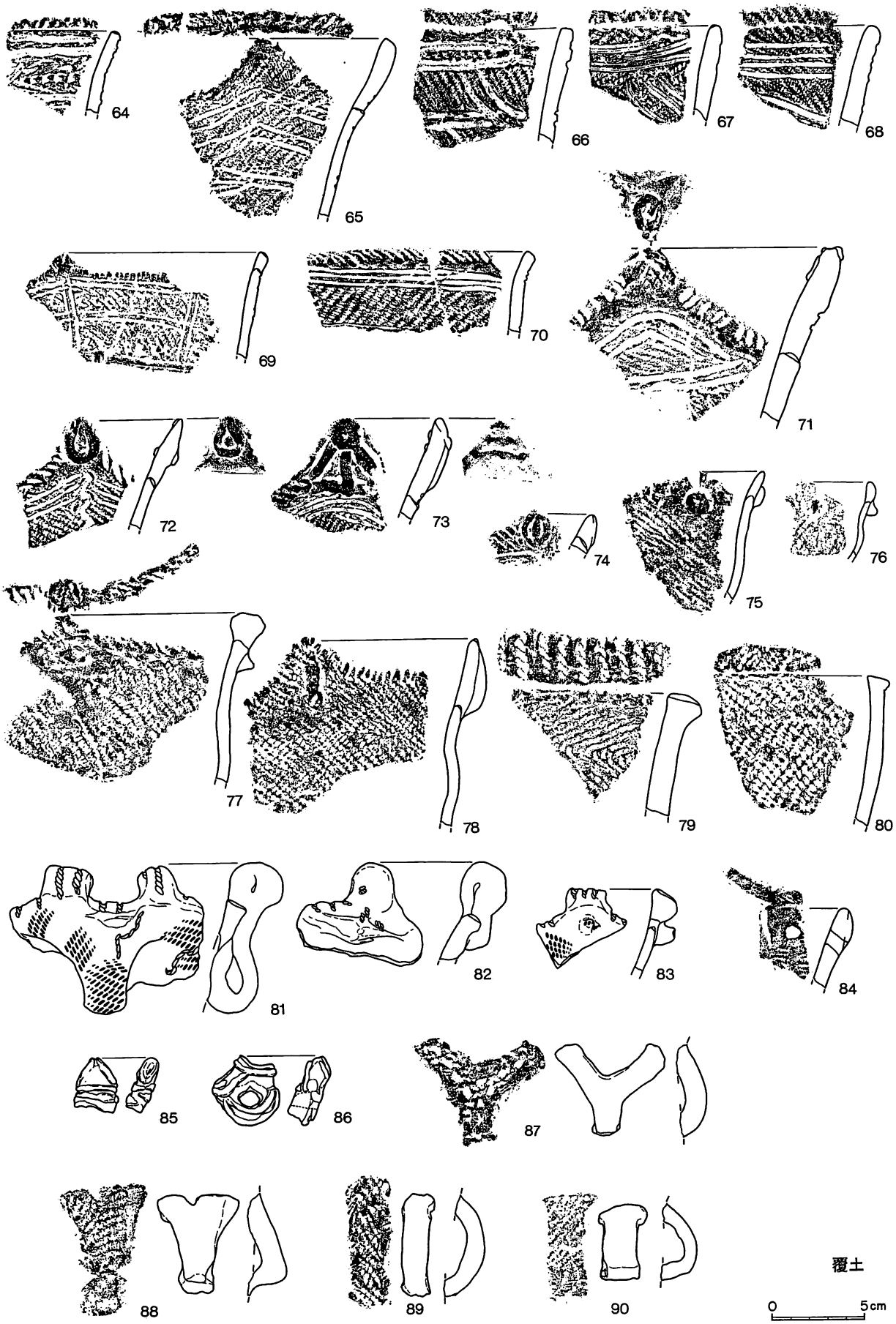
確認・調査　第Ⅰ層を除去した後，第Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。覆土の上位にF－4に伴う石組み，焼け礫，土器などがあり，それらを調査した後に，全体を掘り下げた。

壁　残存している高さは北西部で50cm，南東部で30cm，傾斜は90°に近く急である。

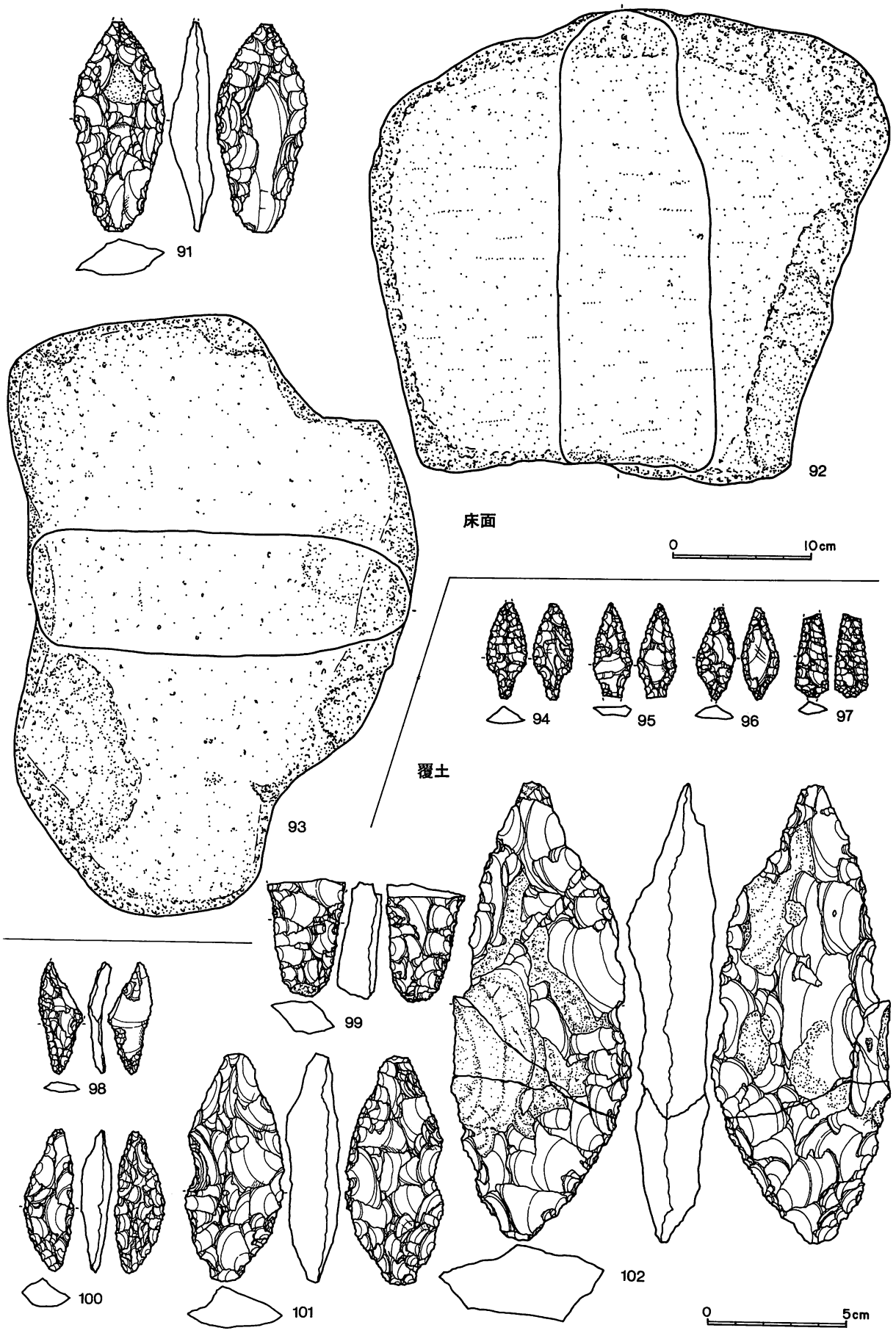
床　全体に平坦であるが，中央部にむかって緩やかに傾斜している。



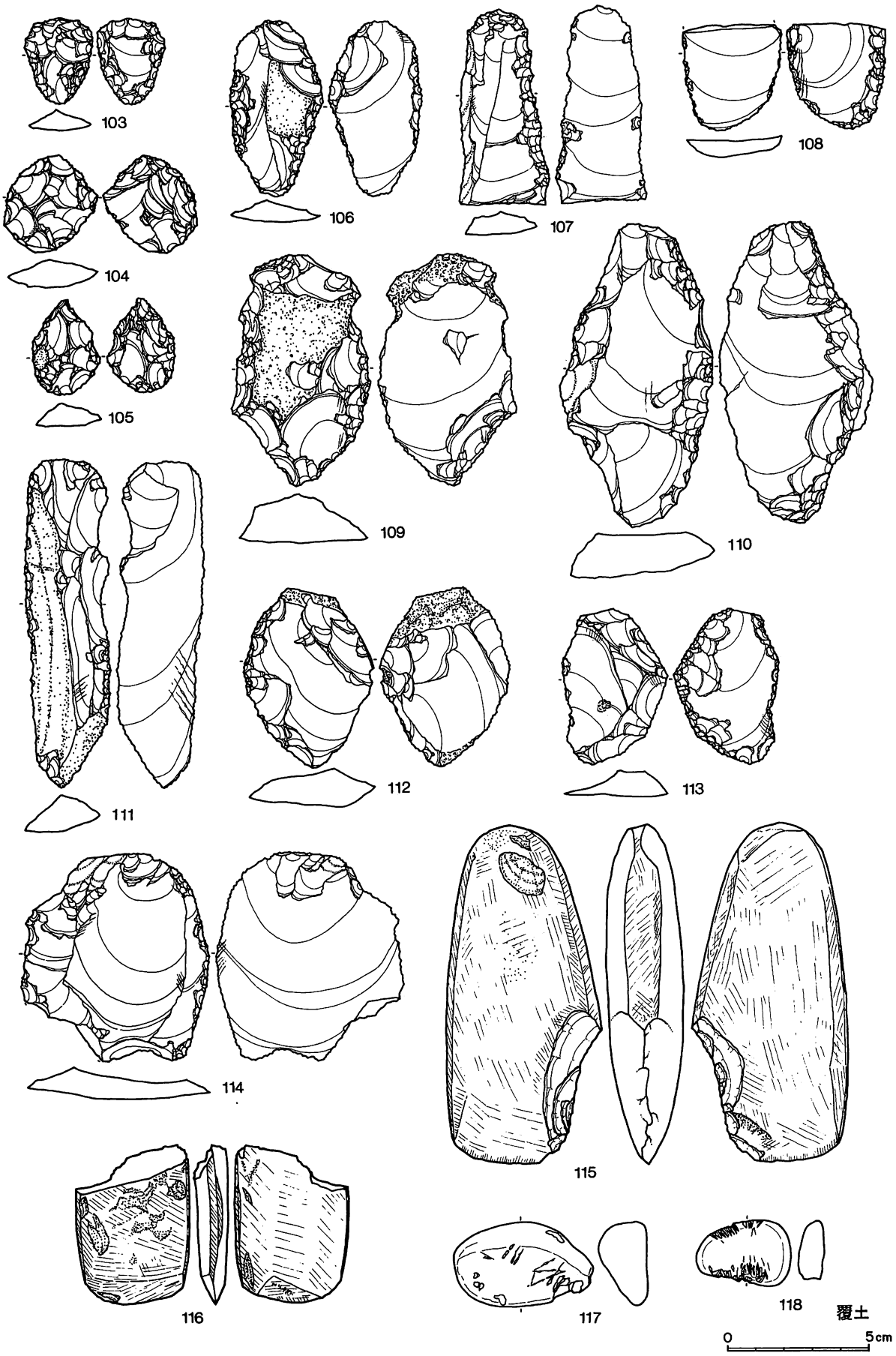
図Ⅲ－25　住居跡(24)・H－3遺物



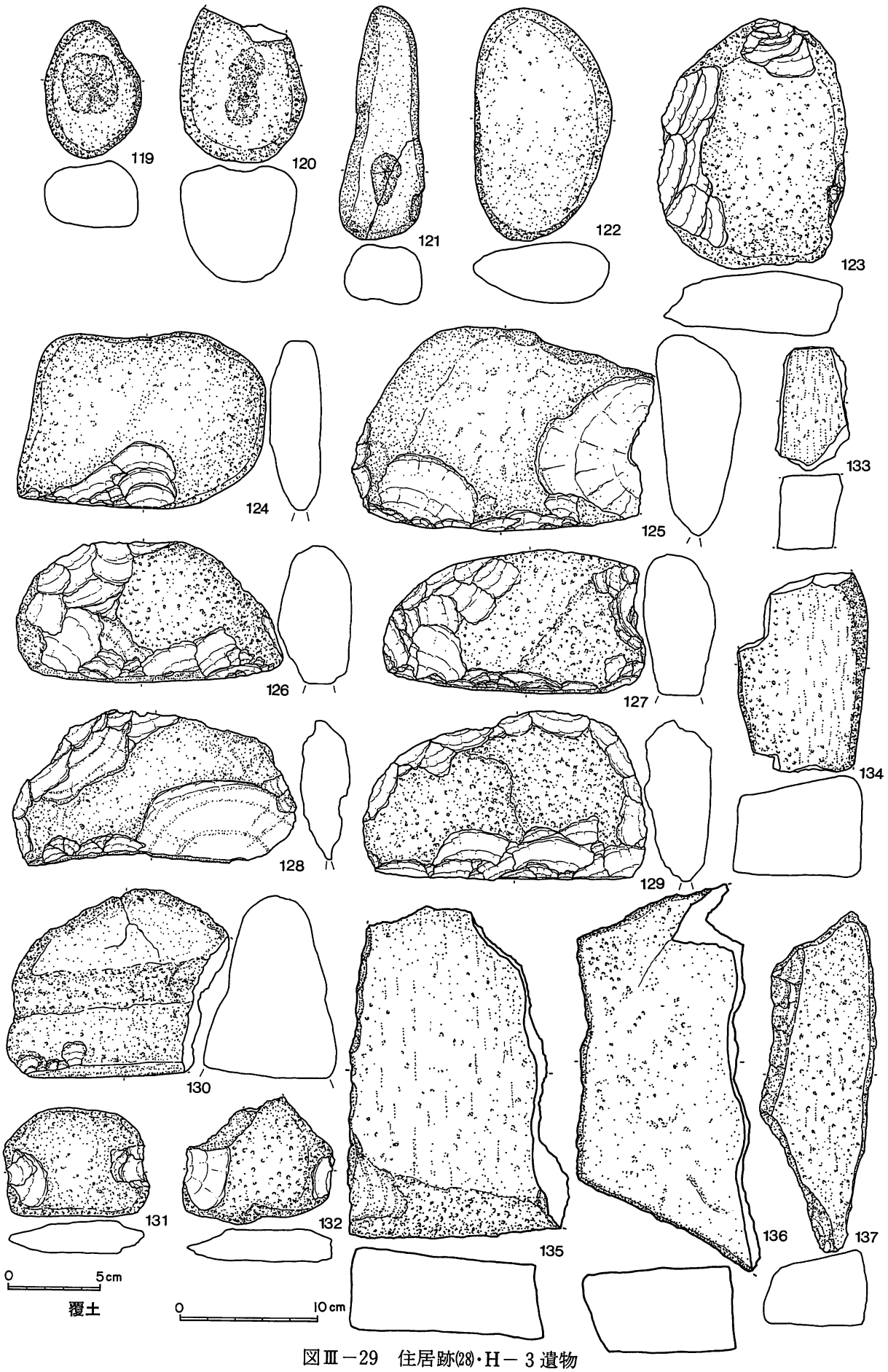
図Ⅲ－26　住居跡(25)・H－3遺物



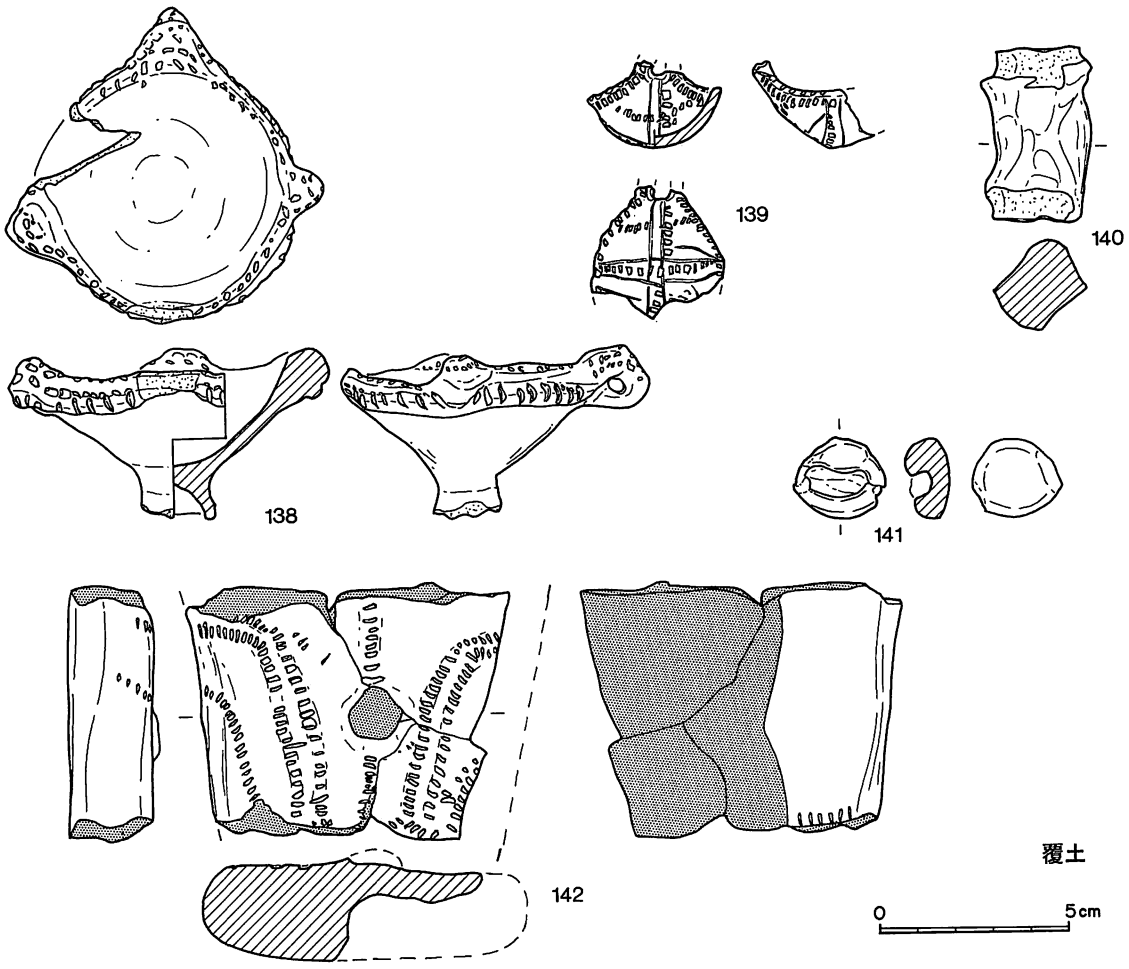
図Ⅲ－27　住居跡(26)・H－3遺物



図Ⅲ－28　住居跡(27)・H－3遺物



図Ⅲ－29　住居跡(28)・H－3遺物



図Ⅲ－30　住居跡(29)・H－3遺物

周　溝

溝　幅6～14cm，深さ4～5 cmの溝が1条，床面を全周する。

主柱穴

柱穴　床面上で検出したピットは17ヵ所，40cmの深さがあるのはHP－1，2，4～6，9の6ヵ所で，HP－1と2，4と5，6と9は長軸方向に並列し，主柱穴と考えられる。

地床炉・埋甕炉

炉　床面中央部やや北東寄りに2ヵ所（HF－2，3），北西部に1ヵ所（HF－1）あり，HF－1，2は地床炉，HF－3は埋甕炉である。

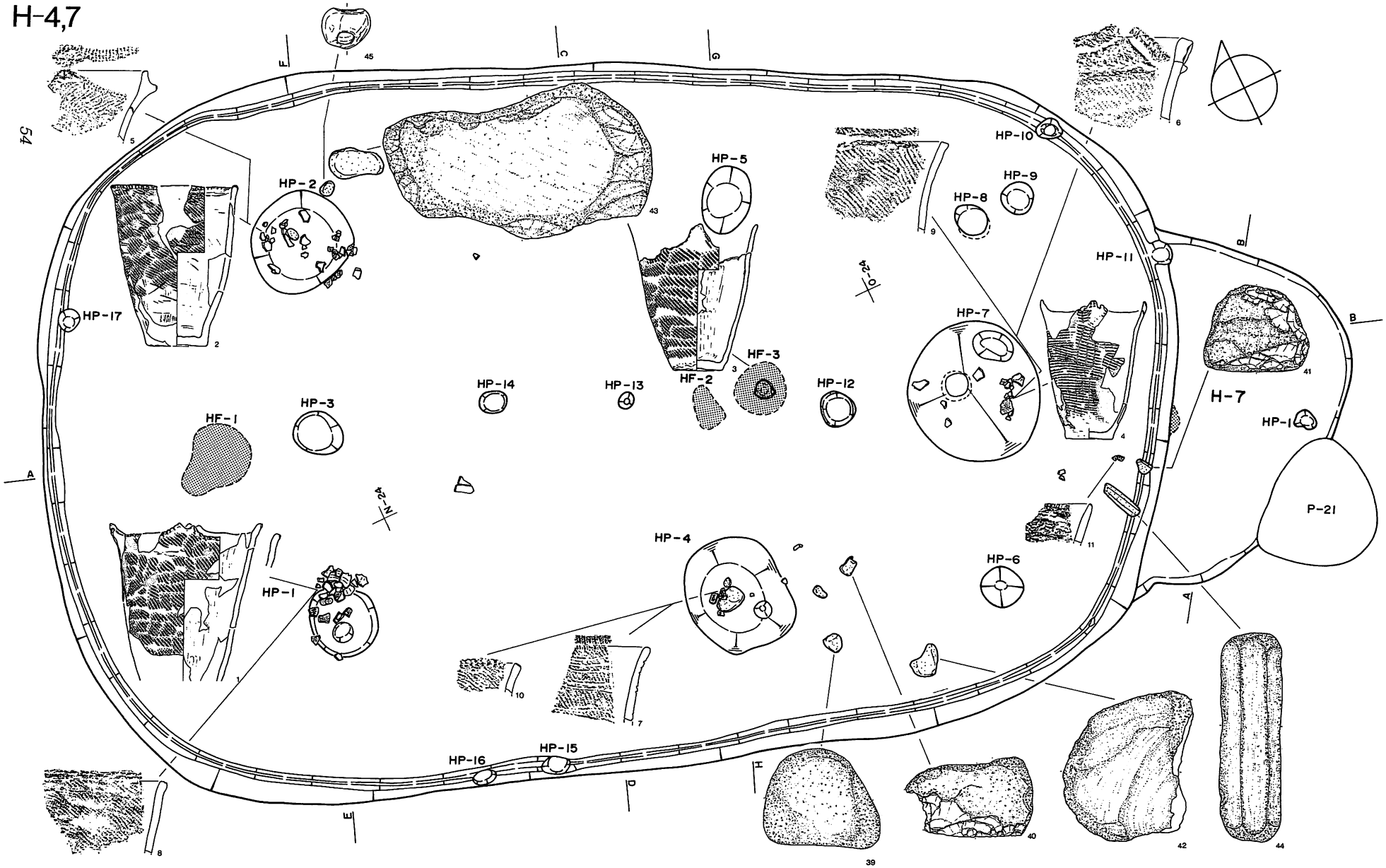
覆土　七層に区分できた。1，2層には灰白色，黄褐色火山灰が含まれ，3～5層には縄文時代晩期の遺物が含まれている。6層は第Ⅱ層に相当する黒色腐植土で，7層は竪穴廃絶直後に堆積したものと考えられる。縄文時代晩期のF－4は6層堆積後のくぼみを利用したものであろう。

遺物出土状況　出土遺物総数は1,964点，その内訳は土器1,729点，石器など232点，石製品3点である。

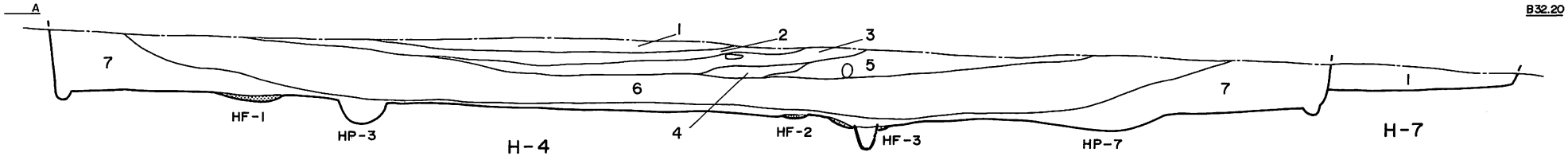
床面として取り上げたものは土器109点，石器13点，石製品2点，HP－1，2，4などの大型の柱穴部分から出土している。

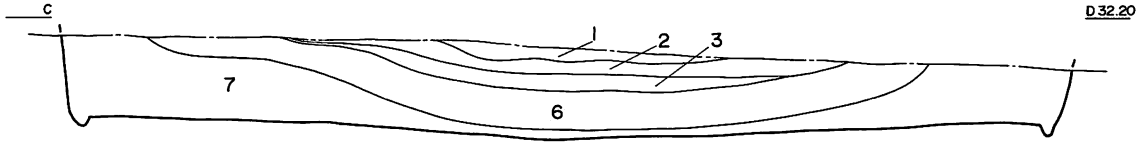
Ⅲ群A$_3$類

遺物　1，2，4は床面出土，3はHF－3の埋甕に利用された土器である。いずれもⅢ群A$_3$類とみられる。1，2は胴部に斜行縄文，口唇に縄の圧痕がみられる。4はニシンタイ

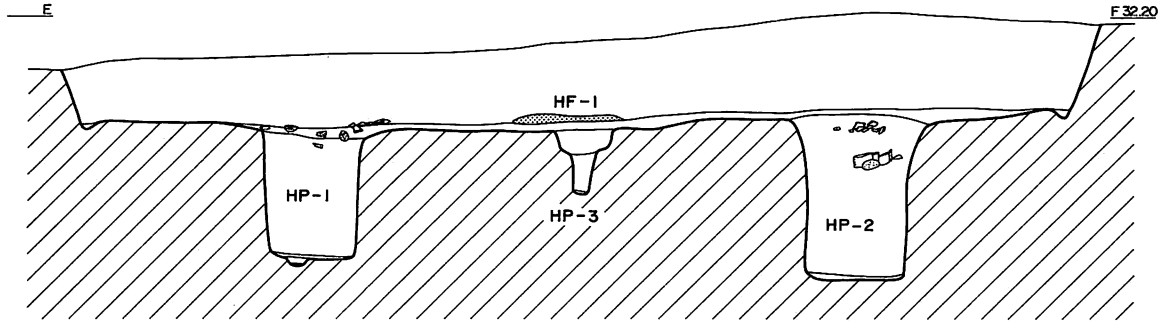


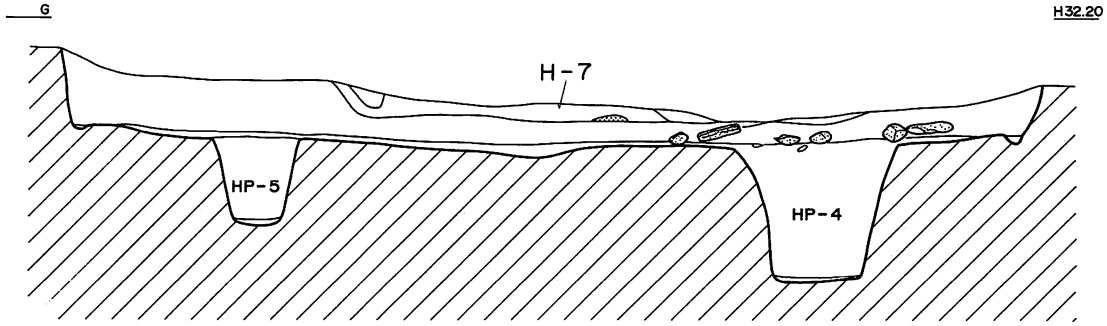
図Ⅲ－31　住居跡(30)・H－4，7

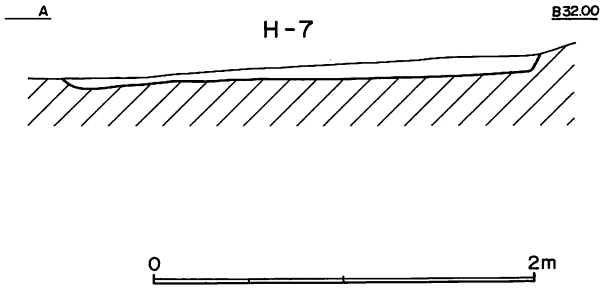




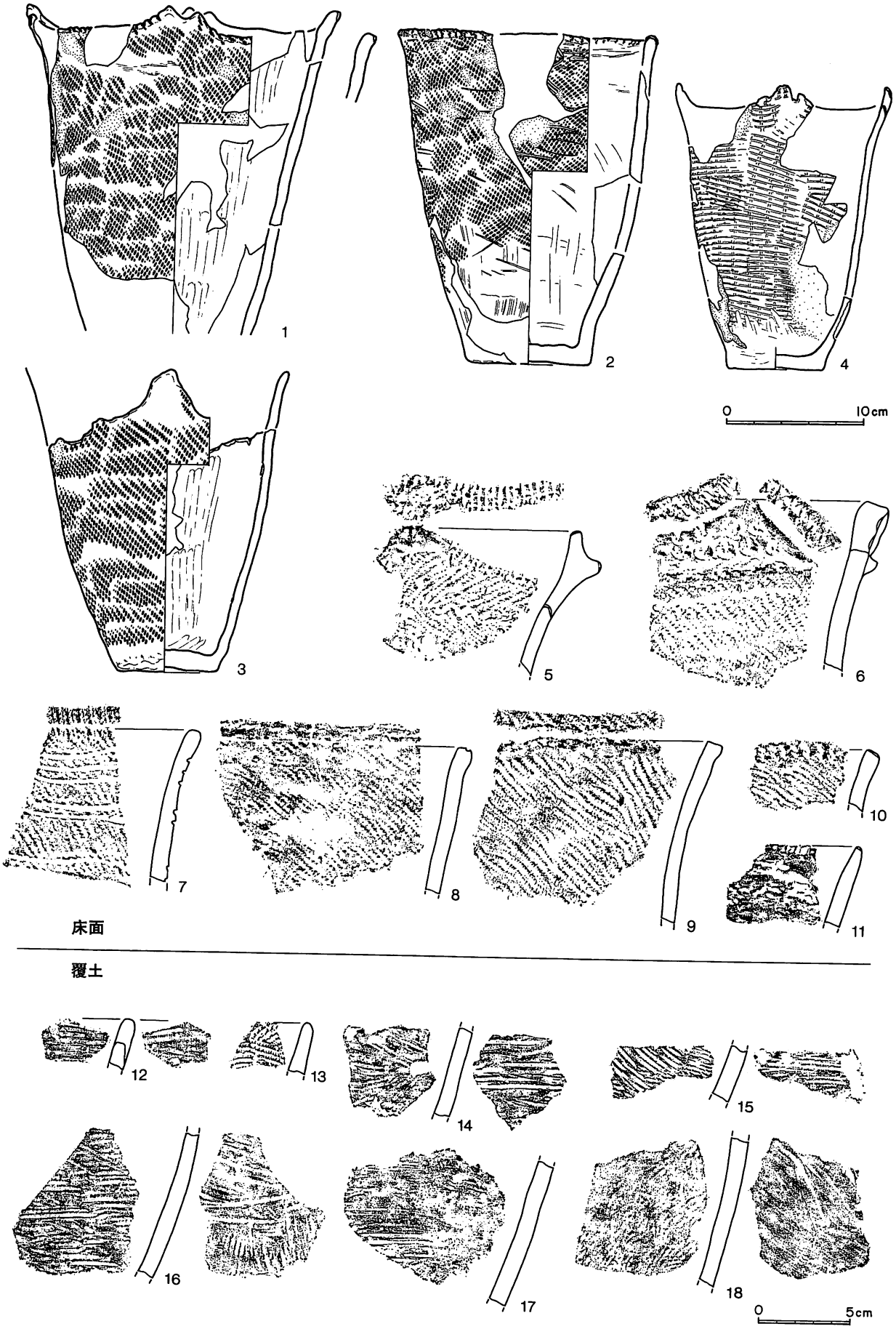
1 黒色土（灰白色火山灰を含む）
2 黄褐色土（火山灰に黒色土少量）
3 茶褐色土（黄褐色火山灰を含む）
4 明黄褐色土（ロームブロック）
5 黒色土
6 暗茶褐色土
7 黒褐色土



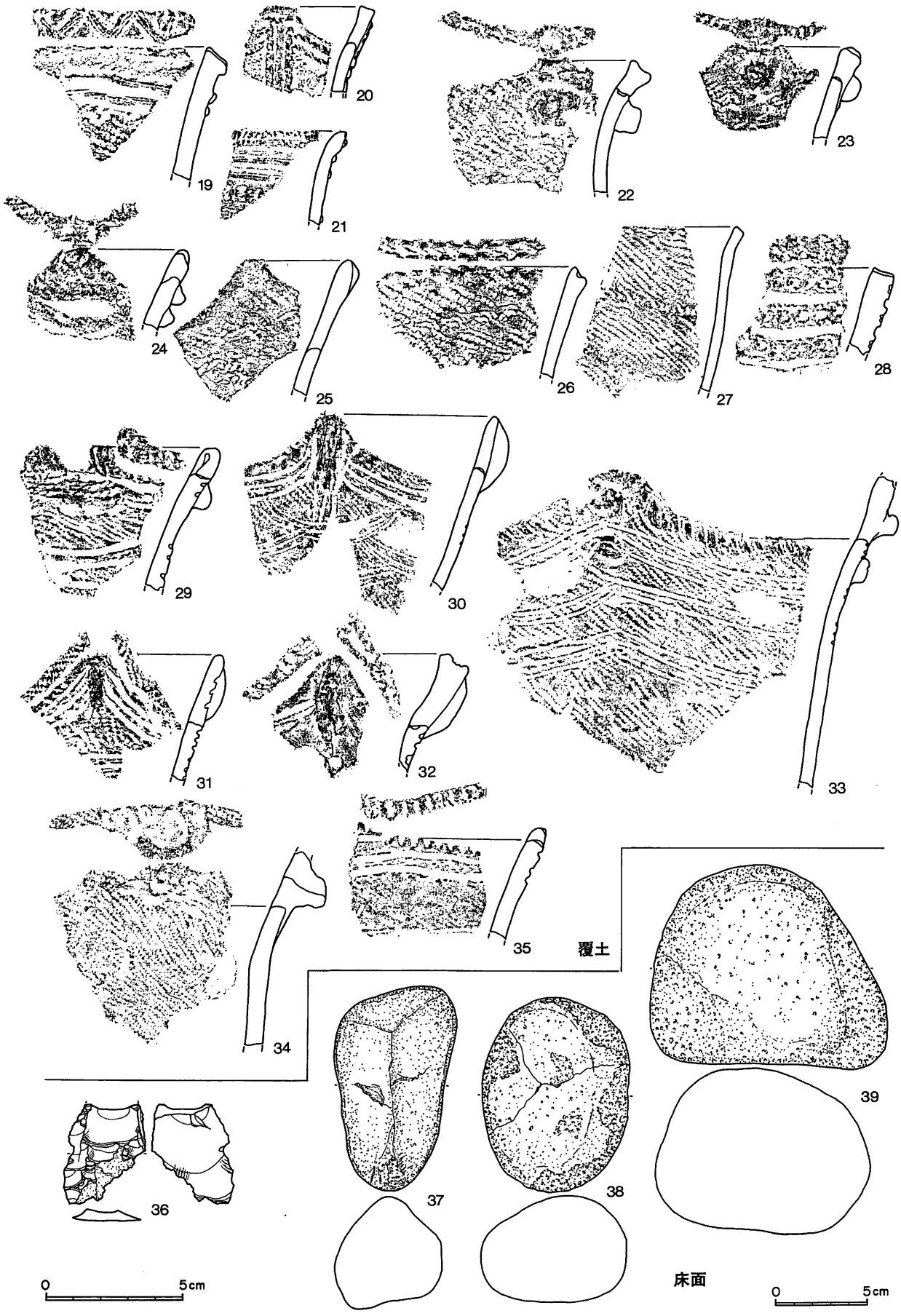




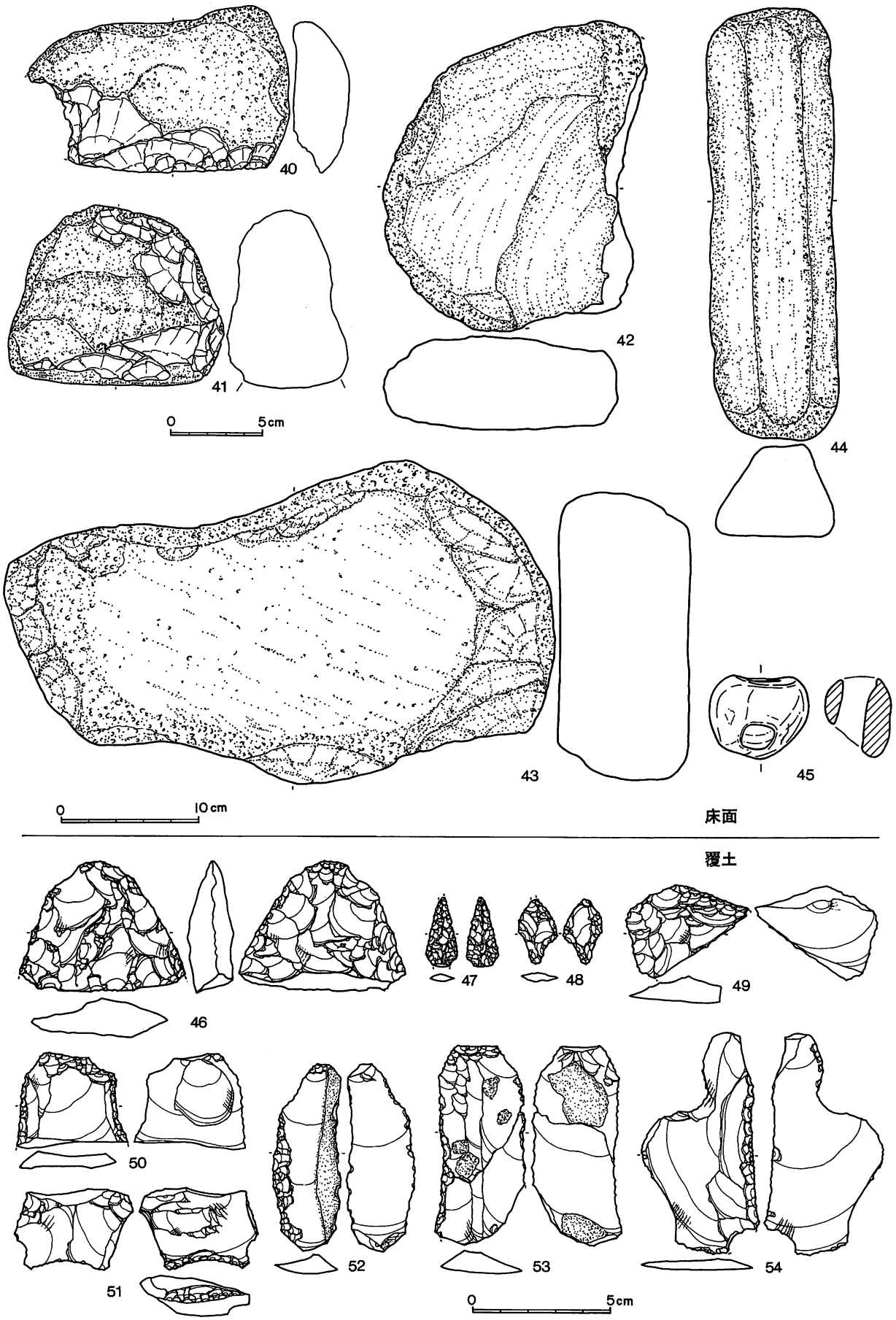
図Ⅲ－32　住居跡(31)・H－4，7



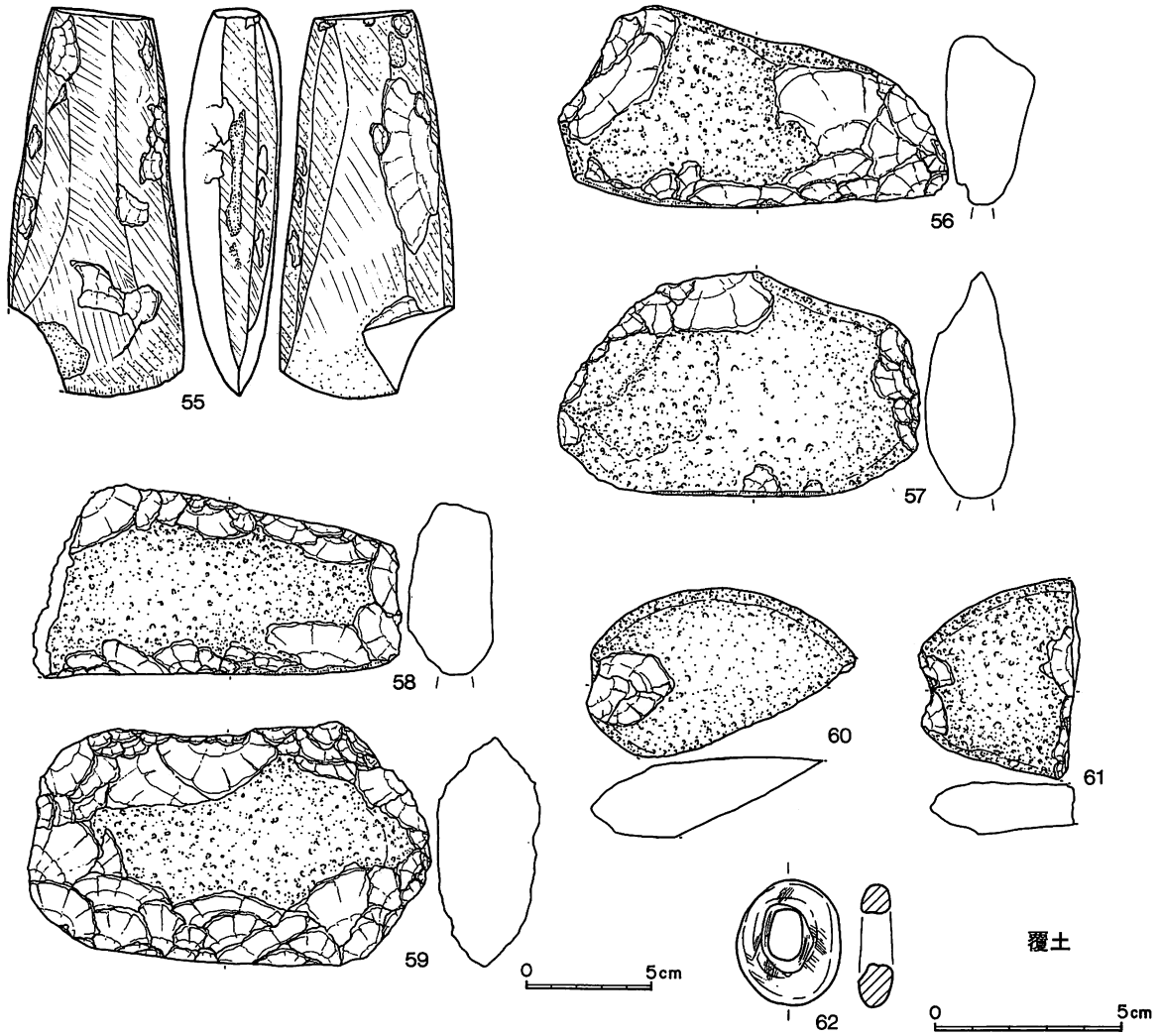
図Ⅲ－33　住居跡(32)・H－4遺物



図Ⅲ－34　住居跡(33)・H－4遺物



図Ⅲ－35　住居跡(34)・H－4遺物



図Ⅲ－36　住居跡(35)・H－4遺物

プの魚骨回転文が胴部全面に施されている。　魚骨回転文

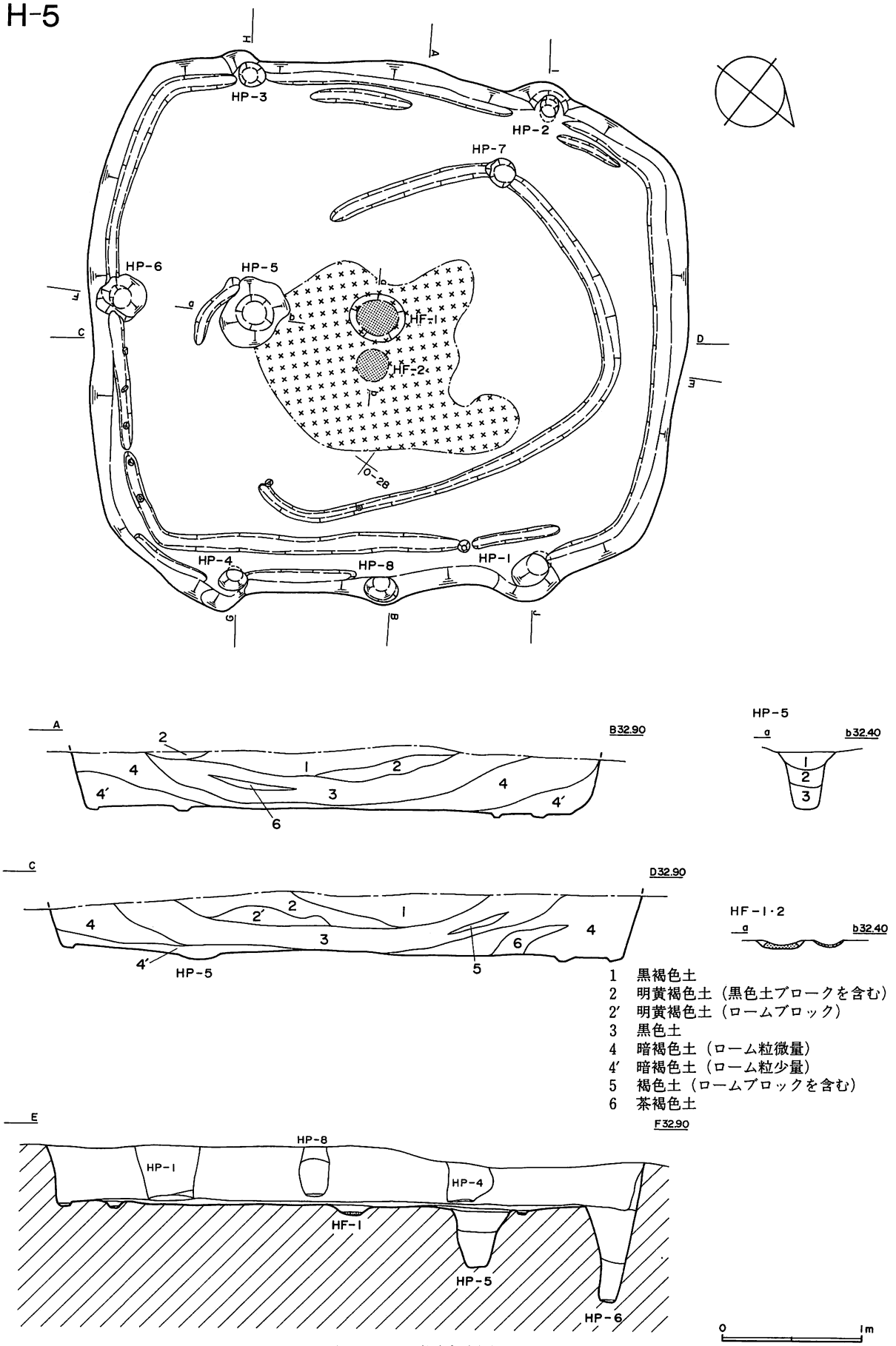
5～11は床面，12～35は覆土出土で，12～18はⅠ群A類，5～11，19～35はⅢ群A_3類の土器である。19～21は細い粘土紐の貼り付けがみられる。　Ⅰ群A類 Ⅲ群A_3類

36～45は床面，46～62は覆土出土の石器，石製品である。

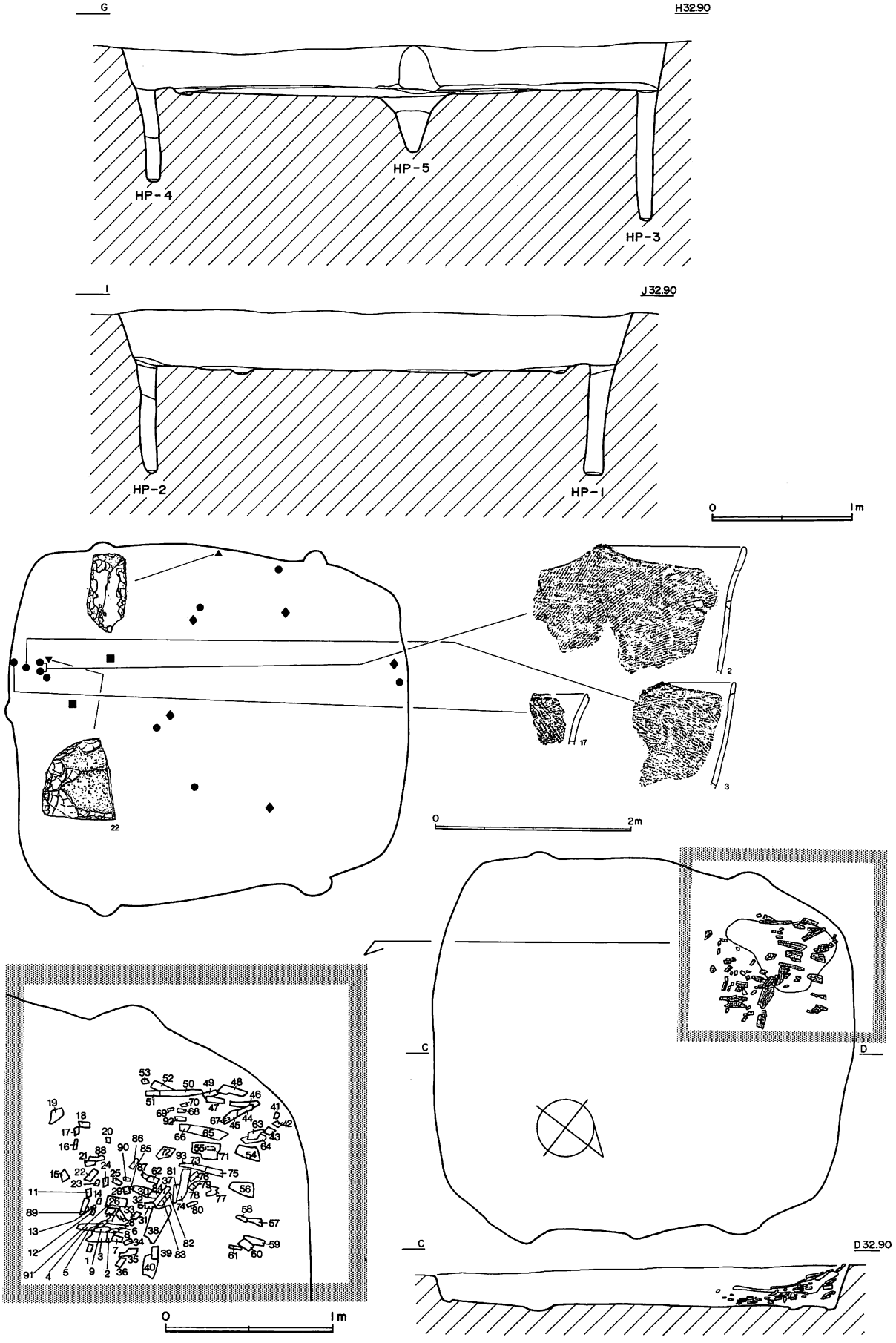
36はUフレイク，37～39はたたき石，40，41はすり石，42，43は台石・石皿，44は自然礫，45は自然礫を利用した石製品である。37は下端の一部に，38は全周および両面に，39は稜の一部にそれぞれ敲打痕がみられる。40は打ち欠きのみで，すり面はみられない。41は北海道式石冠である。44は特に加工はみられないが，形状を利用して何らかに使用されたものとみられる。　石　器　北海道式石冠

46は旧石器時代の両面調整石器で，竪穴構築時に掘り下げられたものが，混入したものと考えられる。47，48は有茎の石鏃，49は片面加工のスクレイパー，50は両側縁，51は下端，52～54は一側縁に加工が行われているスクレイパーである。55は全面磨製の石斧，56～59は扁平な礫の周囲を打ち欠いたすり石で，59にはすり面がほとんどみられない。60，61は石錘の破片で，長軸の両端に打ち欠きのあるタイプとみられる。61は割れ面に敲打痕がみられる点から，たたき石として再利用された可能性がある。62は自然石を利用した石製品　旧　石　器

H-5



図Ⅲ－37　住居跡(36)・H－5



図Ⅲ－38　住居跡(37)・H－5

である。

中期中葉 **時期** 縄文時代中期中葉，Ⅲ群A_3類土器の時期と考えられる。

H－5（図Ⅲ－37～39，図版12，13）

位置 N－27･28，O－27･28　　**規模** 4.29×3.88/4.04×3.58/0.51m

平面形 隅丸方形　　**床面積** 11.99m²

重複 なし

確認・調査 第Ⅰ層を除去した後，第Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みとして確認し，十字にセクションベルト セクションベルトを設定し調査した。

壁 残存していた高さは北西部で45cm，南東部で25cm，傾斜は90°に近い。

床 全体に平坦で，堅く，地床炉の周囲は特に堅くしまっている。

周溝 **溝** 幅8～14，深さ4～5 cmの溝が，壁際に1条ないし2条めぐる。また，さらにその内側に長方形の溝がめぐる。これは竪穴の軸線と一致せず，かつ部分的に切れている。

柱穴 床面および壁面で検出したピットは8ヵ所，このうち60cm以上の深さがあるのは，主柱穴 HP－1～4，6の5ヵ所で，それらが主柱穴とみられる。また，HP－5，8も40cmの深さがあるので，補助的な柱穴の可能性がある。HP－5以外はすべて壁際にあり，他の竪穴とは異る。

地床炉 **炉** 床面のほぼ中央に2ヵ所地床炉がある。いずれも床面をわずかに掘り込んでいる。

炭化材 北西隅で炭化材および焼土が覆土中にみられた。焼土は上屋を覆っていた土の一部で，火災時に焼けたものとみられる。炭化材は，割材，小径の丸太などがみられるが，クリ材 薄片が多い。樹種はすべてクリである（Ⅳ－1(3)参照）。また，^{14}C年代測定では，4,130±60y.B.P.という値が出た（Ⅳ－2参照）。

覆土 八層に区分した。3層が，第Ⅱ層の黒色腐植土に対応するが，5層や6層がレンズ状に入り，他の住居跡とは異った状況である。

遺物出土状況 出土遺物総数は448点，その内訳は土器383点，石器など62点，土製品3点である。床面出土は土器36点，石器など25点，土製品1点だけで，南東側に多い。

遺物 1～3は床面，4～18は覆土出土であるが，1は床面と覆土のものが接合している。Ⅰ群A類 Ⅲ群A_3類 4～6はⅠ群A類，1～3，7～18はⅢ群A_3類土器である。

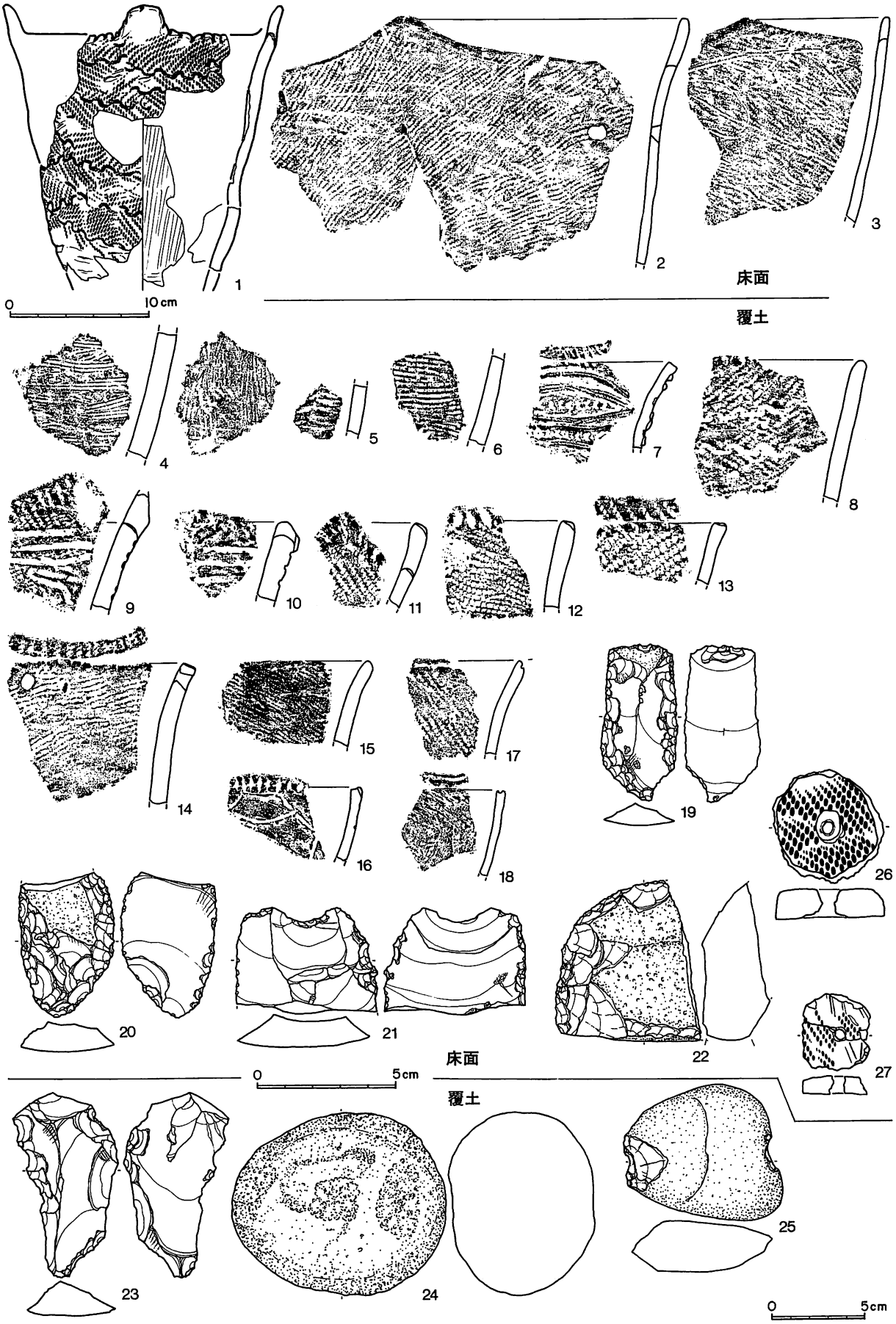
1は結束第2種の原体を，横または斜めに回転した縄文が胴部に施されている。2，3は斜行縄文が施された薄手の口縁部破片で，3は沈線文がみられる。

4～6は貝殻文，7は細い撚糸の圧痕のある貼付帯の間を半截竹管による刺突文が施されている土器である。9，10，16は沈線文がみられるもので，8，11～15，17，18は縄文のみの土器である。

石器 19～22，26，27は床面，23～25は覆土出土の石器，土製品である。

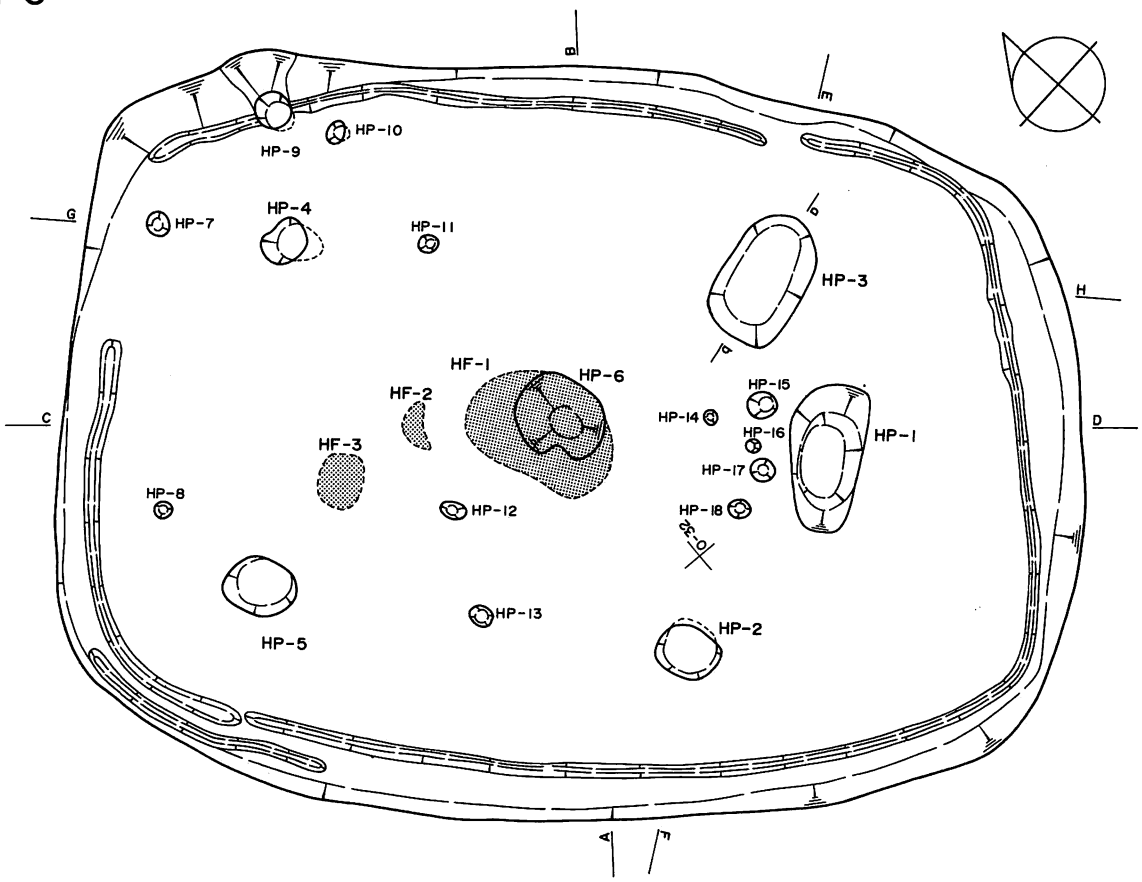
19～21は縦長剝片を素材にしたスクレイパー，22は扁平なすり石，23はUフレイク，24土製品 はたたき石，25は長軸の両端に打ち欠きのある石錘である。26，27は土器片を利用した有孔土製品である。

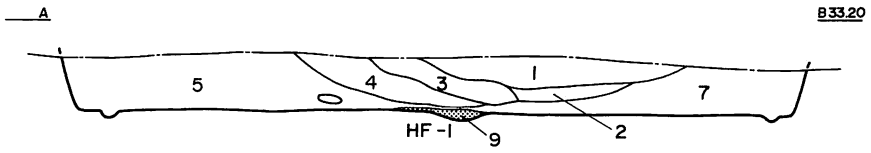
中期中葉 **時期** 縄文時代中期中葉，Ⅲ群A_3類土器の時期と考えられる。

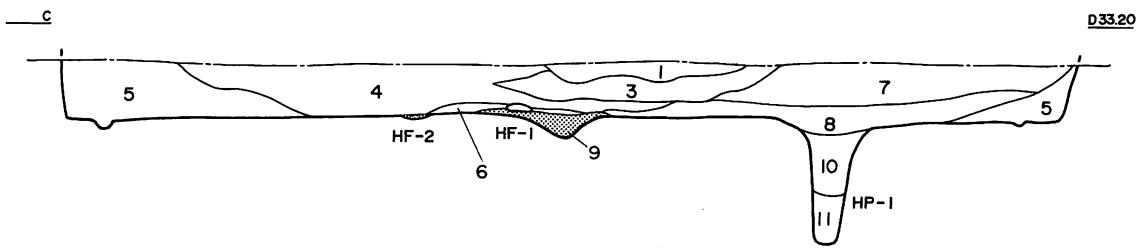


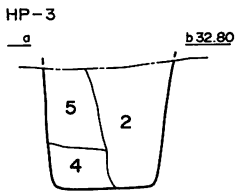
図Ⅲ－39　住居跡㊳・H－5遺物

H-6

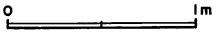




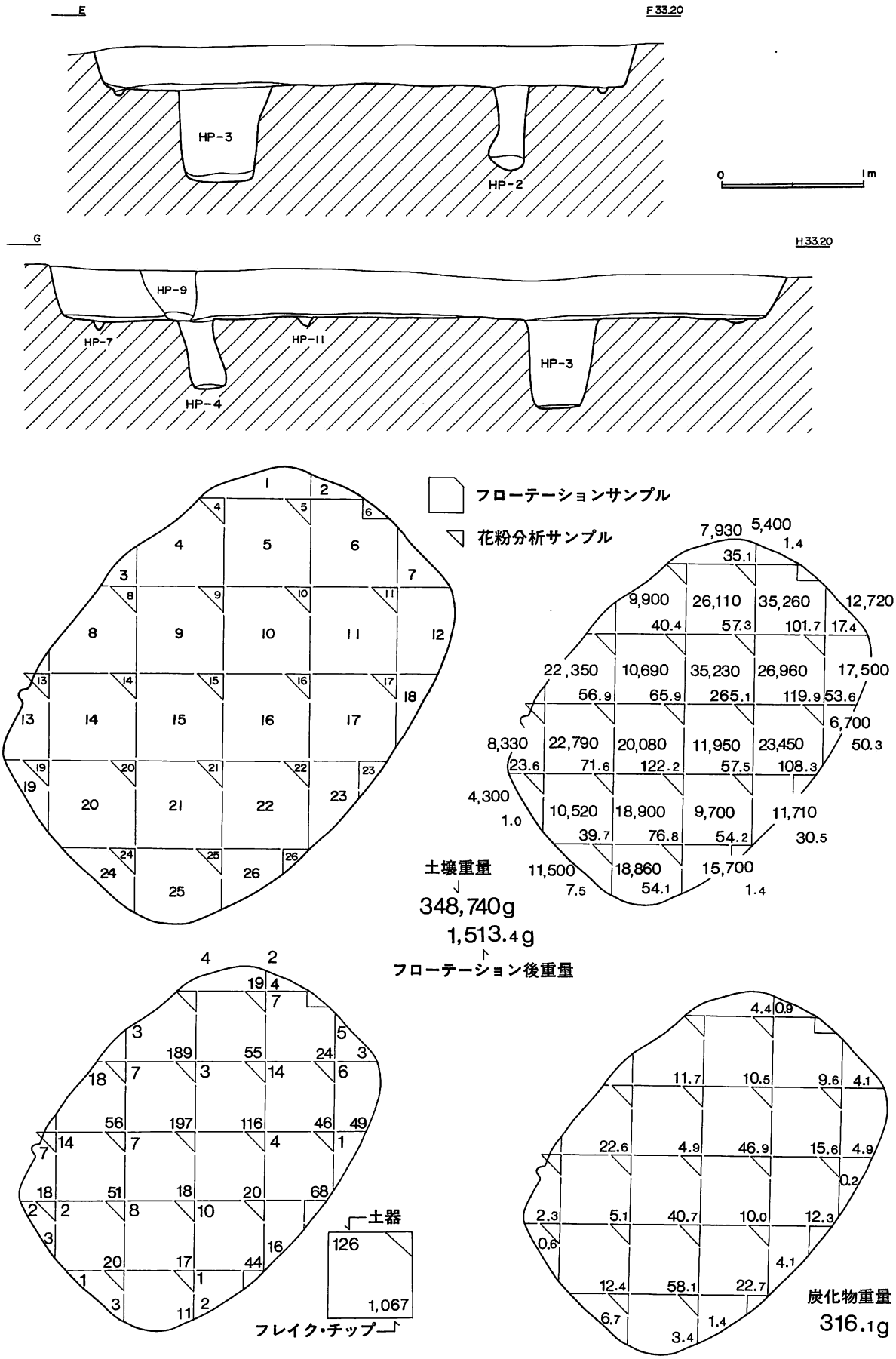




1 黒褐色土（ローム粒少量）
2 黒色土（ローム粒微量）
3 暗茶褐色土（ローム粒を含む）
4 黒褐色土
5 黒褐色土（ローム粒微量）
6 暗茶褐色土
7 暗黄褐色土
8 黒褐色土
9 赤褐色土（焼土）
10 褐色土（炭化物微量）
11 黄褐色土（炭化物微量）



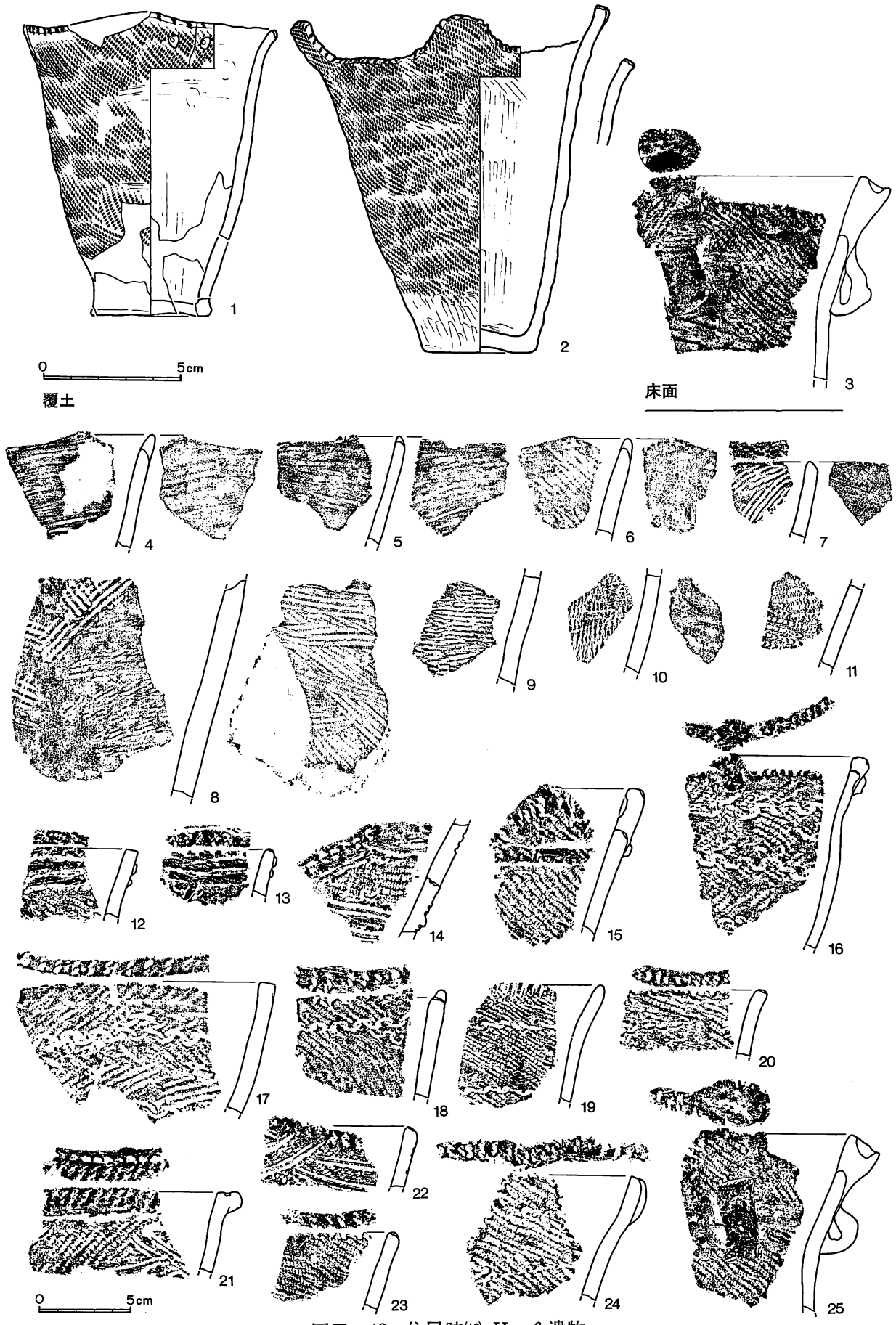
図Ⅲ－40　住居跡(39)・H－5遺物



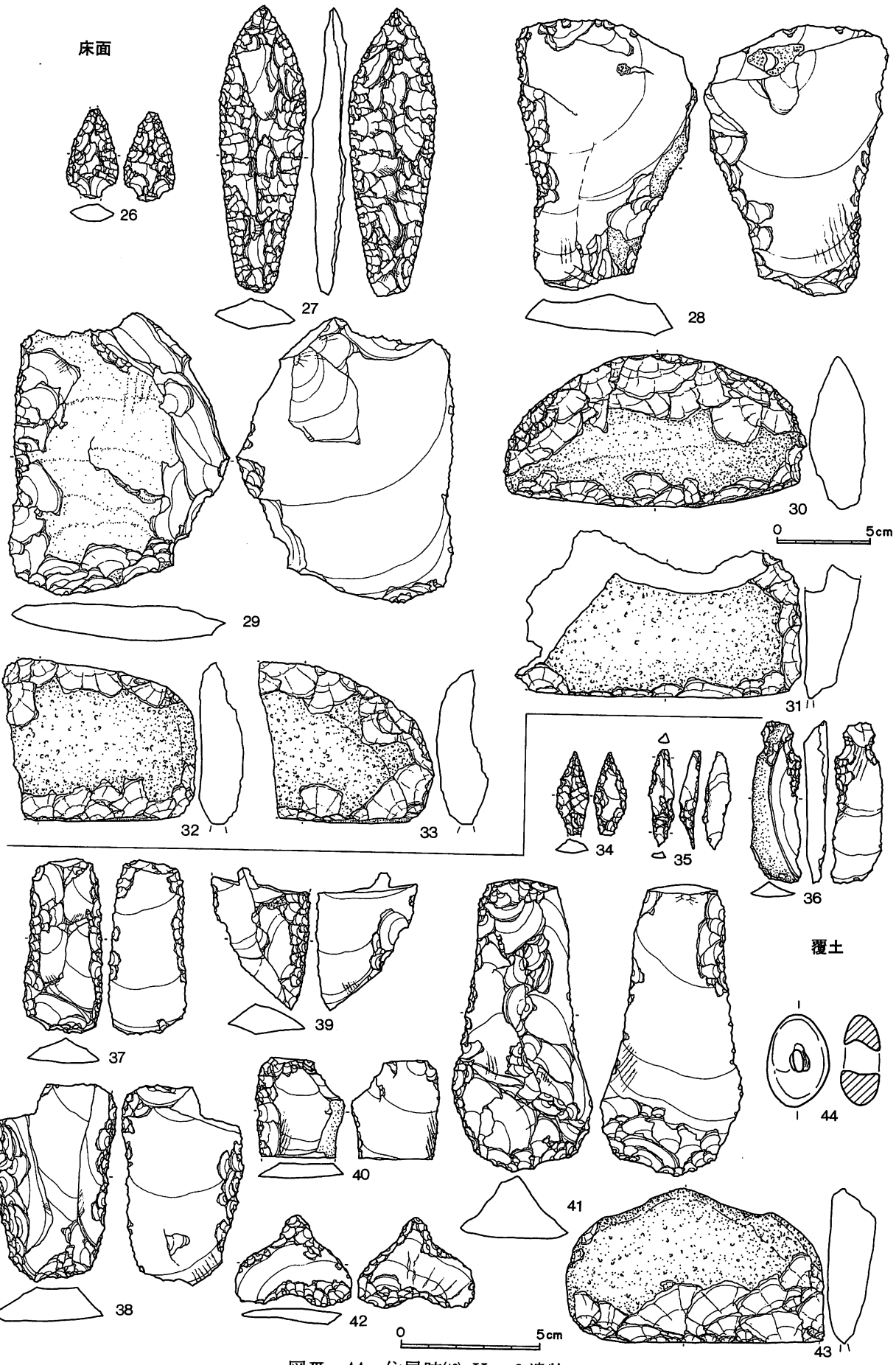
図Ⅲ－41　住居跡(40)・H－6



図Ⅲ－42　住居跡(41)・H－6



図Ⅲ－43　住居跡(42)・H－6遺物



図Ⅲ－44　住居跡(43)・H－6遺物

H－6（図Ⅲ－40～45，図版14，15）

位置　N－31，32，O－31，32　　**規模**　5.39×3.98/5.30×3.84/0.49m

平面形　隅丸長方形　　**床面積**　17.27m²

重複　なし

確認・調査　第Ⅰ層を除去した後，第Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みとして確認し，セクションベルトを十字に設定した。また，床面上5 cm程度の土壌を1×1 mの区画単位ですべて採取して，フローテーションを行った。さらに各区画ごとに花粉分析資料も採取した。　セクションベルト　土壌採取

壁　残存していた高さは30cm程度で，傾斜は90°に近い。

床　全体に平坦で，堅い。

溝　床面の壁際よりやや内側に1条，部分的に2条の溝がある。幅は8～13cm，深さは3～5 cmである。　周溝

柱穴　床面上で検出したピットは18ヵ所，50cm以上の深さがあるのはHP－1～5で，配列からみてもこれらが主柱穴と考えられる。　主柱穴

炉　中央部に3ヶ所の地床炉がある。　地床炉

覆土　他の住居跡のように第Ⅱ層の黒色腐植土の堆積がみられない点から，廃絶後の早い時期に埋った可能性がある。

フローテーション　処理した土壌は乾燥状態で348,740g，採取した炭化物，フレイク・チップ類，砂礫などの重量は1,513.4gである。土器の小片は126点，竪穴全体から平均的に採取されたが，1,067点のフレイク・チップは南東側に多く，片寄りがある。炭化物も全体から採取され，No.1，4～6，11，12，17，20～22ではオニグルミの核片，No.21ではアカザ科の種子，No.1，2，9，19～22，24，26ではシダ類の胞子粒が確認された（Ⅳ－1(1)参照）。　オニグルミ

花粉分析　20点の試料を採取したが，花粉，胞子の構成はほぼ同様な出現傾向を示している。同定されたのは19属1科の樹木花粉，1属17科の草本花粉，3科の胞子と2種類の形態分類胞子などで，詳細はⅣ－1(1)を参照願いたい。　花粉・胞子

遺物出土状況　出土遺物総数は1,830点，その内訳は土器462点，石器など1,367点，石製品1点である。床面から取り上げたのは土器・石器など92点だけで，大部分はフローテーションで採取したフレイク・チップ類である。

床面の遺物は中央部に比較的多く分布するが，覆土の遺物は全体から出土している。

遺物　1は床面，2は覆土出土のⅢ群A_3類土器である。1，2ともに縄文のみが施されたもので，口唇部に縄の圧痕がみられる。　Ⅲ群A_3類

3は床面，4～25は覆土出土の土器で，4～11はⅠ群A類，3，12～25はⅢ群A_3類土器である。3は縄文のみが施されたもので，大きな耳状の貼り付けがある。4～11は貝殻文の土器で，4～7は口縁部で，条痕文，連続押引文などがみられる。8～11は胴部で，条痕文，腹縁文，連続押引文などがみられる。12～15は貼付帯があり，12，13の粘土紐上に細い撚糸の圧痕がある。16～20，23～25は縄文のみが施され，21，22は弧線文がみられ，25には大きな耳状の貼り付けがある。　Ⅰ群A類　Ⅲ群A_3類

26～33は床面，34～43は覆土出土の石器，石製品である。

26は有茎の石鏃，27は両面調整の形態の整ったやり先・ナイフ，28，29は幅広の大型剝片に不連続な粗い加工のみられるスクレイパー，30～33は扁平礫の周囲に加工がみられる　石器

すり石である。

34は有茎の石鏃，35は両端が使用されたドリル，36はつまみ部にわずかな加工がみられるつまみ付ナイフ，37～41は縦長剝片の両側縁または一側縁に加工のみられるスクレイパーである。43は扁平な礫の側縁に打ち欠きのみられるすり石で，すり面がわずかにみられる。44は有孔の自然石を利用した石製品である。

石製品

中期中葉　**時期**　縄文時代中期中葉，Ⅲ群A_3類土器の時期と考えられる。

H－7（図Ⅲ－31，45，図版16）

位置　O－23　　**規模**　(1.30)×(2.75)/(1.27)×(2.60)/0.18m

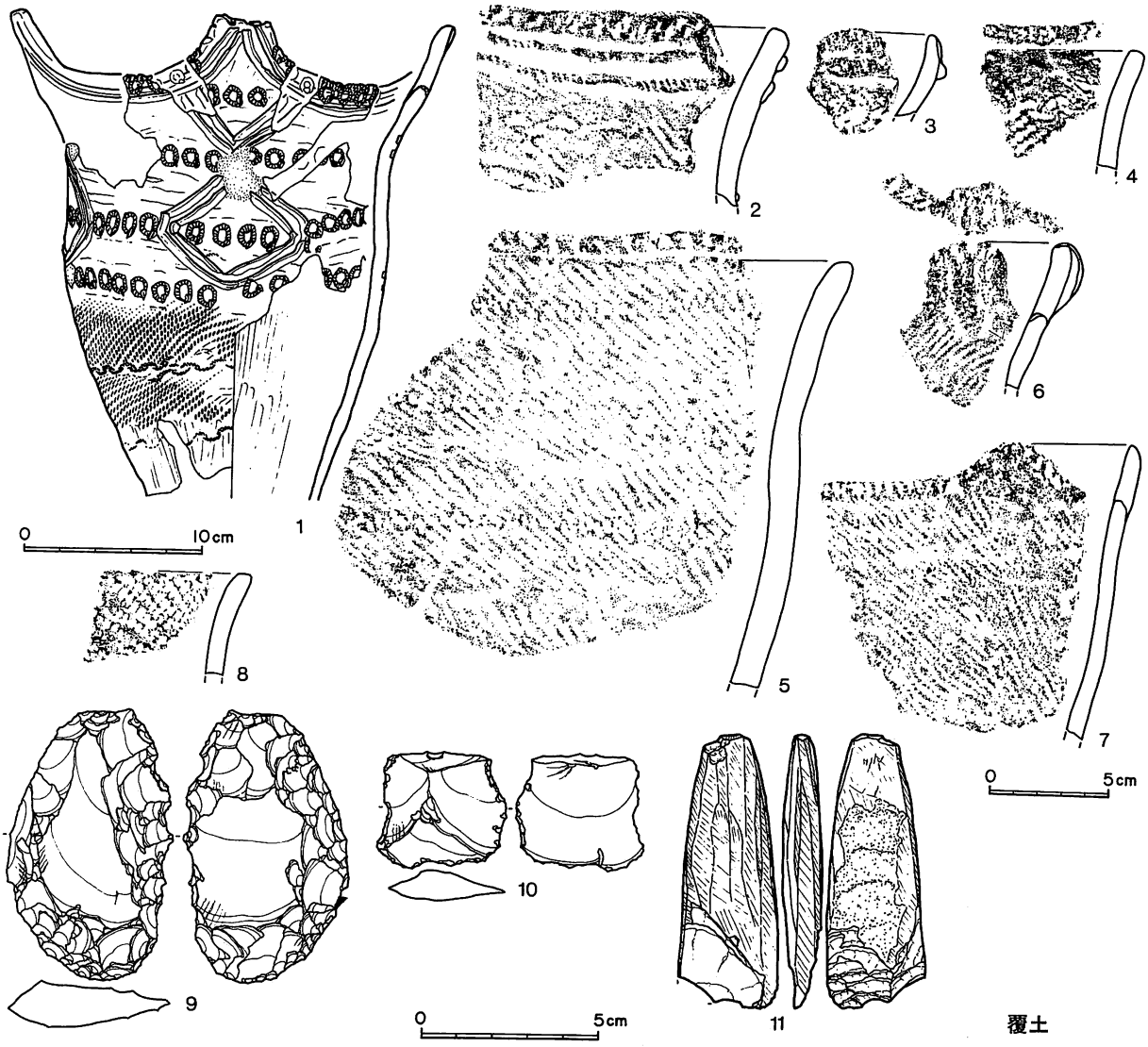
平面形　不明　　**床面積**　(2.47) m²

重複　北西部がH－4に，南部がP－21に切られている。

確認・調査　第Ⅰ層を除去した後，第Ⅳ層上面でH－4とともに確認し，H－4の長軸方向のセクションベルトを延長し，H－4と同時に調査した。

セクションベルト

壁　残存していた高さは5～15cmである。



図Ⅲ－45　住居跡(44)・H－7遺物

床　全体に平坦である。

溝　なし

柱穴　床面上で検出できたピットは1ヵ所のみで，深さは9 cmである。

炉　H－4に切られた部分に地床炉が1ヵ所わずかに残存していた。　地床炉

覆土　一層確認できたのみである。

遺物出土状況　出土遺物総数は108点，その内訳は土器99点，石器など9点，すべて覆土からの出土である。

遺物　1～11すべて覆土出土である。1は胴部上半に縄文原体による円形の押捺と沈線文，下半に結束第2種の原体による縄文がみられるⅢ群A_3類土器である。2～7はⅢ群A_3類土器の口縁部で，2は口縁下に2本，3，6は突起部分に粘土紐の貼り付けがみられる。　Ⅲ群A_3類

9は粗い両面加工のスクレイパー，10はUフレイク，11は刃部が欠損している磨製の石斧である。9，10は頁岩，11は緑色泥岩製である。　石器

時期　縄文時代中期中葉，Ⅲ群A_3類土器の時期と考えられる。　中期中葉

H－8（図Ⅳ－46～47，図版16）

位置　O－30　　**規模**　(1.64)×(1.20)/(1.41)×(1.40)/0.27m

平面形　隅丸長方形　　**床面積**　(2.51)m²

重複　H－9を切る

確認・調査　第Ⅰ層除去後，第Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みとして確認したが，当初H－9と同一とみて調査を進め，後に2軒重複していることがわかった。　重複

壁　H－9との重複部分ではわずかに溝が確認できただけであるが，調査区域外との境で25 cmの高さが残存していた。

床　全体に平坦で堅い。

溝　壁際に1条ある。北部で40cm程確認できた溝は調査区域外に続いているので，全体の形状は不明である。　周溝

柱穴　北西部の壁際で1ヵ所確認できただけである。

炉　なし。調査区域外の部分にある可能性がある。

覆土　竪穴全体を覆っている3層は明黄褐色ローム層を主体とするもので，竪穴構築時の掘り上げ土と思われる。

遺物出土状況　出土遺物総数は170点，その内訳は土器152点，石器など18点で，床面として取り上げたのは土器1点，石器など3点だけである。

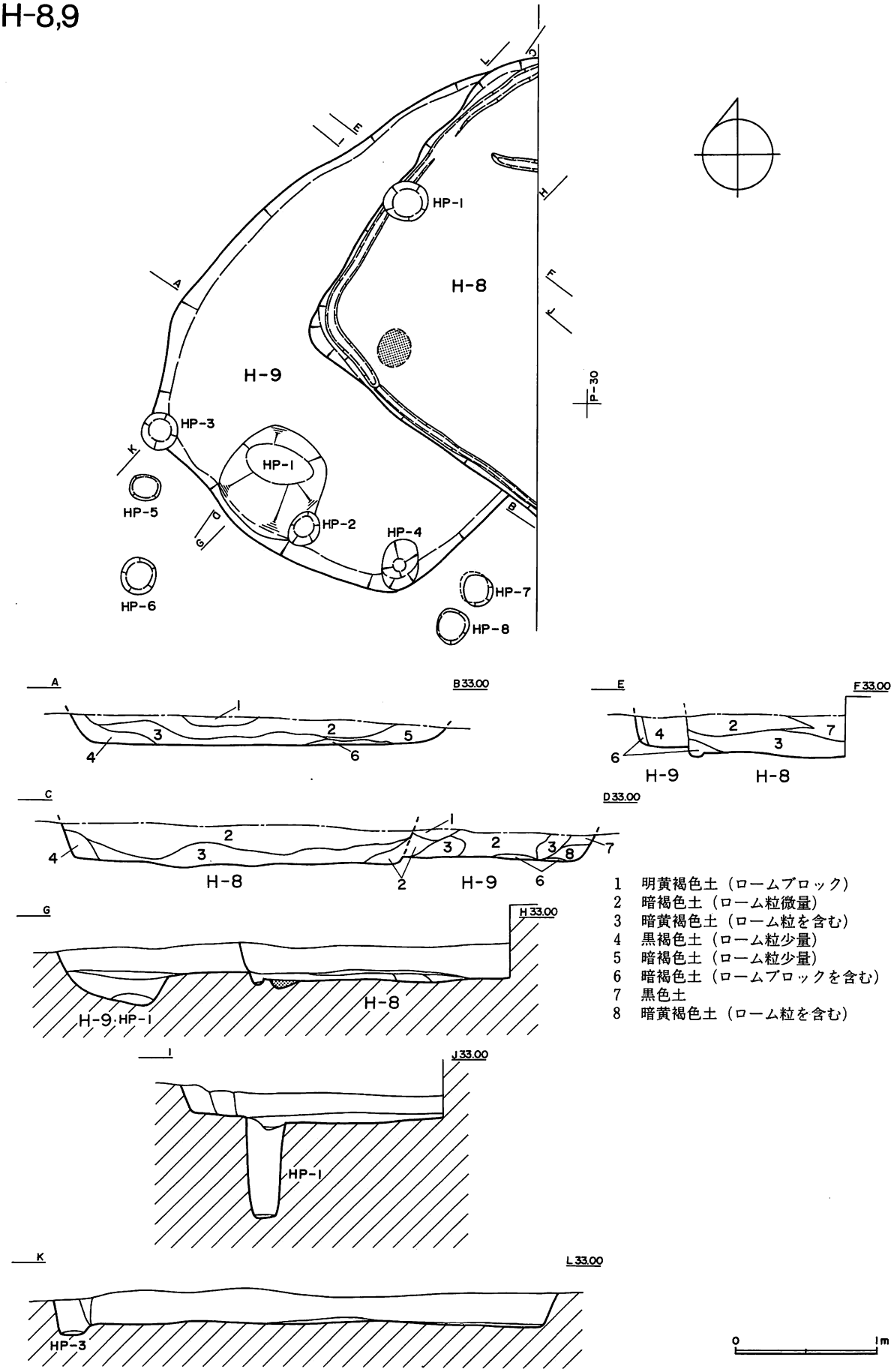
遺物　1～19はすべて覆土出土で，1～4はⅠ群A類，5～19はⅢ群A_3類の土器である。　Ⅰ群A類 Ⅲ群A_3類

1～4は貝殻文土器の胴部で，条痕文，連続押引文などがみられる。5，6は細い粘土紐の貼付帯上に撚糸圧痕，11，12は沈線文，12，13は突起部の下に耳状の貼り付けがみられる。19は底部の小破片であるが，底に蓆目の圧痕がみられる。　蓆目

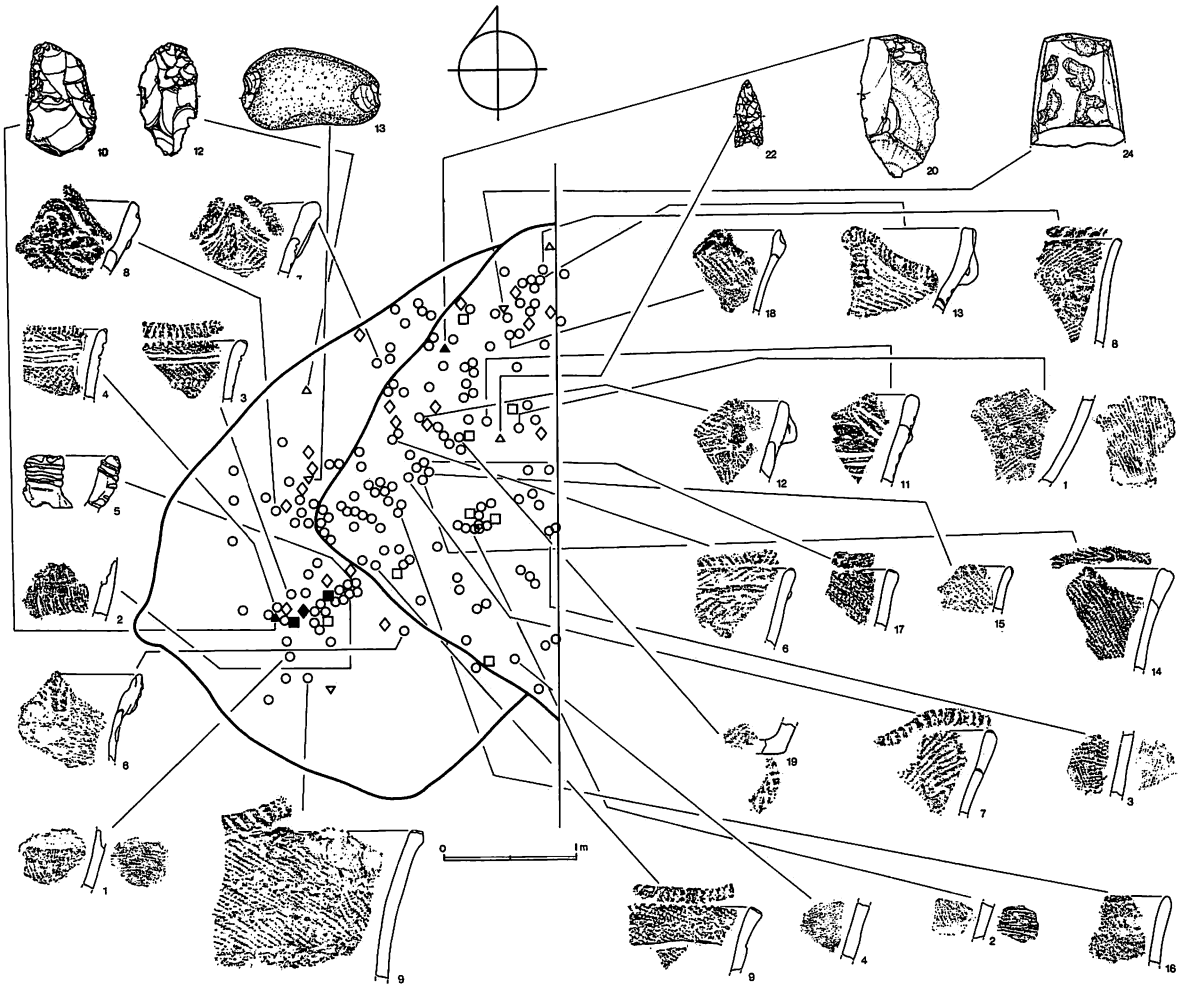
20，21は床面，22～24は覆土出土の石器である。20，23は縦長剝片の側縁に加工のみられるスクレイパー，22は三角形の凹基の石鏃，24は全面磨製の石斧の基部の破片である。20～23は頁岩，24は蛇紋岩製である。　石器

時期　縄文時代中期中葉，Ⅲ群A_3類土器の時期である。　中期中葉

H-8,9



図Ⅲ－46　住居跡(45)・H－8，9



図Ⅲ－47　住居跡(46)・H－8，9

H－9（図Ⅲ－46，49，図版16）

位置　O－29，30　　**規模**　(4.00)×2.63/(3.90)×2.51/0.25m

平面形　隅丸長方形　　**床面積**　(2.98)m²

重複　H－8に切られている。　重複

確認・調査　第Ⅰ層除去後，第Ⅳ層上面で黒色土の落ち込みとして確認し，十字にセクションベルトを設定した。調査途中で2軒重複していることがわかった。　セクションベルト

壁　南西部で20cmの高さが残存していた。

床　全体に平坦で堅い。

溝　なし。

柱穴　床面および壁際で4ヵ所，竪穴の外で4ヵ所ピットを検出したが，全体の状況が不明なので，主柱穴は決定できない。

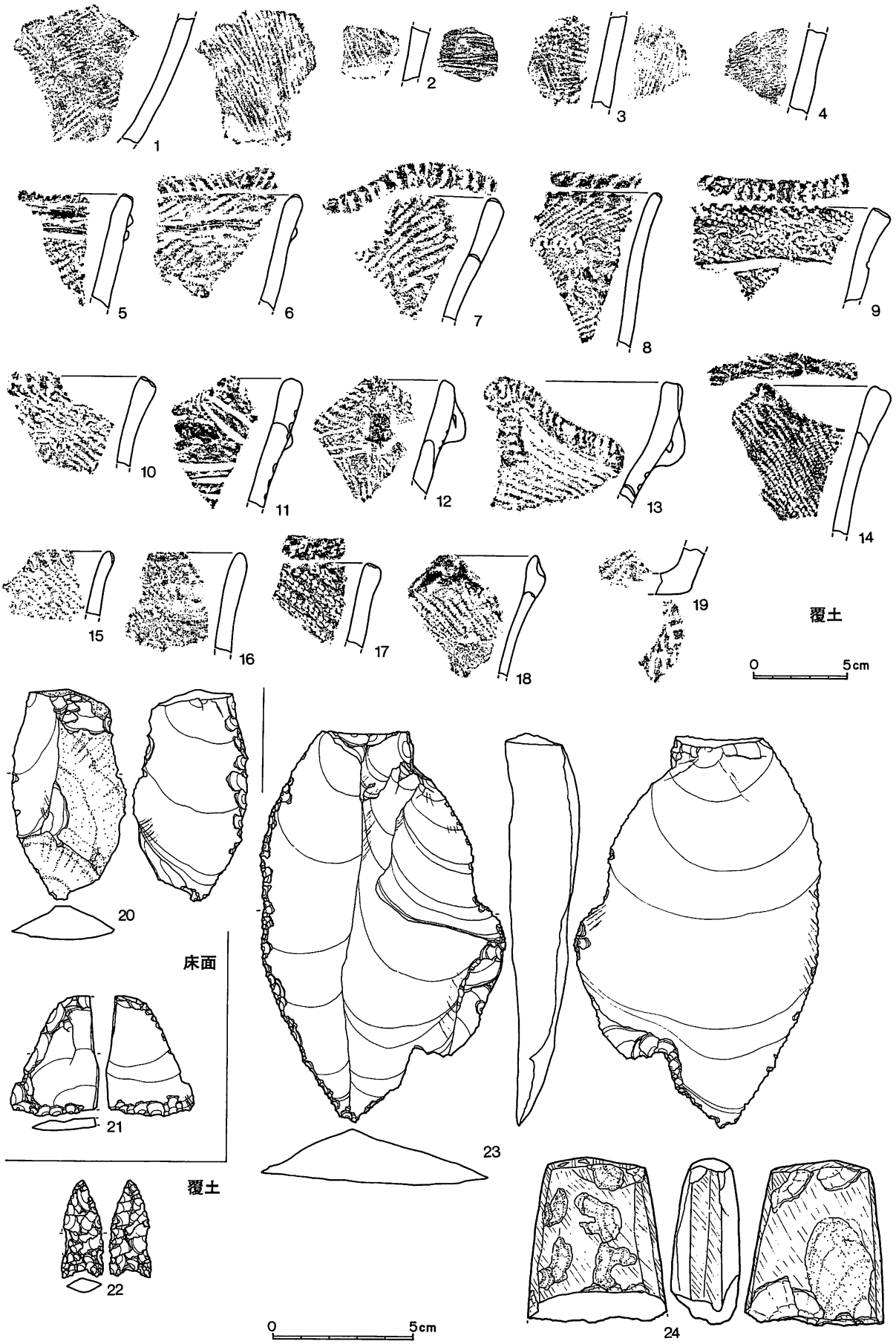
炉　H－8内で確認できたものがH－9に伴う地床炉と考えられる。　地床炉

覆土　H－9とは明確に区分できなかったが，3層の状況から壁が推定できた。

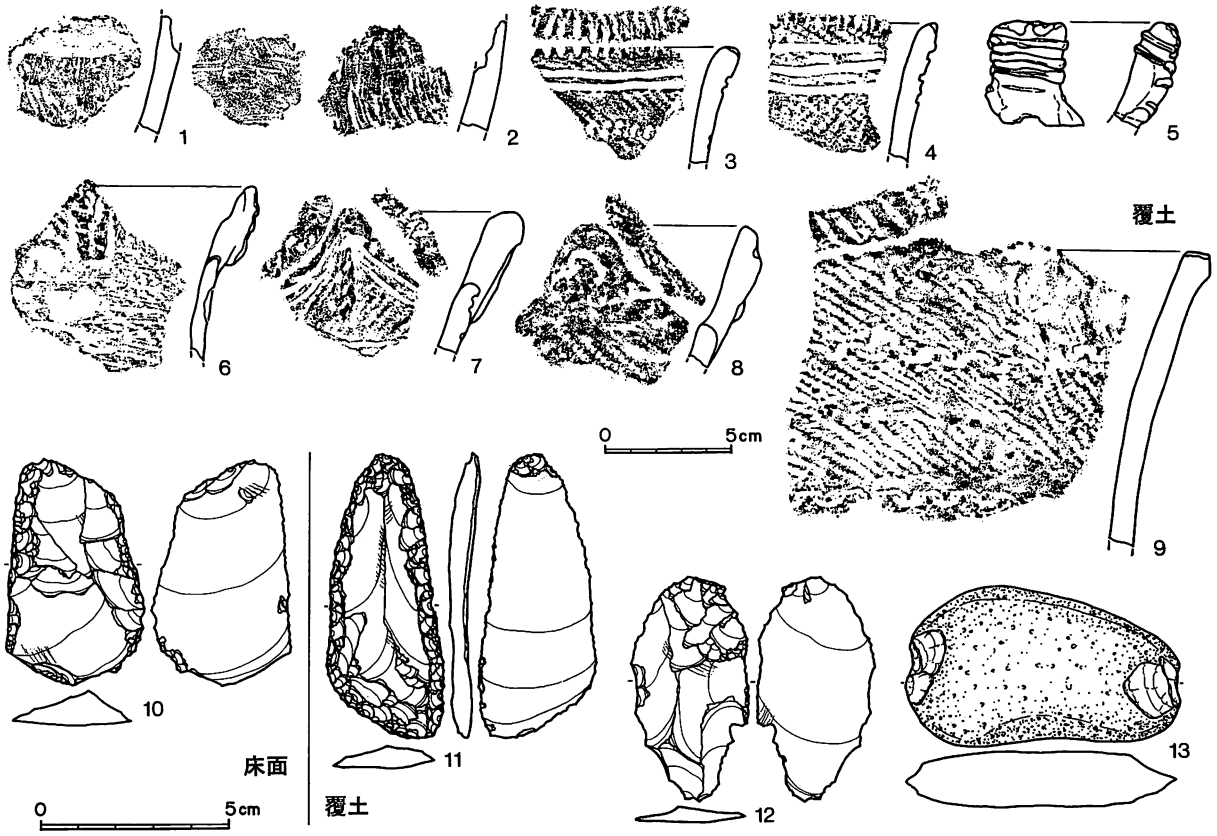
遺物出土状況　出土遺物総数は93点，その内訳は土器80点，石器など13点で，床面から出土した遺物は少ない。

遺物　1～9は覆土出土で，1，2はⅠ群A類，3～9はⅢ群A_3類の土器である。1，2は貝殻文土器，3～9は突起のある土器の口縁部とみられる。　Ⅰ群A類　Ⅲ群A_3類

10～13は床面として取り上げたが，11は旧石器の掻器で，竪穴構築時に掘り上げられ混



図Ⅲ－48　住居跡(47)・H－8遺物



図Ⅲ－49　住居跡(48)・H－9遺物

入したものとみられる。10は両側縁に加工のあるスクレイパー，12はUフレイク，13は長軸の両端に打ち欠きのある石錘で，10～12は頁岩，13は安山岩製である。

時期　縄文時代中期中葉，Ⅲ群A_3類土器の時期と考えられる。

H－10（図Ⅲ－50，51，図版17）

位置　J－33・34，K－33・34　　**規模**　7.40×5.12/7.06×4.84/0.16m

平面形　楕円形　　**床面積**　26.44m²

重複　なし

確認・調査　第Ⅰ層除去後，第Ⅲ層のかすかな汚れ部分を確認した。

壁　明確な立ち上がりは確認できず，全体がゆるやかな皿状をなしていて，壁の高さは5cm前後が確認できただけである。

床　皿状にくぼんだ状態で，地床炉のまわりが堅い。

溝　なし。

柱穴　なし。

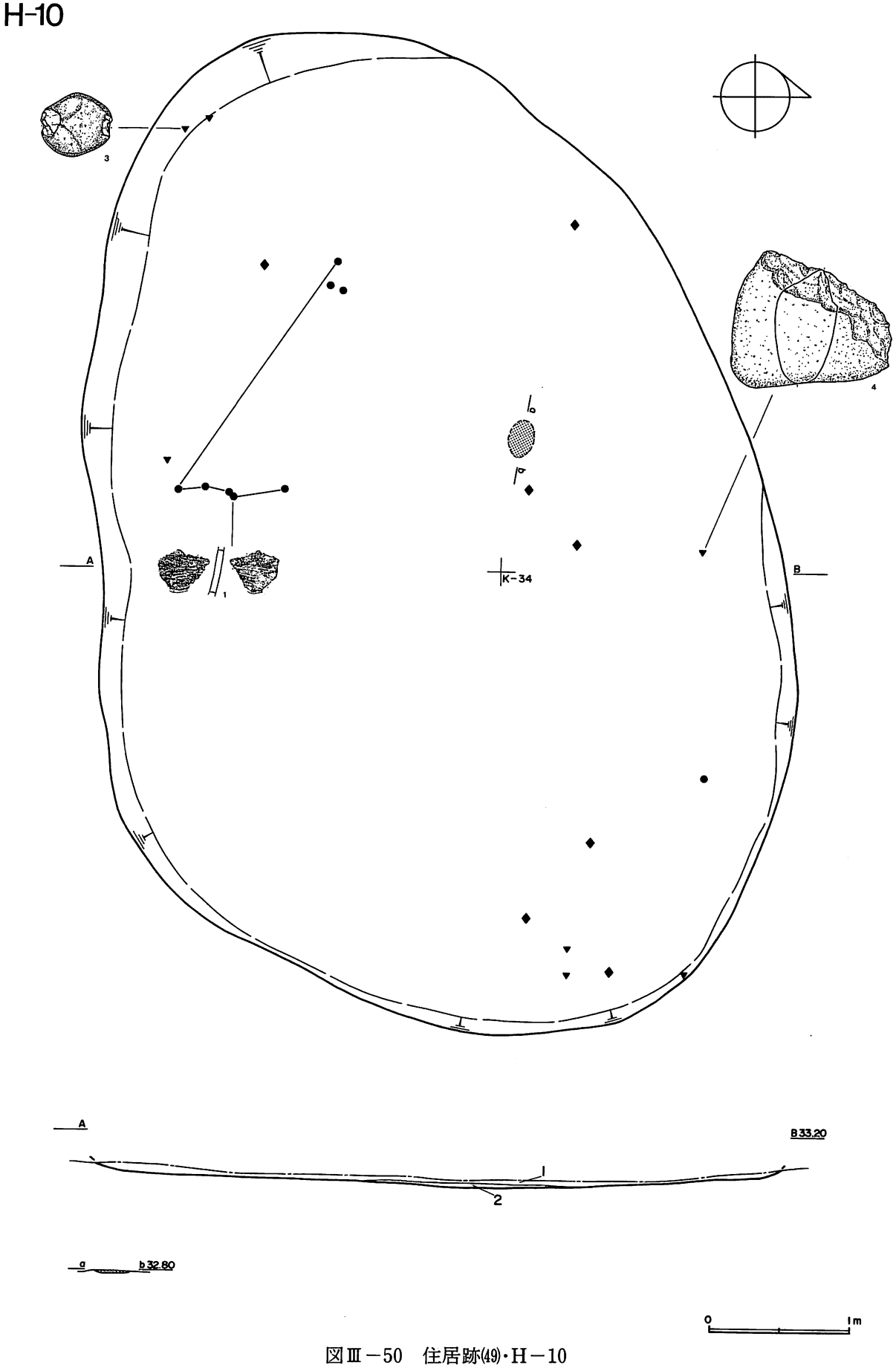
炉　中央やや北西寄りに地床炉が1ヵ所確認できた。　地床炉

覆土　第Ⅲ層のやや汚れた感じの土が確認できた。

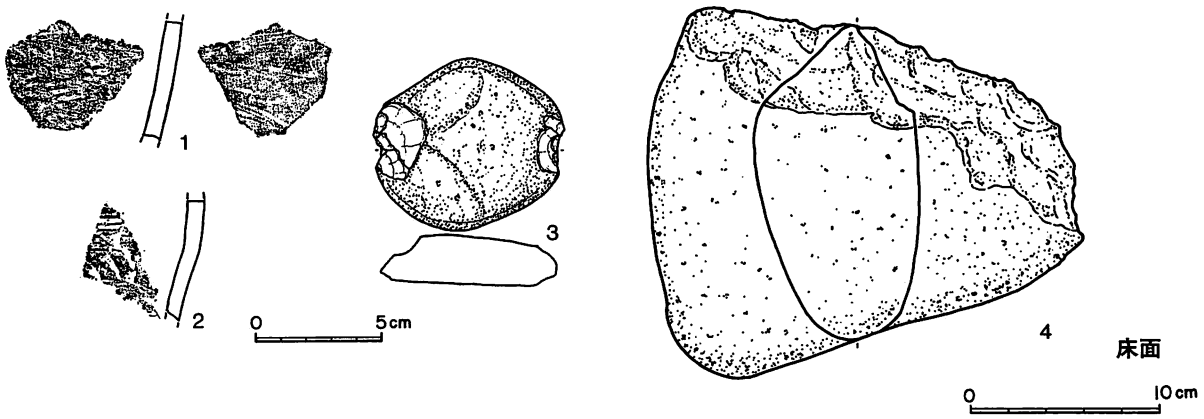
遺物出土状況　出土遺物総数49点，その内訳は土器8点，石器など41点で，竪穴全体に分布する。

遺物　1～4は床面出土の遺物である。1，2は貝殻文のⅠ群A類土器，3は長軸の両端に打ち欠きのある石錘，4は台石・石皿の破片で，3は砂岩，4は安山岩製である。　Ⅰ群A類

時期　縄文時代早期前半，Ⅰ群A類土器の時期である。　早期前半



図Ⅲ－50　住居跡(49)・H－10



図Ⅲ－51　住居跡(50)・H－10遺物

H－11（図Ⅲ－52，53，図版17）

位置　H－39・40　　**規模**　3.33×2.64/3.20×2.49/0.8m

平面形　隅丸長方形　　**床面積**　6.65m²

重複　P－77に切られている。また，北側の一部が，近年の攪乱によって壊されていた。

確認・調査　第Ⅰ，Ⅱ層除去後，第Ⅲ層上面で黒色土の落ち込みとして確認した。

壁　全体に10cm前後が確認できた。

床　全体に平坦で，東側，地床炉付近が堅くしまっていた。

溝　なし。

柱穴　南側の壁際で1ヵ所確認できただけである。

炉　中央やや東寄りに地床炉が1ヵ所ある。　地床炉

覆土　明黄褐色ロームまじりの土が二層区分できた。

遺物出土状況　出土遺物総数18点，その内訳は土器8点，石器など10点で，土器はすべて床面出土である。床面の遺物は南側に偏って出土した。

遺物　1，2は床面出土のⅢ群A_3類土器で，いずれも突起がある。　Ⅲ群A_3類

3は床面，4～6は覆土出土の石器で，3は扁平礫の周囲に打ち欠きのあるすり石，4は縦長剥片の両側縁に加工のみられるスクレイパー，5，6は全面磨製の石斧である。6は刃部が潰れ，たたき石とした方がよいかもしれない。3は安山岩，4は頁岩，5，6は緑色泥岩製である。

時期　縄文時代中期中葉，Ⅲ群A_3類土器の時期である。　中期中葉

H－12（図Ⅲ－54～56，図版18）

位置　L－41，M－41　　**規模**　4.48×3.46/4.16×3.22/0.42m

平面形　楕円形　　**床面積**　10.57m²

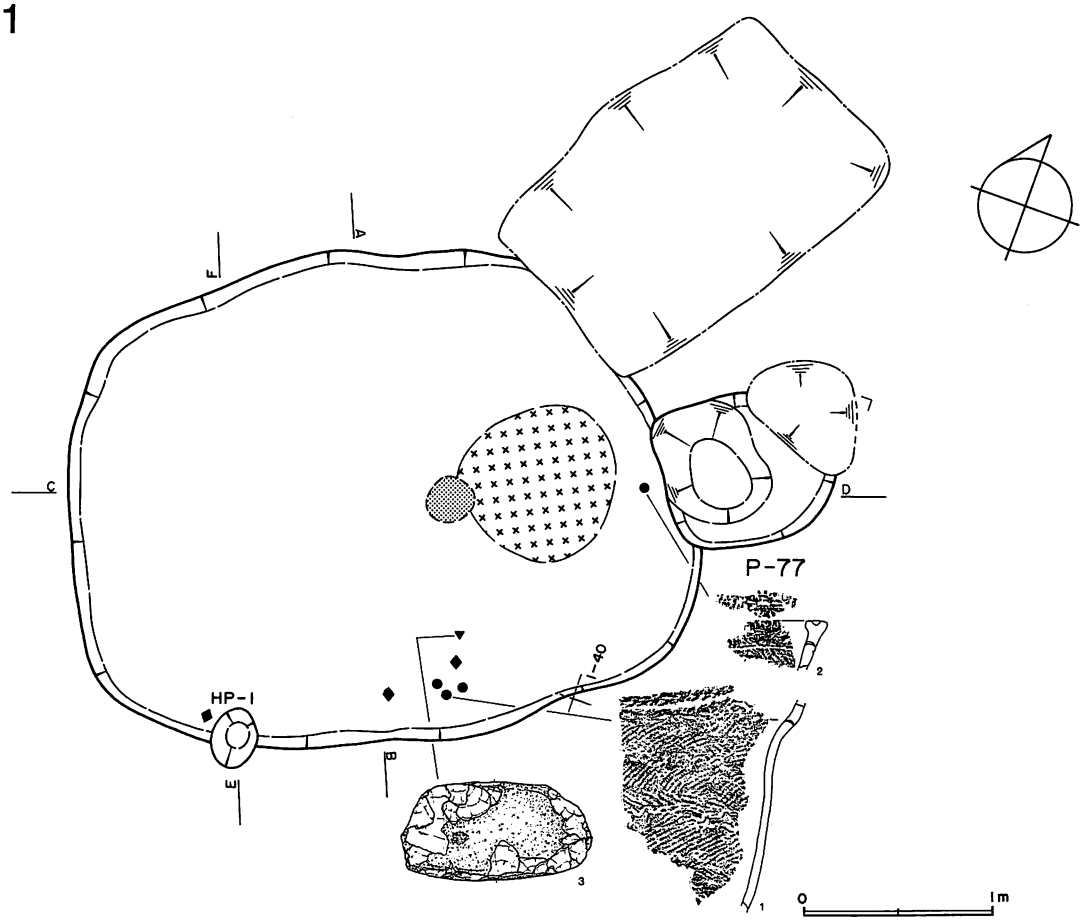
重複　縄文時代の遺構との重複はないが，旧石器のブロック（Sb－7）と重複している。

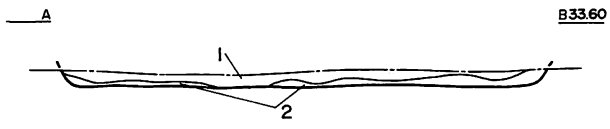
確認・調査　昭和61年の工事立会時に確認し，昭和62年度に調査した。第Ⅰ，Ⅱ層除去後，第Ⅲ層上面で平面形を確認し，セクションベルトを十字に設定した。　セクションベルト

壁　残存していた高さは南西部で38cm，北東部で15cm，傾斜は比較的ゆるやかである。

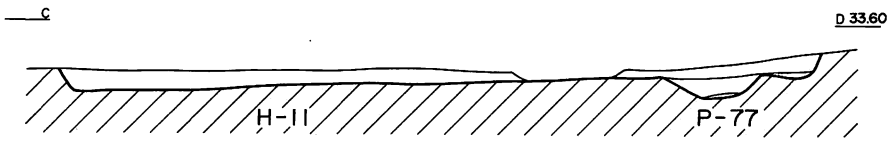
床　全体に平坦で，堅く，中央部は特にしまっている。

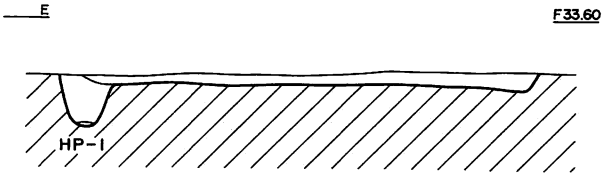
H-11



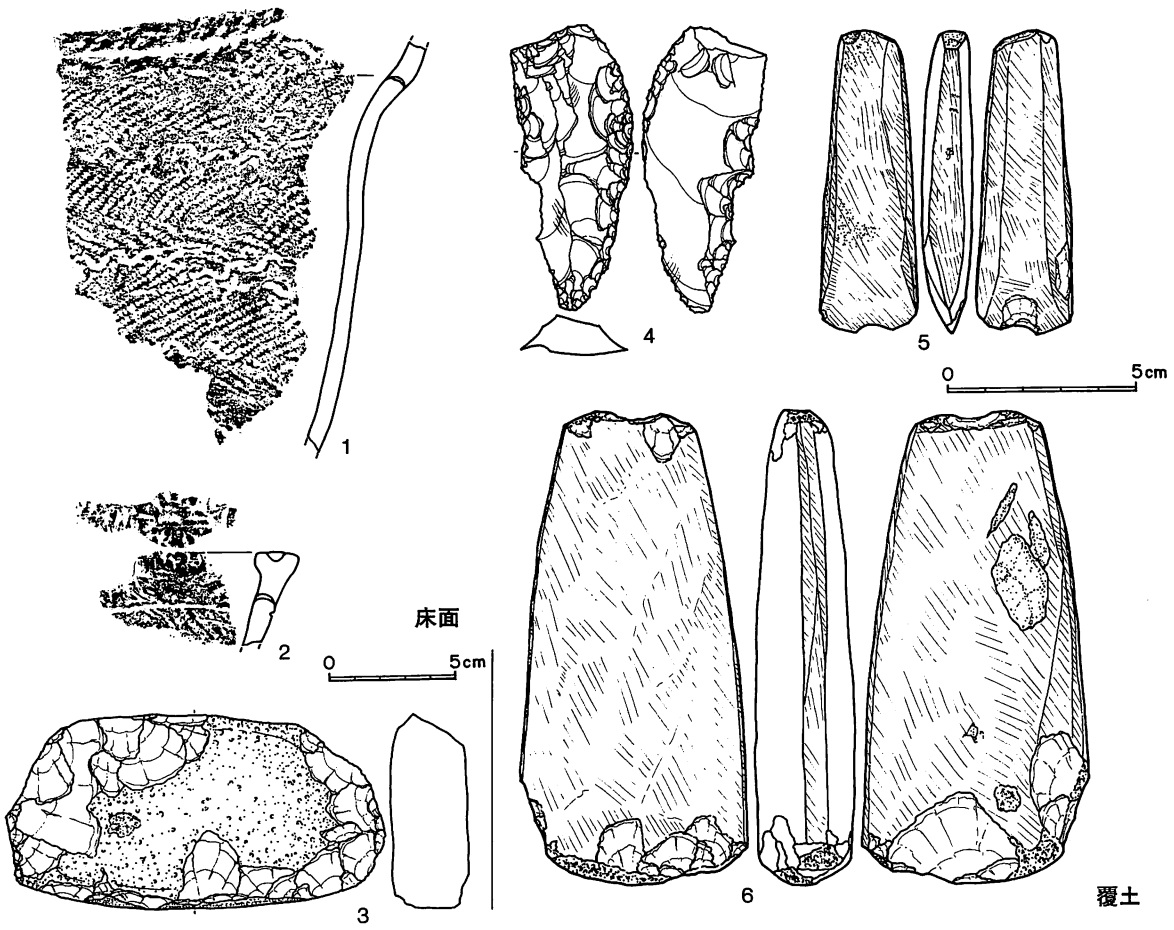


1　暗褐色土（ローム粒微量）
2　黄褐色土（ローム粒少量）





図Ⅲ－52　住居跡(51)・H－11



図Ⅲ－53　住居跡(52)・H－11遺物

溝　壁際に1条，幅8～18cm，深さ5 cm前後の溝がめぐっている。　周　溝

柱穴　床面上で6ヵ所のピットを検出したが，深さと位置からみて，HP－1～5の5ヵ所が主柱穴とみられる。　主柱穴

炉　床面中央南西寄りに地床炉が1ヵ所ある。　地床炉

覆土　1層は黄褐色火山灰，2層は第Ⅱ層の黒色腐植土で，3層以下は明黄褐色ローム粒，ブロックがみられる。

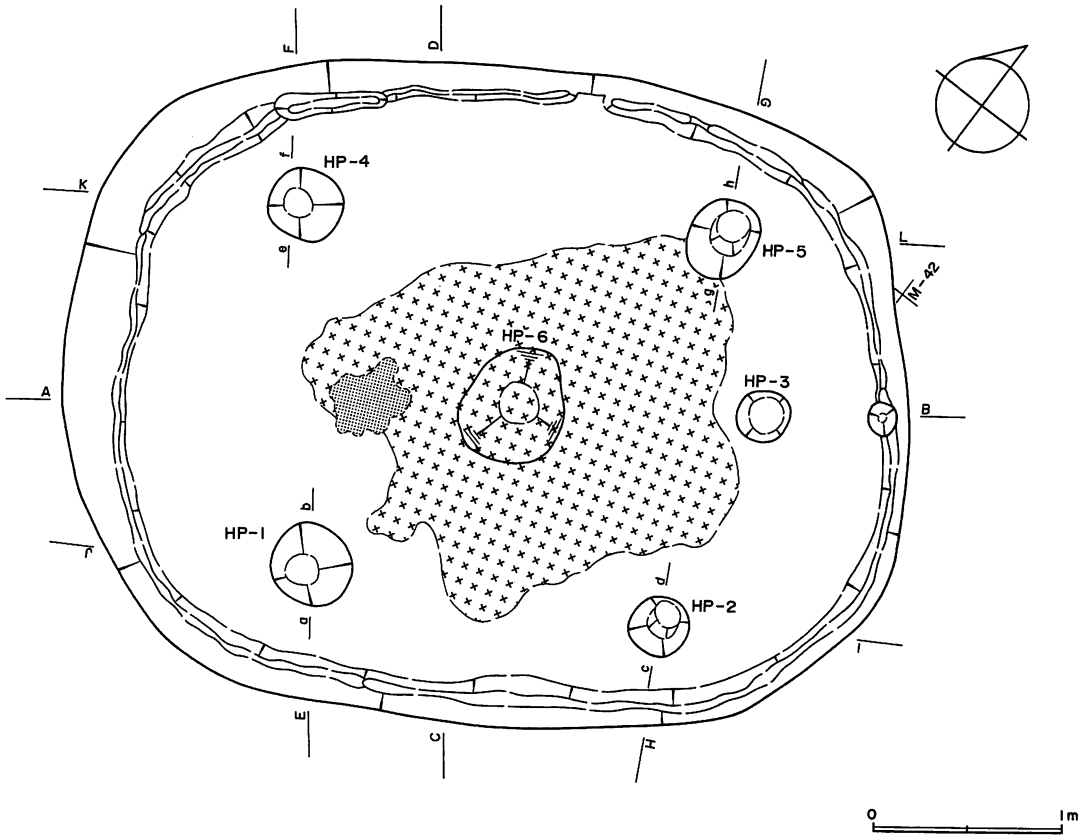
遺物出土状況　出土遺物総数は143点，その内訳は土器43点，石器など100点で，覆土の遺物は北西側，床面の遺物は中央部に多く分布している。また，床面中央には拳大の礫が12点比較的まとまってみられた。覆土中の遺物の中には細石刃，剝片，削片など旧石器が含まれている。

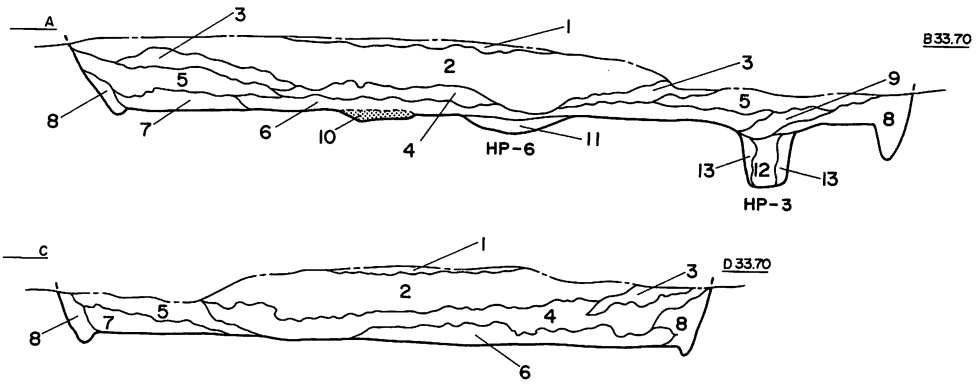
遺物　1～4は床面，5～7は覆土出土で，1～4，6，7はⅢ群A_3類，5はⅠ群A類土器である。1，2，6，7は口縁部，3は胴部，4は底部の破片で，1，6は沈線文，7は貼付帯のある突起部分である。　Ⅲ群A_3類　Ⅰ群A類

8は床面，9，10は覆土出土で，8は主剝離面の周囲に加工のみられるスクレイパー，9は旧石器の細石刃，10は縦長のUフレイクである。3点とも頁岩製である。　石　器

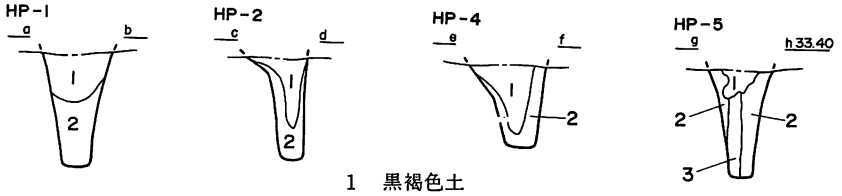
時期　縄文時代中期中葉，Ⅲ群A_3類土器の時期である。　中期中葉

H-12



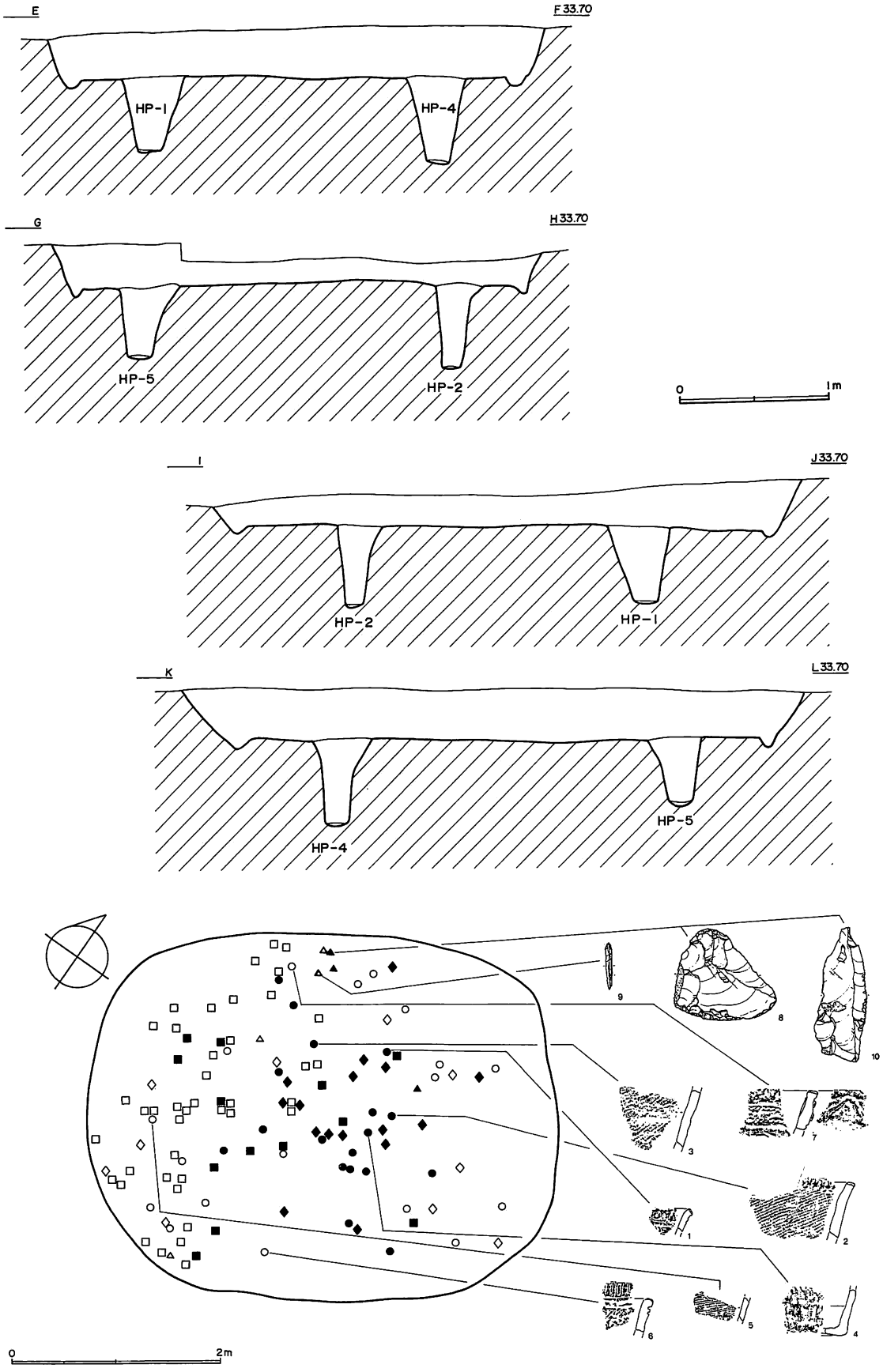


1 黄褐色土（火山灰）
2 黒褐色土（黄褐色火山灰微量）
3 暗褐色土
4 褐色土（ローム粒，炭化物少量）
5 暗茶褐色土（ローム粒多量）
6 褐色土
7 黒褐色土
8 暗茶褐色土（ロームブロック多量）
9 黒褐色土（ローム粒を含む）
10 赤褐色土（焼土）
11 暗茶褐色土（ローム粒，焼土粒を含む）
12 暗褐色土
13 明黄褐色土

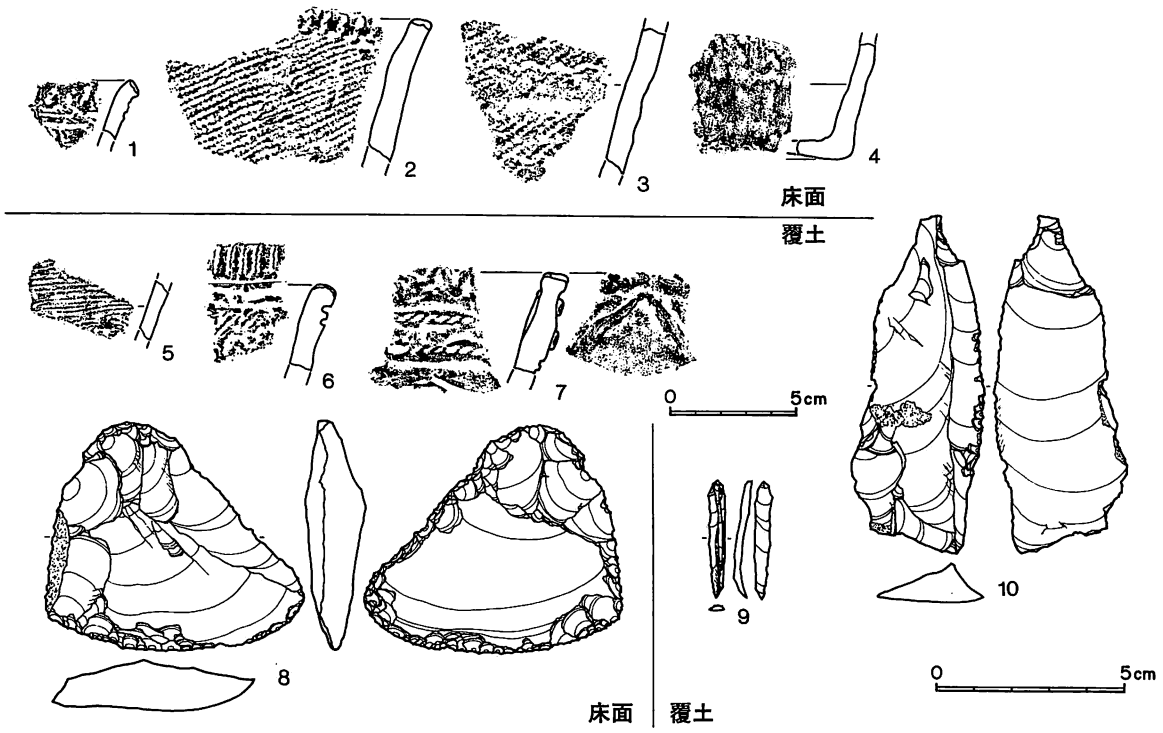


1 黒褐色土
2 黄褐色土
3 暗褐色土

図Ⅲ－54　住居跡(53)・H－12



図Ⅲ－55　住居跡(54)・H－12



図Ⅲ－56　住居跡(55)・H－12遺物

H－13（図Ⅲ－57，図版19）

位置　M－24　　**規模**　2.22×1.78/2.08×1.62/0.24m

平面形　隅丸長方形　　**床面積**　2.91m²

重複　北東部がP－27に切られている。

確認・調査　昭和60年に西側の一部を確認し，昭和61年度に完掘した。60年当時は土壙と判断してP－5としたが，最終的には住居跡にした。

壁　残存していた高さは15～20cm，傾斜はきつい。

床　平坦で堅い。

溝　なし。

柱穴　床面中央南西寄りに2ヵ所のピットを検出した。大きさは主柱穴とみなすに十分であるが，位置からみて付属の土壙の可能性が強い。

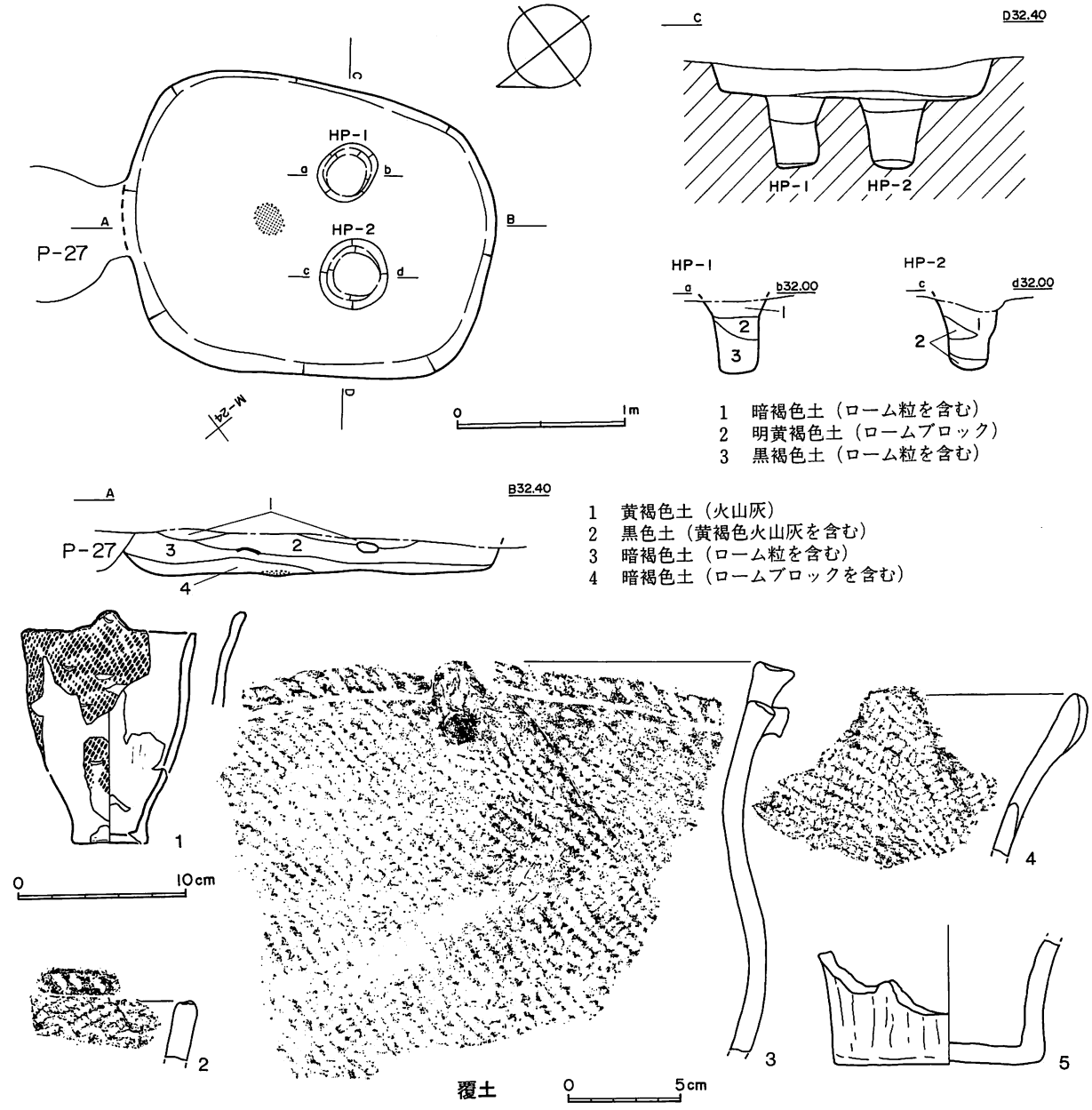
地床炉　**炉**　床面中央北東寄りに地床炉が1ヵ所ある。

覆土　1層は黄褐色火山灰，2は第Ⅱ層の黒色腐植土で，2，4層には明黄褐色ローム粒がまじる。

遺物出土状況　出土遺物総数は94点，その内訳は土器89点，石器など5点，すべて覆土出土である。

Ⅲ群A_3類　**遺物**　1～5は覆土出土のⅢ群A_3類土器である。1は2個の山形突起のある小型の土器，2～4は縄文のみの口縁部，5は底部の破片で，3にはボタン状の貼り付けがみられる。

中期中葉　**時期**　縄文時代中期中葉，Ⅲ群A_3類土器の時期である。



図Ⅲ－57　住居跡(56)・H－13, －13遺物

(2)　フラスコ状ピット

調査区域の中央部東側，25～36ライン，L～Pラインの間に6基分布する。P－23，26，29は壁面の崩落がなく，構築時の形状で掘り上げることができた。大きさは確認面で径0.8～1.5m，底面で径2～2.5m，深さは1.3～1.7mで，いずれも底面中央に浅いピットがある。P－2，34，56は壁面の崩落が著しく，掘り上がりは円筒状になった。P－2，34の確調面はいずれも方形になって，段がみられる。大きさは底面で径2.3～2.5m，深さは1.8～2.2mと大型である。以下P－2，23，26，29，34，56の順に，位置，規模，特徴，出土遺物，時期などを説明する。

分　布

説明手順

P－2（図Ⅲ－59～61，図版20．42）

位置　L－27･28　　**規模**　2.36×2.12/2.50×2.28/2.02m

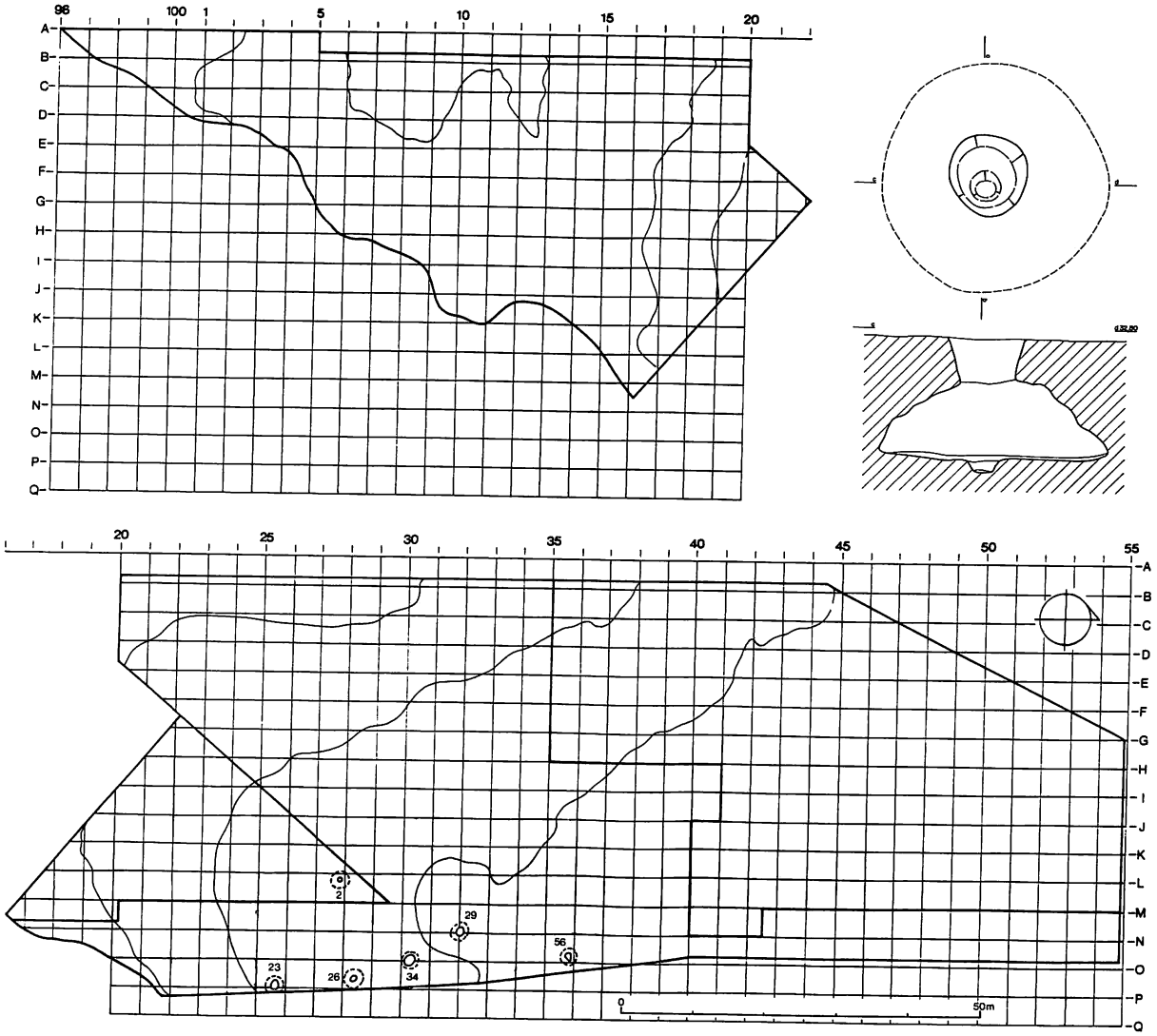
特徴　二段構造で，上部の平面形は隅丸方形である。覆土は明黄褐色ロームがブロック状に入り，7層は壁が全体に崩落したものとみられる。底面より50cm上の面にはベンガラ，骨片，炭化物を含む薄層（6層）があり，5個体分の土器が出土した。また，二段構造の上部でも小型の土器が2個出土し，下部から出土した土器とは時間差があると考えられる。

ベンガラ

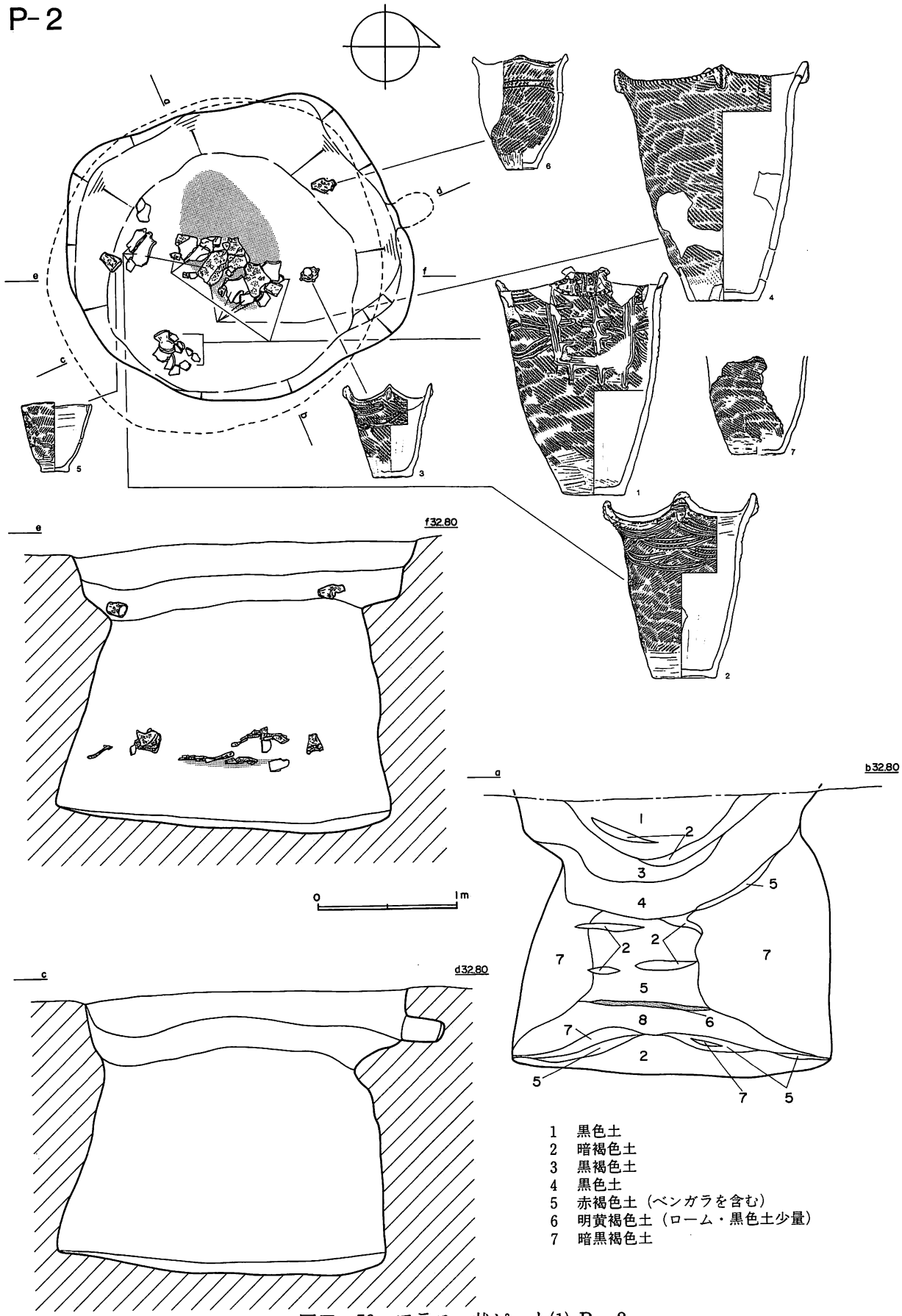
遺物　1～19はすべて覆土出土であるが，先に述べたように5，6の土器は上部の出土である。1～7，11～14はⅢ群A_3類，8～10はⅠ群A類土器である。

Ⅲ群A_3類
Ⅰ群A類

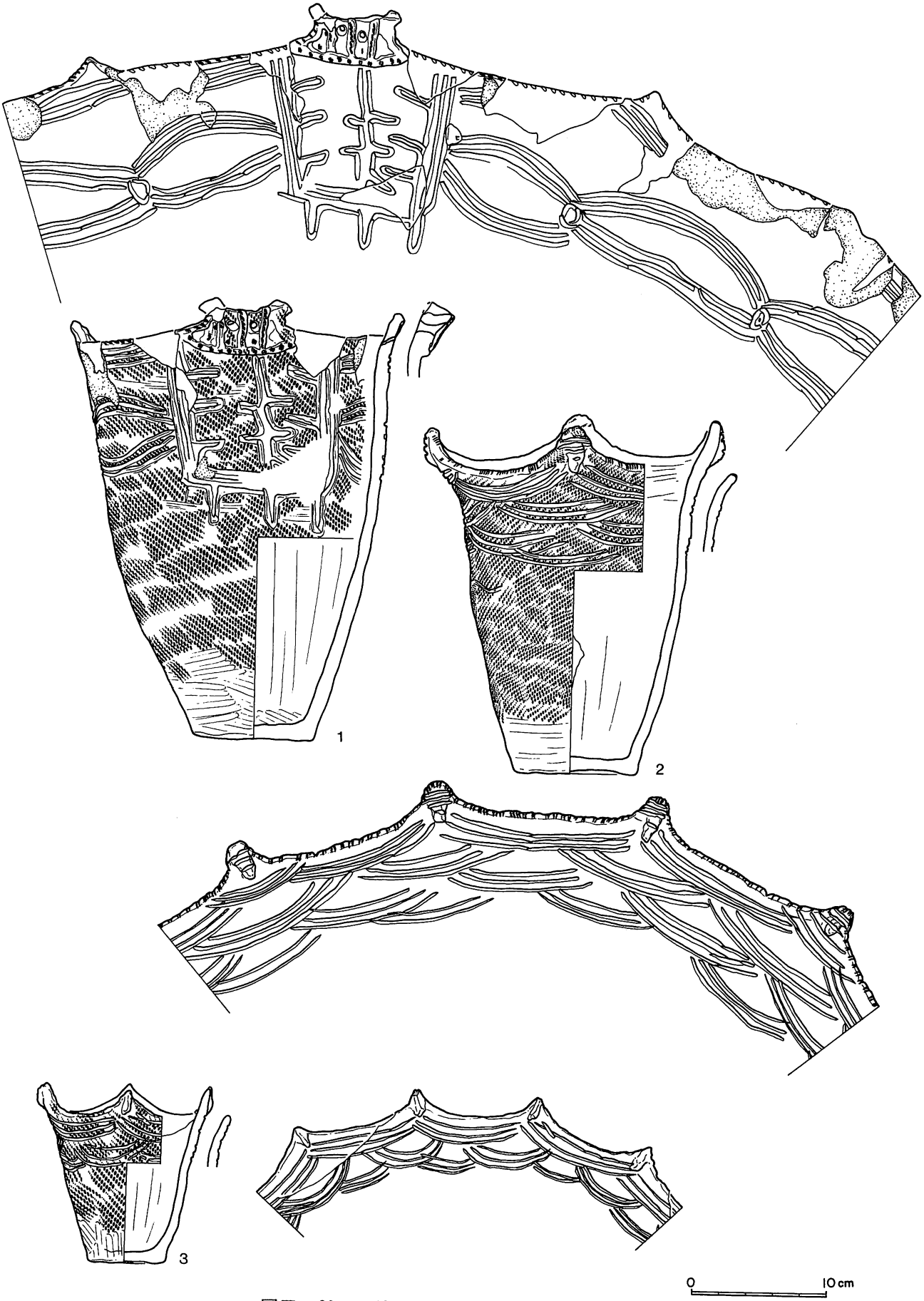
1はM字形に近い1個の突起と3個の山形突起があり，M字形部分に枝状の沈線文，他には3本単位の木の葉状の弧線文がみられる。2，3はいずれも4個の山形突起があり，3本ないし2本単位の弧線文が4段ないし3段みられる。4は小さな山形突起部分に耳状の貼付帯があり，口唇に縄の圧痕が施されている。6は口唇および胴部上半に縄線文が施されている。8～10は貝殻文，11～14は突起のある土器の口縁部で，11～13には沈線文がみられる。



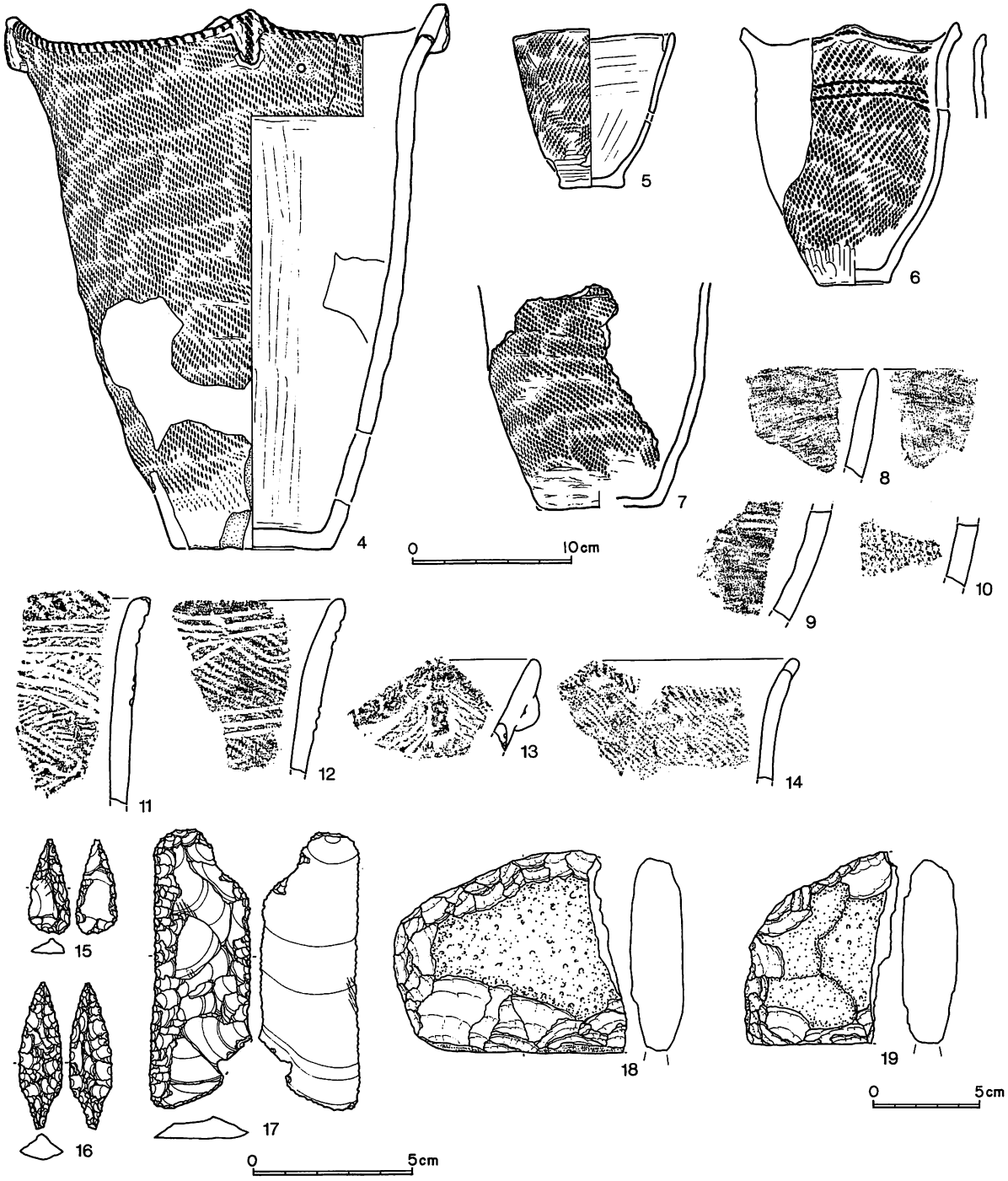
図Ⅲ－58　フラスコ状ピット分布図



図Ⅲ－59　フラスコ状ピット(1)・P－2



図Ⅲ－60　フラスコ状ピット(2)・P－2遺物

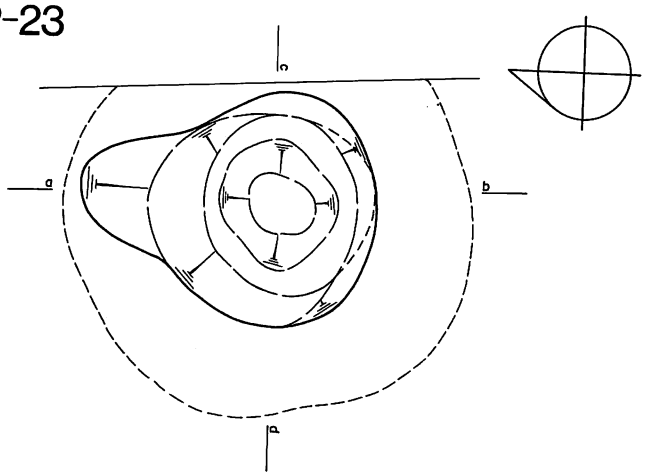


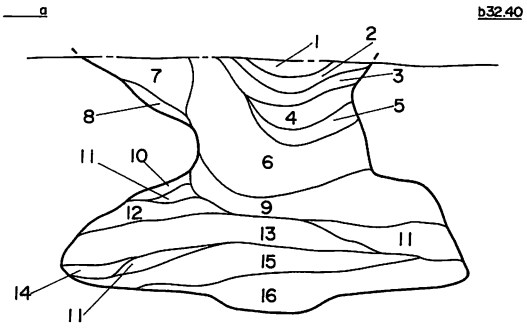
図Ⅲ－61　フラスコ状ピット(3)・P－2遺物

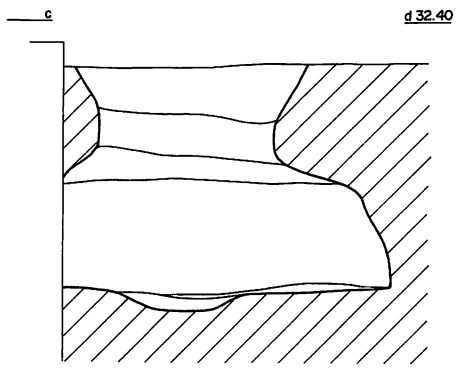
15は粗い加工の三角形の石鏃，16は大型の有茎石鏃，17は縦長剝片を利用した片面加工のスクレイパー，18，19は扁平礫の周囲を打ち欠いたすり石の破片である。　石　器

時期　縄文時代中期中葉，Ⅲ群A_3類土器の時期である。　中期中葉

P-23

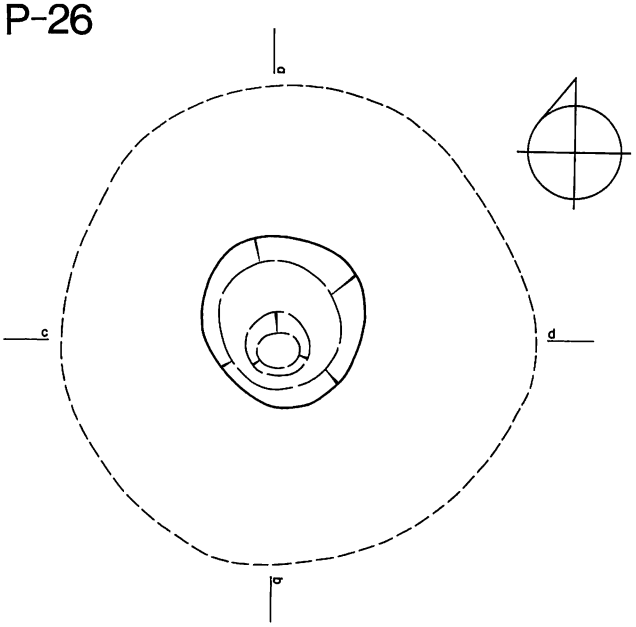


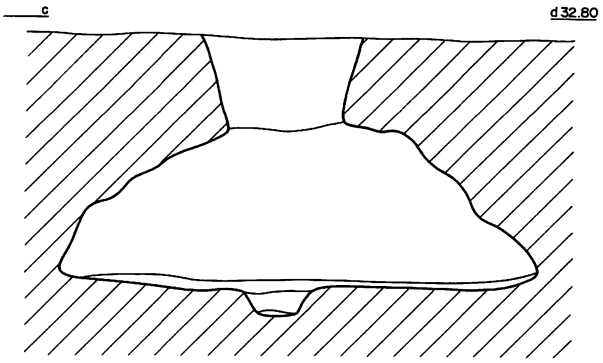


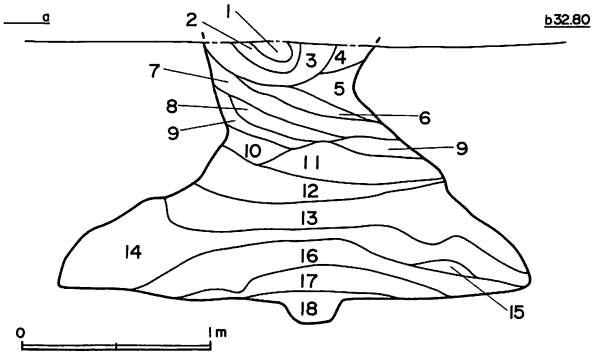


1 暗褐色土（ローム粒少量）
2 黒褐色土（ローム粒少量）
3 暗褐色土（ローム粒少量）
4 黒褐色土
5 暗茶褐色土
6 茶褐色土
7 黒褐色土
8 暗黄褐色土（ロームブロック）
9 暗茶褐色土（ロームブロック・炭化物を含む）
10 暗褐色土（ローム粒少量）
11 暗黄褐色土（ローム）
12 暗茶褐色土（炭化物を含む）
13 茶褐色土（ロームブロック・炭化物を含む）
14 黒褐色土
15 黒褐色土（ローム粒を含む）
16 暗茶褐色土（炭化物少量）

P-26

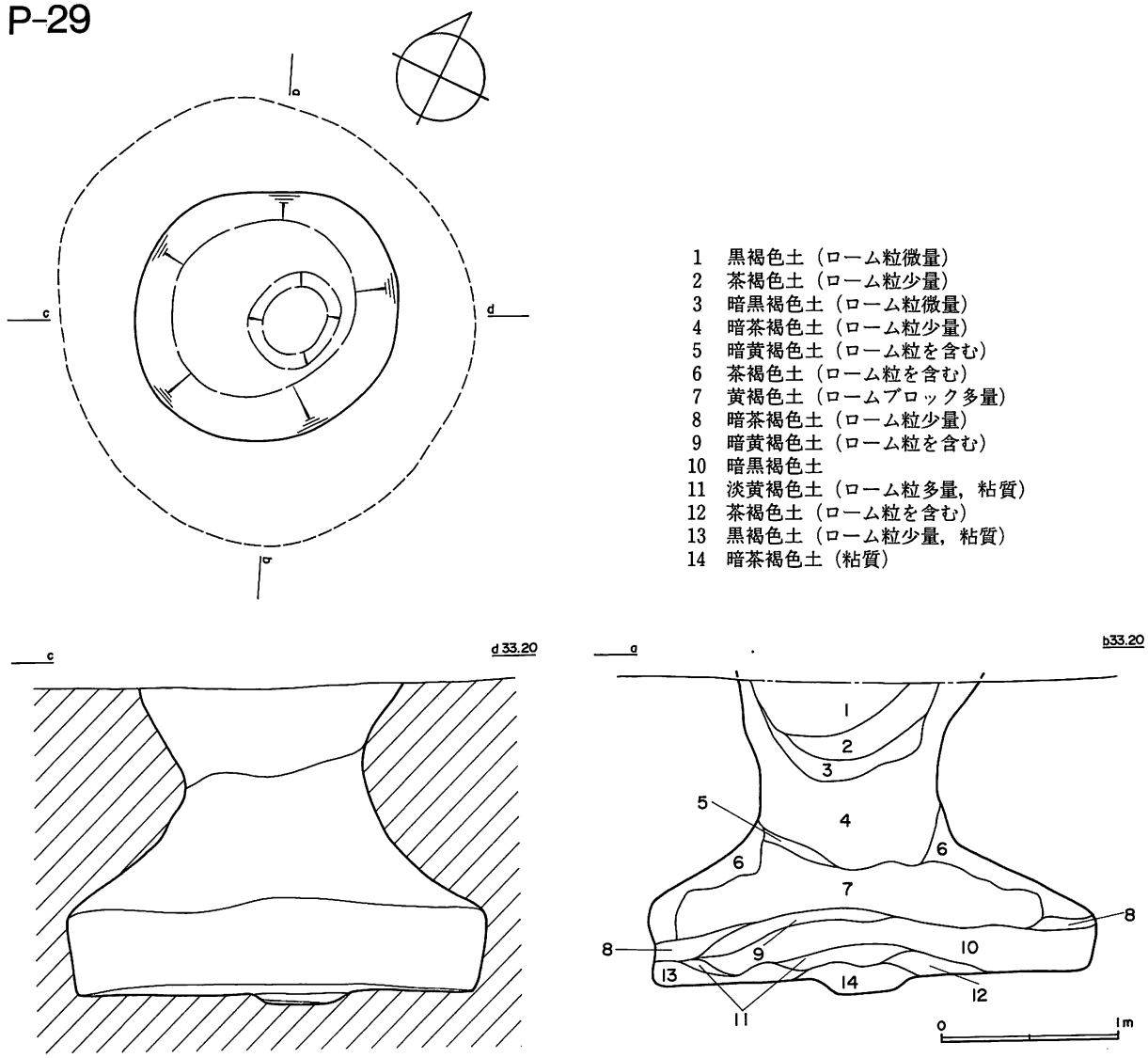






1 明黄褐色土（ローム）
2 暗褐色土（ロームブロック多量）
3 暗褐色土（ローム粒少量）
4 暗褐色土（ローム粒を含む）
5 暗褐色土（ローム粒・炭化物を含む）
6 黒褐色土（ローム粒・炭化物を含む）
7 暗褐色土（ローム粒・炭化物を含む）
8 黒褐色土（ローム粒・炭化物を含む）
9 暗黄褐色土（ローム粒多量）
10 黒色土（炭化物少量）
11 暗黄褐色土（ロームブロックを含む）
12 暗褐色土（ローム粒多量）
13 黒褐色土（ローム粒少量）
14 茶褐色土（ローム粒を含む）
15 黒褐色土（ローム粒微量）
16 暗黄褐色土（ローム粒多量，互層）
17 暗茶褐色土（ローム粒少量）
18 茶褐色土（ローム粒を含む，粘質）

図Ⅲ－62　フラスコ状ピット(4)・P－23，26



図Ⅲ－63　フラスコ状ピット(5)・P－29

P－23（図Ⅲ－62，64，図版21）

位置　O－25，P－25　　**規模**　1.71×1.58/2.16×(1.67)/1.34m

特徴　一部調査区域外に延びているが，全体の形状は把握することができる。壁の崩落がなく，構築時の形状が残っている。底面には皿状の小ピットが中央部にある。

遺物　出土遺物総数は310点，その内訳は土器298点，石器など12点である。

1はⅠ群A類の貝殻文土器，2～6はⅢ群A_3類の土器である。2～4には細い粘土紐の貼付帯上に細い撚糸の圧痕，6，7には沈線文がみられる。　Ⅰ群A類 Ⅲ群A_3類

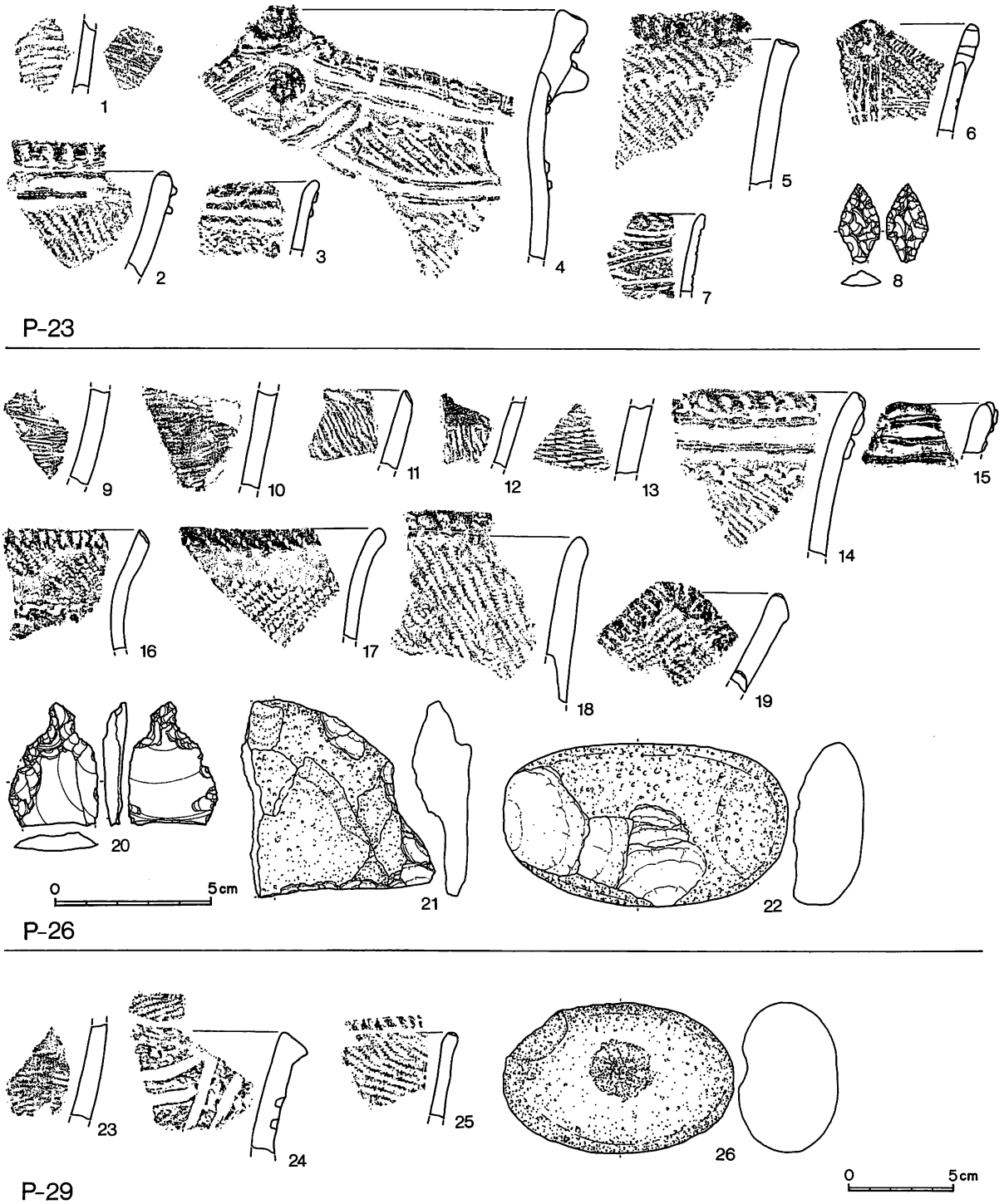
8は幅の広い有茎の石鏃で，めのう質頁岩製である。　石器

時期　縄文時代中期中葉，Ⅲ群A_3類土器の時期である。　中期中葉

P－26（図Ⅲ－62，64）

位置　O－28　　**規模**　0.89×0.87/2.51×2.50/1.49m

特徴　開口部が小さく，壁の崩落もほとんどない。底面の中央部には深さ15cmの小ピット



図Ⅲ－64　フラスコ状ピット(6)・P－23，26，29遺物

がある。

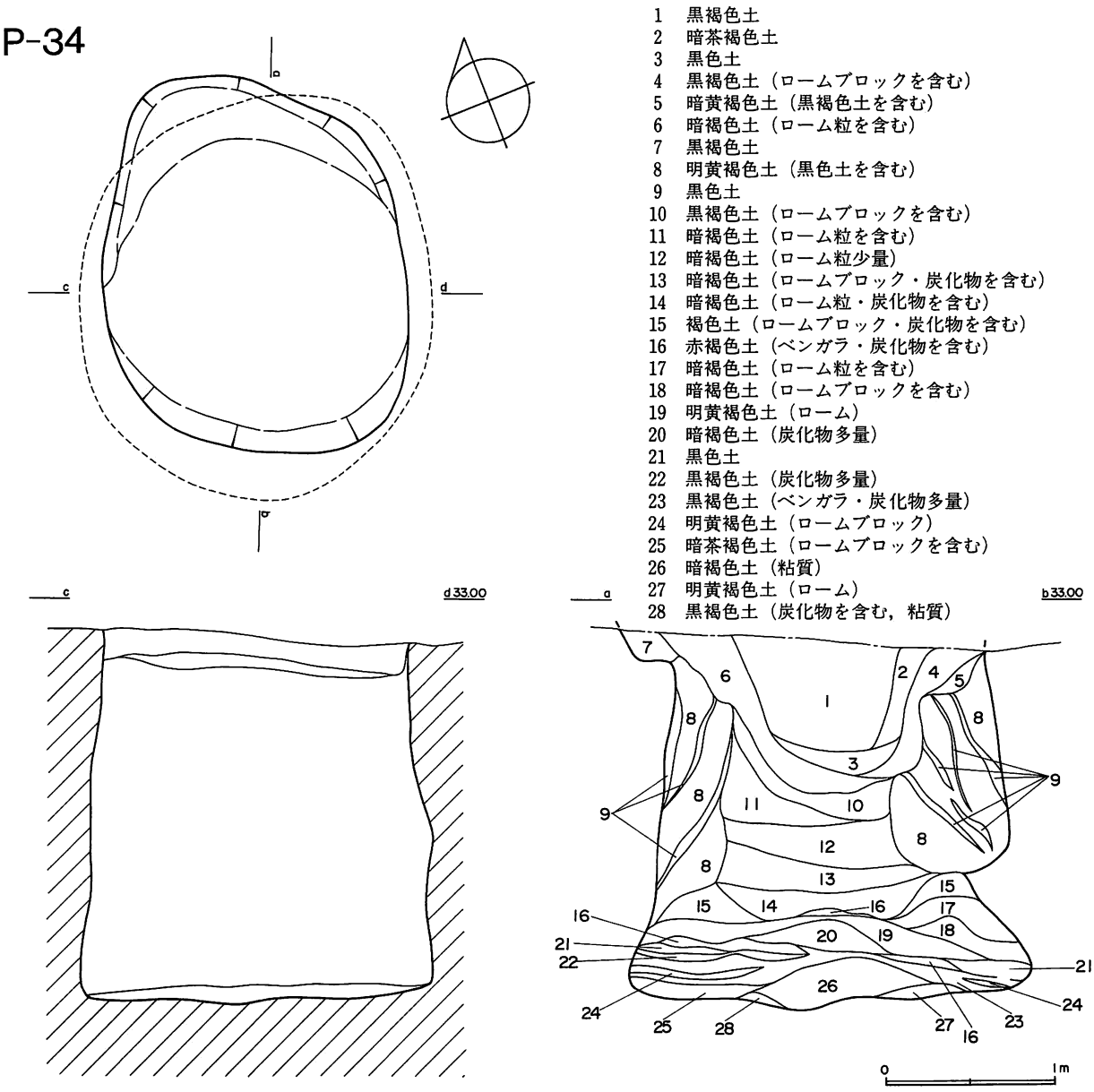
遺物　出土遺物総数は156点，その内訳は土器123点，石器など23点である。

Ⅰ群A類
Ⅲ群A_3類

9～13はⅠ群A類の貝殻文土器，14～19はⅢ群A_3類土器である。20は小さなつまみのつまみ付ナイフの破片。21は扁平礫を打ち欠いたすり石の破片，22は周縁に敲打痕のあるたたき石で，21は頁岩，22は安山岩，23は砂岩製である。

中期中葉

時期　縄文時代中期中葉，Ⅲ群A_3類土器の時期である。



図Ⅲ－65　フラスコ状ピット(7)・P－34

P－29（図Ⅲ－63，64）

位置　M－32　　**規模**　1.53×1.43/2.40×2.36/1.76m

特徴　崩落が少なく，構築時の状況を知ることができる。底面のほぼ中央に深さ5 cmのⅢ状のピットがある。

遺物　出土遺物総数は68点，土器67点，石器1点である。

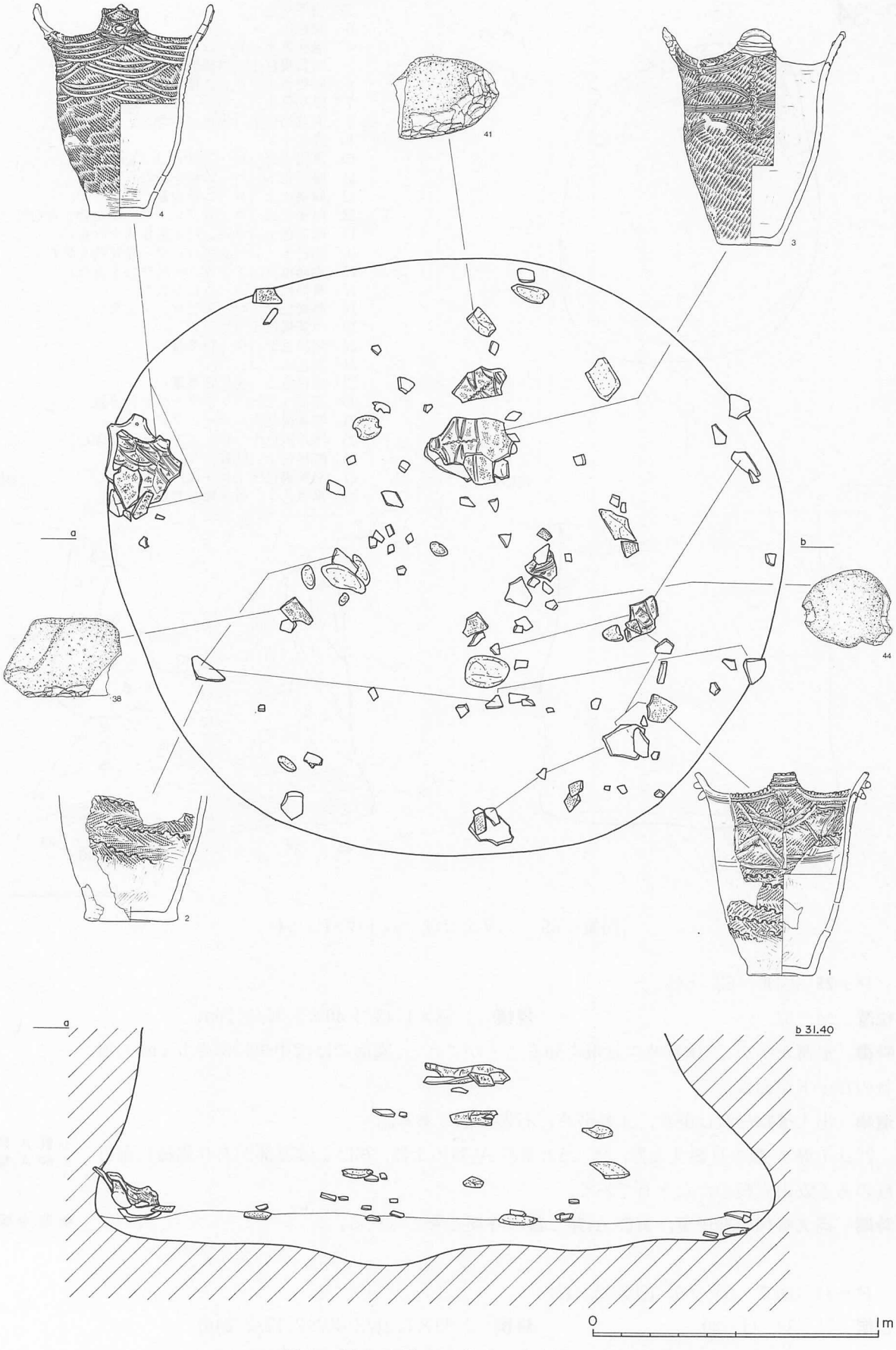
23はⅠ群A類の貝殻文土器，24，25はⅢ群A_3類の土器，26はくぼみ部があり周縁に敲打痕のある安山岩製のたたき石である。　Ⅰ群A類　Ⅲ群A_3類

時期　縄文時代中期中葉，Ⅲ群A_3類土器の時期と考えられる。　中期中葉

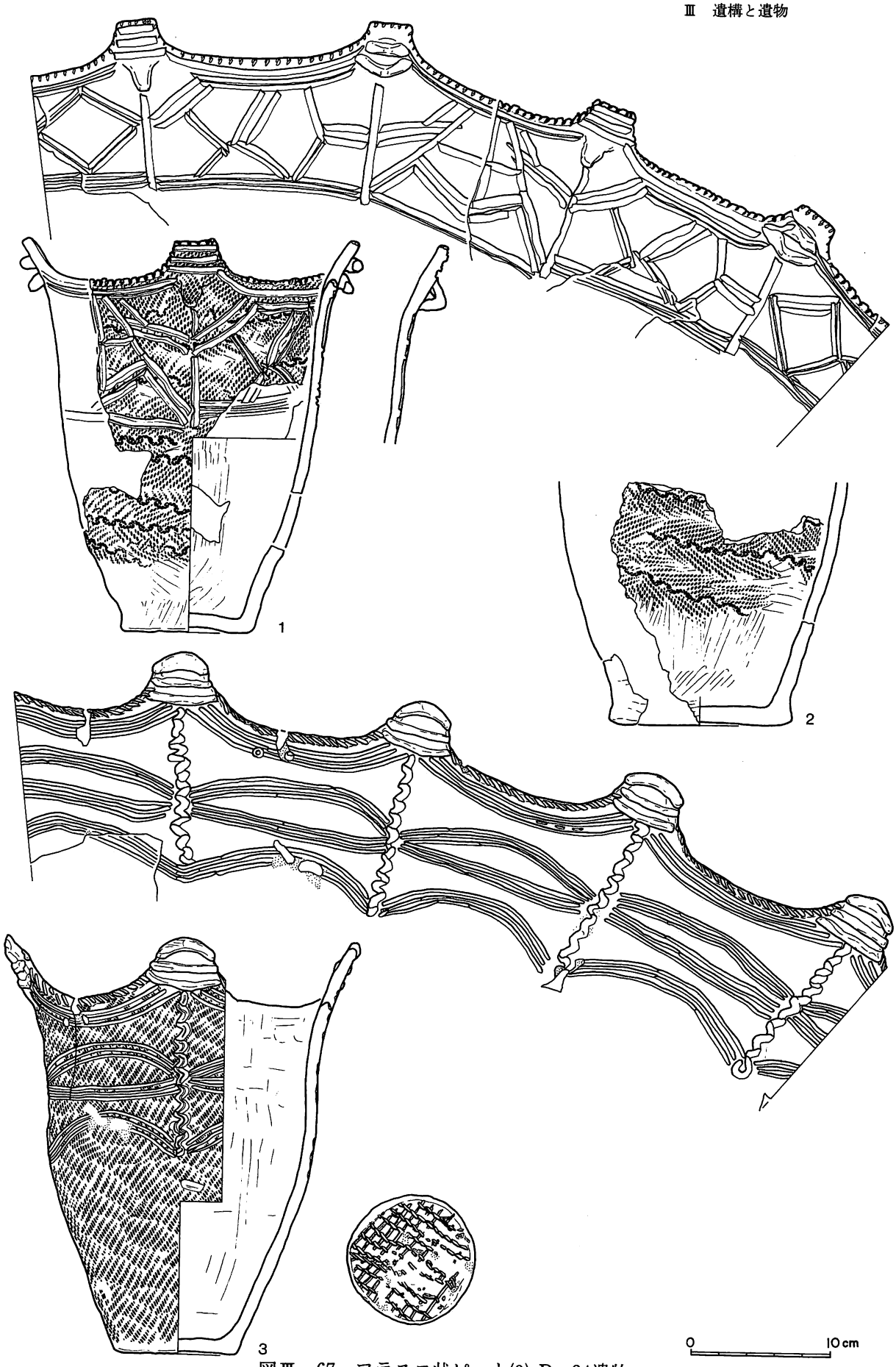
P－34（図Ⅲ－65～69，図版22，43）

位置　N－30，O－30　　**規模**　2.39×1.91/2.40×2.12/2.24m

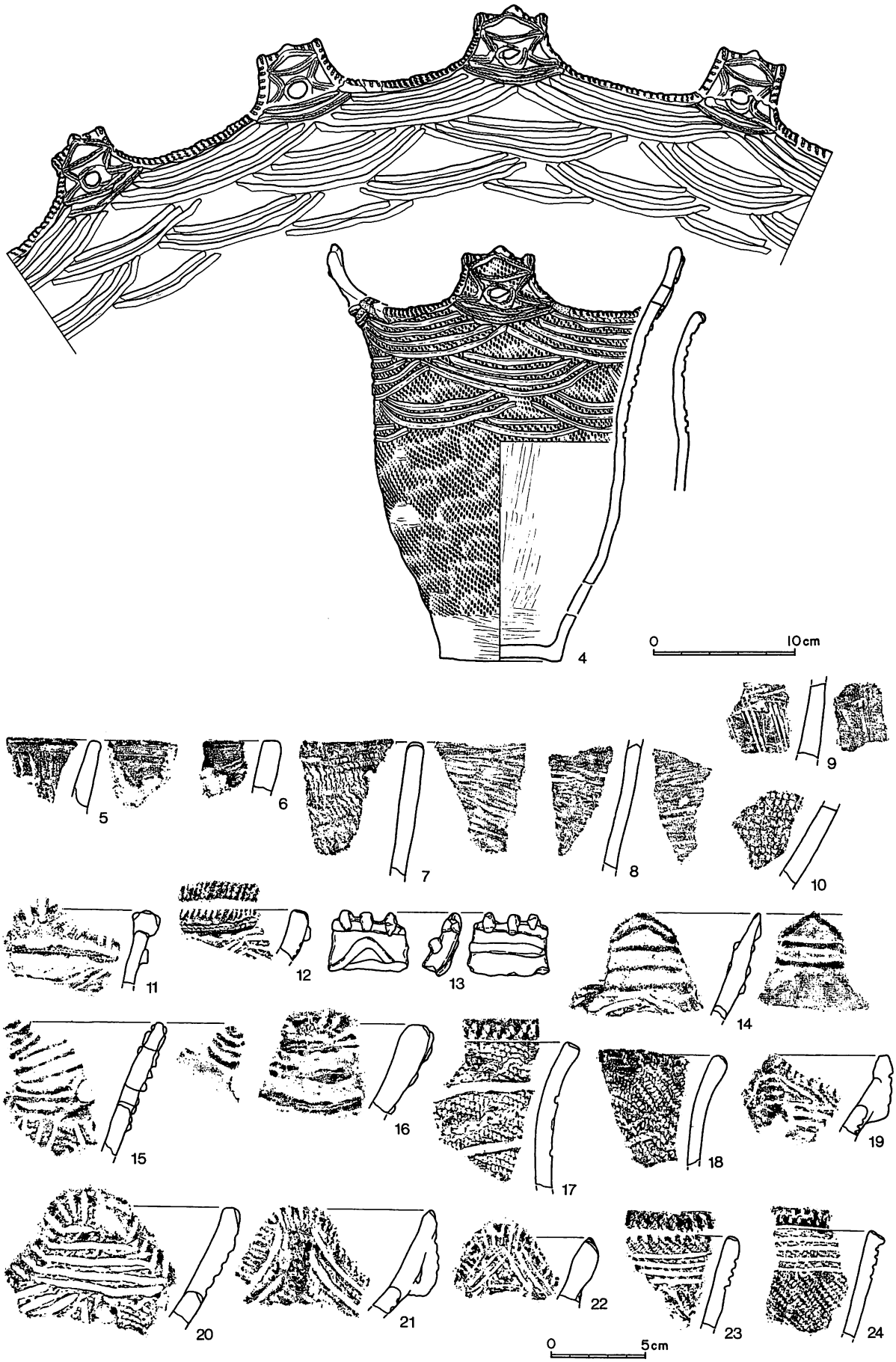
特徴　二段構造で，壁の崩落が著しく，掘り上がりは円筒状である。底面より上50cmの面



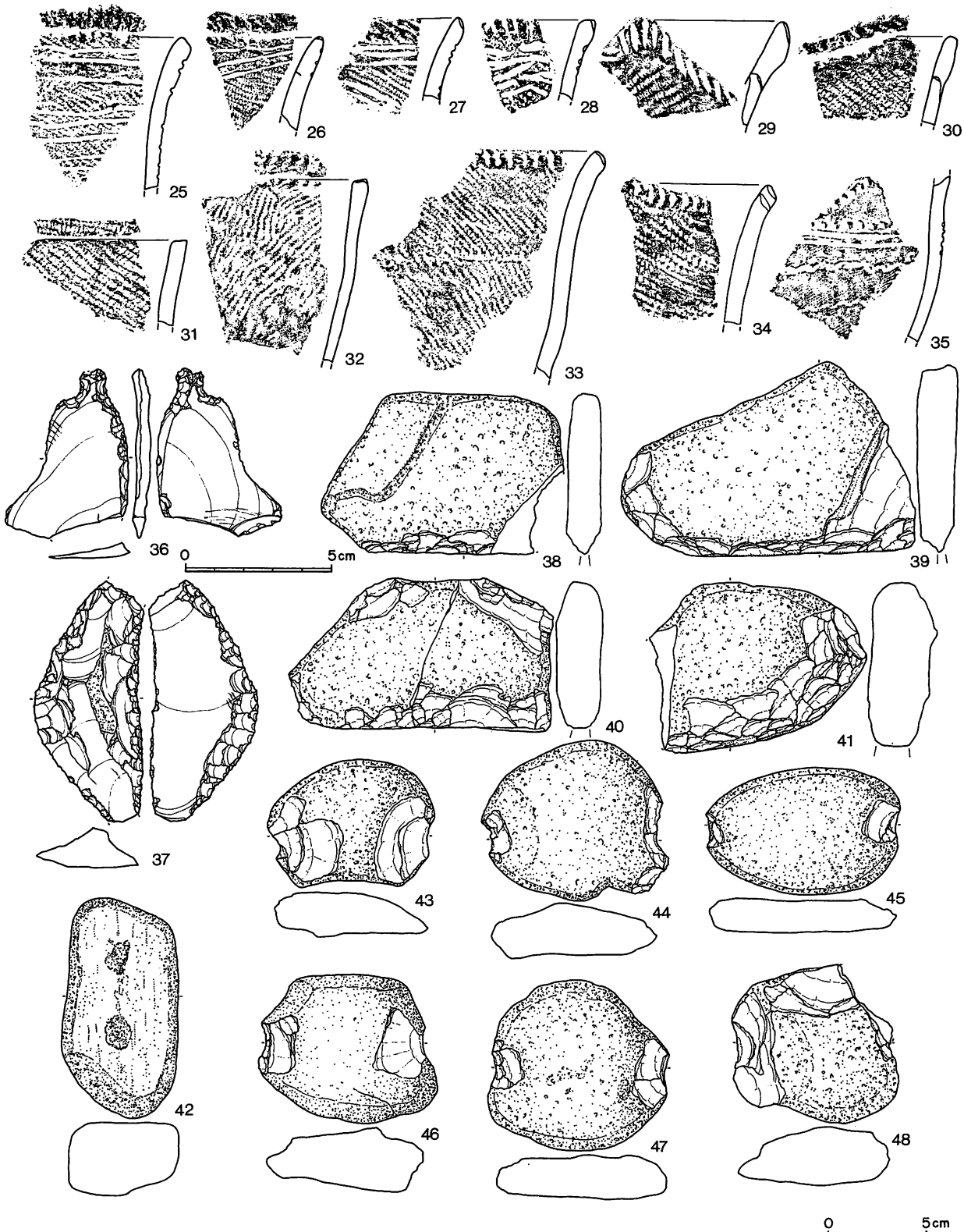
図Ⅲ－66　フラスコ状ピット(8)・P－34



図Ⅲ－67　フラスコ状ピット(9)・P－34遺物



図Ⅲ－68　フラスコ状ピット(10)・P－34遺物

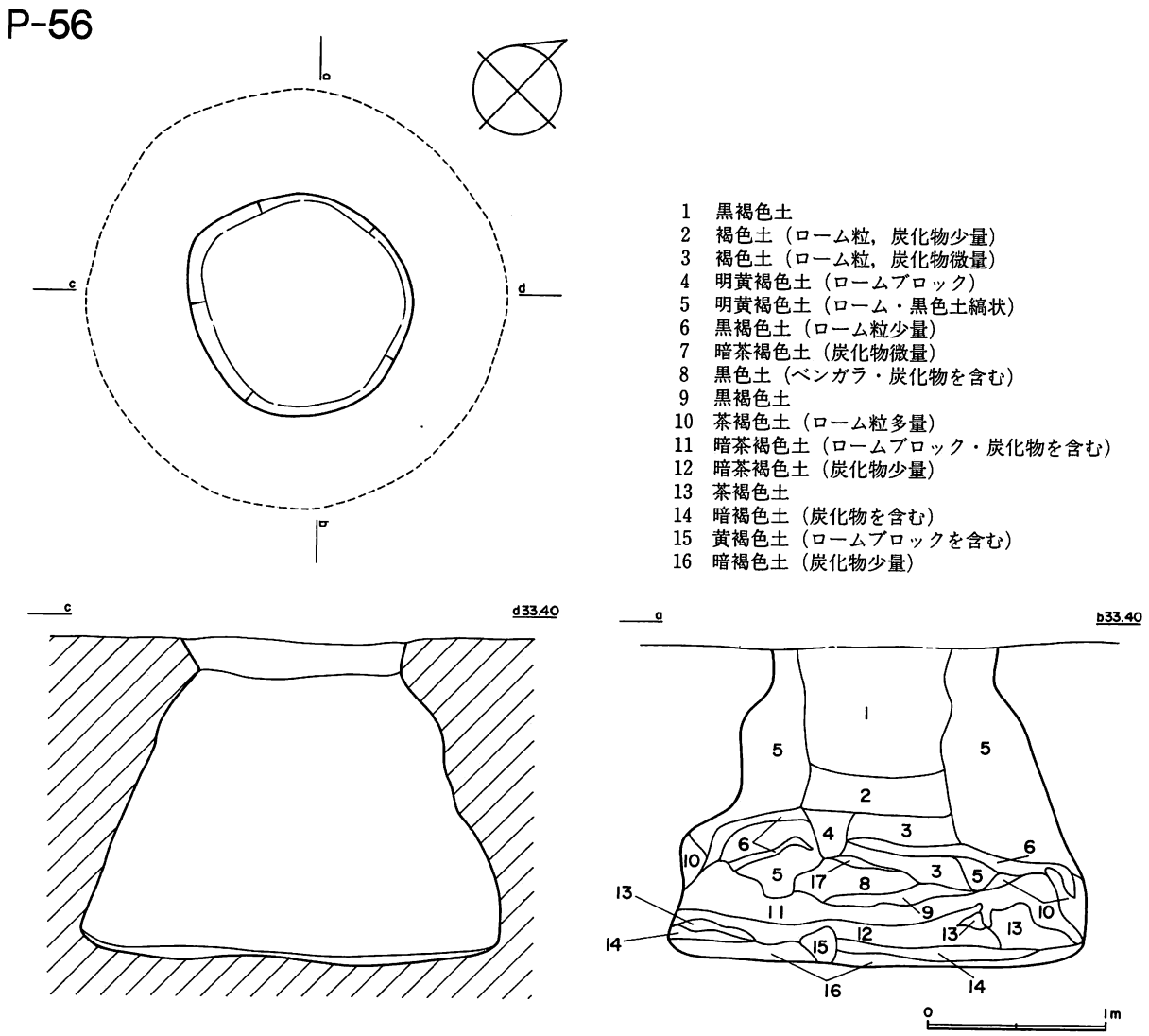


図Ⅲ－69　フラスコ状ピット(11)・P－34遺物

にベンガラ，炭化物などを含んだ薄層（16層）があり，遺物はその面およびその下層から多く出土している。

ベンガラ

遺物　出土遺物総数は559点，その内訳は土器489点，石器など70点で，16層より下位の出土が多く，２個体の土器については潰れたような状態で出土した。



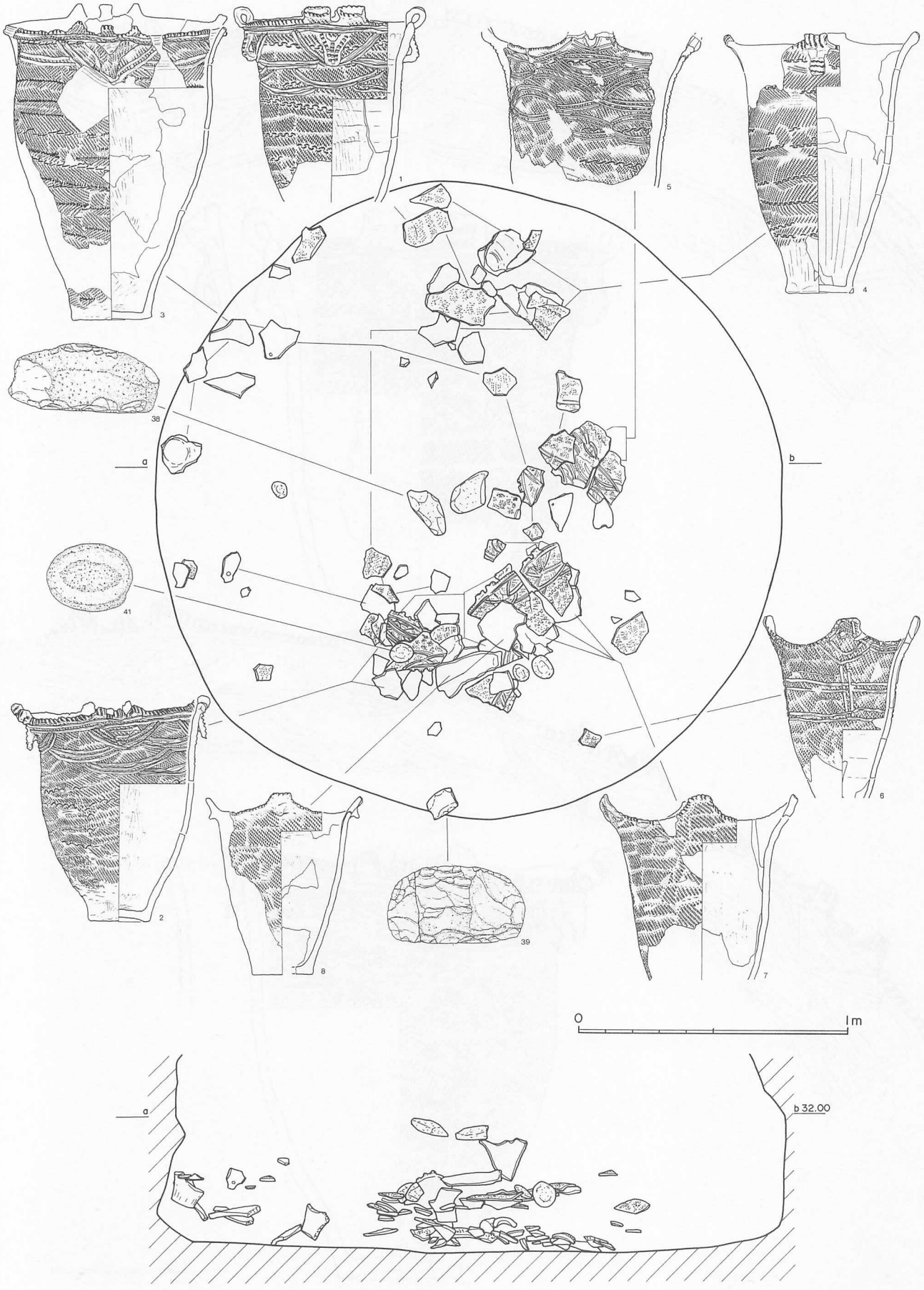
図Ⅲ－70　フラスコ状ピット(12)・P－56

Ⅲ群 A_3類　1，2は結束第2種の原体による羽状の縄文が施されているⅢ群 A_3類土器である。1は4個の弁状の突起に2種の耳状の貼り付けがあり，縦の沈線で四つに区切った区画内を1本または2本単位の沈線を網状にした文様がみられる。口唇には縄の圧痕がある。3，4は弁状の4個の突起があるⅢ群 A_3類土器である。3は突起部に3本の横の貼付帯と蛇行沈線，3本単位の弧線文などがみられる。底部には蓆目の圧痕が残っている。4は突起部に細い撚糸の圧痕のある貼付帯，2本～4本単位の沈線による弧線文がみられる。

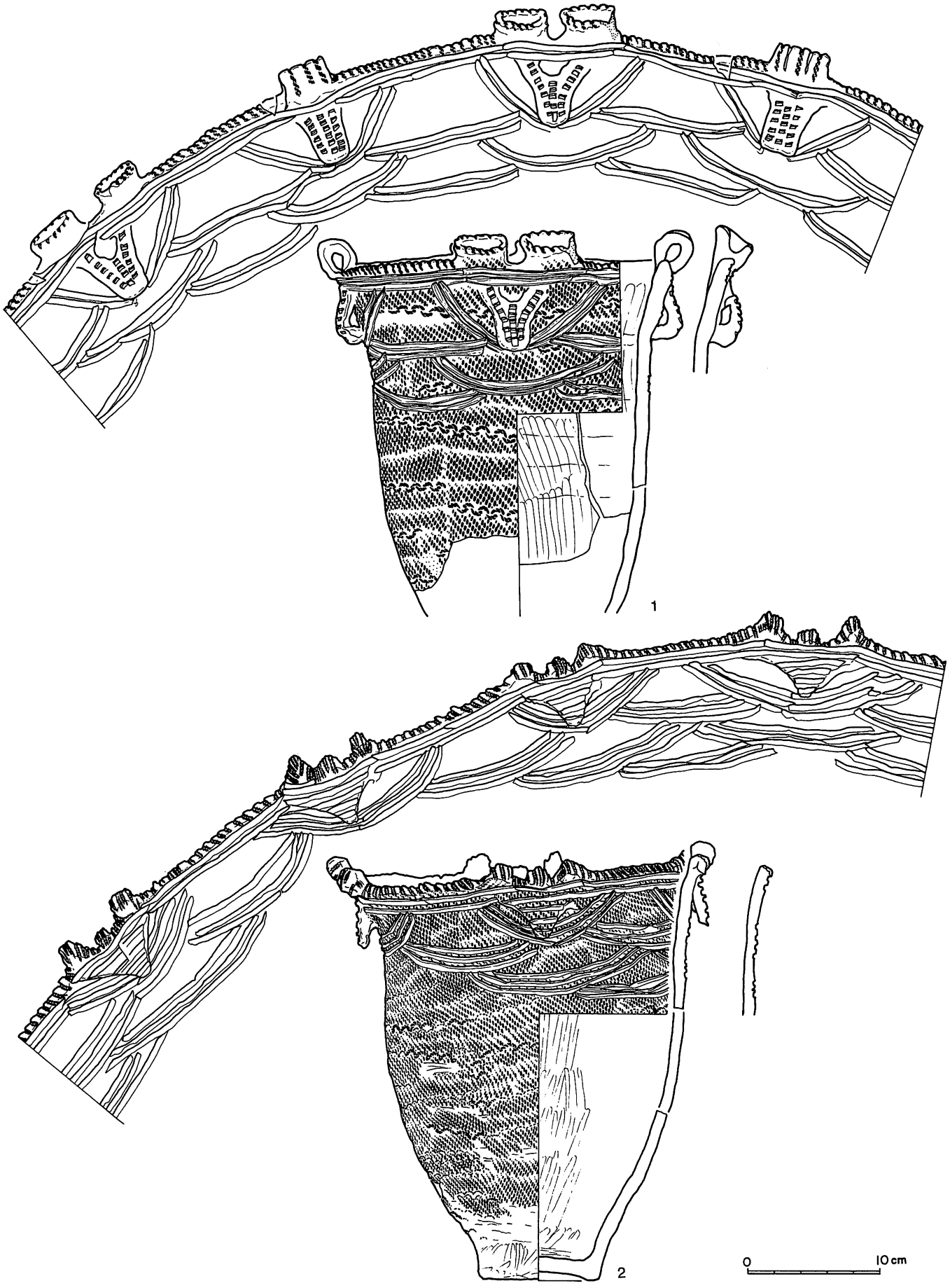
蓆目

Ⅰ群A類　5～10はⅠ群A類の貝殻文土器，11～35はⅢ群 A_3類土器の突起部，口縁部，胴部の破片である。

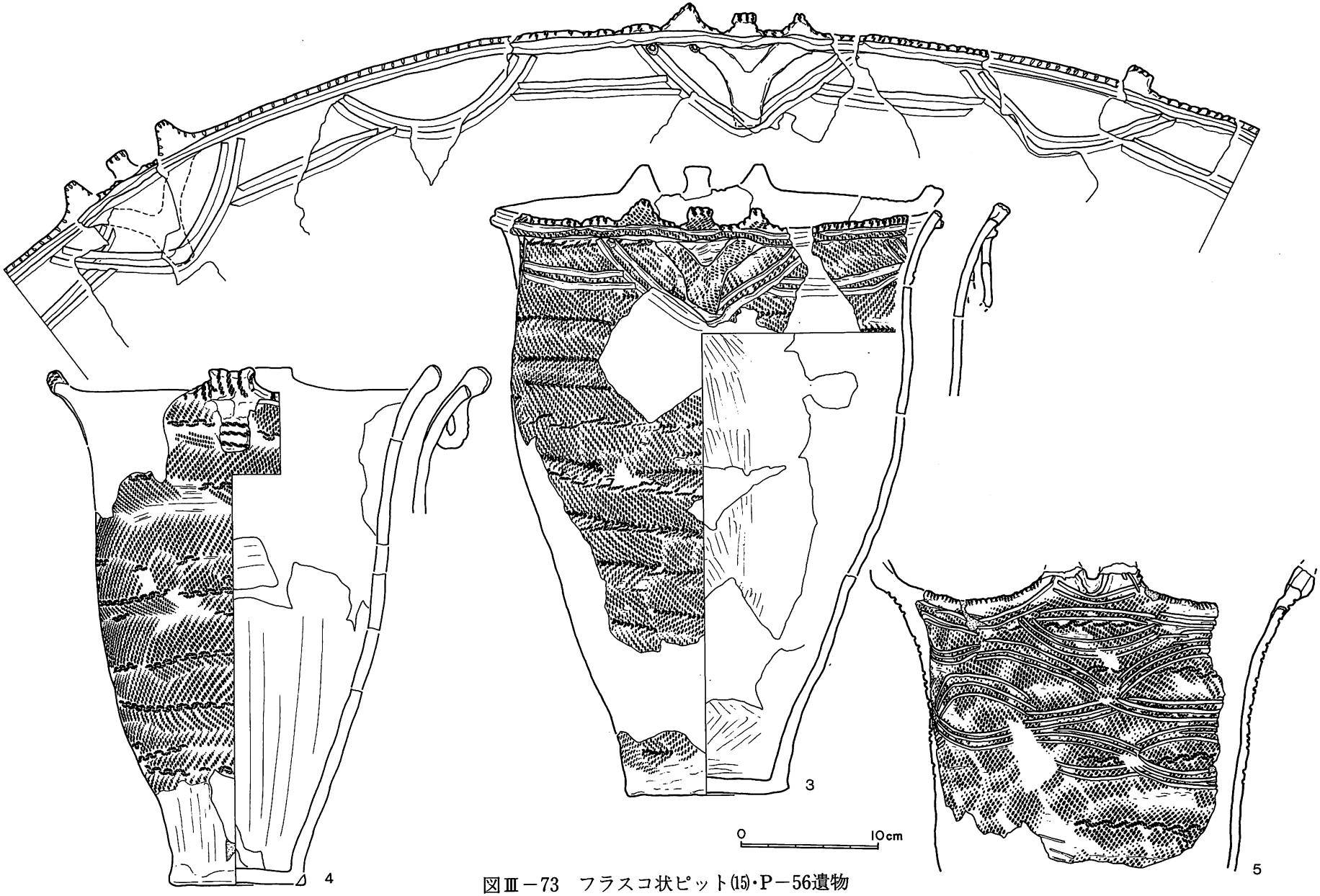
石器　36は小さなつまみのあるつまみ付ナイフ，37は両側縁に加工のあるスクレイパー，38～41は扁平礫の周囲に打ち欠きのみられるすり石，42は2ヵ所のくぼみのあるたたき石，43～48は長軸の両端に打ち欠きのある石錘である。36はめのう質頁岩，37は頁岩，38～43，48は安山岩，44～47は砂岩製である。



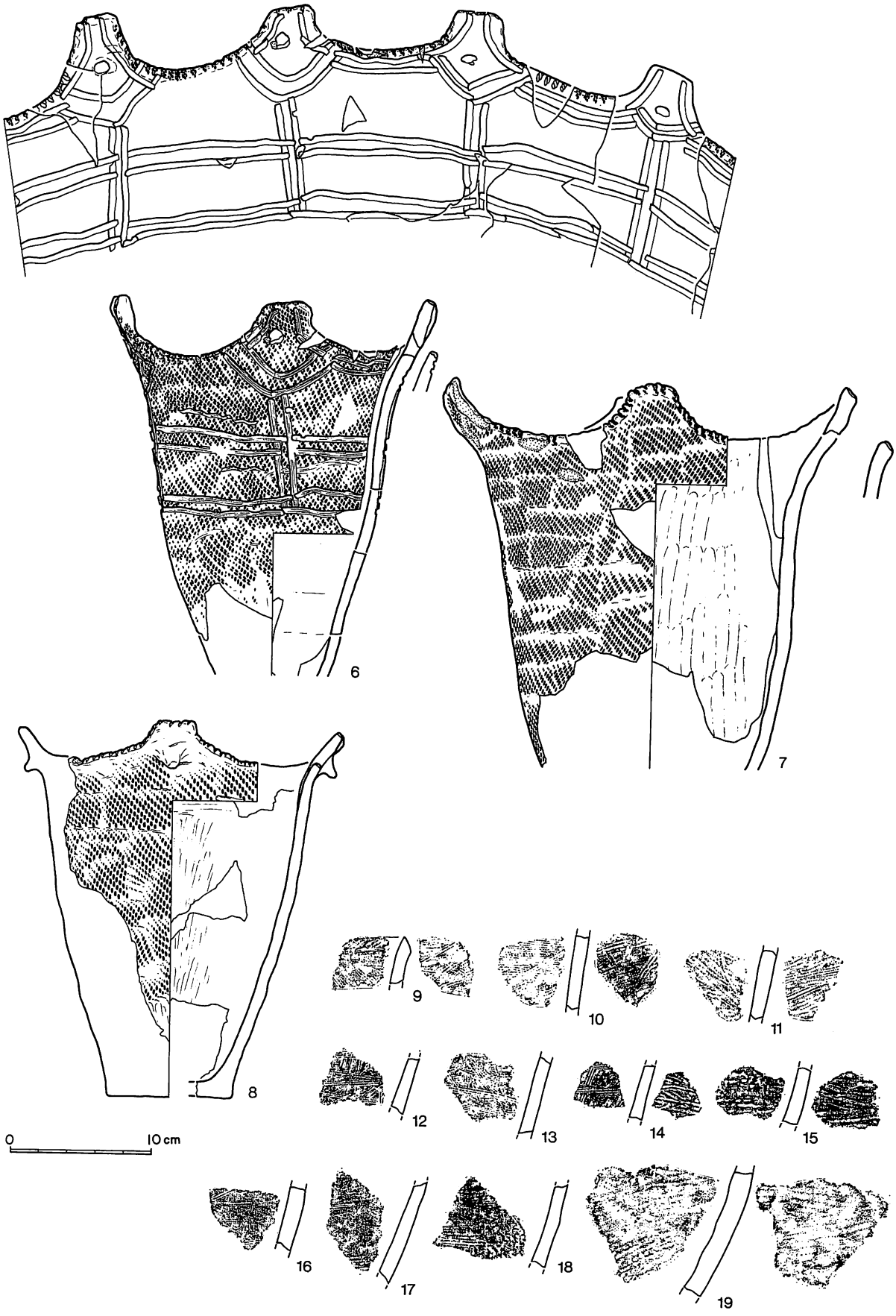
図Ⅲ－71　フラスコ状ピット⑬・P－56遺物



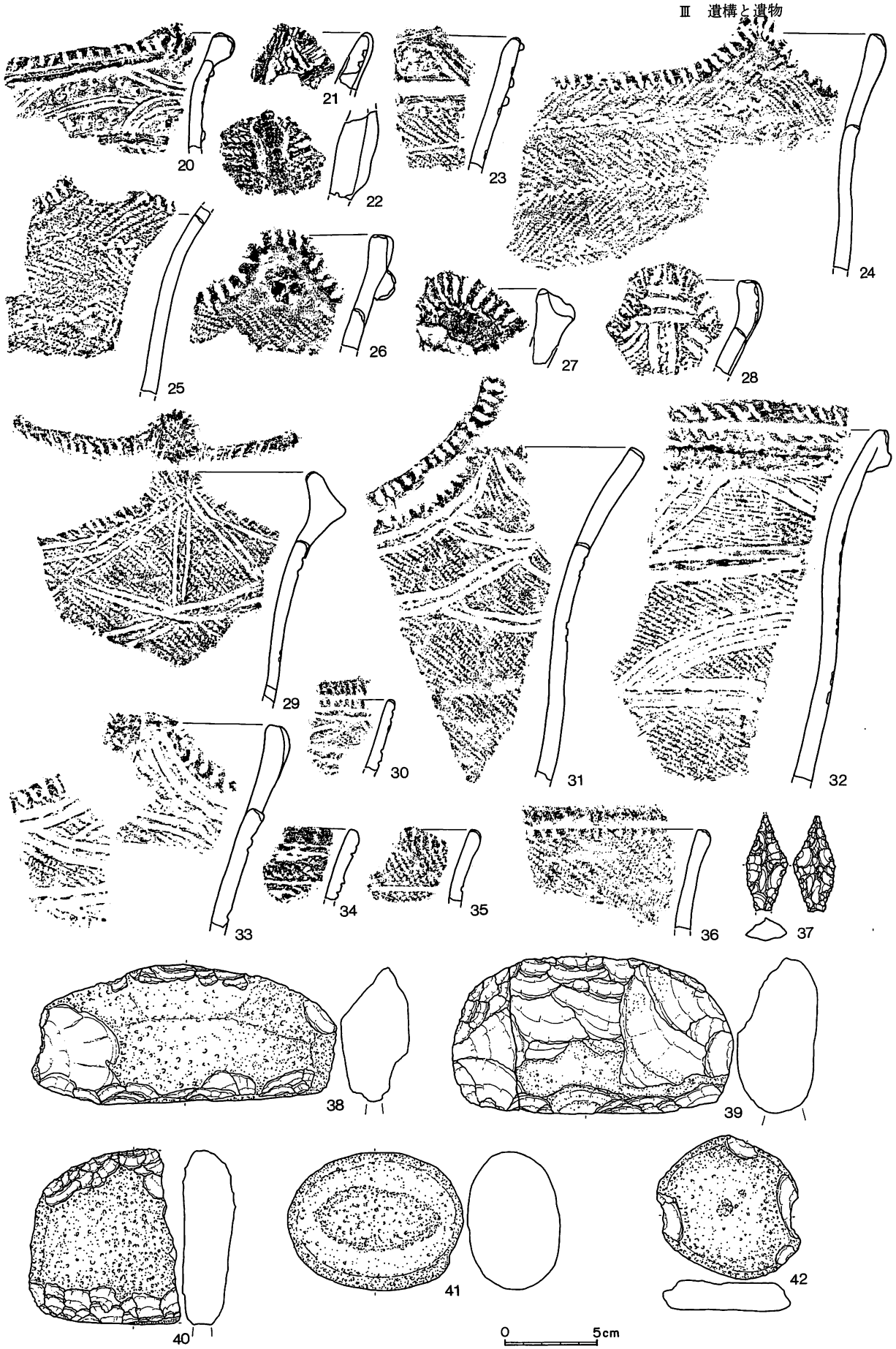
図Ⅲ－72　フラスコ状ピット⑭・P－56遺物



図Ⅲ－73　フラスコ状ピット⑮・P－56遺物



図Ⅲ－74　フラスコ状ピット(16)・P－56遺物



図Ⅲ－75　フラスコ状ピット(17)・P－56遺物

P－56（図Ⅲ－70～75，図版23，43，44）

位置　N－35　　**規模**　1.24×1.24/2.33×2.34/1.79m

特徴　開口部および底部ともほぼ円形に近く，壁面の崩落が著しい。底面より50cm上の面にはベンガラ，炭化物などを含んだ層（8層）があり，その面より下層から多数の遺物が出土し，8個体の完形，半完形土器に復元できた。

ベンガラ

遺物　出土遺物総数は501点，その内訳は土器473点，石器など28点で，8層より下層の出土が多い。

1～5は結束第1種または第2種の原体による羽状または斜行の縄文，6～8は斜行の縄文がみられるⅢ群A_3類土器である。1は対角状に2種類の突起と刺突のある耳状の貼り付けがあり，口縁下に横の2本の沈線，その上に2本単位の4段の弧線文がみられる。2は小さな突起の下にひさし状の三角形の貼り付け，口縁下に2本の沈線，その下に3本単位の3段ないし4段の弧線文などがみられる。3は突起部にY字状の貼り付け，2本単位の弧線文とそれをつなぐ平行沈線などの文様，4は突起部に耳状の貼り付け，5は3本ないし2本の連弧状の弧線文などがみられる。6は穴のあいた4個の弁状突起と2本単位の縦横の沈線文が施されている。

Ⅲ群A_3類

9～19は細かな条痕がみられるⅠ群A類土器，20～36は弧線文が多くみられるⅢ群A_3類土器である。37は石鏃，38～40は扁平礫の周囲に打ち欠きのあるすり石，41は周囲および片面に敲打痕のみられるたたき石，42は石錘で，37はめのう質頁岩，38～42は安山岩製である。

Ⅰ群A類石器

時期　縄文時代中期中葉，Ⅲ群A_3類土器の時期である。

中期中葉

(3)　円形・楕円形ピット（図Ⅲ－77～92，図版24～27，44，45）

調査区域の南側（20ライン以南）に4基，中央部（20～41ライン）に44基分布する。形状の上から円形と楕円形に大別したが大きさは各種ある。円形のピットはP－1，6，8，9，14，15，18，19，22，27，31，32，33，35，37，42，47，48，53，55，57，58，61，65，71，73，76，78，83，85，89の31基で，径の平均は80cm前後，80cm以下は16基，80～100cmは12基，100cm以上は3基と，80cm以下が多い。楕円形のピットはP－3，12，16，17，21，25，30，38，41，46，49，62，69，75，77，79，80の17基で，大きさの平均は118×85cm，それ以下は8基，以上は9基である。

円形ピット

平均

楕円形ピット

平均

遺物の出土状況をみると，土器が比較的まとまって出土するもの（P－3，18，27，48，53，57，76，77，89），礫石器または礫などがまとまって出土するもの（P－19，22，32，33，35，69，71）などがある。墓など性格がわかるものはない。以下いくつかのものについて説明する。

P－3　楕円形ピットで，覆土の上位に二次堆積の焼土と土器がまとまってあった。

P－14　H－3の覆土中に作られたもので，続縄文時代のF－1がすぐ横にある。掘り込み面の状況，F－1との関連などから続縄文時代と考えられる。

P－27　H－13の北東横で確認され，H－13と一部つながっている。小型の完形土器，用途不明の土製品などが出土している。H－13に付属するピットの可能性がある。

P－32・33　土器片，スクレイパー，すり石，礫などが覆土および底面から出土している。

P－35　2点の石斧が重なった状態で出土している。埋納土壙の可能性がある。

埋納

P－48　覆土の上位から土器がまとまって出土した。復元土器のほか，土器片，すり石片などもあり，遺物は流れ込みの可能性が強い。

P－53　胴部下半の土器が入った小ピットである。土器の中には焼土が入っていた。屋外の埋甕炉の可能性がある。

P－57　1個体の土器が底部を上にして潰れたような状態で出土している。

P－69　たたき石が2点覆土の上位から出土している。覆土が第Ⅲ層にローム粒を混じえた状況で，黒色土の混入の割合が少い。したがって縄文時代早期のピットの可能性がある。

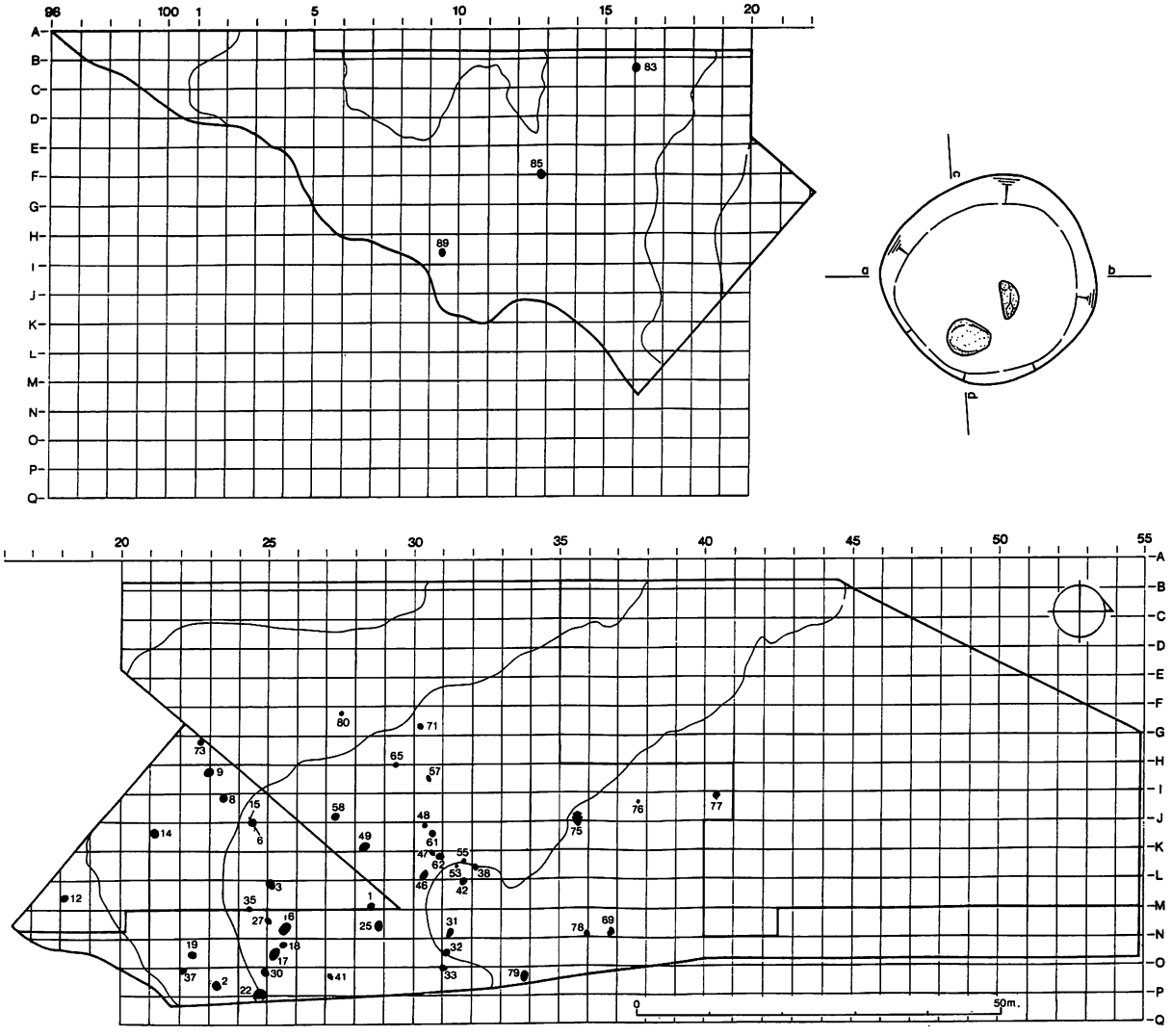
P－71　礫石器，礫が底面からまとまって確認された。礫石器のなかには北海道式石冠がある。

P－76　倒立した状態で1個体の土器があり，その下から小ピットが確認された。胴部上半は一周する状況であるが，下半および底部は中に落ち込んだ状態であった。

遺物　実測土器，拓影土器，石器の順で説明する。

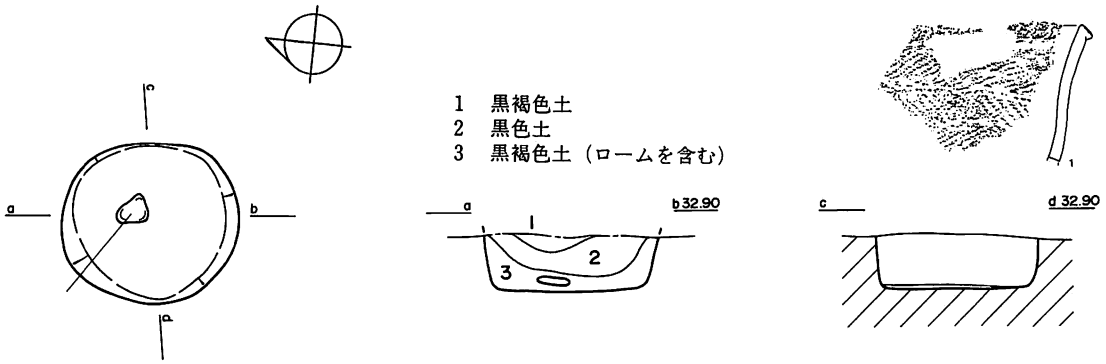
12，25，52，63，65，81，82は完形または半完形に復元できたⅢ群A_3類土器である。　Ⅲ群 A_3類

12は突起の下に耳状の貼り付けと，2本単位の弧線文がみられる。25は複節で結節のあ

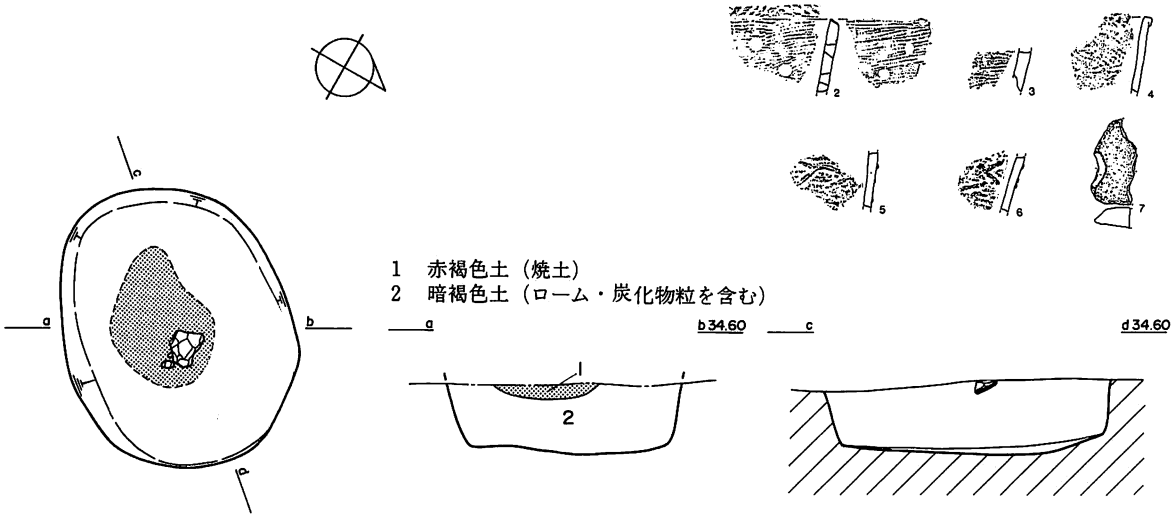


図Ⅲ－76　円形，楕円形ピット分布図

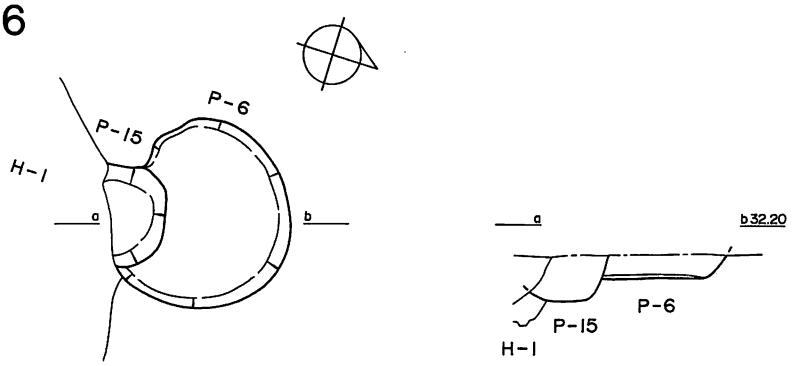
P-1



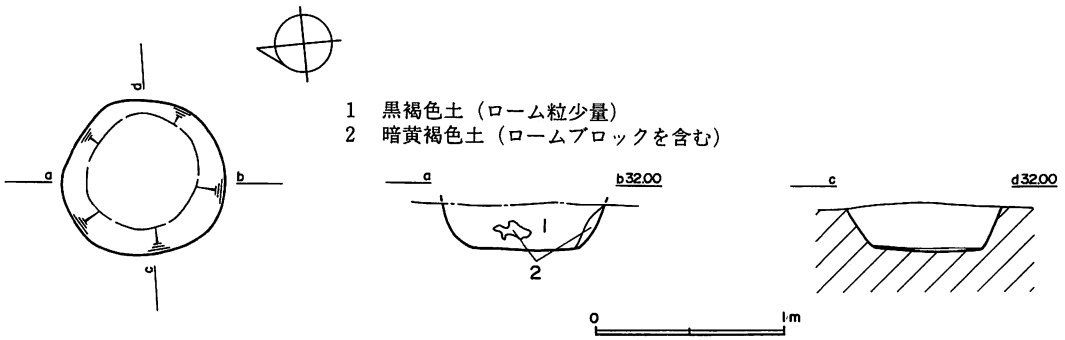
P-3



P-6

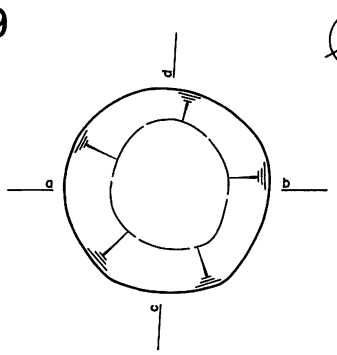


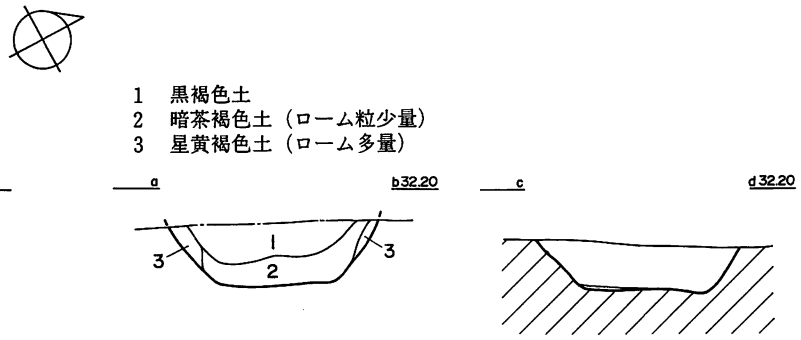
P-8



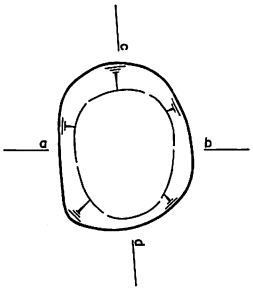
図Ⅲ－77　円形，楕円形ピット(1)・P－1，3，6，8

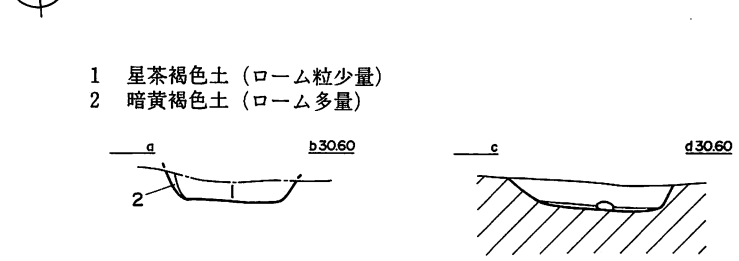
P-9



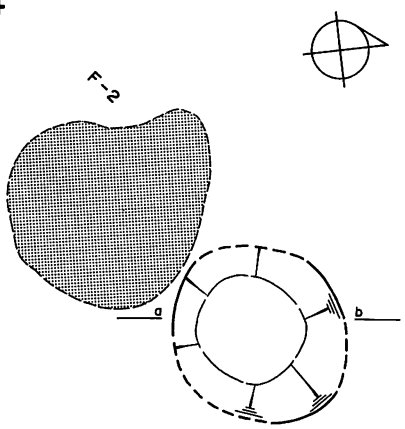


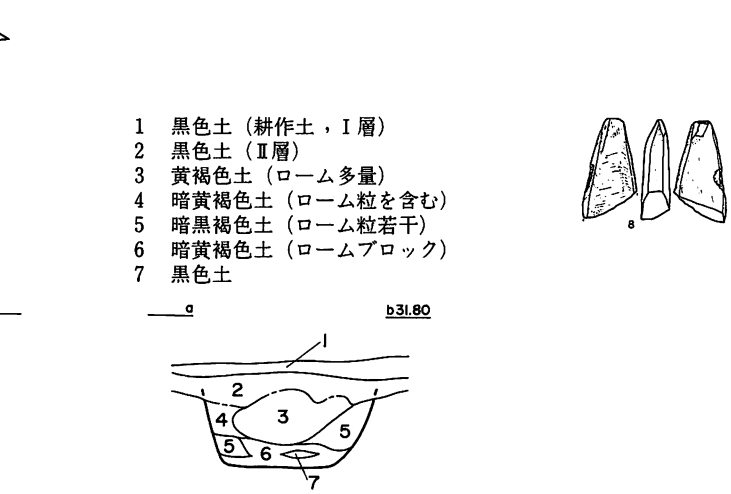
P-12



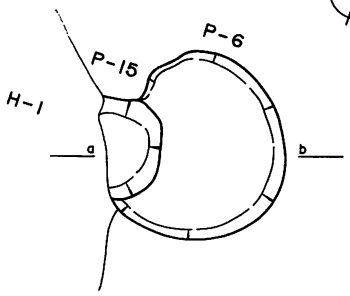


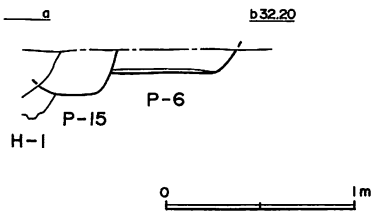
P-14



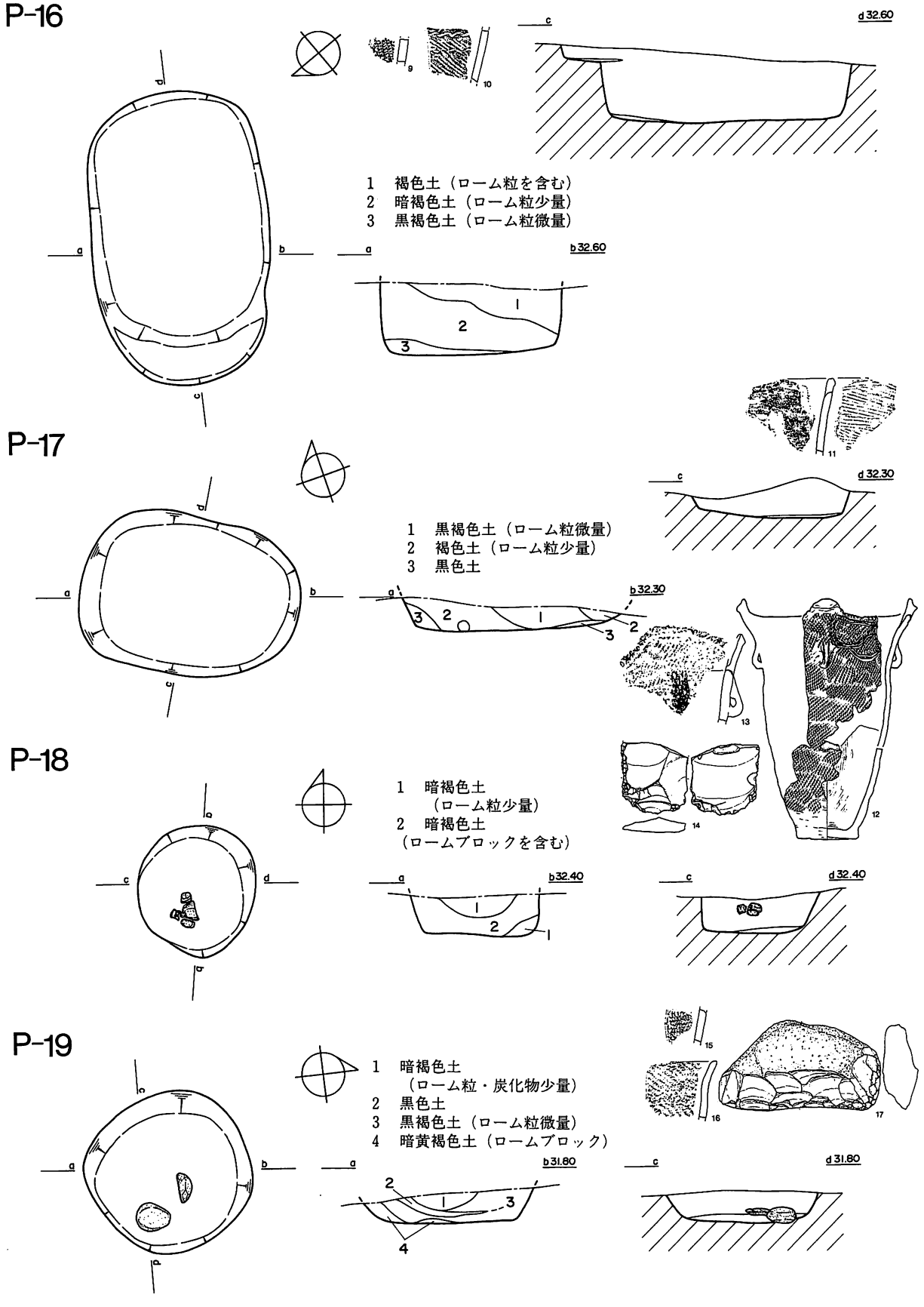


P-15

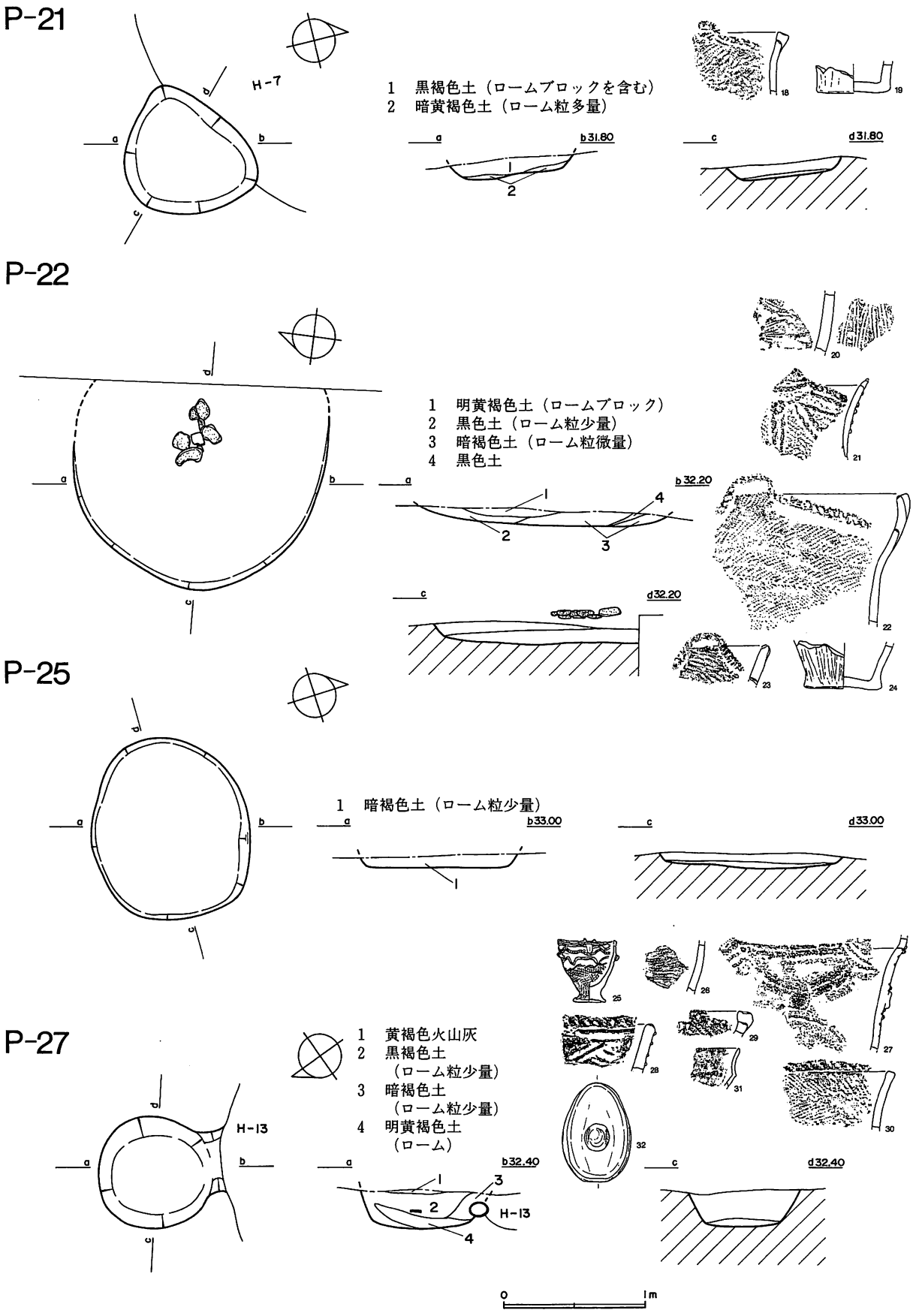




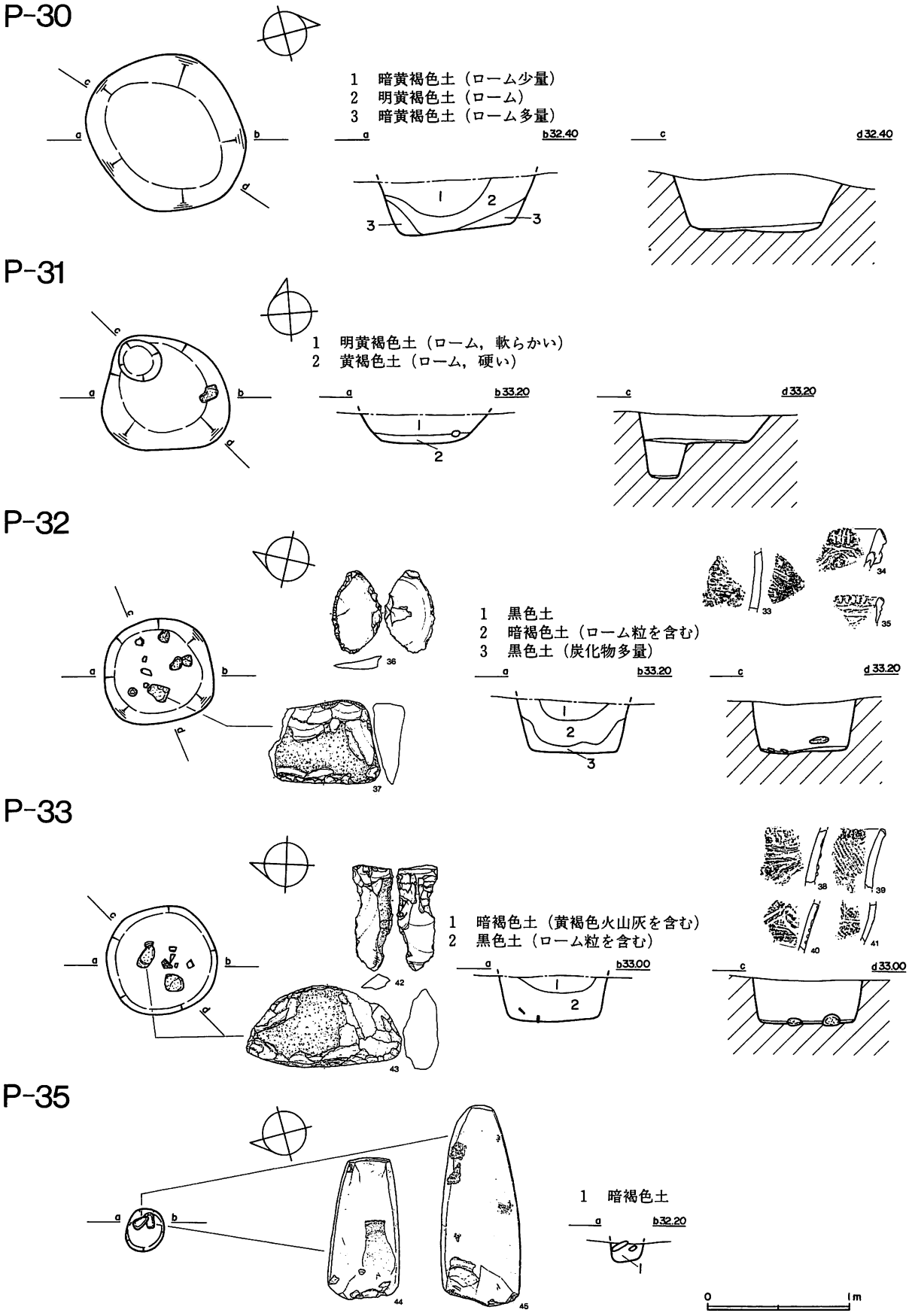
図Ⅲ－78　円形，楕円形ピット(2)・P－9，12，14，15



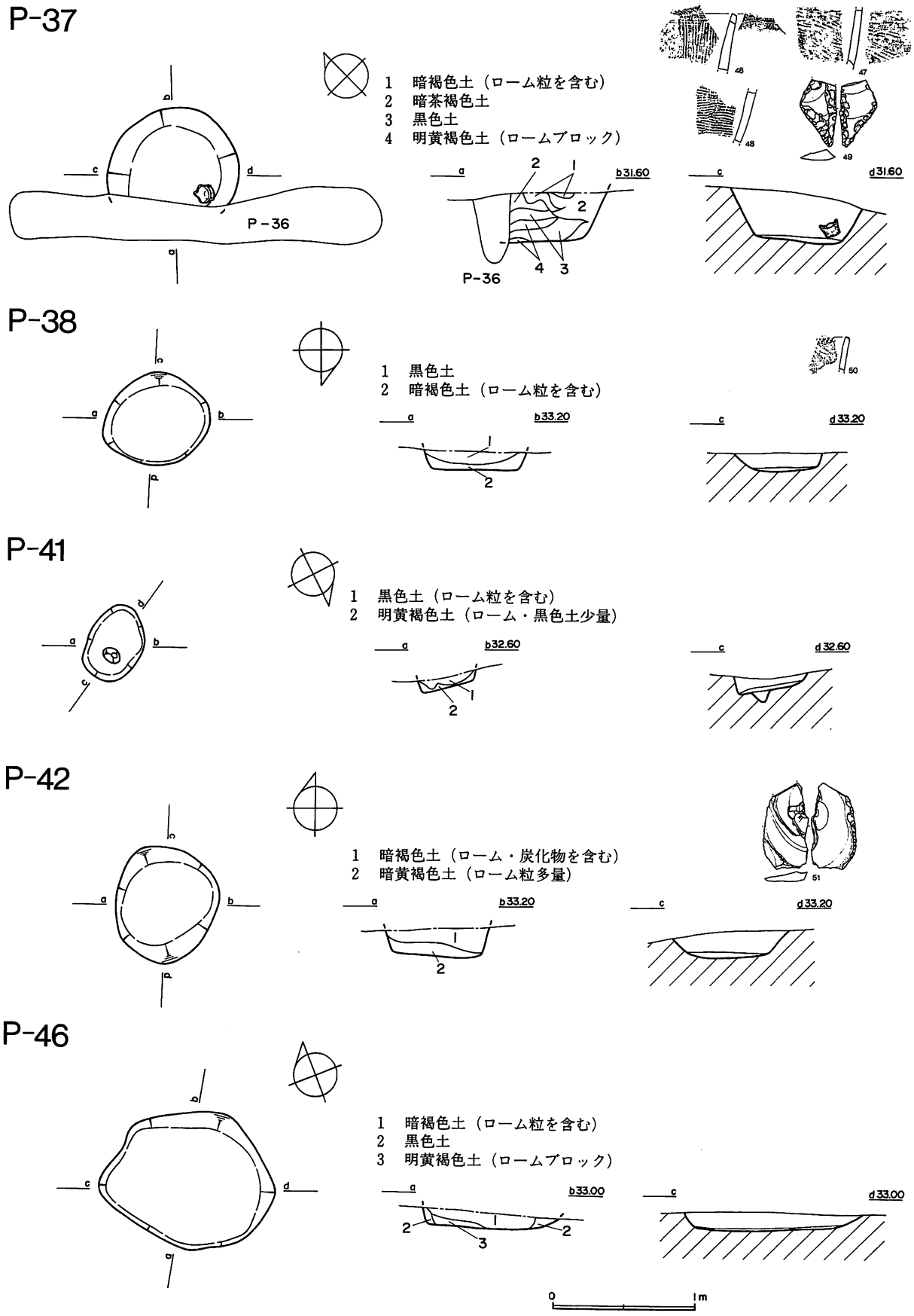
図Ⅲ－79　円形，楕円形ピット(3)・P-16，17，18，19



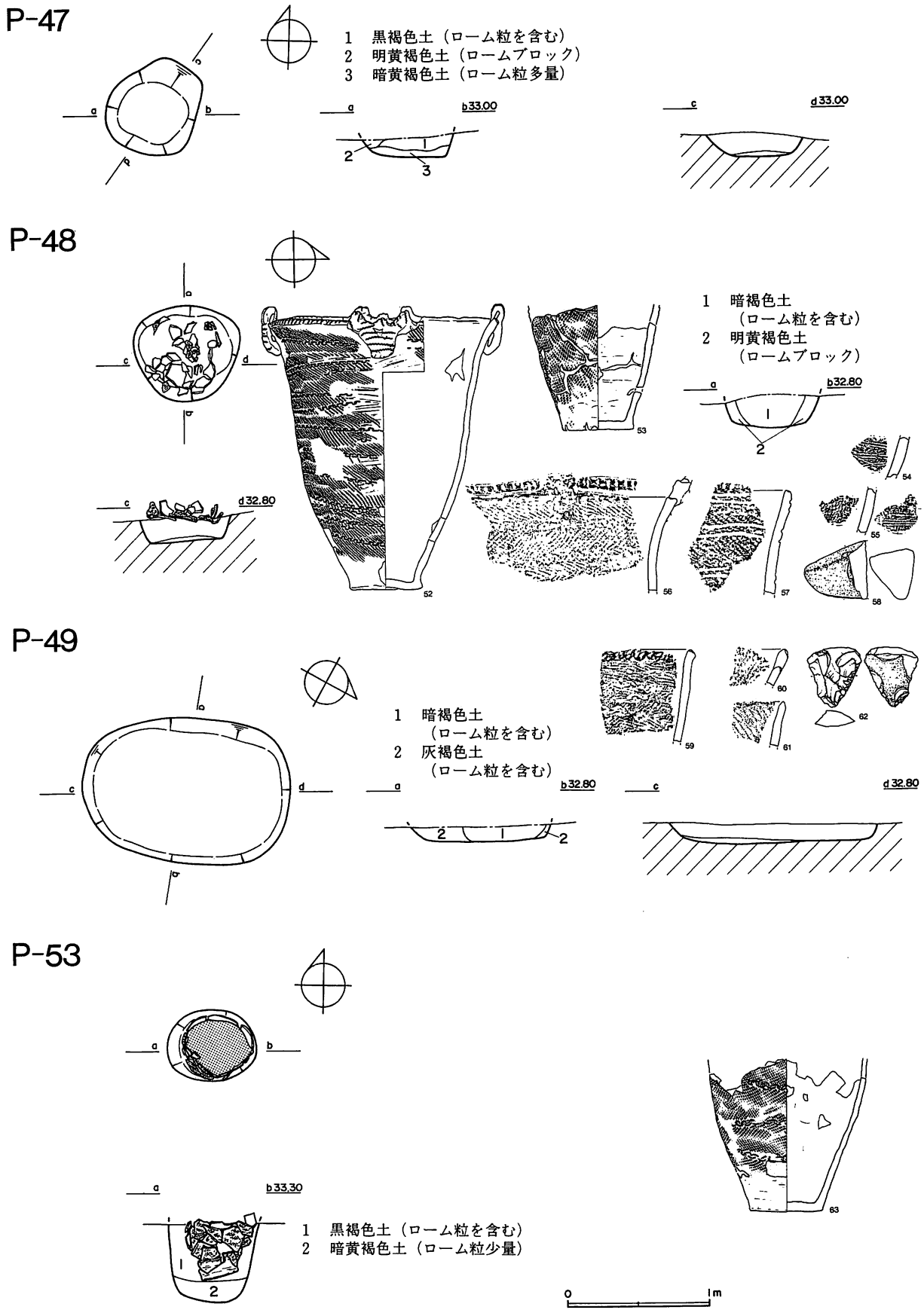
図Ⅲ－80　円形，楕円形ピット(4)・P－21，22，25，27



図Ⅲ－81　円形，楕円形ピット(5)・P－30，31，32，33，35

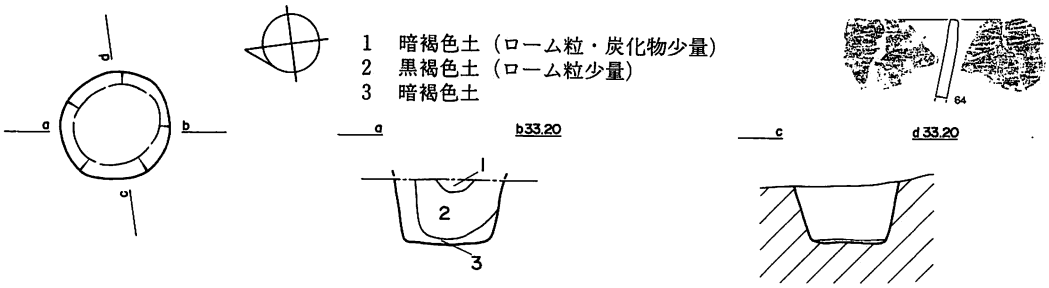


図Ⅲ－82　円形，楕円形ピット(6)・P－37，38，41，42，46

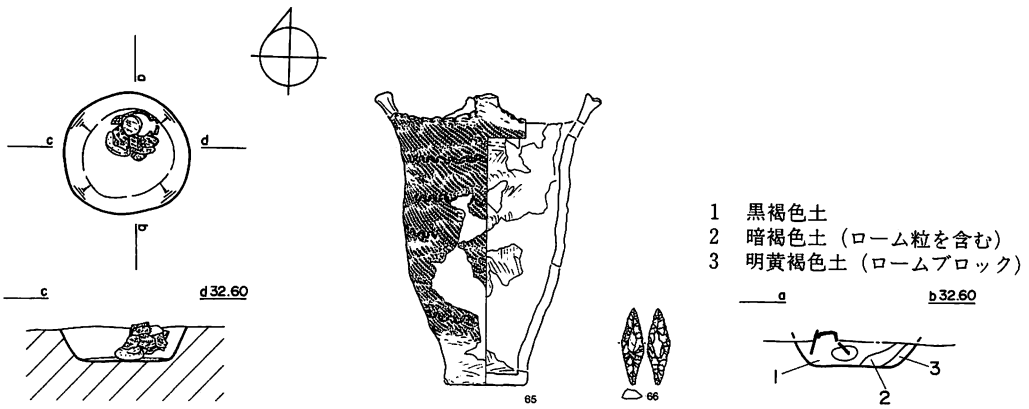


図Ⅲ－83　円形，楕円形ピット(7)・P－47，48，49，53

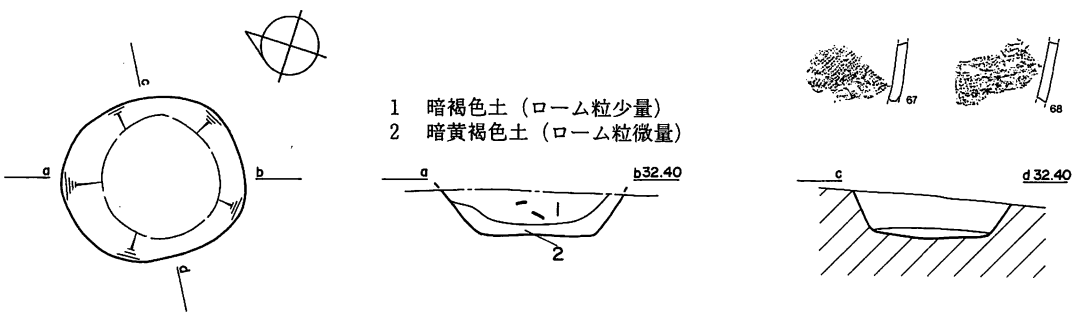
P-55



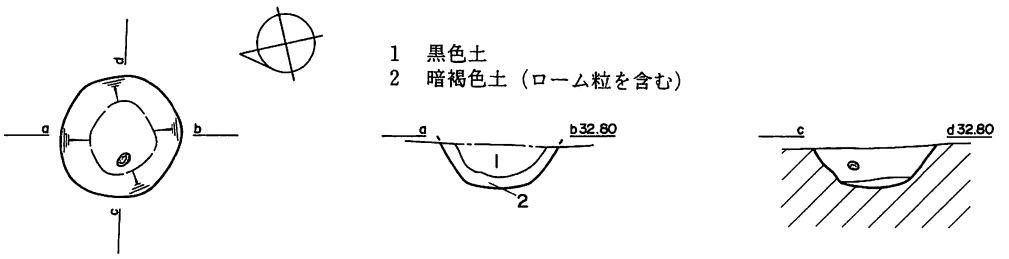
P-57



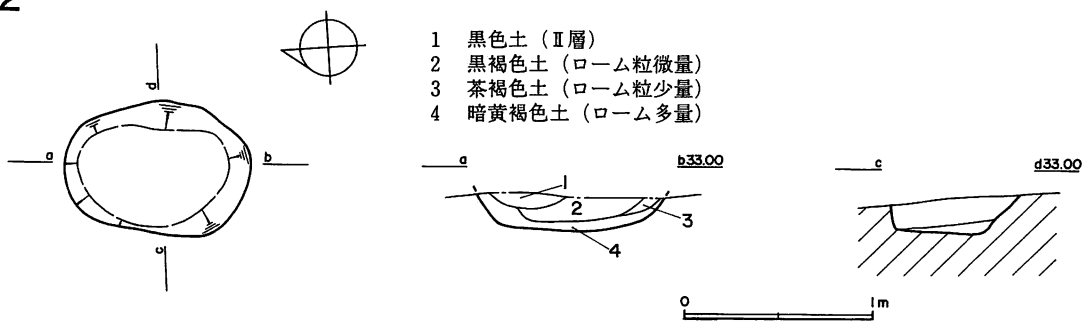
P-58



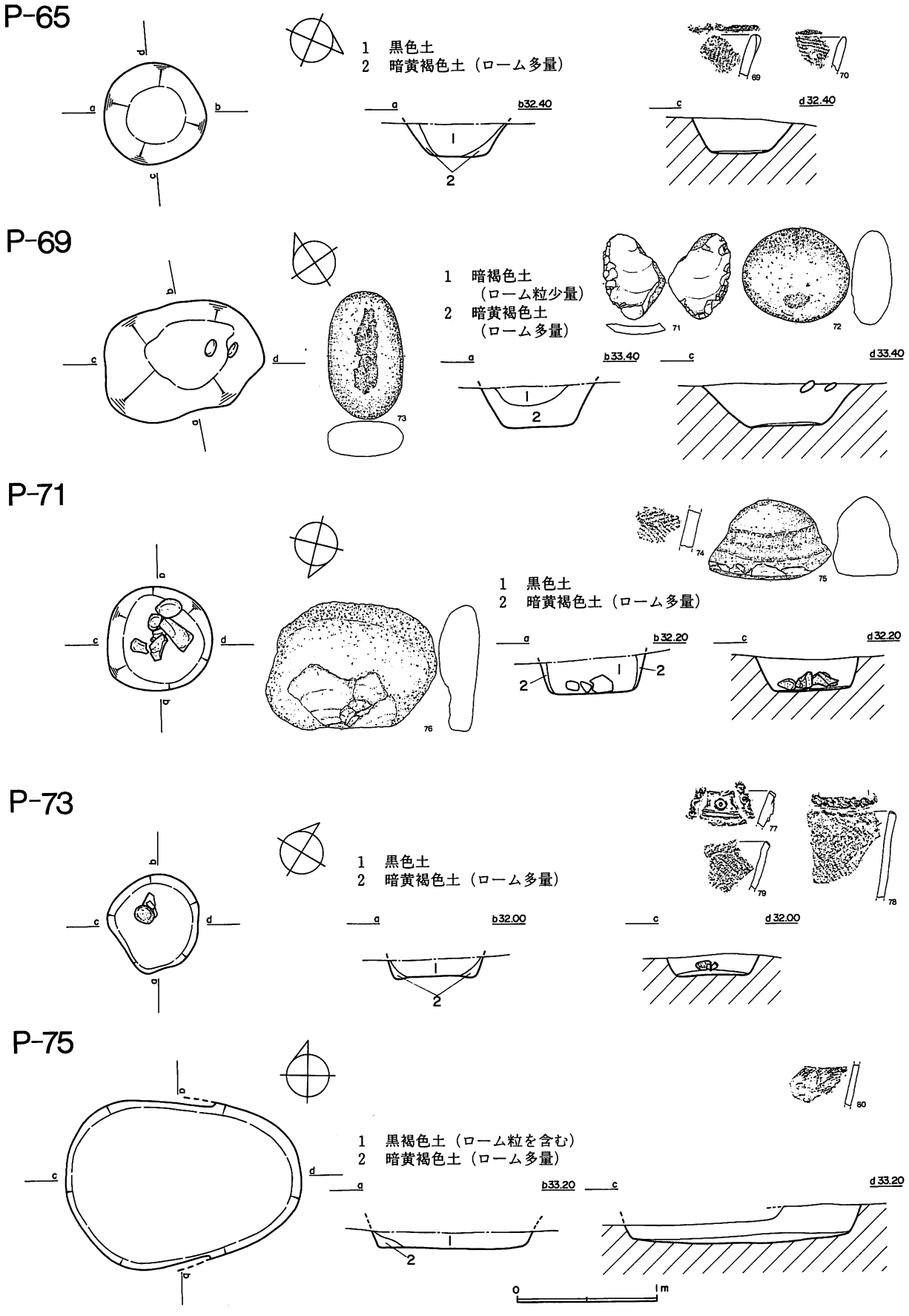
P-61



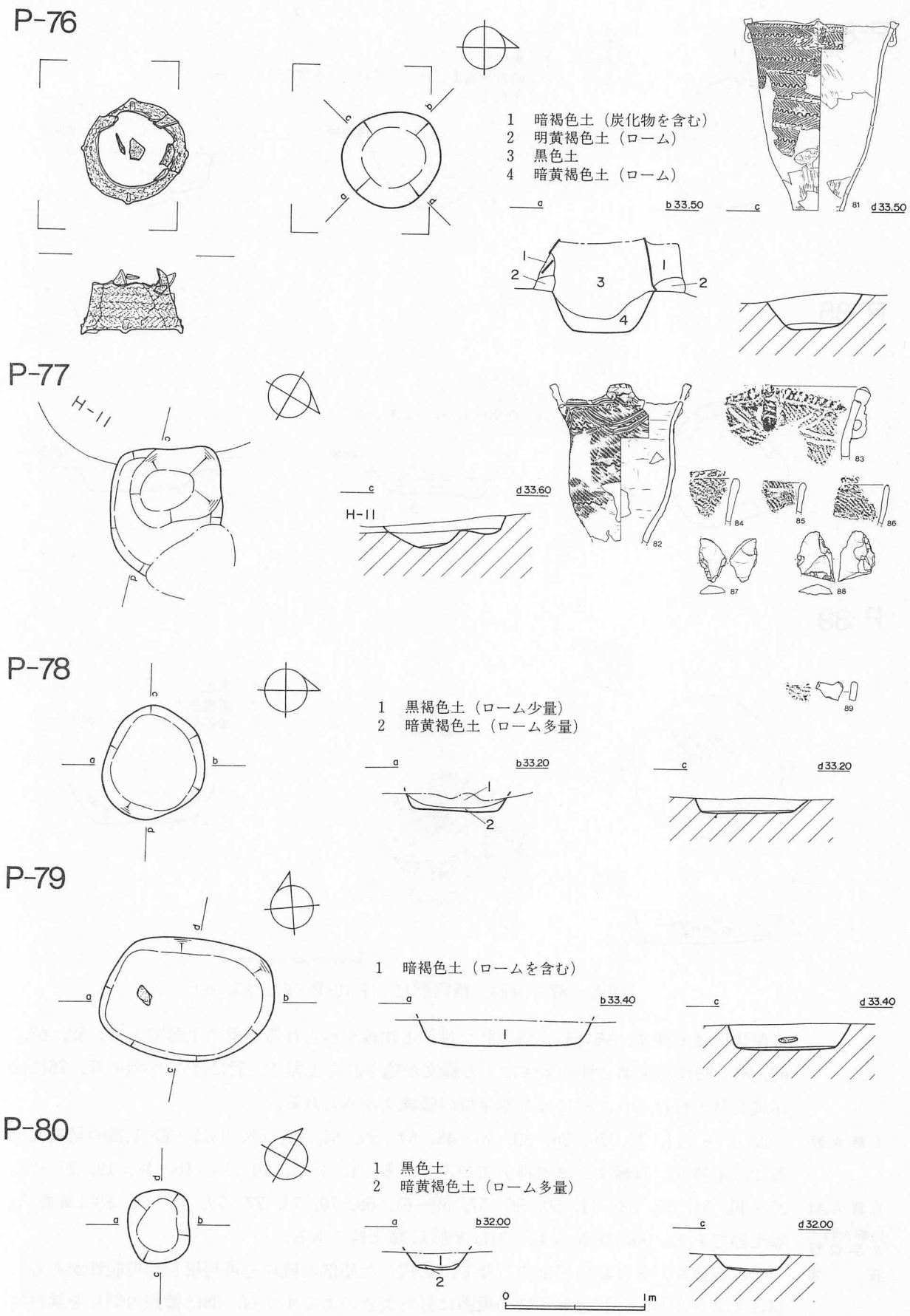
P-62



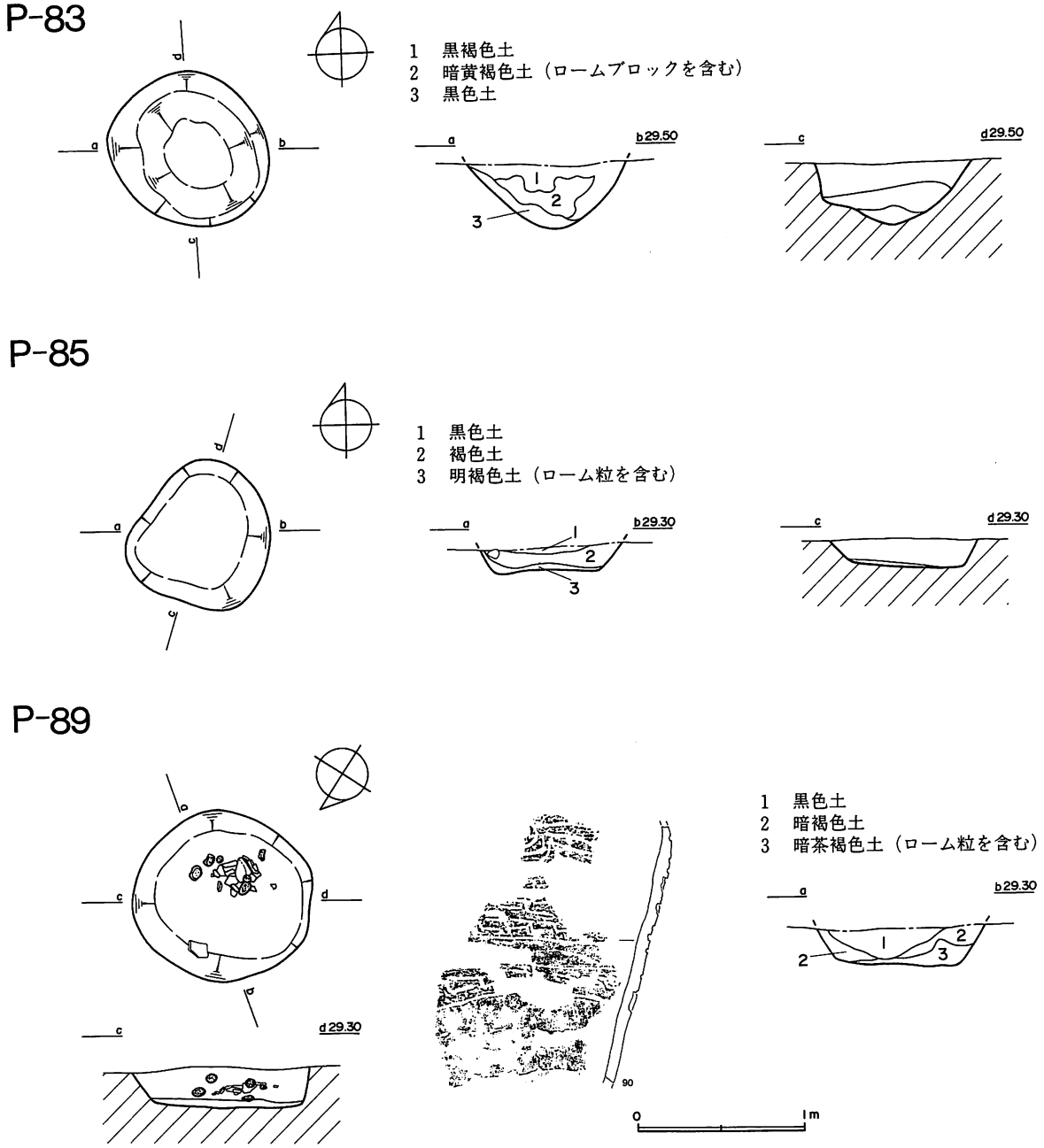
図Ⅲ－84　円形，楕円形ピット(8)・P－55，57，58，61，62



図Ⅲ－85　円形，楕円形ピット(9)・P－65，69，71，73，75



図Ⅲ－86　円形，楕円形ピット⑽・P－76，77，78，79，80



図Ⅲ－87　円形，楕円形ピット(11)・P－83，85，89

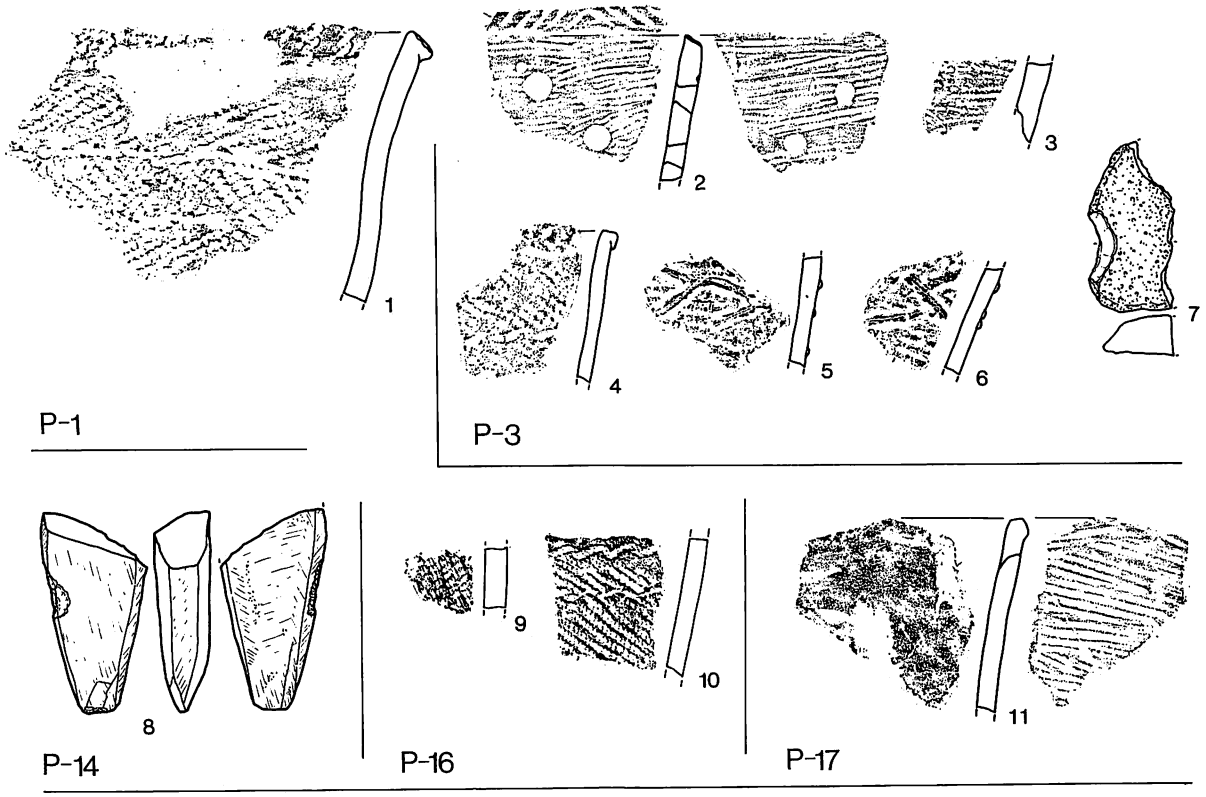
る原体による縄文，細い粘土紐の貼り付けと沈線がみられる小型の土器である。52，63，65，81，82は結束第2種の原体による縄文が施された土器で，52にはY字状の耳，76には単純な耳が付けられ，87には2本単位の弧線文がみられる。

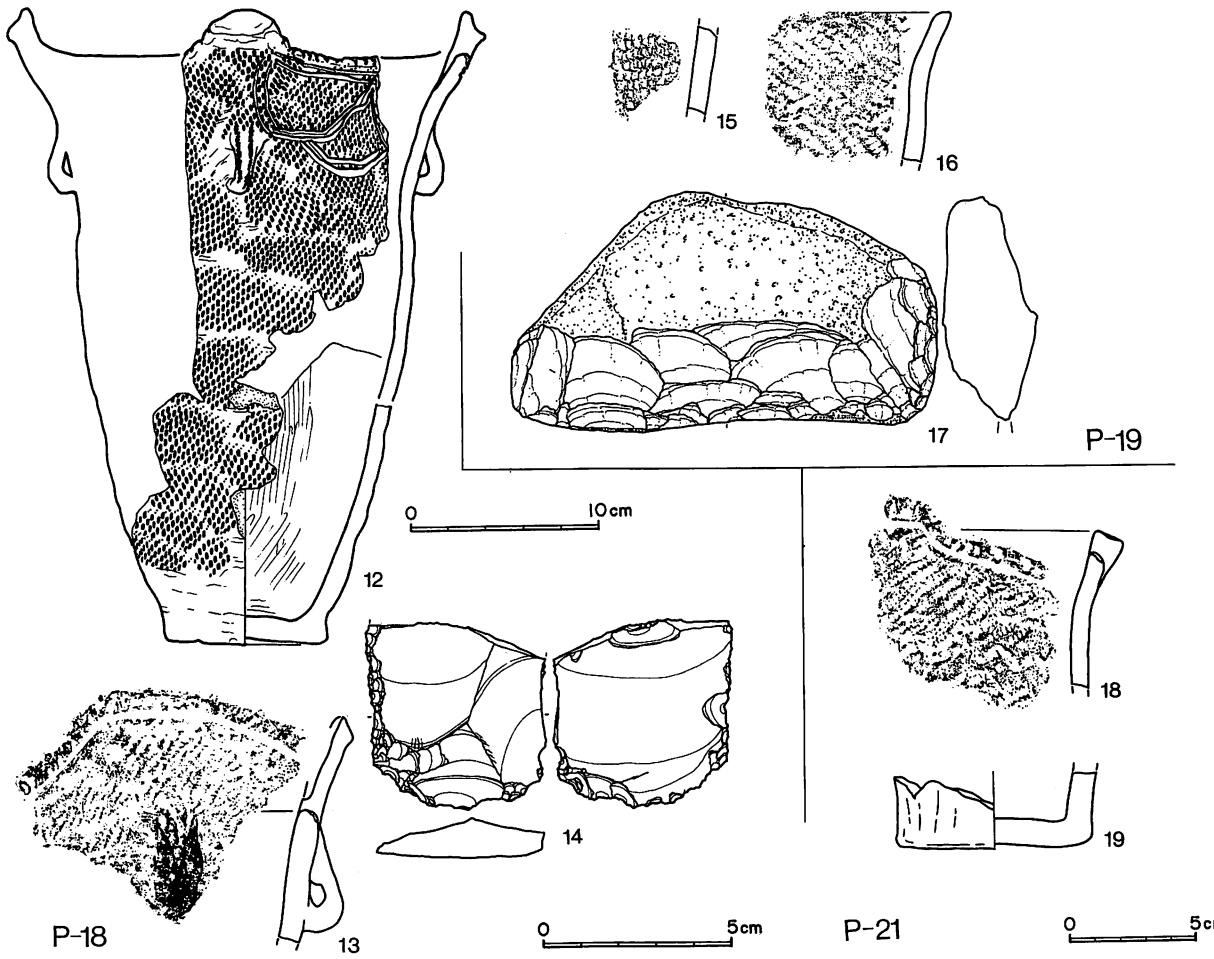
Ⅰ群A類　2，3，9，11，15，20，26，33，46～48，54，55，64，67，68，80はⅠ群A類の貝殻文土器で，条痕文，腹縁文，連続押引文がみられる。1，4～6，10，13，16，18，19，21～24，

Ⅲ群A_3類　27～30，34，35，38～41，50，56，57，59～61，69，70，74，77～79，83～86，89はⅢ群A_3類土器である。90はⅣ群A類，31はⅤ群C類土器である。

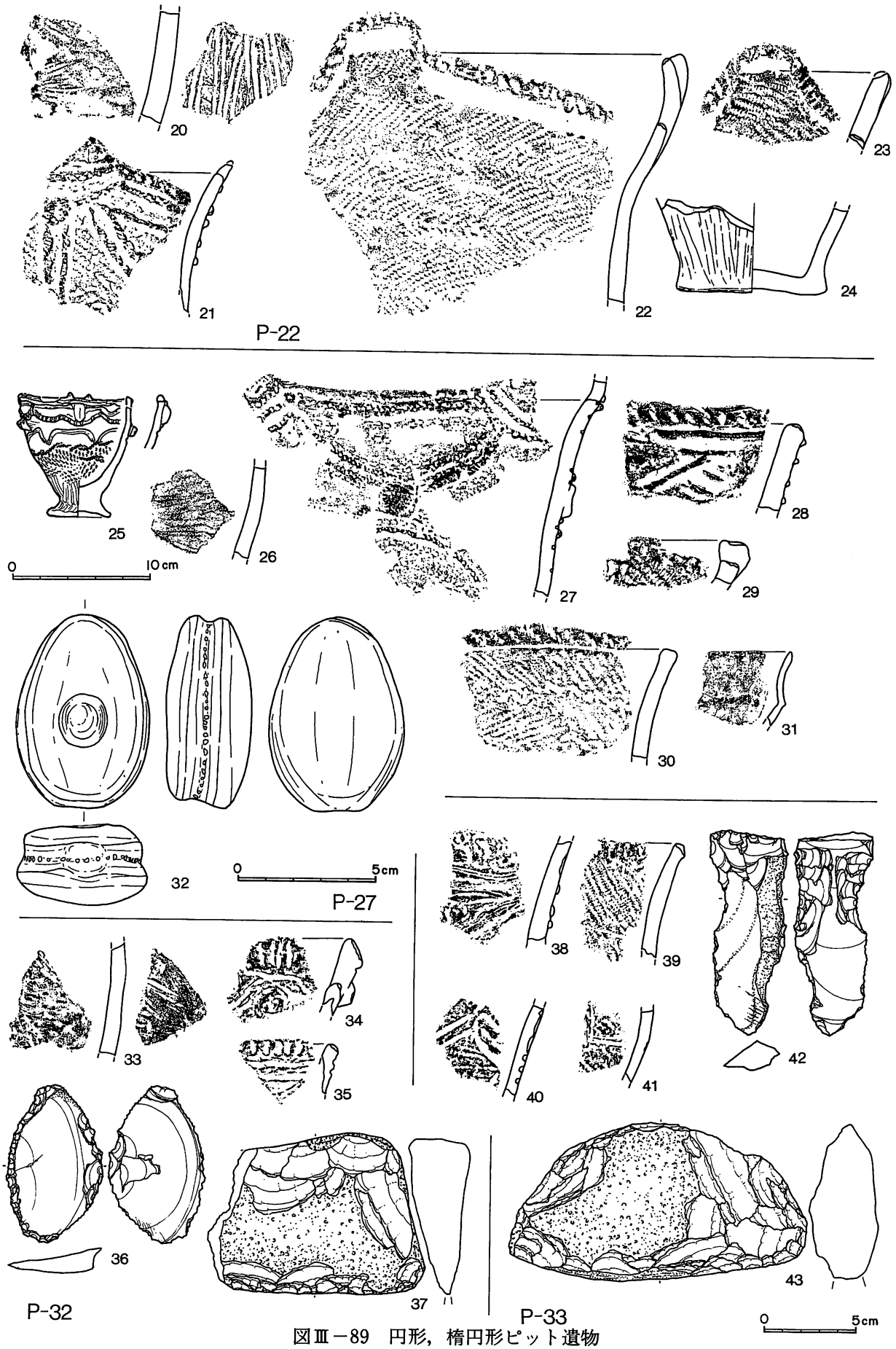
Ⅳ群A類・Ⅴ群C類

石　器　7は石錘片，8は細い刃部の石斧で，欠損した基部の破片を再利用した可能性がある。14はスクレイパー，17は扁平礫の周囲に打ち欠きのあるすり石，36は横長の剝片を素材にしたスクレイパー，37はすり石，42は主剝離面に加工のあるスクレイパー，43はすり石，

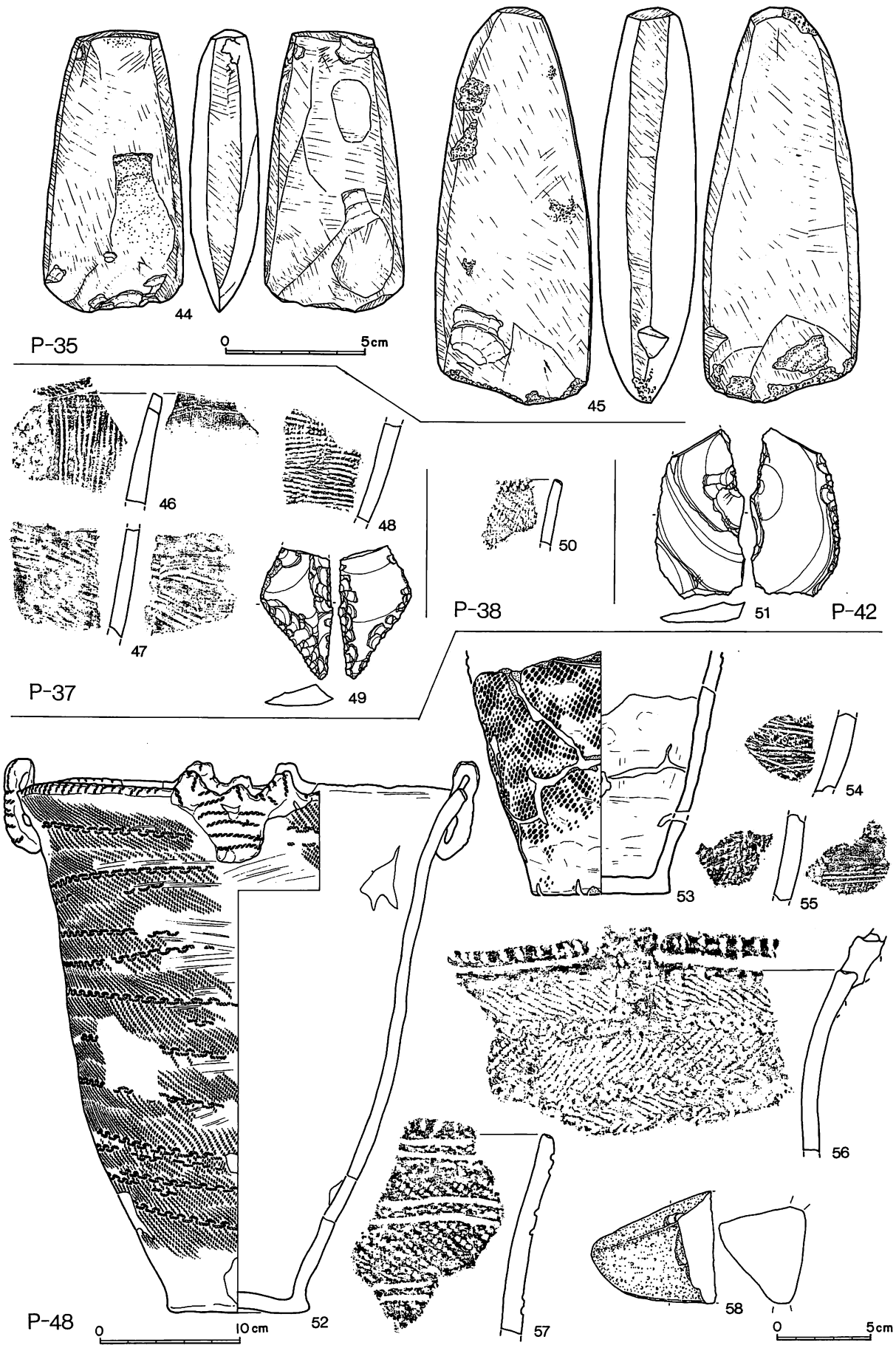




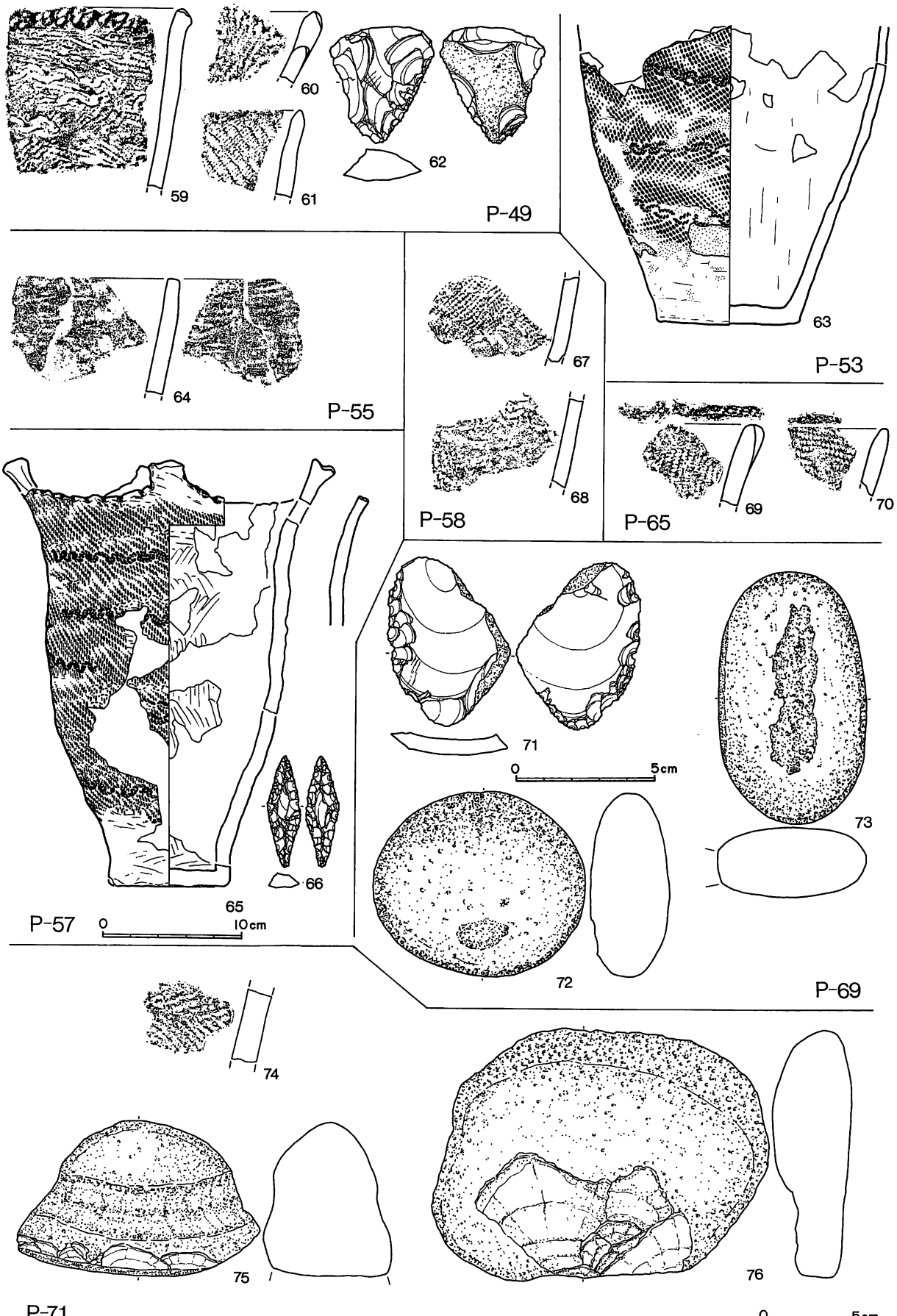
図Ⅲ－88　円形，楕円形ピット遺物



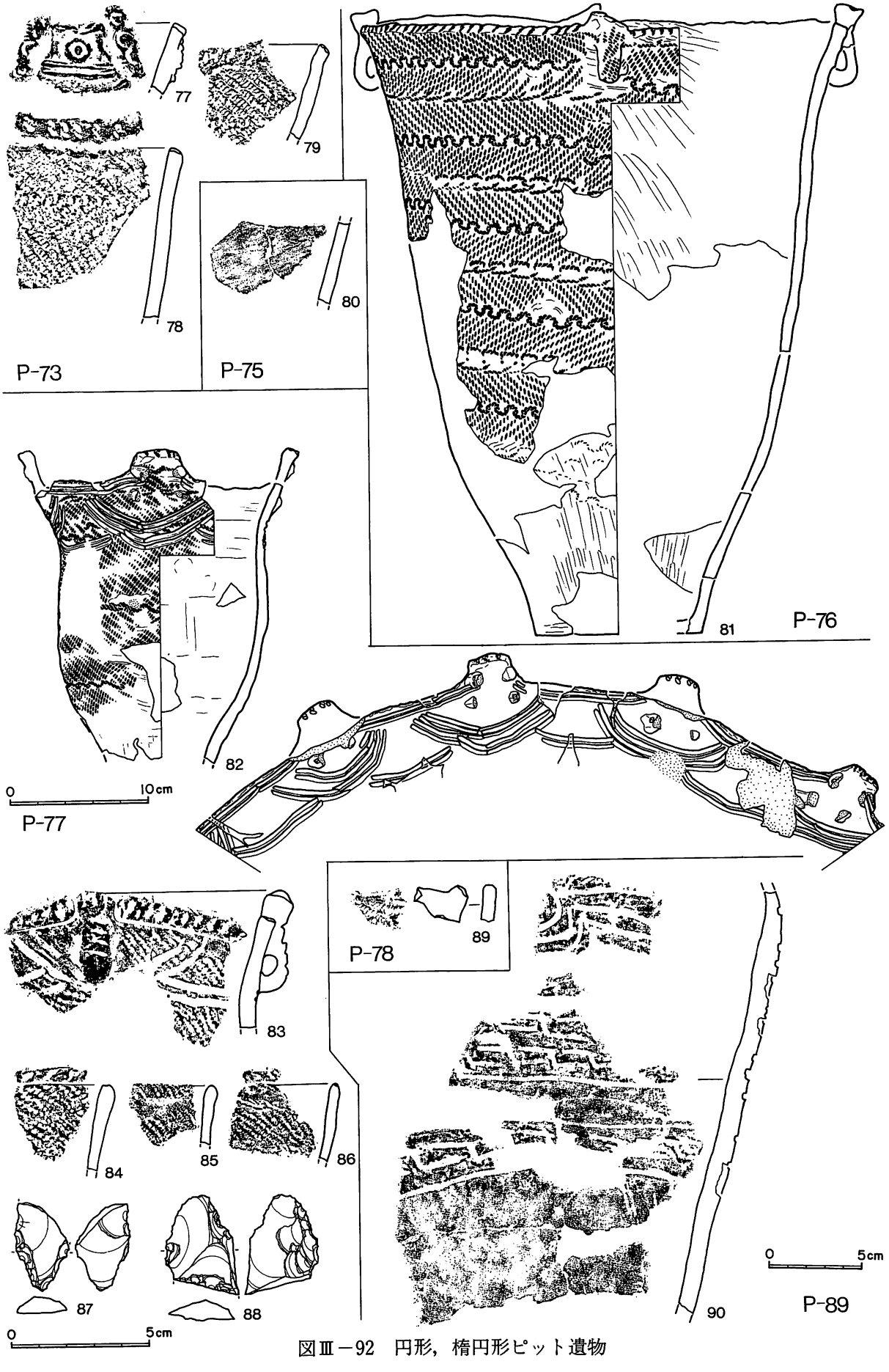
図Ⅲ－89　円形，楕円形ピット遺物



図Ⅲ－90　円形，楕円形ピット遺物



図Ⅲ－91　円形，楕円形ピット遺物



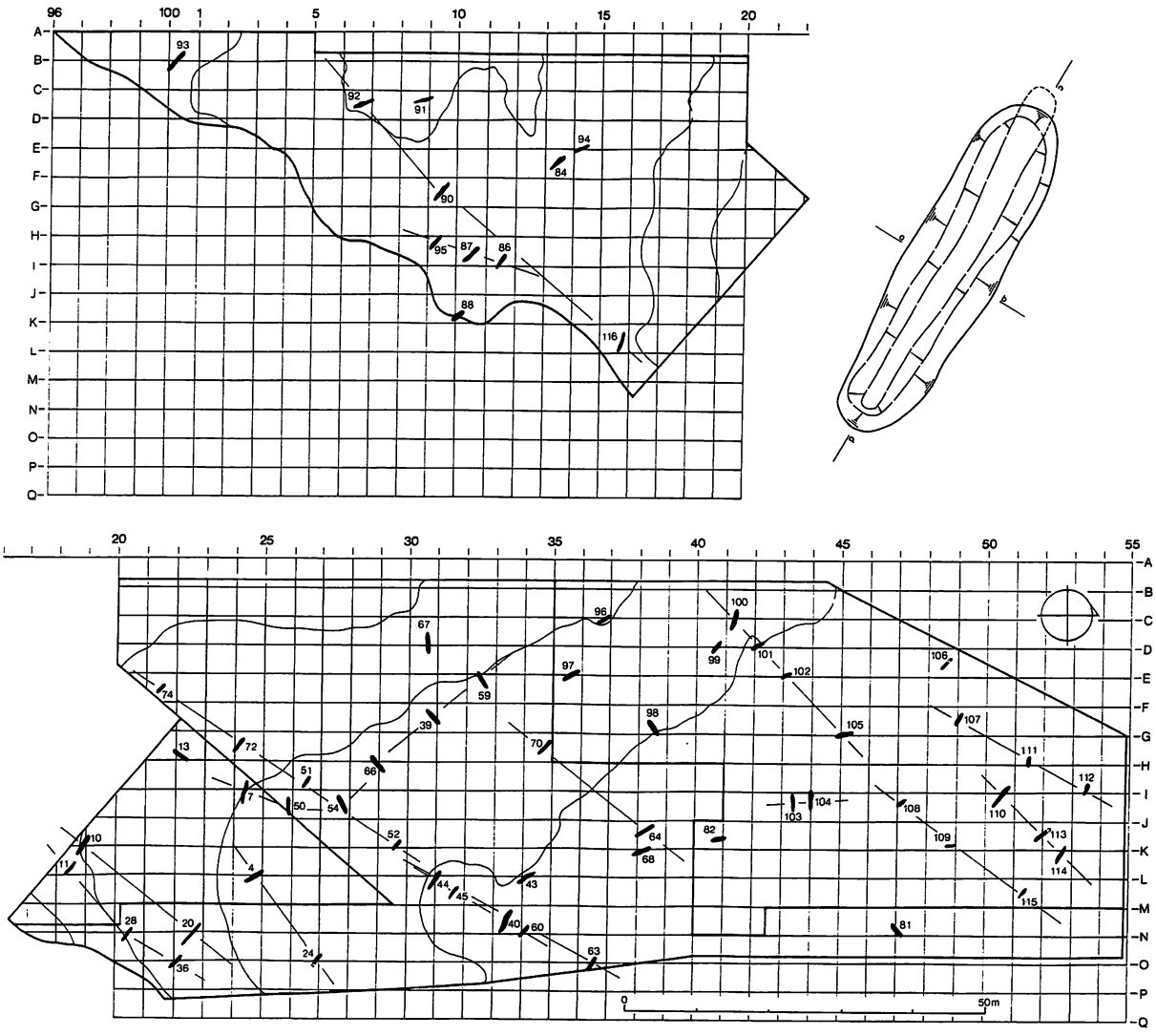
図Ⅲ－92　円形，楕円形ピット遺物

44，45は全面磨製の撥形の石斧，51は横長のスクレイパー，58は断面三角形で二つの稜にすり面のあるすり石，62はスクレイパー，66は柳葉形の大型の石鏃，71は錯行剝離のみられるスクレイパー，72，73はくぼみのあるたたき石で73の側面にはすり石がある。75は北海道式石冠，76は打ち欠きのある礫，87，88はＵフレイクである。7，17，37，43，58，72，75，76は安山岩，８は黒色泥岩，14，42，49，51，66，71，87，88は頁岩，44，45は緑色泥岩，62はめのう質頁岩，73は輝緑岩製である。

(4)　Ｔピット（図Ⅲ－93～116，図版28～32）

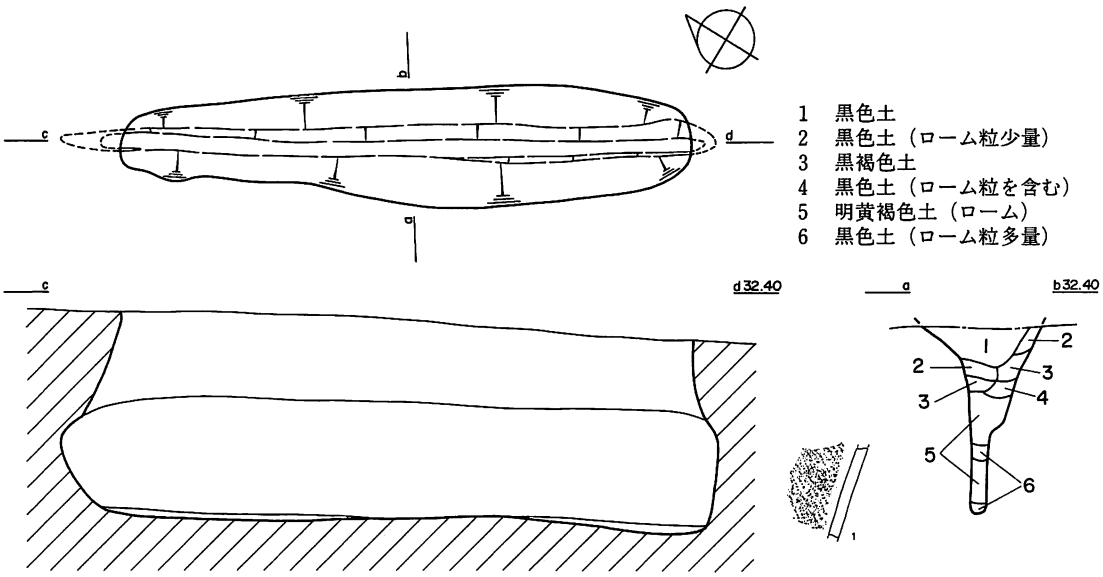
調査区域の全域で61基確認された。長軸方向および位置などからいくつかの配列がみられ，長軸方向は南東―北西，配列は南西―北東のものが多い。南西―北東の配列のものを北から列挙すると，Ｐ－107・111・112，Ｐ－110・113・114・，Ｐ－100・101・102・105，Ｐ－108・109・115，Ｐ－70・64，Ｐ－74・72・51・52，Ｐ－44・40・63，Ｐ－45・60，Ｐ－4・24，Ｐ－10・20，Ｐ－11・28・36，Ｐ－92・90・116，Ｐ－95・87・86など13ヵ所である。Ｐ－103・104は南―北，Ｐ－7・50・54・66・39・59は南―北～南東―北西と弧状になっている。

配　　列

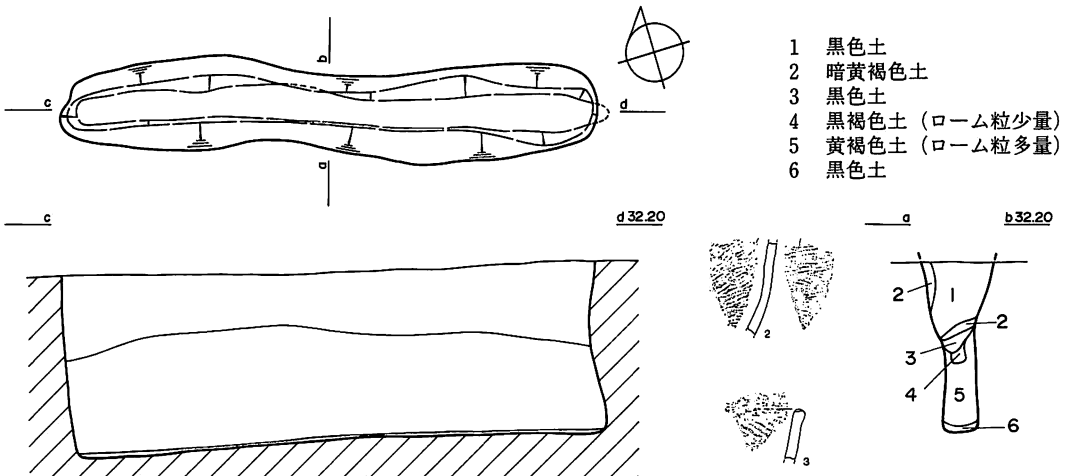


図Ⅲ－93　Ｔピット分布図

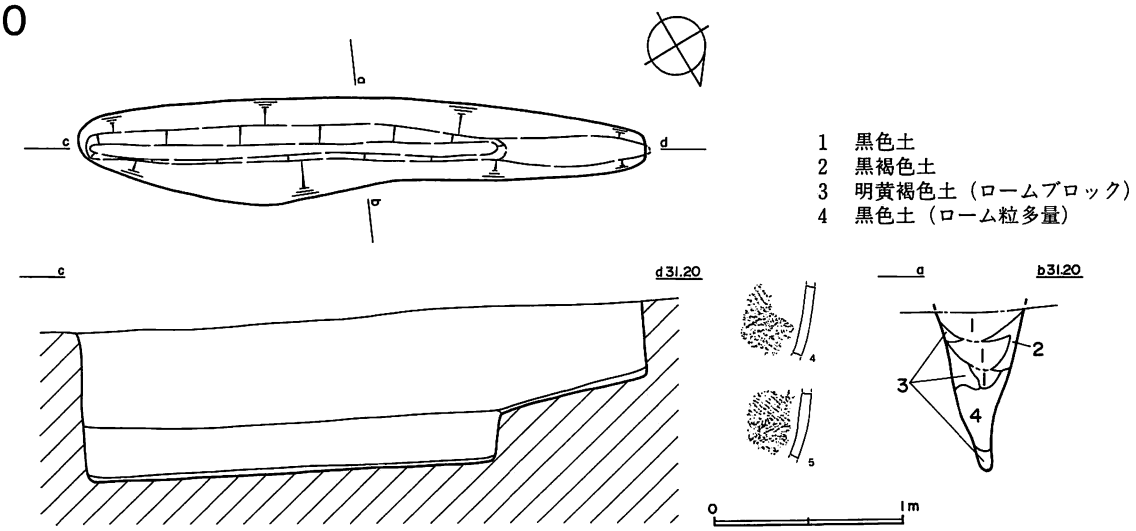
P-4



P-7

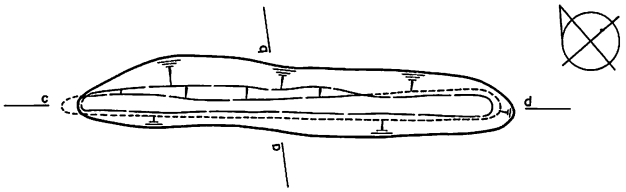


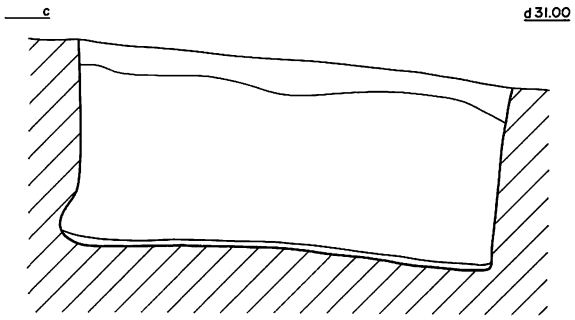
P-10

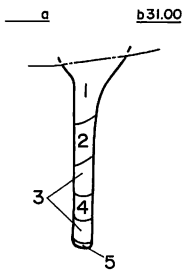


図Ⅲ－94　Tピット(1)・P－4，7，10

P-11

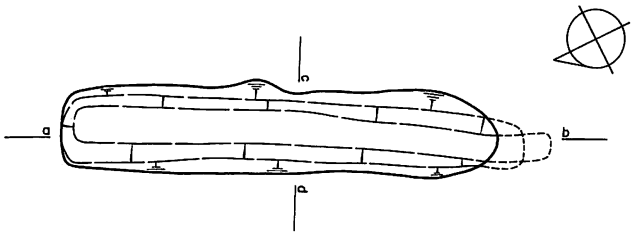


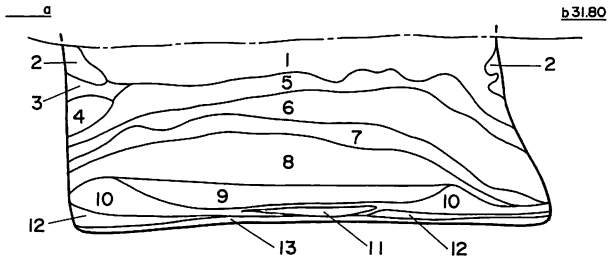


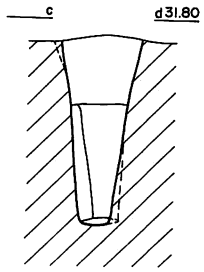


1 黒色土
2 黒色土（ローム粒少量）
3 黒色土（ローム粒を含む）
4 明黄褐色土（ロームブロック）
5 黒色土

P-13

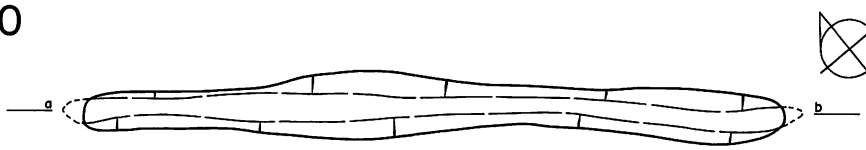


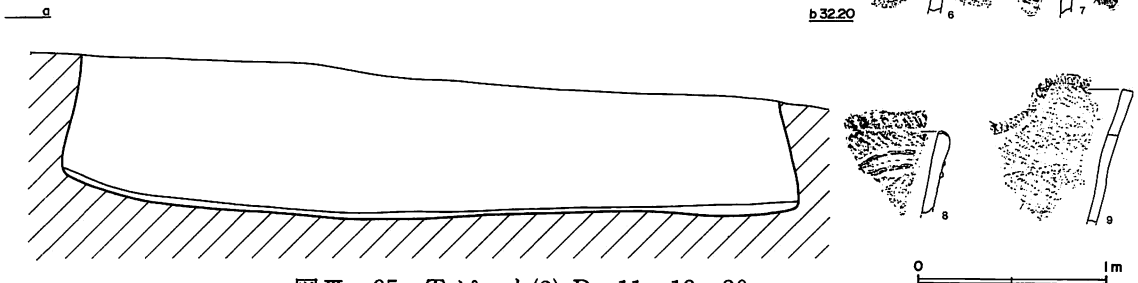




1 黒色土
2 暗黄褐色土（ローム粒を含む）
3 黒褐色土（ローム粒少量）
4 暗黄褐色土（ローム粒多量）
5 茶褐色土（ローム粒少量）
6 暗茶褐色土（ローム粒微量）
7 暗黄褐色土（ローム粒を含む）
8 黄褐色土（ロームに黒色土微量）
9 暗黄褐色土（ローム多量）
10 黒褐色土（ローム粒微量）
11 明黄褐色土（ロームブロック）
12 明黄褐色土（ロームブロックに黒色土微量）
13 黒色土

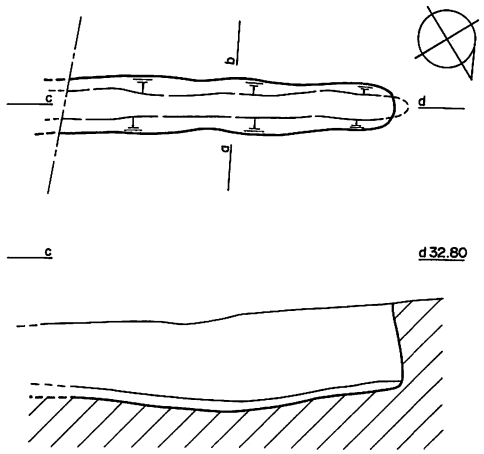
P-20

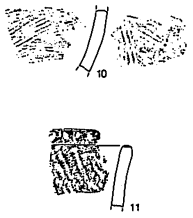


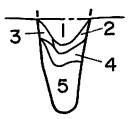


図Ⅲ－95　Tピット(2)・P－11, 13, 20

P-24

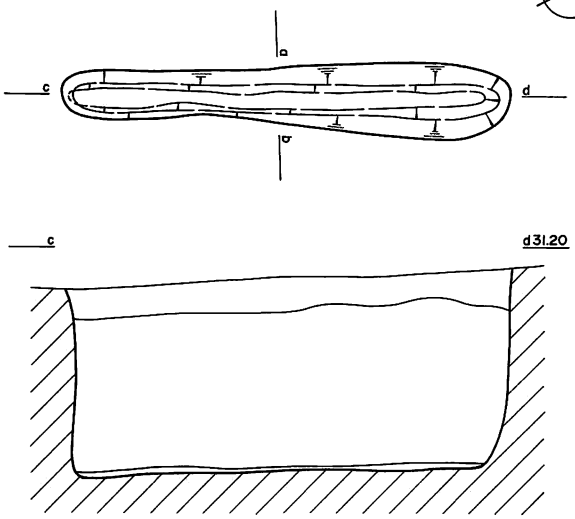


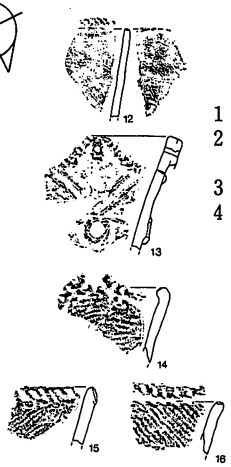


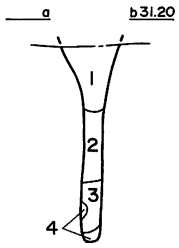


1　黒色土
2　暗褐色土（ローム粒少量）
3　黒褐色土（ローム粒を含む）
4　明黄褐色土（ローム）
5　黄褐色土（ローム多量）

P-28

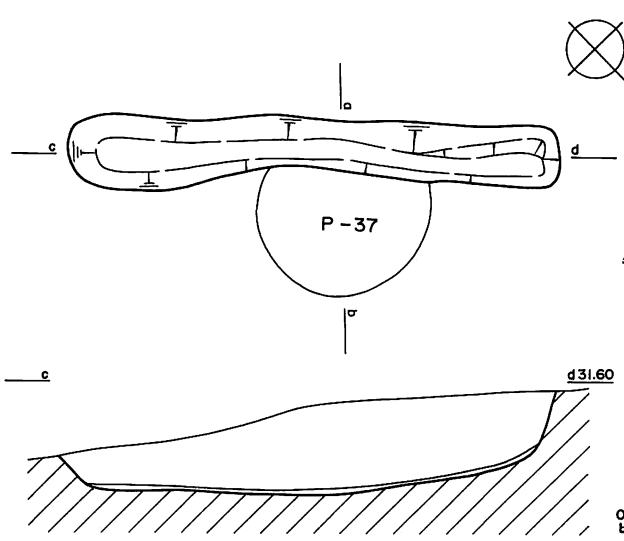


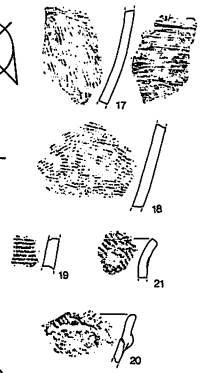


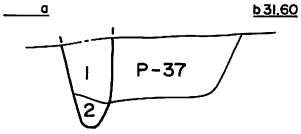


1　黒色土
2　暗黄褐色土
（ロームに黒色土少量）
3　黒褐色土
4　暗黄褐色土
（ロームブロック）

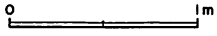
P-36





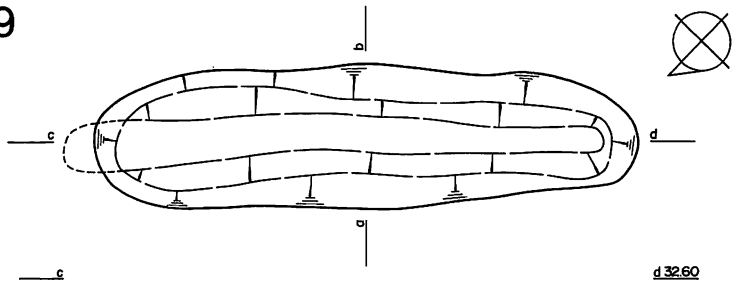


1　暗褐色土
（ローム粒少量）
2　黒褐色土
（ローム粒を含む）

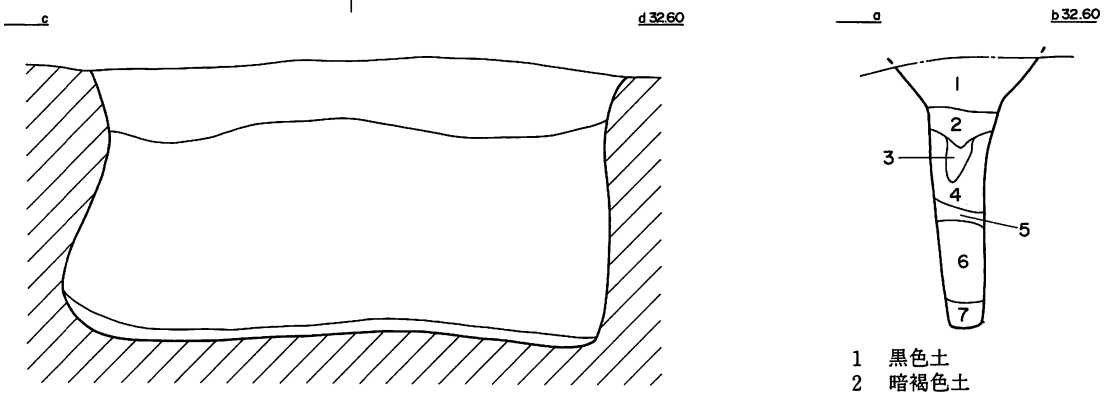


図Ⅲ－96　Tピット(3)・P－24, 28, 36

P-39

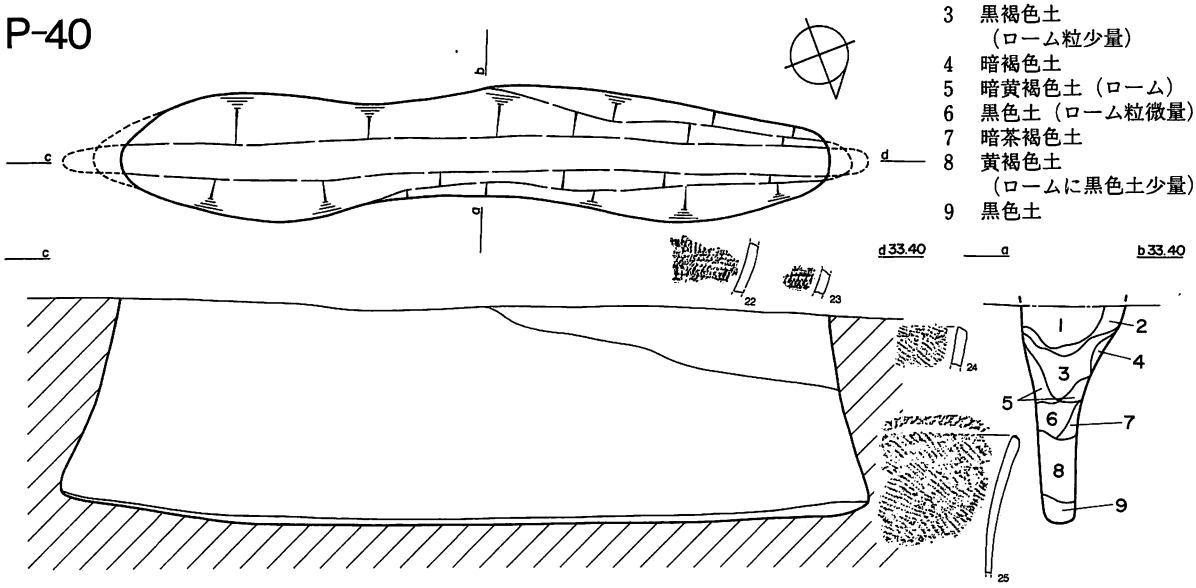


1 黒色土
2 暗褐色土（ロームを含む）
3 明黄褐色土（ローム）
4 暗茶褐色土（ローム粒を含む）
5 暗黄褐色土（ローム粒少量）
6 黒色土（ローム粒を含む）
7 黒色土

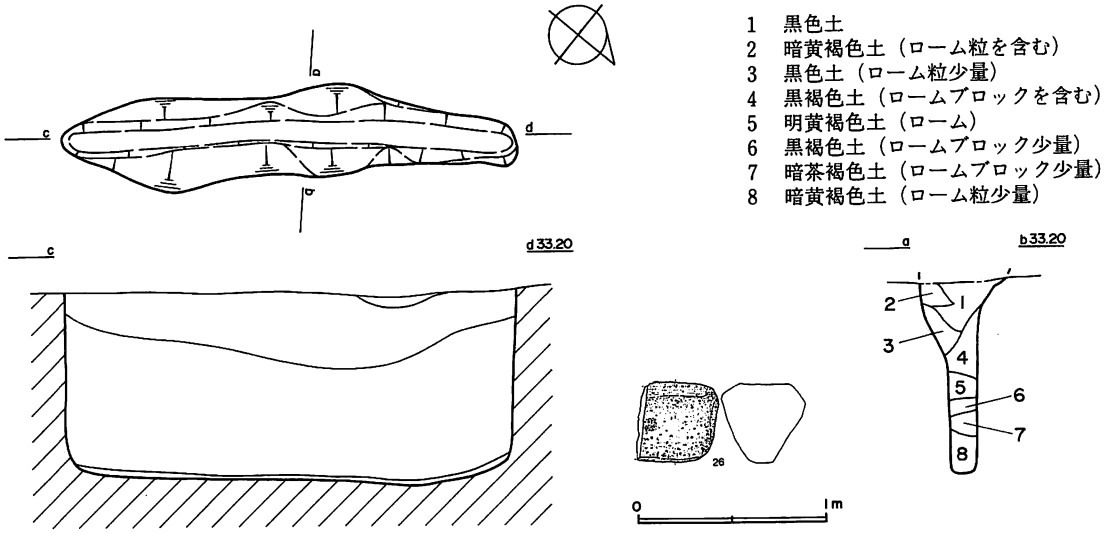


1 黒色土
2 暗褐色土
（ローム粒を含む）
3 黒褐色土
（ローム粒少量）
4 暗褐色土
5 暗黄褐色土（ローム）
6 黒色土（ローム粒微量）
7 暗茶褐色土
8 黄褐色土
（ロームに黒色土少量）
9 黒色土

P-40



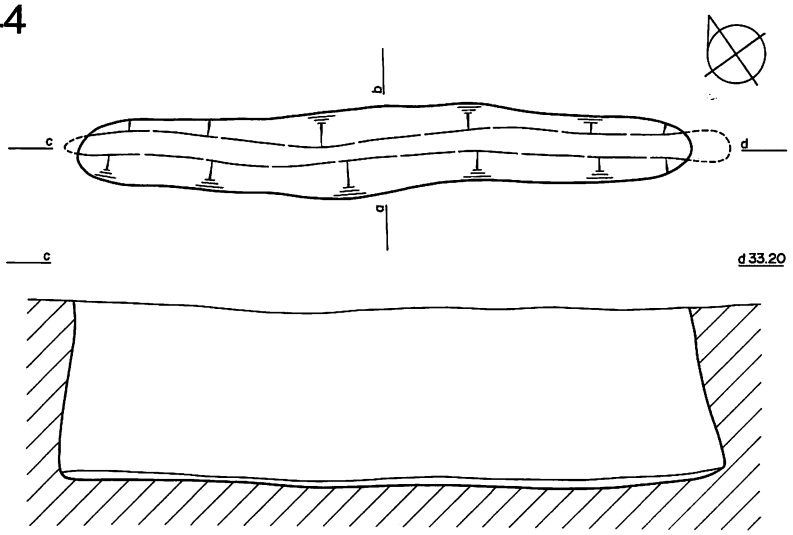
P-43



1 黒色土
2 暗黄褐色土（ローム粒を含む）
3 黒色土（ローム粒少量）
4 黒褐色土（ロームブロックを含む）
5 明黄褐色土（ローム）
6 黒褐色土（ロームブロック少量）
7 暗茶褐色土（ロームブロック少量）
8 暗黄褐色土（ローム粒少量）

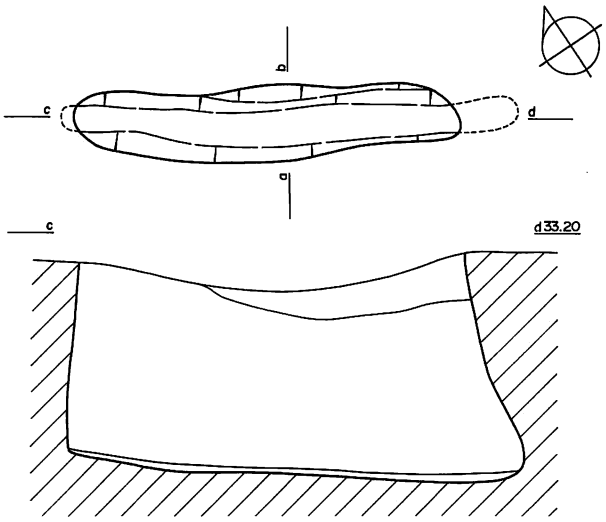
図Ⅲ－97　Tピット(4)・P－39, 40, 43

P-44



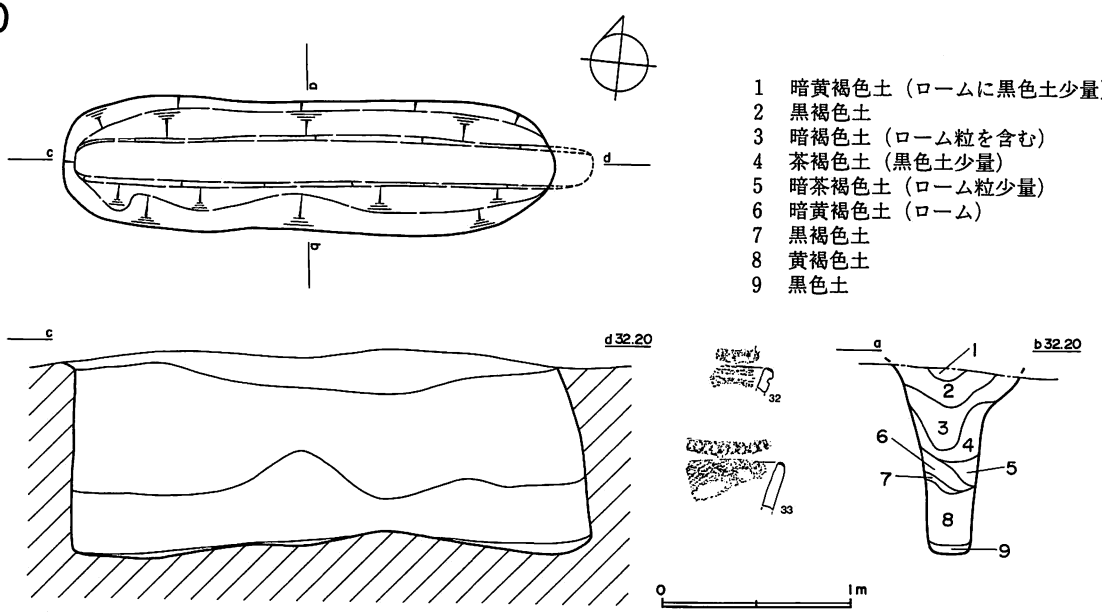
1　黒褐色土
2　暗黄褐色土（ローム粒を含む）
3　黒色土

P-45



1　黒色土
2　暗褐色土（ローム粒を含む）
3　暗黄褐色土（ロームに黒色土少量）
4　黒褐色土（ローム粒少量）
5　暗黄褐色土（ローム）
6　黒色土

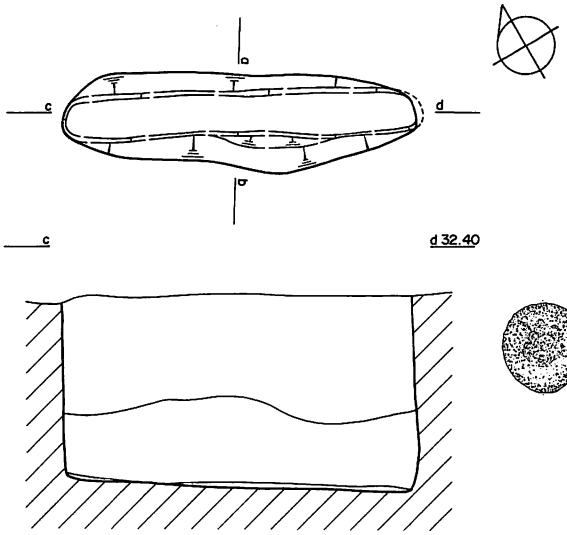
P-50



1　暗黄褐色土（ロームに黒色土少量）
2　黒褐色土
3　暗褐色土（ローム粒を含む）
4　茶褐色土（黒色土少量）
5　暗茶褐色土（ローム粒少量）
6　暗黄褐色土（ローム）
7　黒褐色土
8　黄褐色土
9　黒色土

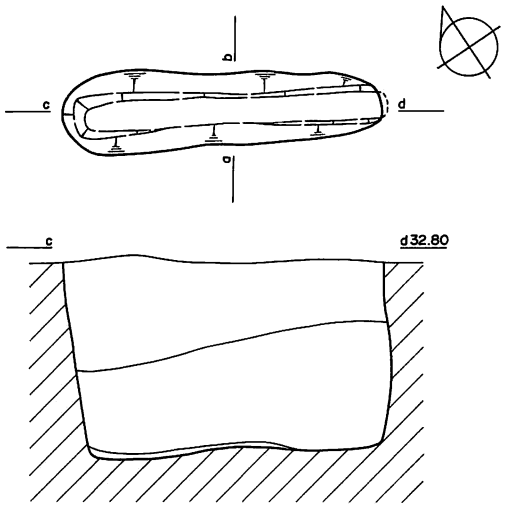
図Ⅲ－98　Tピット(5)・P－44, 45, 50

P-51



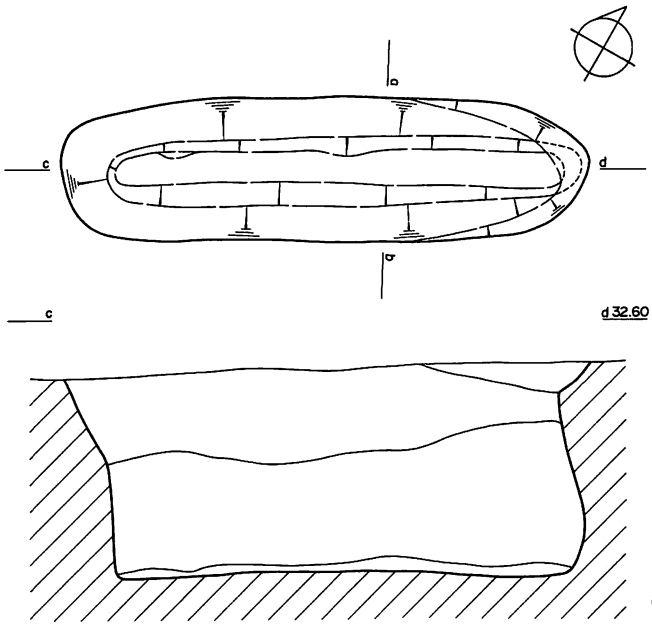
1 黒色土
2 暗黄褐色土（黒色土少量）
3 暗黄褐色土
4 黒褐色土（ローム粒少量）
5 明黄褐色土（ローム）
6 暗黄褐色土
7 明黄褐色土（ロームに黒色土微量）
8 暗褐色土
9 暗褐色土（ローム粒少量）
10 黒色土

P-52



1 黒色土
2 黒褐色土（ローム粒少量）
3 黄褐色土（ローム粒多量）
4 暗褐色土
5 黒色土

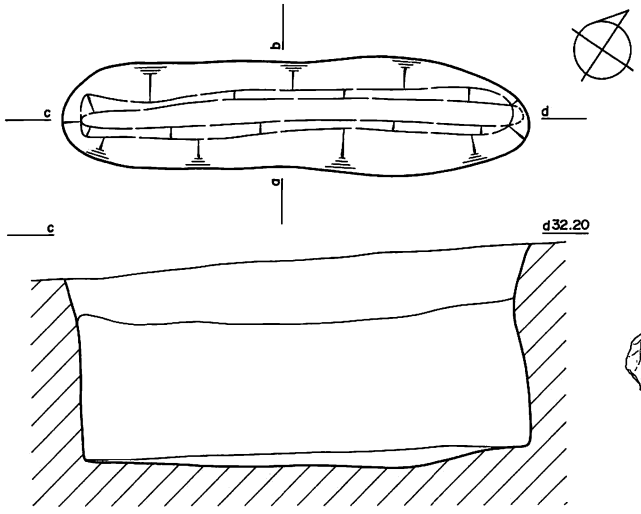
P-54



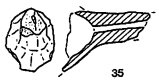
1 黒褐色土
2 暗褐色土
3 明黄褐色土（ロームブロック）
4 黒褐色土（ローム粒少量）
5 明黄褐色土（ローム）
6 黒色土

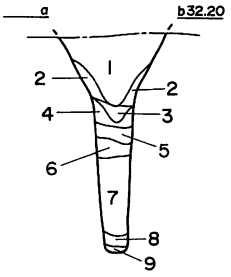
図Ⅲ－99 Tピット(6)・P－51, 52, 54

P-59

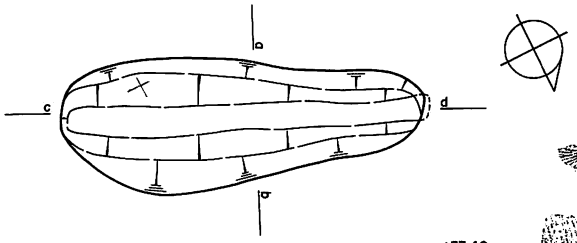


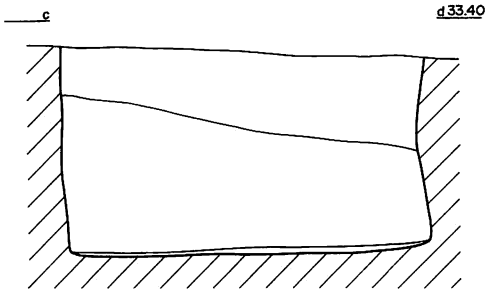
1　黒色土
2　暗黄褐色土（ローム粒多量）
3　黒褐色土（ローム粒少量）
4　黄褐色土
5　黒色土
6　灰褐色土（ロームを含む）
7　黄褐色土
8　黒色土
9　暗黄褐色土（ロームに黒色土微量）





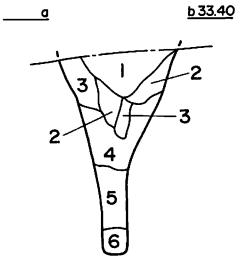
P-60



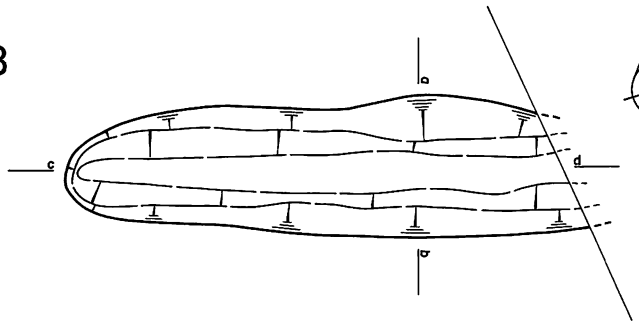


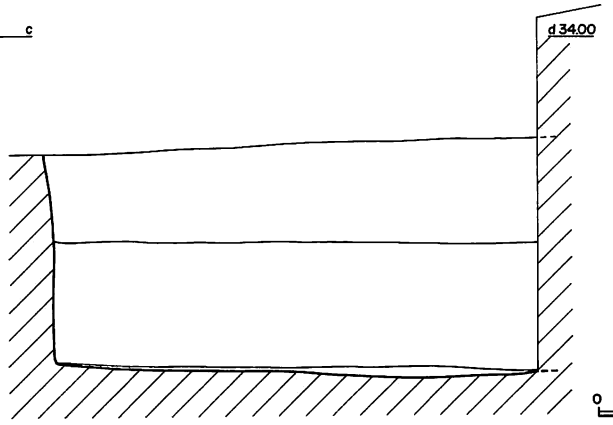


1　黒色土
2　黒褐色土（ローム粒少量）
3　暗黄褐色土
4　茶褐色土（ローム粒を含む）
5　明黄褐色土（ローム）
6　黒色土



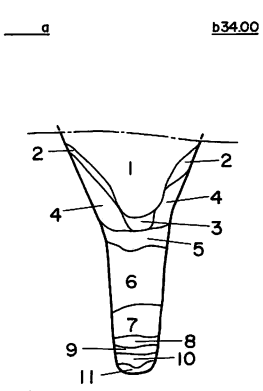
P-63

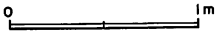






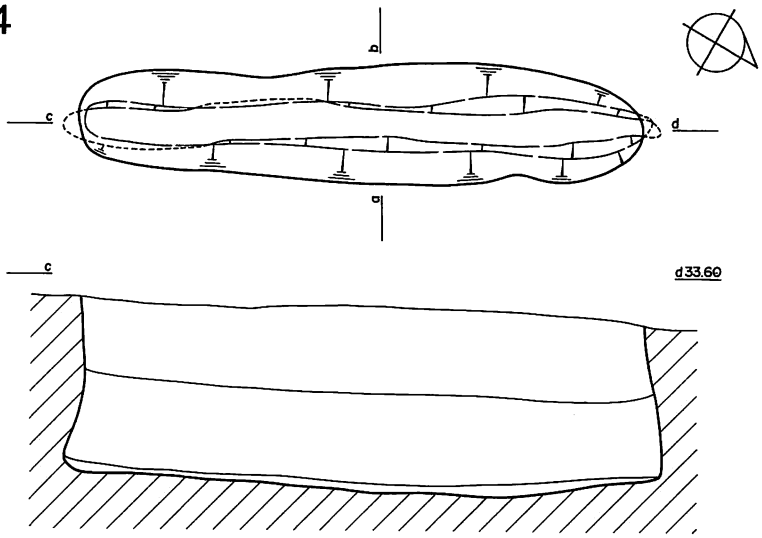
1　黒色土
2　暗黄褐色土（ロームを含む）
3　暗灰褐色土（ローム粒を含む）
4　暗黄褐色土（ローム）
5　黒褐色土（ローム粒少量）
6　明黄褐色土（ローム，硬い）
7　黄褐色土（ローム，やわらかい）
8　黒褐色土（ローム粒微量）
9　暗黄褐色土（ローム粒多量）
10　黒色土
11　明黄褐色土（ローム）





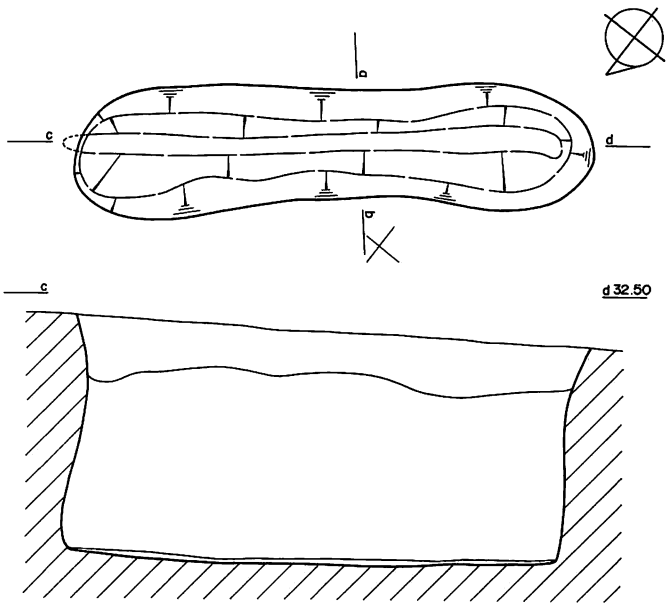
図Ⅲ－100　Tピット(7)・P－59，60，63

P-64



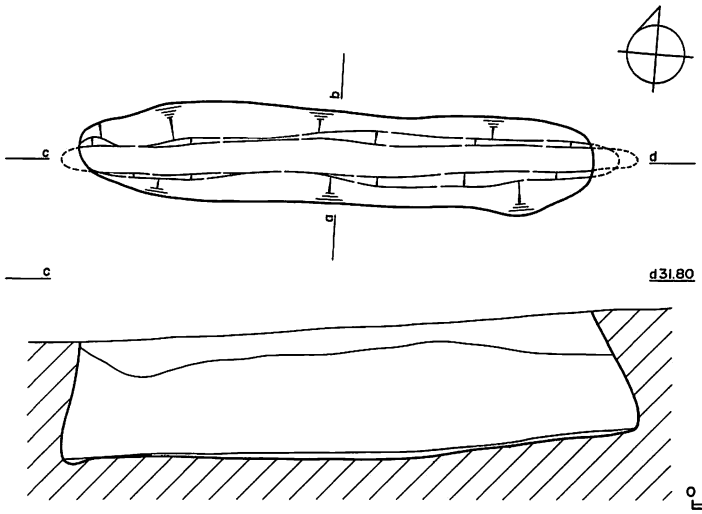
1 黒色土
2 茶褐色土（ローム粒を含む）
3 黒褐色土（ローム粒少量）
4 暗黄褐色土（ローム）
5 黒褐色土（ローム粒少量）

P-66



1 黒色土
2 黒褐色土（ローム粒微量）
3 暗黄褐色土（ローム粒多量）
4 暗灰褐色土（ロームを含む）
5 暗黄褐色土（ローム粒多量）
6 黒色土
7 明黄褐色土（ローム）
8 黒褐色土（ローム粒少量）
9 明黄褐色土（ローム）
10 黒褐色土（ローム粒少量）
11 暗黄褐色土（ローム）
12 黒色土

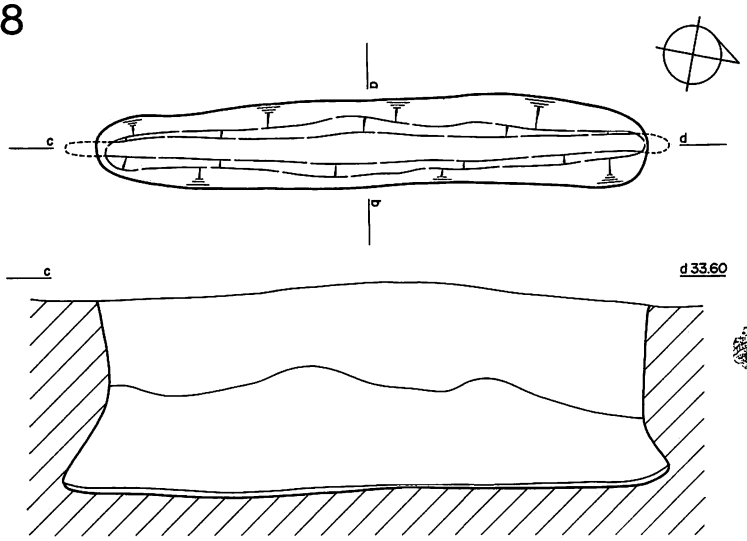
P-67



1 黒色土
2 暗茶褐色土（ロームを含む）
3 暗灰褐色土（ローム粒少量）
4 明黄褐色土（ローム）
5 黒色土
6 明黄褐色土（ローム）
7 黒褐色土（ローム粒少量）
8 暗黄褐色土（ローム粒多量）
9 黒色土

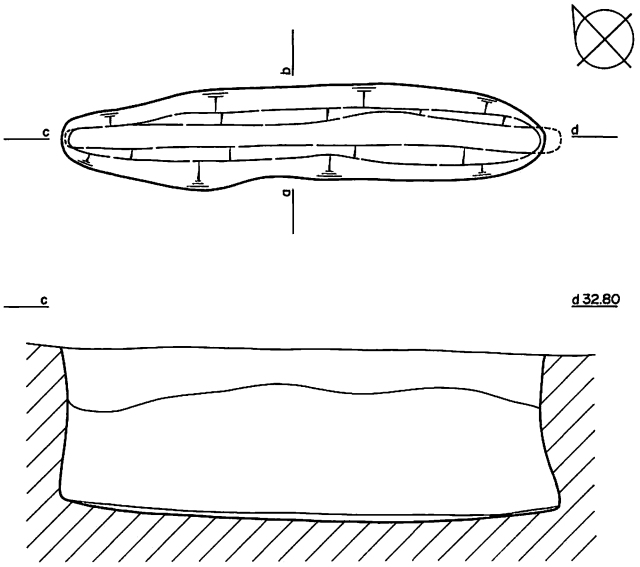
図Ⅲ－101　Tピット(8)・P－64, 66, 67

P-68



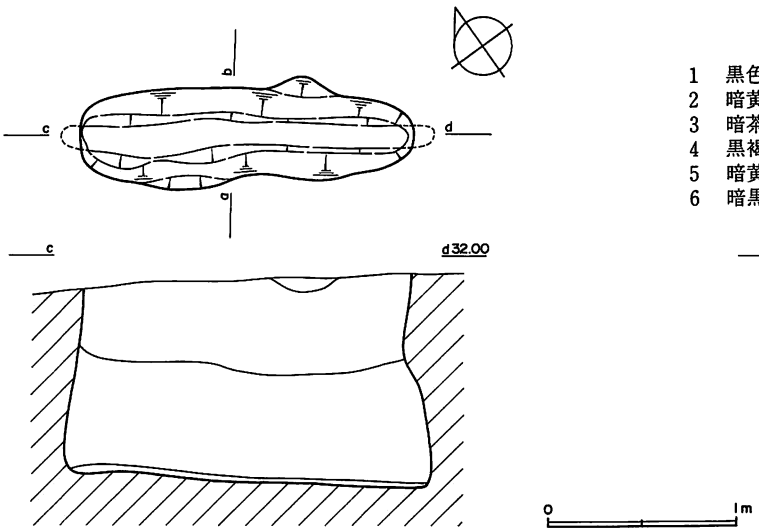
1　黒色土
2　茶褐色土
3　明黄褐色土（ロームブロック）
4　暗黄褐色土（ローム粒多量）
5　黒色土
6　黒褐色土（ローム粒少量）
7　明黄褐色土（ローム）
8　黒色土

P-70



1　黒色土
2　暗褐色土（ローム粒少量）
3　暗黄褐色土（ローム粒多量）
4　黒褐色土（ローム粒微量）
5　明黄褐色土（ローム）
6　黒色土
7　暗黄褐色土（ローム粒多量）
8　黒色土

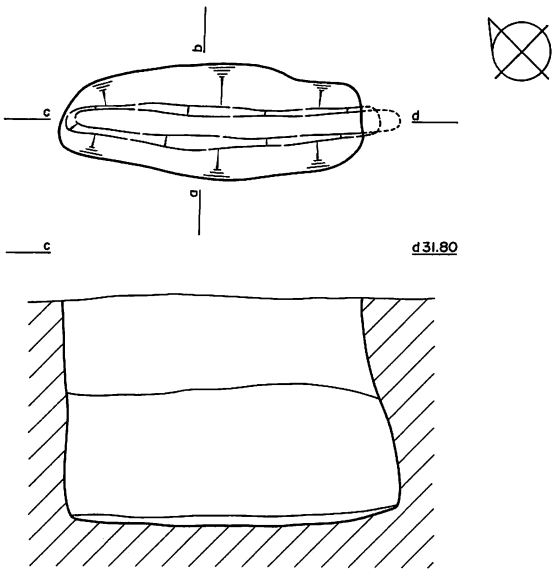
P-72



1　黒色土
2　暗黄褐色土（ローム粒多量）
3　暗茶褐色土
4　黒褐色土（ローム粒少量）
5　暗黄褐色土（ローム）
6　暗黒褐色土（ローム粒微量）

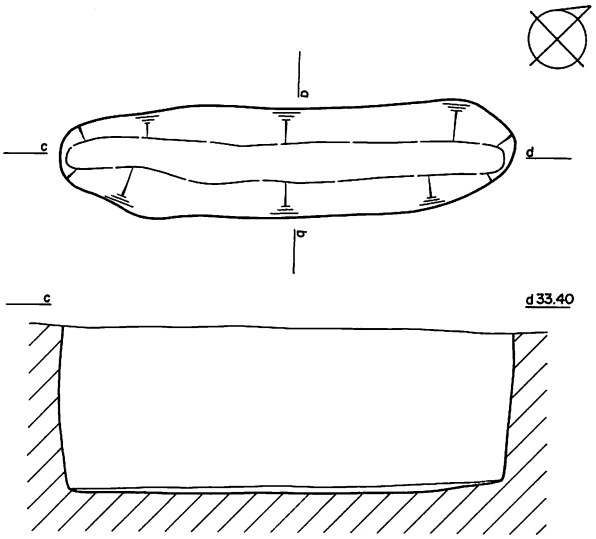
図Ⅲ－102　Tピット(9)・P－68，70，72

P-74



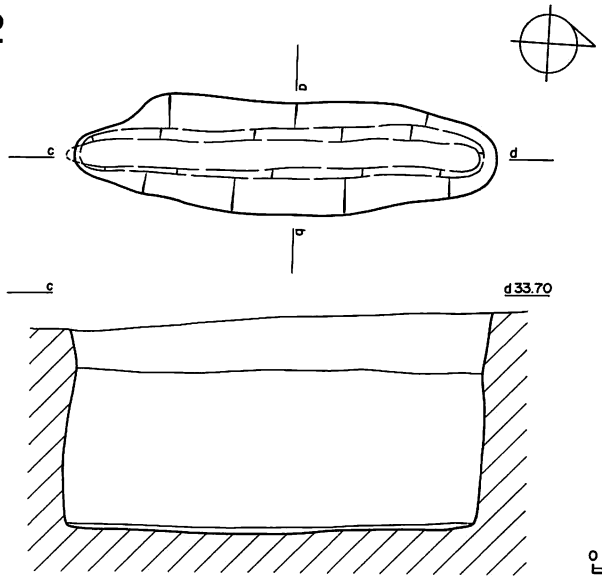
1 黒色土
2 黒褐色土（ローム粒少量）
3 暗黄褐色土（ローム粒多量）
4 暗灰褐色土
5 黒褐色土（ローム粒少量）
6 暗黄褐色土（ローム）
7 暗黒褐色土（ローム粒微量）
8 明黄褐色土（ローム）
9 黒色土

P-81



1 黒色土
2 明黄褐色土
（ロームに黒色土微量）
3 黒色土

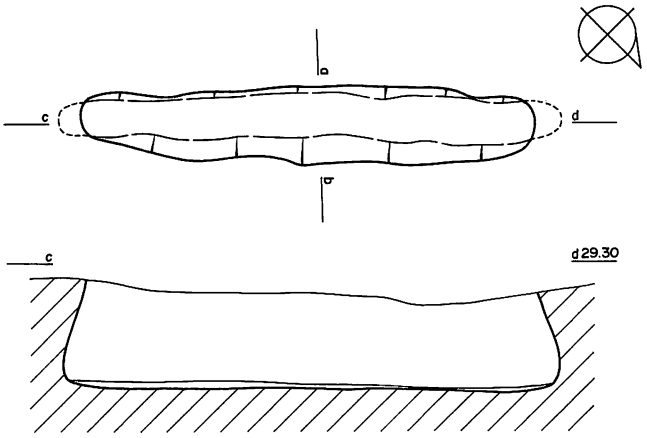
P-82



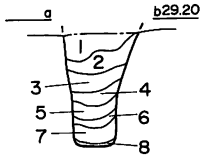
1 黒色土
2 黒褐色土（ロームブロック少量）
3 暗黄褐色土
4 黒褐色土（ローム粒少量）
5 暗黄褐色土（ローム）
6 暗茶褐色土（ローム粒を含む）
7 明黄褐色土（ローム）
8 黒色土

図Ⅲ－103　Tピット⑽・P－74，81，82

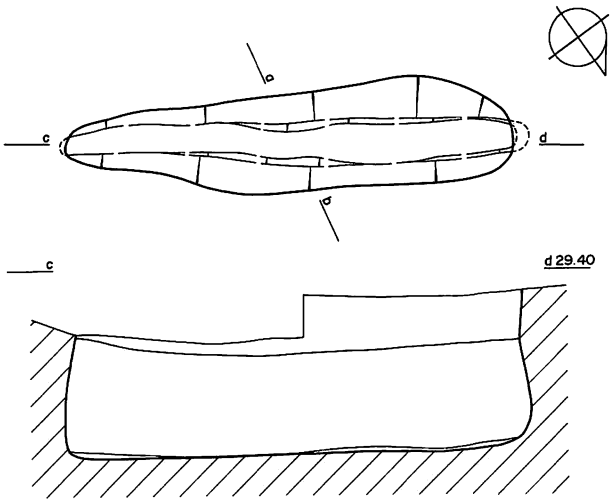
P-84



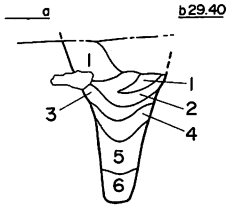
1　黒色土
2　褐色土
3　暗黄褐色土（ローム粒多量）
4　黒褐色土（ローム粒少量）
5　暗黄褐色土
6　灰褐色土（ローム粒を含む）
7　暗黄褐色土（ローム粒多量）
8　黒色土



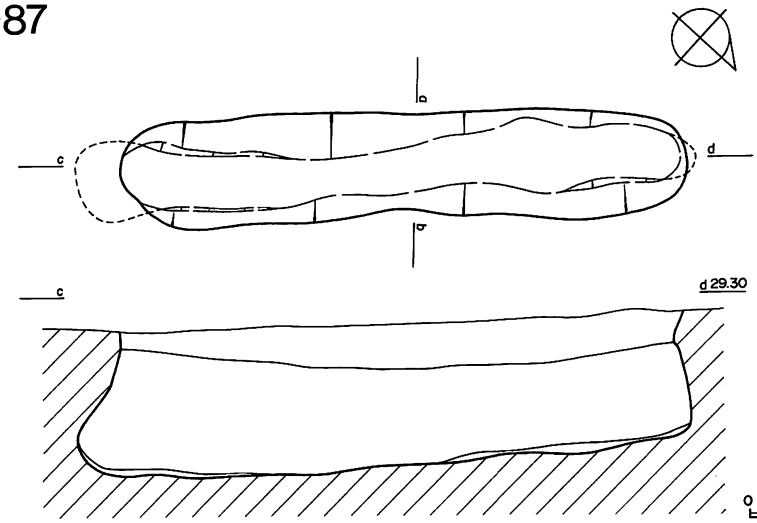
P-86



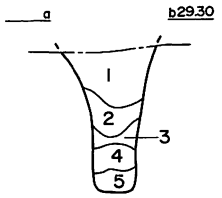
1　黒色土
2　暗褐色土（ローム粒多量）
3　黒色土
4　黒褐色土（ロームブロックを含む）
5　明黄褐色土（ローム）
6　黒褐色土

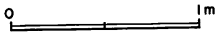


P-87



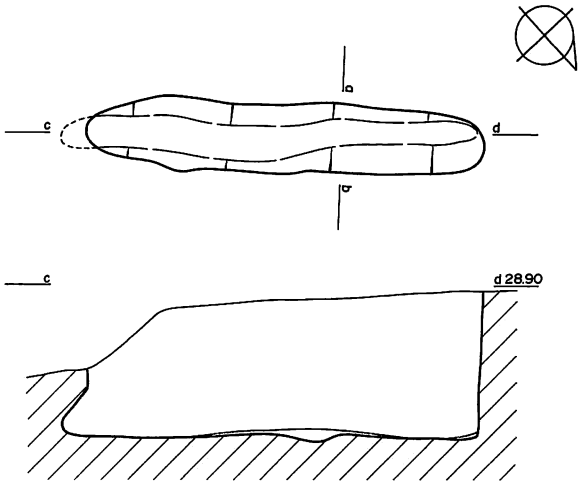
1　黒色土
2　黒褐色土（ロームブロックを含む）
3　明黄褐色土（ローム）
4　暗褐色土
5　褐色土（ローム粒少量）

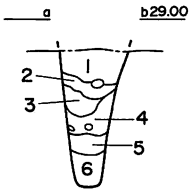




図Ⅲ－104　Tピット(11)・P－84, 86, 87

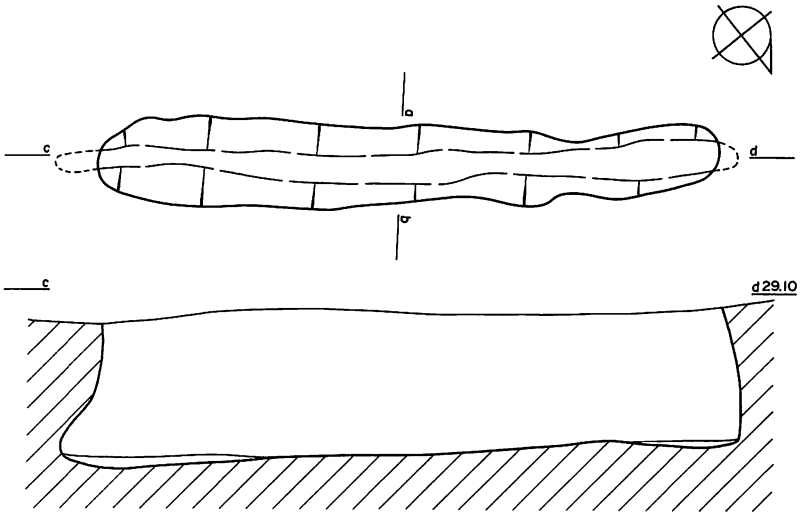
P-88

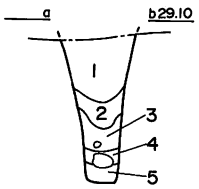




1 黒色土
2 黒褐色土（ローム粒を含む）
3 黒色土
4 明黄褐色土（ローム）
5 黒褐色土
6 明黄褐色土（ローム・砂礫を含む）

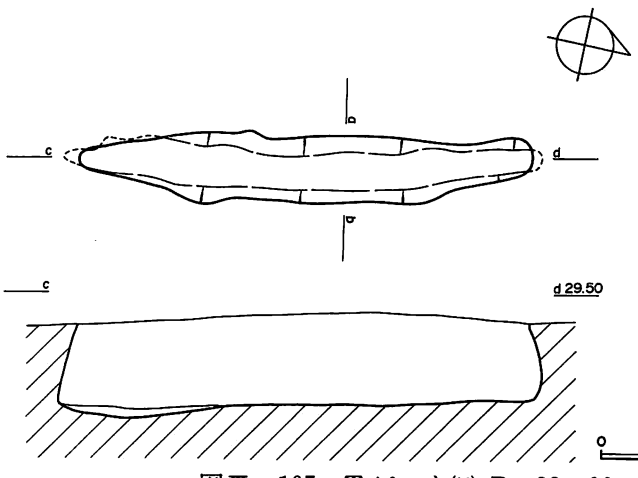
P-90

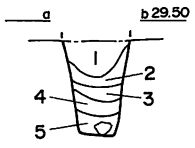




1 黒色土
2 暗褐色土
3 明黄褐色土（ローム）
4 黒褐色土（ローム粒少量）
5 明黄褐色土（ローム）

P-91

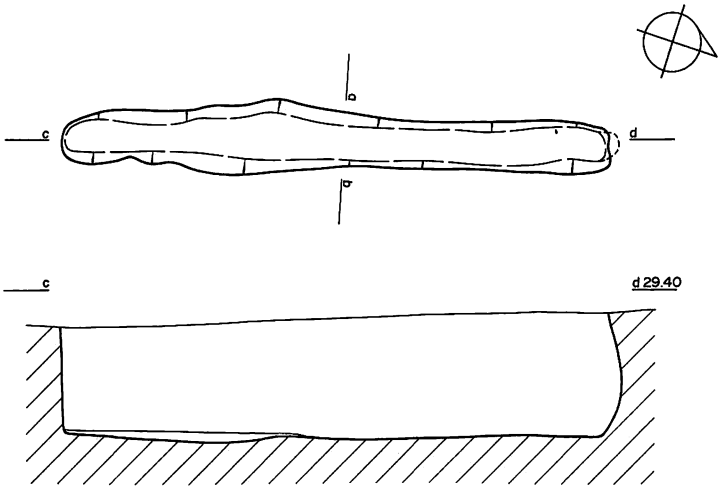




1 黒色土
2 暗褐色土（ロームブロックを含む）
3 褐色土
4 明黄褐色土（ローム）
5 黒褐色土（ロームブロックを含む）

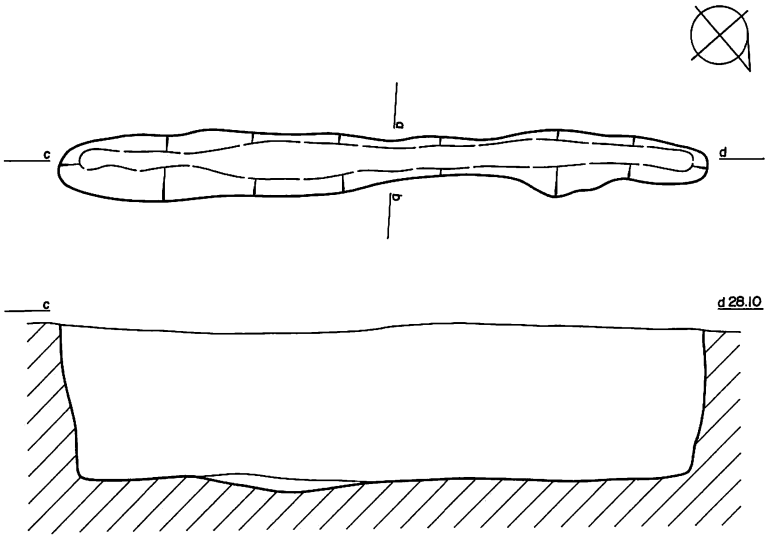
図Ⅲ－105　Tピット⑿・P－88，90，91

P-92



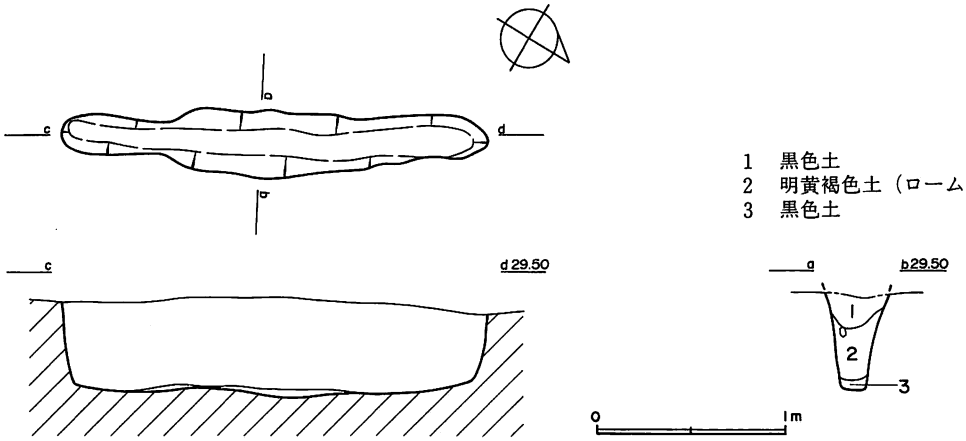
1　黒褐色土
2　明黄褐色土（ローム）
3　黒色土
4　明黄褐色土（ローム）
5　褐色土

P-93



1　黒褐色土
　（黄褐色火山灰を含む）
2　暗褐色土
　（ローム粒を含む）
3　灰褐色土（粘質）
4　黄褐色土（砂質）
5　暗黄褐色土
　（砂礫・粘土を含む）

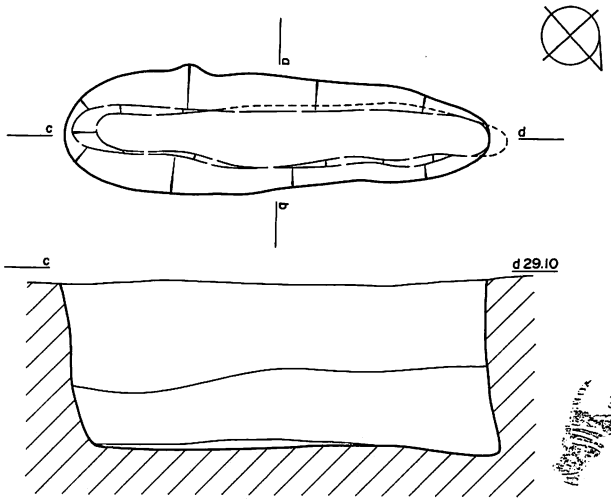
P-94



1　黒色土
2　明黄褐色土（ローム）
3　黒色土

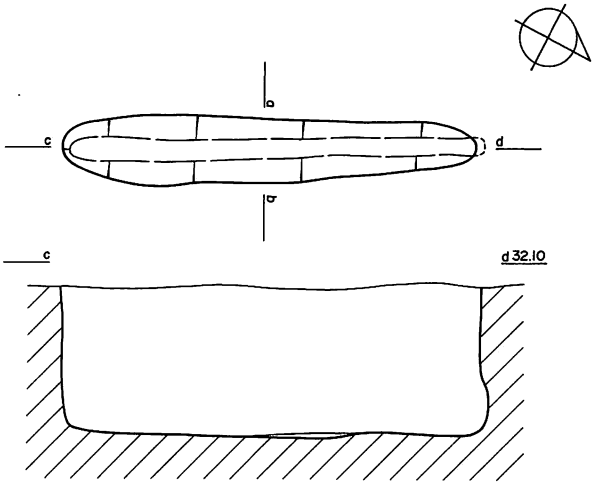
図Ⅲ－106　Tピット(13)・P－92，93，94

P-95



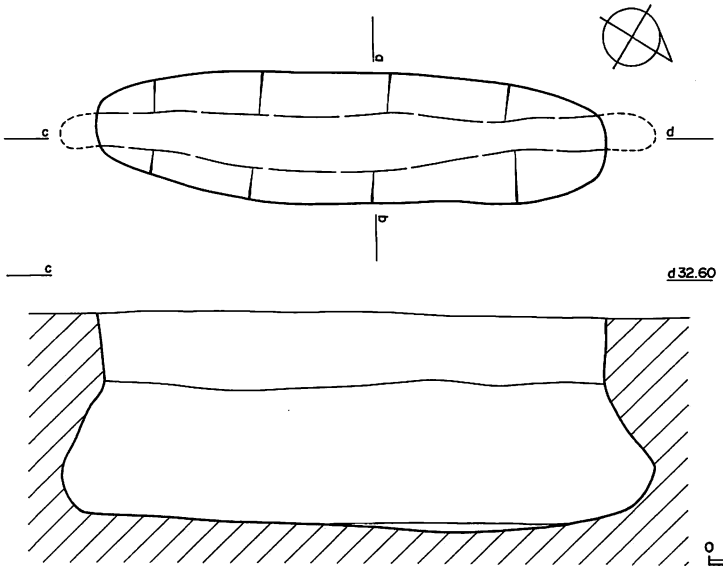
1 黒色土
2 茶褐色土
3 暗褐色土
4 暗黄褐色土
5 黒色土
6 暗黄褐色土（ローム・砂礫を含む）

P-96



1 暗褐色土
2 明黄褐色土（ローム・黒色土少量）
3 暗褐色土
4 明褐色土
5 明褐色土（ロームブロックを含む）
6 黒色土
7 褐色土（黒色土少量）

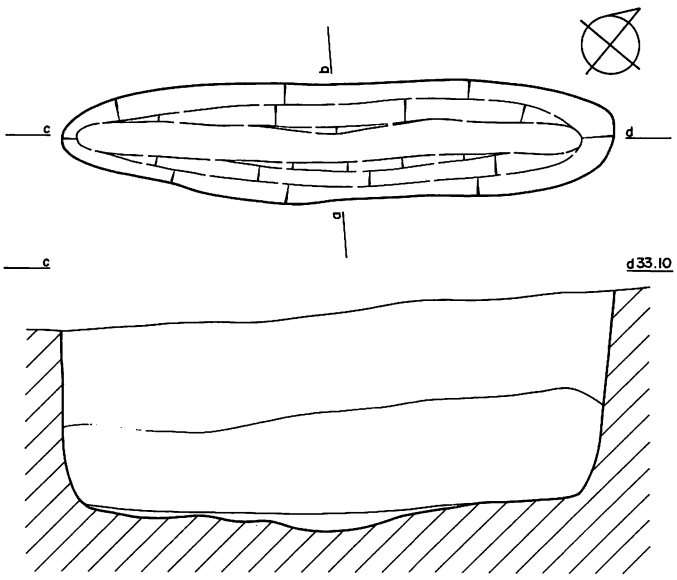
P-97



1 黒色土
2 黒色土（ローム粒少量）
3 褐色土
4 明褐色土（ローム粒多量）
5 褐色土
6 褐色土（ローム粒少量）
7 明褐色土
8 黒色土（ローム粒を含む）
9 黒色土・明黄褐色土（ロームの互層）
10 明黄褐色土（ローム）

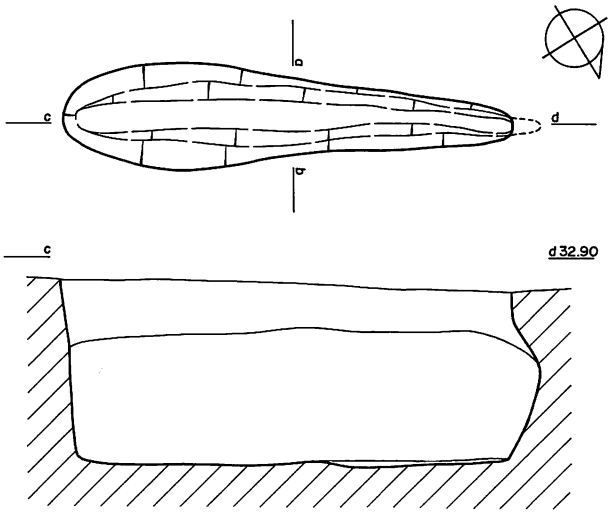
図Ⅲ－107　Tピット(14)・P－95, 96, 97

P-98



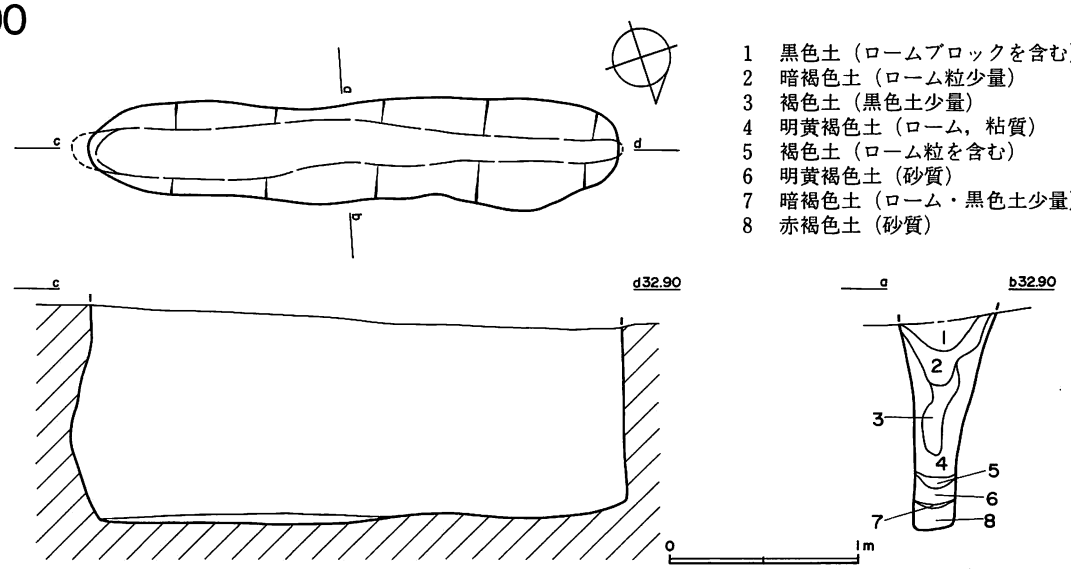
1　黒色土
2　暗褐色土（ローム粒を含む）
3　黒色土
4　暗褐色土
5　暗褐色土（ロームブロックを含む）
6　明黄褐色土（ロームブロック）
7　黒色土
8　明黄褐色土（ローム）
9　黒色土
10　明黄褐色土（ローム・粘質）

P-99



1　黒色土（ロームブロックを含む）
2　褐色土
3　暗褐色土
4　褐色土（ロームブロックを含む）
5　暗褐色土
6　褐色土
7　明黄褐色土（ローム，粘質）

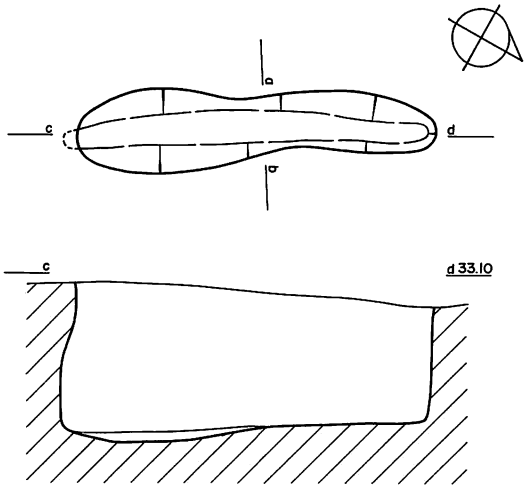
P-100



1　黒色土（ロームブロックを含む）
2　暗褐色土（ローム粒少量）
3　褐色土（黒色土少量）
4　明黄褐色土（ローム，粘質）
5　褐色土（ローム粒を含む）
6　明黄褐色土（砂質）
7　暗褐色土（ローム・黒色土少量）
8　赤褐色土（砂質）

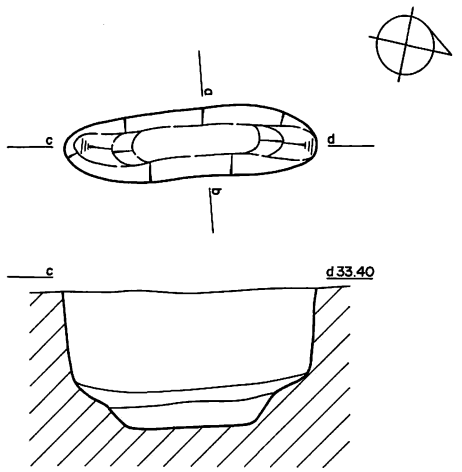
図Ⅲ－108　Tピット(15)・P－98，99，100

P-101



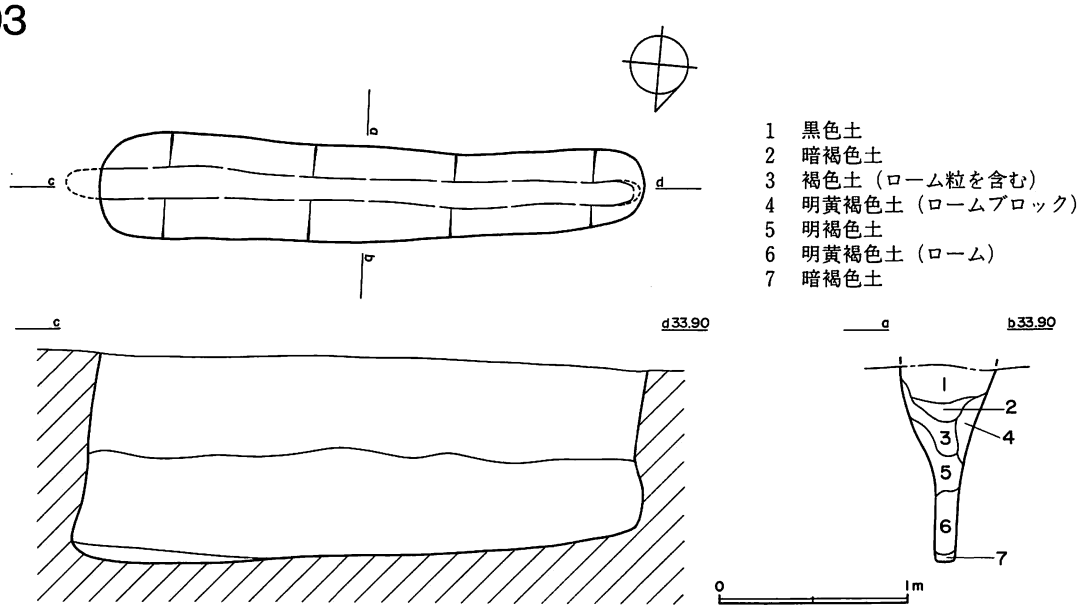
1 黒色土
2 黄褐色土（ロームに黒色土少量）
3 褐色土
4 明黄褐色土（ローム）
5 黒色土

P-102



1 黒色土
2 暗褐色土
3 明黄褐色土（ローム）
4 暗褐色土（ローム粒少量）
5 明褐色土（粘質）

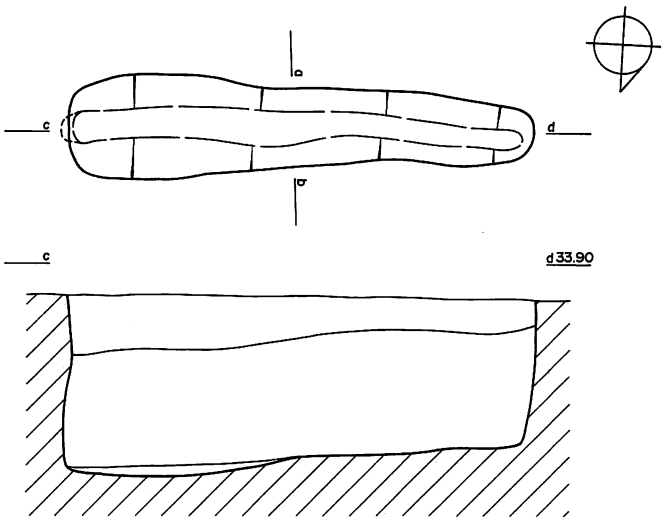
P-103



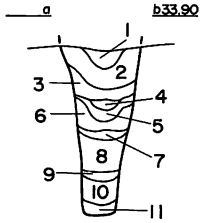
1 黒色土
2 暗褐色土
3 褐色土（ローム粒を含む）
4 明黄褐色土（ロームブロック）
5 明褐色土
6 明黄褐色土（ローム）
7 暗褐色土

図Ⅲ－109　Tピット⑯・P－101，102，103

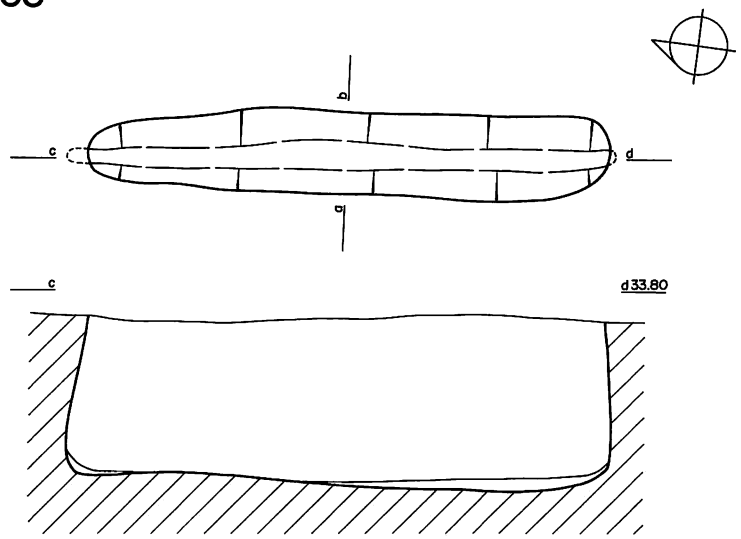
P-104



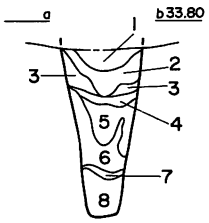
1　暗褐色土（ローム粒を含む）
2　黒色土
3　暗褐色土（ローム粒を含む）
4　暗褐色土
5　褐色土
6　明黄褐色土（ローム）
7　褐色土
8　明黄褐色土（ローム）
9　褐色土
10　明黄褐色土（ローム）
11　暗褐色土



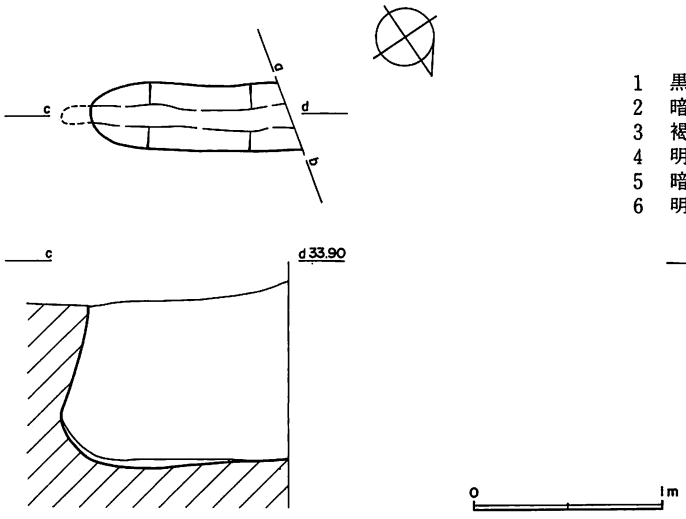
P-105



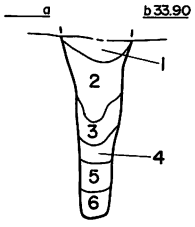
1　黒色土
2　暗褐色土（ローム粒少量）
3　明褐色土
4　褐色土
5　黒色土
6　明褐色土
7　黄褐色土（粘質）
8　明褐色土（粘質）



P-106

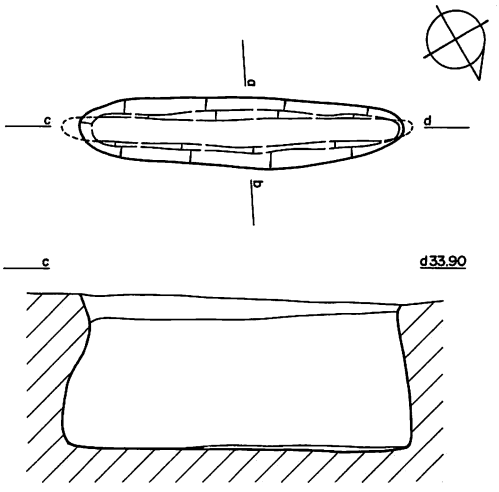


1　黒色土
2　暗褐色土（ローム粒少量）
3　褐色土
4　明黄褐色土（ローム）
5　暗褐色土（ローム粒少量）
6　明黄褐色土（ローム）



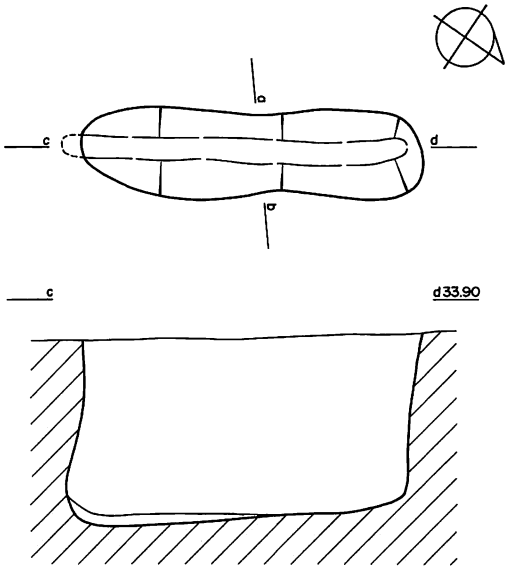
図Ⅲ－110　Tピット(17)・P－104, 105, 106

P-107



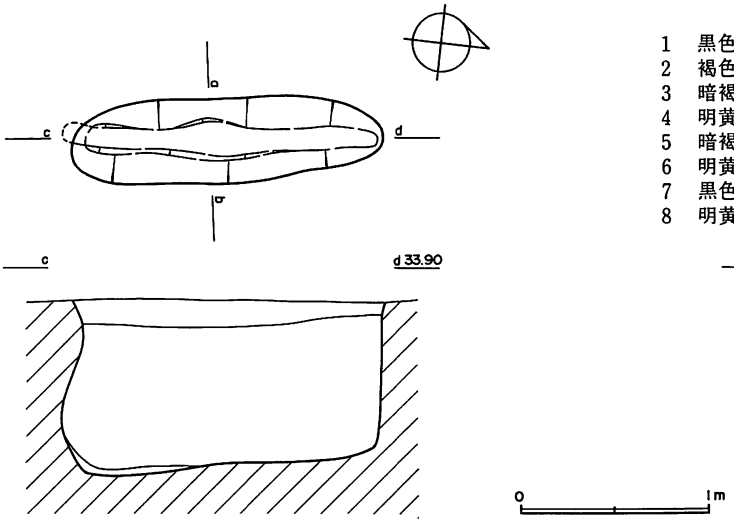
1 黒色土
2 黒色土（ロームブロックを含む）
3 褐色土（ロームブロックを含む）
4 明黄褐色土（ローム）
5 暗褐色土
6 黄褐色土（砂質）

P-108



1 黒色土
2 暗褐色土（ローム粒多量）
3 明褐色土
4 暗褐色土（ローム粒多量）
5 明褐色土
6 黄褐色土（ロームに黒色土少量）
7 明黄褐色土（ローム，粘質）

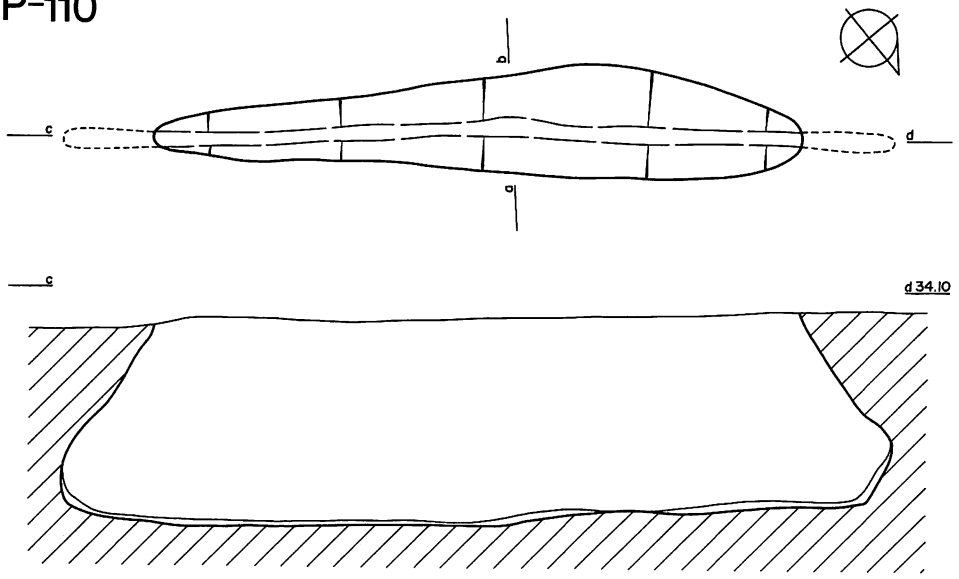
P-109



1 黒色土
2 褐色土
3 暗褐色土（ローム粒多量）
4 明黄褐色土（ローム）
5 暗褐色土
6 明黄褐色土（ローム）
7 黒色土
8 明黄褐色土（ローム）

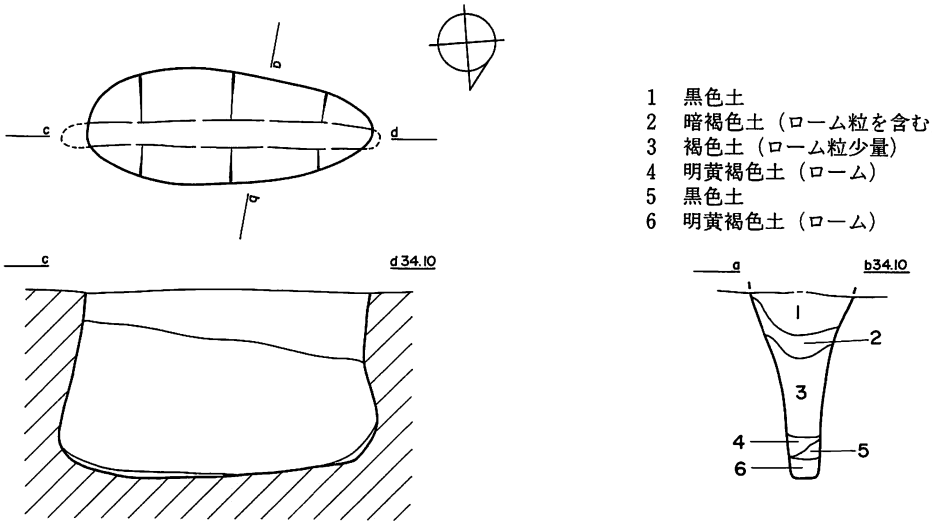
図Ⅲ－111　Tピット(18)・P－107，108，109

P-110



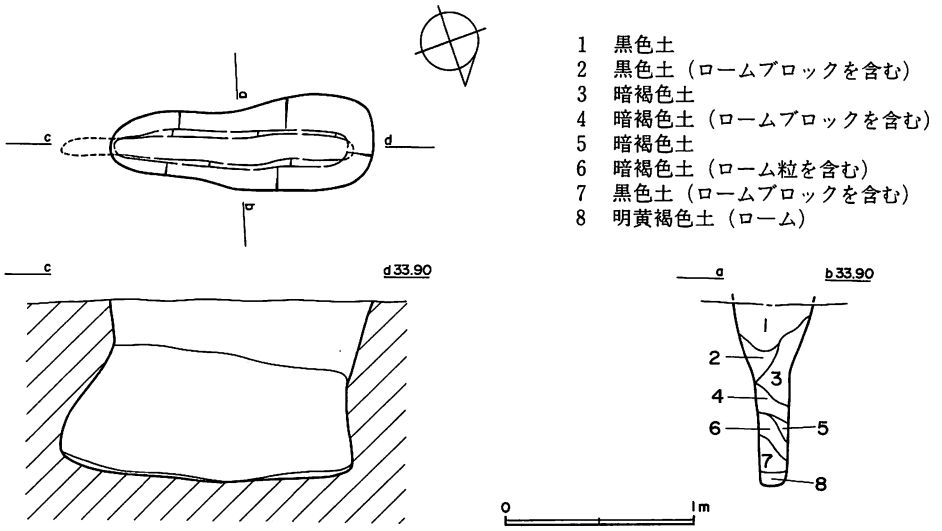
1　黒色土
2　暗褐色土
　（ローム粒を含む）
3　暗褐色土
4　暗褐色土
　（ローム粒を含む）
5　褐色土

P-111



1　黒色土
2　暗褐色土（ローム粒を含む）
3　褐色土（ローム粒少量）
4　明黄褐色土（ローム）
5　黒色土
6　明黄褐色土（ローム）

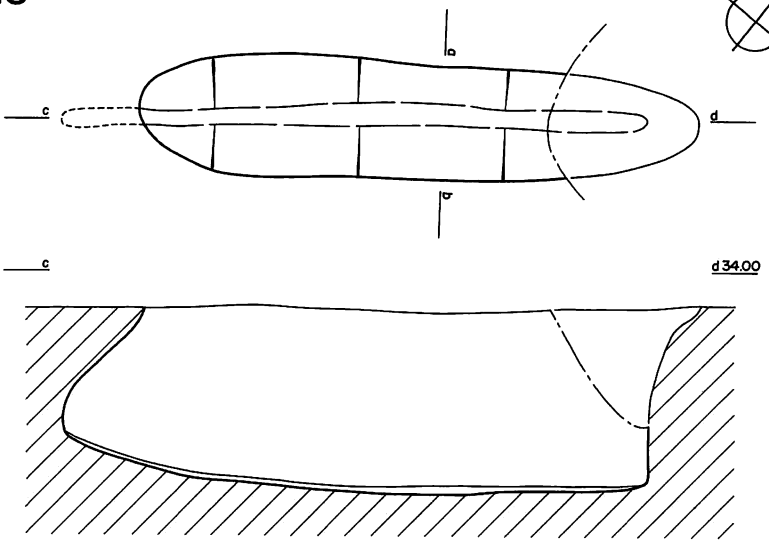
P-112



1　黒色土
2　黒色土（ロームブロックを含む）
3　暗褐色土
4　暗褐色土（ロームブロックを含む）
5　暗褐色土
6　暗褐色土（ローム粒を含む）
7　黒色土（ロームブロックを含む）
8　明黄褐色土（ローム）

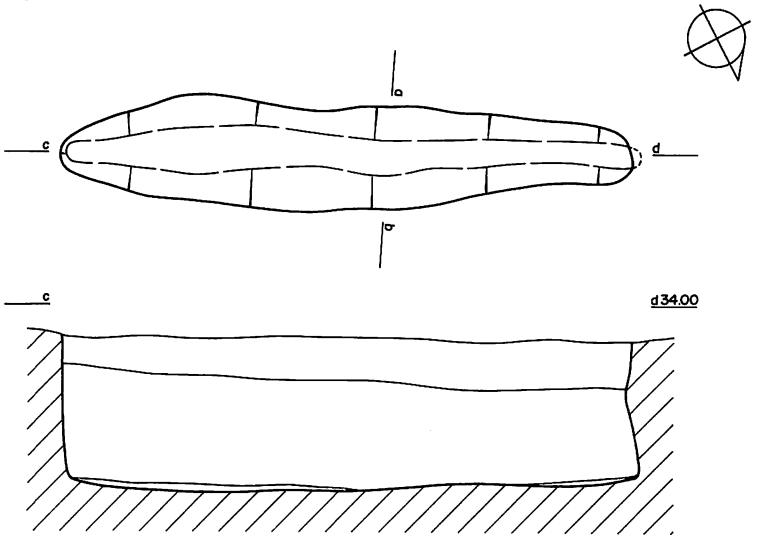
図Ⅲ－112　Tピット⑲・P－110，111，112

P-113



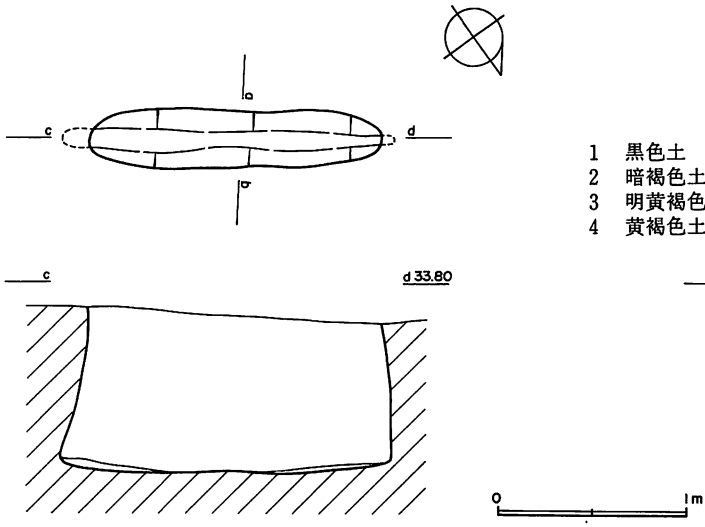
1 明黄褐色土（ロームブロック）
2 黒色土
3 暗褐色土（ローム粒を含む）
4 褐色土
（ロームブロックを含む）
5 暗褐色土
6 褐色土
（ロームブロックを含む）
7 黄褐色土
（ロームブロックを含む）
8 褐色土（ローム粒を含む）

P-114



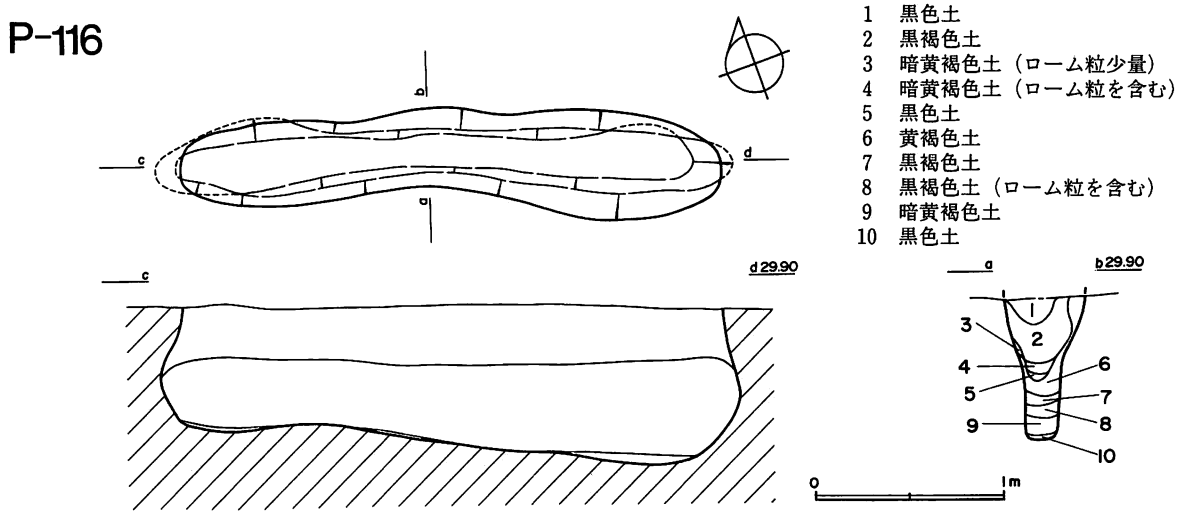
1 黒色土
2 黒色土（ローム粒を含む）
3 暗褐色土
4 明黄褐色土（ロームブロック）
5 褐色土（ローム粒を含む）
6 暗褐色土
7 褐色土
8 明黄褐色土（ローム）
9 褐色土

P-115



1 黒色土
2 暗褐色土
3 明黄褐色土（ローム）
4 黄褐色土（ロームに黒色土少量）

図Ⅲ－113 Tピット⑳・P－113, 114, 115



図Ⅲ－114　Tピット(21)・P－116

全体の形状がわかるもので大きさの平均をみると，確認面は2.49×0.52m，壙底面は2.58×0.15m，深さは0.93mで，壙底が少し広がる傾向がある。確認面の長軸方向の長さで大きさの分類を行うと，2m以下は13基(P－51，52，60，72，74，101，102，107，108，109，111，112，115)，2～2.5mは18基(P－11，13，28，43，45，59，81，82，84，86，88，91，94，95，96，99，104，105)，2.5～3mは17基(P－7，36，39，50，54，64，66，67，68，70，92，97，98，100，103，113，116)，3m以上は10基(P－4，10，20，40，44，87，90，93，110，114)となり，半数以上が2～3mの大きさである。　**平　均**

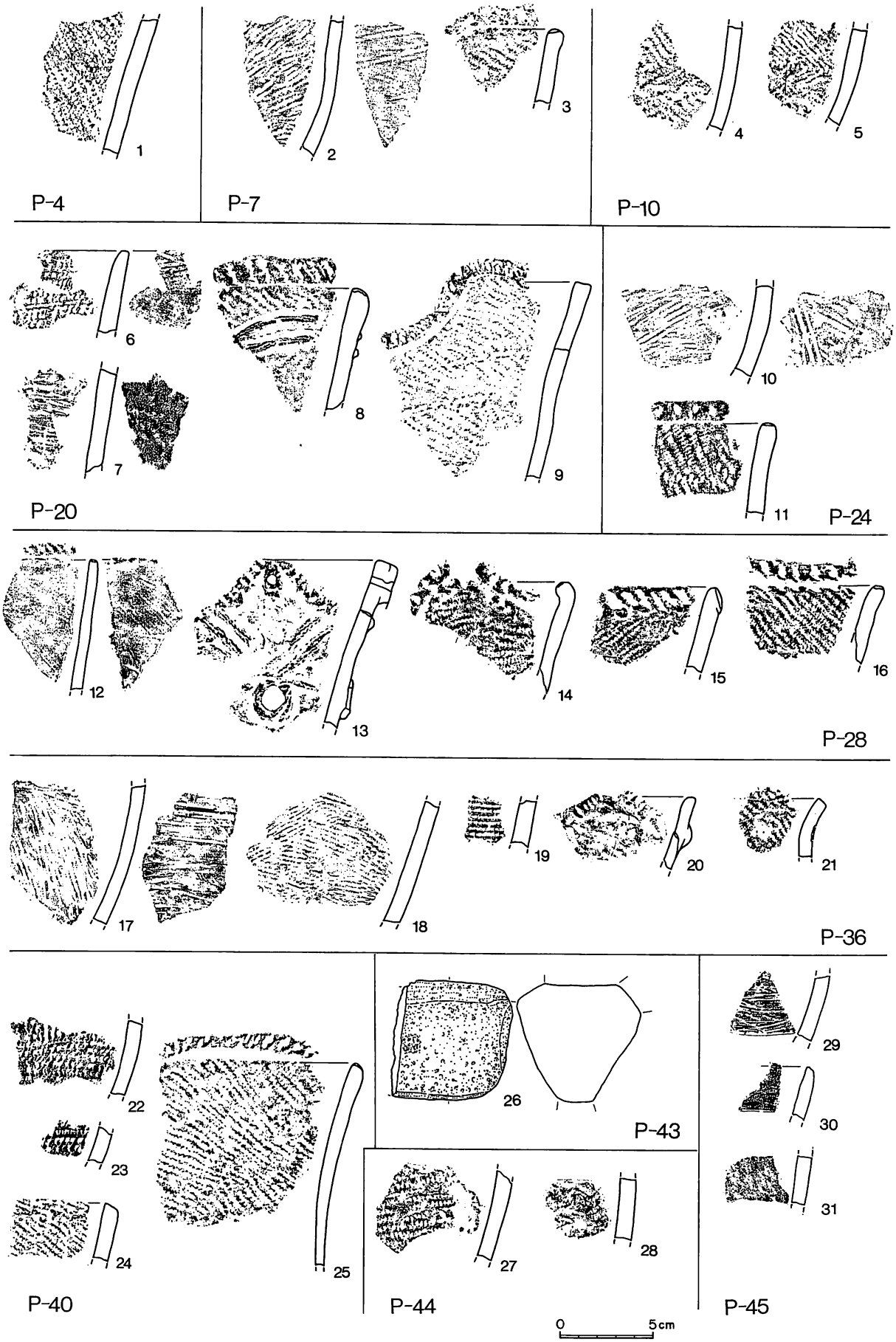
構造はすべて単純な溝状で，底面などにピットはみられない。横断面の形状はY字形をしているものが多く，上部の壁面が崩落したものと思われる。縦断面の形状は，底部が袋状にやや広がるものや弧線をなしているものが多いが，直線的なものもある。　**溝　状**

覆土は，崩落土，掘り上げ土，黒色土が堆積し，全体にしまりがない。また，最下層には黒色土の薄層が堆積していることが多く，水気を多く含んでいる。

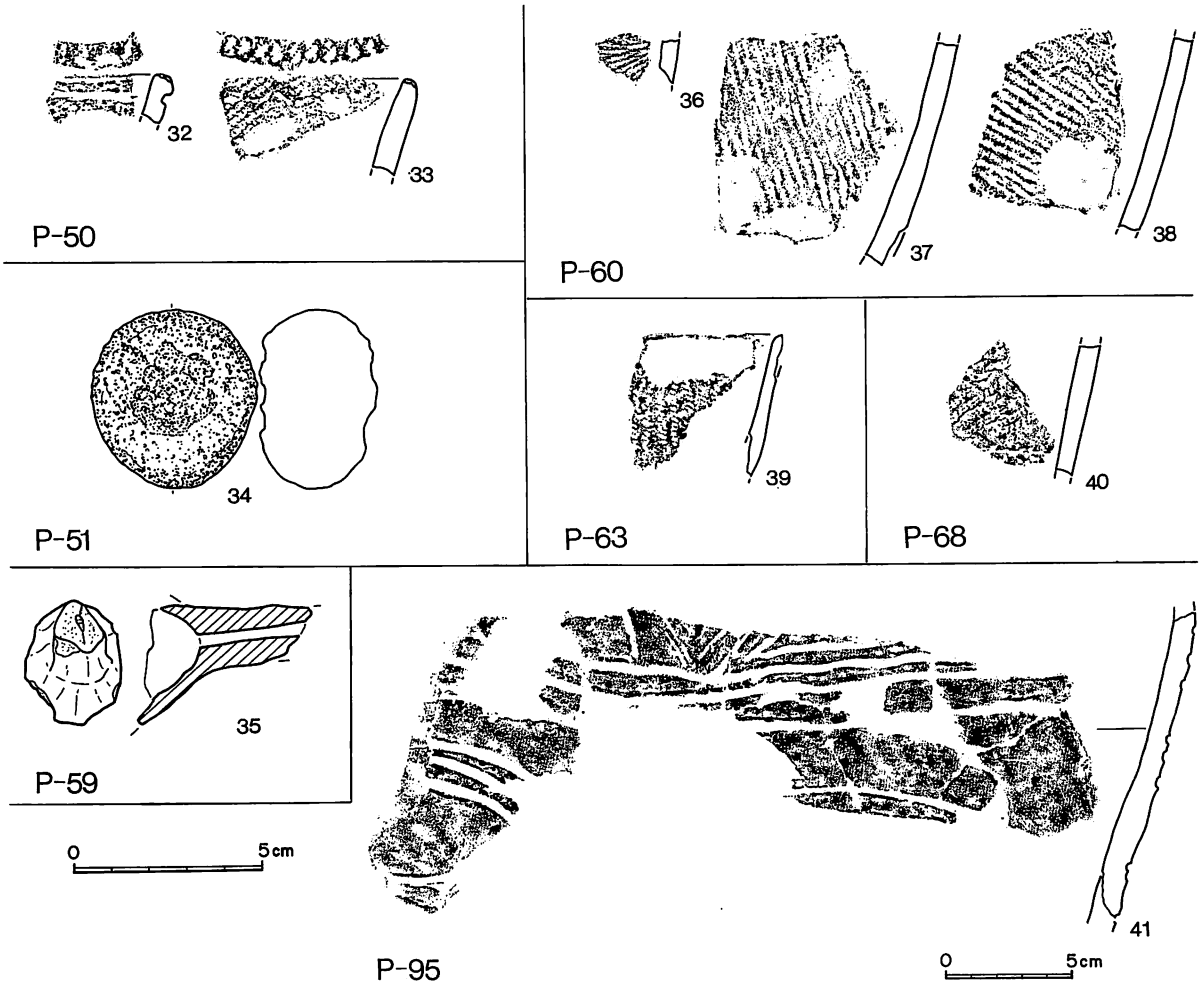
遺物　全体に遺物の出土は少なく，61基の合計で295点である。最も多く出土したのはP－95で，後期のⅣ群A類土器が覆土上位の黒色土からまとまって出土している。したがって，構築時期は後期以前の可能性が強い。　**後期以前**

2，6，7，10，12，17～19，22，23，29～31，36はⅠ群A類の貝殻文土器で，条痕文，連続押引文などがみられる。1，3，4，5，8，9，11，13～16，20，21，24，25，27，28，32，33，37，38，39，40はⅢ群A_3類土器で，8，13には細い撚糸の圧痕のある粘土紐の貼り付けがある。41はⅣ群A類土器で、沈線文がみられる。　**Ⅰ群A類**　**Ⅲ群A_3類**　**Ⅳ群A類**

43は三つの稜にすり面がある断面三角形のすり石，34は両面にくぼみのあるたたき石で，ともに安山岩製である。35は注口の一部と思われる。



図Ⅲ－115　Ｔピット遺物



図Ⅲ－116　Tピット遺物

(5)　焼　土（図Ⅲ－117～119，図版33，45）

H－13，J－20，N－19，21，23・24の各区で5ヵ所確認された。これらのうち，J－20区のF－1はH－3の覆土中に，N－23・24のF－4はH－4の覆土中にあり，住居跡と重複している。

分　布

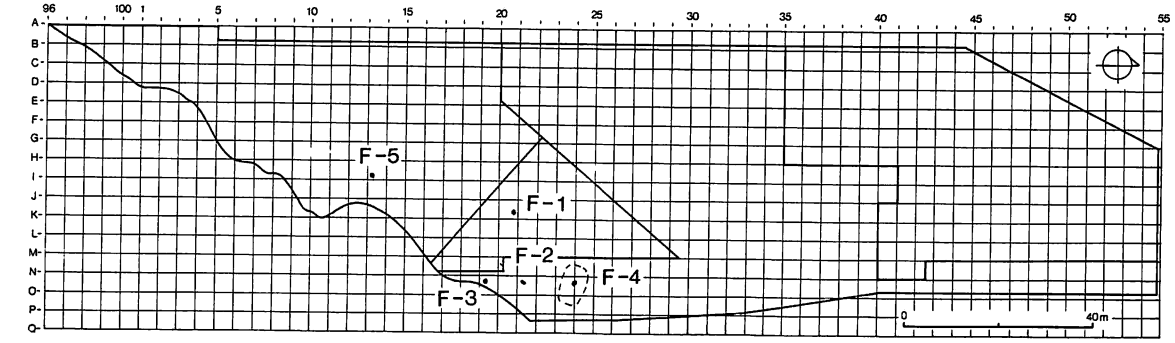
F－1　H－3の覆土中にあり，P－14の南西横にある。大きさは1.16×1.07m，厚さは10cm，土器片109点，フレイク221点が出土した。土器はいずれもⅥ群土器で，所属時期は続縄文時代と考えられる。1～8は甕形土器の口縁部で，1～6には横走沈線がみられる。また，1の口縁部内側には横走沈線，3，4の口唇部には刻み目がみられる。

続縄文

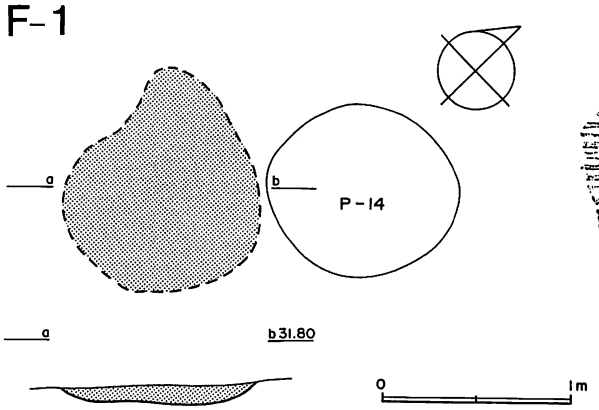
F－2　大きさは0.53×0.30m，厚さは6 cm，遺物などの出土はない。

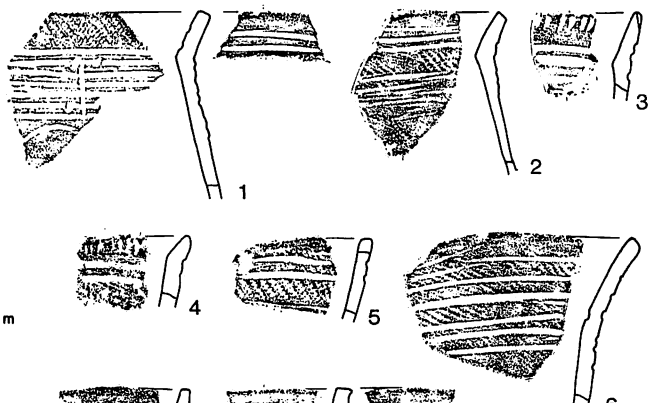
F－3　大きさは0.74×0.57m，厚さは13cm，西側に少し間隔をおいて焼けた大型の礫が3個あり，屋外の石組み炉の可能性がある。また，焼土の上面にⅢ群A_1類土器が1個体潰れたような状態で出土した。所属時期はⅢ群A_1類土器の時期，縄文時代中期前葉と考えられる。9は焼土の上面から出土したⅢ群A_1類土器である。全体に厚手の土器で，胴部上半がくびれ，口縁部には3個1組の突起があり，胴部には結節の斜行縄文，口縁下および突起に絡条体の圧痕文がみられる。

Ⅲ群A_1類

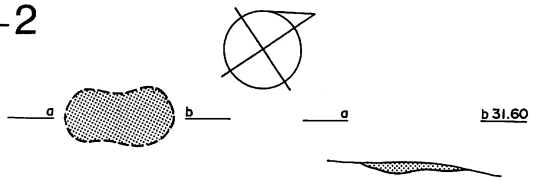


F-1

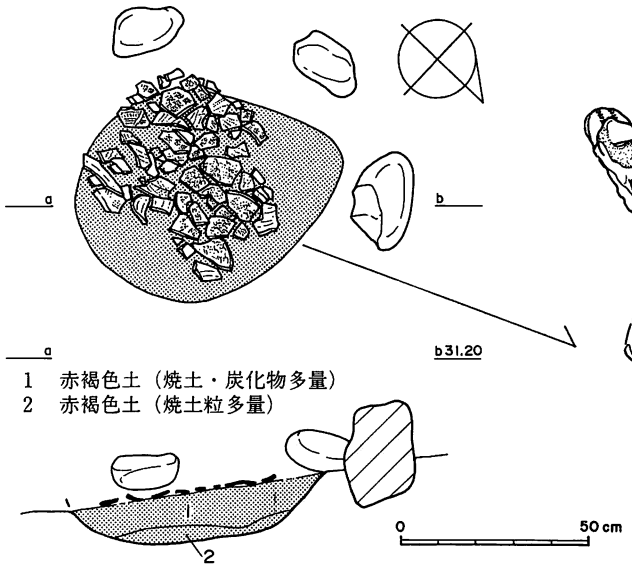




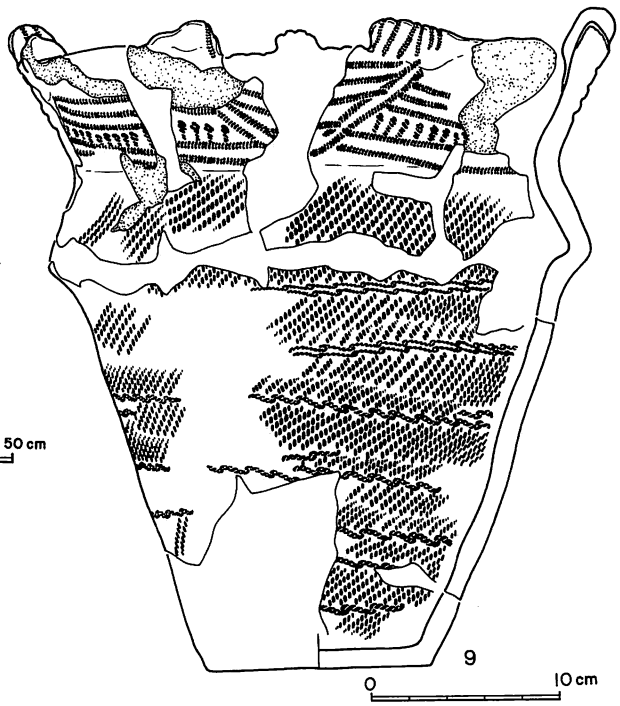
F-2



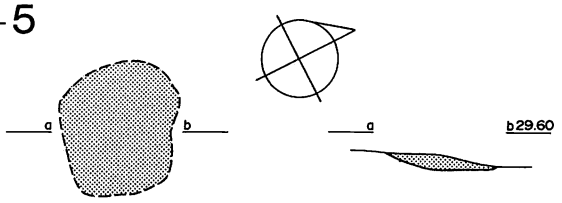
F-3



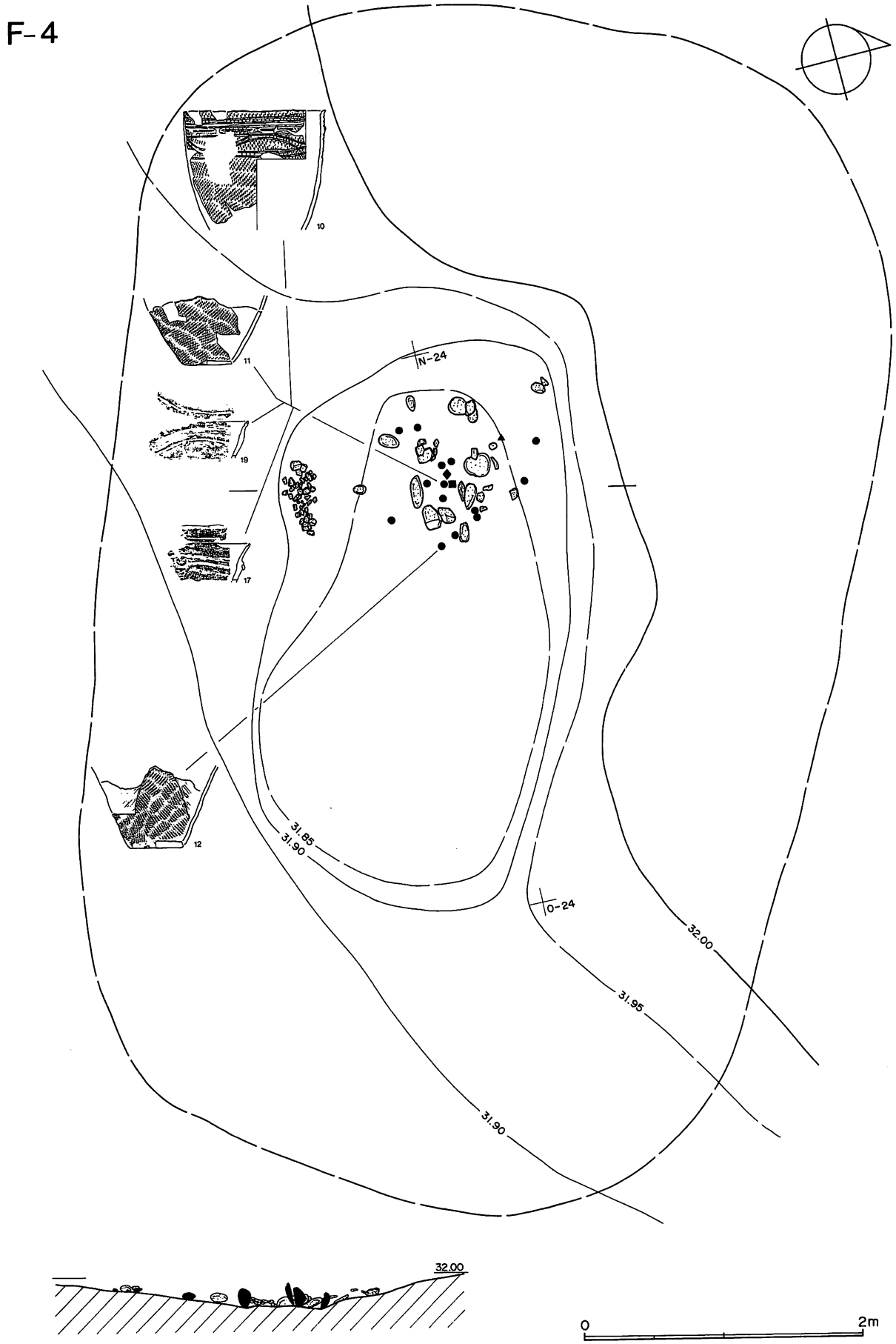
1　赤褐色土（焼土・炭化物多量）
2　赤褐色土（焼土粒多量）



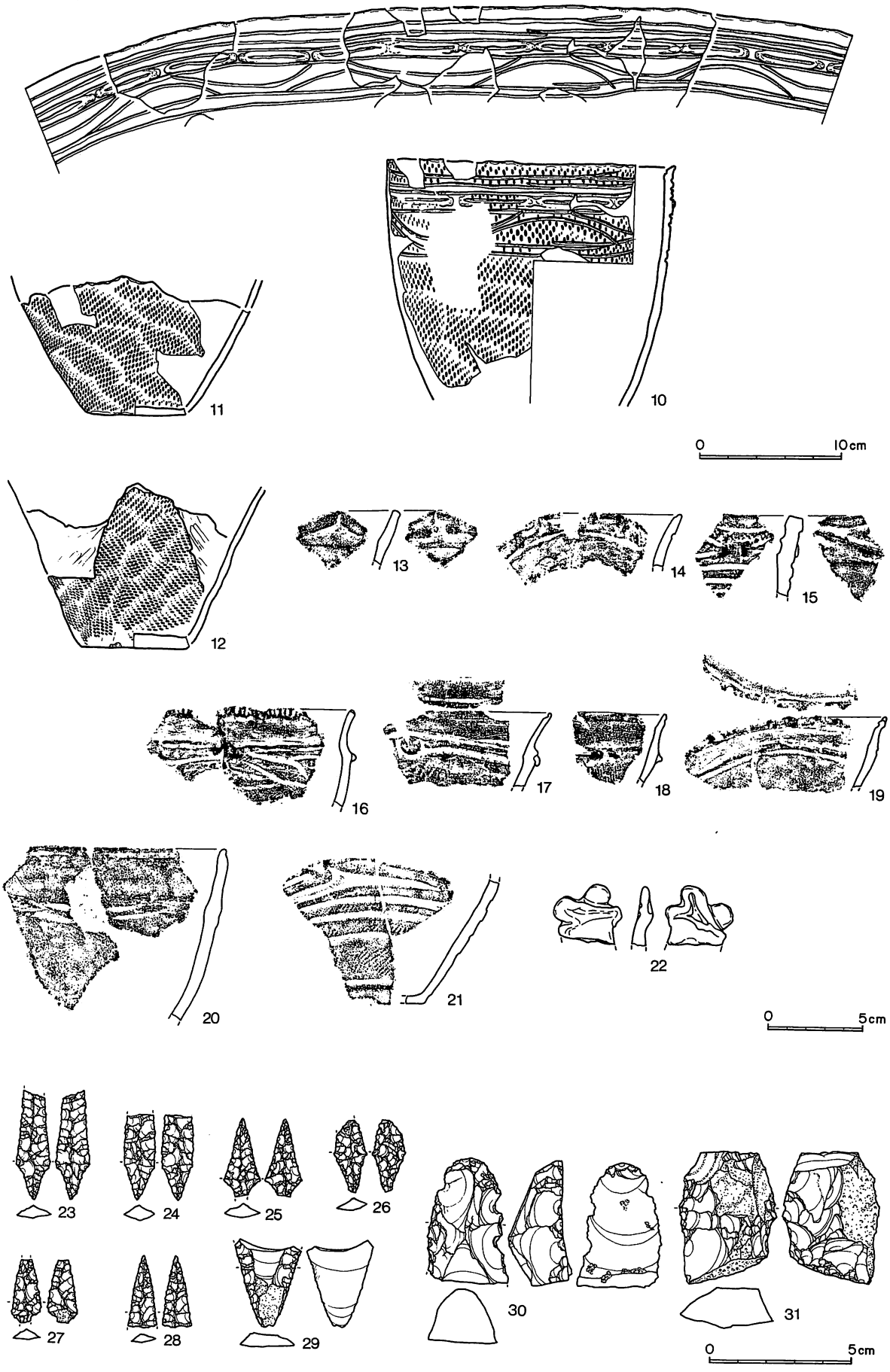
F-5



図Ⅲ－117　焼土(1)Ｆ－１，２，３，５，Ｆ－１，３遺物



図Ⅲ－118　焼土(2)Ｆ－４



図Ⅲ－119　焼土(3)Ｆ－４遺物

F－4　H－4の覆土6層のくぼみを利用した石組み炉とみられる。くぼみの西側寄りに焼けた礫が楕円状にあり，その周囲に焼土がわずかにみられ，土器，礫片，石器などが集中している。くぼみを利用した平地住居の可能性も考えられるが，柱穴などは確認できなかった。所属時期は縄文時代晩期後葉，Ⅴ群C類土器の時期と考えられる。　Ⅴ群C類

11～22はF－4の周囲から出土したⅤ群C類土器であるが，大洞A′式に相当する新しいグループ（10，11，13～15）と大洞C_2～A式に相当する古いグループ（12，16～22）の二つの段階に分けられる。13，14は壺の口縁部，22は把手部分である。

23～28は細身の有茎石鏃，29～31は側縁に加工のみられるスクレイパーで，23，24，26～29は頁岩，25，30，31はめのう質岩製である。

F－5　大きさは0.7×0.65m，厚さは8 cm，遺物の出土はない。

(6)　包含層出土の土器（図Ⅲ－120～128，図版46，52～55）

1，2はⅠ群A類の貝殻文土器である。1は口縁部と底部の破片から復元実測したもので，内外面とも横の条痕文がみられる尖底土器である。胎土は砂粒を多く含むが，焼成は良好である。2は尖底部で，連続押引文がみられるが，外面は全体に磨耗している。　Ⅰ群A類

3～5は結束第2種の原体による斜行または羽状縄文，6は結節の斜行縄文，7は複節の斜行縄文，8は斜行縄文がみられるⅢ群A_3類土器である。3は幅に比べ高さが低い土器で，幅広の弁状突起が4個，底部には蓆目の圧痕がみられる。　Ⅲ群A_3類　蓆目

8は3本の足に環状の台がみられるもので，三足台付土器とでも呼べるものである。足および台の部分は丁寧に研磨されている。上部の状況はわからないが，おそらく浅鉢状と思われる。　三足台付

10～105はⅠ群A類の貝殻文土器の破片である。

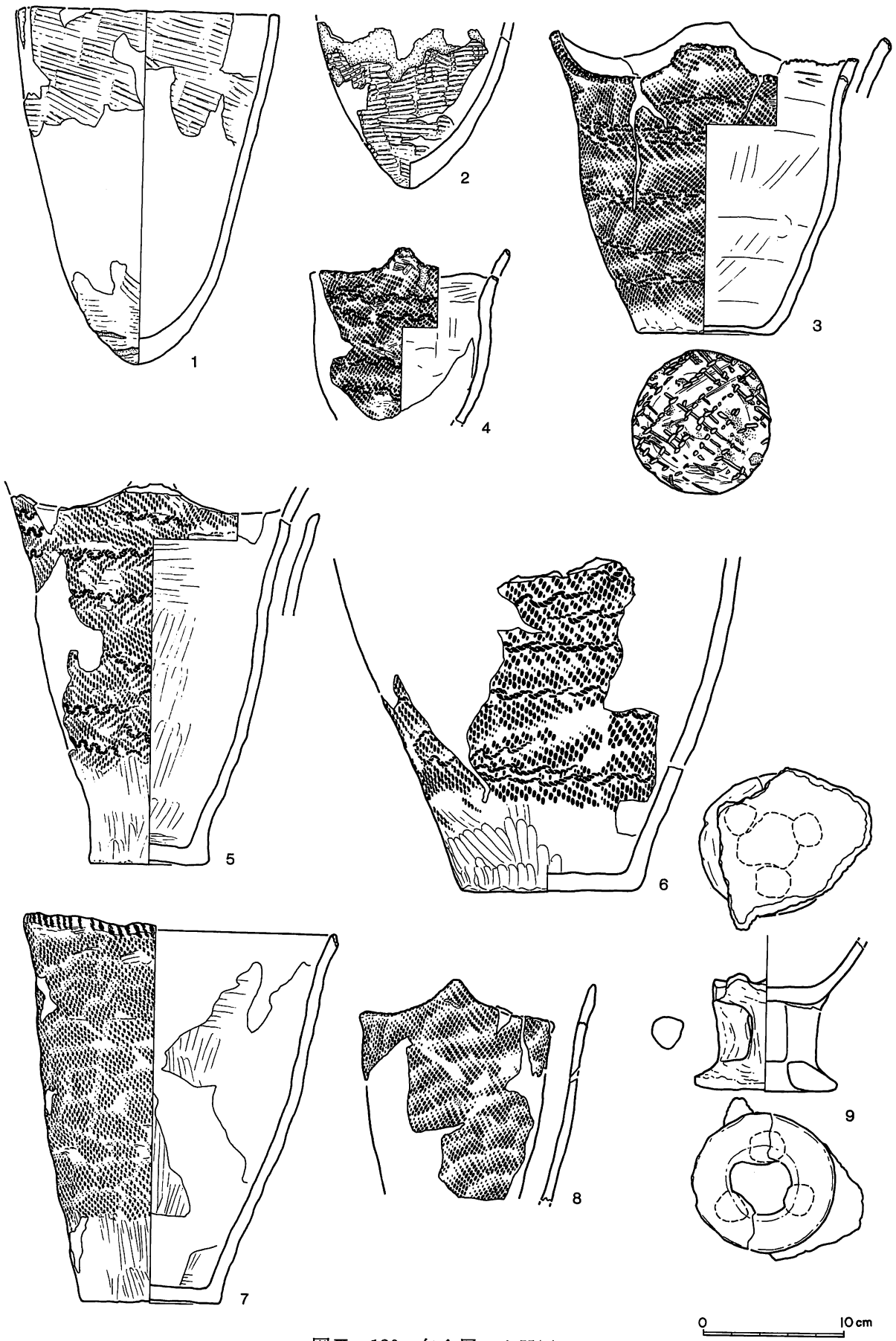
特徴的な文様はみられないが，地文の状況から，条痕文，連続押引文，腹縁文，2種類の文様が複合したもの，無文の5種類に分けることができる。いずれも尖底土器とみられる。

1～55は条痕文のみられるもので，1～34は口縁部，35～53は胴部，54，55は底部の破片である。条痕文は横方向のものが多く，縦方向のものは24，25，33，45～47，51，54などで少ない。また，20，35，48など異なる方向を組み合せているものもある。また，内面，口唇部にも条痕文のみられるものがある。口縁は平らなものと波状のものがあり，形態は20，21の外反するものを除き直線的である。また，断面は切出状に角張るものと丸味をもつもの，肥厚するものなどがみられる。　条痕文

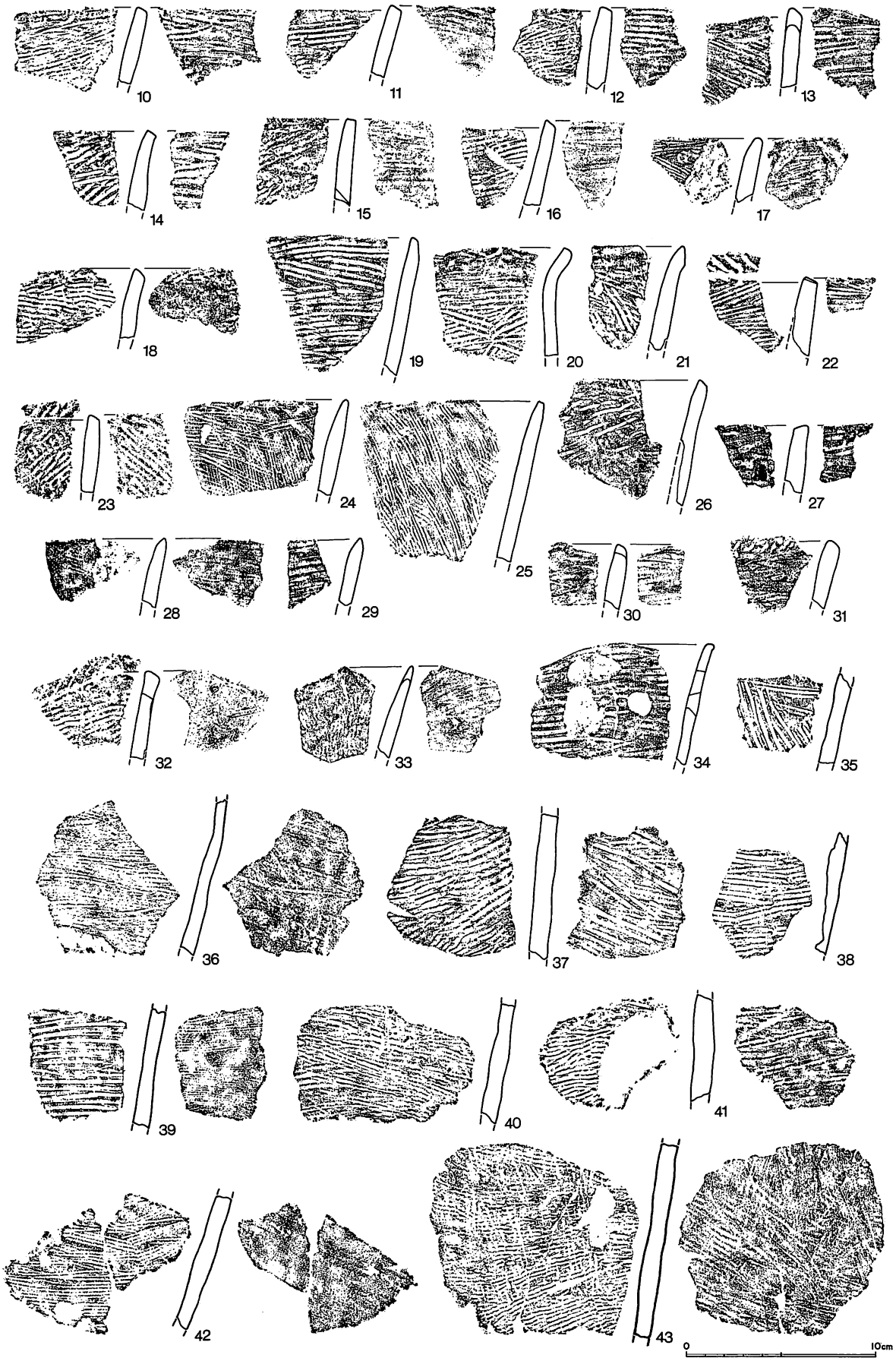
56～84は連続押引文のみられるもので，56～69は口縁部，70～84は胴部の破片である。口縁部は直線的で，わずかに外反する傾向があり，断面は切出状に角張るものが多い。文様は，原体を移動しながら縦，横，斜めと方向を変えるものが多く，61，64，69，77など波状に施文されている。　連続押引文

85～89は腹縁文のみられるもので，85は口縁部，86～92は胴部の破片である。85～88は原体の腹縁を連続的に押捺したもの，89～92は原体を器表面から離さず交互に移動させ，鋸歯状に施したものである。　腹縁文

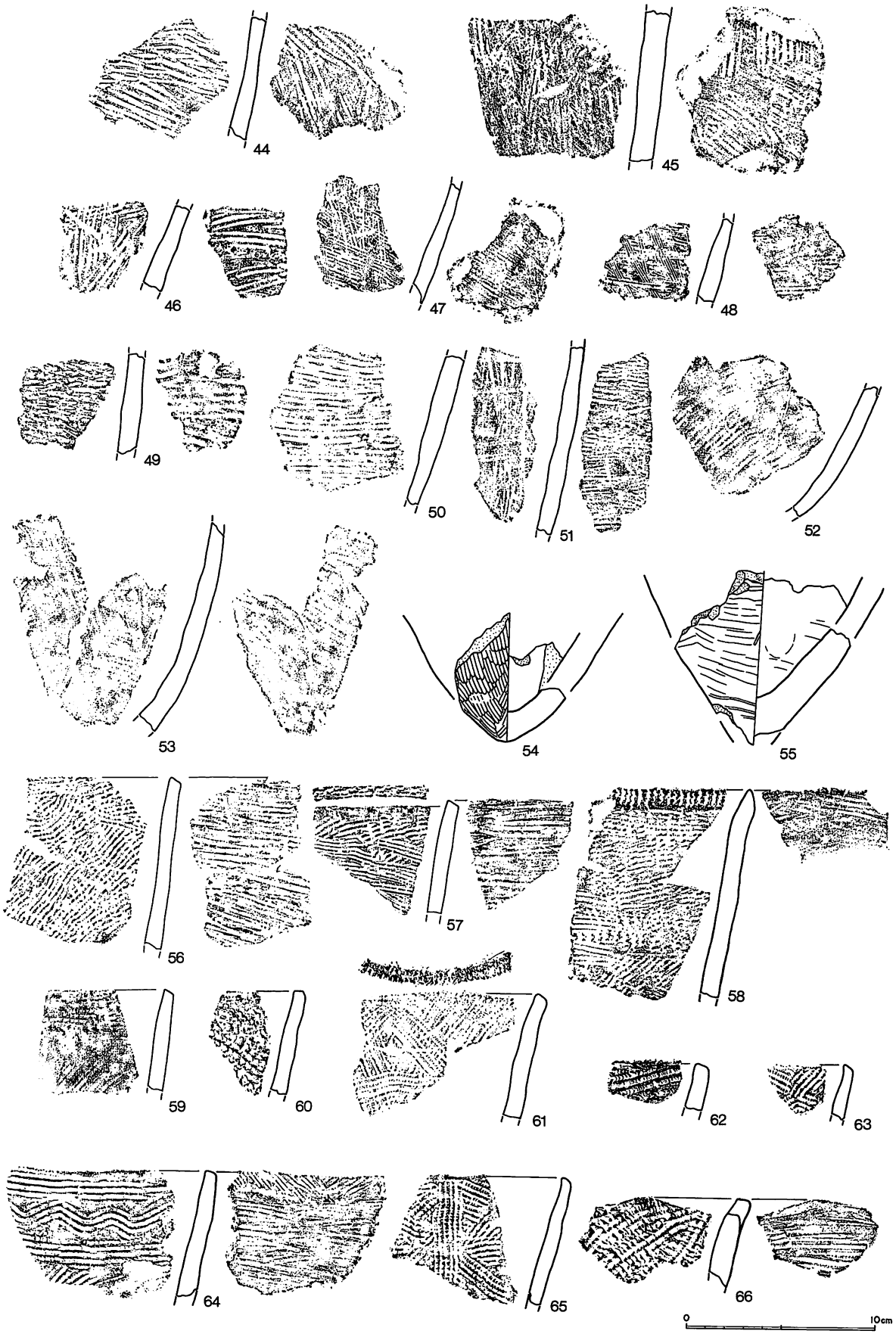
93～100は2種類の文様が組み合わされたもので，93～95は口縁部，96～100は胴部の破片である。93，94は条痕文と沈線や刺突の組み合せで，93の口唇部には刺突，94の口唇部　組み合わせ文様



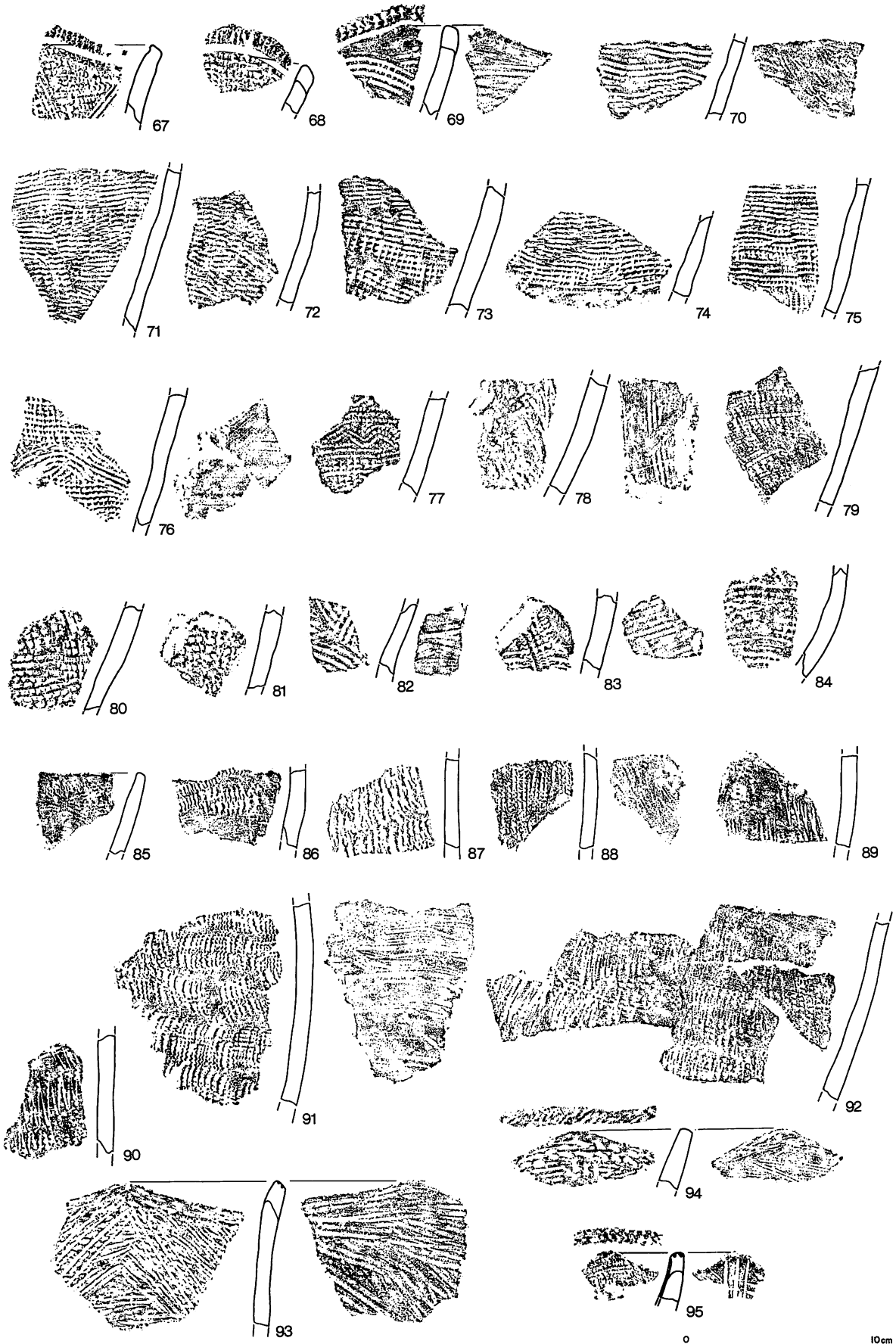
図Ⅲ－120　包含層の土器(1)



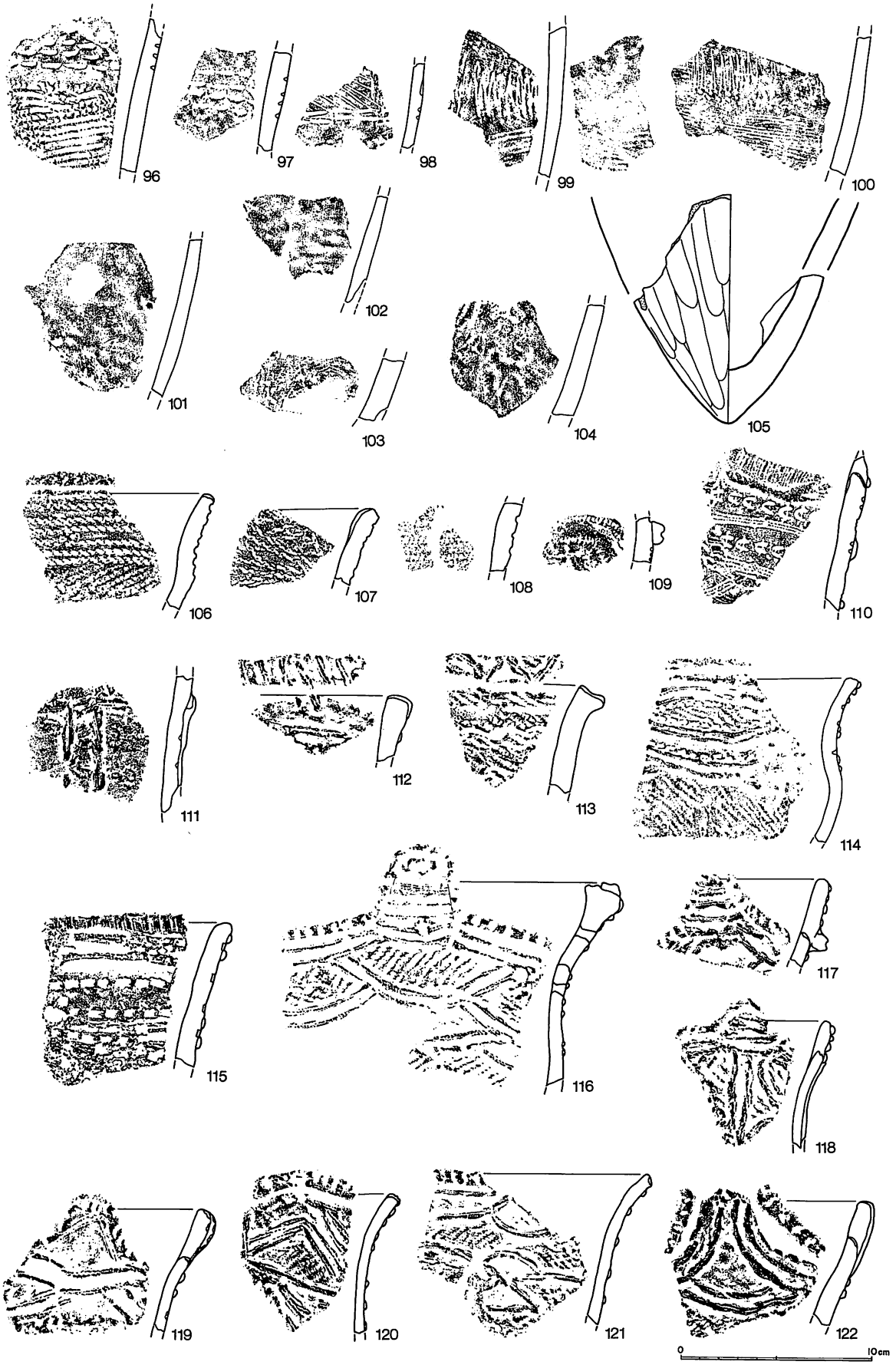
図Ⅲ－121　包含層の土器(2)



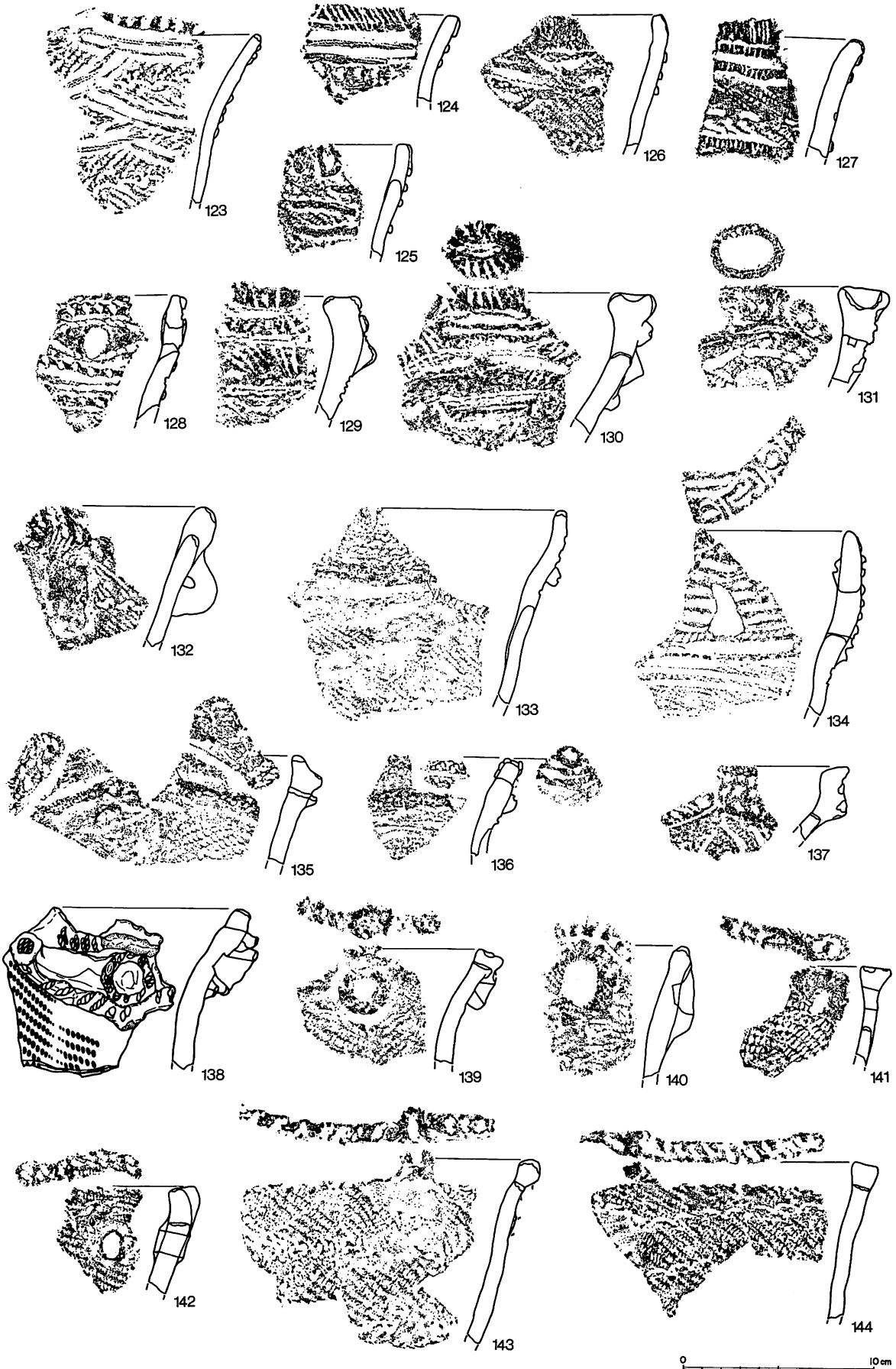
図Ⅲ－122　包含層の土器(3)



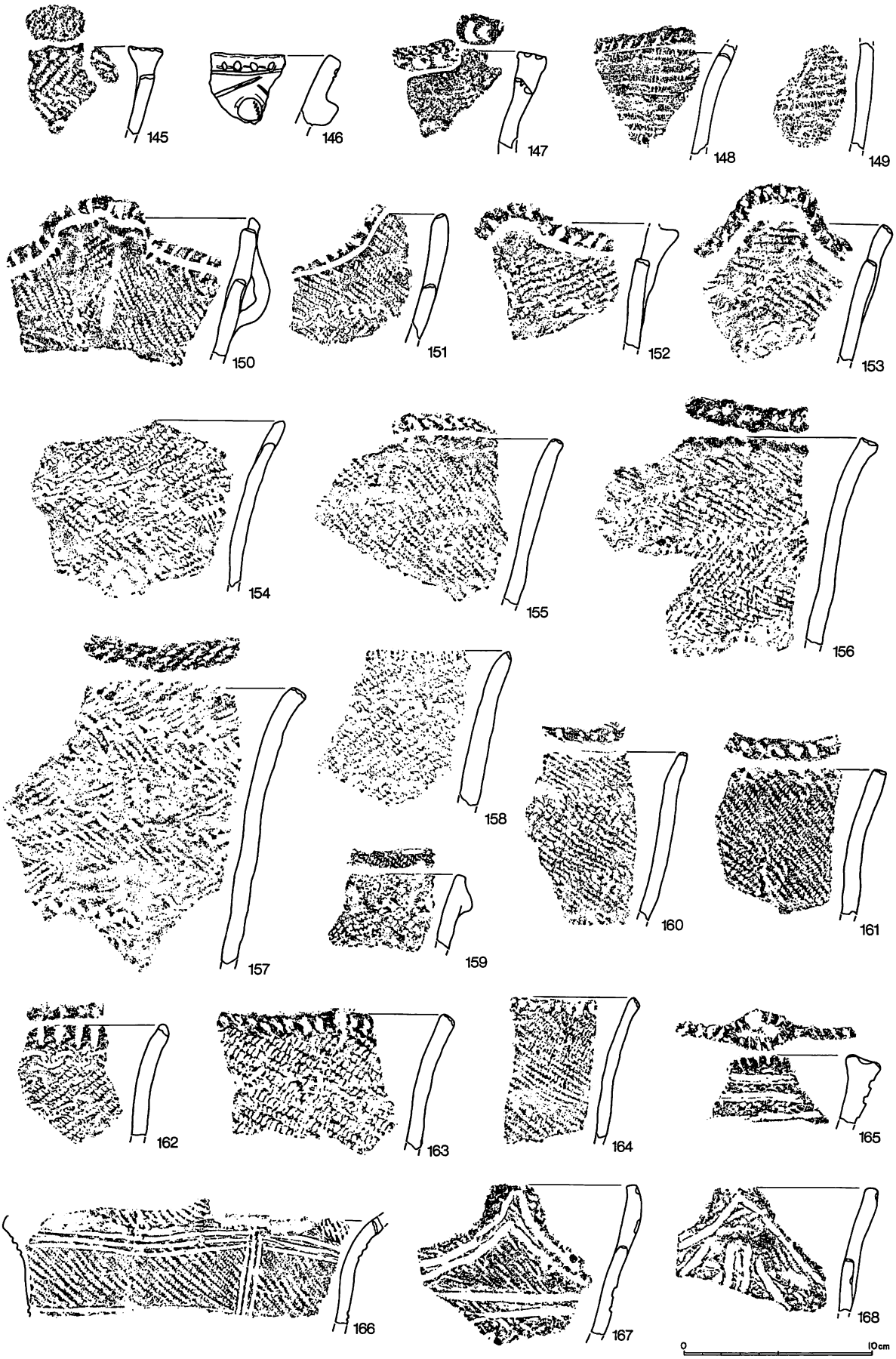
図Ⅲ－123　包含層の土器(4)



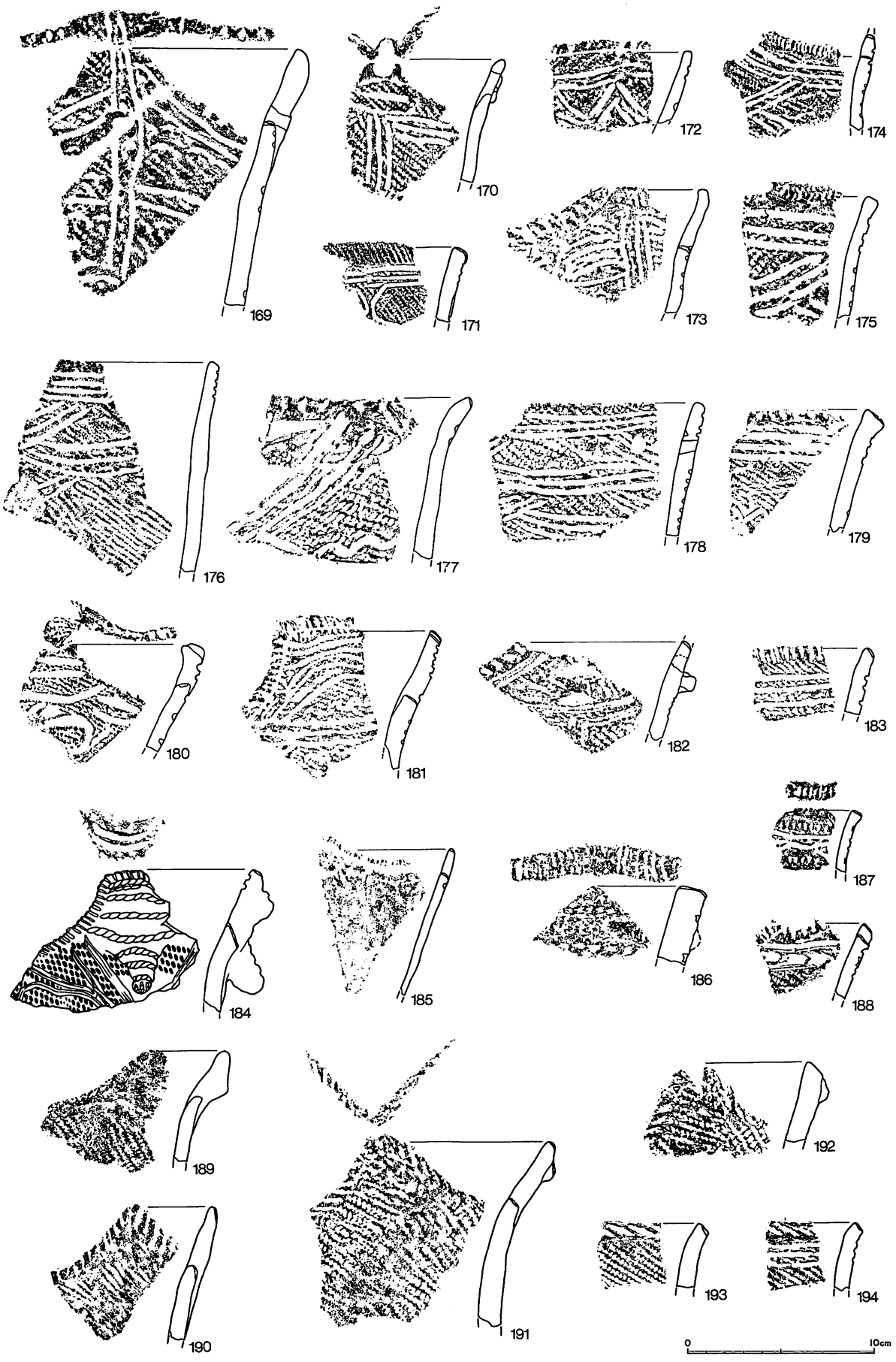
図Ⅲ－124　包含層の土器(5)



図Ⅲ－125　包含層の土器(6)



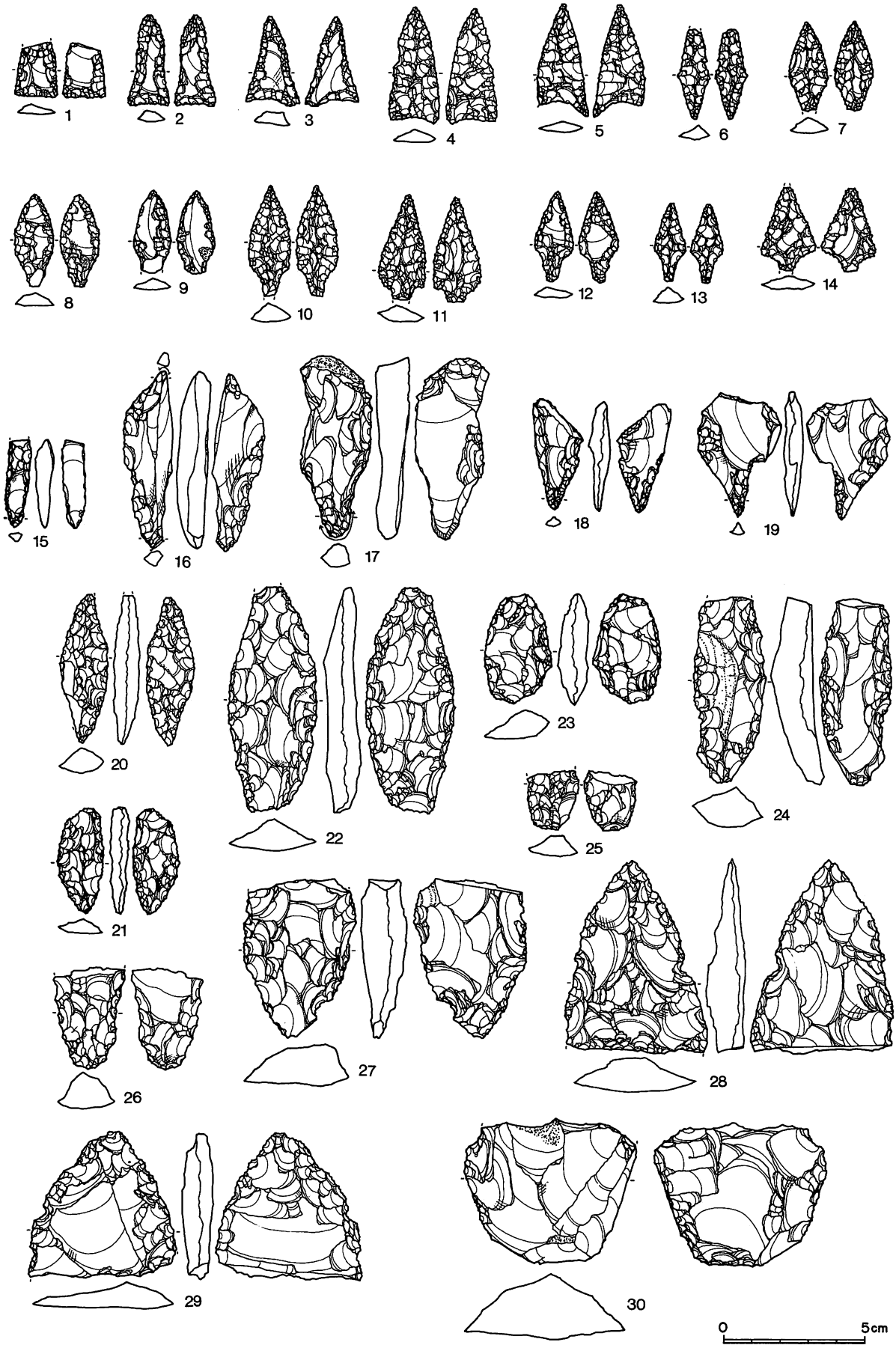
図Ⅲ－126　包含層の土器(7)



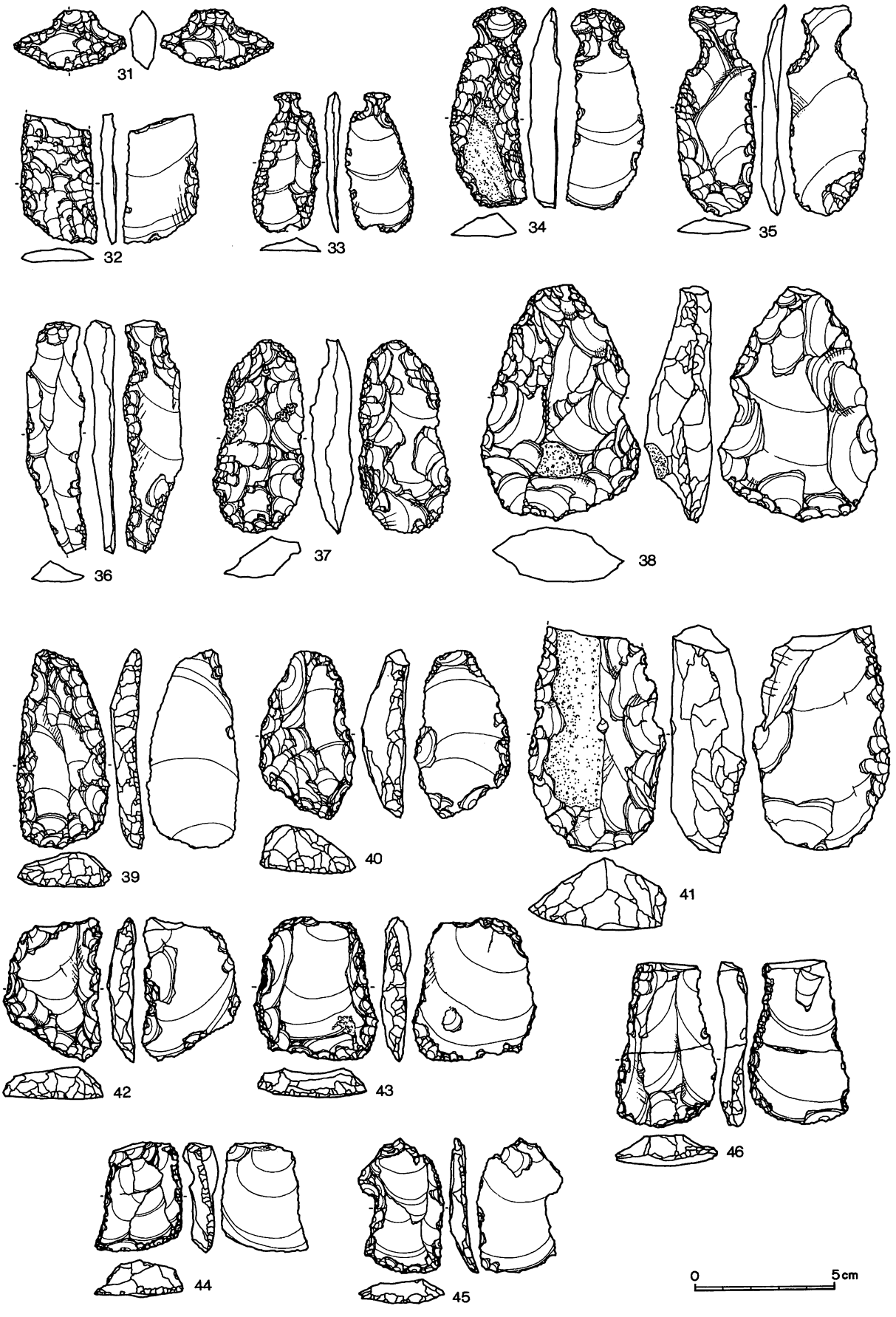
図Ⅲ－127　包含層の土器(8)



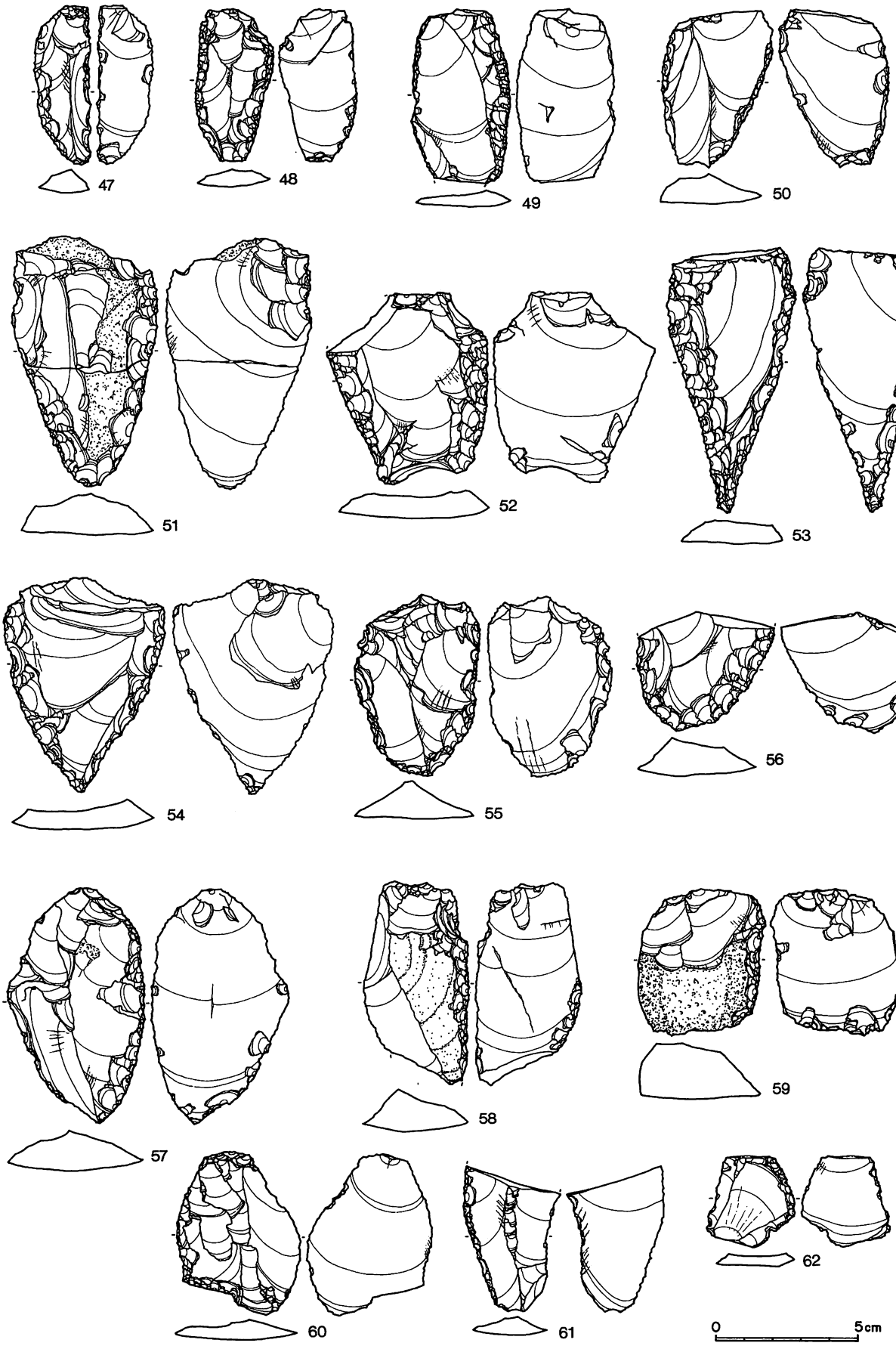
図Ⅲ－128　包含層の土器(9)



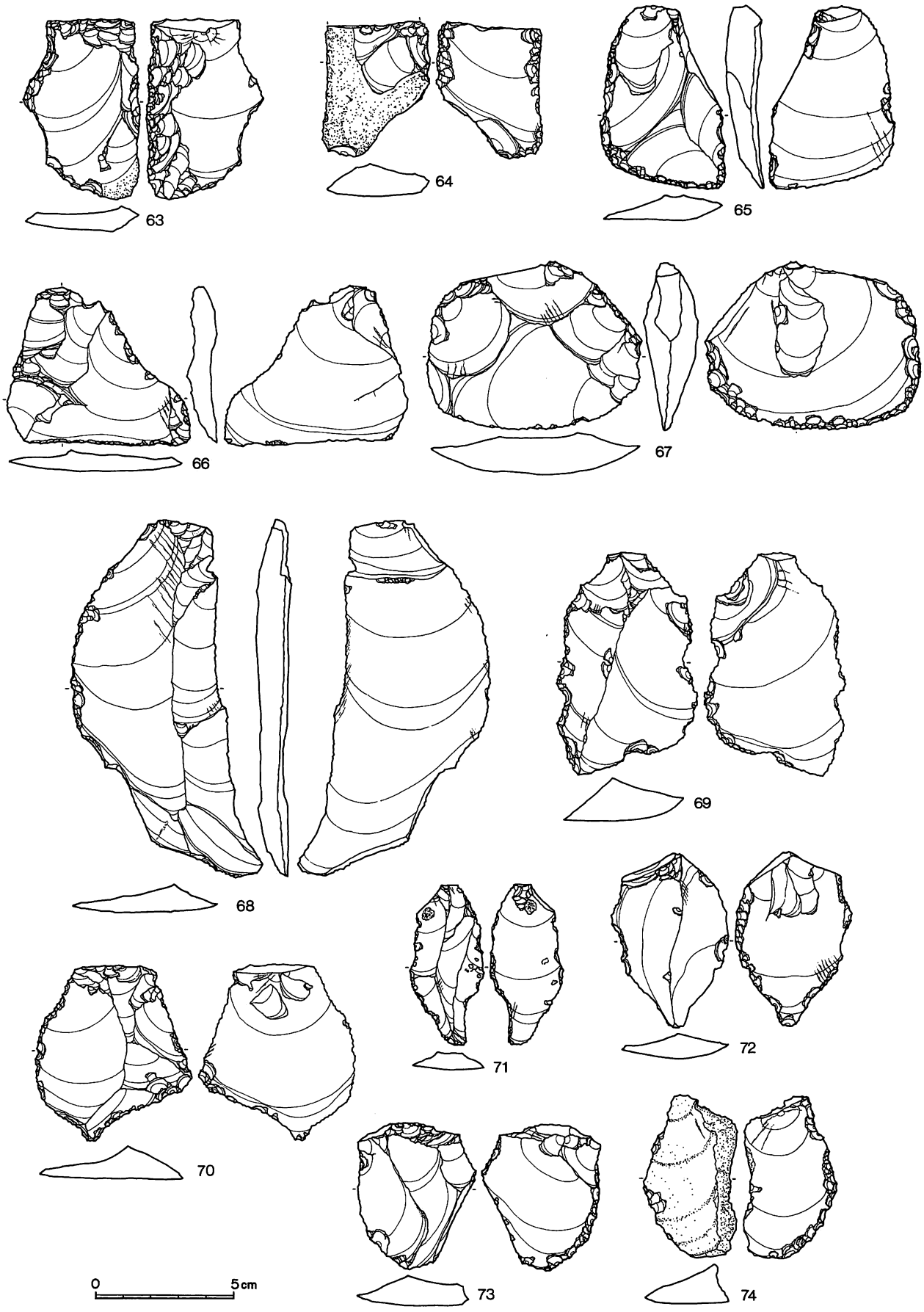
図Ⅲ－129　包含層の石器(1)



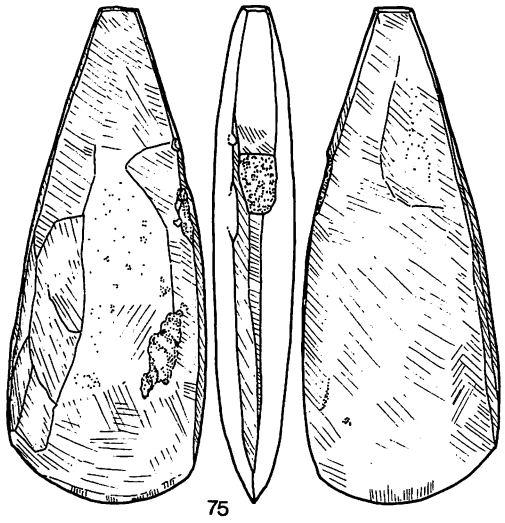
図Ⅲ－130　包含層の石器(2)

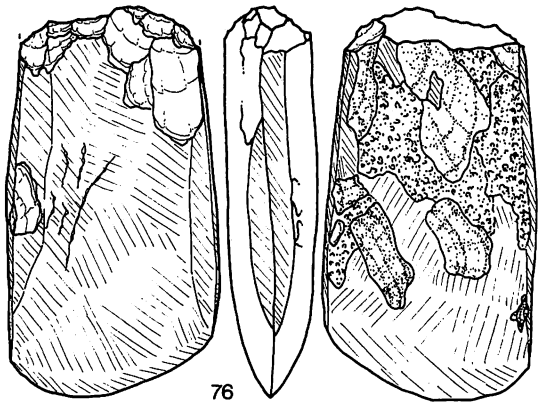


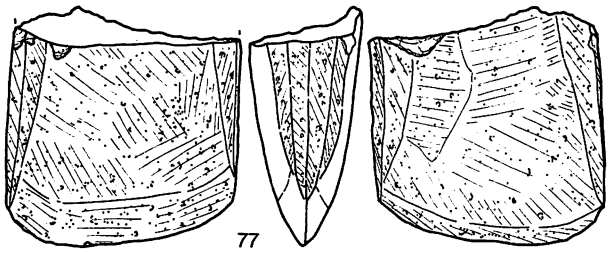
図Ⅲ－131　包含層の石器(3)

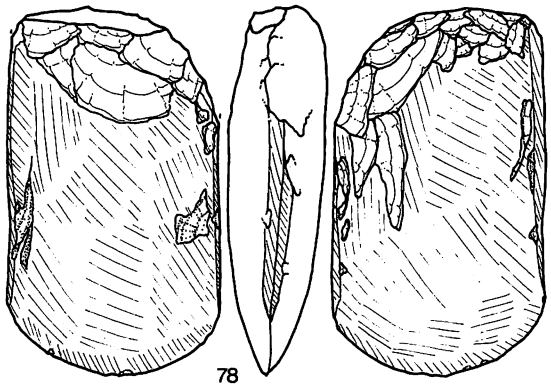


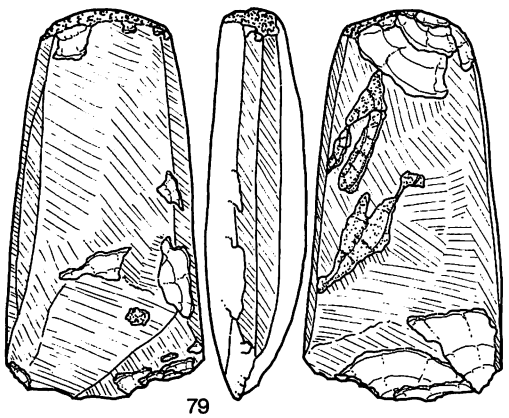
図Ⅲ－132　包含層の石器(4)

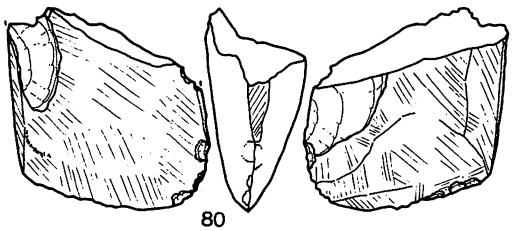


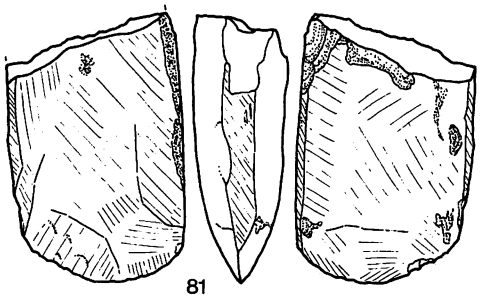


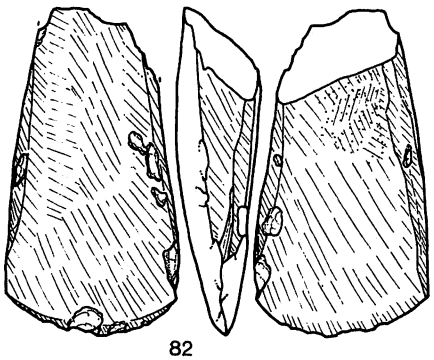


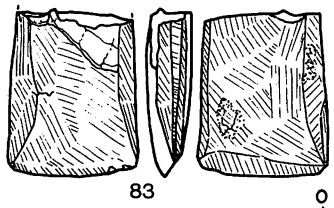






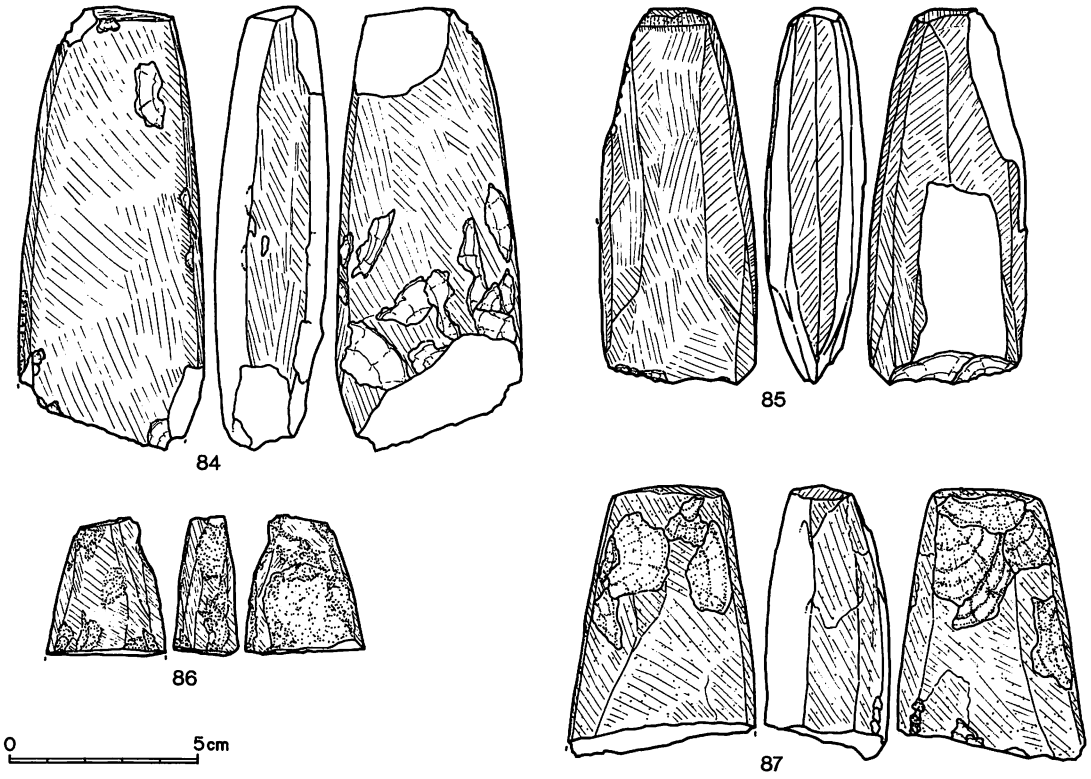






0　5cm

図Ⅲ－133　包含層の石器(5)



図Ⅲ－134　包含層の石器(6)

には条痕文がみられる。96，97は連続押引文と刺突文で同一個体の可能性が強く，98は斜めの沈線と横方向の短刻線が組み合わされている。99，100は鋸歯状の腹縁文と条痕文が施されている。

無　　文　101～105は無文のものであるが，指頭によると思われる調整痕がみられる。

106～109はⅢ群A_1類土器で，106，107には縄線文，108，109はには絡条体の圧痕文がみられる。

Ⅲ群A_3類サイベ沢Ⅵ　110～210はⅢ群A_3類土器の口縁部，胴部，耳状の貼り付け部などである。110～127は撚糸の圧痕のある細い粘土紐の貼付帯があるもので，サイベ沢Ⅵ式といわれている(高橋 1986)ものの一部に相当する。128～148はいろいろな形態の突起部で，耳状，環状，ボタン状など各種の貼り付けがみられる。148，149は同一個体とみられ，サケタイプの魚骨回転文(大沼 1985)がみられる。150～201は地文の縄文のみ，または沈線文がみられるもので，沈線文は弧線文が多い。202～210は耳状の貼り付けで，横，縦，Y字状などがみられる。

魚骨回転文

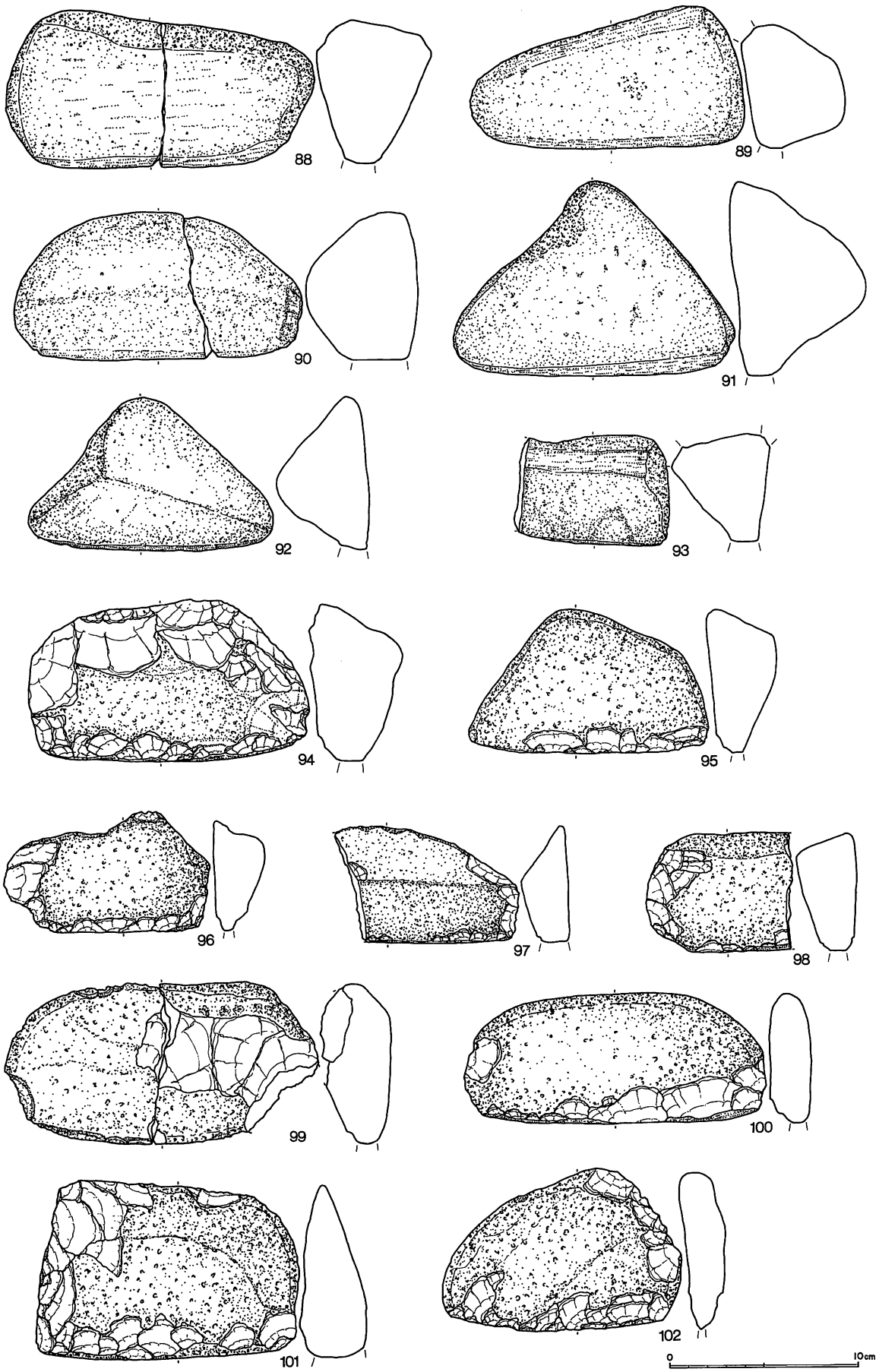
Ⅴ群C類　211～216はⅤ群C類土器で，213は短頸壺の口縁部，他は浅鉢の口縁および胴部である。

Ⅵ　　群　217～224はⅥ群土器で，217，223，224は縄文地に沈線，218～222は沈線のみがみられる。いずれも小破片であるので，全体の器形，文様構成などは不明。

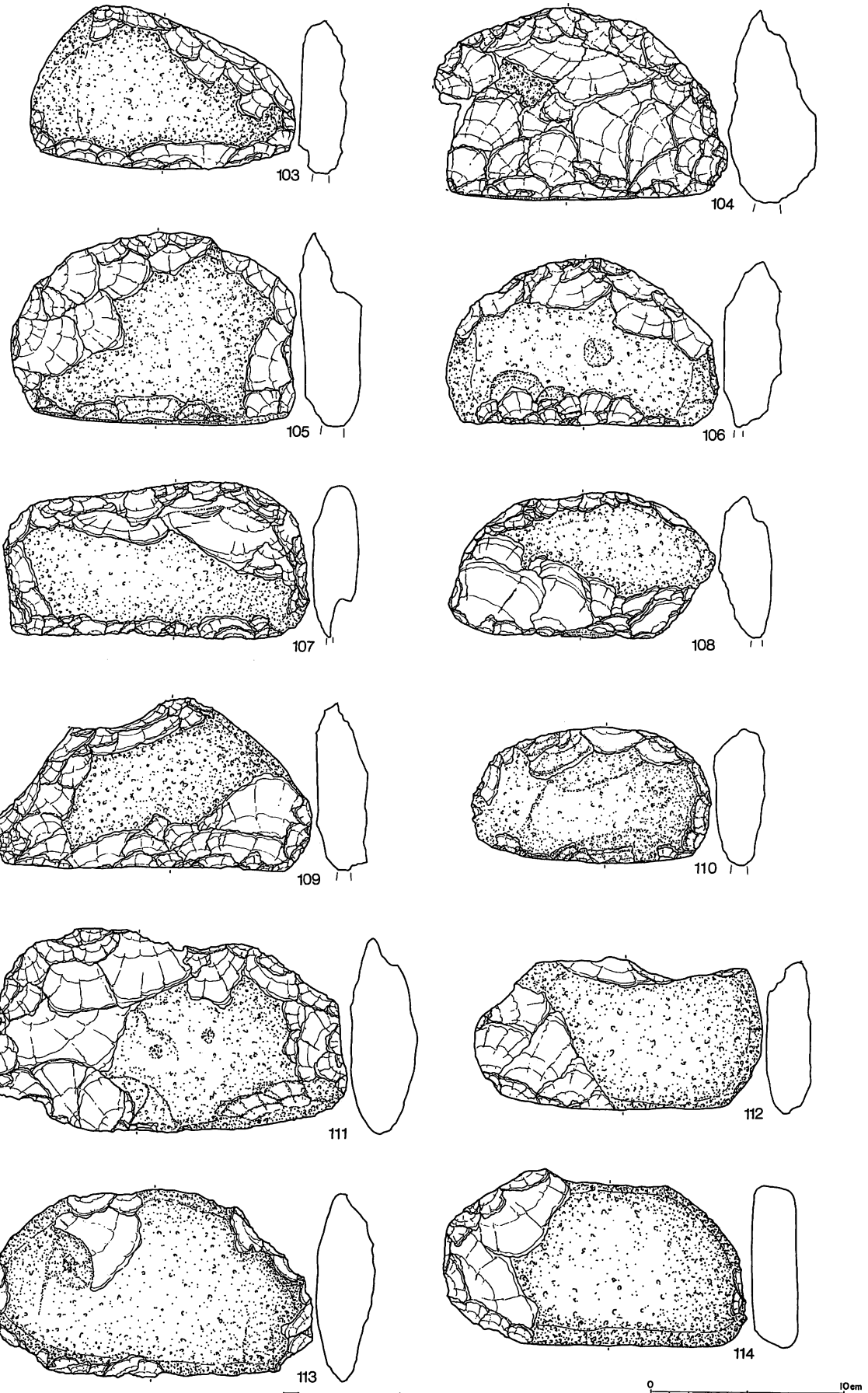
(7)　包含層出土の石器（図Ⅲ－129～140，図版56～61）

石　　鏃　1～14は石鏃で，1～5は無茎の三角形鏃，6～14は有茎鏃である。加工の状況は粗く，1～3，8，9，12，14などには素材の主剝離面が残っている。

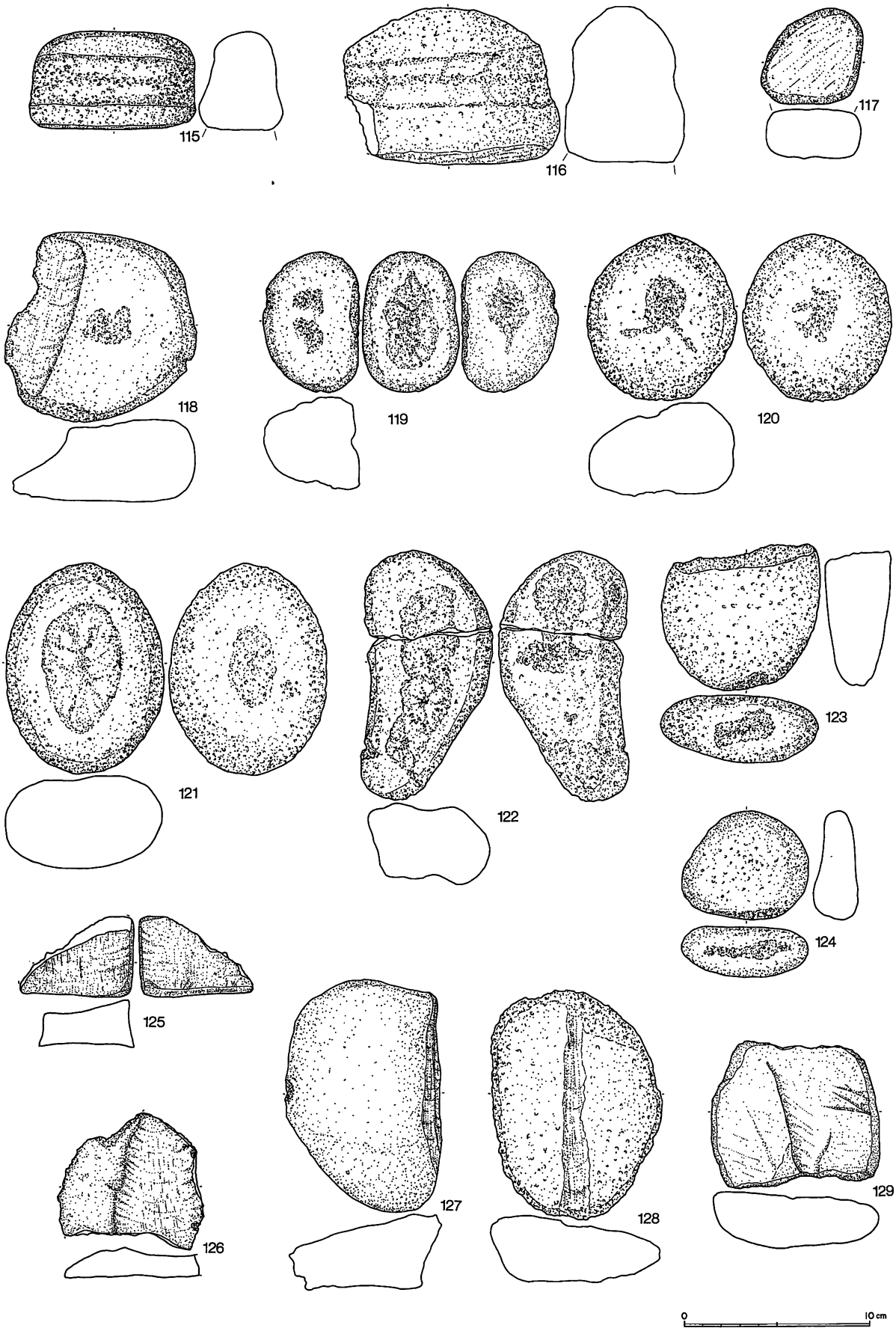
ド リ ル　15～19はドリルで，15～17は厚味ある剝片の両端または一端を加工したもの，18～19は



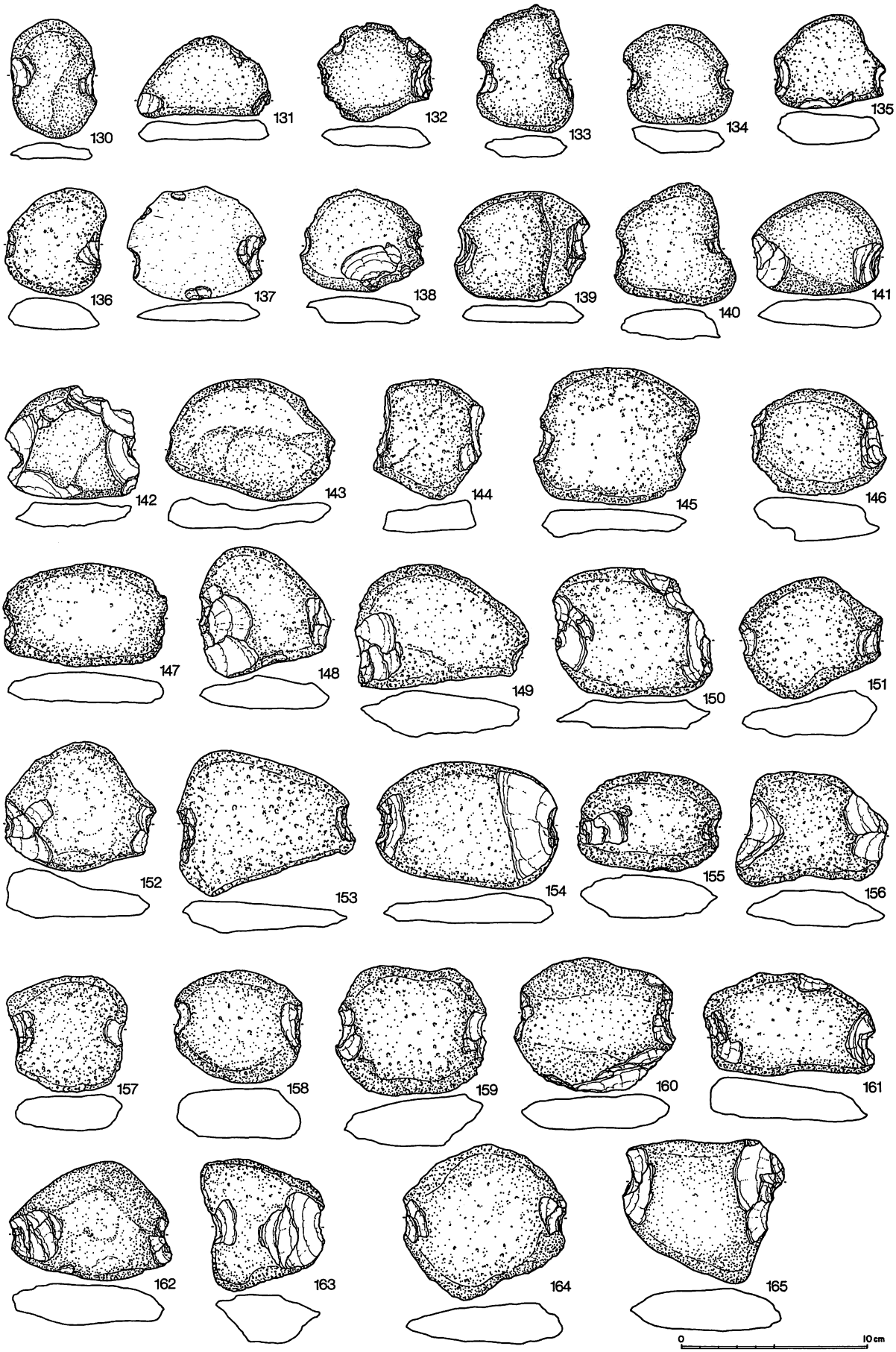
図Ⅲ－135　包含層の石器(7)



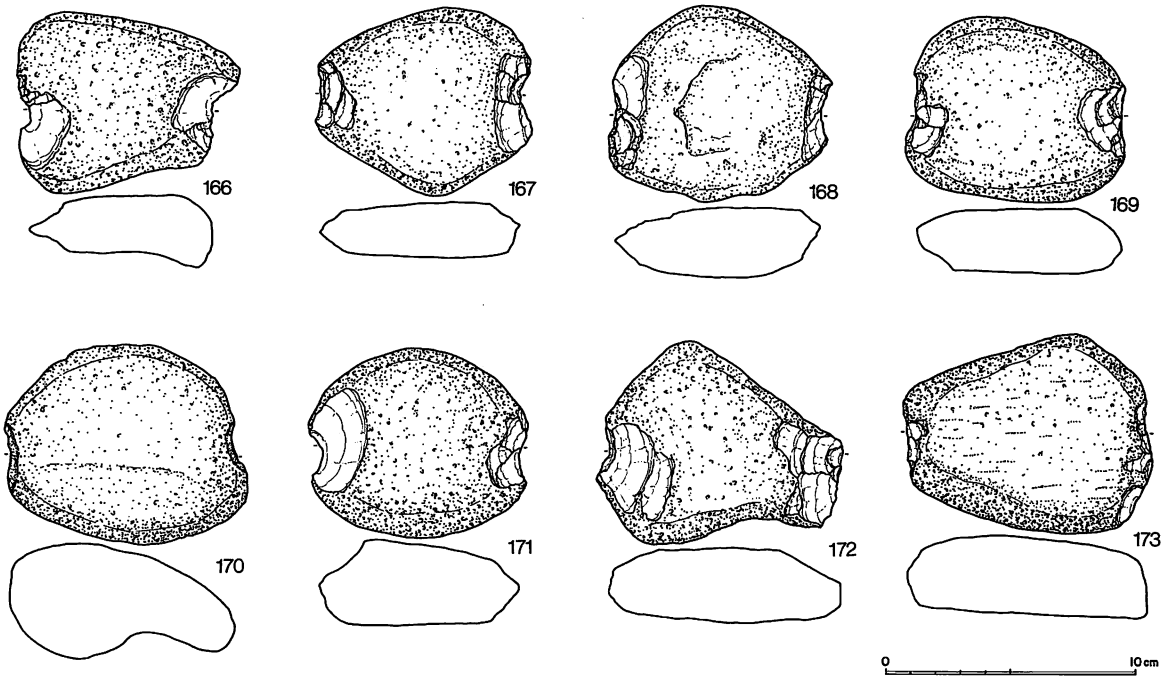
図Ⅲ－136　包含層の石器(8)



図Ⅲ－137　包含層の石器(9)



図Ⅲ－138　包含層の石器(10)



図Ⅲ－139　包含層の石器(11)

剝片の一部に加工を施したものである。

20～30は両面加工のやり先またはナイフ類で，24～30は欠損品である。全体に加工は粗いものが多い。　やり先・ナイフ

31は横形，32～36は縦形のつまみ付ナイフである。32は背面の全面に，33～35は背面の両側縁および主剝離面のつまみ部に，36は主剝離面の側縁に加工がみられる。　つまみ付ナイフ

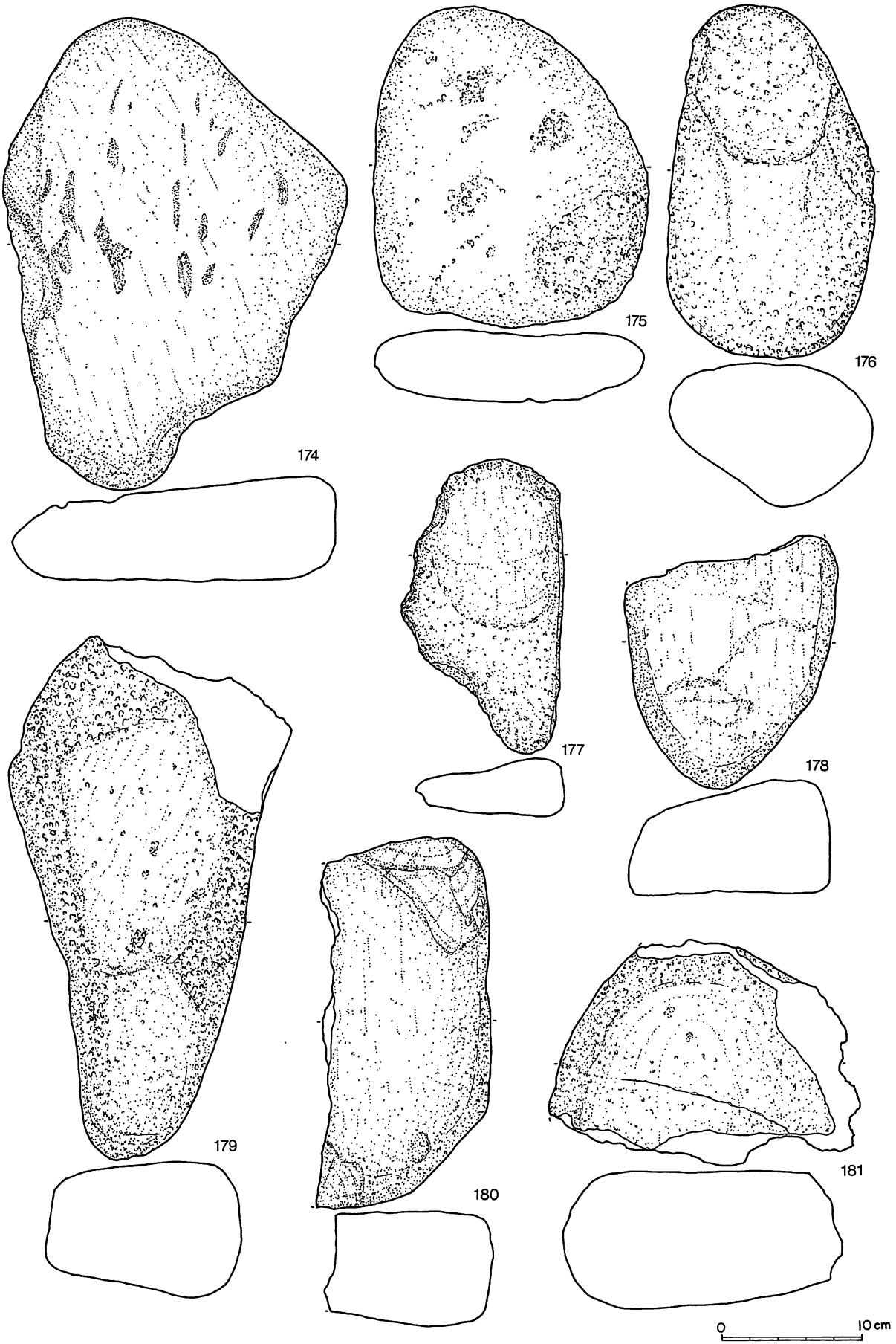
37～67は各種のスクレイパーである。37，38は粗い両面加工，39～46は縦長で比較的厚味のある剝片を素材にして周縁に浅い加工を施したものである。47～56は素材の両側縁に浅い加工がみられるもので，51～54は尖頭状になっている。57～62は素材の一側縁に浅い加工，63は錯行剝離，64は主剝離面に加工がみられる。65～67は幅広の剝片を素材としたもので，周縁に浅い加工がある。　スクレイパー

68～74はＵフレイクで，浅い不連続な剝離がみられる。　Ｕフレイク

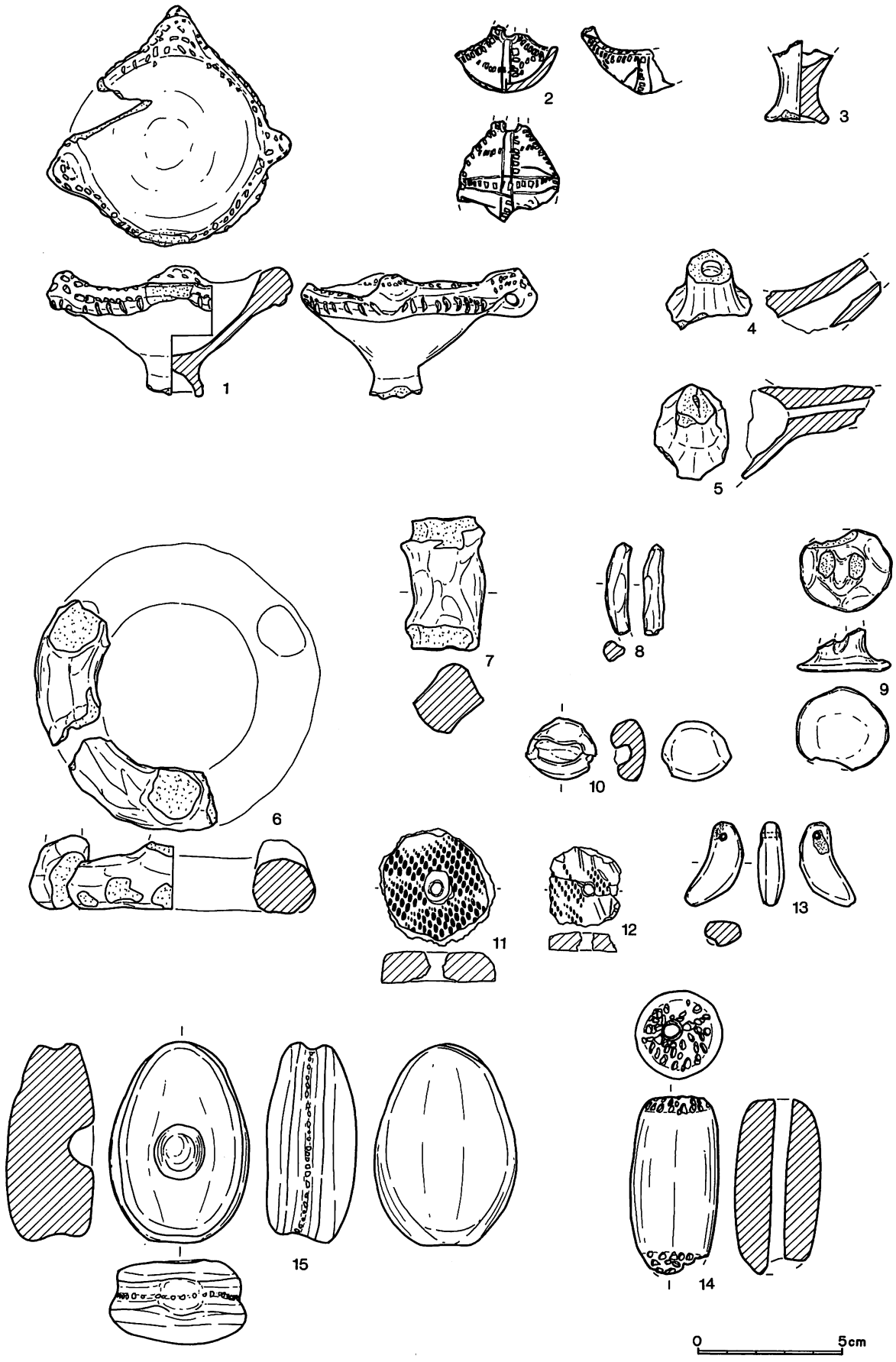
１～６，９～11，13～18，22，24，29，32，34～36，38～42，44～74は頁岩，７，８，19，21，23，26～28，30，31，33，37，43はめのう質頁岩，12，20，25は珪藻岩製である。

75～87は全面磨製の石斧類で，75～83は完形または刃部側の破片，84～87は基部側の破片である。刃の断面は基本的に片刃であるが，75，76などは両刃に近く，平面形は，円刃，偏刃，直刃がある。また，製作は基本的に打裂，敲打，研磨の工程で行われていて，擦切などはみられない。75，80，82，85，86は緑色泥岩，76は片岩，77，87は片麻岩，78，79，81，84は蛇紋岩，83は泥岩製である。　石　斧

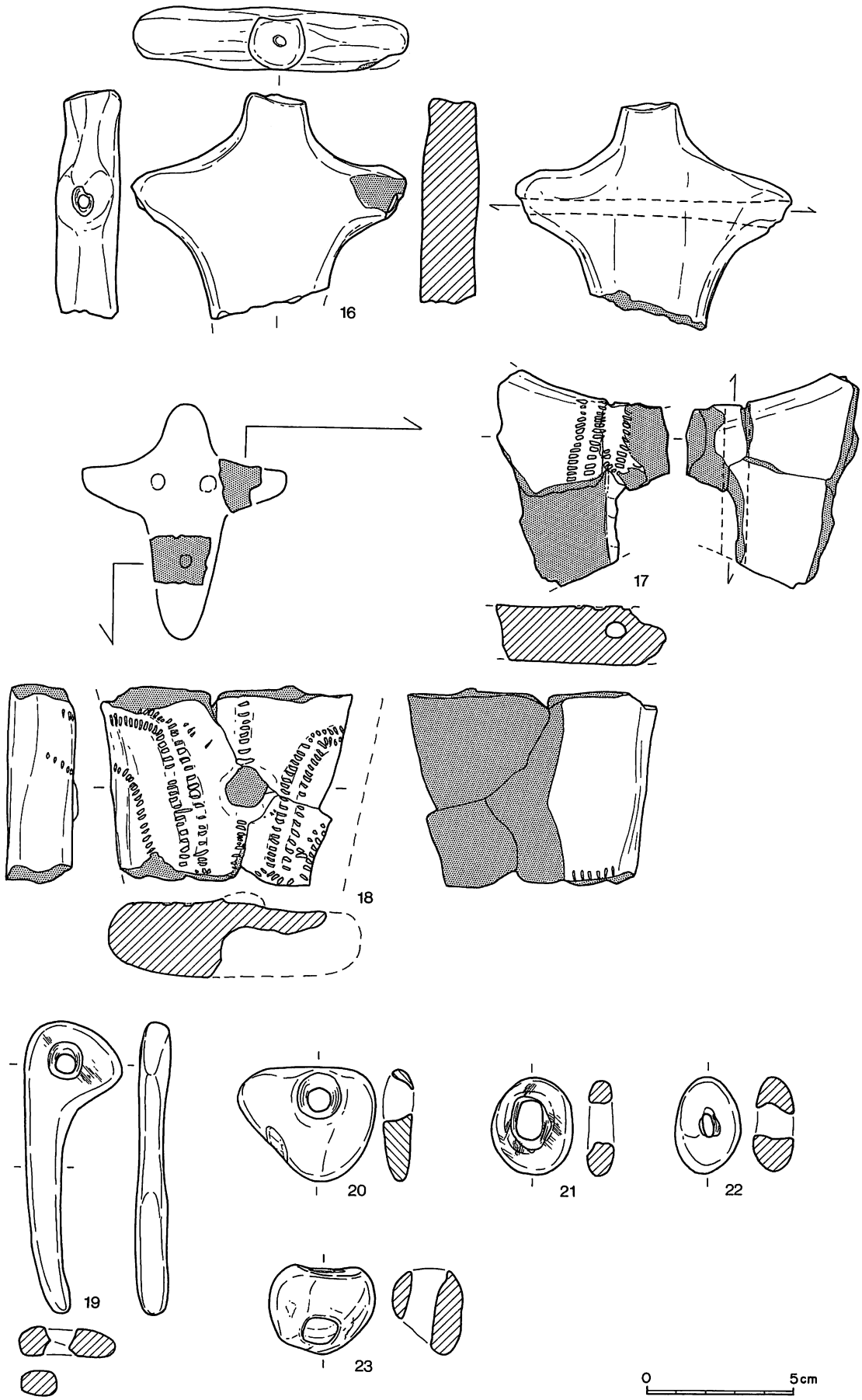
88～117は各種のすり石である。88～93は断面が三角形に近い礫を素材にしたもので，88，90～92は一つの稜に，89は二つの稜に，93は三つの稜にすり面がある。94～110は扁平な礫を素材としたもので，周囲に打ち欠きがみられる。111～114は打ち欠きのみがあり，すり面がないもので，打ち欠き段階で放棄されたものであろうか。117は小型の礫の片面にすり面がみられるものである。88～91，93～99，101，103～117は安山岩，92，102は砂岩，100　すり石



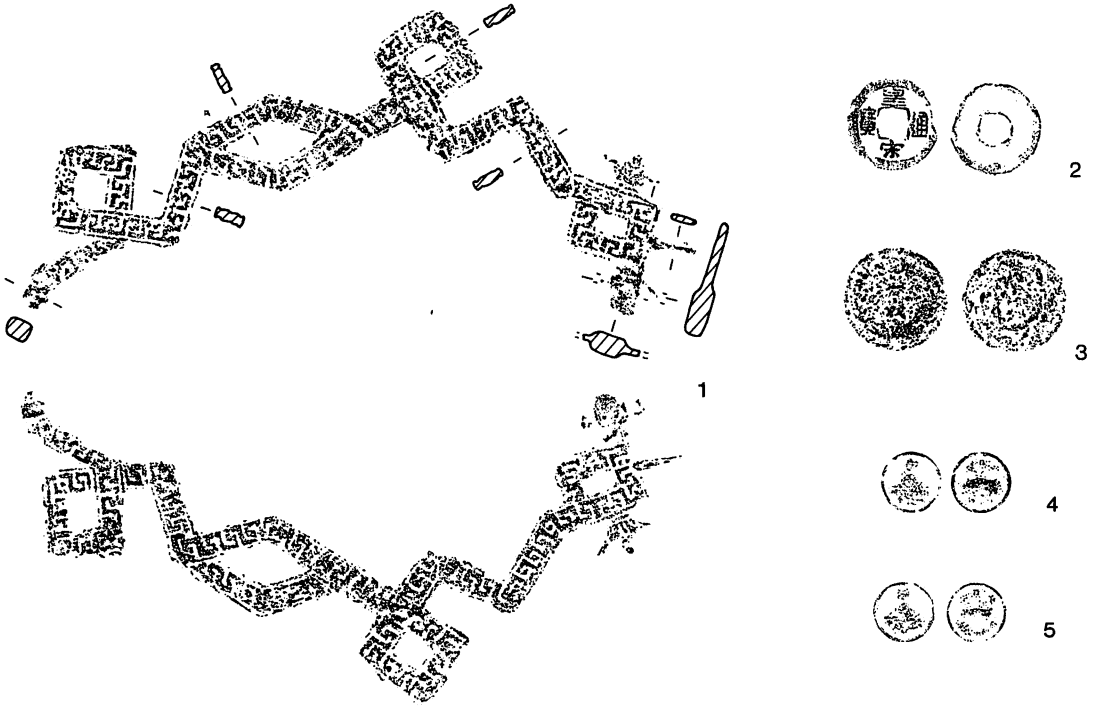
図Ⅲ－140　包含層の石器(12)



図Ⅲ－141　土製品，石製品(1)



図Ⅲ－142　土製品，石製品(2)



図Ⅲ－143　金属製品

は片麻岩製である。

118～124は円形ないし半円形の礫を素材にしたたたき石である。118～122は周縁に敲打痕があり，さらに118は片面，119は両面および側面，120，121は両面にくぼみがみられる。123，124は周縁の一部に敲打痕がある。118は砂岩，119～124は安山岩製である。　**たたき石**

125～129は砥石で，125は4面，126，129は片面，127，128は溝状に砥面がみられる。125は凝灰岩，126は砂岩，127，128は安山岩製である。　**砥　石**

130～173は扁平な楕円礫に打ち欠きのみられる石錘で，長軸方向に打ち欠きがあるものが大部分であるが，短軸方向にあるもの（130，133，136）もある。重量の軽いものから重いものの順に配列した。重さの平均は127gで，130～137は30～50g，138～145は50～100g，146～160は100～150g，161～167は150～200g，168～171は200～300g，172～173は300g以上である。130，141，145，146，162，165～167は砂岩，131，132，134，137～139，142，143，150，153，154は泥岩，133，135，136，140，144，147～149，151，152，155～161，163，164，169～173は安山岩，168は珪岩製である。　**石　錘**

174～181は台石または石皿で，偏平な大型礫を利用している。179～181の片面にはすり面がみられる。すべて安山岩製である。　**台石・石皿**

(8)　遺構，包含層出土の土製品，石製品（図Ⅲ-141，142，図版62）

1～3はミニアチュア土器の一部で，胎土や調整，出土状況からみてⅢ群A_3類土器に伴うものとみられる。1は口縁部に太い粘土紐を貼り付け，刺突文を施している。台付土器の可能性がある。2は皿状のもので，外面に縦と横の2本単位の沈線と刺突列がみられる。3は底部である。4，5は注口の一部で，時期は不明だが，4はH－1出土で出土状況か　**ミニアチュア土器**

三足台付土製品　らみてⅢ群A_3類土器に伴う可能性が強い。6，7は図Ⅲ－120－9の三足台付土器と同様な土器の一部で，6は台部分，7は足部分とみられる。8は棒状，9はスタンプ状，10はくぼみのある土製品で，9には環状のつまみが付くと思われる。11，12はともにH－5出土で，Ⅲ群A_3類土器の破片を利用した有孔土製品で，11は15.8g，12は4.1gである。13は径2mmの穴があいた勾玉状の垂飾である。14は上下に細かな刺突が施され，縦に径5～6mmの穴が貫通している土製品で，用途はわからない。15は卵形の土製品で，周縁に浅い溝と細かい刺突列があり，片面中央部に丸いくぼみがある。表面は丁寧に全面が研磨されている。胎土，調整，出土状況などからみて，Ⅲ群A_3類土器に伴うと考えられる。

土偶　16～18は板状の土偶の破片である。16は胴部の下半が欠損しているが，上半部はほぼ完全な形で残存している。頭と左右の腕は単純な形態で表現されているが，顔と胸の表現はない。頭部の横断面は丸味のある五角形で，上面は皿状にくぼんである。両腕部分には径5～8mmの横方向の貫通孔があり，表面は全面丁寧に研磨されている。17，18は同一個体の土偶と思われ，17は左腕，18は腹部に相当する部分の破片である。表は縦方向，裏は横方向の刺突列がみられるが，全体の文様は不明である。また，腕には縦方向の貫通孔，腹部にはへそに相当する小さな盛り上がりがみられる。17，18の割れ方からみて，板状の粘土を張り合わせて製作した可能性が強い。2個体の土偶は胎土，調整，出土状況からみて，Ⅲ群A_3類土器に伴うものとみられる。

石製品　19～23は自然石の形状をそのまま利用した有孔の石製品で，垂飾とみられるものである。19は鹿角製の「鳥形短剣，腰飾」などと呼ばれている（春成 1985）ものに近い形状で，両側から穿孔された穴が1ヵ所ある。20は片側から穿孔された大きな穴が1ヵ所ある。21～23は穴のあいた自然石をそのまま利用し，穴の周囲に部分的に加工を施したものである。5点とも泥岩製である。

(9) 包含層出土の金属製品（図Ⅲ－143）

北宋銭　1は性格不明の銅製品で，雷文様の文様がみられる。2～5は銭貨で，2は北宋銭の皇宋通宝(1039年初鋳)，3は明治10年製の角ウロコの竜1銭銅貨，4は昭和16年，5は18年製の富士1銭アルミ貨である。いずれも第Ⅰ層出土である。

2　第Ⅳ層の遺構と遺物

焼土ブロック１ヵ所（Fb－１），炭化木片ブロック４ヵ所（Cb－１～４），石器ブロック７ヵ所（Sb－１～７）が確認された。第Ⅳ層以下の土層の状況，焼土・炭化木片ブロック，石器と石器ブロックの概要，石器，石器ブロック，母岩別分類などについて説明する。

(1)　第Ⅳ層以下の土層について（図Ⅲ－144）

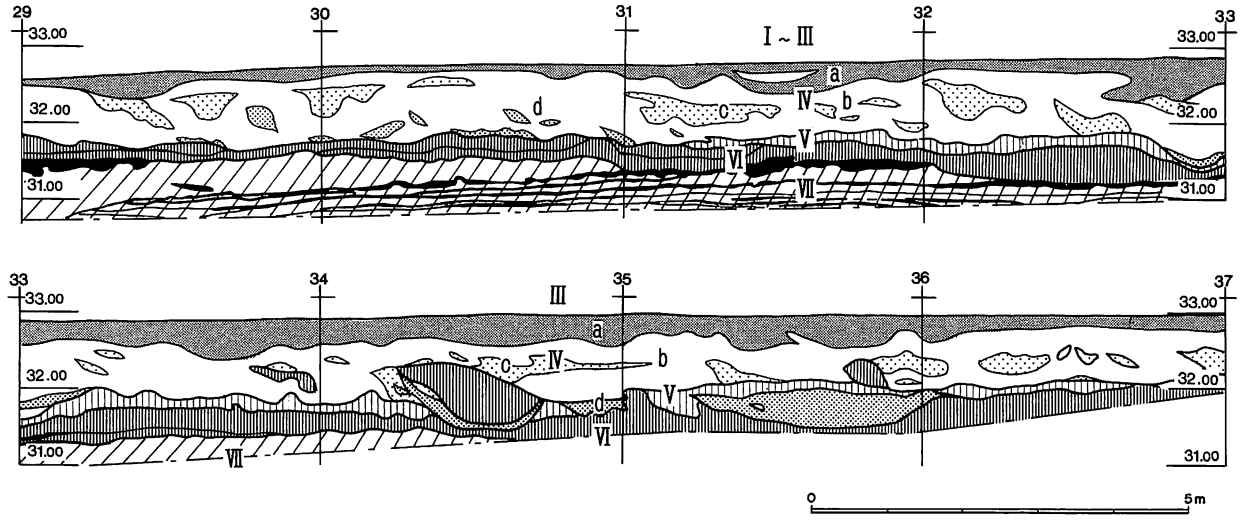
第Ⅳ層以下の土層の状況をJ－29～37区の西側断面で確認した。第Ⅳのローム層は１ｍ前後の厚さで，岩相からみると大きくａ～ｄの４種類に区分できる（L－36では７層に区分されている：Ⅳ－１(2)参照）。ａは最上位にある明黄褐色粘質土で，旧石器の包含層である。ｂはａに比べて黄色味が強い黄褐色砂質土でａの中にもレンズ状にみられる。基本的にはこの層から遺物の出土はない。したがって，調査はこの層を10cm程度掘り下げた時点で止めた。ｃ，ｄはともにａより細粒の橙色粘質土で，ｃは黒褐色のマンガン結核を含み，ｄは白色味がかっている。ともにちぎれ雲状にｂの中にみられるが，ｃはｄより上位にみられる場合が多い。　**ローム細分**

第Ｖ層は第Ⅳ層と第Ⅵ層の漸移層で29～31ではみられない。

第Ⅵ層は明褐色砂質土で，風化した泥岩を含み，34～36ではレンズ状に第Ｖ層の上位にみられる。

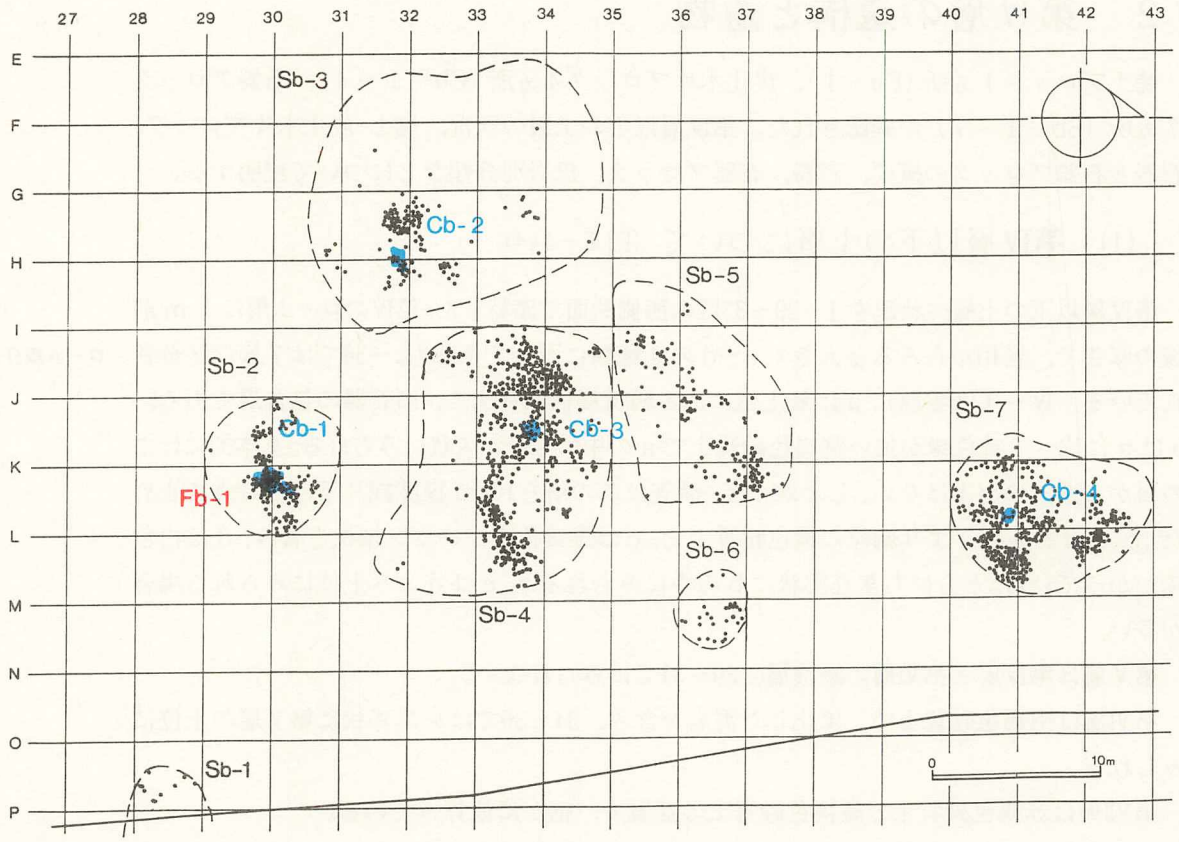
第Ⅶ層は赤褐色砂質土と黒褐色砂質土の互層で，細かに波打っている。

以上のうち第Ⅵ，Ⅶ層が段丘堆積物と考えられる。第Ⅶ層の細かな波は堆積時の水，風などの影響とみられるが，第Ⅳ～Ⅵ層のちぎれ雲状，レンズ状または波状の産状について　**段丘堆積物**



第Ⅳ層　ａ：明黄褐色粘質土（旧石器包含層）　ｂ：黄褐色砂質土　ｃ：橙色細粒粘質土（黒褐色マンガン結核を含む）
　　ｄ：淡赤橙色細粒粘質土
第Ｖ層　橙色砂質土（漸移層）
第Ⅵ層　明褐色砂質土（風化した泥岩を含む，段丘堆積物）
第Ⅶ層　赤褐色砂質土と黒褐色砂質土の互層（段丘堆積物）

図Ⅲ－144　Ｊ－29～37第Ⅳ層以下の土層断面



図Ⅲ－145　焼土・炭化木片ブロック位置図

インボリューション　は，周氷河性の発達の弱いイボリューションの可能が考えられるが詳細は不明である。

(2)　焼土ブロック(Fb)と炭化木片ブロック(Cb)（図Ⅲ－145）

焼土ブロック１ヵ所，炭化木片ブロック４ヵ所はいずれも石器ブロックと共に確認され，二次的な堆積の状況はみられず，石器群と同時期のものと考えられる。以下位置，大きさ，石器ブロックとの関連，年代，炭化木片の樹種などを説明する

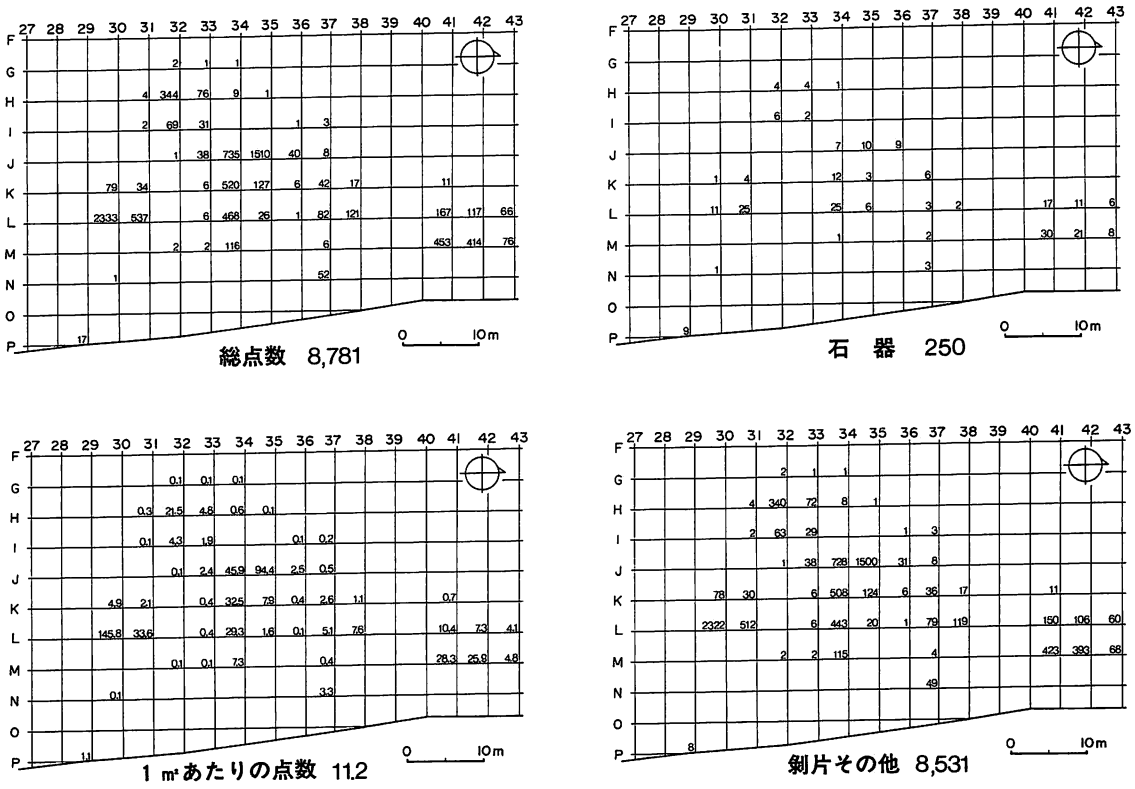
Fb－１　K－29･30に位置し，大きさは50×27cm，厚さは７cmである。色は橙色で炭化木片の細粒を含んでいる。また，周囲にはCb－１が広がり，Sb－２と重複している。Cb－１と共に，Sb－２の石器を残した人々が火を焚いた跡と考えられる。

Cb－１　K－29･30にあり，Fb－１と共にSb－２の中央部に位置する。大きさは2.7×1.4mで，５～10cmの間隔で炭化木片が分布しているが，特に集中する部分がFb－１の周囲にある。炭化木片の９点について樹種同定を行ったところ，ハイマツあるいは五葉松類のマツ属８点，エゾマツあるいはアカエゾマツのトウヒ属が１点確認された(Ⅳ－１(3)参照)。また，^{14}C年代測定を行ったところ，13,400±160y.B.P.という値が得られた(Ⅳ－２(1)参照)。

マツ・トウヒ属

Cb－２　G－31，H－31に位置し，Sb－３南東部の石器集中区域と重複している。大きさは1.5～1.0m，厚みは10cmで，５～10cmの間隔で炭化木片が散在している。Sb－３の石器を残した人々が，火を焚いた痕跡と考えられる。

Cb－３　J－33に位置し，Sb－４の中央部と重複している。大きさは1.2×0.8m，厚みは10



図Ⅲ－146　発掘区別旧石器出土点数

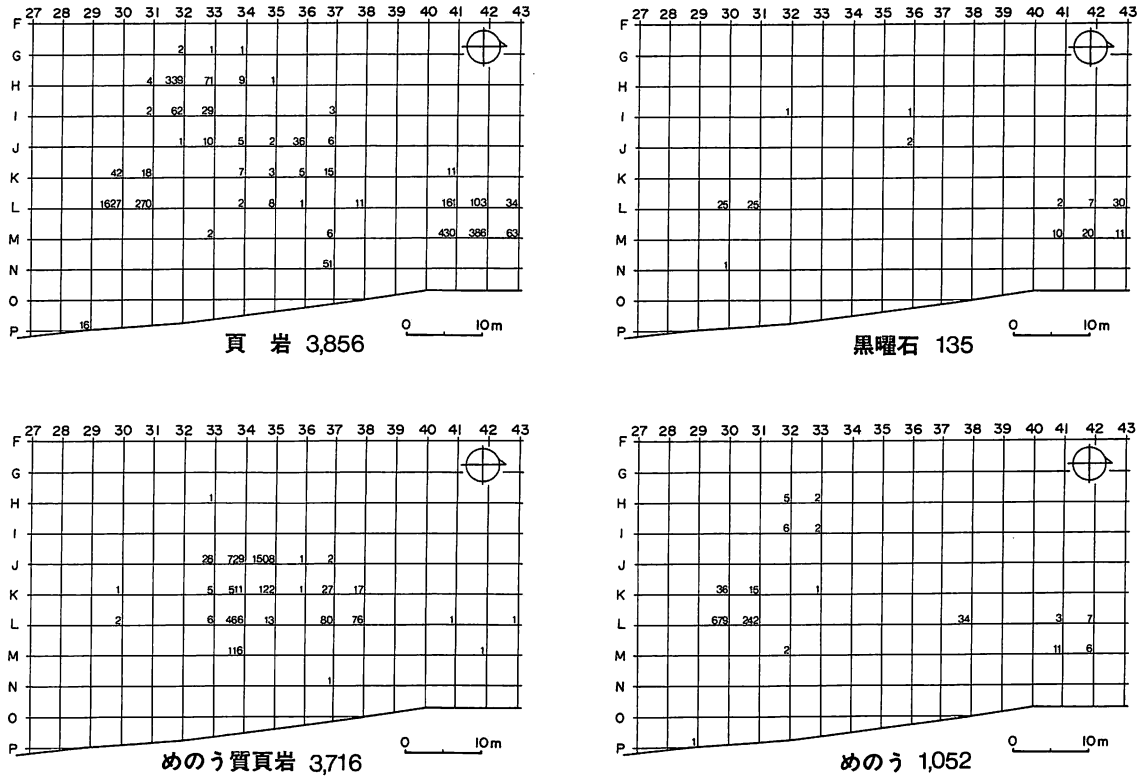
cmで，5～10cmの間隔で炭化木片が散在している。炭化木片2点について樹種同定を行ったところ，2点共ハイマツあるいは五葉松類のマツ属であった(Ⅳ－1(3)参照)。Sb－4の石器を残した人々が火を焚いた痕跡と考えられる。　マツ属

Cb－4　K－40に位置し，Sb－7南側の石器集中区域と重複している。大きさは0.9×0.6m，厚さは5cmで，5～10cmの間隔で炭化木片が散在している。炭化木片2点について樹種同定を行ったところ，2点共ハイマツあるいは五葉松類のマツ属であった（Ⅳ－1(3)参照)。Sb－7の石器を残した人々が火を焚いた痕跡と考えられる。　マツ属

焼土ブロックや炭化木片ブロックの状況を今金町美利河1遺跡（(財)北海道埋蔵文化財センター 1984a）と比較すると，焼土ブロックの色などは酷似するが，炭化木片ブロックについては炭化木片の密度が異っている。美利河1遺跡に比べ本遺跡の場合は密度が低い。Fb－1はその場所で火を焚いた痕跡とみられ，Cb－1はFb－1に伴った炭化木片のブロックと考えられる。Cb－2～4については周囲に焼土がみられないが，その周囲で火が焚かれたために残った炭化木片のブロックと考えられる。樹種同定の結果から使用された薪材はいずれも針葉樹で，美利河1遺跡の状況と一致している。薪材に適する広葉樹が全く利用されず，不適な針葉樹が使用されているのは，当時の植生が反映しているものと考えられる（Ⅳ－1(3)参照)。　美利河1　針葉樹

(3)　石器と石器ブロックの概要

石器類の総数は8.781点，総重量は24,040.4g，そのうち石器は250点，12,690.8g，剝片・破片は8,531点，11,349.6gである。1㎡あたりの出土点数を遺物の出土している発掘区だ



図Ⅲ－147　発掘区別・石質別旧石器出土点数

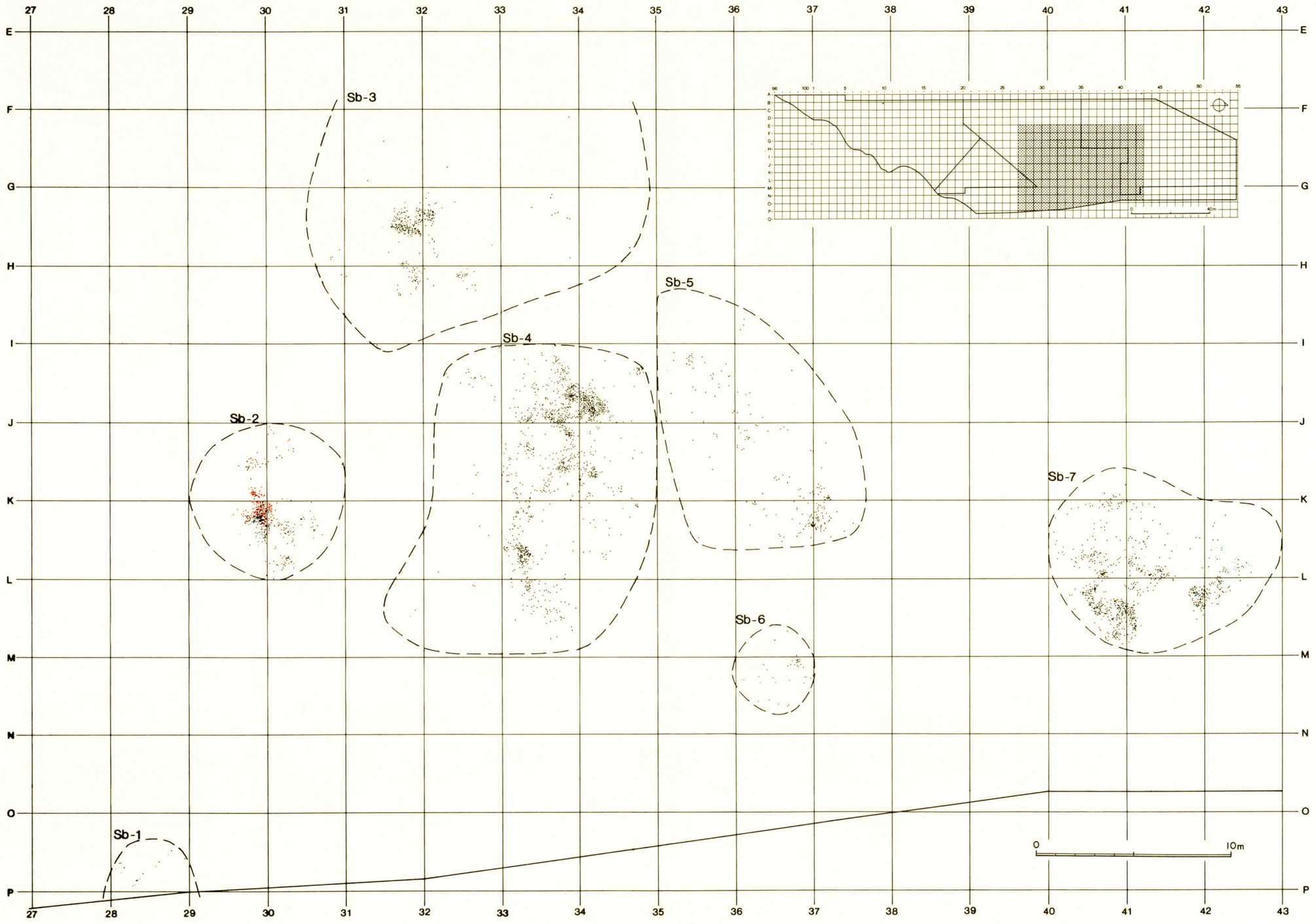
けで計算すると平均は1㎡あたり11.2点になる。遺物が最も集中しているのはK－29で，4×4 mの発掘区で2,333点出土している。しかし，大部分は小さな砕片類である(図Ⅲ－146)。

石　材　石材は大まかに頁岩，めのう質頁岩，黒曜石，めのうの4種類で，その他に礫石器に利用されている緑色泥岩，砂岩，安山岩などがある。頁岩は3,856点，めのう質頁岩3,716点，黒曜石135点，めのう1,052点，その他の石材22点で，頁岩とめのう質頁岩が大半を占める(図Ⅲ－147)。頁岩は褐色系の原石が多く，細石刃，細石刃核，両面調整石器，彫器，掻器，削器などの石器がある。めのう質頁岩は白色～黄色系の原石が多く，尖頭器，石核，縦長剥片などが少量あるが，大部分は尖頭器製作の際の剥片類である。黒曜石は細石刃，削器と細石刃核の調整剥片などがわずかにみられるだけである。めのうは錐形石器だけに使用され，石器以外では削片と砕片がある。

また，頁岩とめのう質頁岩は，色や模様に特徴のあるものについて母岩別の分類作業を試みた。頁岩は6種類(No.1，No.25～29)，めのう質頁岩は23種類(No.2～24)抽出することができた。

器　種　250点の石器は器種別にみると細石刃88点，細石刃核2点，尖頭器10点，両面調整石器17点，彫器23点，錐形石器8点，掻器4点，削器26点，縦長剥片51点，石核7点，ストーン・リタッチャー3点，台石11点で，細石刃，縦長剥片，削器などが多い。両面調整石器は破片の点数で，個体数は9点程度である。また，台石も同一個体の破片が多く，個体数は2点である。

以上の石器類は層位的な上下関係で確認できるものはなく，ある程度の厚みでいくつか



図Ⅲ－148　旧石器の分布と石器ブロック

表Ⅲ－1　旧石器　器種別，ブロック別総数

器種＼ブロック名	Sb－1		Sb－2		Sb－3		Sb－4		Sb－5		Sb－6		Sb－7		計	
	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量
細石刃			21	1.2	3	0.3							64	9.1	88	10.6
細石刃核													2	44.1	2	44.1
尖頭器							10	747.8							10	747.8
両面調整石器	1	179.8	2	31.9	2	132.7			8	278.9	3	437.1	1	11.9	17	1,072.3
彫器	2	11.4	5	26.0	3	12.0			2	15.5	1	2.4	10	42.1	23	109.4
錐形石器			1	1.1	3	1.8							4	1.4	8	4.3
掻器	1	15.2			1	18.2			1	7.3	1	17.8			4	58.5
削器	6	95.1	10	156.8	4	77.3			2	24.1			4	54.9	26	408.2
縦長剝片					1	17.9	38	523.5	7	101.5			5	39.8	51	682.7
石核			1	290.0			6	2,860.4							7	3,150.4
ストーン・リタッチャー			1	1,080.0									2	268.4	3	1,348.4
台石							10	5,023.7					1	30.4	11	5,054.1
石器合計	10	301.5	41	1,587.0	17	260.2	64	9,155.4	20	427.3	5	457.3	93	502.1	250	12,690.8
剝片	7	28.7	176	314.5	212	533.8	1,721	8,269.6	198	554.9	40	75.8	192	415.0	2,546	10,192.3
砕片			2,584	86.3	302	29.8	1,768	323.4	87	8.0	13	1.0	950	61.6	5,704	510.1
剝片	1	0.4	182	61.5	8	1.9	3	0.8	13	2.2			66	71.4	273	138.2
礫					2	467.1			3	7.9			3	34.0	8	509.0
剝片など合計	8	29.1	2,942	462.3	524	1,032.6	3,492	8,593.8	301	573.0	53	76.8	1,211	582.0	8,531	11,349.6
総合計	18	330.6	2,983	2,049.3	541	1,292.8	3,556	17,749.2	321	1,00.3	58	534.1	1,304	1,084.1	8,781	24,040.4

石器ブロック　の集中域をなして分布していた。集中域は大きく分けて7ヵ所，それらを石器ブロック(Sb)と呼ぶ。7ヵ所の石器ブロックはさらに細かな小ブロックに分けることも可能であるが，石器群を把握する上で混乱をまねくおそれがあり，細分は行っていない（図Ⅲ－148)。

7ヵ所の石器ブロックのうち4ヵ所のブロックでは焼土ブロックまたは炭化木片ブロックが重複している。焼土ブロックや炭化木片ブロックは共に火を焚いた痕跡と考えられる

生活空間　ので，その周辺は一定の生活空間と考えられる。従って，それらに伴う石器ブロックの石器類も一定の生活空間における石器の製作，使用の状況を示しているとみられる。

各石器ブロックにおける石器の組成，重量などは表Ⅲ－1に示したので参照願いたい。

(4) 石器（図Ⅲ－149～206，図版67～80)

説明順番　石器は細石刃，細石刃核，両面調整石器，彫器，錐形石器，掻器，削器，尖頭器，石核，礫石器の順で説明するが，細石刃核，両面調整石器，彫器，錐形石器については関連する削片，剝片，尖頭器については製作に関わる剝片の接合資料，石核については関連する縦長剝片などの接合資料などを同時に説明する。

細石刃（図Ⅲ－149，図版67)　1～24は黒曜石，25～81は頁岩製で，幅の広いものから狭

黒曜石　いものの順で配列した。黒曜石は見かけ上，黒色に赤褐色が混じるもの(1～3，5～7，9，11，13，15，17，18，20，21，23，24)，赤褐色に黒色の混じるもの(8，10，12，14，16)，黒色で透明なもの（4，19，22）の3種類に分けることができる。しかし，細かな特徴を比較すると共通な点が多く，同一母岩の可能性が強い。また，3，6，7，9，11，13，24は表面が雲っており，火または熱を受けている可能性が強い。1～12は完形または半完形品，13，14はバルブ側で，1～5は幅5 mm，6～13は幅4 mm，14は幅3 mmである。15～17は遠位端側で，15は幅5 mm，16は幅4 mm，17は幅3 mmである。18～24は中間部で，18は幅6 mm，19，20は幅5 mm，21～23は幅4 mm，24は幅3 mmである。

平均　1～12で長さの平均を求めると19.6mm，全体で幅と厚さの平均をみると，幅は4.3mm，厚さは1.4mmである。

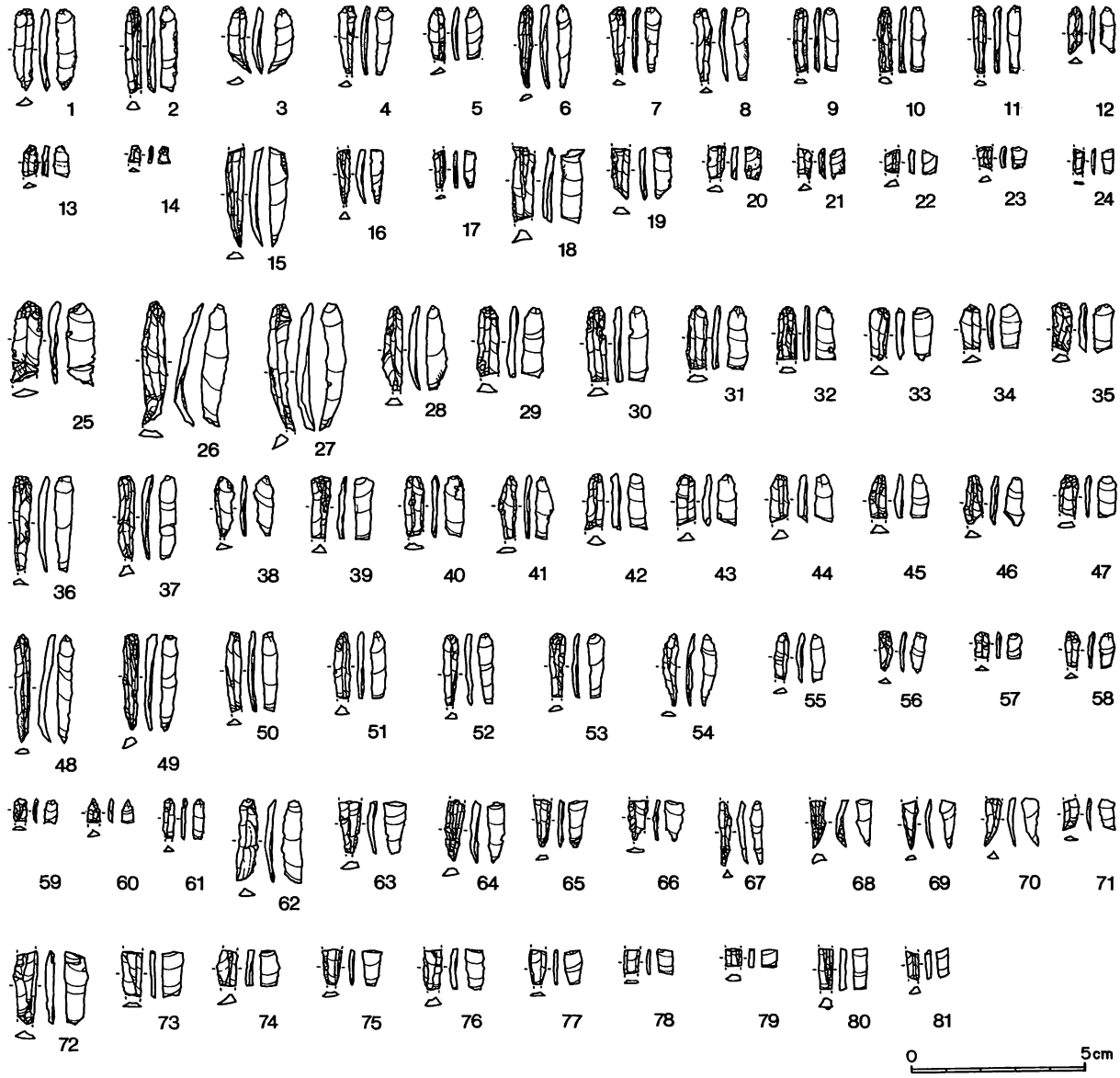
側縁には明確な二次加工はみられないが，20倍のルーペで観察すると，側縁は摩滅して

二次的損傷　いるものが多い。また，二次的な損傷とみられる細かな剝離が多くみられ，その部位は4，7，8，12は背面および主剝離面の両側縁，1，2，5，6，19，20は背面の左側縁，および主剝離面の右側縁，9は背面の右側縁および主剝離面の左側縁，21，22は背面の左側縁，10，11は背面の右側縁，16は主剝離面の両側縁，23は主剝離面の左側縁，17は主剝離面の右側縁である。

頁岩　25～61は完形品またはバルブ側で，25は幅8 mm，26は幅7 mm，27～35は幅6 mm，36～47は幅5 mm，48～60は幅4 mm，61は幅3 mmである。62～71は遠位端側で，62，63は幅6 mm，64～66は幅5 mm，67～71は幅4 mmである。72～81は中間部で，72は幅7 mm，73～75は幅6 mm，76～79は幅5 mm，80，81は幅4 mmである。完形に近いも

平均　ので長さの平均を求めると26.8mm，全体で幅と厚さの平均をみると幅は4.9mm，厚さは

母岩識別　1.5mmである。母岩識別ができたのは23点で，25，31，36，38，39，41，44，48，49，51，52，56，66，73，74，78は母岩No.26，そして27，29，32，40，42，47，76は母岩No.28である。側縁の加工，二次的な損傷はほとんどなく，65の背面右側縁にのみ連続的な細かな加工がみられる。

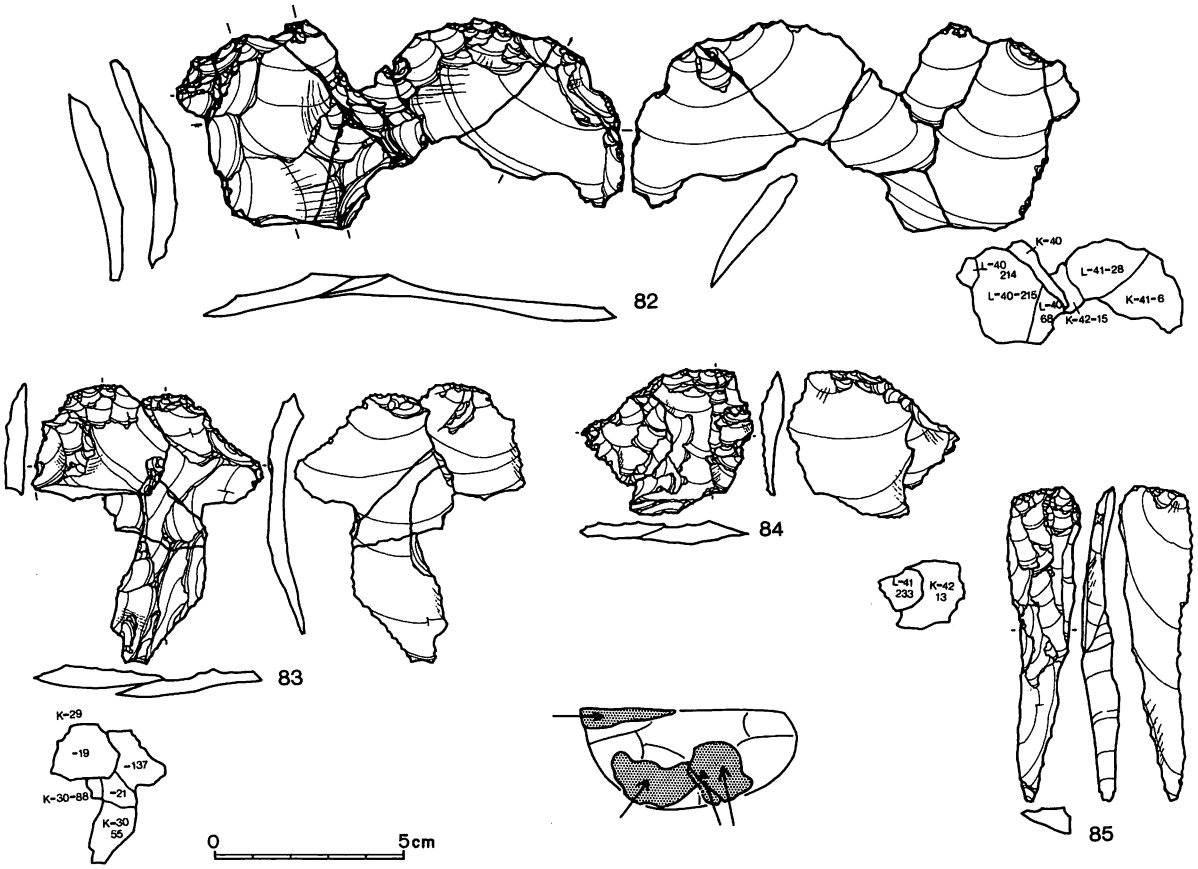


図Ⅲ－149　旧石器(1)・細石刃

黒曜石細石刃核調整剝片（図Ⅲ－150，図版67）　82～85は黒色に赤褐色が混じった黒曜石で，同一母岩とみられ，さらに黒曜石の細石刃と同一母岩の可能性が強い。82は3点（破片は7点），83は2点(破片は5点)，84は2点のポイントフレイクが接合したものである。また，85は縦長の剝片であるが，側面に主剝離面と直交する剝離がみられ，舟底形石器の甲板面に接する部分の側面調整剝片と考えられる。以上の点から，黒曜石の細石刃核の出土はないが，82～85の剝片は細石刃核の調整剝片の可能性が強い。また，削器の179，180も同様の剝片を利用したものである。

細石刃核接合資料(図Ⅲ－151～153，図版68）　86，88は細石刃核，削片，剝片が，90，91，92は削片が接合しているもので，いずれも細石刃剝離を目的とした作業過程が復元できる。

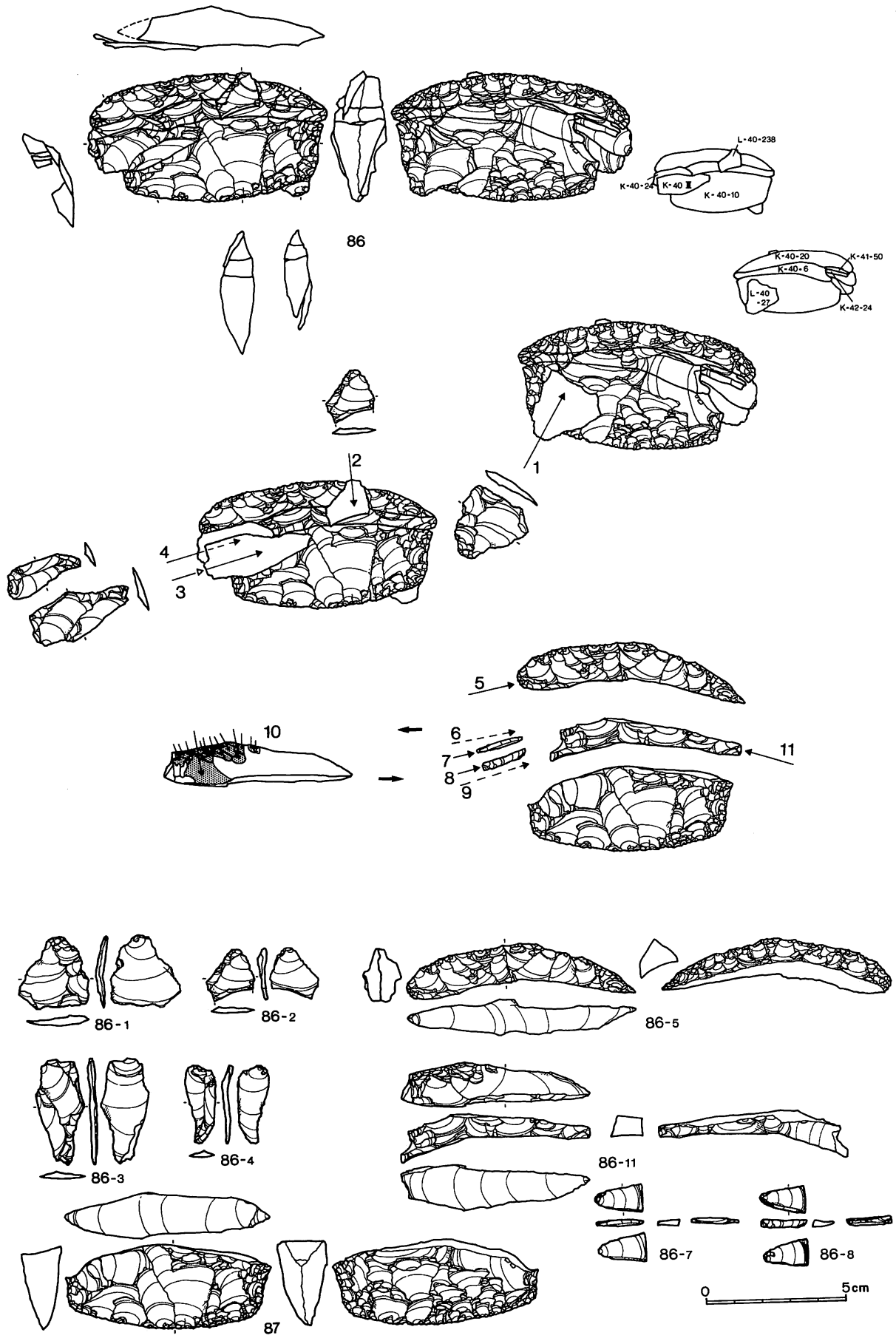
86は細石刃核1点，削片4点，剝片4点，合計9点が接合している。大きく両面調整素材の準備と削片剝離の二つの段階があり，細かくみると，素材準備の段階では削片剝離段



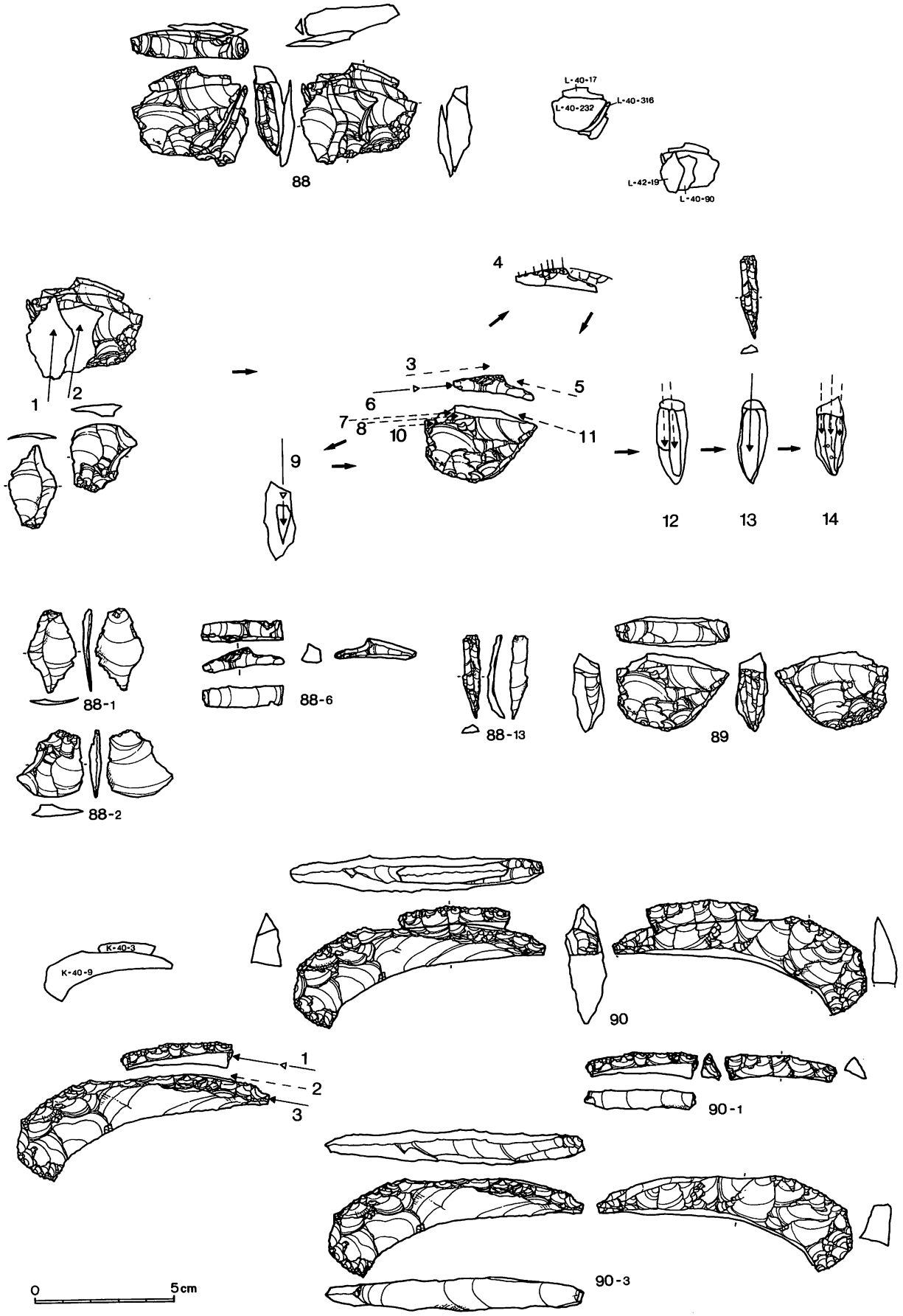
図Ⅲ－150　旧石器(2)・黒曜石剥片

階の準備的な細部調整，削片剥離段階では３次・６回の削片剥離，甲板面調整などが行われている。両面調整素材の素材は厚手の大型剥片とみられ，裏面に素材の主剥離面が残っている。大まかにみると調整は主剥離面側そして背面の順で行われ，断面がD字形に近い両面調整素材を製作している。また，形態は柳葉形ではなく，角張った楕円形である。さらに特徴的なのは，素材の長軸方向の調整が行われている点で，３，４の剥離がそれに相当する。これは次の削片剥離の準備とみられ，コンケーブした側縁を作出することによって削片剥離の際の打点を確保する意図をもつものと考えられる。削片剥離は６回，うち２回は剥離痕から推定したもので，左，右両方向から行われている。１次は左方向，反対側までぬけている(５)。２次も左方向で４回，しかし，すべて階段状になっている(６～９)。また，３次の削片剥離を行う前に階段状になった左側の甲板面を裏面から調整している(10)。３次は１，２次と反対の右方向から行われ，反対側までぬけている(11)。しかし，その後は細石刃剥離などの作業は行われずに放棄されている。

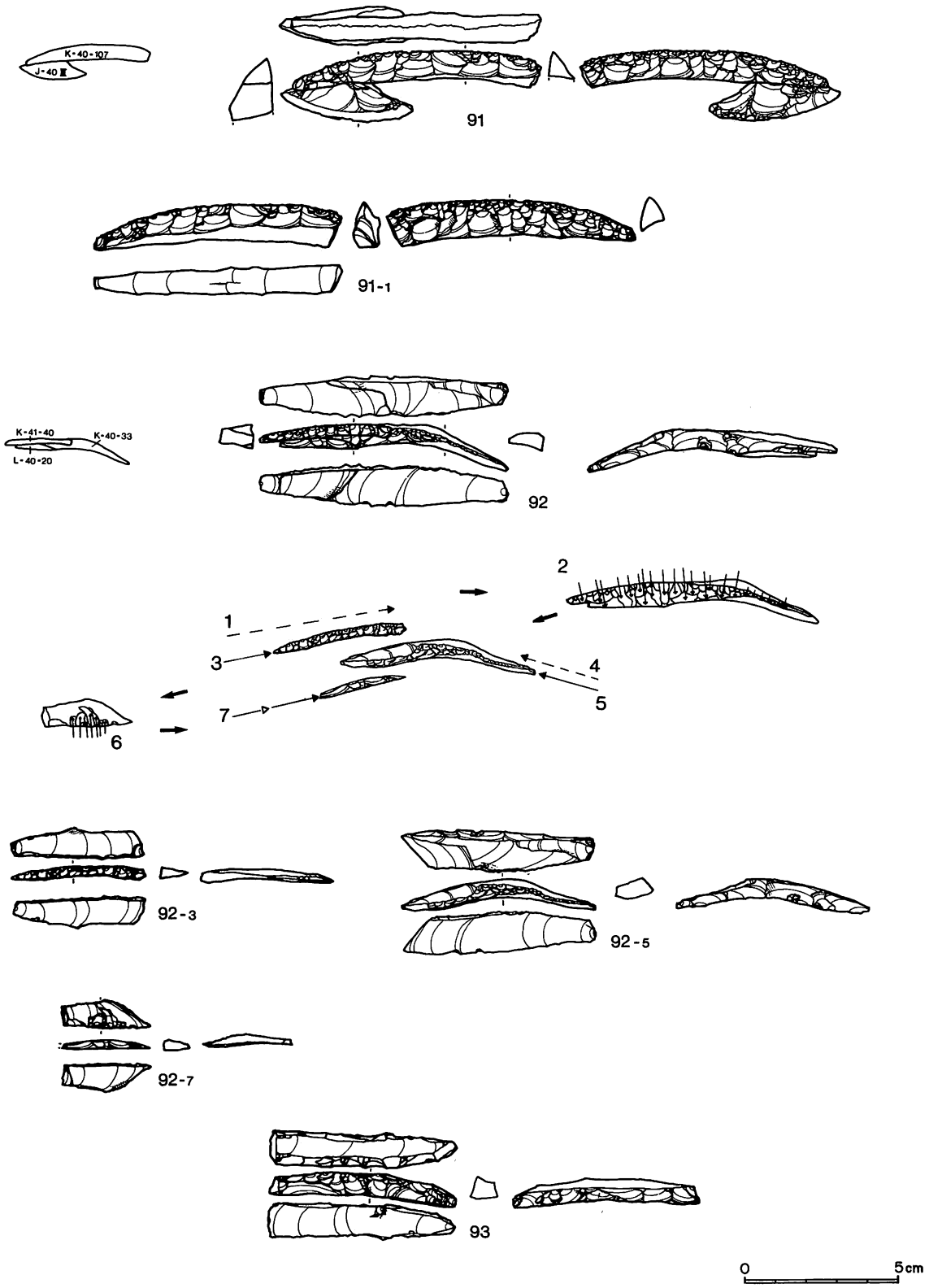
88は，細石刃核１点，細石刃１点，削片１点，剥片２点，合計５点が接合している。両面調整素材の準備，削片・細石刃剥離の工程がみられる。削片剥離は左右両方から行われ，88－６の削片に残る左方向からの剥離を１次とすると，３次の連続的な左方向の剥離（６～８）後に細石刃剥離を行っている(９)が，階段状になり十分な作業はみられない。結果的には逆の右方向の削片剥離(11)によって形成された甲板面を利用し，連続的な細石刃剥離（12～14）が行われている。また，１次(３)と２次(５)の削片剥離の間に甲板面からの細かな調整(４)が行われている。12の２回の剥離は88－13の細石刃の背面の剥離から推定



図Ⅲ－151　旧石器(3)・細石刃核接合



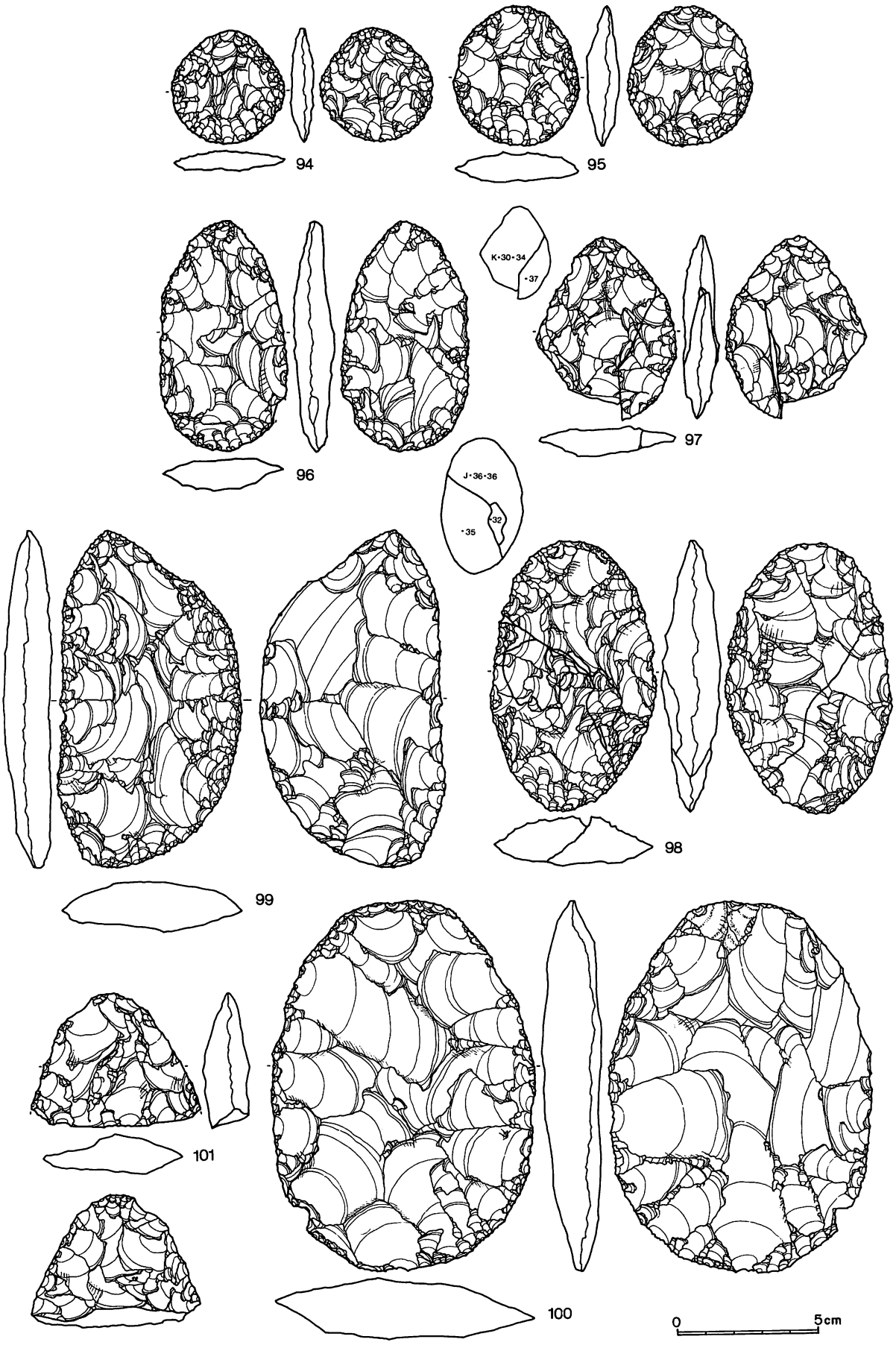
図Ⅲ－152　旧石器(4)・細石刃核・削片接合



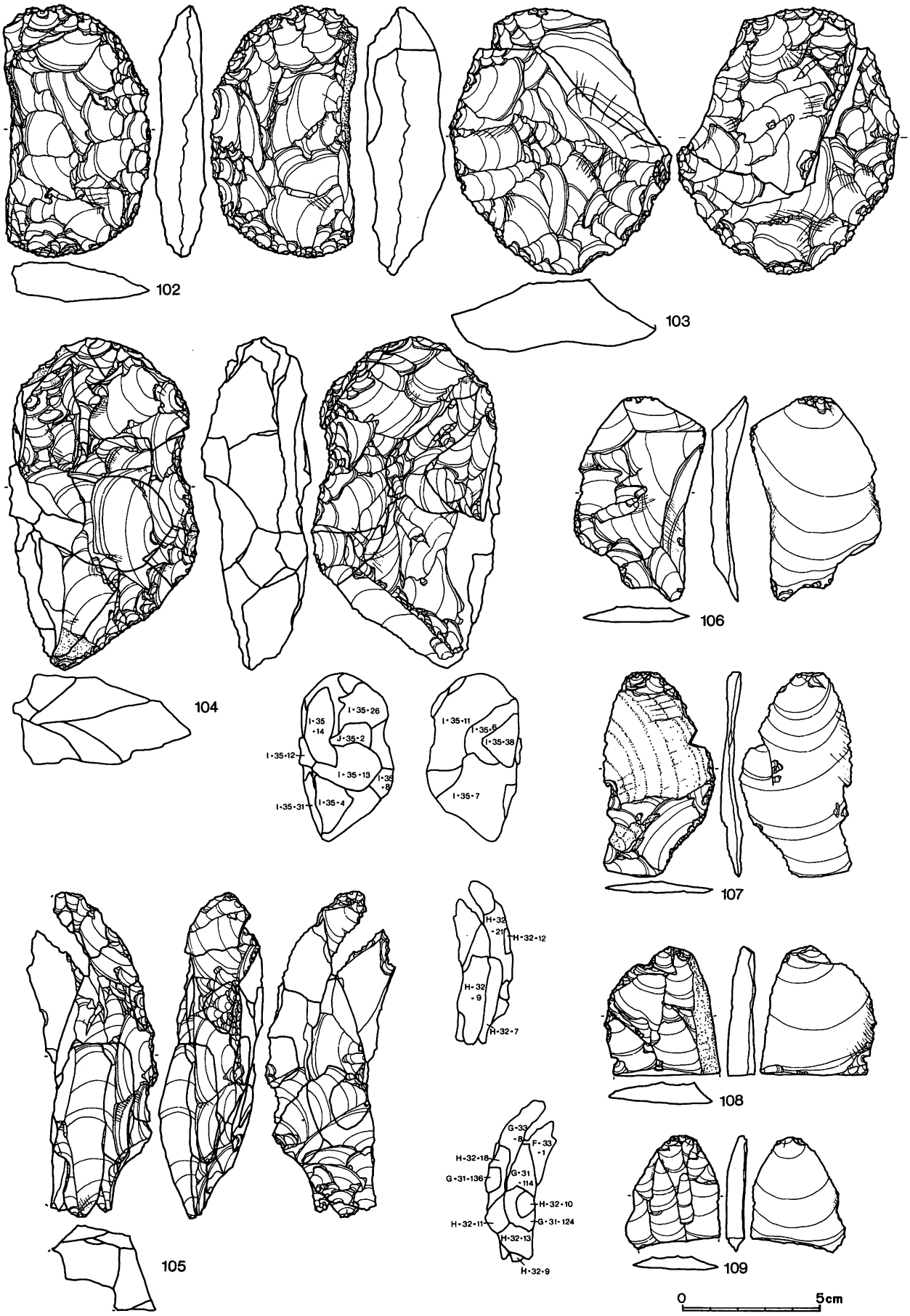
図Ⅲ－153　旧石器(5)・削片接合

したものだが，５の削片剝離段階の可能性もある。いずれにしても削片剝離の加撃方向と細石刃剝離の作業面は同一である。

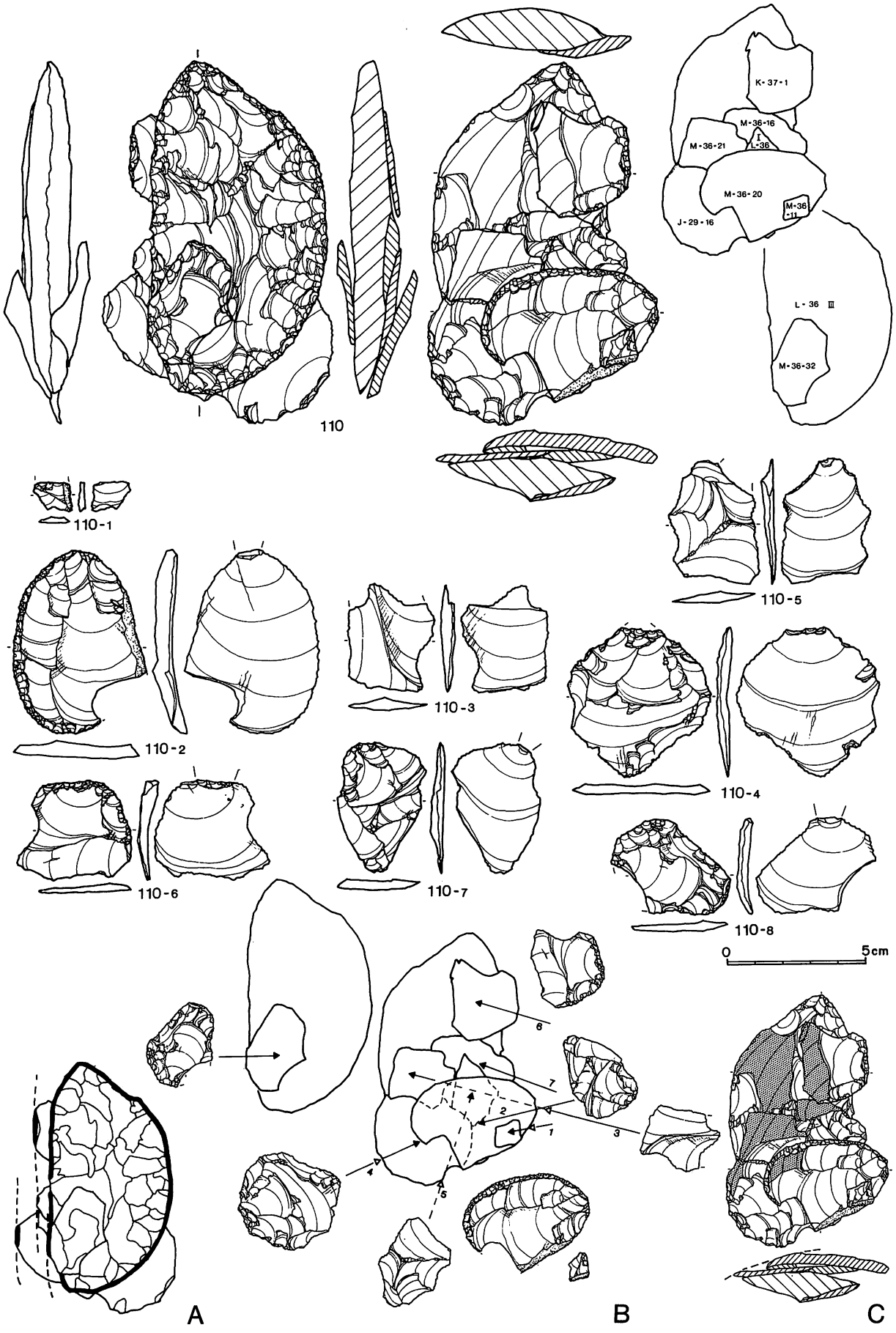
90，91は同一方向の加撃による削片剝離がみられるもので，90については，推定される



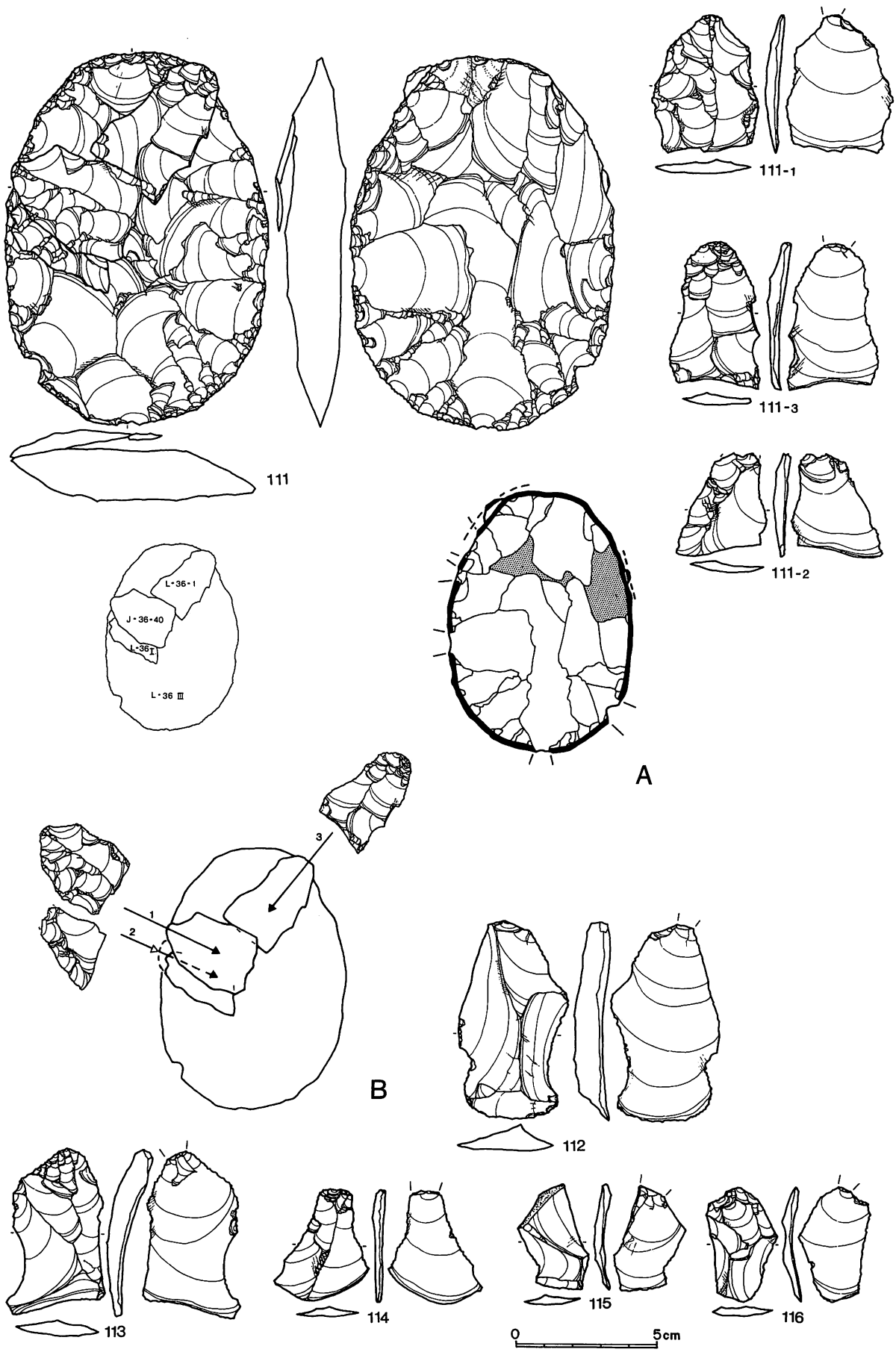
図Ⅲ－154　旧石器(6)・両面調整石器



図Ⅲ－155　旧石器(7)・両面調整石器ほか



図Ⅲ－156　旧石器(8)・両面調整石器接合ほか



図Ⅲ－157　旧石器(9)・両面調整石器接合ほか

細石刃核の形状から細石刃剝離も加撃方向の面で行われていることが予想できる。92は左右両方からの削片剝離が行われ，さらにその間に，甲板面からの側面調整，側面から甲板面調整などがみられる。93は第Ⅰ層から出土したスキー状削片であるが，他のものと接合しない。86，88，90，92は暗褐色の頁岩で母岩No.26，91は褐灰色の頁岩で母岩No.27である。

母岩識別

両面調整石器・同一母岩剝片（図Ⅲ－154～157，図版69）

94，95は円形に近い形状で断面はレンズ状，周縁は細かく加工されている。96～100は楕円形または卵形に近い形状で周縁は細かく加工され，99，100は周縁が磨滅している。なお，99と100は同一母岩とみられる剝片があり，その一部が接合するので，その状況は後に説明する。101はH－4の覆土，102，103は第Ⅰ層出土であるが，加工の状況が縄文の石器と異なり，表面にはロームが付着している。95はめのう質岩，94，96～103は頁岩で，98は母岩No.25，99，100は母岩No.1である。104，105は母岩No.25の頁岩で，両面調整石器の製作を意図したものとみられるが，頁岩の剝離性のため不規則に割れている。また，106～109も同一母岩で，両面調整の過程で得られた剝片である。周縁に不規則な細かな剝離がみられる。

刃部再生

110は99に掻器1点，剝片7点が接合している。本来は横長の大型剝片を素材（図Ⅲ－156－C　トーン部分が主剝離面）にした削器で，刃部の再生を繰り返し，小型化したものと考えられる。そしてその際に得られた剝片の一部を掻器に加工している（110－2）。110－2，110－6，110－7，110－8のブルブ部分はいずれも磨滅し，丸くなっている。接合状態で磨滅部分を示したのが図Ⅲ－156－Aで，4段階の磨滅した刃部，いいかえれば3回の刃部再生がみられる。

111は100に剝片3点が接合したもので，110同様，大型の剝片を素材（図Ⅲ－157－Aのトーン部分が主剝離面）にした削器である。100の周縁および接合剝片（111－1，111－3）のバルブ部分は丸く磨滅し，その状況を図示したのが図Ⅲ－157－Aである。110同様，磨滅した刃部の再生が行われている。112～116も110，111と同一の母岩No.1の剝片で，いずれもバルブ部分は丸く磨滅し，110または111の刃部再生の際に得られた剝片とみられる。

刃部再生

荒屋型彫器

彫器（図Ⅲ－158，図版70）　117～128は左斜刃型のいわゆる荒屋型（芹沢 1959）の彫器である。素材は石刃ではなく，厚手の剝片またはポイントフレイクとみられる。基本的な形態は木の葉形に近く，長さに比べ幅が広い。長幅比は最大2.0，最小1.3で平均は1.6である。背面の加工は基部および両側縁にみられ，主剝離面の加工は基部にのみに行われる。使用の痕跡は背面の側縁にみられる細かな不連続な剝離痕（＼／で表現）と主剝離面の細かな不連続な剝離痕（▬で表現）の二種類について20倍のルーペで観察した。背面の剝離痕は彫刀面と反対の側縁に多くみられ，主剝離面の剝離痕は，両側縁（117，119），彫刀面側のみ（122，123，126，127），彫刀面と反対の側縁のみ（118，121，124）の場合などがある。129は基部の破片で，他に基部の小破片が7点ある。130～132は117～128に比べ，小型で加工も粗いものであるが，形態的には共通性がある。132だけがめのう質頁岩で他は褐色系の頁岩である。133～143は削片で，133，134は断面が三角形の彫刀面形成，135～143は彫刀面再生の際のものである。

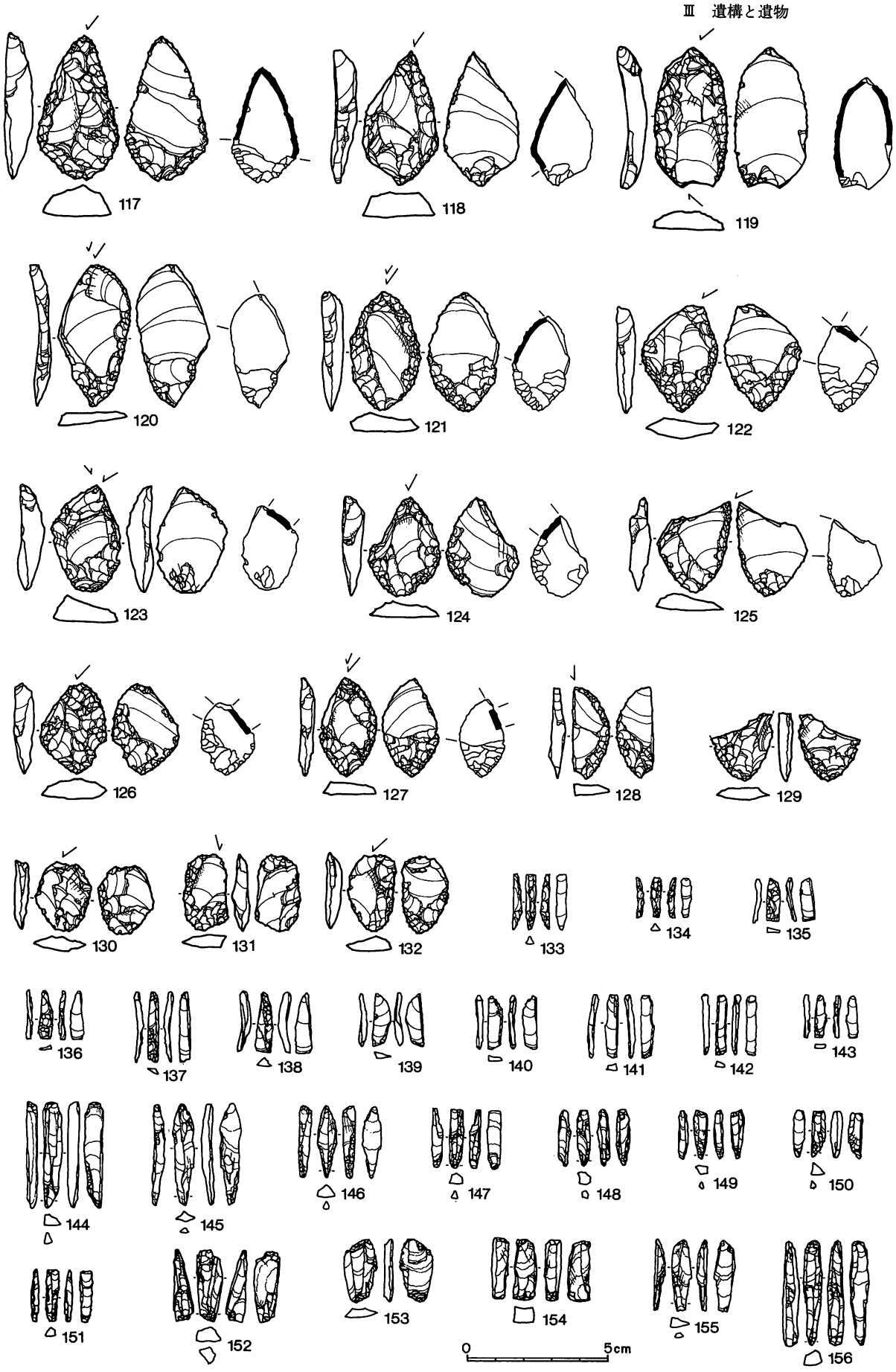
使用痕

削片

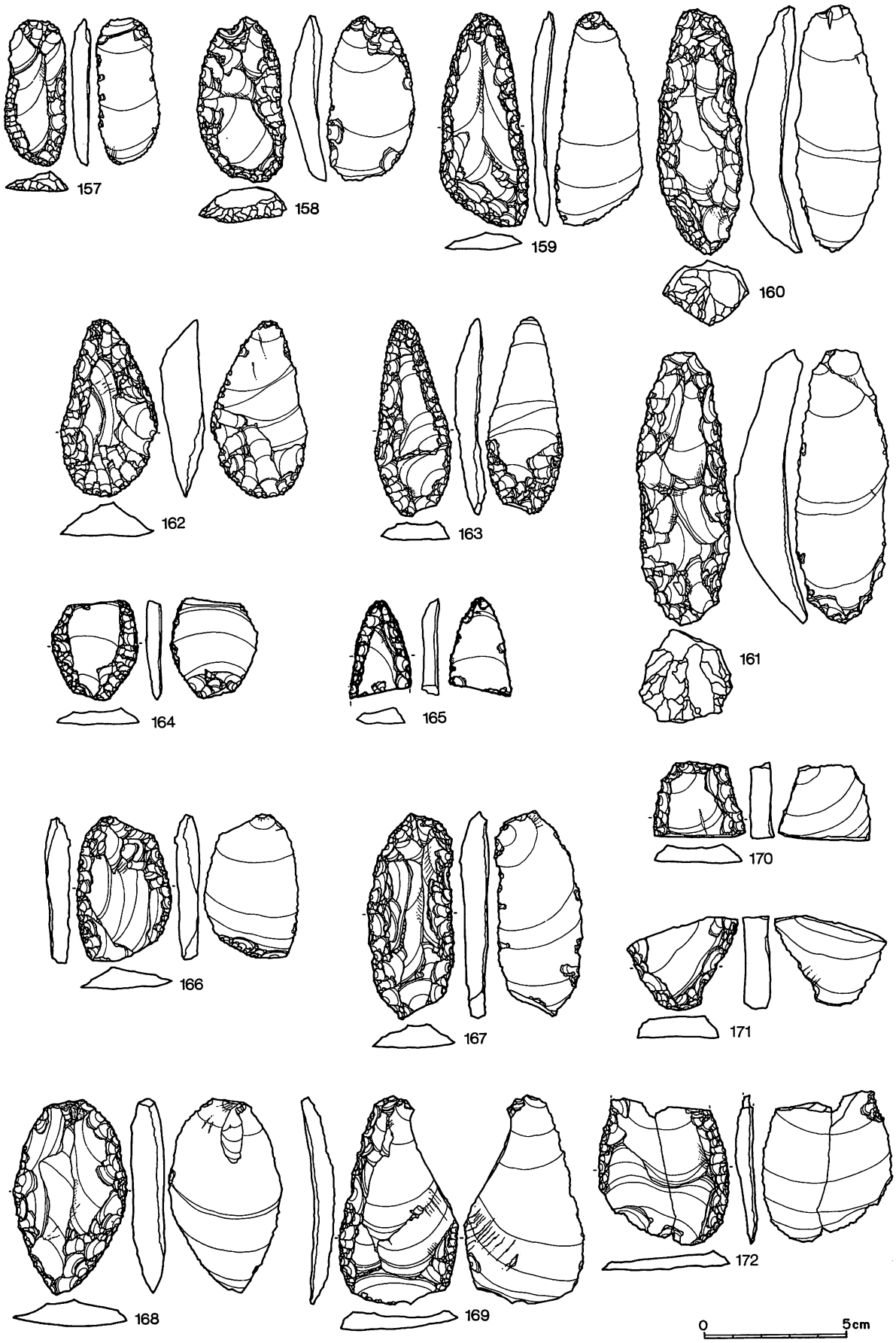
めのう

錐形石器・素材削片（図Ⅲ－158，図版71）　すべて灰白色のめのう製である。角柱状の削片の一端に加工を施し刃部を作出したもので，146は両側縁に連続的な加工があり，147～150は一端が潰れたような状態になっている。151は側縁に細かな加工がみられる。152～156は素材または素材の製作の際に得られたもので，152などはピエス・エスキーユといわれてい

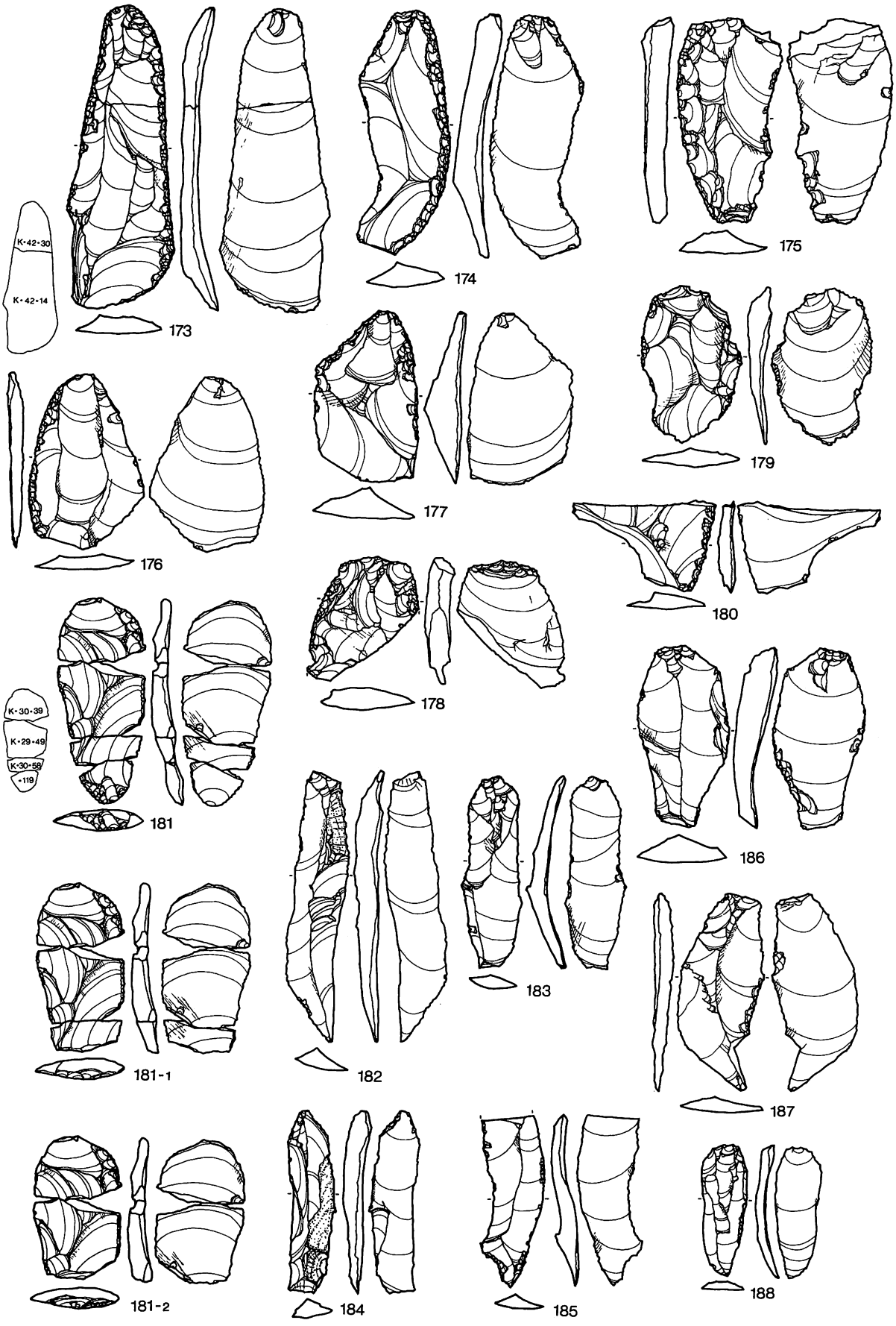
ピエス・エスキーユ



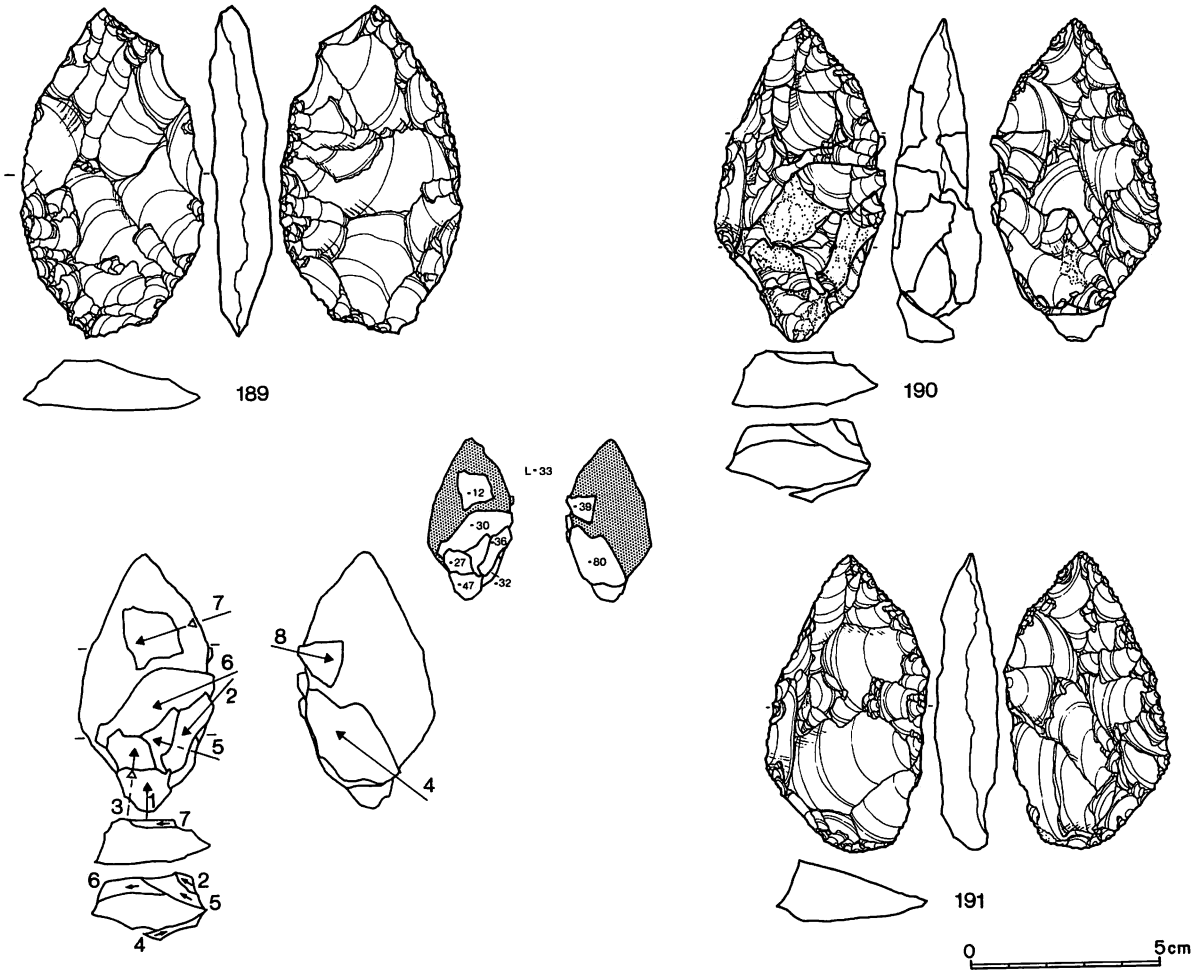
図Ⅲ－158　旧石器(10)・彫器・錐形石器ほか



図Ⅲ－159　旧石器(11)・掻器・削器



図Ⅲ－160　旧石器(12)・削器・縦長剥片



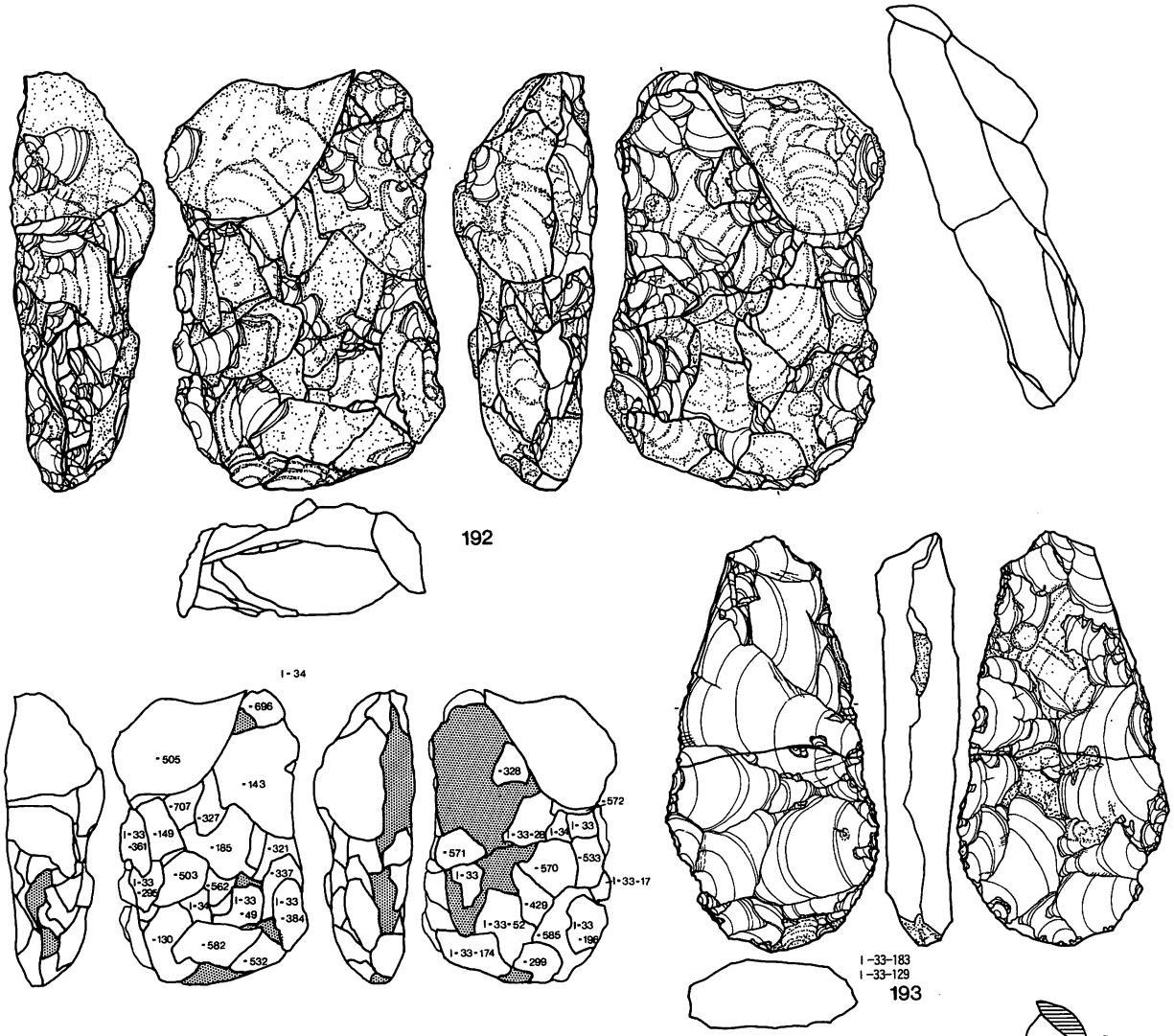
図Ⅲ－161　旧石器(13)・尖頭器接合ほか

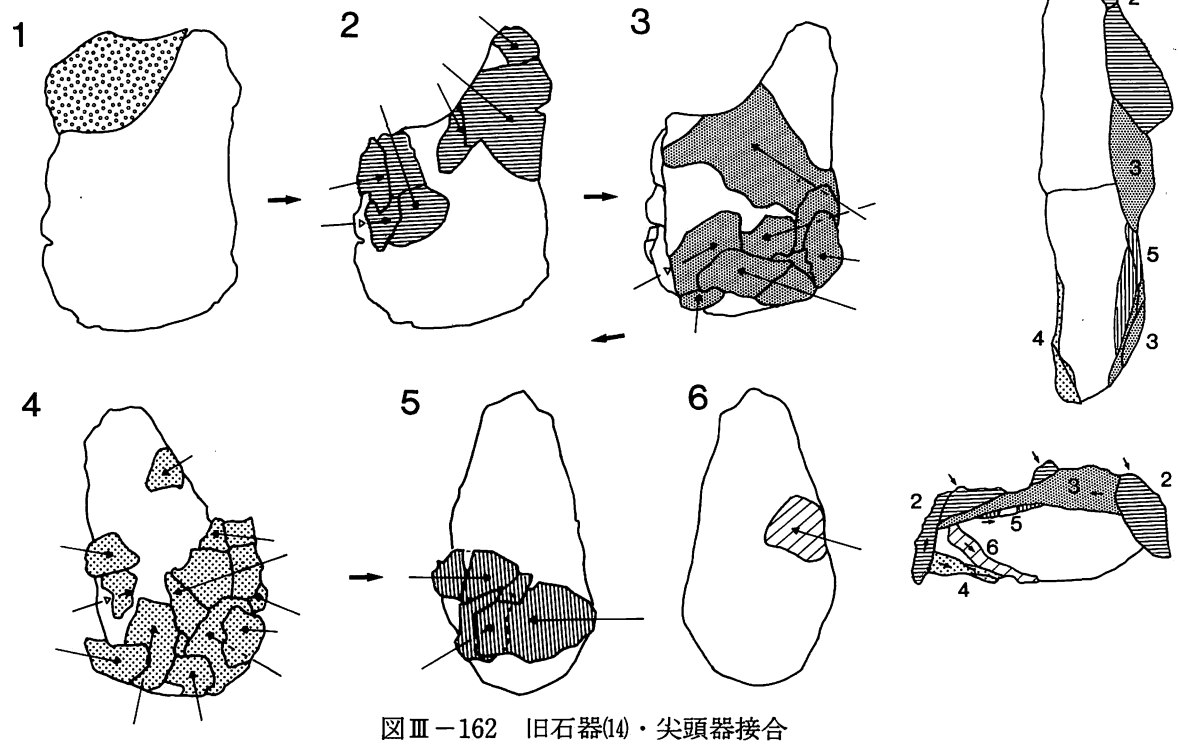
るものに近い。図示した13点以外にも大小の削片が多数あり，それらには押し潰されて砕屑が剝落したような細かな剝離が多くみられ，さらに剝離面の上下両端にバルブがあるものもあり，また，剝離面の切り合い関係が不明瞭なものが多い。これらの特徴は両極打法によって得られた両極剝片の特徴（岡村 1976，1983）と一致する。従って，錐形石器の素材の削片は両極打法によって得られたものと考えられる。

両極打法

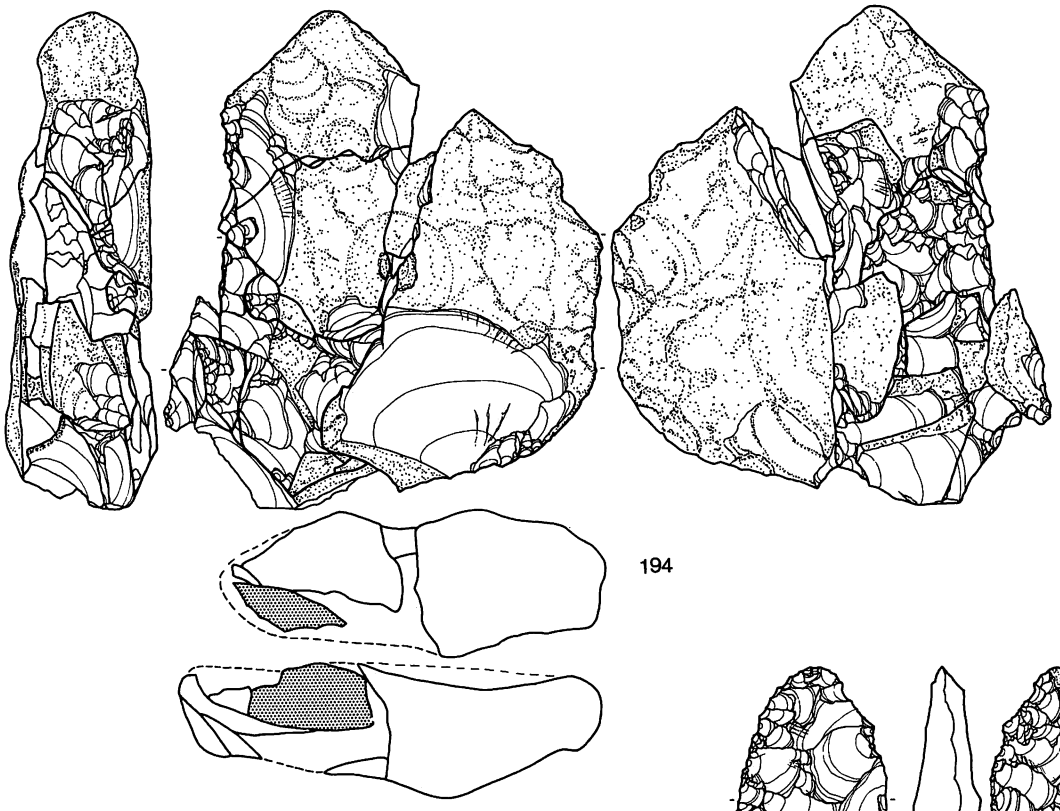
掻器・削器・縦長剝片（図Ⅲ－159，160，図版70）　157～159は縦長剝片を素材にして周縁に加工を施した掻器である。160，161は厚手のやや湾曲の強い剝片を素材にして周縁に粗い加工のみられる削器，162～173は縦長剝片またはポイントフレイクを素材にして，周縁または両側縁に加工のみられる削器である。162，163は背面の全周に加工がみられ，主剝離面も基部とみられる部分に加工がある。形態，加工の状況は彫器と酷似する。また，主剝離面の周縁には細かい不連続な剝離があり，縁は丸く潰れている。164，165も162，163と同様に背面の周縁に入念な加工がみられるものである。164，170の折れ面の主剝離面側の稜は使用のためであろうか，丸く潰れている。174～180は縦長剝片またはポイントフレイクを素材にしたもので，一つの側縁または側縁の一部に加工がみられる。181はポイントフレイクを素材にしたもので，4点の破片が接合している。周縁に浅い加工がみられ，下端に刃部が作出され，掻器として使用されている。また，折れ面を2度にわたり調整し，刃部としている。181－1，2はいずれも刃部の縁は丸く潰れ，最終的には大きく二つに折

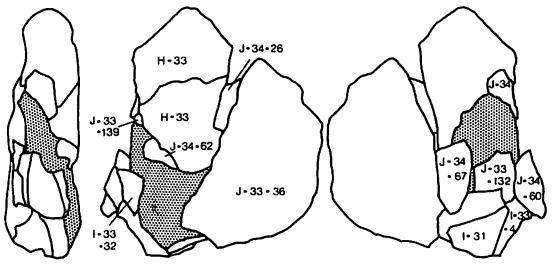
掻器
削器

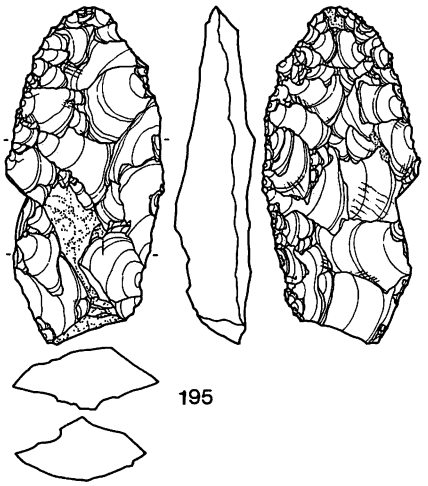


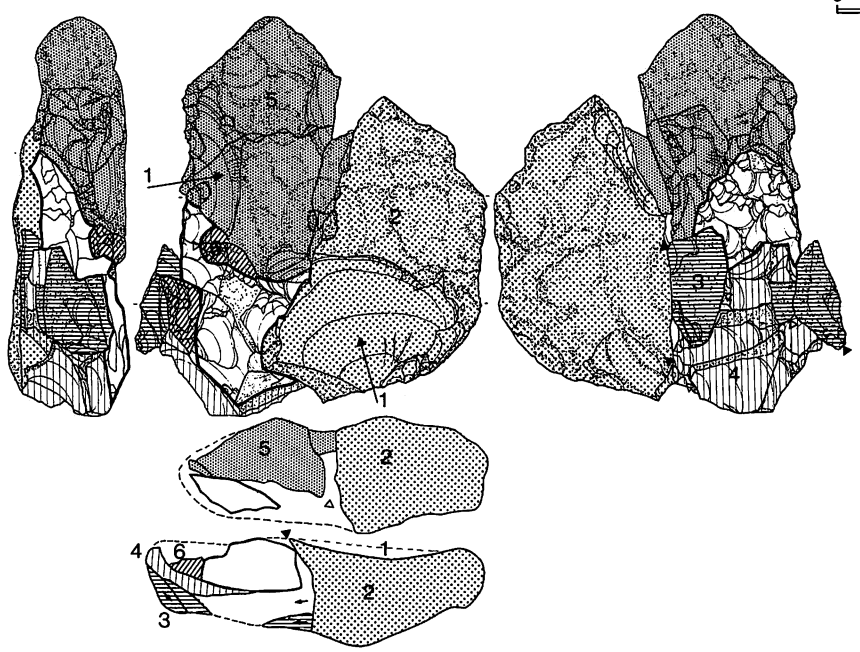


図Ⅲ－162　旧石器(14)・尖頭器接合

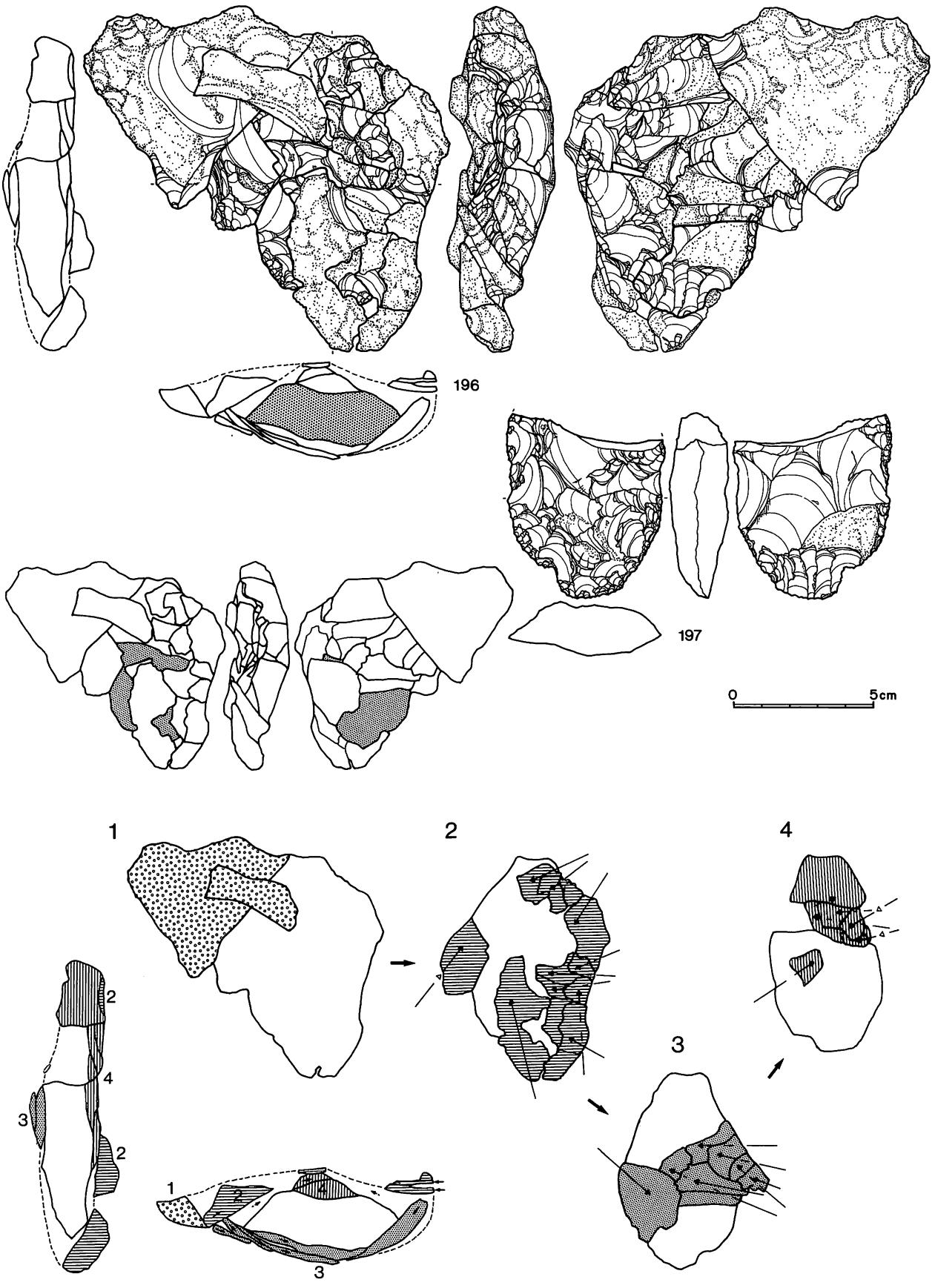




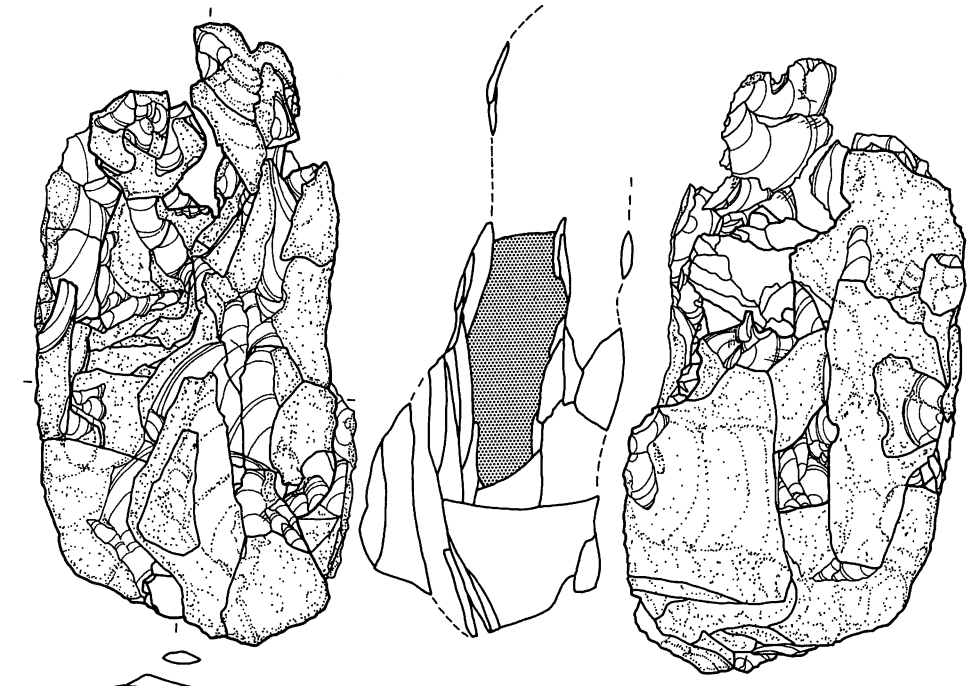




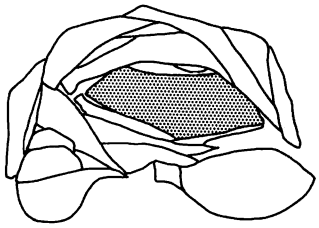
図Ⅲ－163　旧石器(15)・尖頭器接合

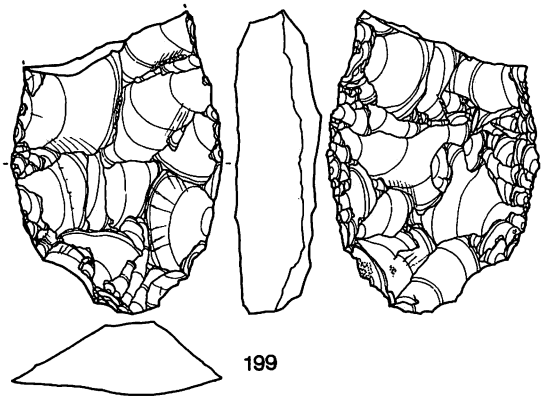


図Ⅲ－164　旧石器(16)・尖頭器接合

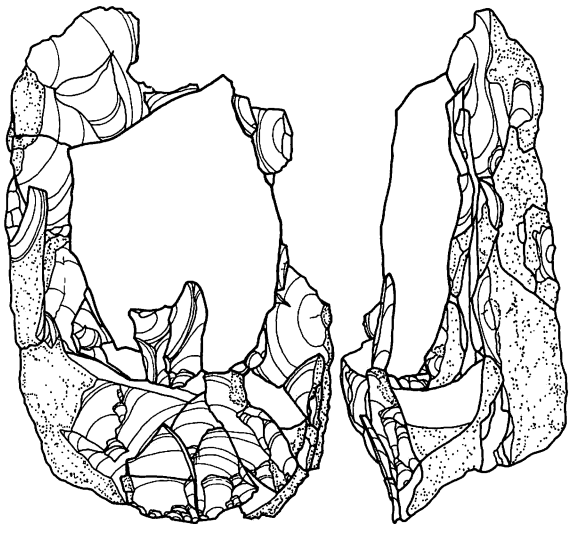


198

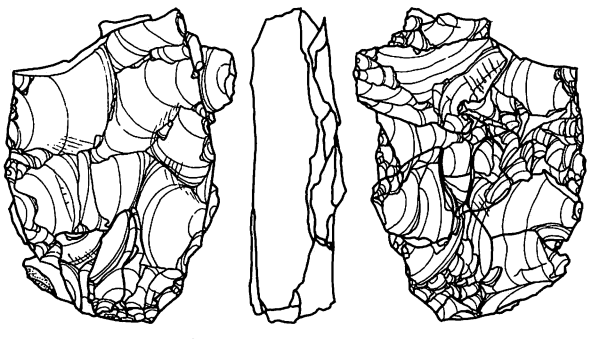




199



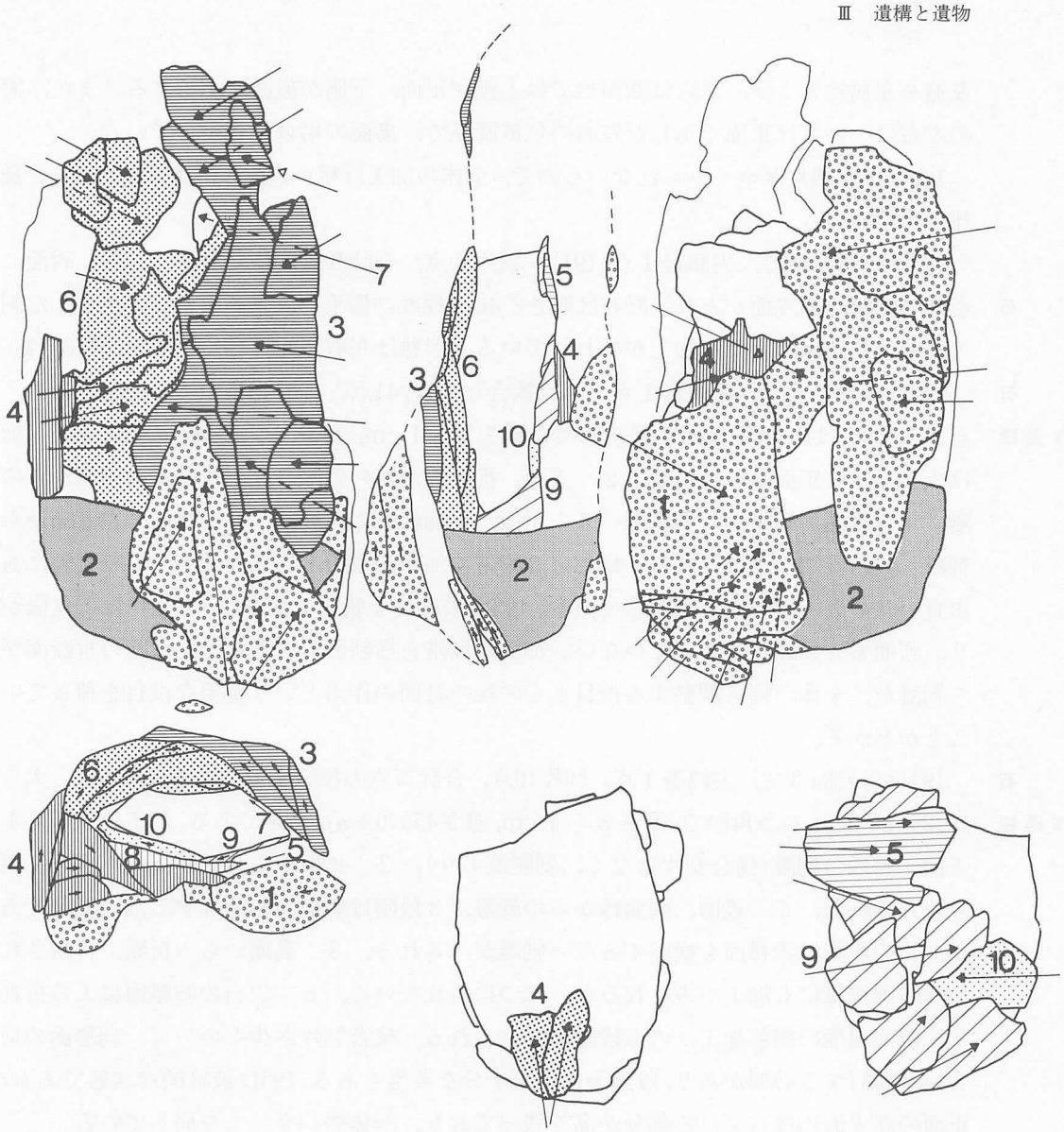
199-1



199-2



図Ⅲ－165　旧石器(17)・尖頭器接合



図Ⅲ－166　旧石器(18)・尖頭器接合

れた段階で放棄されている。3回の折れの状況はいずれも同じで，両側縁が三角形にはじけている。182～188は縦長剝片であるが，部分的に細かな剝離痕がみられる。167，179，180は黒曜石，188はめのう質頁岩，他は頁岩である。頁岩のうち163，165は母岩No.25，173は母岩No.26，178は母岩No.29である。　縦長剝片

尖頭器・尖頭器接合資料（図Ⅲ－161～167，図版72～74）　189～201はすべてめのう質頁岩で，192，194，196，198，200は尖頭器とその製作段階の剝片が接合し，原石の状態までほぼ復元できたものである。製作の過程は，断面の観察にもとずきいくつかの段階を設定し，略図を示した。しかし，その段階はすべての資料に共通するものではなく，資料間で状況が異なる場合がある。例えば，ある資料では加撃方向の異なるいくつかの剝離群を一段階としているが，他の資料では同一の加撃方向の剝離群を一段階として設定している。したがって，加撃方向の相違を重視すれば，一つの段階がさらに細分される可能性がある。段階の細分については，製作過程の類型化などと共に今後の課題としたい。　段階設定

製作過程の説明にあたっては，尖頭器の断面形を重視し，山形に突出している面を正面（実測図の正面），比較的平坦な面を裏面（実測図の裏面）とし，向かって右側を右側縁，

左側を左側縁とよび，さらに断面形では上側が正面，下側が裏面に相当する。また，側縁の左右については正面で示した左右の位置関係で，裏面の場合も説明している。

189は接合剥片が全くみられないもので，全体の加工は粗い。長さに比べ幅が広く，長幅比は1.8である。

190は母岩No.23で，尖頭器1点(191)，剥片8点，合計9点の接合資料である。両面に白色の珪藻質の礫皮面があり，原石は厚さ2.4cm程度の偏平な礫とみられる。接合した剥片の剥離後に周縁の細かな加工が行われている。形態は左右非対称で，長幅比は1.8である。

原　石

原　石
製作過程

192は母岩No.6で，尖頭器1点（2点接合），剥片41点，合計43歩の接合資料である。原石は，大きさ11.5×7.8cmの長方形で，厚さ3～4 cm，重さ315.4＋αgの礫である。加工は大きく1：正面からの折断　2：正面，折断面からの剥離　3：正面，両側縁からの剥離　4：裏面，周縁からの剥離　5：正面，両側縁からの剥離　6：裏面，左側縁からの剥離，の六段階に分けられる。折れは6段階の加撃が原因とみられるが，原石裏面にある虫食い状の3ヵ所の穴も影響している。193は最終的な状態であるが，裏面には礫皮面が残り，断面もレンズ状になっていない。加工の段階を横断面でみると，2段階の折断面からの剥離が，全体の幅を調整する役目とその後の打面の作出という重要な役目を荷っていたことがわかる。

原　石
製作過程

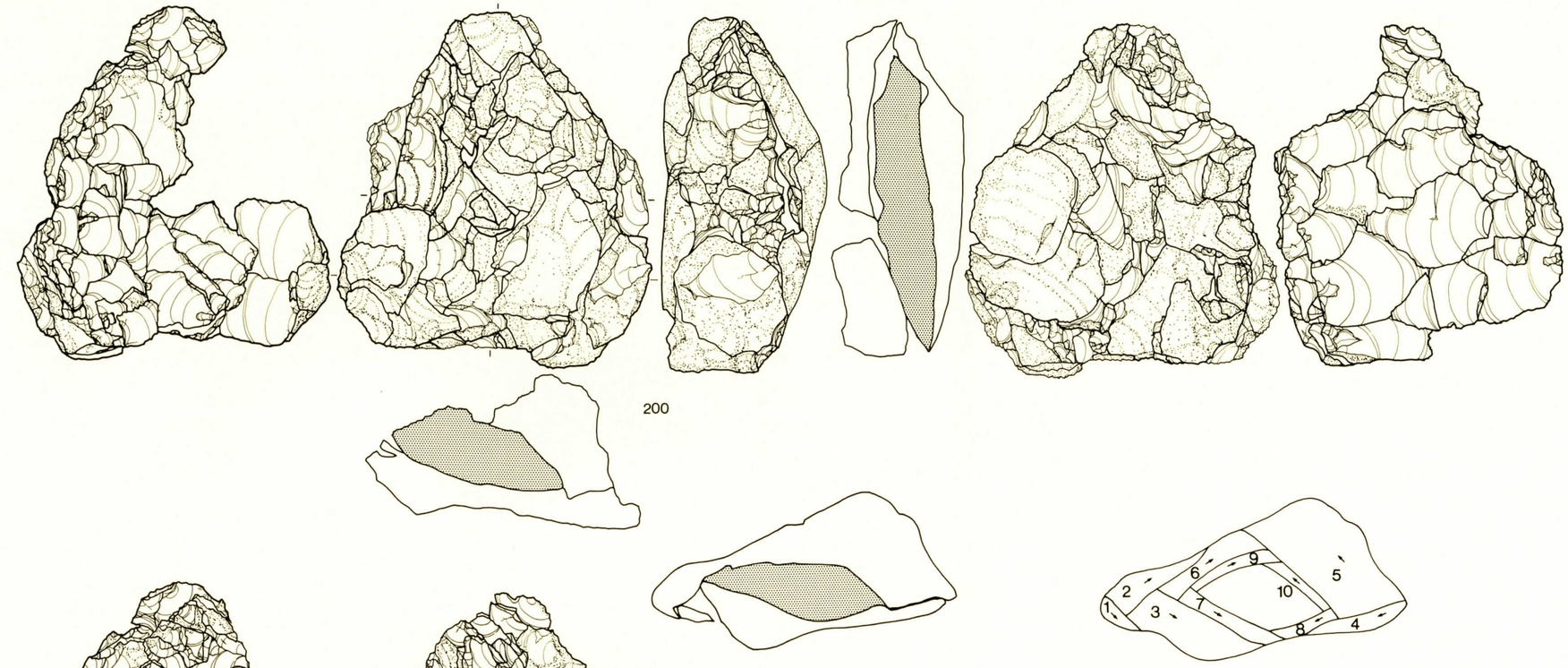
194は母岩No.3で，尖頭器1点，剥片16点，合計17点の接合資料である。原石は，大きさ13.2×11.5cmの多角形で，厚さ3～4 cm，重さ450.0＋αgの礫である。加工は大きく1：正面，周縁の剥離(接合剥片はなく，剥離痕あり)，2：正面からの折断，3：裏面，両側縁からの剥離，4：裏面，両側縁からの剥離，3段階は礫皮面を除去する浅い剥離であるが，この段階は素材面を横断する深い剥離がみられる，5：裏面からの折断，折断された剥片の両側縁にも加工がみられるが，二つに折れている，6：岩石の剥離面による折れ，7：両面周縁の細部加工，の七段階に分けられる。接合剥片が少ないので，剥離面の切り会いも検討する必要があり，段階分けは不十分な要素もある。195は最終的な状態であるが，正面の礫皮面の残っている部分が高く残っており，全体のバランスを崩している。

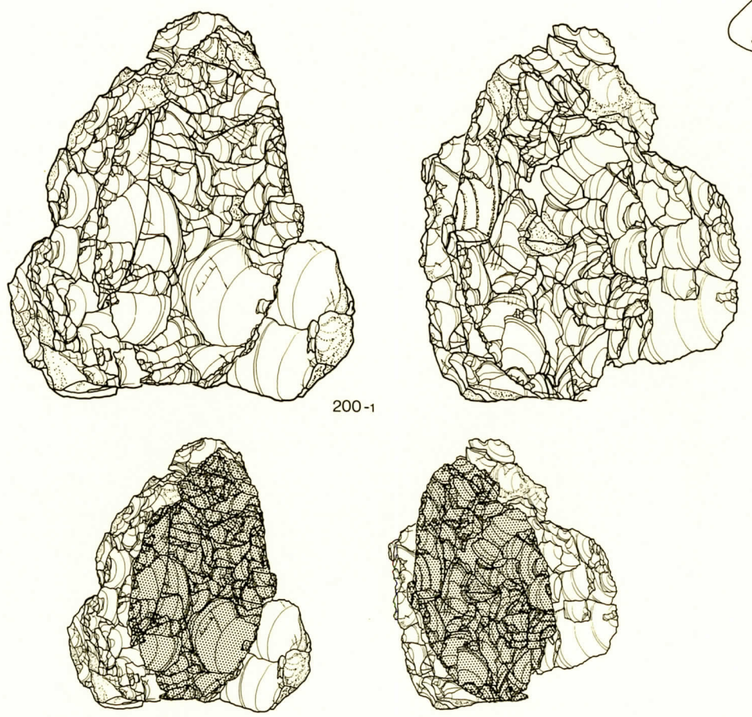
原　石
製作過程

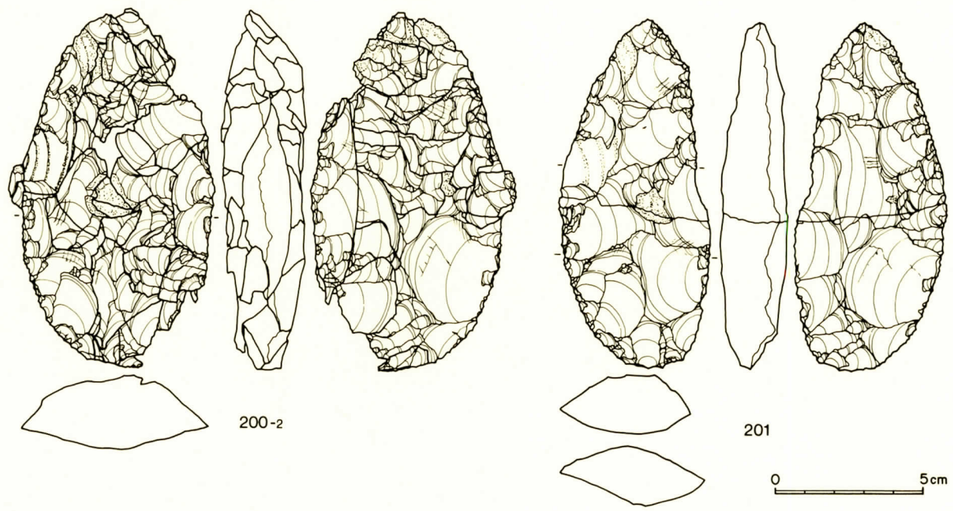
196は母岩No.14で，尖頭器1点，剥片35点，合計36点の接合資料である。原石は，大きさ12.2×13.1cmの三角形で，厚さは3～4 cm，重さ340.9＋αgの礫である。加工は大きく1：裏面からの折断，その際，岩石の剥離面からの剥離がみられ，原石の厚味がなくなっている，剥離したものの一部が接合，2：正面，周縁からの剥離，礫皮面の風化したもろい部分の除去，3：裏面，両側縁からの剥離，左側縁の打面は1段階の折断面を利用している，4：正面，周縁の剥離，折れ，周縁の剥離，全体の形状から折れは意図的ではなく，偶発的なものとみられ，その後折れ面に沿った剥離が行われ，さらに折れている，の四段階に分けられる。197は最終的な状態で，断面はレンズ形に近くなっているが，厚みがある。全体のバランスは良いが長さが十分確保できない状況になったので放棄されたのであろう。

原　石
製作過程

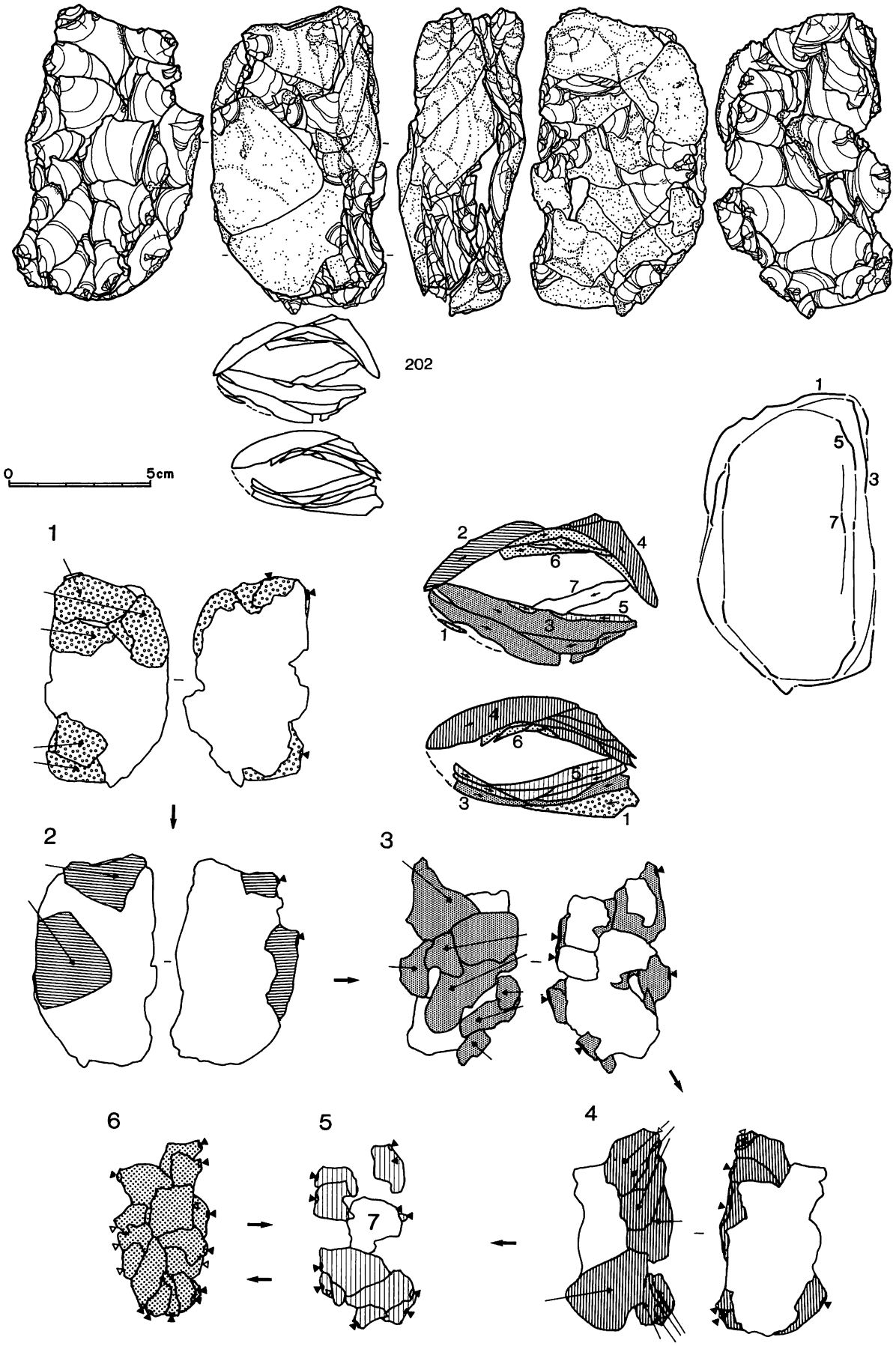
198は母岩No.4で，尖頭器1点，剥片62点，合計63点の接合資料である。原石は，大きさ15.7×8.7cm，厚さ4～6.5cm，重さ667.3＋αgの角柱状の礫である。加工は大きく，1：両面，周縁からの突出部の剥離，2：正面からの折断，3：正面，右側縁からの剥離，4：裏面から正面への剥離・打面形成，裏面，左側縁からの剥離，5：裏面，右側縁からの剥離，6：正面，左側縁からの剥離，7：正面，右側縁からの剥離，8：裏面，左側縁からの剥離，9：裏面，右側縁からの剥離，10：裏面，左側縁からの剥離，の十段階に分けら



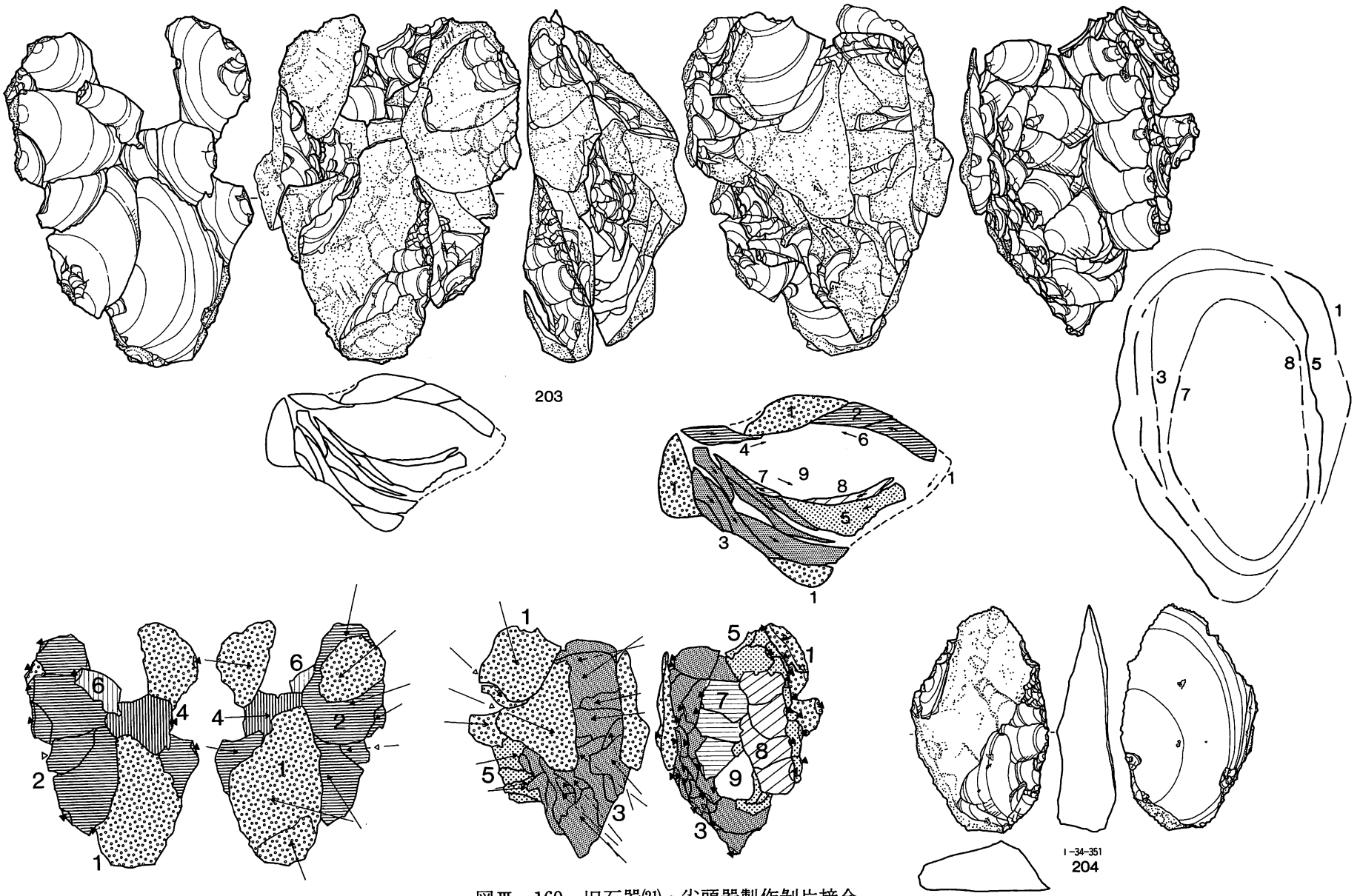




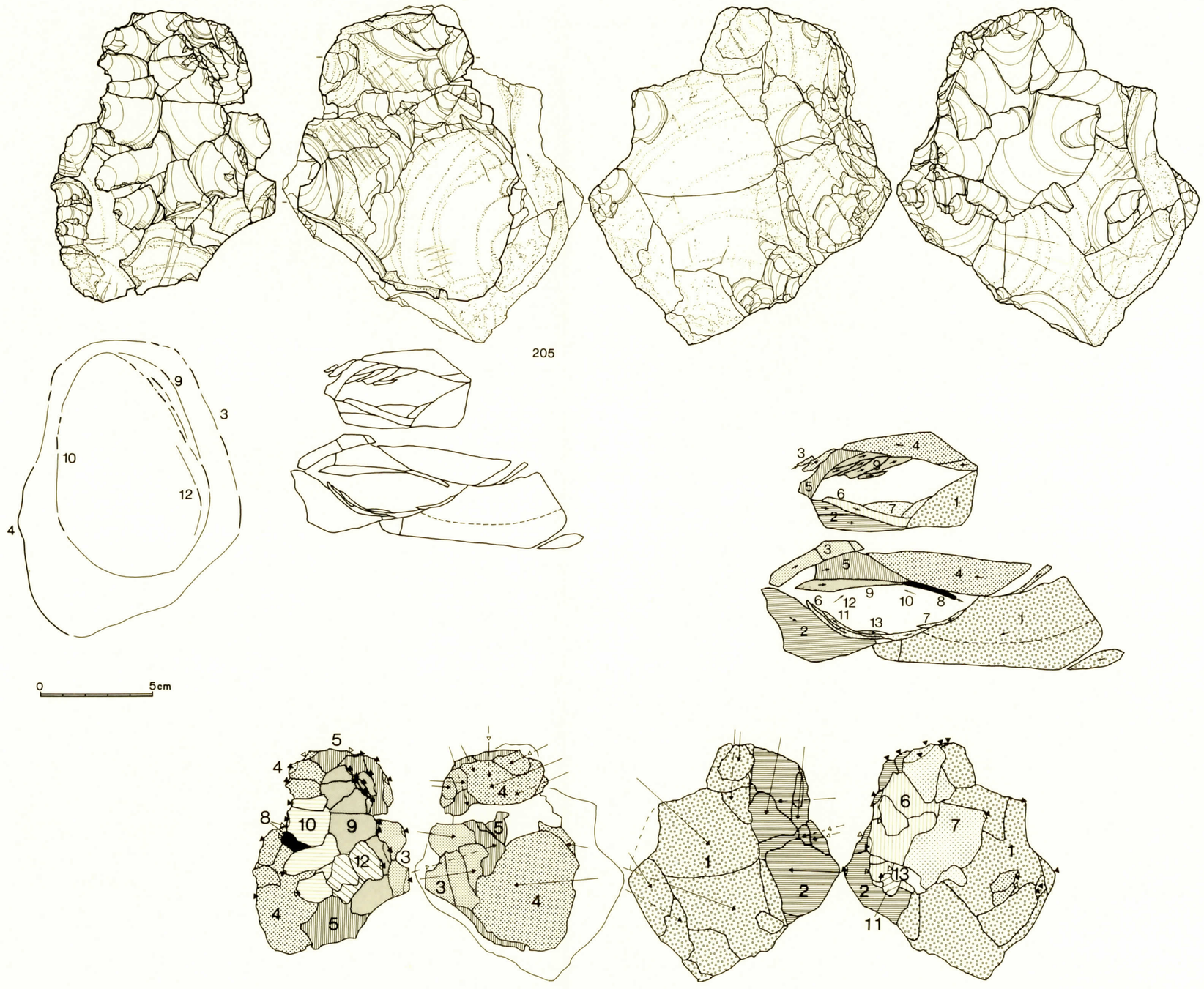
図Ⅲ－167　旧石器(19)・尖頭器接合



図Ⅲ－168　旧石器⑳・尖頭器製作剝片接合



図Ⅲ－169　旧石器(21)・尖頭器製作剥片接合



図Ⅲ－170　旧石器(22)・尖頭器製作剝片接合

れる。１段階の突出部の除去によって，断面が長方形に近くなり，その後の剥離の打面が確保されている。199は最終的な状態であるが，横断面は三角形に近く厚味がある。

200は母岩No.４で，尖頭器１点（２点接合），剥片159点，合計161点の接合資料である。原石は，大きさ13.4×11.3cmの三角形に近く，厚さ３～６cm，重さ698.7＋αgの礫である。この資料は調整剥片が多数接合し，加工の状況を細かく知ることができる。しかし，接合作業に手間どり，分離，断面実測の十分な時間が得られず，断面はブロックで，加工の状況は断面の模式図でのみ示した。機会を改めて検討したいと考えている。加工の状況は大まかにみて，当初は両面の礫皮面を除去し，断面をレンズ形に近づけ，ある程度進んだ段階で，面単位での剥離を進行させている。200－２の段階では比較的形態の整った幅広のやり先形の尖頭器となっているが，さらに幅，厚味を減じるため作業を進めている。200－２から201への過程では右側縁の折れ，意図的か，偶発的かは不明，が重要で，その折れ面を打面にして剥離作業を進行させ，その過程で最終的に二つに折れ放棄している。折れの原因は，原石面からあった正面中央の珪藻質部分の弱さと思われる。

原　石

断面模式図

尖頭器製作剥片接合資料（図Ⅲ－168～171，図版75～77）　202，203，205は剥片のみの接合資料であるが，原石段階からの尖頭器製作の過程がほぼ復元できる。先に説明した192，194，196，198，200などのように尖頭器自体は存在せず，おそらく破損などの失敗がなく意図したものができあがり，遺跡から持ち出されたものと考えられる。

202は母岩No.２で，剥片65点が接合している。原石は，大きさ10.8×6.2cm，厚さ4.5cm，重さ190.6＋αgの小型の礫である。加工は大きく１：裏面，右側縁からの剥離，２：正面，左側縁からの剥離，３：裏面，周縁からの剥離，４：正面，周縁からの剥離，５：裏面，周縁からの剥離，６：正面，周縁からの剥離，７：裏面，左側縁からの剥離，の七段階に分けられる。４段までにほぼ礫皮面の除去が終了し，５段階以降は面単位で加工を施している。作られた尖頭器は長さ10cm前後，幅４cm前後，厚さ２cm前後と推定できる。

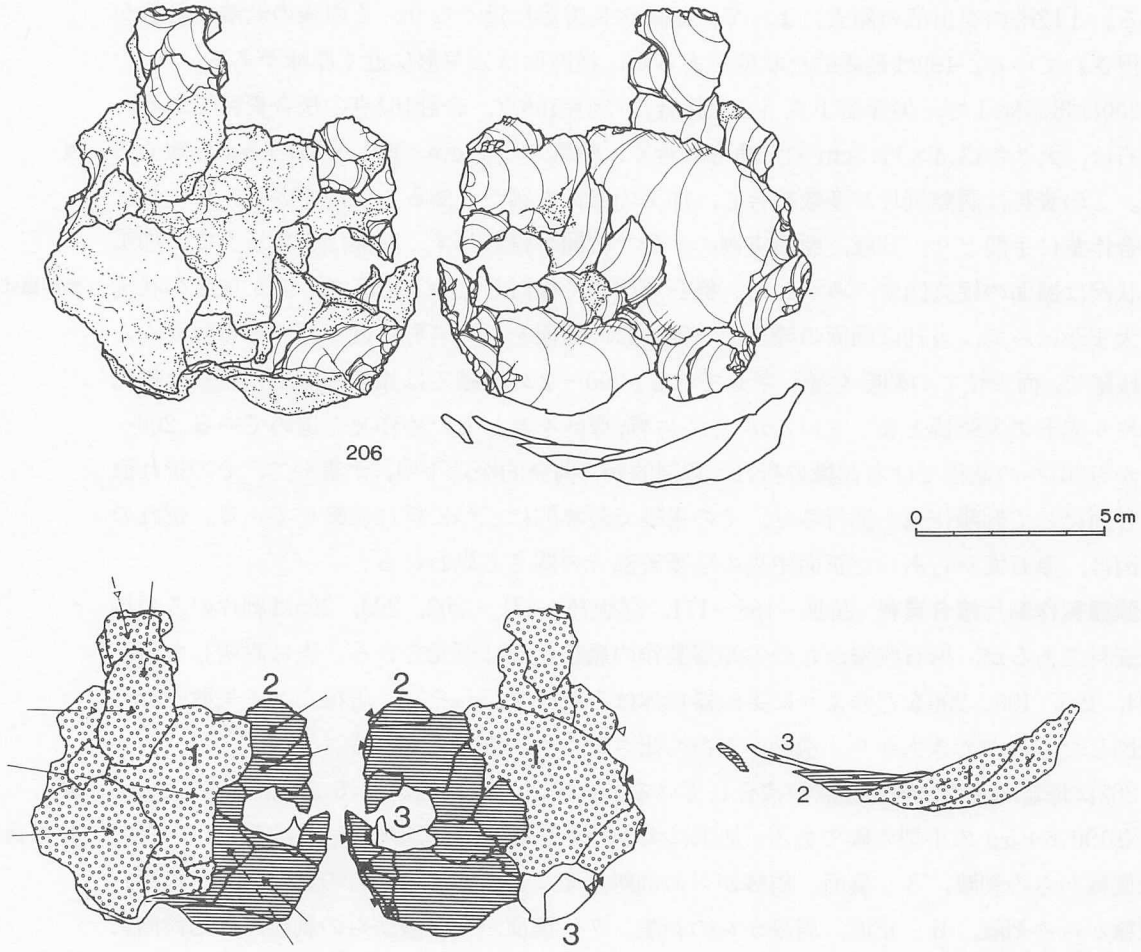
原　石
製作過程

203は母岩No.16で，剥片62点が接合している。剥片のうち１点には加工が施され，尖頭器状になっている(204)。原石は，大きさ12.6×9.6cm，厚さ６cm前後，重さ327.2＋αgの礫である。加工は大きく１：両面および両側縁の突出部の剥離，打面の確保，２：正面，両側縁からの剥離，３：裏面，左側縁からの剥離，４：正面，左側縁からの剥離，５：裏面，右側縁からの剥離，６：正面，右側縁からの剥離，７：裏面，左側縁からの剥離，８：裏面，右側縁からの剥離，９：裏面，左側縁からの剥離，の九段階に分けることができる。当初は１段階の突出部の剥離で確保された面を打面にして礫皮面の除去を行い，次に面単位で周縁から加工を施している。作られた尖頭器は長さ９～10cm，幅５cm前後，厚さ２～３cmと推定できる。また，204は１段階で剥離された厚味のある剥片を利用し，若干の加工を施したものである。

原　石
製作過程

205は母岩No.11で，剥片78点が接合している。原石は，15.2×13.5cm，厚さ５cm前後，重さ735.0＋αgの偏平な角張った礫である。加工は大きく１：裏面，右側縁からの剥離，岩石の剥離面で不規則な割れが生じている，２：裏面，左側縁からの剥離，３：正面，左側縁からの剥離，４：正面，右側縁からの剥離，５：正面，左側縁からの剥離，６：裏面，左側縁からの剥離，７：裏面，右側縁からの剥離，８：正面，右側縁からの剥離，９：正面，左側縁からの剥離，10：正面，右側縁からの剥離，11，裏面，左側縁からの剥離，12：正面，左側縁からの剥離，13：裏面，左側縁からの剥離，の十三段階に分けられる。５段

原　石
製作過程



図Ⅲ－171　旧石器(23)・尖頭器製作剥片接合

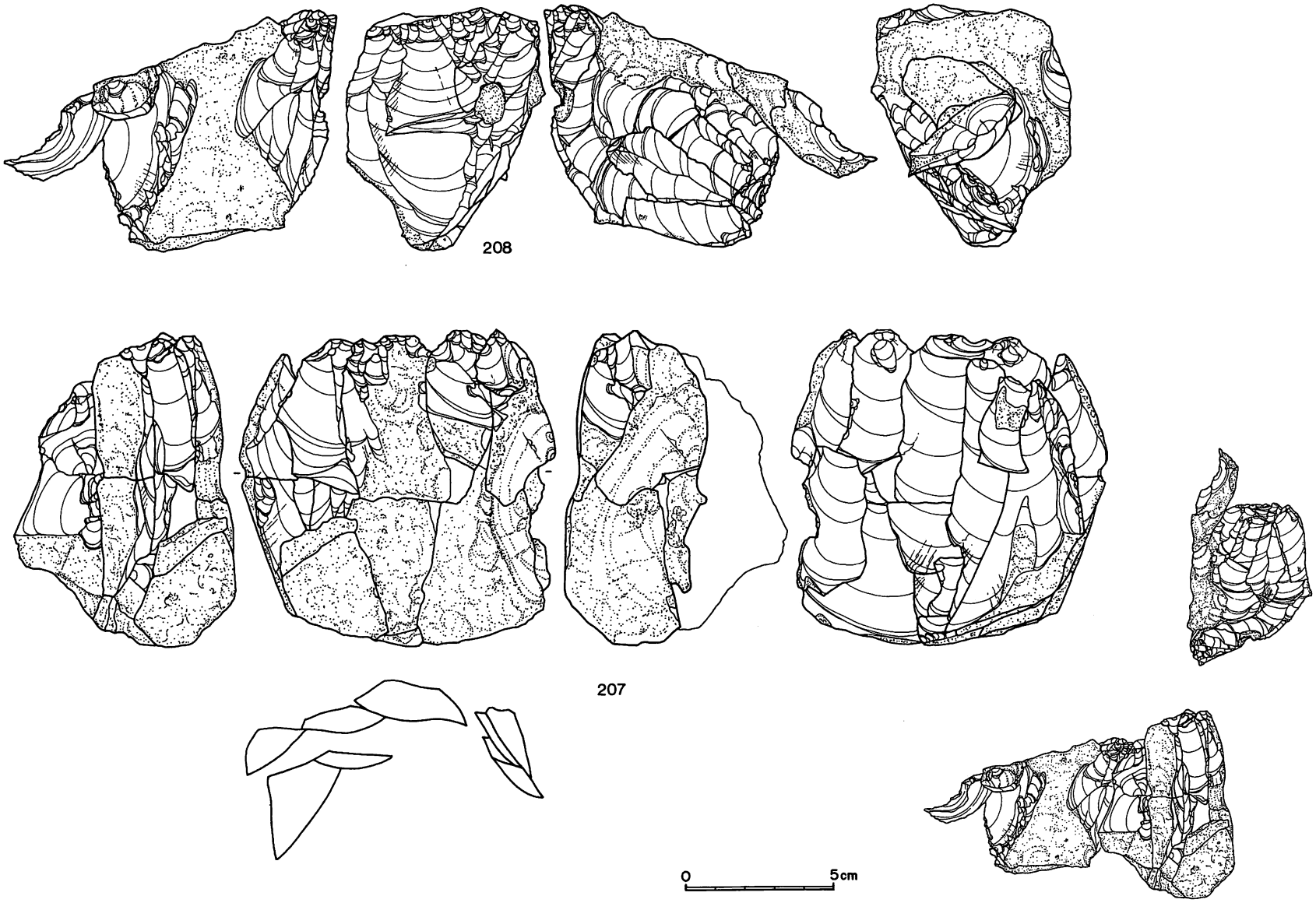
階までに礫皮面の除去が終了し，横断面がレンズ形に近づき，6段階以降は面単位で加工が施されている。作られた尖頭器は長さ10cm前後，幅6 cm前後，厚さ2 cm前後と推定できる。

206は母岩No.19で，剥片22点が接合している。母岩19の剥片はこの他に21点あるが，原石段階までの復元はできない。206は片面の加工状況を示すもので，側縁からの剥離が三段階みられる。

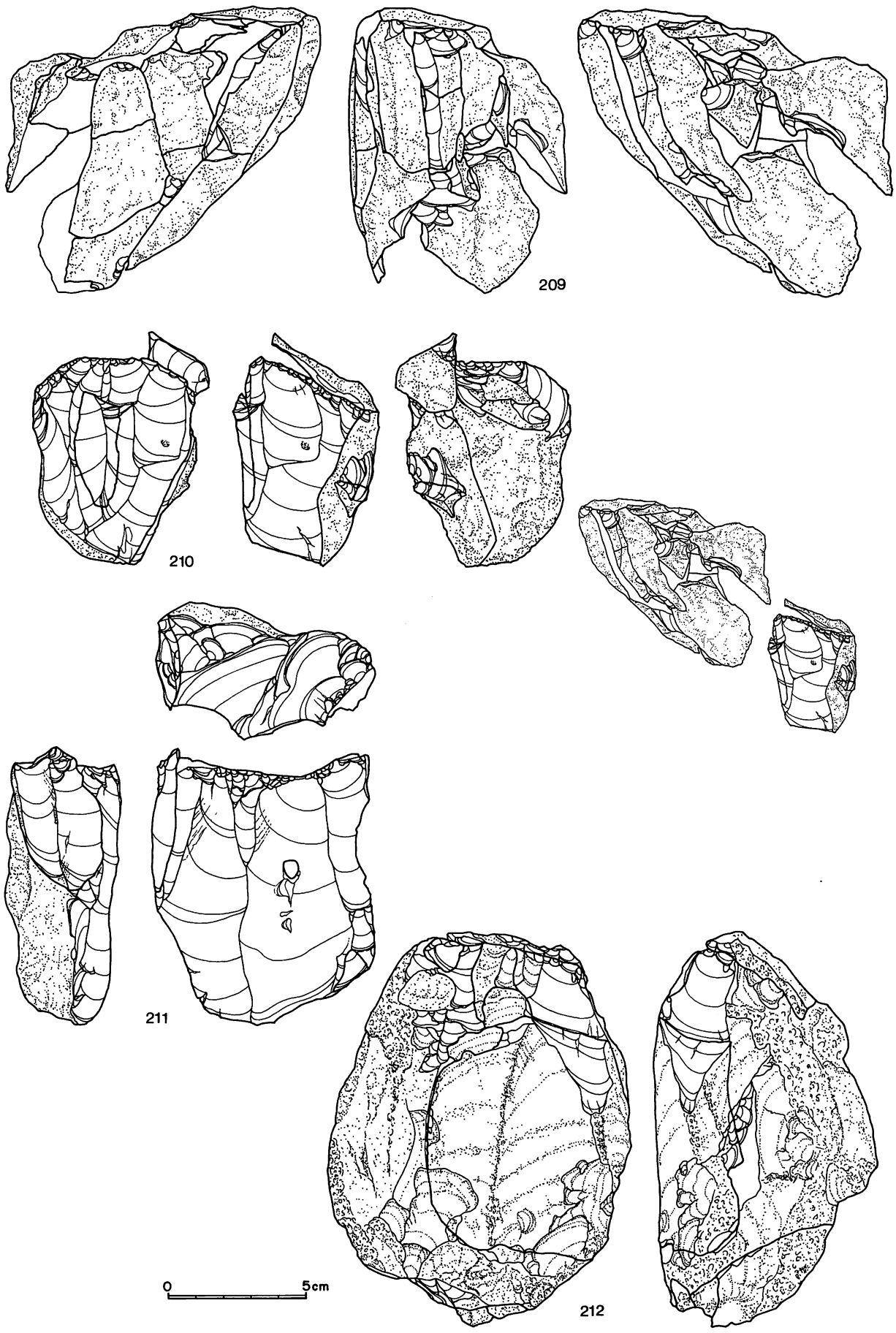
221は写真のみ示したが，大きさ19.5×11.5×6.2cmの大型の礫をいくつかに折断し，尖頭器を製作していると思われる。残っている破片の中に，両面加工を意図しているとみられるものが1点ある。

縦長剥片・石核接合資料（図Ⅲ－172～174，図版78～80）　207～214はいずれもめのう質頁岩製である。207と208は接合しないが，同一母岩（No.8）で，207は208は前面に位置するとみられ，207は15点，208は8点接合している。最終的に208の石核は作業面を90°転移している。図示はしていないが，母岩No.8では207以外にも縦長剥片が3点接合しているものが2例あるが，207同様折れているものが多い。

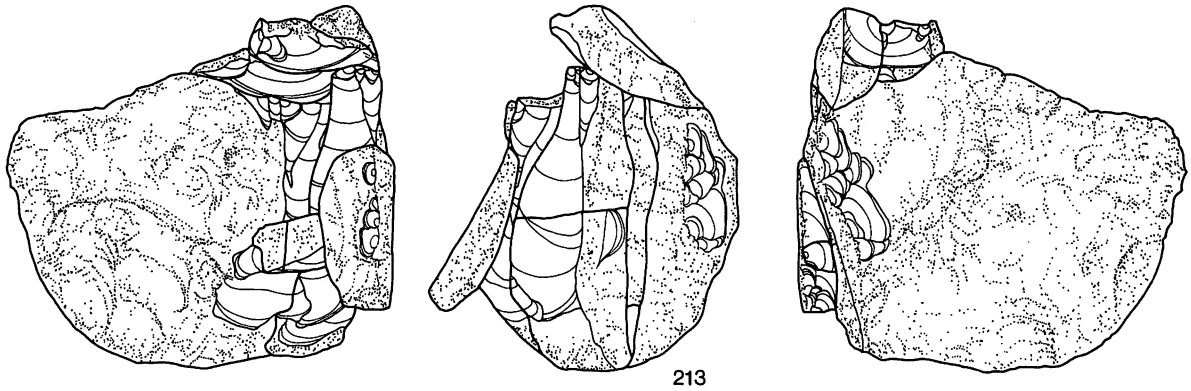
209と210は接合しないが，同一母岩（No.20）で，209は210の前面に位置するとみられ，209は31点，210は6点接合している。209は打面形成，再生剥片と縦長剥片が接合しているが，これらの大部分は礫皮面があり，中央部分は抜けているものが多い。

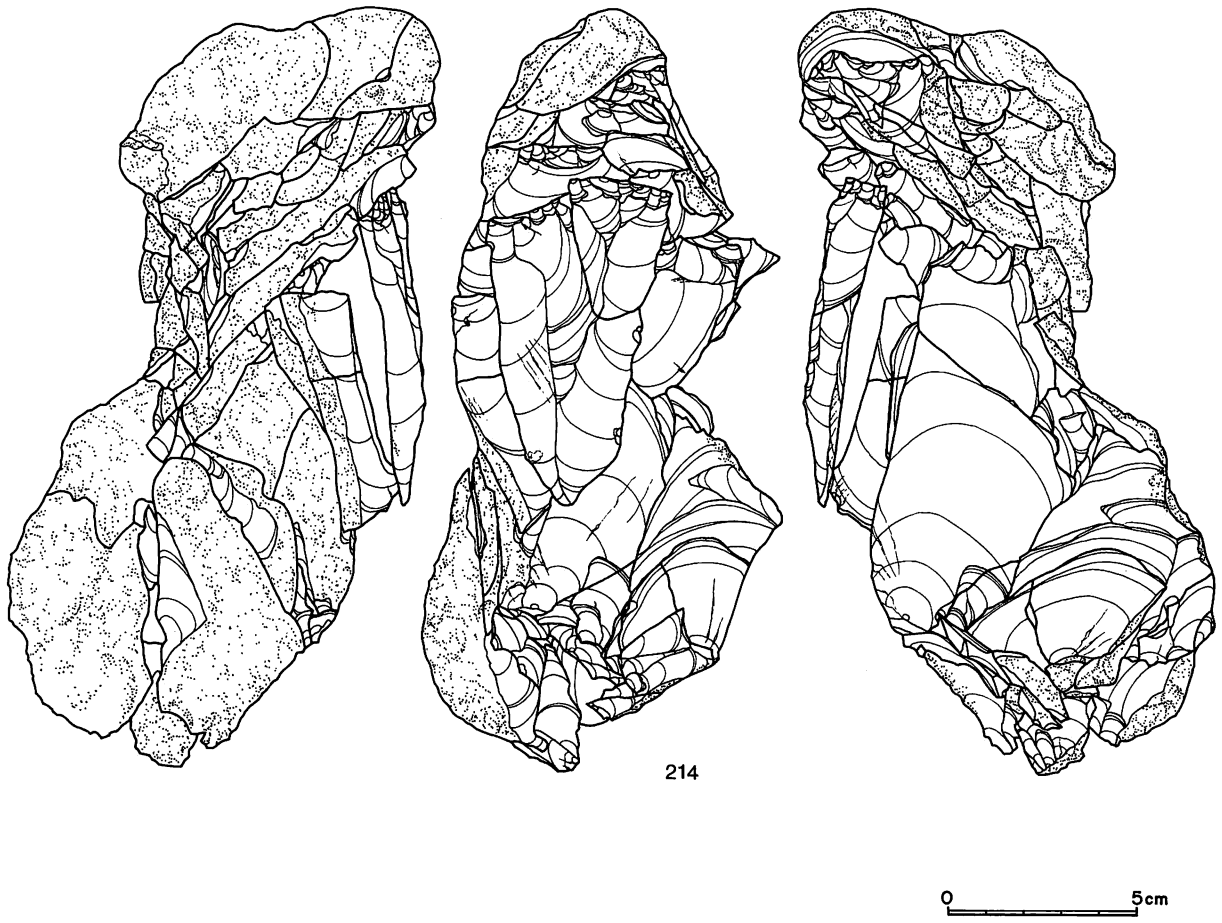


図Ⅲ－172　旧石器(24)・縦長剝片・石核接合

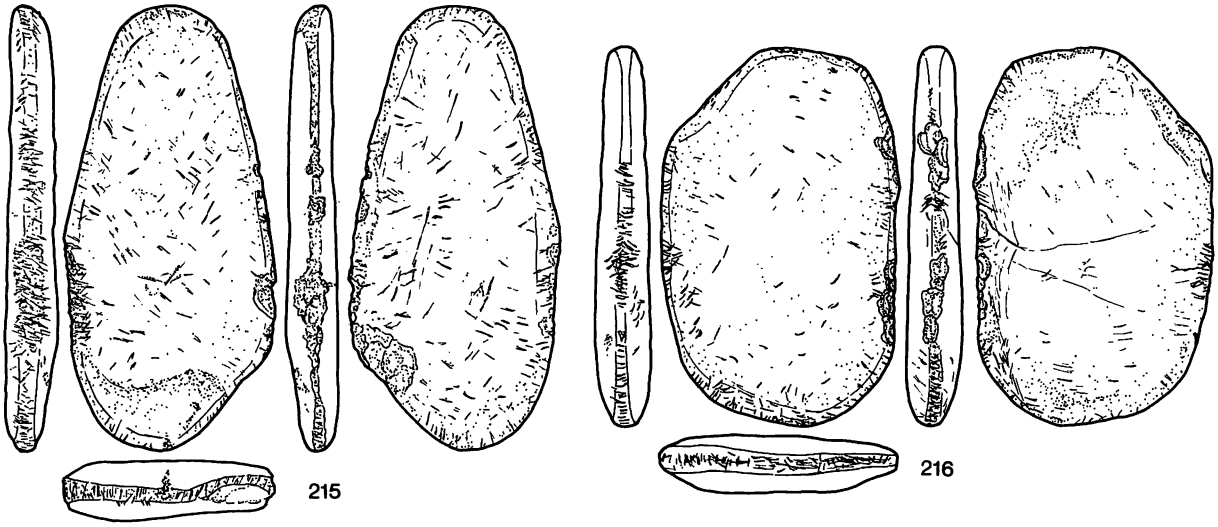


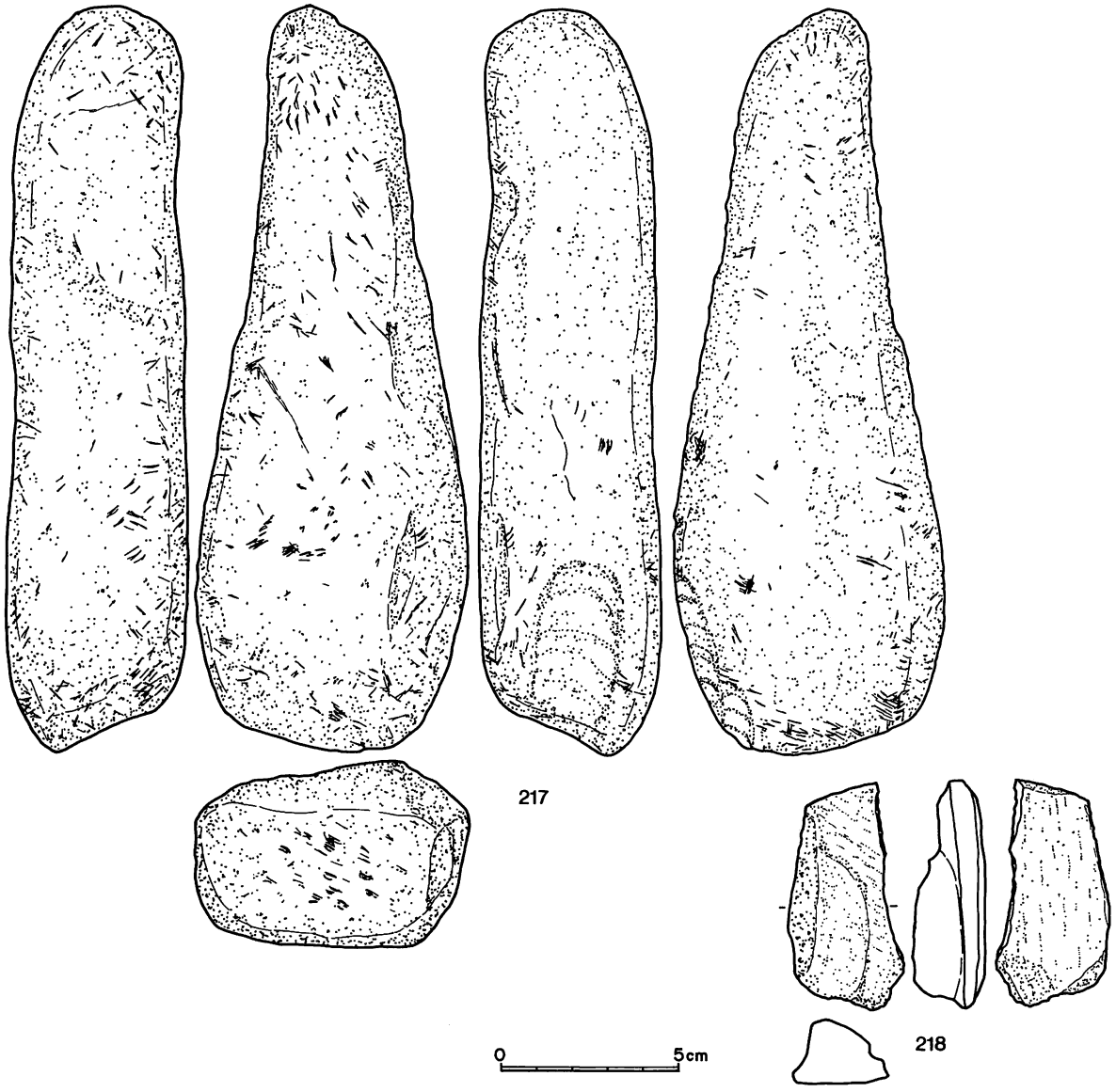
図Ⅲ－173　旧石器(25)・縦長剥片・石核接合



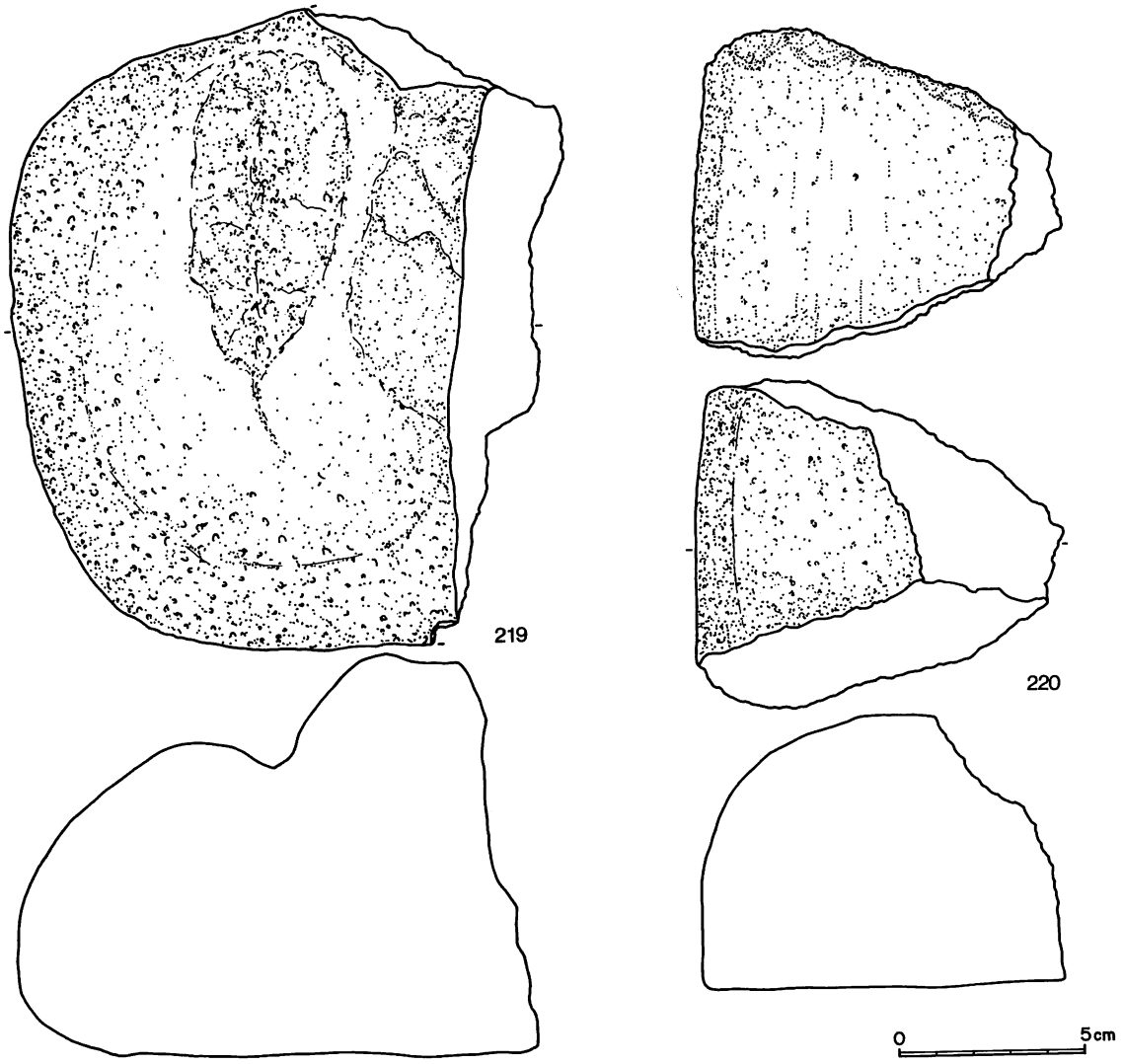


図Ⅲ－174　旧石器(26)・縦長剝片・石核接合





図Ⅲ－175　旧石器(27)・礫石器



図Ⅲ－176　旧石器(28)・礫石器

211は母岩No.24の石核で，剥片が1点接合している。同一母岩の剥片は他に131点あるが，部分的に接合するだけで，母岩全体の状況は不明である。

212は母岩No.10で，石核1点に剥片が8点接合している。原石は，大きさ14.4×11.0×8.2cm，重さ1,185gの円礫である。上下に打面形成の剥片が接合し，さらに上からの加撃による剥片が接合している。　原　石

213は母岩No.9で，石核1点，縦長剥片3点，剥片5点が接合している。原石は大きさ9.6×8.2×10.3cm，重さ615＋αgの円礫である。打面作出後，縦長剥片の剥離を行っているが，打面再生時に剥離が階段状になり，放棄されたものとみられる。　原　石

214は母岩No.15で，剥片が70点接合している。原石は柱状の大型礫と思われ，礫皮面に近い部分には白い珪藻質の部分が多い。打面形成，再生剥片と縦長剥片が接合し，石核はない。推定される石核は両設打面で断面が偏平なものである。　原　石

222，223，224は写真のみで示した母岩No.17，18，13のめのう質頁岩の石核，原石である。

礫石器（図Ⅲ－175，176，図版－75）　215～217は緑色泥岩製のストーン・リタッチャーである。215，216は偏平な楕円形の礫の両面および周縁に細かな擦痕と鼠歯状痕がみられる。　ストーン・リタッチャー

2点共特に側縁に深い痕跡があり，場所によっては側縁が完全に潰れている。217は215，216より風化が進んだ軟質の緑色泥岩で，細かな擦痕，鼠歯状痕がところどころにみられる。

砥　石　218は小型の砂岩製の砥石で，両面に砥面がある。正面の砥面には弧状に段をなした部分が

台　石　みられる。219，220は安山岩製の台石で，共に破片である。219は原石のくぼみ部分がわずかに剝離している。220は大型のものの一部で下面が平らになっている。同一の台石と思われる小破片が他に9点ある。

(5) 石器ブロック

石器ブロックは7ヵ所（Sb－1～7）に区分した。それぞれについて分布状況（位置，広がり），石器の組成，石材の特質，接合状況などを説明する。

Sb－1

分布（図Ⅲ－177）　O－28に位置し，広がりは小さい。それは，住居跡H－5など縄文時代の遺構で周囲のローム層が掘り上げられていたためと考えられる。また，東側の調査区域外にも広がっている可能性がある。

石器（図Ⅲ－177，表Ⅲ－2）　総数18点，両面調整石器1点，彫器2点，掻器1点，削器6点，剝片7点，削片1点で，その重量は330.6gである。これらのうち両面調整石器1点，掻器1点，削器1点は，周囲の縄文時代の遺構から出土しているもので，地点は確認できない。ブロック全体の状況は不明であるが，石器の比率が高い。

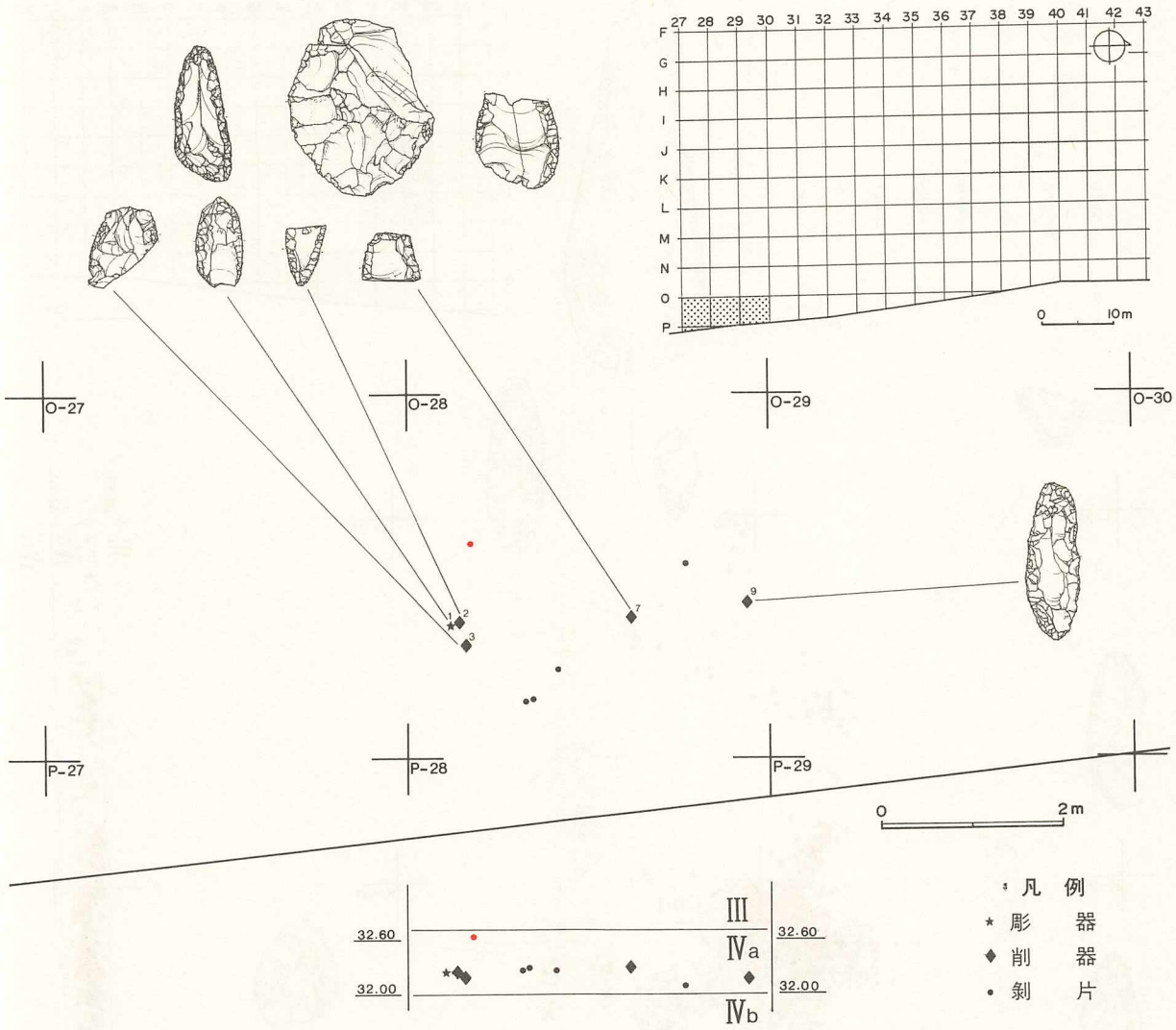
石材（表Ⅲ－2）　黒曜石の削器とめのうの削片が1点ずつあるだけで，他はすべて頁岩で

母岩No.29　ある。ポイントフレイクを素材とした削器（O－28－3）は母岩No.29の頁岩で，同一母岩の剝片はSb－2に多くみられる。

接合　接合資料はない。

表Ⅲ－2　Sb－1の石器組成

石材 ＼ 器種	石材										計	
	頁岩		めのう質頁岩		黒曜石		めのう		その他			
	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量
細石刃												
細石刃核												
尖頭器												
両面調整石器	1	179.8									1	179.8
彫器	2	11.4									2	11.4
錐形石器												
掻器	1	15.2									1	15.2
削器	5	73.9			1	21.2					6	95.1
縦長剝片												
石核												
ストーン・リタッチャー												
台石												
石器合計	9	280.3			1	21.2					10	301.5
剝片	7	28.7									7	28.7
砕片												
削片							1	0.4			1	0.4
礫												
剝片など合計	7	28.7					1	0.4			8	29.1
総合計	16	309.0			1	21.2	1	0.4			18	330.6



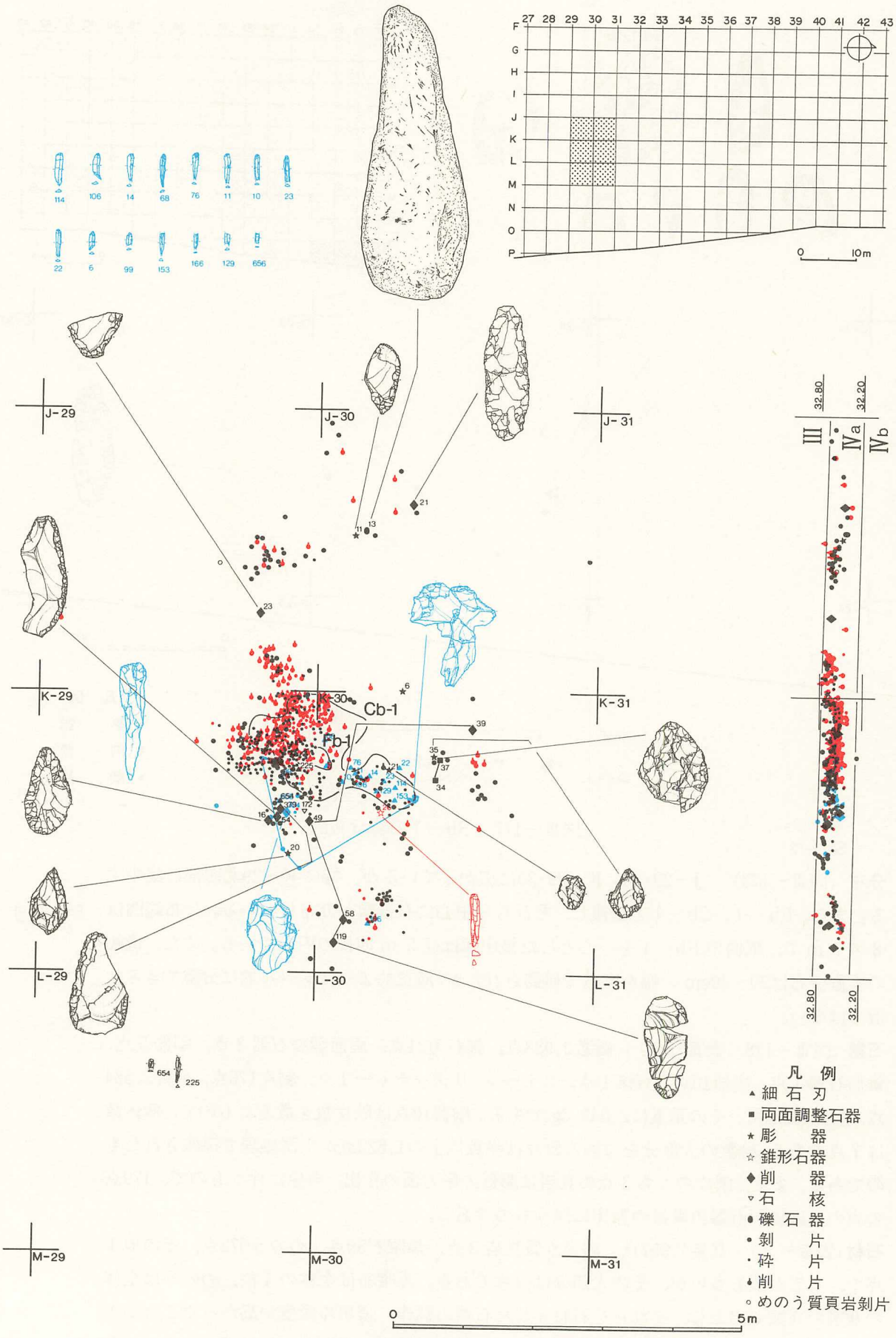
図Ⅲ－177　Sb－１石器分布図

Sb－２

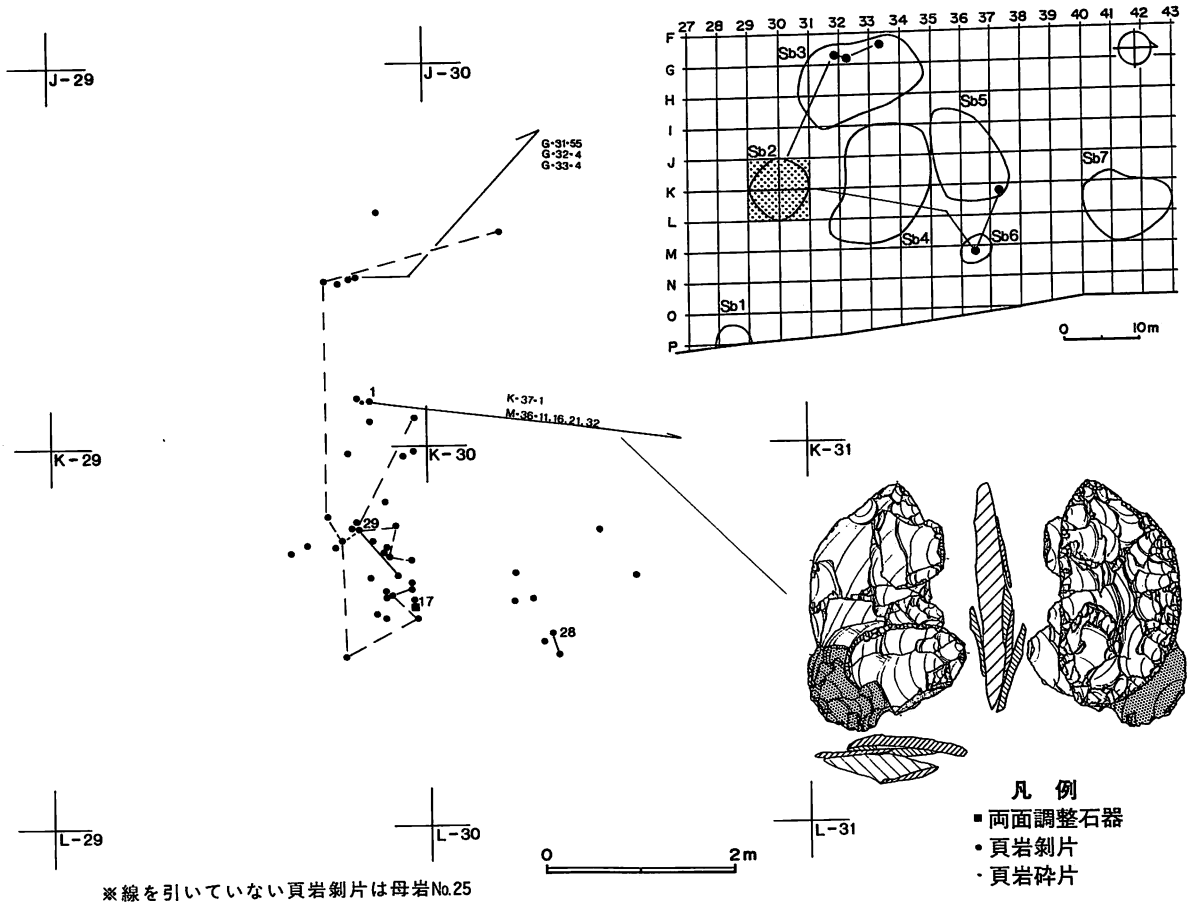
分布（図Ⅲ－178）　J－29･30，K－29･30に広がっているが，特にK－29北西部に集中する。また，Fb－１，Cb－１と重複し，それらを中心に石器類が分布している。分布範囲は８×７ｍで，東側のFb－１を中心とした集中域は径５ｍ前後の円形である。また，遺物の垂直分布は20～40cmの幅をもって確認されたが，層位的またはレベル的に分離できる状況ではない。　Fb-1･Cb-1

石器（図Ⅲ－178，表Ⅲ－３）　総数2,983点，細石刃21点，両面調整石器２点，彫器５点，錐形石器１点，削器10点，石核１点，ストーン･リタッチャー１点，剥片176点，砕片2,584点，削片182点で，その重量は2,049.3gである。削器10点は破片数を数えたもので，個体数は７点である。総数の大部分を占める砕片は半数以上の1,625点が水洗処理で採取されたものである。また，削片のうち３点の頁岩は彫器の彫刀面の作出，再生に伴うもので，179点のめのうは錐形石器の素材の製作に伴うものである。

石材（表Ⅲ－３）　頁岩1,957点，めのう質頁岩３点，黒曜石50点，めのう972点，その他１点で，頁岩が最も多いが，その大部分は砕片である。黒曜石は全体の４割，めのうは全体の９割の点数が出土し，それらを石材とした石器の製作，使用の頻度が高かったことが考えられる。また，頁岩の剥片，砕片類の中でも火を受けて，表面がはじけているものが多



図Ⅲ－178　Sb－2石器分布図



図Ⅲ－179　Sb－2石器接合図

くみられた。

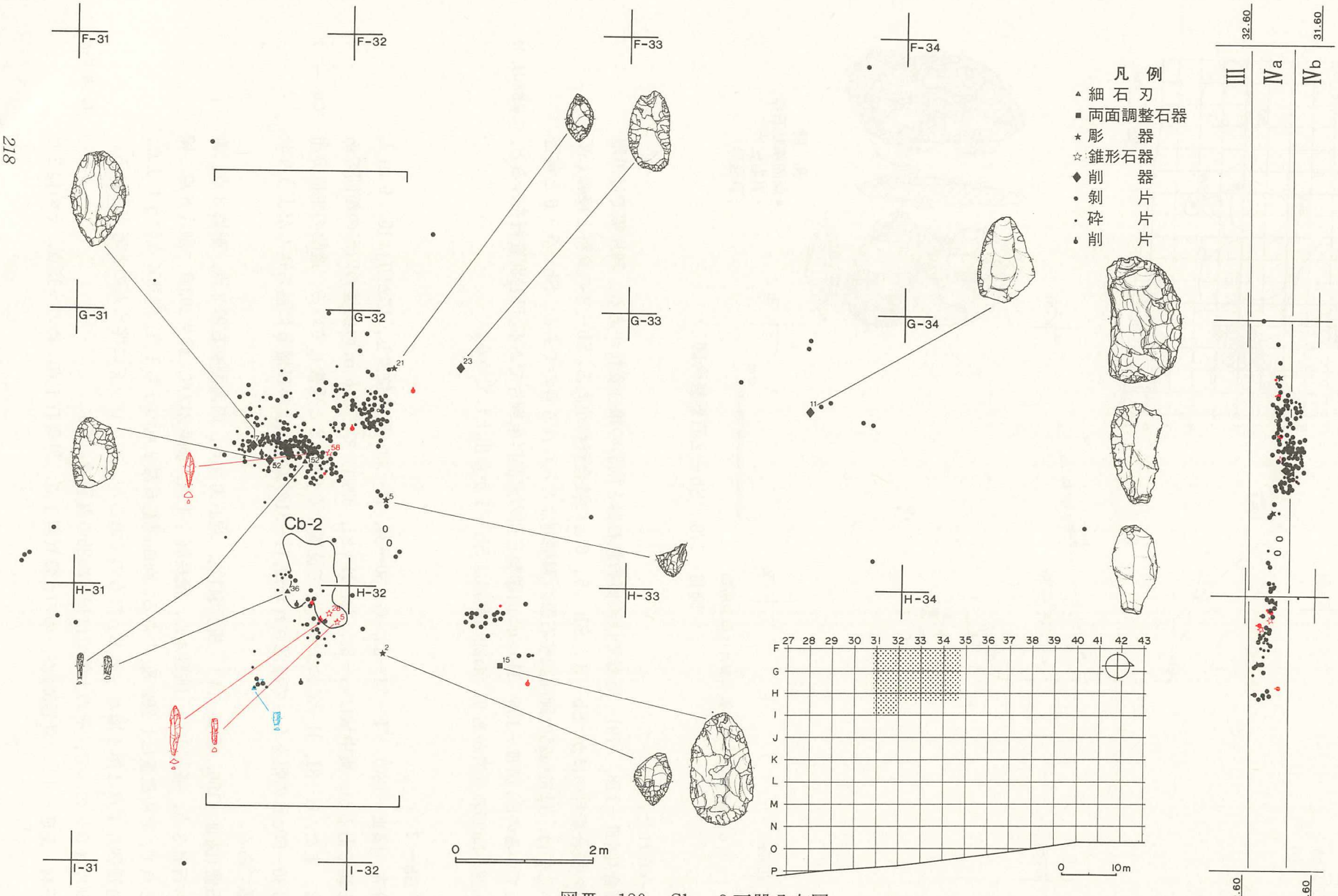
接合（図Ⅲ－178，179）　石器では両面調整石器と削器の接合資料がある。剝片類では黒曜石の接合資料のほか，Sb－3とSb－5，6との接合資料がある。Sb－3の資料と接合しているのは，母岩No.25の両面調整石器の調整剝片とみられるものである。Sb－5・6と接合しているのは，図Ⅲ－156－110の両面調整石器の刃部再生剝片である。母岩別資料をみると，No.28，No.29の頁岩があり，No.29の削器はSb－1から出土している。　母岩No.28，29

Sb－3

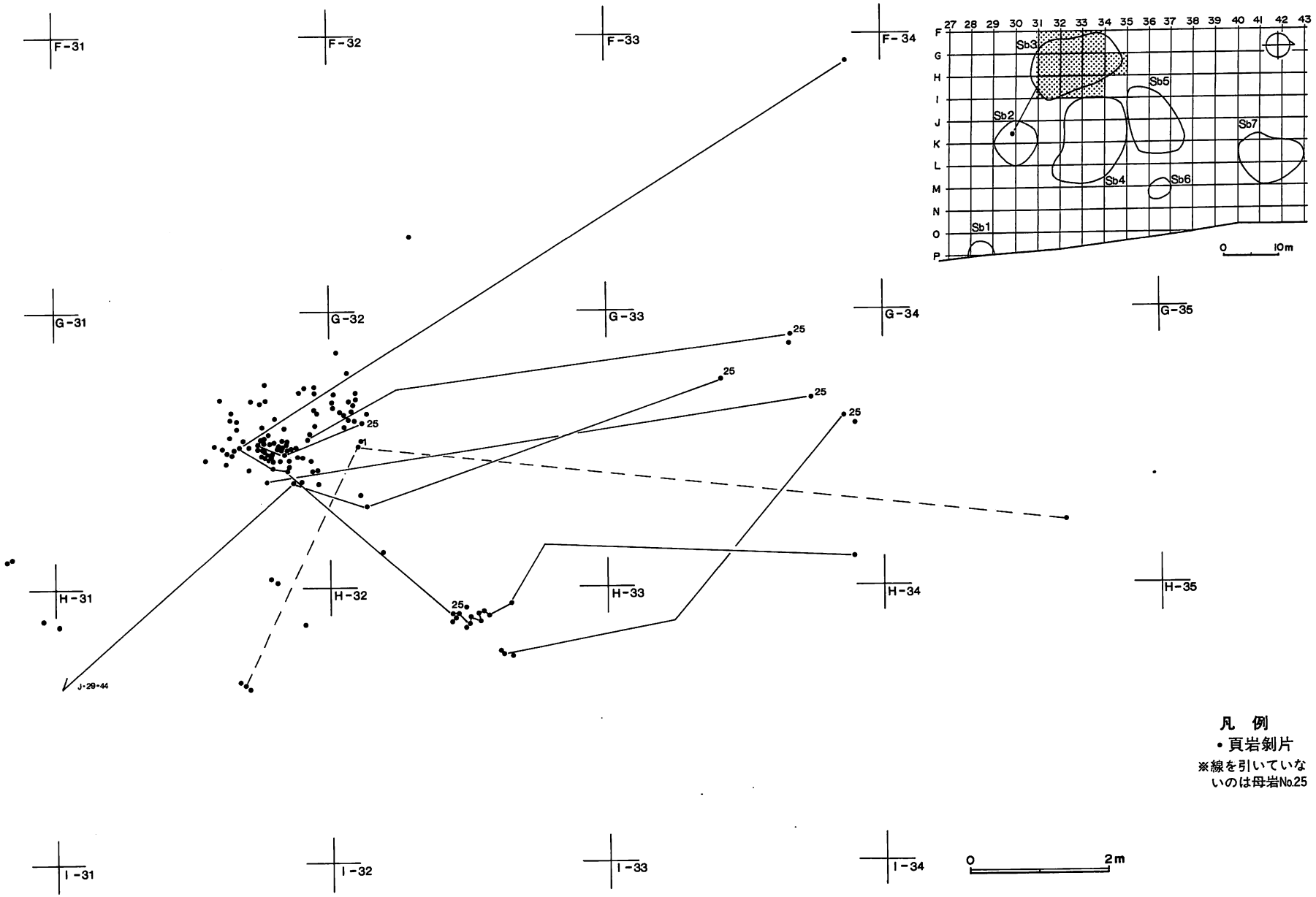
分布（図Ⅲ－180）　F－31～33，G－30～34，H－30～32に位置し，広がりは16×9mと広範であるが，集中域はG－31，32，H－31，32部分で，径6mの前後の円形の範囲である。また，G－31，H－31にまたがって位置するCb－2と重複している。遺物の垂直分布は30～50cmの幅をもって確認されたが，G－31の集中域は第Ⅳ層bに落ち込んだような状態である。　Cb－2

石器（図Ⅲ－180，表Ⅲ－4）　総数541点，細石刃3点，両面調整石器2点，彫器3点，錐形石器3点，掻器1点，削器4点，縦長剝片1点，剝片212点，砕片302点，削片8点，礫2点で，その重量は1,292.8gである。両面調整石器2点のうち1点，削器4点のうち1点，縦長剝片1点は第Ⅰ層から出土したものであるが，本ブロックに伴うものと考えられる。剝片は頁岩のみで，その大部分は母岩No.25の頁岩である。　母岩No.25

石材（表Ⅲ－4）　頁岩522点，めのう質頁岩1点，黒曜石1点，めのう15点，その他2点



図Ⅲ－180　Sb－3石器分布図



図Ⅲ－181　Sb－3石器接合図

表Ⅲ－3　Sb－2の石器組成

石材 / 器種	頁岩 点数	頁岩 重量	めのう質頁岩 点数	めのう質頁岩 重量	黒曜石 点数	黒曜石 重量	めのう 点数	めのう 重量	その他 点数	その他 重量	計 点数	計 重量
細石刃	2	△			19	1.2					21	1.2
細石刃核												
尖頭器												
両面調整石器	2	31.9									2	31.9
彫器	5	26.0									5	26.0
錐形石器							1	1.1			1	1.1
掻器												
削器	9	146.4			1	10.4					10	156.8
縦長剝片												
石核			1	290.0							1	290.0
ストーン・リタッチャー									1	1,080.0	1	1,080.0
台石												
石器合計	18	204.3	1	290.0	20	11.6	1	1.1	1	1,080.0	41	1,587.0
剝片	158	275.3	2	0.9	9	35.7	7	2.6			176	314.5
砕片	1,778	57.5			21	0.8	785	28.0			2,584	36.3
削片	3	0.4					179	61.1			182	61.5
礫												
剝片など合計	1,939	333.2	2	0.9	30	36.5	971	91.7			2,942	462.3
総合計	1,957	537.5	3	290.9	50	48.1	972	92.8	1	1,080.0	2,983	2,049.3

表Ⅲ－4　Sb－3の石器組成

石材 / 器種	頁岩 点数	頁岩 重量	めのう質頁岩 点数	めのう質頁岩 重量	黒曜石 点数	黒曜石 重量	めのう 点数	めのう 重量	その他 点数	その他 重量	計 点数	計 重量
細石刃	2	0.3			1	△					3	0.3
細石刃核												
尖頭器												
両面調整石器	2	132.7									2	132.7
彫器	3	12.0									3	12.0
錐形石器							3	1.8			3	1.8
掻器	1	18.2									1	18.2
削器	4	77.3									4	77.3
縦長剝片	1	17.9									1	17.9
石核												
ストーン・リタッチャー												
台石												
石器合計	13	258.4			1	△	3	1.8			17	260.2
剝片	212	533.8									212	533.8
砕片	294	29.1	1	0.2			7	0.5			302	29.8
削片	3	0.5					5	1.4			8	1.9
礫									2	467.1	2	467.1
剝片など合計	509	563.4	1	0.2			12	1.9	2	467.1	524	1,032.6
総合計	522	821.8	1	0.2	1	△	15	3.7	2	467.1	541	1,292.8

母岩No.25　で，頁岩が大部分である。先にも述べたが頁岩の大半は母岩No.25の頁岩である。

接合（図Ⅲ－181）　母岩No.25の剝片の接合がブロック内およびSb－2との間でみられ，それ

母岩No. 1　らは両面調整石器の調整剝片とみられる（図Ⅲ－155－105）。他の母岩では母岩No. 1の剝片が3点あるが，接合しない。

Sb－4

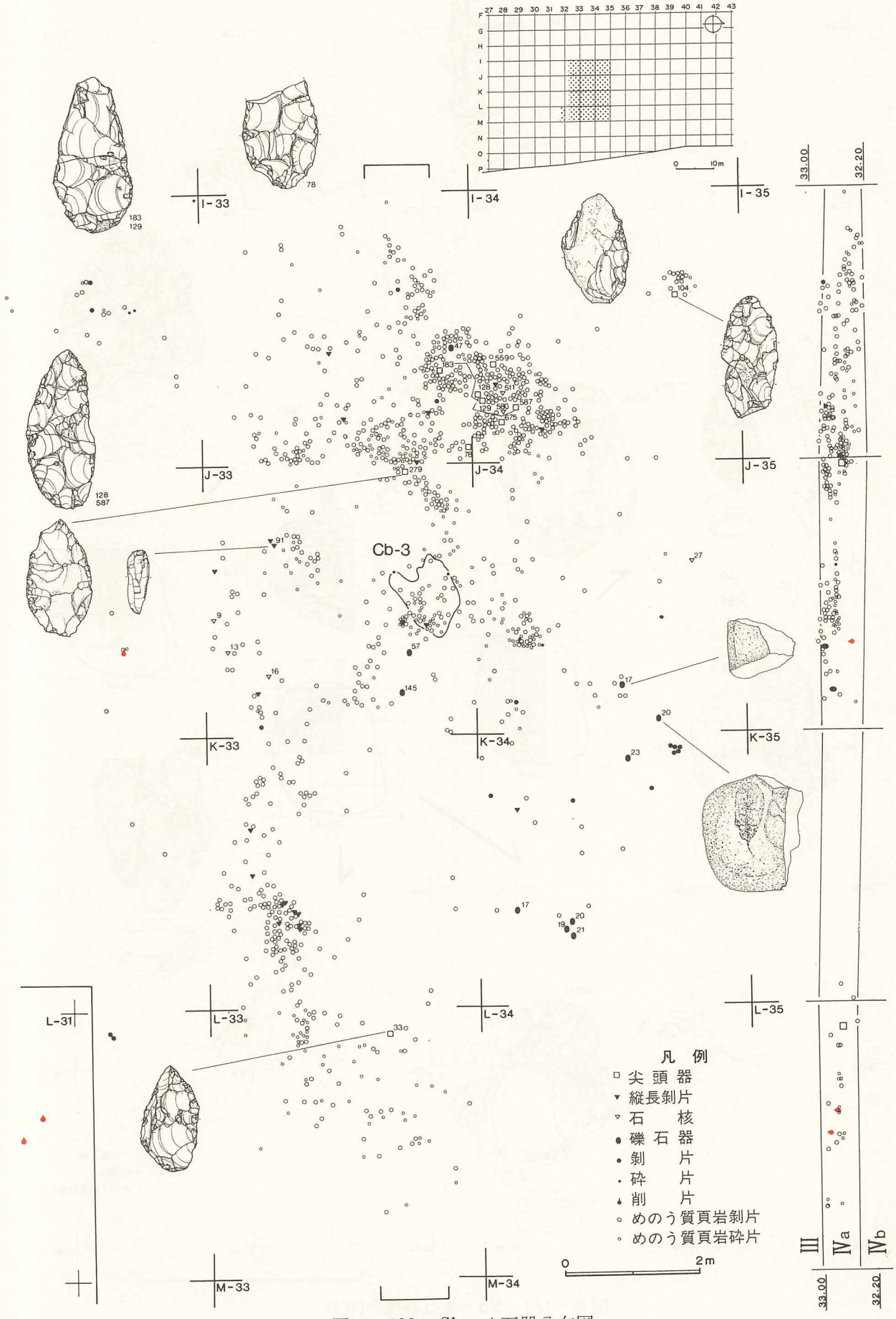
分布（図Ⅲ－182）　I－32～34，J－32～34，K－32～34，L－31～33に位置し，広がりは16×12mと広範である。集中域はいくつかみられるが，I－33，34，J－33にまたがる部分が最も密集し，多数の接合資料がある。遺物の垂直分布は，40～60cmの幅があるが，層位的またはレベル的に分離できない。特に先に述べを密集区域では剝片が折り重なるような状態

Cb－3　で確認されている。また，J－33の北側にはCb－3がある。

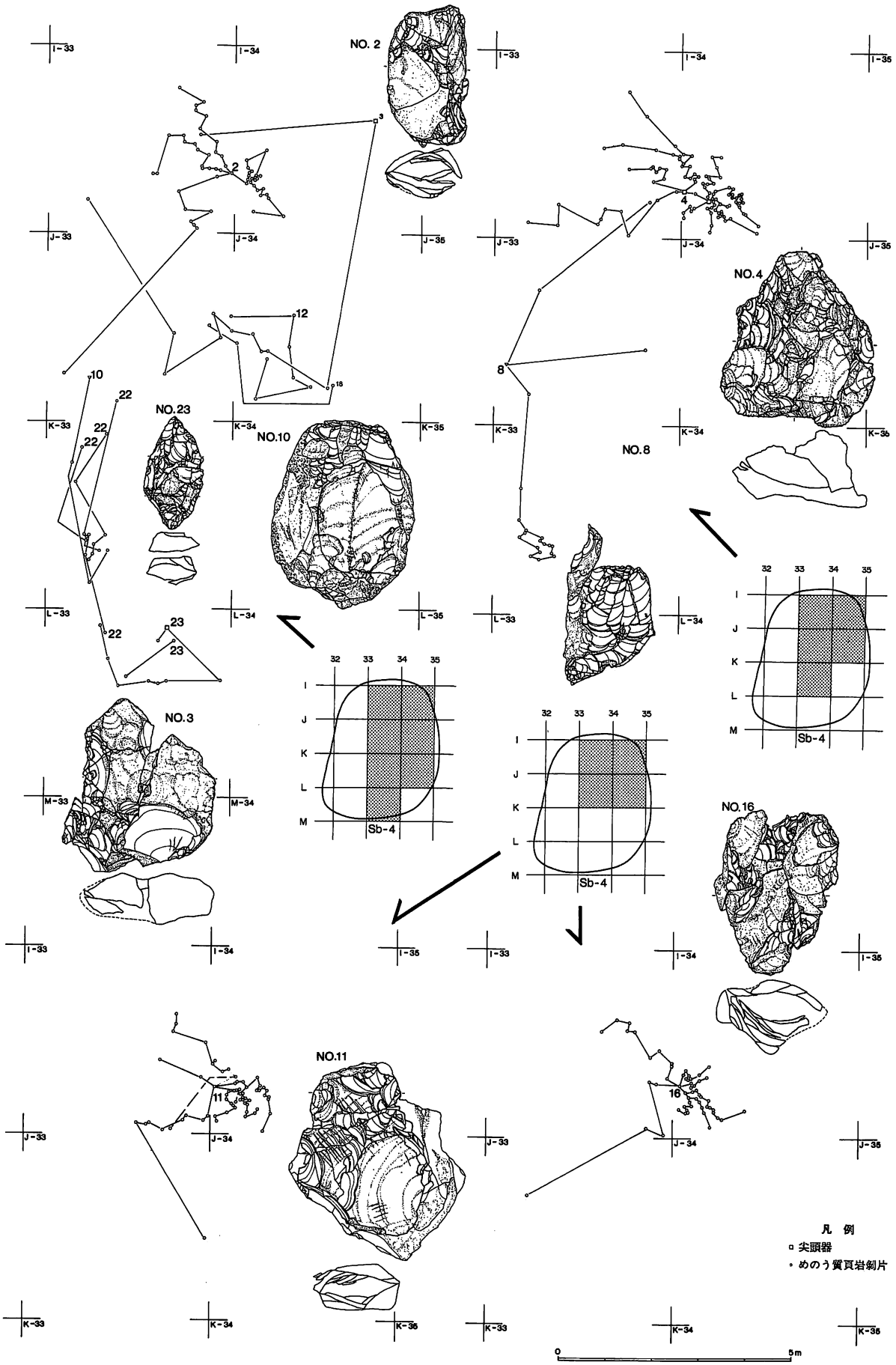
石器（図Ⅲ－182，表Ⅲ－5）　総数3,556点，尖頭器10点，縦長剝片38点，石核6点，台石10点，剝片1,721点，砕片1,768点，削片3点で，その重量は17,749.2gである。尖頭器と縦長剝片，石核のみで他の石器がないのが特色で，その他尖頭器製作の際の剝片が多数みられる。台石は小破片が多いが，個体数は2点である。

石材（表Ⅲ－5）　頁岩39点，めのう質頁岩3,504点，めのう3点，その他10点で，めのう質頁岩が大部分で，黒曜石はみられない。めのう質頁岩は尖頭器接合，尖頭器製作剝片接合，縦長剝片・石核接合資料などが多数あり，原石の状態で持ち込まれている。母岩別資料でみると，No.2～19，21～24の22個体がある。

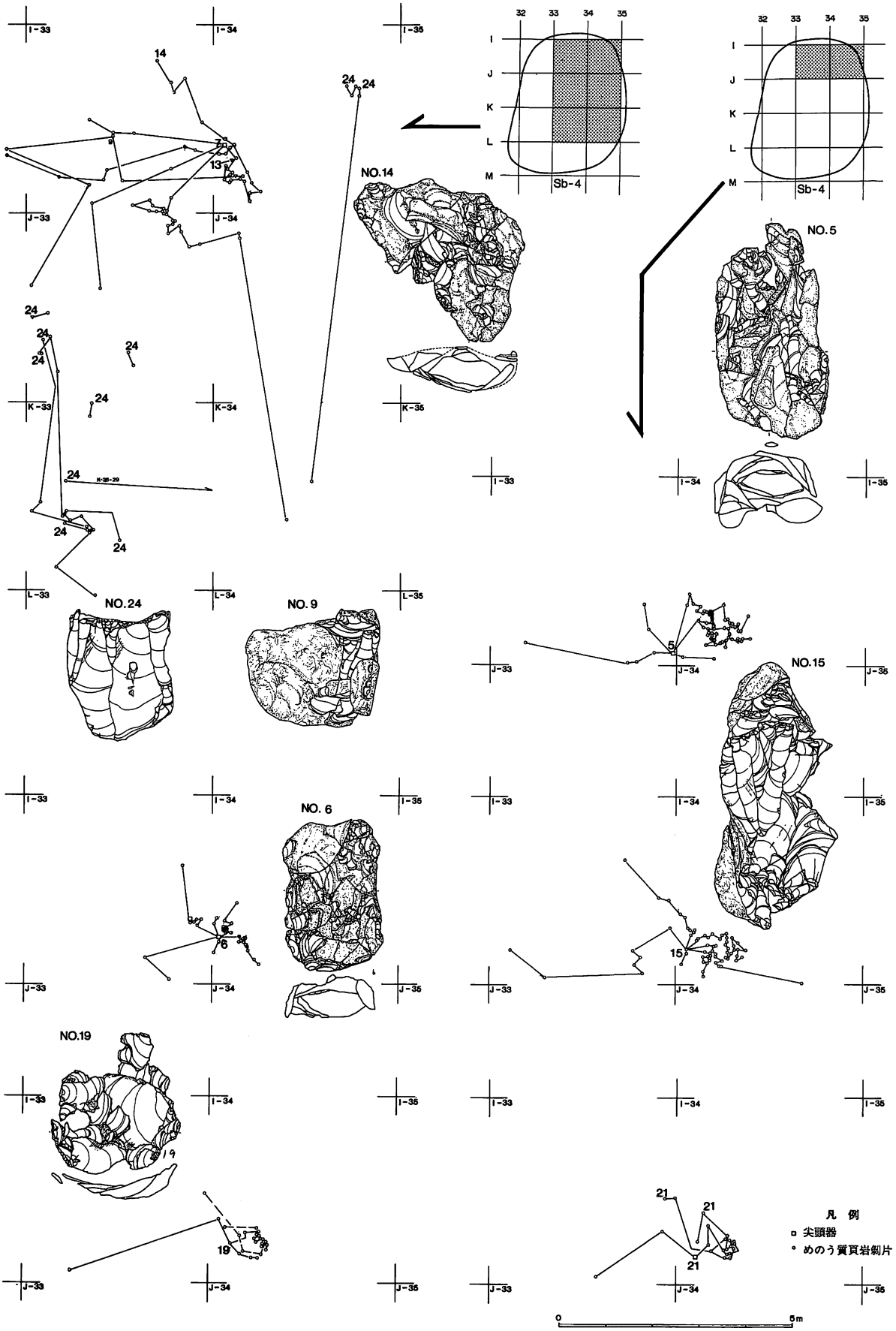
接合多数　**接合**（図Ⅲ－183，184）　めのう質頁岩の接合資料が多数あり，母岩No.2～6，8～12，14～16，19，21～24の18個体について図示した。大部分のものはI－34の南東隅に集中し，その周辺に広がっている。



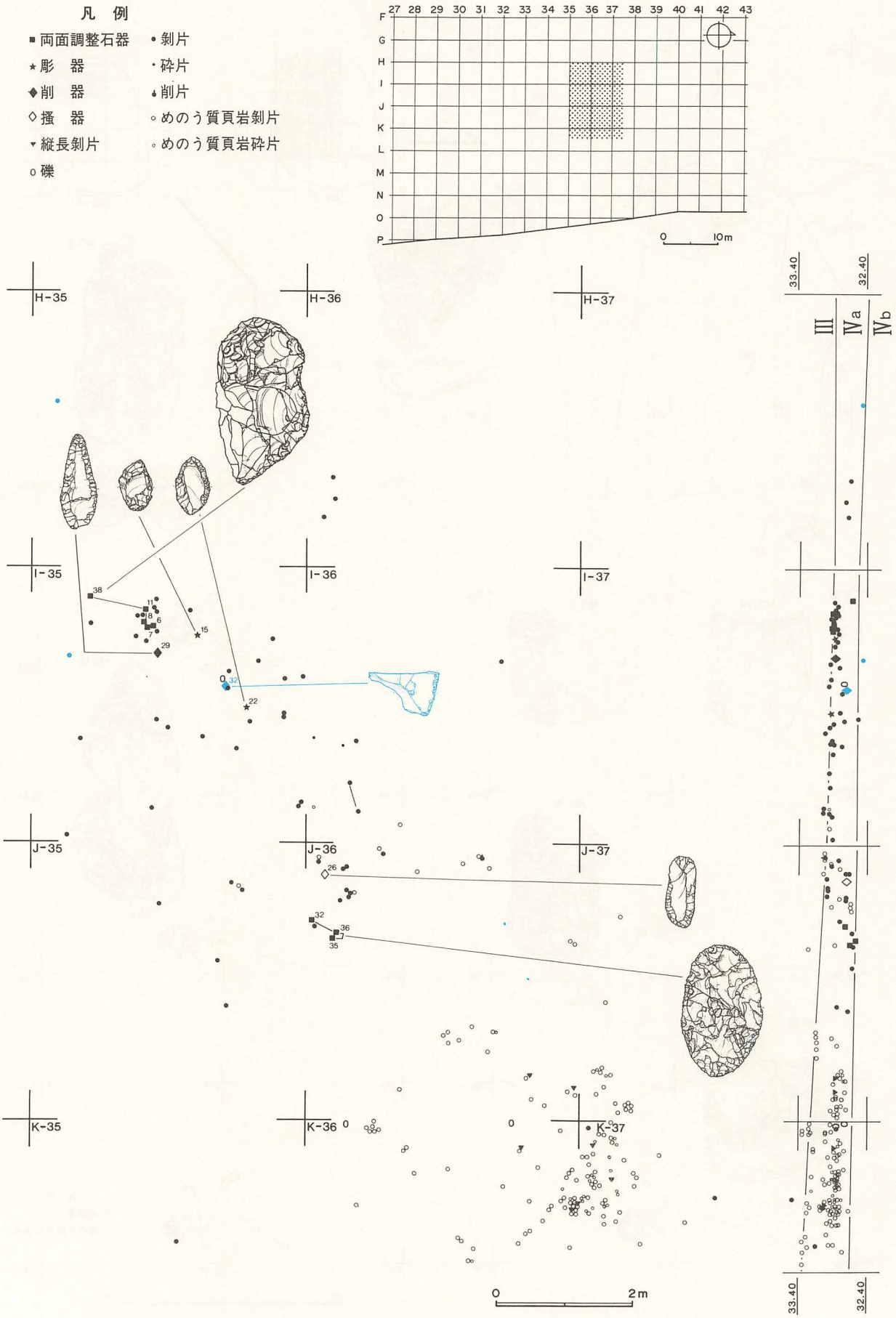
図Ⅲ－182　Sb－4石器分布図



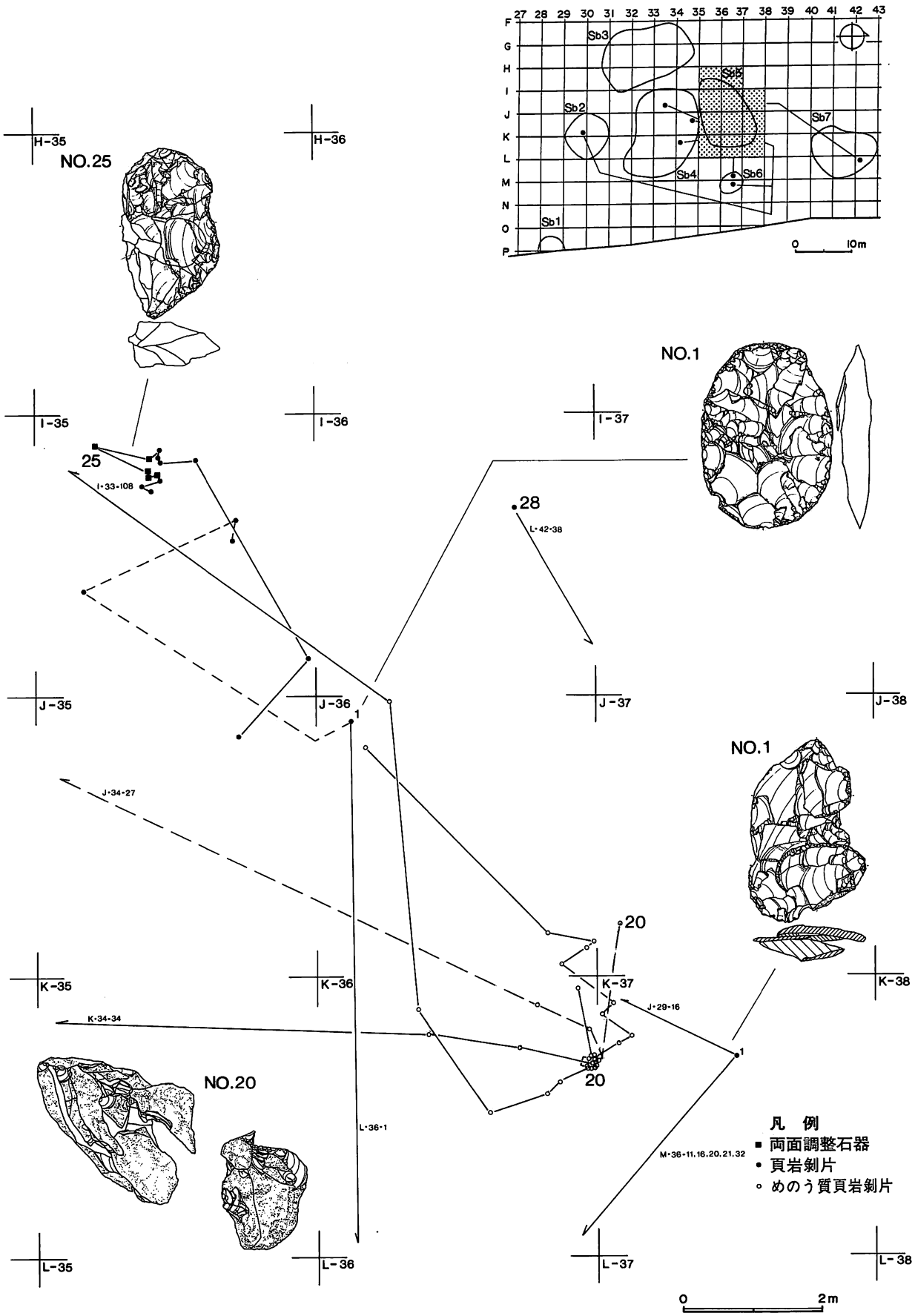
図Ⅲ－183　Sb－4石器接合図(1)



図Ⅲ－184　Sb－4石器接合図(2)



図Ⅲ－185　Sb－5石器分布図



図Ⅲ－186　Sb－5石器接合図

表Ⅲ－5　Sb－4の石器組成

石材 / 器種	石材 頁岩 点数	頁岩 重量	めのう質頁岩 点数	めのう質頁岩 重量	黒曜石 点数	黒曜石 重量	めのう 点数	めのう 重量	その他 点数	その他 重量	計 点数	計 重量
細石刃												
細石刃核												
尖頭器			10	747.8							10	747.8
両面調整石器												
彫器												
錐形石器												
掻器												
削器												
縦長剥片	1	2.7	37	520.8							38	523.5
石核			6	2,860.4							6	2,860.4
ストーン・リタッチャー												
台石									10	5,023.7	10	5,023.7
石器合計	1	2.7	53	4,129.0					10	5,023.7	64	9,155.4
剥片	25	91.7	1,696	8,177.9							1,721	8,269.6
砕片	13	1.3	1,755	322.1							1,768	323.4
削片							3	0.8			3	0.8
礫												
剥片など合計	38	93.0	3,451	8,500.0			3	0.8			3,492	8,593.8
総合計	39	95.7	3,504	12,629.0			3	0.8	10	5,023.7	3,556	17,749.2

表Ⅲ－6　Sb－5の石器組成

石材 / 器種	石材 頁岩 点数	頁岩 重量	めのう質頁岩 点数	めのう質頁岩 重量	黒曜石 点数	黒曜石 重量	めのう 点数	めのう 重量	その他 点数	その他 重量	計 点数	計 重量
細石刃												
細石刃核												
尖頭器												
両面調整石器	8	278.9									8	278.9
彫器	2	15.5									2	15.5
錐形石器												
掻器	1	7.3									1	7.3
削器	1	13.8			1	10.3					2	241
縦長剥片			7	101.5							7	101.5
石核												
ストーン・リタッチャー												
台石												
石器合計	12	315.5	7	101.5	1	10.3					20	427.3
剥片	61	230.6	135	321.9	2	2.4					198	554.9
砕片	2	0.1	62	5.7			23	2.2			87	8.0
削片	2	0.3					11	1.9			13	2.2
礫									3	7.9	3	7.9
剥片など合計	65	231.0	197	327.6	2	2.4	34	4.1	3	7.9	301	573.0
総合計	77	546.5	204	429.1	3	12.7	34	4.1	3	7.9	321	1,000.3

Sb－5

分布（図Ⅲ－185）　H－35・36，I－35・36，J－35～37，K－35～37の位置し，広がりは14×9 mと広範である。分布密度は低く，全体に散在しているが，集中域は3ヵ所程度みられる。遺物の垂直分布は20～60cmの幅をもっているが，層位的またはレベル的に分離することはできない。

石器（図Ⅲ－185，表Ⅲ－6）　総数321点，両面調整石器8点，彫器2点，掻器1点，削器2点，縦長剥片7点，剥片198点，砕片87点，削片13点，礫3点で，その重量は1,000.3gである。両面調整石器8点は破片数で，個体数は2点である。

石材（図Ⅲ－6）　頁岩77点，めのう質頁岩204点，黒曜石3点，めのう34点，その他3点で，めのう質頁岩が多い。頁岩は母岩No.1，25などの剥片があり，めのう質頁岩の大部分は母岩No.20の縦長剥片，剥片類である。

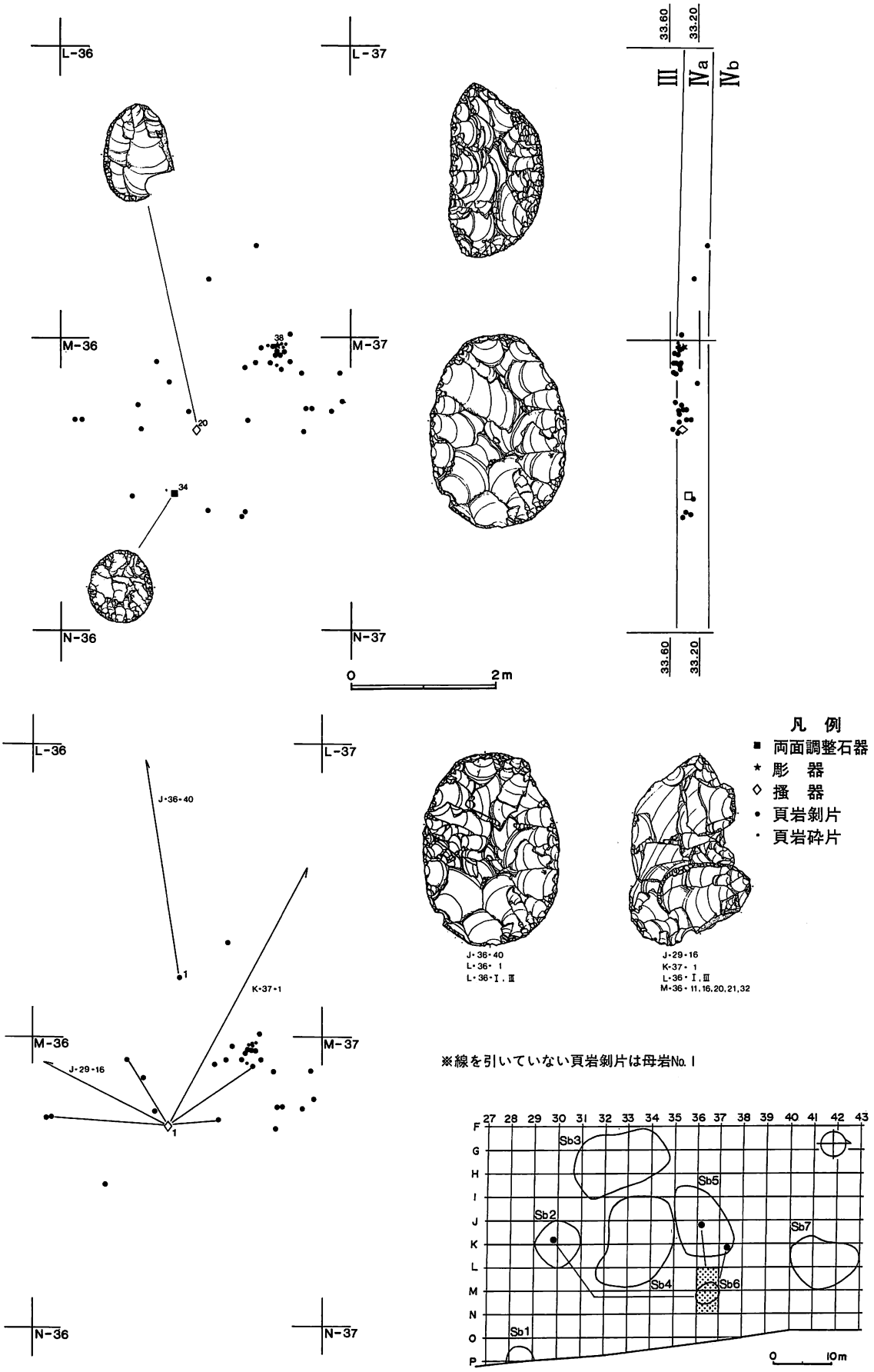
母岩No.1，25
母岩No.20

接合（図Ⅲ－186）　ブロック内だけの接合が1例，他のブロックとの接合が4例ある。ブロック内の接合資料は，母岩No.25の両面調整石器およびその調整剥片である。母岩No.1の2個体の両面調整石器の接合はSb－2，6と，母岩No.20の縦長剥片の接合はSb－4と，母岩No.28の剥片の接合はSb－7との間にみられる。つまり，Sb－3以外の各ブロックと接合関係がある。

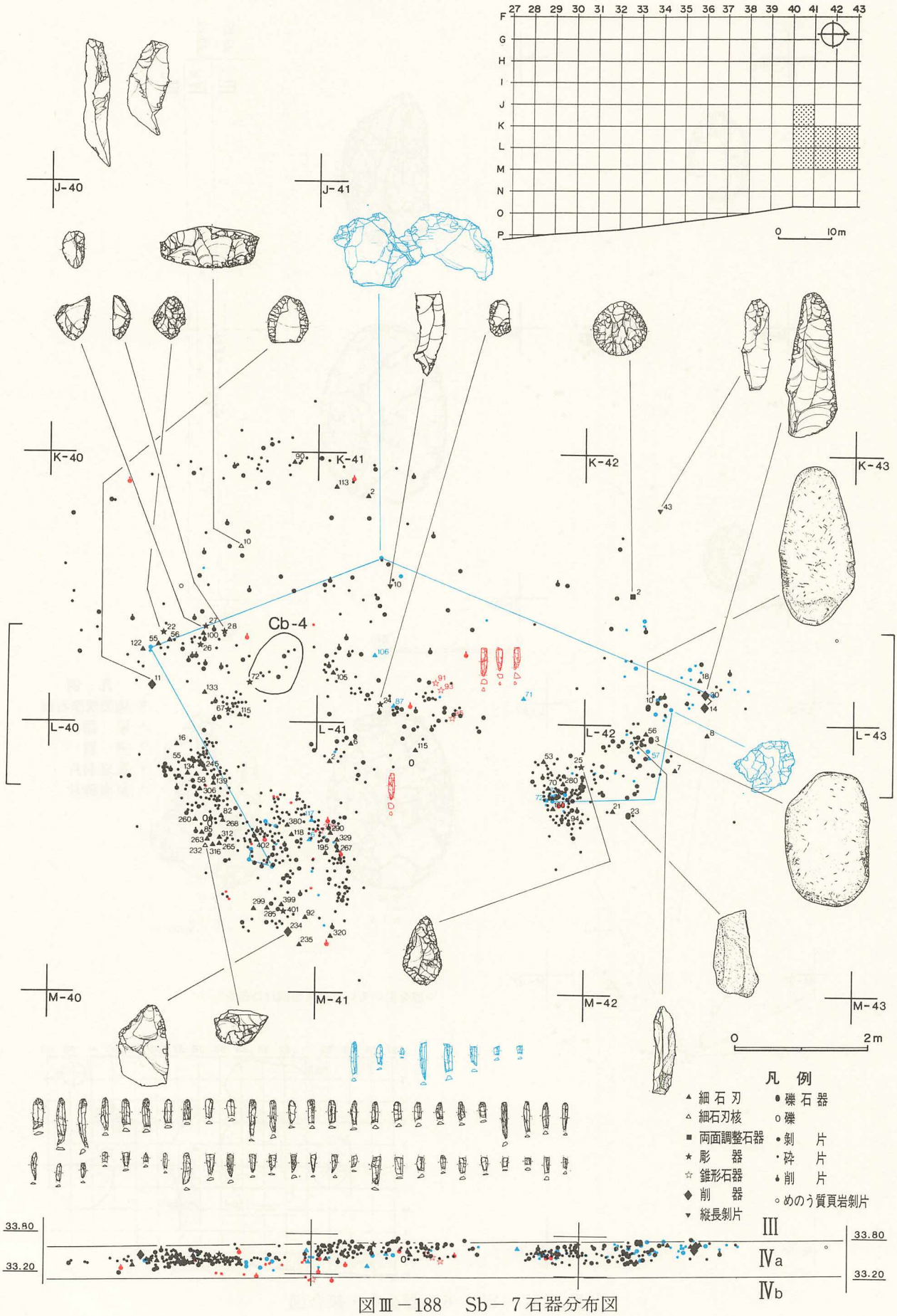
Sb－6

分布（図Ⅲ－187）　L－36，M－36に位置し，広がりは4×3 mの範囲である。遺物の垂直分布の幅は20～30cmで，層位的またはレベル的に分離はできない。

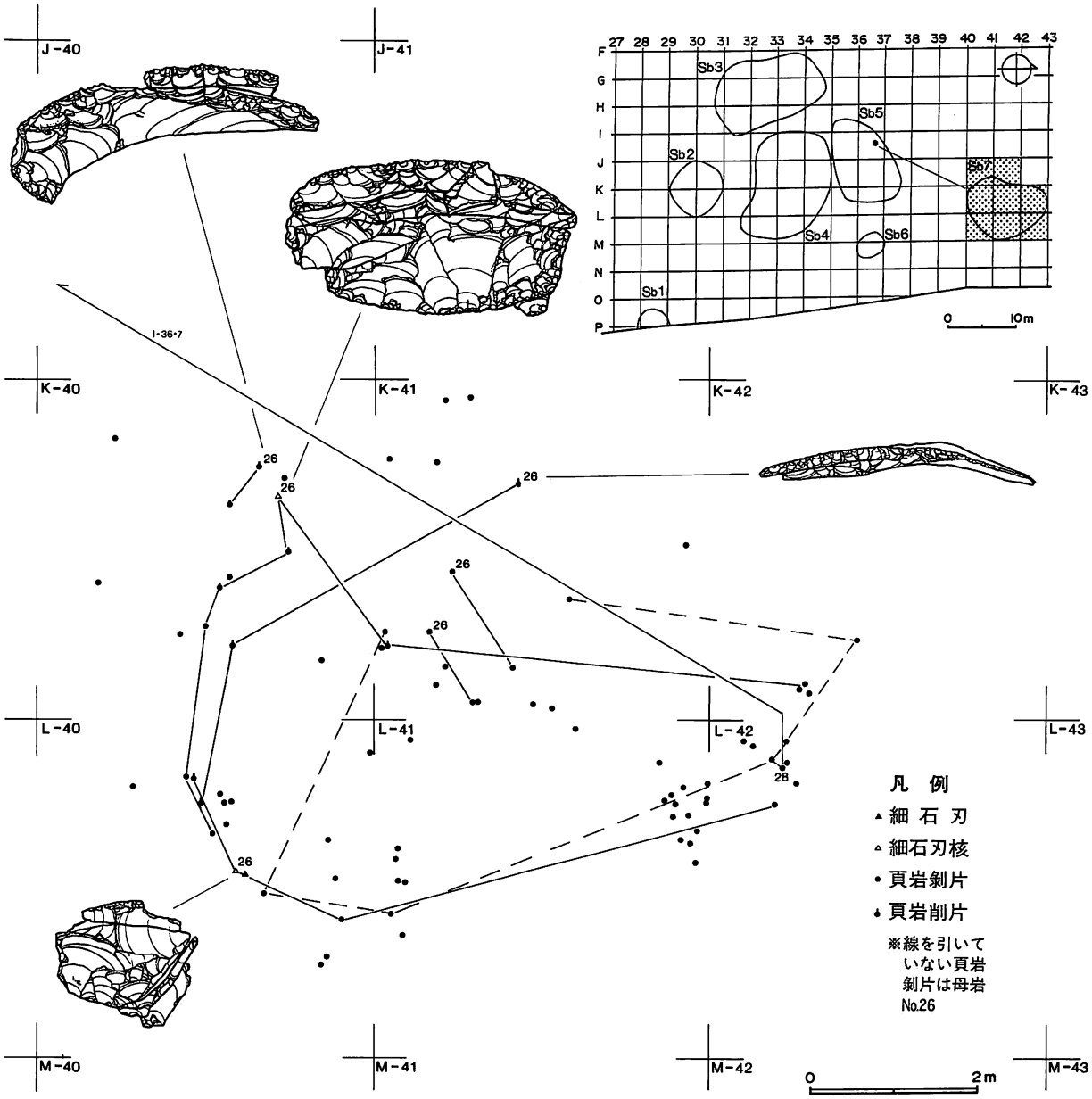
石器（図Ⅲ－187，表Ⅲ－7）　総数58点，両面調整石器3点，彫器1点，掻器1点，剥片



図Ⅲ－187　Sb－6石器分布・接合図



図Ⅲ－188　Sb－7石器分布図



図Ⅲ－189　Sb－7石器接合図

40点，砕片13点で，その重量は534.1gである。大型の両面調整石器2点はL－36の第Ⅲ層から出土しているが地点は確認できなかった。

石材（図Ⅲ－7）　頁岩57点，めのう質頁岩1点で，黒曜石，めのうはない。頁岩はその大部分が母岩No.1の剝片，砕片である。　母岩No.1

接合（図Ⅲ－187）　母岩No.1の2個体の両面調整石器接合が，Sb－2・5との間でみられる。

Sb－7

分布（図Ⅲ－188）　J－40，K－40～42，L－40～42に位置し，広がりは11×8mの範囲であるが，北東部は部分的に縄文時代の住居跡H－12によって破壊されている。分布密度は東側が高く，2ヵ所の集中域がある。また，K－40の北東隅にはCb－4がある。遺物の垂　Cb－4

表Ⅲ－7　Sb－6の石器組成

石材 / 器種	石材 頁岩 点数	頁岩 重量	めのう質頁岩 点数	めのう質頁岩 重量	黒曜石 点数	黒曜石 重量	めのう 点数	めのう 重量	その他 点数	その他 重量	計 点数	計 重量
細石刃												
細石刃核												
尖頭器												
両面調整石器	2	413.7	1	23.4							3	437.1
彫器	1	2.4									1	2.4
錐形石器												
掻器	1	17.8									1	17.8
削器												
縦長剝片												
石核												
ストーン・リタッチャー												
台石												
石器合計	4	433.9	1	23.4							5	457.3
剝片	40	75.8									40	75.8
砕片	13	1.0									13	1.0
削片												
礫												
剝片など合計	53	76.8									53	76.8
総合計	57	510.7	1	23.4							58	534.1

表Ⅲ－8　Sb－7の石器組成

石材 / 器種	石材 頁岩 点数	頁岩 重量	めのう質頁岩 点数	めのう質頁岩 重量	黒曜石 点数	黒曜石 重量	めのう 点数	めのう 重量	その他 点数	その他 重量	計 点数	計 重量
細石刃	56	8.2			8	0.9					64	9.1
細石刃核	2	44.1									2	44.1
尖頭器												
両面調整石器	1	11.9									1	11.9
彫器	9	39.6	1	2.5							10	42.1
錐形石器							4	1.4			4	1.4
掻器												
削器	4	54.9									4	54.9
縦長剝片	5	39.8									5	39.8
石核												
ストーン・リタッチャー									2	268.4	2	268.4
砥石									1	30.4	1	30.4
石器合計	77	198.5	1	2.5	8	0.9	4	1.4	3	298.8	93	502.1
剝片	173	366.0	1	2.8	18	46.2					192	415.0
砕片	883	56.0	1	0.2	54	4.0	12	1.4			950	61.6
削片	55	67.8					11	3.6			66	71.4
礫									3	34.0	3	34.0
剝片など合計	1,111	489.8	2	3.0	72	50.2	23	5.0	3	34.0	1,211	582.0
総合計	1,188	688.3	3	5.5	80	51.1	27	6.4	6	332.8	1,304	1,084.1

直分布の幅は30cm前後であるが，層位的またはレベル的に分離はできない。

石器（図Ⅲ－188，表Ⅲ－8）　総数1,304点，細石刃64点，細石刃核2点，両面調整石器1点，彫器10点，錐形石器4点，削器4点，縦長剝片5点，ストーン・リタッチャー2点，砥石1点，剝片192点，砕片950点，削片66点，礫3点で，その重量は1,084.1gである。彫器10点のうち1点は縄文時代の住居跡H－12の覆土中から出土したもので，また，図示していない4点は小破片である。他のブロックに比べ，細石刃，彫器などが多いのが特色である。

石材（表Ⅲ－8）　頁岩1,188点，めのう質頁岩3点，黒曜石80点，めのう27点，その他6点で，頁岩が圧倒的に多い。しかし，黒曜石も全体の6割の点数が出土している。

母岩 No.26　**接合**（図Ⅲ－189）　母岩No.26の頁岩がブロック内で接合している。それらは細石刃核，細石刃，削片，剝片などの接合で，本ブロックで細石刃剝離作業が行われたことを示すものである。母岩No.28の剝片はSb－5の剝片と接合している。

母岩 No.28

(6)　母岩別分類

石材別に分けた遺物のうち，全体の44%，42%を占める頁岩，めのう質頁岩については，さらに母岩別の分類を試みた。分類は岩石の色，模様などを肉眼的に観察し，抽出が可能なものについてのみ行った。頁岩は場所によって色や模様が異なる場合が多く，全体の10%（重量は48%）程度しか抽出することができなかった。個体数は6個体（No.1，25～29）であるが，原石の状態まで復元できたものはない。めのう質頁岩は色や模様に特色があり，また，接合している資料も多く，全体の36%（重量は98%）が抽出できた。個体数は23個体（No.2～24）で，尖頭器接合資料7点，尖頭器製作剝片接合資料5点，縦長剝片・石核

頁岩

めのう質頁岩

接合資料9点などがある。以下，母岩の特色，分布などを頁岩，めのう質頁岩の順で説明する。

頁岩（図Ⅲ－190）

母岩No.1（頁岩）　点数は75点，重量は593.4g，色は灰褐色～褐色を基調とし，まだら模様がみられる。石器は，2点の大型両面調整石器（図Ⅲ－154－99，100）とその調整，刃部再生の剝片などがある。分布の中心はSb－6であるが，Sb－2，3，5にも数点ずつみられる。直接の接合関係はSb－2とSb－6，Sb－5とSb－6の間にある。ある程度加工された2個体の素材の状態で，遺跡に持ち込まれたと考えられる。　両面調整石器

母岩No.25（頁岩）　点数は199点，重量は856.7g，色は黒褐色を基調とし，部分的に灰褐色部分があり，珪質分が多く光沢があるが，岩石の剝離性が強い。石器は，両面調整石器（図Ⅲ－155－98，104，105），削器（図Ⅲ－159－162，165）などがあるが，大部分は剝片類である。分布の中心はSb－3で，Sb－2，5，7にも少量みられる。接合はSb－3，5のブロック内が多いが，Sb－2と3の間に接合関係がみられる。いくつかの素材の状態で遺跡に持ち込まれたと考えられる。　両面調整石器　削器

母岩No.26（頁岩）　点数は80点，重量は171.5g，色は暗褐色～灰褐色が基調で，斑点状の模様がみられ，光沢がある。石器は，細石刃，細石刃核・削片接合（図Ⅲ－151－86，図Ⅲ－152－88，90，図Ⅲ－153．92），削器（図Ⅲ－160－178）などがあるが剝片類が多い。分布の中心はSb－7で，Sb－2に数点みられる。接合はSb－7のブロック内のみである。いくつかの素材の状態で遺跡に持ち込まれたものと考えられる。　細石刃核　削器

母岩No.27（頁岩）　点数は2点，Sb－7から出土している削片接合（図Ⅲ－153－91）のみで，色は褐灰色である。

母岩No.28（頁岩）　点数は10点，重量は24.7g，色はオリーブ灰色である。石器は細石刃とポイントフレイクで，細石刃核が存在した可能性がある。分布の中心はSb－7であるが，Sb－2にも2点あり，Sb－5と7では接合関係がみられる。細石刃核の形で持ち込まれ，調整，細石刃剝離が行われたことが考えられる。　細石刃

母岩No.29（頁岩）　点数19点，重量24.0g。色は暗赤褐色が基調で，部分的に灰褐色部分がみられる。石器はポイントフレイクを素材にした削器（図Ⅲ－160－178）1点のほかは剝片である。分布の中心はSb－2で，削器1点がSb－1にみられる。　削器

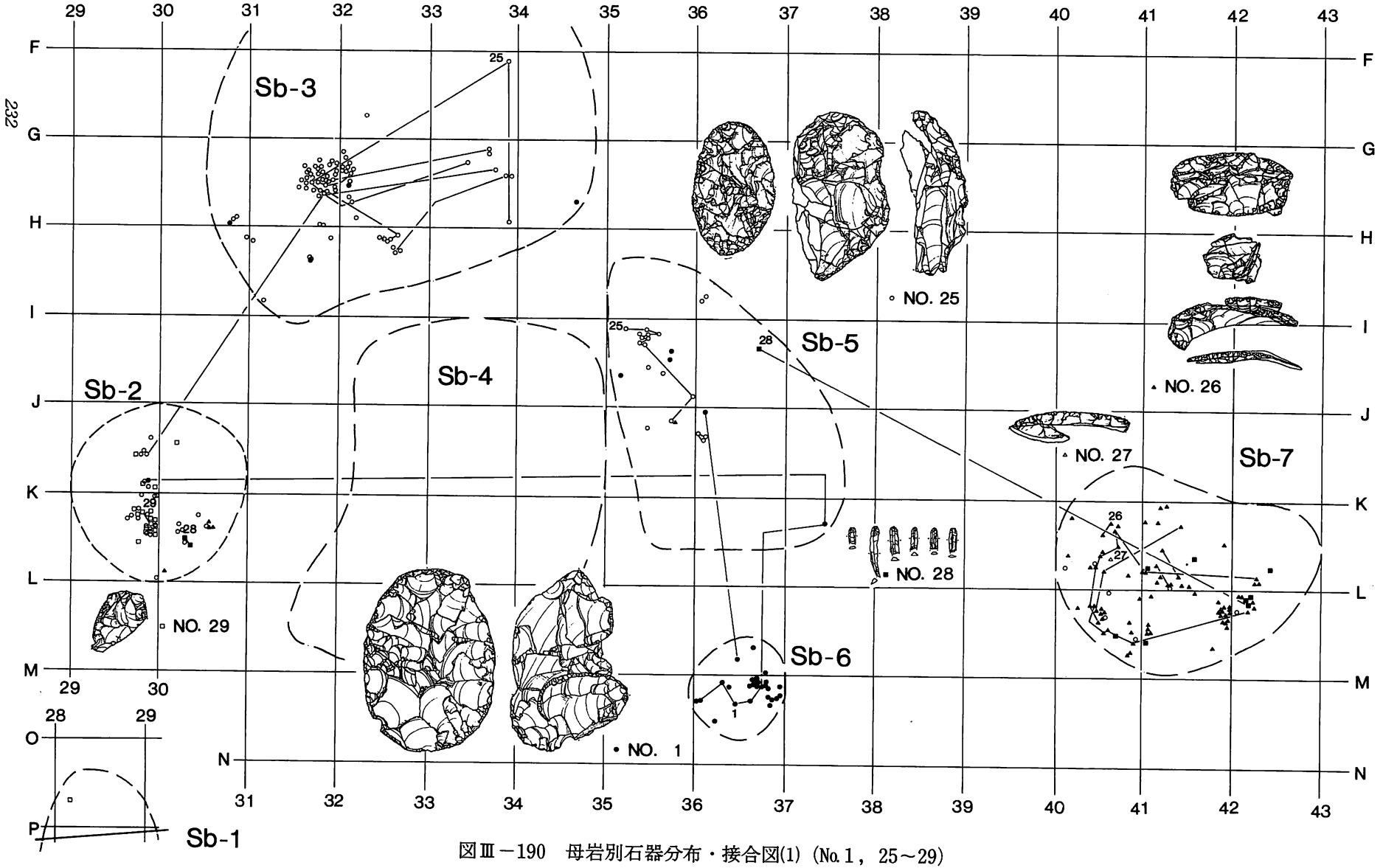
以上6個体の頁岩は，石器と調整剝片とみられるものが大部分で，原石の礫皮面がみられるものがほとんどない。また，接合資料でも原石の状況を知ることができるものはない。いずれもある程度加工された素材の状態で遺跡に持ち込まれ，細部加工，または再生などが行われ使用されたものとみられる。そして，それらのうち再使用が可能なものはさらに持ち出されたと考えられる。頁岩の場合，母岩別に抽出しなかったものについても，同様のことがいえる。　素材の持ち込み

めのう質頁岩（図Ⅲ－191～196）

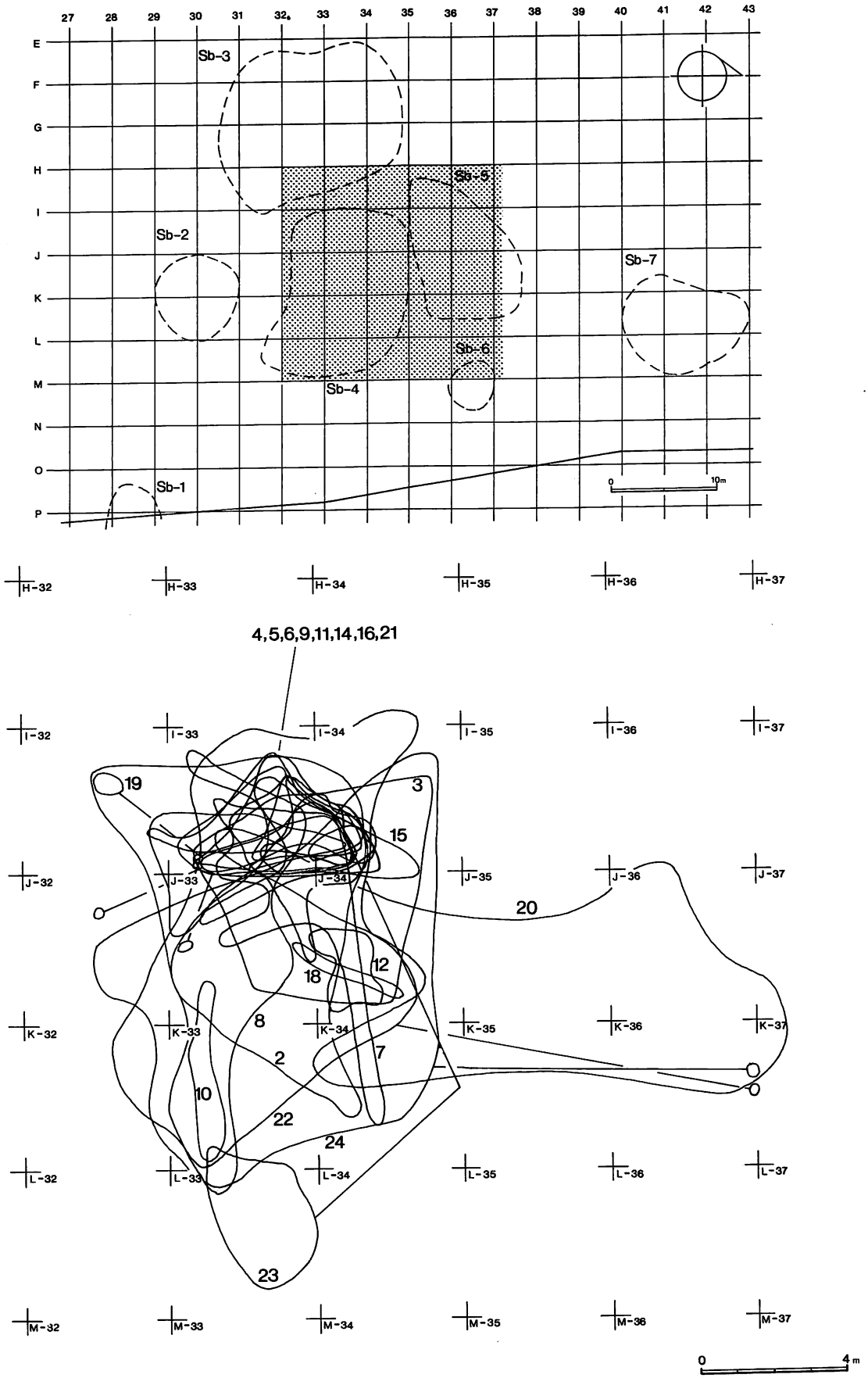
めのう質頁岩はSb－4，5に分布し，特にSb－4の西側に集中している（図Ⅲ－191）。接合資料別に図Ⅲ－192～196に示した。

尖頭器接合資料（図Ⅲ－192）

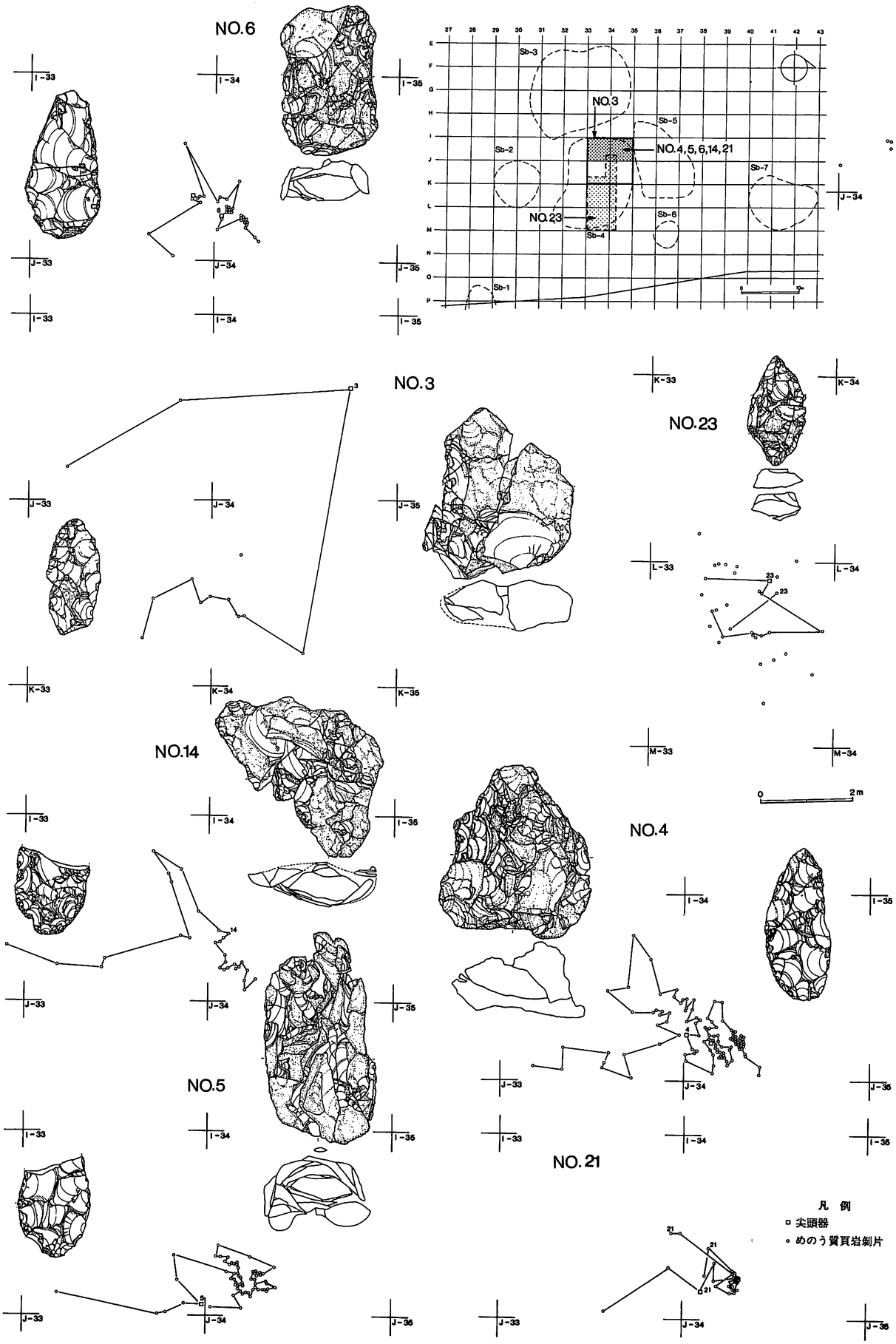
母岩No.3（めのう質頁岩，図Ⅲ－163－194）　点数は21点，重量は453.3g，礫皮面の色は



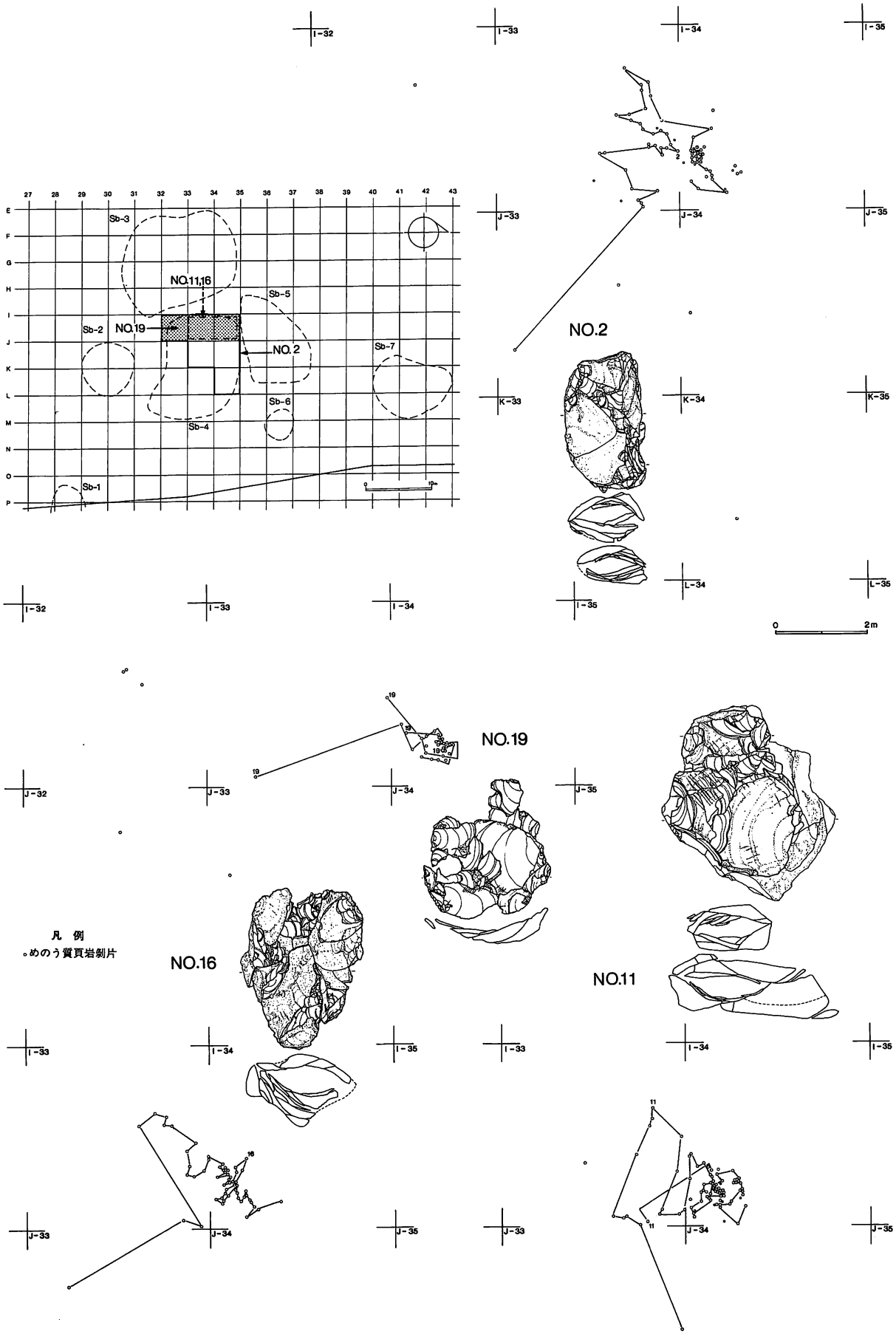
図Ⅲ－190　母岩別石器分布・接合図(1) (No.1，25～29)



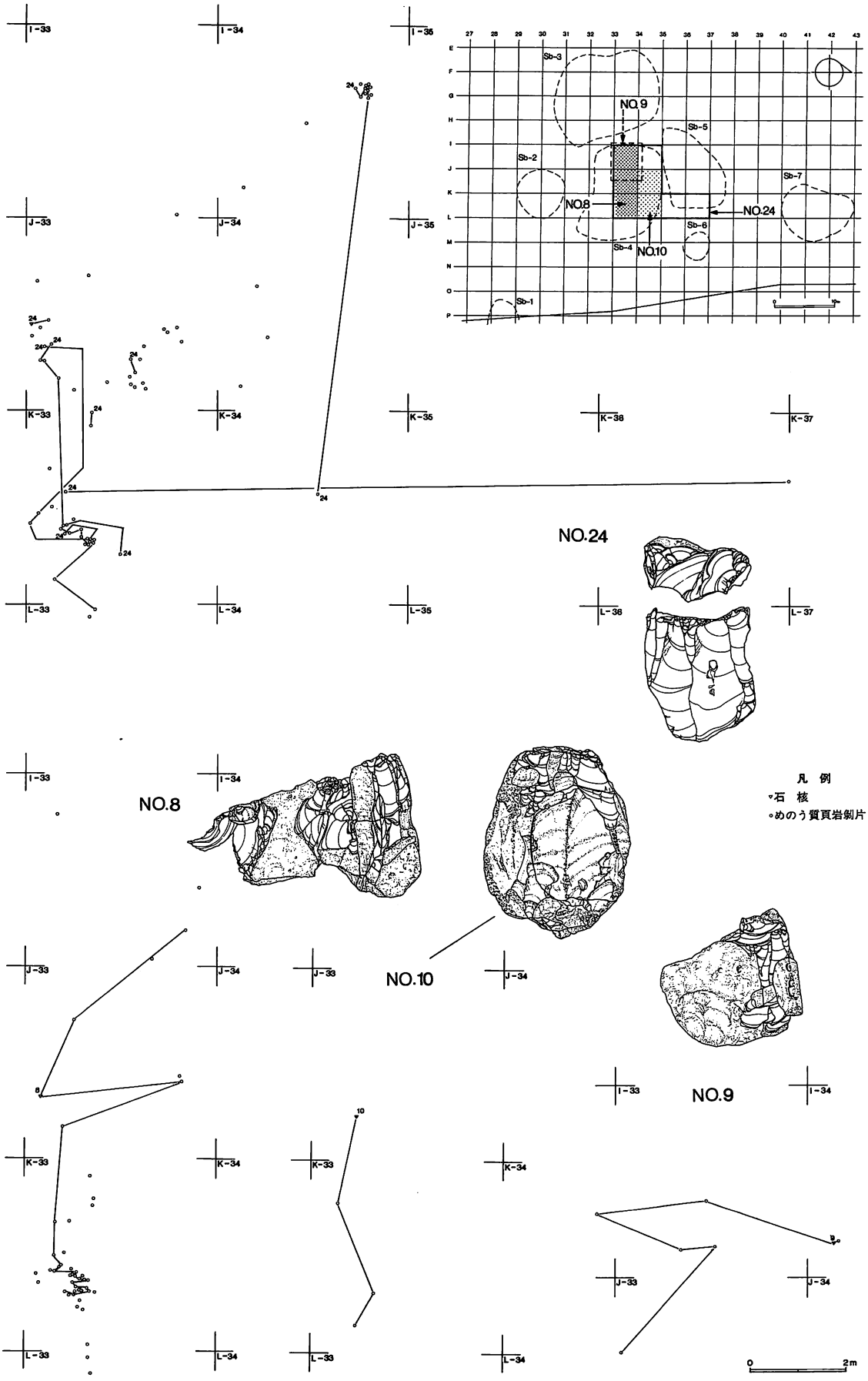
図Ⅲ－191　母岩別石器分布範囲図



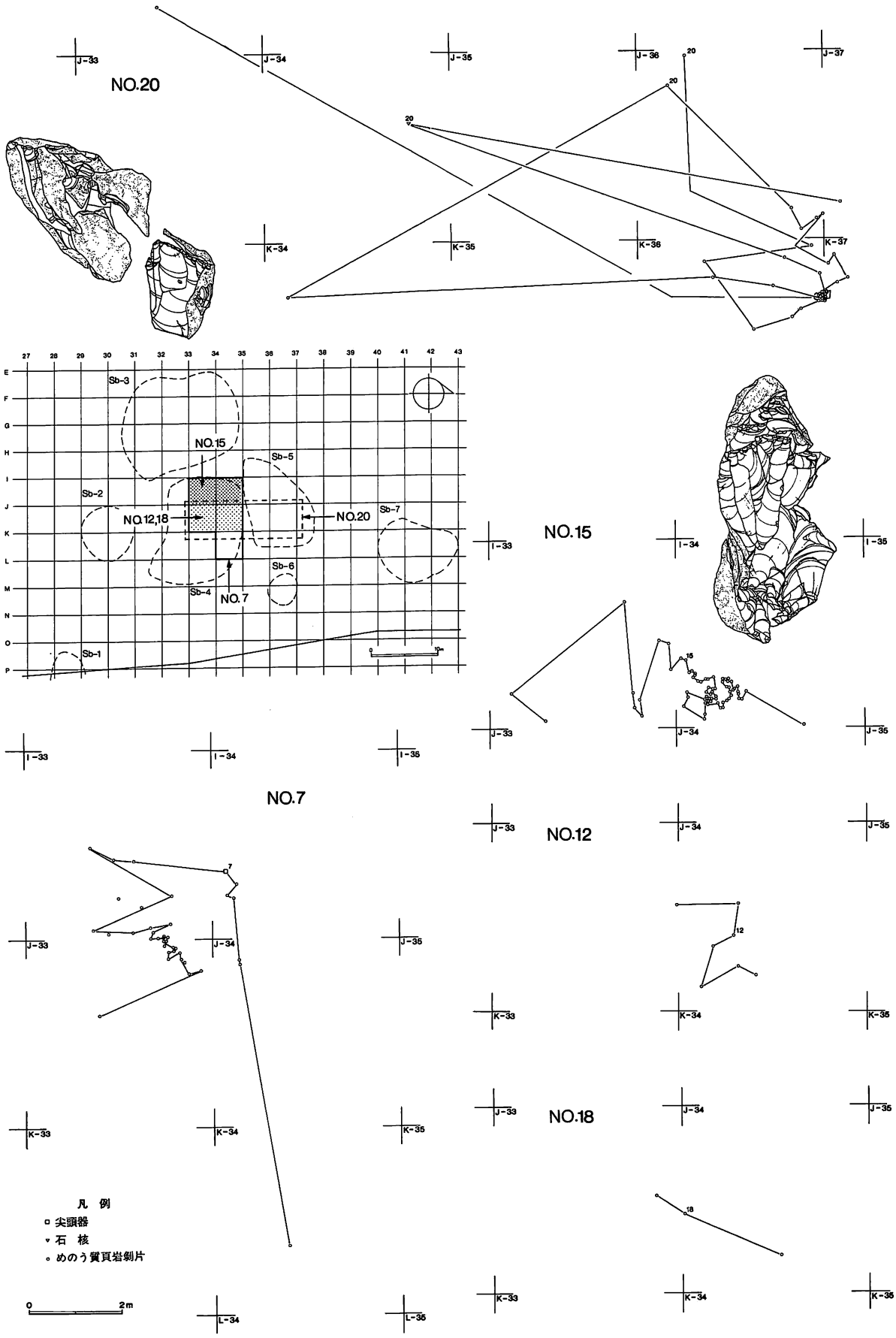
図Ⅲ－192　母岩別石器分布・接合図(2)（No.3～6，14，21）



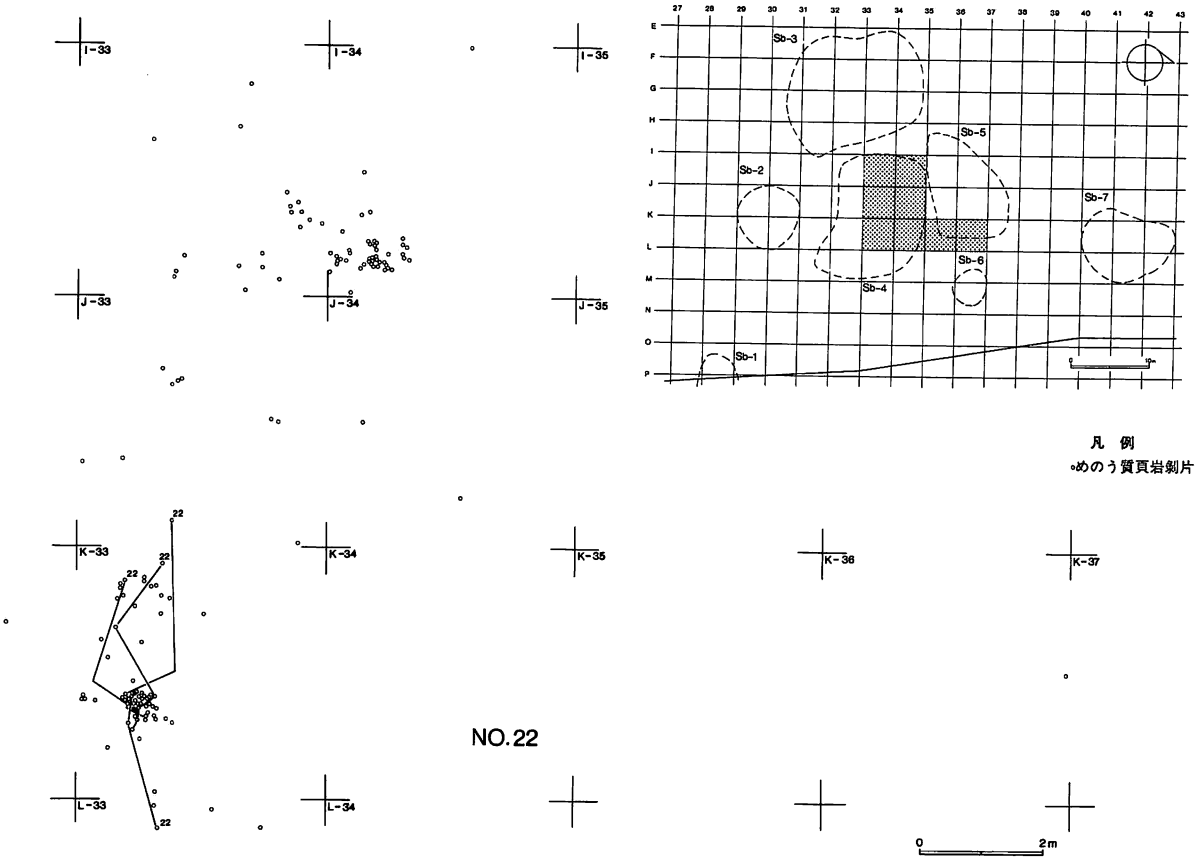
図Ⅲ－193　母岩別石器分布・接合図(3)（No.2，11，16，19）



図Ⅲ－194　母岩別石器分布・接合図(4)（No.8～10，24）



図Ⅲ－195　母岩別石器分布・接合図(5)（No.7，12，15，18，20）



図Ⅲ－196　母岩別石器分布・接合図(6)（No.22）

赤褐色，内面は灰白色で灰色の縞模様がみられ，光沢がある。分布は径７ｍ前後の円形の
尖頭器　範囲で，接合しているのは17点，尖頭器は他の剝片と離れている。

母岩No.4（めのう質頁岩，図Ⅲ－167－200）　点数は161点，重量は698.7g，礫皮面は黄褐色で，風化した珪藻質部分がみられる。内面は灰白色が基調で，灰色の縞模様がある。分
尖頭器　布は５×３ｍの範囲で，二つに折れた尖頭器はその中心にある。

母岩No.5（めのう質頁岩，図Ⅲ－165－198）　点数は63点，重量は667.3g，礫皮面は淡黄褐色で，内面は灰白色に灰色の縞模様がみられる。分布は５×1.5mの範囲で，集中域から
尖頭器　80cm離れて尖頭器がある。

母岩No.6（めのう質頁岩，図Ⅲ－162－192）　点数は43点，重量は315.4g，全体の色調は灰緑色で，礫皮面には白色～黄褐色の風化した珪藻質部分がある。43点はすべて接合し，
尖頭器　その分布は径2.5m前後の円形の範囲で二つに折れた尖頭器はその中央部にある。

母岩No.14（めのう質頁岩，図Ⅲ－164－196）　点数は38点，重量は341.6g，色は灰緑色で，礫皮面には淡黄褐色に風化した部分がみられる。分布は６×３ｍの範囲であるが，欠損し
尖頭器　た尖頭器の地点は確認できなかった。

母岩No.21（めのう質頁岩）　点数29点，重量148.1g，図示していないが，剝片が三つのブ
尖頭器小片　ロックで接合し，そのうちの一つに尖頭器の小破片がみられる。礫皮面の色は橙色，内面は灰白色で橙色の網状の模様があり，部分的に珪藻質になっている。分布は３×２ｍの範囲で，広がりは小さい。

母岩No.23（めのう質頁岩，図Ⅲ－161－190）　点数は39点，重量は94.9g，色は灰色で，珪

藻質部分がある。分布の中心は4×3mの範囲で，8m離れたところに1点だけみられる位置は他の母岩と少しずれている。

母岩No.7（めのう質頁岩，図版78－1）　点数は43点，重量1,191.2g，色は淡黄色が基調で，灰色の縞模様と明黄褐色の網状の模様がみられる。分布は4×4mの範囲が中心で，5m離れた地点に1点だけみられる（図Ⅲ－195）。

以上の尖頭器接合の母岩別資料は，基本的に原石の持ち込み→加工→折れなどの失敗→放棄の過程が考えられるものである。

尖頭器製作剝片接合資料（図Ⅲ－193）

母岩No.2（めのう質頁岩，図Ⅲ－168－202）　点数112点，重量は199.3g，礫皮面の色は黄緑色で，部分的に白色化した風化面がある。内面は灰～黄褐色で，黄緑色の網状の模様がみられる。接合しているの65点，すべて剝片である。分布の範囲は10×6mと広いが集中域は3×3m程度である。

母岩No.11（めのう質頁岩，図Ⅲ－170－205）　点数は150点，重量は779g，礫皮面の色は褐色で，内面は褐色～黒褐色のまだら模様である。剝離性があり，部分的に不自然な割れが生じている。接合点数は78点，すべて剝片である。分布は5×4mで，中央部に集中域がある。

母岩No.16（めのう質頁岩，図Ⅲ－169－203）　点数は62点，重量は327.2g，礫皮面の色は灰オリーブ色，内面はオリーブ灰色と灰白色のまだら模様で，部分的に褐色の斑点がある。すべて剝片で接合する。分布の中心は4×2mの範囲で，1点だけ3m離れる。

母岩No.19（めのう質頁岩，図Ⅲ－171－206）　点数43点，重量188.7g，礫皮面の色は黄褐色，内面は黄灰色で，黄褐色の網状の模様がみられる。分布は8×4mと広いが，集中域は1×0.5m程度である。

以上の尖頭器製作剝片接合資料は，基本的に原石の持ち込み→加工→意図した尖頭器のできあがり→持ち出しの過程が考えられるものである。　**持ち出し**

縦長剝片・石核接合資料（図Ⅲ－194，195）

母岩No.8（めのう質頁岩，図Ⅲ－172－207，208）　点数69点，重量931.3g，色は灰黄褐色が基調で，黄褐色の網状の模様があり，さらに白色の珪藻質部分が斑点状にみられる。大きくは石核と縦長剝片の二つのブロックで接合し，その点数は23点である。分布範囲は12×5mと広範であるが，集中域は1×0.5m程度である。また，石核は集中域から4m離れている。

母岩No.9（めのう質頁岩，図Ⅲ－174－213）　点数は9点，重量は615g，色は灰黄褐色が基調で，黄褐色の縞模様がみられ，白色の珪藻質部分が数ヵ所ある。分布範囲は5×4mで，石核は端にある。

母岩No.10（めのう質頁岩，図Ⅲ－173－212）　点数は9点，重量は1,185g，礫皮面の色は褐色，内面は黒褐色と黄褐色のまだら模様である。9点すべて接合し，原石の状態まで復元されている。分布は4×1mの範囲で，石核は端にある。

母岩No.15（めのう質頁岩，図Ⅲ－174－214）　点数は81点，重量は1,246.6g，礫皮面は灰黄褐色で，白色の珪藻質部分が所々にみられる。内面は灰色が基調で，褐色の縞が所々に

ある。接合しているのは71点，すべて剥片で，石核はみられない。分布範囲は６×３ｍであるが，集中域は１×１ｍ程度である。

母岩No.20（めのう質頁岩，図Ⅲ－173－209，210）　点数は37点，重量は568.5g，礫皮面は赤褐色，内面は灰色～黄灰色で，縞模様がみられる。接合は，石核と縦長剥片の二つブロックになっており，剥離したと思われる縦長剥片の大部分が欠除している。分布範囲は16×８ｍと広範であるが，集中域は小さい。また，石核は集中域から８ｍ離れている。

母岩No.24（めのう質頁岩，図Ⅲ－173－211）　点数は133点，重量は1,120g，礫皮面の色は赤褐色，内面は灰色が基調で，褐色の斑文状の模様がみられる。点数が多く，部分的な接合はみられるが，原石の段階までの復元はできず，石核についてのみ図示した。分布範囲は16×12mと広範で，いくつかの集中域がある。また，石核は集中域の端にみられる。

広い分布
石核の分布

以上，縦長剥片・石核接合資料の状況は，原石の持ち込み，剥片剥離作業などが遺跡内で行われたことを示している。また，分布の状況は先に説明した尖頭器に関わる剥片の分布より広い範囲に及ぶ傾向があり，さらに石核は集中域より離れる傾向がみられる。これは尖頭器の製作と縦長剥片の剥離の作業過程が異っていることを示すものではないだろうか。

その他の母岩（図Ⅲ－195，196）

母岩No.12（めのう質頁岩）　点数10点，重量116.7g，礫皮面は赤褐色の角柱状の礫とみられ，内面は暗灰色で赤色の網状の模様がみられる。接合はせず，剥片のみである。分布は２×２ｍの範囲で，他の母岩の集中域とは若干ずれている。

母岩No.13（めのう質頁岩，図版80－224）　点数２点，重量481.2g，礫皮面は明黄褐色で，風化した白色の珪藻質部分がみられる。内面は灰色で，褐色の網状の模様がみられる。原石に復元されているが，１点は第Ⅰ層からの出土品である。

母岩No.17（めのう質頁岩，図版80－222）　点数は石核１点で，重量は290g，礫皮面はオリーブ色で，内面は，灰オリーブ色と灰白色のまだら模様である。他に剥片は見出せなかった。また，分布も他のめのう質頁岩とは離れ，Sb－２（K－19）からの出土である。

母岩No.18（めのう質頁岩，図版80－223）　点数は４点，重量は301g，礫皮面は黄褐色，内面は灰色で，白色の珪藻質部分がわずかにある。石核は第Ⅰ層からの出土で，３点の剥片が接合している。

母岩No.22（めのう質頁岩）　点数190点，重量860g，すべて剥片で，接合するものが若干ある。剥片の中にはポイントフレイクとみられるものがあるので，尖頭器の製作に関わる母岩の可能性がある。色は灰白色が基調で，白色の珪藻質部分が所々にみられる。分布範囲は16×12mと広範であるが，集中域は２ヵ所である。

Ⅳ　各種分析・同定

1　環　　境

(1)　石川１遺跡の古植生について

山田悟郎
（北海道開拓記念館）

1　試料及び処理方法について

試料は石川１遺跡で発掘された縄文時代中期中葉のH－６住居跡と，旧石器が出土したL－36グリッドの断面で採取されたものである。

サイベ沢Ⅶ式土器が出土したH－６住居跡では，床面を１ｍメッシュで方眼に区切り，各方眼で床面上５ cmまでの覆土を１点ずつ，計20点が花粉分析用試料として採取されている。試料は腐植土と褐色ローム質粘土が混じったものである。

L－36グリッドでは明黄褐色ローム質粘土から旧石器が出土したことから，下位の段丘礫層まで掘りこまれ地層断面の観察が行なわれ，併せて礫層までの土壌試料が採取されているが，ここではⅡ層からⅣ層の旧石器の出土層位までの試料を花粉分析の対象とした。Ⅱ層は砂質火山灰を含んだ赤黒色粘土質腐植土で２点の試料が，Ⅲ層はローム質粘土を母材とした暗褐色粘土質腐植土で１点の試料が採取されている。Ⅳ層は黄褐色～褐色ローム質粘土で，旧石器が出土した層位の下部までの間から（厚さ約40cm）10点の試料が採取された。

試料処理　試料の処理にあたって，H－６住居跡から採取したものについては風乾した500gの土壌を，L－36グリッドから採取した試料については風乾した200gの土壌を，下記の順に化学・物理処理を行なってプレパラートを作成した。

処理手順　KOH処理—水洗—HF処理—水洗—比重分離—アセトリシス処理—水洗

検鏡　検鏡は通常400倍で行ない，必要に応じて1,000倍で行なった。同定にあたっては，樹木花粉を200個以上同定するまでに出現した花粉・胞子を無作為に同定して計数するように努めたが，樹木花粉が200個以上出現した試料は無かった。従って，表示にあたっては各試料から産出した花粉・胞子の種類とその出現数を一覧表にして示した。尚，形態が類似していて分類が困難な花粉については*Juglans-Pterocarya*のように—（ハイフォン）でつないで表示した。

表示法

2　出現した花粉・胞子

１）H－６住居跡；住居跡の床面直上の覆土から採取された20点の土壌試料からは19属１科の樹木花粉，１属17科の草本花粉，３科の胞子と２種類の形態分類胞子を同定したが，腐食が激しく分類・同定が困難な花粉・胞子も多く出現した。出現した花粉・胞子の種類と出現数については表Ⅳ－１に示したとおりである。

樹木花粉では落葉広葉樹の *Alnus*（ハンノキ属），*Quercus*（コナラ亜属）が優勢で，次いで *Juglans*（クルミ属）-*Pterocarya*（サワグルミ属），*Betula*（カバノキ属），*Fagus*（ブナ属），*Ulmus*（ニレ属），*Tilia*（シナノキ属），*Magnolia*（モクレン属），*Acer*（カエデ属），Araliaceae（ウコギ科）が多く出現している。針葉樹花粉の出現は極めて少なく，20点の試料のうち針葉樹花粉が出現している試料は6点で，何れの試料でも1～2個出現するだけである。

草本花粉・胞子ではGramineae（イネ科）が優占し，次いでPolygonaceae（タデ科），Ranunculaceae（キンポウゲ科），Rosaceae（バラ科），Guttiferae（オトギリソウ科），Umbelliferae（セリ科），*Artemisia*（ヨモギ属），Carduoideae（キク亜科），Osmundaceae（ゼンマイ科），Monolate type spore（シダ類）が多く出現している。又，人里雑草として荒地や耕作地に多く生育するChenopodiaceae（アカザ科），Caryophyllaceae（ナデシコ科），Cruciferae（アブラナ科），Plantaginaceae（オオバコ科）などが僅かではあるが

表Ⅳ－1　石川1遺跡H－6住居跡から産出した花粉・胞子

花粉・胞子＼試料No.	4	5	6	8	9	10	11	13	14	15	16	17	19	20	21	22	23	24	25	26
Abies	—	1	—	—	—	—	—	—	1	1	2	—	—	1	—	—	—	—	1	—
Picea	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Pinus	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Salix-Populus	1	—	—	—	—	—	1	1	—	—	1	—	—	—	1	—	—	—	—	—
Juglans-Pterocarya	3	2	3	1	3	2	1	4	1	2	5	2	3	1	1	2	1	—	2	3
Alnus	14	11	15	9	13	10	5	21	8	12	21	13	15	11	13	14	5	2	11	15
Betula	2	1	1	3	1	2	2	3	1	1	4	3	3	1	1	2	1	—	—	3
Carpinus	1	—	—	1	—	—	—	2	—	—	1	—	—	1	1	—	—	—	—	—
Fagus	5	2	3	2	4	5	4	6	2	3	5	4	5	3	2	3	2	—	1	2
Quercus	16	11	14	13	14	13	11	15	8	12	17	15	14	11	9	12	8	3	9	14
Ulmus	6	6	5	6	4	3	11	9	3	7	8	7	6	5	5	3	2	—	1	6
Tilia	—	1	1	—	1	1	—	2	—	—	1	—	2	1	—	1	1	—	—	1
Magnolia	1	1	2	—	1	1	1	1	—	1	2	1	1	1	—	—	1	—	—	1
Prunus-Rubus	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Phellodendron	—	1	—	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
Rhus	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Acer	1	1	—	—	1	1	1	2	1	3	2	2	1	1	—	1	1	—	1	1
Aesculus	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Araliaceae	1	1	—	—	1	1	—	3	—	1	1	2	—	1	—	1	—	—	—	1
Sambucus	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Polygonaceae	6	3	5	5	4	3	1	7	6	4	8	9	7	5	3	8	6	2	5	8
Chenopodiaceae	1	1	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	—	—
Caryophyllaceae	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Ranunculaceae	16	8	11	10	8	15	18	19	13	18	21	23	19	13	5	7	11	3	8	15
Cruciferae	1	—	—	—	—	1	1	1	—	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—
Rosaceae	1	—	—	—	—	—	1	1	—	—	—	2	1	1	1	2	1	—	1	2
Leguminosae	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Guttiferae	1	6	2	1	—	1	—	1	3	1	1	—	—	2	—	—	—	—	—	—
Umbelliferae	13	9	5	1	3	4	6	9	8	11	9	12	8	5	8	7	5	3	9	12
Labiatae	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
Valerianaceae	—	1	—	—	—	—	—	1	—	—	1	1	—	—	1	—	—	—	—	—
Artemisia	21	25	13	12	16	14	17	26	23	28	25	24	21	16	19	15	18	5	13	21
Carduoideae	5	3	6	4	3	1	5	8	4	5	8	6	7	5	2	6	4	1	3	8
Cichorioideae	1	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Plantaginaceae	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Gramineae	282	192	156	92	133	161	112	251	148	258	226	231	187	159	160	128	105	83	136	218
Cyperaceae	1	1	1	—	—	—	2	3	—	1	—	1	2	1	2	—	1	—	—	1
Liliaceae	1	—	—	—	—	—	—	1	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—1	1
Equisetaceae	—	—	—	1	—	—	1	—	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
Lycopodiaceae	2	1	1	—	1	1	1	2	—	1	1	2	—	1	1	1	—	—	—	1
Osmundaceae	11	9	3	1	5	3	7	5	1	1	3	5	4	3	4	1	2	1	3	4
Monolate type spore	34	31	15	8	21	29	18	31	13	30	32	36	31	19	14	18	21	8	25	35
Trilete type spore	2	1	—	—	—	1	1	1	—	1	—	1	—	1	—	—	1	—	—	1
同定不能花粉・胞子	19	12	9	6	18	14	15	23	4	7	17	21	15	6	3	25	9	10	24	31
合　計　（個）	471	344	271	176	256	287	243	463	251	413	424	425	352	276	257	257	206	121	254	408

出現している。

全般に樹木花粉の出現数は少なく草本花粉が主となった花粉構成を示すが，草本花粉のなかでもGramineaeが各試料で優占しているのが特徴的である。

2）L－36グリッド；L－36グリッドから採取された13点の土壌試料からは13属1科の樹木花粉，1属10科の草本花粉，3科の胞子と2種類の形態分類胞子を同定した。産出した花粉・胞子の種類と出現数は表Ⅳ－2に示したとおりである。

縄文時代の遺物包含層であるⅡ層から検出された樹木花粉は落葉広葉樹の *Alnus*, *Quercus* が優勢で，*Juglans-Pterocarya*, *Betula*, *Fagus*, *Ulmus*, *Magnolia*, *Acer*, Araliaceaeを伴なった構成を示す。草本花粉・胞子ではGramineaeが優占し，次いでPolygonaceae, Ranunculaceae, Umbelliferae, *Artemisia*, Carduoideae, Osmundaceae, Monolate type sporeが多く出現している。2点の試料から出現した花粉・胞子の構成は，H－6住居跡から採取された試料で確認された花粉構成とほとんど同じである。

Ⅲで出現した花粉・胞子の出現数は，樹木花粉・草本花粉・胞子ともにⅡ層に比較して少なくなる。樹木花粉では針葉樹の *Abies*（モミ属），*Picea*（トウヒ属）と落葉広葉樹の *Alnus*, *Betula*, *Quercus*, *Ulmus*, *Tilia* が1～3個出現するだけである。草本花粉・胞子の出現数はⅡ層に比べて少なくなるが，その構成はⅡ層の出現傾向とほぼ類似したものである。

Ⅳ層ではⅢ層に比べて出現する花粉・胞子の種類・数ともに減少している。樹木花粉はNo.1～4の試料で *Alnus*・*Betula* が出現するだけで，他の樹木花粉を確認することはできなかった。草本花粉・胞子ではPolygonaceae・Ranunculaceae・Rosaceae・Umbelliferae・

表Ⅳ－2　L－36区柱状試料から産出した花粉・胞子

試料No. / 花粉・胞子	Ⅱ層 1	Ⅱ層 2	Ⅲ層	Ⅳ層 1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
Abies	2	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Picea	—	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Pinus	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Juglans-Pterocarya	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Alnus	15	11	3	1	2	1	—	—	—	—	—	—	—
Betula	5	3	1	2	1	1	1	—	—	—	—	—	—
Carpinus	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Fagus	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Quercus	13	6	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Ulmus	6	4	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Tilia	1	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Magnolia	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Acer	1	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Araliaceae	1	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Polygonaceae	8	12	5	1	2	1	—	—	—	1	1	—	1
Ranunculaceae	11	9	8	1	—	1	—	1	—	—	—	—	—
Cruciferae	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Rosaceae	—	2	1	1	—	—	—	—	1	—	—	1	—
Guttiferae	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Umbelliferae	6	4	7	1	—	—	1	—	—	—	—	—	—
Artemisia	18	21	11	6	2	—	1	—	—	—	—	—	1
Carduoideae	5	3	2	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—
Gramineae	189	248	163	17	9	1	2	1	1	3	1	—	1
Cyperaceae	1	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Liliaceae	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Equisetaceae	1	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Lycopodiaceae	1	1	3	2	1	1	—	—	—	1	—	—	—
Osmundaceae	2	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Monolate type spore	41	58	21	8	3	5	1	—	1	—	—	—	—
Trilite type spore	3	1	2	1	2	1	1	1	2	1	—	1	1
同定不能花粉・胞子	11	6	4	2	1	—	—	1	—	1	—	1	1
合　計（個）	351	399	239	43	24	12	7	4	5	7	2	3	5

Artemisia・Carduoideae・Gramineae・Lycopodiaceae（ヒカゲノカズラ科）・Monolate type spore・Trilite type sporeが僅かに出現しているだけである。

3　古植生について

1）H－6住居跡（縄文時代中期中葉）の古植生

現在，遺跡周辺は耕作地，住宅地で，かって開墾が進められる以前の森林植生はどこにも残存していないほど開発されている。

ここでは，縄文時代中期の住居跡を埋積した土壌のうち，住居で生活していた頃に最も近い年代に堆積した床面上5 cmまでの土壌，および，縄文時代の遺物包含層であるⅡ層の土壌が試料として採取されている。しかし，水中とは異なり空気の流通が良い風積土壌中に含有されていた花粉・胞子は好気性バクテリア等による分解作用を受け多くが消失し，分解されにくかったり含有されていた数が多い花粉・胞子が残存したものと考えられる。従って，ここで出現した花粉・胞子の種類と数は当時の植生をそのまま反映したものとは言えないが，出現が確認された花粉・胞子の母植物が遺跡周囲に生育していたことは確かであろう。

22点の試料で確認された花粉・胞子から，縄文時代中期頃遺跡の周囲にヤナギ類，オニグルミ—サワグルミ，ハンノキ，シラカンバ，サワシバ，ブナ，コナラ，ミズナラ，ハルニレ，シナノキ，コブシ，ホウノキ，キハダ，イタヤカエデ，ハウチワカエデなどからなる落葉広葉樹林が分布していたことが推定される。ハンノキ属やコナラ亜属などの花粉が多く出現していることから，二次林が形成されていた可能性が強いが，上記の樹木構成からなる森林は現在も遺跡背後に連なる丘陵部に分布していて，縄文時代中期から今日に至るまで森林の構成種に大きな変化はなかったことを示している。住居はこれらの落葉広葉樹林を伐採して造られ，住居の周囲の空間にはススキ，オオヨモギ，オオイタドリ，アキカラマツ，エゾニュウ，ゼンマイ，シダ類を主とした陽地性の草本群落が繁茂していたほか，アカザ科，ナデシコ科，アブラナ科，オオバコ科などの人里雑草も生育していたようである。

落葉広葉樹林

陽地性草本
人里雑草

さて，H－6住居跡では住居跡を1 m方眼で区切って，各方眼から1点ずつ計20点の試料が採取されたが，各方眼で採取された試料に含有されていた花粉・胞子の構成はほぼ同様な出現傾向を示していて，構成種・出現比率に大きな違いは認められない。従って，住居内の区域による花粉・胞子の堆積環境には大きな差はないものと考えてよいであろう。

2）旧石器時代の古植生

旧石器時代の遺物は，Ⅳ層の上部から10～40cm付近の明黄褐色ローム質粘土から産出している。産出した石器は細石刃，荒屋型彫器等を主とした旧石器で，その年代は約1万2～3千年前頃である。

旧石器の遺物包含層付近から出現しているのは，樹木ではハンノキ属（ハンノキ・ミヤマハンノキ等），カバノキ属（シラカンバ・ウダイカンバ・ダケカンバ等）だけで，草本・胞子は陽地性の草本群落を形成する，タデ科，キンポゲ科，バラ科，セリ科，ヨモギ属，キク亜科，イネ科，ヒカゲノカズラ科，シダ類が検出された。その種類及び出現数は縄文時代の遺物包含層に比較して極めて少なく，当時の植生すべてを反映したものとは考えられない。火山灰を母材としたローム質粘土は，その堆積過程及び堆積後の空気の流通性か

らも，花粉等の保存に適したものではなく，これまでにも，ローム質粘土から多くの花粉・胞子が検出されたことはなく，堆積した花粉や胞子の大部分は分解したものと考えられる。

さて，函館市周辺の更新世末期の古植生に関する報告は極めて少なく，遺跡の前面に広がる大野平野の北端の熊の湯（標高136m）に堆積した泥炭の花粉分析を行なった中村・塚田（1960），中村（1973）による報告があるだけである。中村・塚田（1960），中村（1973）によると，同地周辺は約1万4千年前頃から約1万年前頃には針葉樹のトウヒ属が優占しモミ属，マツ属，カバノキ属を伴なった亜寒帯性針葉樹林で覆われ，林床下にはイネ科，カヤツリグサ科，セリ科，キク亜科，ヨモギ属，アカザ科，バラ科，キンポウゲ科，シダ類，ゼンマイ科などの草本・胞子が繁っていたことが明らかにされている。

更新世末期

亜寒帯

石川1遺跡が位置しているのは標高約30m付近の段丘上で，熊の湯とは標高差が約100m程あるが，旧石器時代の人々が生活していた頃，遺跡周辺にも亜寒帯性針葉樹木が分布していたと推定してもよいであろう。しかし，気候の温暖化に伴なって亜寒帯性針葉樹林の密度は次第に疎になってきていたことが予想される。石川1遺跡で産出した旧石器文化と年代が近い，今金町美利河1遺跡（山田，1984），富良野市東麓郷2遺跡（山田，1987）では遺物包含層から冷温帯林要素の落葉広葉樹花粉が出現し始めている。その出現は冷温帯性落葉広葉樹の分布が北に拡大し始めていたことを示すものである。北海道の西南端に位置した函館市周辺にもその影響が出はじめていたことが予想されるものの，このたびの花粉分析の結果では確認することができなかった。

亜寒帯

美利河1・東麓郷2

冷温帯

3）H－6住居跡から産出した植物遺体について

H－6住居跡では床面を1mメッシュで方眼に区切り花粉分析用試料を採取したことは先に述べたが，同時に各方眼から土壌のフローテーション用試料も採取し，フローテーションが行なわれた。産出した炭化物の大部分は炭化木材の小片であるが，当時の食料の断片も産出している。ほとんどが2～5mmの小片であるが，オニグルミの核片がNo.1，4，5，6，11，12，17，20，21，22から1～2片産出した。このほかには，No.21からアカザ科の種子が1点産出しただけで，他にはシダ類の胞子粒がNo.1，2，9，19，20，21，22，24，26から僅かに産出するだけである。

オニグルミ

アカザ科種子

シダ類胞子粒

産出したオニグルミの核片は住居内で食用した際に飛散したもので，大きな殻は住居外に捨てられたが，飛散した核片のうち炭化した小片のみが腐食しないで住居跡内に残っていたものと推定される。

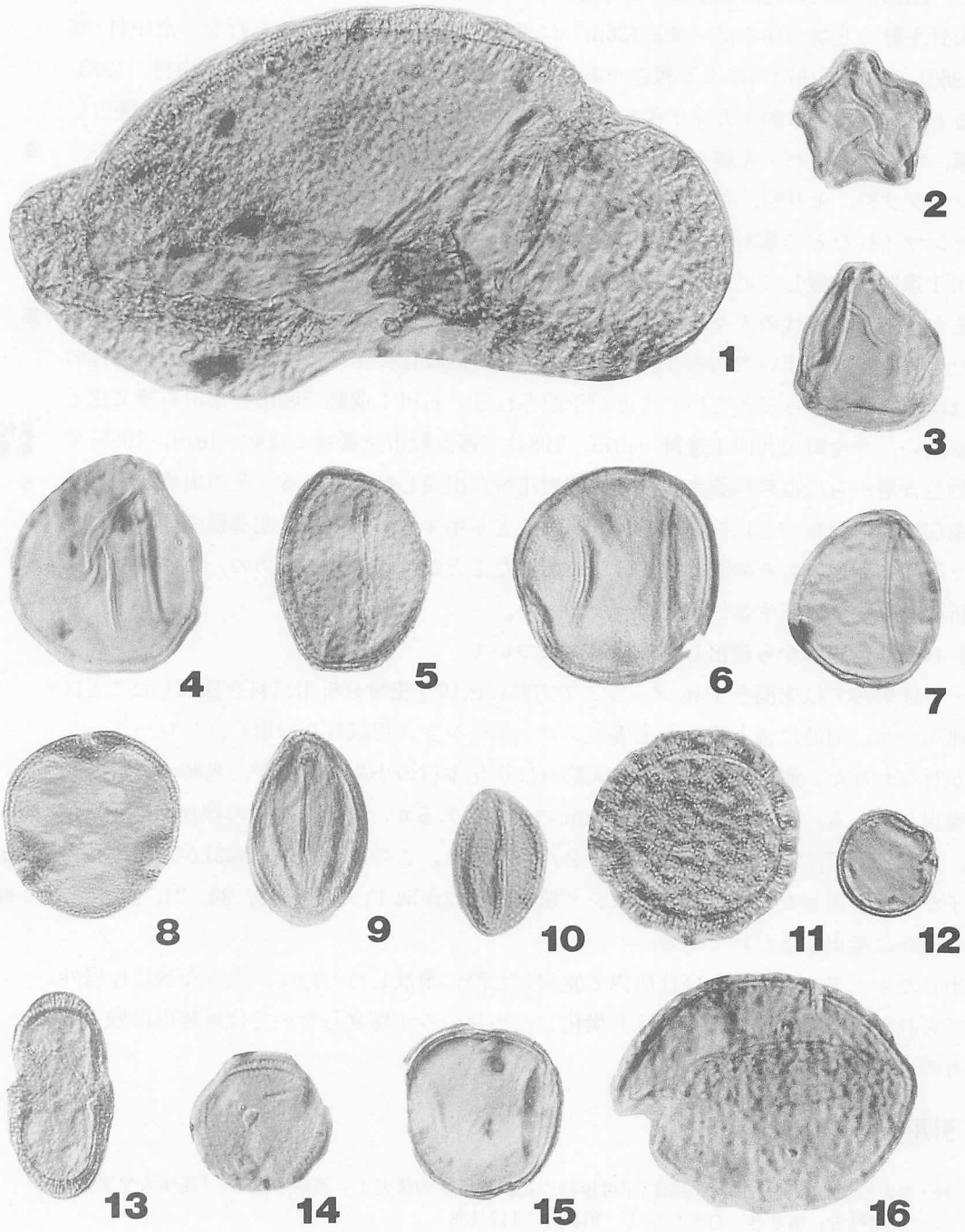
4　引用・参考文献

中村　純・塚田松雄（1960）「北海道第四紀堆積物の花粉分析学的研究Ⅰ　渡島半島(1)」『高知大学学術研究報告』第9巻　自然科学Ⅰ　第10号　117-138

――――（1973）「花粉化石からみた日本の後期洪積世」『第四紀研究』第12巻第2号　29-37

山田悟郎（1984）「美利河1遺跡の古植生について」『今金町美利河1遺跡』251-256　北海道埋蔵文化財センター

――――（1987）「東麓郷1，2遺跡から産出した花粉・胞子」『東麓郷1，2遺跡』77―82　北海道富良野市教育委員会



1. *Abies,* No.16 2. *Alnus,* No.13 3. *Betula,* No.13 4. *Juglans-Pterocarya,* No.13
5. *Quercus,* No.16 6. *Fagus,* No.13 7. *Ulmus,* No.11 8. *Tilia,* No.13
9. *Acer,* No.13 10. Polygonaceae, No.16 11. Polygonaceae, No.17
12. Ranunculaceae, No.13 13. Umbelliferae, No.17 14. *Artemisia,* No.13
15. Gramineae, No.4 16. Osmundaceae, No.13 （倍率は×1,000）

図Ⅳ－1　H－6住居跡から産出した花粉・胞子

(2)　石川１遺跡の火山灰について

本遺跡が立地する段丘面は更新世の粘土質降下火山灰（いわゆる「ローム」。以下，この語を使用。）に覆われている。ローム層からは旧石器を産出する。ローム層は函館周辺の段丘面上に一般に認められ，旧石器の包含層として重要であるばかりでなく，第四紀地史を明らかにするためにも重要な地層である。ローム層の上位には黒ボク土が発達し，縄文・続縄文時代の遺物が出土する。黒ボク土中には完新世の降下火山灰層が挟まれる。

ローム　旧石器　黒ボク土

ここでは，これらの火山灰について，火山灰の対比や遺物・遺構の編年の基礎資料とするために，主に鉱物組成上の記載をした。ロームについては粒度分析を合わせて行い，旧石器の産出層準を検討した。

1　火山灰の産状・岩相

(1)　ローム層

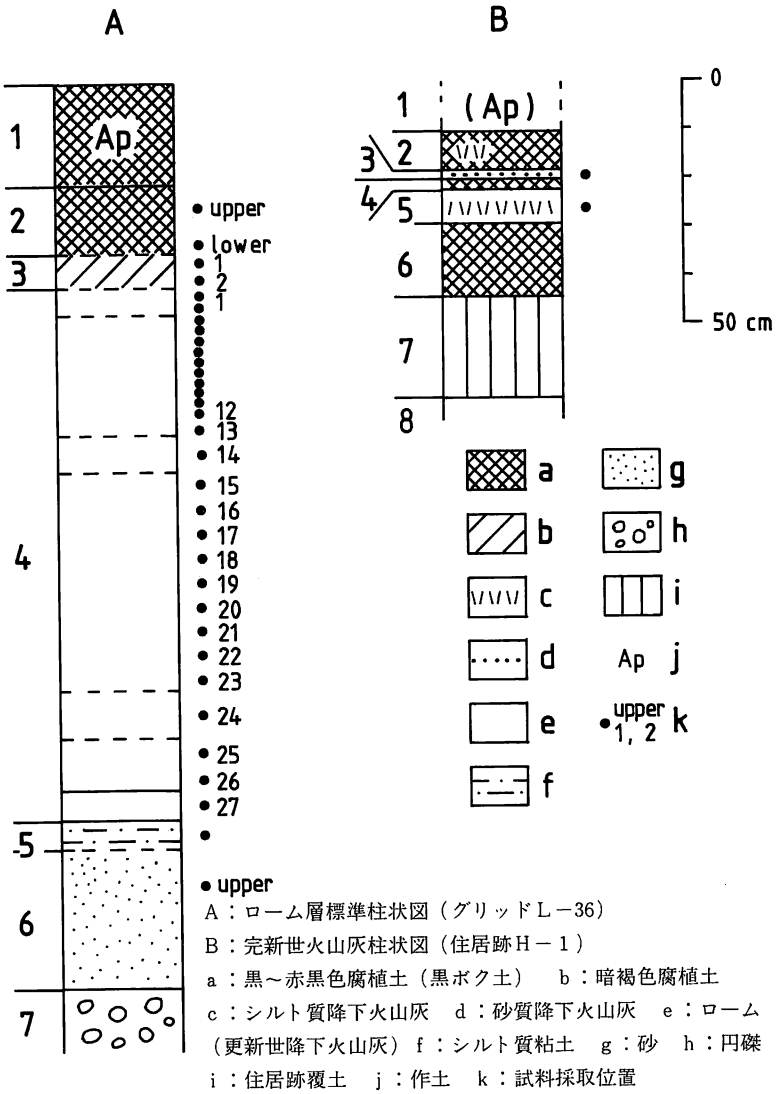
グリッドＬ－36附近の現地表面はほぼ平坦で，ローム層の著しい侵蝕や再堆積を受けていないと思われる。Ｌ－36で作成した柱状図を，本遺跡におけるローム層の標準柱状図とする（図Ⅳ－２－Ａ。３層・４層をローム層として取り扱う。）。標準柱状図のローム層は厚さ約120cm，段丘堆積物を整合的に覆っている。最上部17cmは腐植土化している。腐植土化していない部分は，明褐色・黄褐色・明黄褐色を呈し，みかけの岩相から七層に区分することができる。岩相の境は不明瞭な場合が多い。ローム層基底部には径５ cm＞の軽石を含む。最上部の暗褐色土のほぼ直下には，黄灰色の砂質火山灰をレンズ状に産することがある（柱状図位置には産しない。）。ローム層下半部から段丘堆積物へかけて，周氷河性（？）の発達の弱いインボリューションが認められることがある。柱状図は，インボリューションを認め難い位置を選んで作成した。

標準柱状図

なお，同じ柱状図位置からは，花粉分析用試料が採取された（Ⅳ－１(1)参照）。

(2)　完新世火山灰層

完新世の火山灰は，表層部の黒ボク土中に，斑点状・レンズ状を呈し



● upper

Ａ：ローム層標準柱状図（グリッドＬ－36）

Ｂ：完新世火山灰柱状図（住居跡Ｈ－１）

ａ：黒～赤黒色腐植土（黒ボク土）　ｂ：暗褐色腐植土

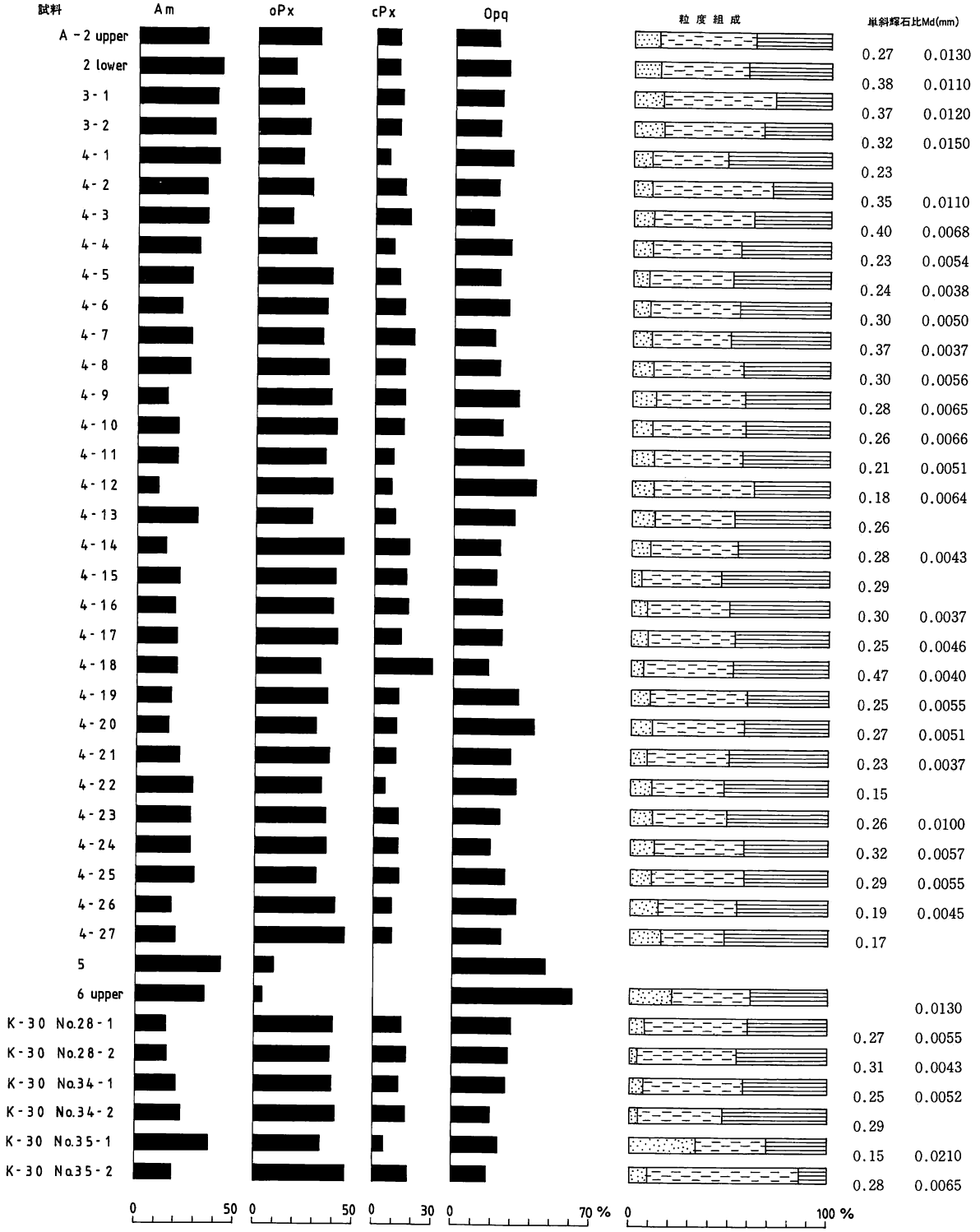
ｃ：シルト質降下火山灰　ｄ：砂質降下火山灰　ｅ：ローム（更新世降下火山灰）ｆ：シルト質粘土　ｇ：砂　ｈ：円礫

ｉ：住居跡覆土　ｊ：作土　ｋ：試料採取位置

図Ⅳ－２　火山灰層序

て断続的に産出する。住居跡H－1における地質断面には，三層の火山灰が認められた(図Ⅳ－2－B)。下位の火山灰は黄褐色シルト質で，厚さ7～10cm，レンズ状に産出する。中位の火山灰はにぶい黄色を呈し，細～中粒砂質で厚さ1.5cm，レンズ状に産出する。上位の火山灰は灰白色シルト質で，斑点状に産出する。

これらの火山灰は，すべて縄文・続縄文時代の遺物・遺構の上位に堆積し，こられを直接に覆うことはない。



Am：角閃石 oPx：斜方輝石 cPx：単斜輝石 Opq：不透明鉱物(鉄鉱物) Md(mm)：中央粒径(mm)

図Ⅳ－3　ロームの重鉱物組成と粒度組成

2　試料の処理

ローム層については，標準柱状図作成位置の地質断面から，2.5cmまたは5 cm間隔のほぼ連続した試料を採取した（一部，黒ボク土と段丘堆積物を含む。）。完新の火山灰層については，住居跡H－1の地質断面から，下位と中位の火山灰を採取した。また，旧石器の産出層準を検討するために，グリッドK－30の遺物の直下から2.5cm間隔の連続試料を採取した。採取した試料は検鏡の他，ロームについては粒度分析に供した。

検　鏡

検鏡用試料は次の手順で処理した。水洗→6％H_2O_2・10% HCl処理→水洗→乾燥→篩分け→粒径1/4—1/8mmについてカナダバルサムを封入剤としてプレパラートを作成→偏光顕微鏡下で，ロームについては重鉱物を200—300粒，完新世火山灰については全鉱物を300—400粒検鏡→各鉱物量比を粒数％で表わす。

粒度分析

粒度分析は，砂分（粒径2－1/16mm）以上を篩分け法，泥質分（粒径1/16mm>）をピペット法で行った。ピペットによる吸い上げは，粒径1/256mmまでである。

一部の試料については，浸液法による火山ガラスの屈折率を測定した。

3　鉱物組成・粒度組成上の特徴

(1)　ローム層

重鉱物組成

重鉱物組成を図Ⅳ－3に示す。重鉱物は一般に，角閃石・斜方輝石・単斜輝石・不透明鉱物（鉄鉱物）から成る。各試料の鉱物量比は深度によって異なる。角閃石は，下部から上部へ，やや多→少→多となる。斜方輝石は全試料において多く含まれるが，上部でやや減少する。単斜輝石は一般に少ないが，4—18には多く含まれる。不透明鉱物は，下部から上部へ，少→多→少→多→少の繰り返しがある。単斜輝石比（単斜輝石量／全輝石量）は，0.15—0.47である。0.2—0.3を示す試料が多い。

粒度組成

粒度組成を図Ⅳ－3及び図Ⅳ－5に示す。砂分を10%±含む，粘土質シルトまたはシルト質粘土である。中央粒径Md（mm）は0.0037—0.0150（一部の試料で読み取り不能）である。概して，暗褐色土部分（3層）とその下位は，比較的粗粒である。

段丘堆積物（5層・6層）は単斜輝石を含まない。黒ボク土（2層）は角閃石に富み，上部では斜方輝石も多い。黒ボク土と暗褐色土では，砂分が比較的多い。

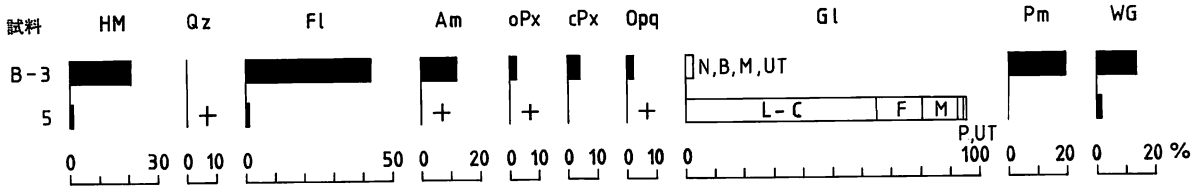
(2)　完新世火山灰層

鉱物組成

鉱物組成を図Ⅳ－4に示す。下位の火山灰は，重鉱物が僅量で，ほとんど火山ガラスから成る。

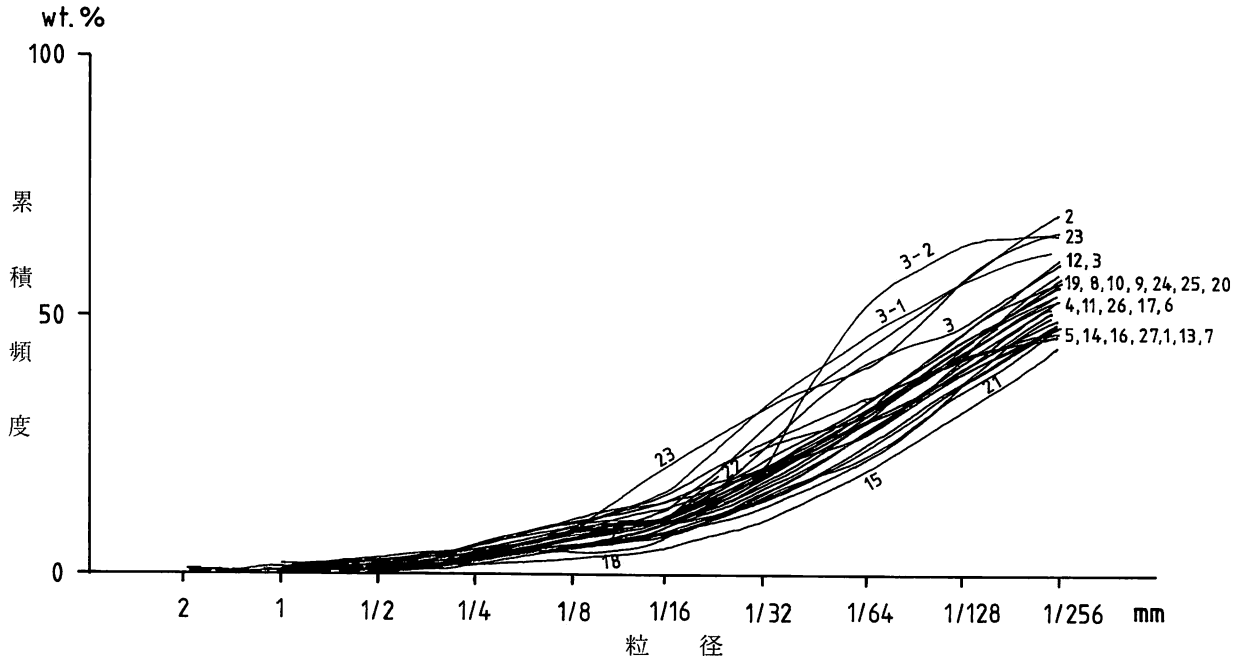
火山ガラスの形態

火山ガラスの形態は，L—C型（仮称。気泡が破砕し，泡壁がridgeをなして直線～曲線状に走るもの。）が多く，F型（仮称。扁平で，気泡が繊維状に細長く平行に伸びているもの。），M型（仮称。気泡と泡壁がつくる模様が網目状にみえるもの。），P型（仮称。



HM：重鉱物　Qz：石英　Fl：長石　Am：角閃石　oPx：斜方輝石　cPx：単斜輝石　Opq：不透明鉱物（鉄鉱物）
Gl：火山ガラス（N，B等は火山ガラスの型。本文参照。）　Pm：軽石　WG：風化鉱物粒　＋：1％>

図Ⅳ－4　完新世火山灰の鉱物組成



3－1・3－2は暗褐色土部分，その他は4層。

図Ⅳ－5　ロームの粒度累積曲線(1)—標準柱状図試料—

火山ガラスの屈折率

薄い平板状。)を伴う。アルカリ長石を僅量含む。火山ガラスの屈折率は，1.503—1.521である。

中位の火山灰は，主に斜長石から成り，少量の重鉱物と軽石を含む。重鉱物量は，角閃石＞単斜輝石＞不透明鉱物≒斜方輝石。単斜輝石比0.61。火山ガラスは少量で，N型（仮称。扁平～塊状で，針状の気泡・条線が認められるもの。），B型（仮称。気泡が微細で粒子全体の形状が漿果状。），及びM型から成る。

上位の火山灰は，住居跡H－1の地質断面から採取していないが，他のグリッドで得られたこれに対比される試料では，主に斜長石とM型火山ガラスから成っている。

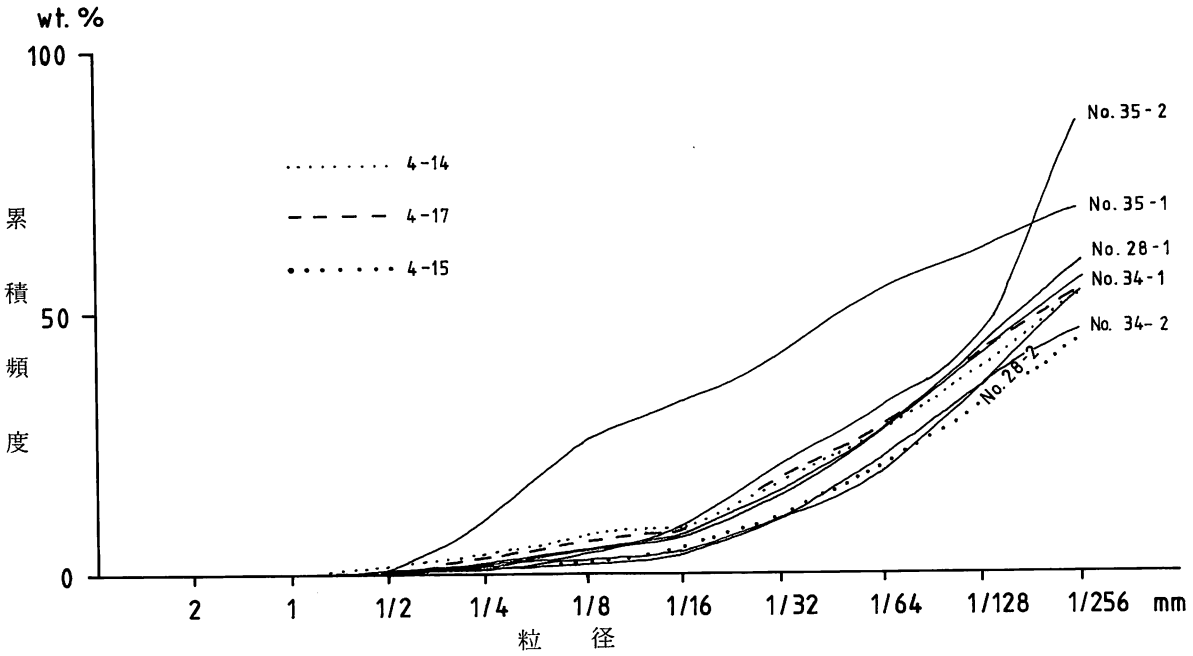
火山灰の対比

道南地方での当センターの発掘調査において，これまで確認された完新世火山灰と，本遺跡の火山灰とは以下のように対比される。

下位の火山灰は，建川2と新道4遺跡の「Sm－c」，札苅遺跡の「St－c火山灰」，矢不来2遺跡の「Yf－b」，矢不来天満宮跡の「黄～黄褐色シルト質火山灰」，及び桔梗2遺跡の「下位の火山灰」に対比される（北海道埋蔵文化財センター，1986a・1987a.b・1988a.b)。本火山灰は，ほとんど火山ガラスから成り，アルカリ長石を含む。町田ほか（1981）・町田ほか（1984）の「白頭山—苫小牧火山灰」に対比されると考えられる。

中位の火山灰は，建川2と新道4遺跡の「Sm－b」，札苅遺跡の「St－b火山灰」，矢不来天満宮跡の「砂質火山灰」，及び桔梗2遺跡の「中位の火山灰」に対比される（北海道埋蔵文化財センター，1986b・1987・1988a.b)。本火山灰は，重鉱物のうち角閃石が多く，輝石類は単斜輝石量が斜方輝石量を上回る。粗粒部（粒径1/4mm＜）では軽石が多い。

上位の火山灰は，湯の里3遺跡の「Yn－b火山灰」，建川2と新道4遺跡の「Sm－a」，札苅遺跡の「St－a火山灰」，矢不来2遺跡の「Yf－a」，矢不来天満宮跡の「白色シルト質火山灰」，及び桔梗2遺跡の「上位の火山灰」に対比される（北海道埋蔵文化財センター，1986a.b・1987a.b・1988a.b)。本火山灰は，斜長石とM型火山ガラスの両方，または一方に富み，二・三枚のフォールユニットに細分される。



図Ⅳ－6　ロームの粒度累積曲線(2)—比較試料—

4　旧石器産出層準の検討

ローム層における旧石器の産出層準を明らかにするために，遺物直下のロームの鉱物組成と粒度組成を，グリッドL－36で作成した標準柱状図のローム試料と比較した。比較試料は，グリッドK－30の遺物No. 28（剝片），No. 34（両面調整石器），及びNo. 35（彫器）の直下から採取した。No. 28とNo. 34については2.5cm間隔の連続した二試料，No. 35については直下2.5cmまでの一試料である。　比較試料

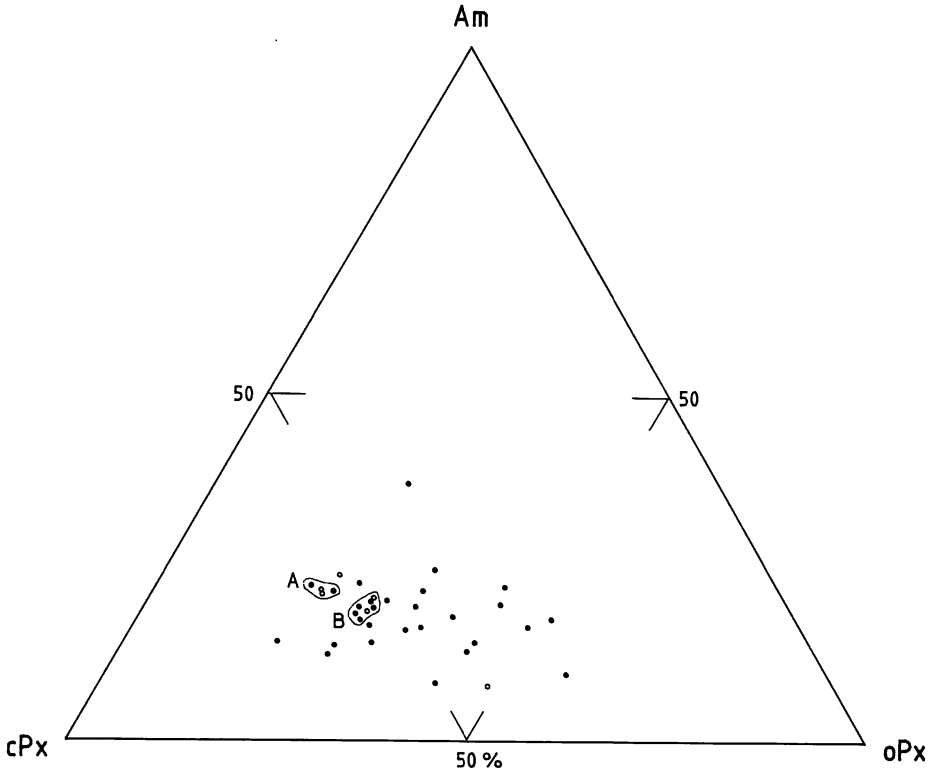
比較試料の鉱物組成を図Ⅳ－3に示す。試料には，上部から下部へ，－1，－2の番号を添付してある。ただし，No. 35－1は遺物直下ではなく，側方に位置している。これは，暗褐色土のほぼ直下の黄灰色砂質火山灰（前述）である。No. 35－1を除いて，一般に斜方輝石を多く含んでいる。単斜輝石比は0.25－0.31である。No. 35－1は斜方輝石とともに角閃石を多く含んでいる。単斜輝石は少なく，単斜輝石比は0.15である。

比較試料の粒度組成を図Ⅳ－3及び図Ⅳ－6に示す。No. 28とNo. 34は，4－8％の砂分を含む粘土質シルトである。中央粒径Md（mm）は，0.0043－0.0055（一部の試料で読み取り不能）である。No. 35－2はシルト分に富んでいる。中央粒径Md(mm)は0.0065。No. 35－1は，砂・シルト・粘土がほぼ等量含まれる。中央粒径Md（mm）は0.021。

これらの比較試料と標準柱状図試料との鉱物組成上の比較のために，角閃石—斜方輝石—単斜輝石の三角ダイアグラムを作成した(図Ⅳ－7)。この図から二つのまとまりが認められる。図中のAは，4層の9・14，比較試料No. 28－1・35－2である。No. 28－1とNo. 35－2はほぼ一致する。図中のBは，4層の10・15・17・19・20，比較試料No. 34－1とNo. 34－2である。　三角ダイアグラム

一方，粒度分布の比較をすると，14とNo. 28－1，17とNo. 34－1，15とNo. 34－2は，それぞれ累積頻度曲線がよく一致する（図Ⅳ－6）。

さらに，角閃石はほとんどの試料において緑色種が優勢であるが，14，17，及びNo. 28－



Am：角閃石　oPx：斜方輝石　cPx：単斜輝石　●：標準柱状図
試料　O：比較試料　A：4層9・14，比較試料No. 28－1・35－2
B：4層10・15・17・　19・20，比較試料No. 34－1・34－2

図Ⅳ－7　ロームの角閃石―斜方輝石―単斜輝石量比

1では，緑色種と褐色種とがほぼ等量である。

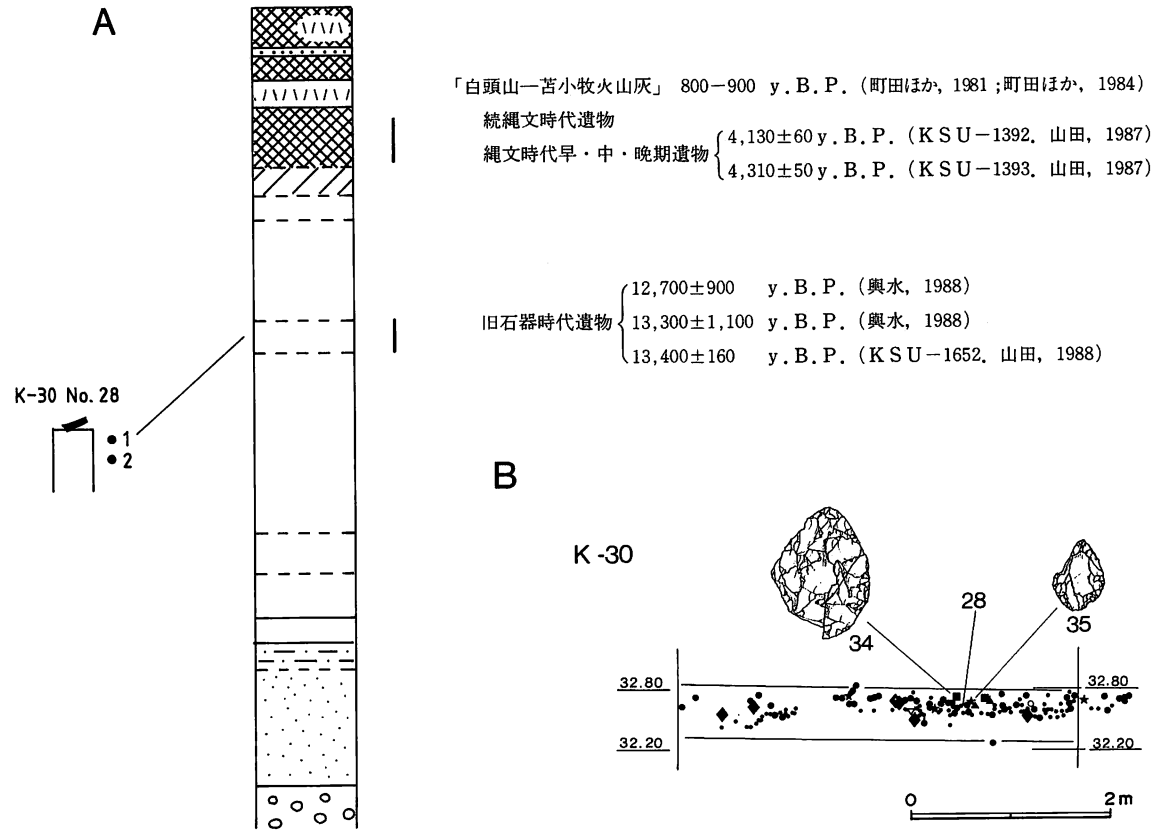
以上の点から，鉱物組成，粒度組成，及び角閃石の種類がよい一致を示すのは，14とNo. 28－1であり，互いに対比されると考えられる。

旧石器の産出層準古地表面

したがって，旧石器の産出層準は，標準柱状図の4－14附近にあると推定される。また，この層準は，古地表面に近い層準だと考えられる。図Ⅳ－8－Bに示されているように，グリッドK－30での遺物は垂直幅約20cmの範囲から産出しているので，古地表面の復元もこの程度の幅を考えた方がよいであろう。標準柱状図のローム層中，14の層準はその上下と比べてやや硬く，マンガン結核を多く含み，岩相を異にしている。かつての表層土を示しているものかもしれない。

5　ローム層の年代

遺物の炭化木片と黒曜石について，年代測定が行われた。炭化木片は，13，400±160^{14}C y.B.P.（KSU－1652。山田，1988），黒曜石は，13,300±1,100 y.B.P.（焼けた黒曜石のフィッション・トラック年代），及び12,700±900 y.B.P.（水和層年代）である（興水，1988）。三試料とも概ね一致する値である。遺物産出層準と推定される標準柱状図4－14のローム層を，ここで一応，12,700－13,400ｙ．Ｂ．Ｐ．と考えておく。



図Ⅳ－8　火山灰の層序と年代

6　ま　と　め

石川1遺跡で認められた火山灰層は，更新世の降下火山灰であるローム層と完新世の降下火山灰層である。完新世の火山灰三層のうち，下位の黄褐色シルト質火山灰は，800—900年前の白頭山—苫小牧火山灰（町田ほか，1981；町田ほか，1984）に対比される。上位の灰白色火山灰も細粒均質で，比較的広域に分布している可能性がある。ローム層は，鉱物組成や岩相の違いから数層に区分されると考えられる。一般に，砂混じりの，粘土質シルトまたはシルト質粘土である。ローム層中の旧石器産出層準は，標準柱状図の4－14附近と推定される。この層準は，黒ボク土の基底から約37－45cm下方にあり，遺物の年代から12,700－13,400 y.B.P.である。

白頭山—苫小牧火山灰

以上の結果を模式的に図Ⅳ－8－Aに示す。

引用文献

北海道埋蔵文化財センター（1986a）：木古内町札苅遺跡．128pp.
北海道埋蔵文化財センター（1986b）：知内町湯の里3遺跡．54pp.
北海道埋蔵文化財センター（1987a）：上磯町矢不来2遺跡．91pp.
北海道埋蔵文化財センター（1987b）：木古内町建川2・新道4遺跡．614pp.
北海道埋蔵文化財センター（1988a）：函館市桔梗2遺跡.
北海道埋蔵文化財センター（1988b）：上磯町矢不来天満宮跡.

與水達司（1988）：石川１遺跡の年代および同遺跡出土黒曜石片の原産地．本書，pp.
町田　洋・新井房夫・森脇　広（1981）：日本海を渡ってきたテフラ．科学，**51**，pp. 562-569.
町田　洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重夫（1984）：テフラと日本考古学―考古学研究と関係するテフラのカタログ―．古文化財編集委員会編「古文化財の自然科学的研究」，984pp.，同朋舎：pp. 865-928.
山田　治（1987）：KSU－1392・KSU－1393.
山田　治（1987）：KSU－1393.
山田　治（1988）：KSU－1652.

（花岡正光）

(3)　石川１遺跡より得た炭化木片について

三　野　紀　雄
（北海道開拓記念館）

函館市石川１遺跡より得た炭化木片について樹種同定をおこなった。炭化木片は第１表の地表下約60cmの旧石器包含層である第Ⅳ文化層より採取した資料と，第２表の第Ⅱ文化層の縄文中期中葉の竪穴住居址より採取した資料である。人間が木材を利用する形態として，1)建築・土木建造物の材料，2)什器・器具・道具類の材料，3)暖房あるいは炊事のための燃料，土器あるいは器具・道具類を製作するための燃料，4)その他が考えられる。ここでの旧石器文化層より得た資料は利用形態の3)あるいは4)と，そして縄文中期の竪穴住居址より得た資料はその1)と推定されるが，遺跡より採取した木質遺物の樹種を調査することにより樹木に対する当時の人々の考え方とその利用のされ方それに当時の遺跡周辺の環境を知る一助となる。この調査の機会を与えて下さった畑宏明氏，長沼孝氏はじめ財団法人北海道埋蔵文化財センターの方々に感謝申し上げる。

木材利用形態

1　方　　法

遺跡の発掘地より採取した資料を，風乾の後それぞれ３個の小片に分割し，それらの小片を木材組織の木口面，柾目面，板目面を観察できるように安全剃刀でカッティングし，試料台に伝導性接着剤ドウタイトＤ－550で接着，さらに金蒸着の後に走査電子顕微鏡（JEOL－JSM－S1型）で木材組織を観察し樹種を同定した。その際，現生樹木の組織標本および記載文献を参照した[1)2)]。

処理手順　走査電顕

2　結　　果

1）旧石器包含層より採取した炭化木片

旧石器包含層より採取した炭化木片のうちグリットＫ－29および30の資料は焼土を伴出することから先に述べた利用形態の3)あるいは4)と推定される。グリットＪ－33およびＫ－40の資料の利用形態は不明である。樹種同定の結果，表Ⅳ－３のとおりマツ属（*Pinus* sp.），トウヒ属（*Picea* sp.）の樹木２種が見られた。マツ属（*Pinus* sp.）はハイマツあるいはヒメコマツなど五葉松類（ゴヨウマツ亜属），トウヒ属（*Picea* sp.）はエゾマツあるいはアカエゾマツと思われる。それらの樹木の出現比率ではマツ属（*Pinus* sp.）の樹木が高い。

マツ属　トウヒ属

各資料の樹種同定の根拠は次のとおりである。マツ属（*Pinus* sp.）：大型の垂直樹脂道と水平樹脂道をもち，エピセリウム細胞の数が少なく薄膜で，炭化木片ではその構造が失われる場合がある。これらの特徴からマツ属としたが，春材から夏材への移行が急なものも見られるのでグイマツと思われるカラマツ属（*Larix* sp.）の樹木が含まれている可能性もある。その移行が急なものは年間の成長量が極めて少なく一年輪幅の細胞列は数細胞である。（写真３）

同定根拠　カラマツ属

トウヒ属（*Picea* sp.）：春材から夏材への移行がゆるやかである。垂直および水平樹脂道をもち，エピセリウム細胞は７～８個と数が多く厚膜である。（写真２）

2）縄文中期中葉の竪穴住居址より採取した炭化木片

縄文中期中葉の竪穴住居址Ｈ－５より採取した炭化木片は住居の構造材と考えられ，径

構造材

数cmの丸太状のもの，割板・半割り・四分割など割材状のものが見られる。

石川1遺跡では，縄文早期から縄文中期にかけての13軒の住居址が確認，発掘され，そのうちH－5住居址のみが火災にあい炭化木片が検出されている。H－5住居址は大きさ4.3×3.9m，深さ50cm，隅丸長方形で，主柱穴は壁際に5個そして地床炉とみられる焼土が中央部に2ヵ所みられる。炭化木片は北西隅から検出されている。

クリ材

炭化木片の樹種同定結果は第Ⅳ－4に示したが，数点樹種不明（広葉樹環孔材）のものがあるが，他はすべてクリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）である。クリ材は木理通直，割裂容易でまた耐久性があり，用材として有用である。したがって，それが多用されていることは，植生の主要構成要素とも考えられるが，選択的に伐採・利用された可能性も考えられる。

選択的利用

同定根拠

資料をクリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）とした根拠は次のとおりである：広葉樹環孔材，大型の導環は1列あるいは多列，小導環は放射状あるいは火炎状に配列，導管は単穿孔，射出線は単列そして広射出線は存在しない。（写真1）

3 まとめ

旧石器遺跡における明らかに薪炭材と思われる木質遺物としては，北海道では，千歳市祝梅三角山遺跡・今金町美利河1遺跡の報告例がある[3)4)]。それらの遺跡においても木質遺物のすべてがマツ属（*Pinus* sp.），トウヒ属（*Picea* sp.），カラマツ属（*Larix* sp.）など針葉樹材で，本遺跡でも同様に，火もちがよく薪炭材に適する広葉樹材はまったく見られなかった。これらの樹種構成は針葉樹を中心とする当時の植生を反映していること，そして人間の生活域が植物性の食物を得ることが大変困難な環境にあったことを示しているものと思われる。縄文中期中葉の竪穴住居址H－5ではクリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）が多用されている。北海道ではこれまでに，クリ材が多用された竪穴住居址の報告例はみられない。このようにクリ材が多用されていることは，道南地方の植生の反映あるいは木材のもつ特性からの選択的利用を示しているものと思われる。

祝梅三角山

美利河1

針葉樹材

クリ材多用

文　献

1）小林彌一（1957）本邦における針葉樹材のカード式識別法　林業試験場研究報告（98）

2）須藤彰司（1959）本邦広葉樹材の識別　林業試験場報告　第118号

3）北川芳男（1974）千歳市祝梅三角地点における地史的所見　千歳市教育委員会

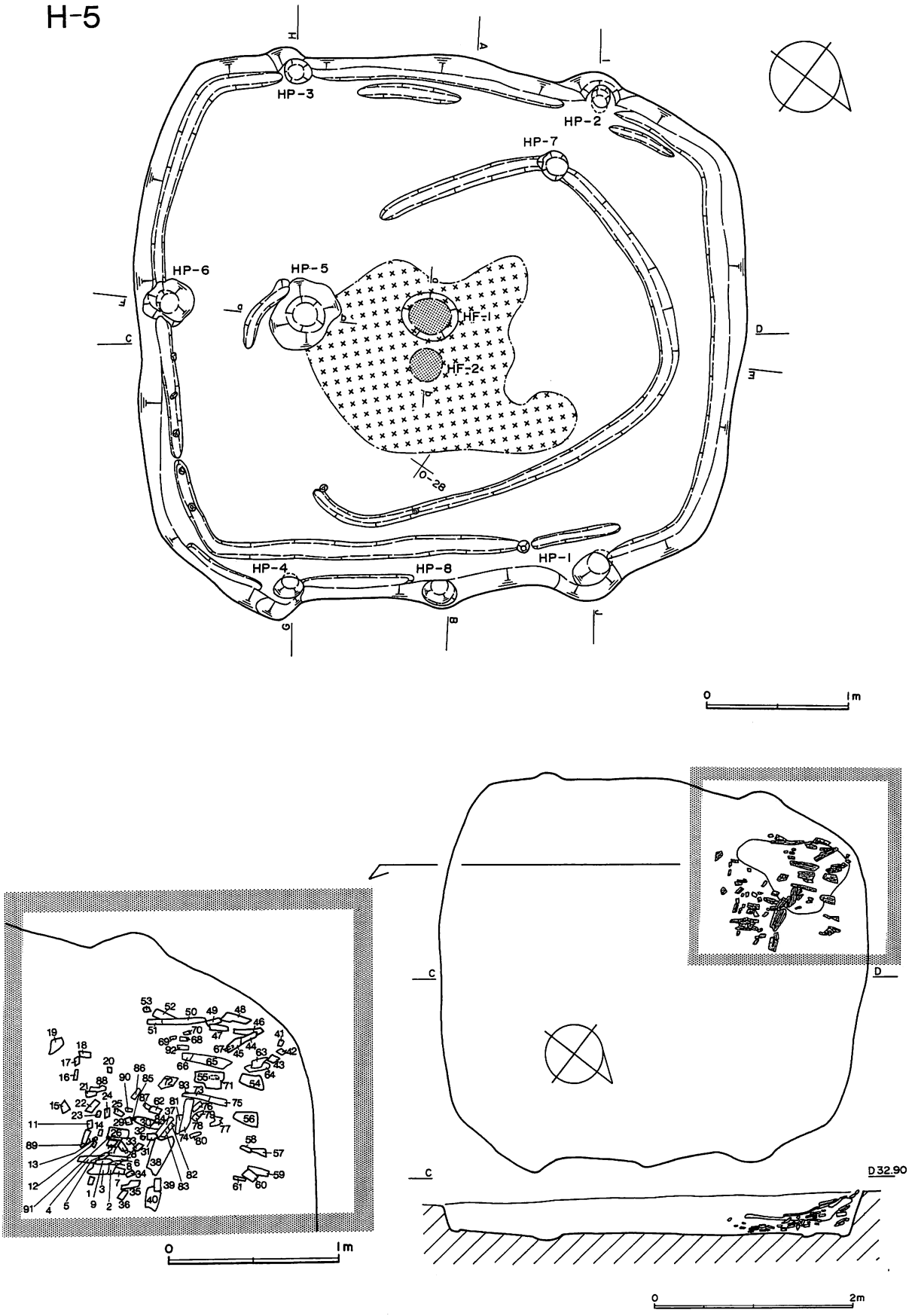
4）財団法人北海道埋蔵文化財センター（1984）今金町美利河1遺跡　北埋調報　No.23

表Ⅳ－3　石川1遺跡（旧石器）出土の炭化木片樹種同定結果

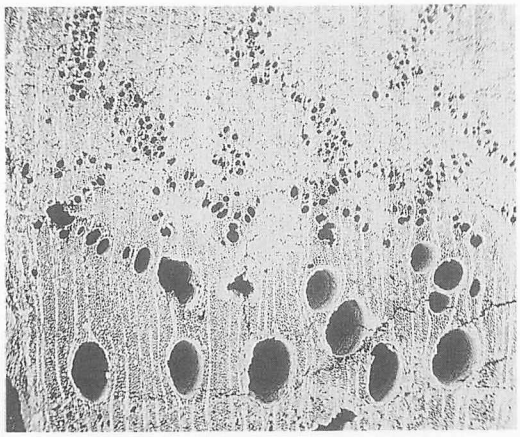
グリッド番号	層位	伴出遺物	資料番号	樹種	備考
K－29	Ⅳ層	細石刃他	1	マツ属（*Pinus* sp.）	焼土およびその周辺に点在（Fb－1，Cb－1）
			2	同上	
			3	トウヒ属（*Picea* sp.）	
			4	マツ属（*Pinus* sp.）	
			5	同上	
			6	同上	
K－30	Ⅳ層	細石刃他	1	同上	焼土およびその周辺に点在（Fb－1，Cb－1）
			2	同上	
			3	同上	
K－33	Ⅳ層	剝片類	1	同上	径約80cmの円形の範囲に点在（Cb－3）
			2	同上	
K－40	Ⅳ層	細石刃他	1	同上	（Cb－4）
			2	同上	

表Ⅳ－4　石川1遺跡H－5出土の炭化木片樹種同定結果

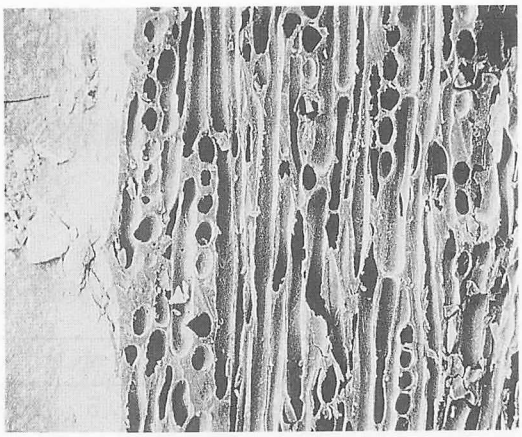
No.	樹種	摘要	No.	樹種	摘要
1	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材	48	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材
2	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材	49	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	断面三角形
3	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材	50	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	断面三角形
4	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材・断面三角形	51	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	断面三角形
5	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材・丸太？	52	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	薄板・割材？
6	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材・断面三角形	53	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	薄板・割板？
7	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材・断面三角形	54	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材
8	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	薄板	55	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材
9	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	薄板	56	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材
10	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	薄板・割板？	57	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材
11	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	薄板	58	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材
12	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	薄板	59	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材
13	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	断面三角形	60	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材
14	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	薄板・割板	61	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材？
15	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材	62	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	丸太
16	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材？	63	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材
17	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	薄板・割板？	64	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材
18	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材？	65	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材
19	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材？	66	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材
20	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	薄板	67	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材
21	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	薄板	68	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材
22	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材	69	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材
23	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	薄板・割板？	70	不明・広葉樹散孔材	薄板
24	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	薄板・割板？	71	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	薄板
25	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	丸太？	72	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材
26	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材・断面三角形	73	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	丸太・径約4 cm
27	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材・板目	74	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材
28	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材・断面三角形	75	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	丸太・径約4 cm
29	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	丸太・径約3 cm	76	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	丸太・径約5 cm
30	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材・断面三角形	77	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材・断面三角形
31	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材	78	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材
32	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材？	79	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材・断面三角形
33	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	薄板	80	不明・広葉樹散孔材	割材
34	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	薄板	81	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材？
35	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材？	82	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材・断面三角形
36	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	薄板	83	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材
37	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材	84	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材
38	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材	85	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材
39	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材・断面三角形	86	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材
40	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材	87	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材
41	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材	88	不明・広葉樹散孔材	薄板
42	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材	89	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	薄板
43	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材	90	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材
44	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材	91	不明・広葉樹散孔材	薄板
45	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材	92	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	丸太・径約4cm
46	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材・断面三角形	93	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	丸太
47	クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）	割材・断面三角形			



図Ⅳ－9　H－5平面図，炭化材

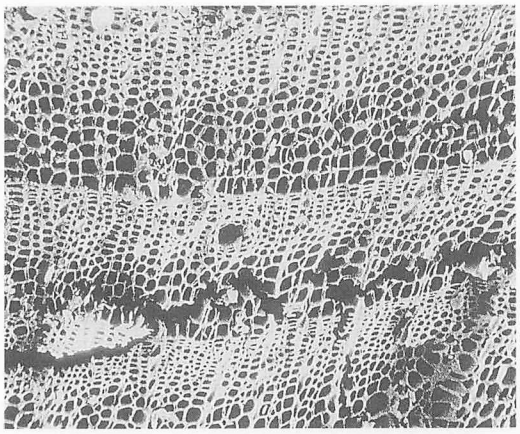


木口面×30

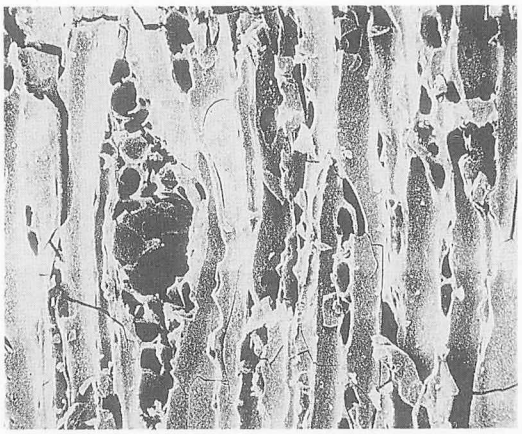


板目面×300

写真１　クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc）資料Ｈ－５　No. 7

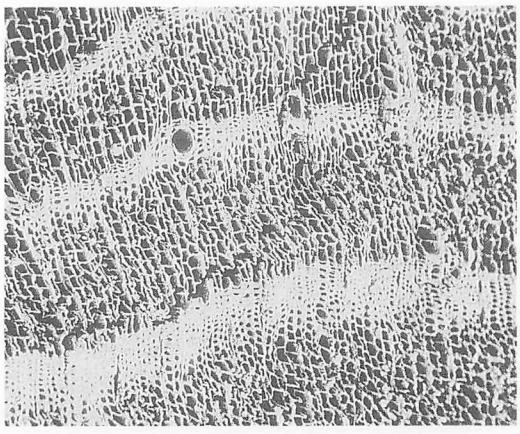


木口面×100

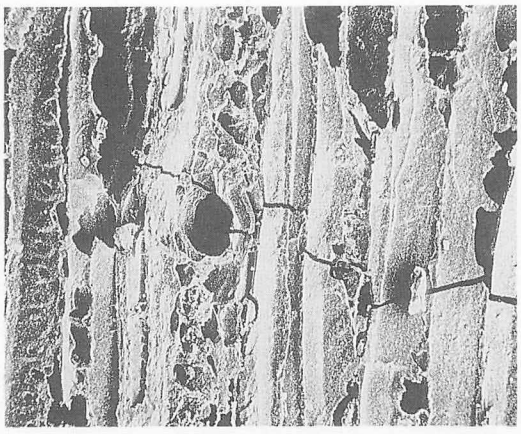


板目面×300

写真２　トウヒ属（*Picea* sp.）資料Ｋ－29　No. 3



木口面×100



板目面×300

写真３　マツ属（*Pinus* sp.）資料Ｋ－29　No. 2

図Ⅳ－10　炭化した木質遺物の組織顕微鏡写真

2　年　代　測　定

(1)　^{14}C年代測定結果

山　田　　治
（京都産業大学）

液体シンチレーション炭素年代測定報告

測定番号	試料名	測定結果
KSU　－　1391	H－5　炭化材No.93	4,130±60y.B.P.
KSU　－　1392	P－34　炭化物No.2	4,310±50y.B.P.
KSU　－　1652	K－29・30　Ⅳ層　Cb－1	13,400±160y.B.P.

※ ^{14}Cの半減期は5568年，y.B.P.は西暦1950年よりさかのぼる年数

3　遺　　物

(1)　石川１遺跡出土黒曜石片の年代と原産地

興　水　達　司
（北海道大学理学部地質学鉱物学教室）

1　はじめに

今回，函館市石川１遺跡より出土した黒曜石片７箇について，その年代あるいは原産地を明らかにしたので報告する。

考古学上の試料を自然科学的手法により同定し，原産地を推定しようとする研究は，近年，国の内外においてさまざまな方法で試みられてきている。ここで扱う黒曜石について，その原産地を推定する方法としては，化学分析法（発光分光分析，放射化分析，螢光Ｘ線分析，質量分析など），年代測定法（フィッション・トラック法，Ｋ－Ar 法など）および晶子形態法などがある。そして，その方法の共通の原理は，原産地内ではある種の一様性を示し，一方原産地間では有意の差を黒曜石の特徴として導き出すことである。このような点において，黒曜石の原産地推定の試みで諸外国の場合も含めて多くの成功をおさめているのは化学分析法と年代測定法である。

原産地

筆者は北海道内の遺跡から出土した黒曜石片について，放射化分析法あるいはフィッション・トラック法を用いて，その原産地を明らかにしている（興水，1981，1985など）。今回の試料についてはフィッション・トラック法を用いたので，以下に簡単にその原産地推定の原理を述べる。つまり，フィッション・トラック法によって各黒曜石試料について年代と含有ウラン濃度を明らかにすることが可能である。そこで，黒曜石の各原産地について，その噴出年代とウラン濃度を明らかにしておけば，遺跡から出土する黒曜石についてフィッション・トラック法を用いた場合，同様な手順により原産地を特定することが可能となる（興水，1981）。

放射化分析法
フィッション・トラック法

このようにして，考古学上の試料の原産地が明らかにされることは，その当時の文化圏，交易圏を考える上で，重要な役割を果たすことになろう。

文化圏
交易圏

ところで，このような交易運搬というものの行われた年代についても明らかにすることが望ましい。その場合には，^{14}C 法などの年代測定が，しばしば用いられる。しかし，黒曜石を材料にした場合，後述のようにフィッション・トラック法あるいは水和層年代測定法により，黒曜石自身から直接当時の人々の活動していた年代を知ることのできる利点がある。

今回扱った７試料のうち１つは焼けた黒曜石片であり，これについて測定された年代値から直接本遺跡の年代を知ることができた。また，残りの６箇については，前述に従いその原産地を明らかにすることができた。なお，そのうちの１箇については，更に水和層年代についても明らかにした。

水和層年代

表Ⅳ－5　黒曜石片のフィッション・トラック年代測定結果

試　　料	Ns(tracks)	ρ_s(tracks cm^{-2})	Ni(tracks)	ρ_i(tracks cm^{-2})	Φ(neutrons cm^{-2})	Age(Ma)	Cw(ppm)
IS-1(K-29-599)	148	10.2×10^{0}	2750	6.30×10^{4}	1.37×10^{15}	13300±1100*	2.35
IS-2(H-35-1)	1611	2.21×10^{3}	2620	6.24×10^{4}	1.37×10^{15}	2.92±0.11	2.33
IS-3(H-37)	1455	2.20×10^{3}	2630	6.31×10^{4}	1.42×10^{15}	2.97±0.11	2.27
IS-4(J-35-1)	1660	2.18×10^{3}	2550	6.16×10^{4}	1.34×10^{15}	2.85±0.10	2.35
IS-5(K-29-299)	1480	2.20×10^{3}	2680	6.71×10^{4}	1.46×10^{15}	2.88±0.11	2.35
IS-6(M-27)	1710	2.18×10^{3}	2550	6.42×10^{4}	1.40×10^{15}	2.86±0.10	2.34
IS-7(K-41-9)	1740	2.19×10^{3}	2750	6.08×10^{4}	1.34×10^{15}	2.91±0.10	2.32

Ns：自発フィッション・トラック観測数，ρ_s：自発フィッション・トラック密度，Ni：誘発フィッション・トラック観測数，ρ_i：誘発フィッション・トラック密度，Φ：熱中性子線量，Age：噴出年代，ただしIS-1の13300±1100*は焼けた黒曜石の年代（years.B.P.），Cw：ウラン濃度

2　フィッション・トラック年代測定

熱中性子

同一の黒曜石から2箇の試料を用意し，その1つを標準ガラスとともに立教大学原子力研究所TRIGA MarkⅡ回転試料棚（$\phi\fallingdotseq5\times10^{11}$n·sec^{-1}·cm^{-2}）で熱中性子を照射した。その後，これら2箇の黒曜石（一方は自発フィッション・トラック密度測定用，他方は誘発フィッション・トラック密度測定用である）を樹脂に包埋し，黒曜石の内面を観察するため研磨した。ついで，48% HFを用いて23℃で15秒間のエッチングを行い，エッチング表面のレプリカを作り，これを光学顕微鏡下で観察した。また，熱中性子線量の測定は試料と共に照射した標準ガラス（NBS－SRM612）にディテクターとして密着した白雲母を48% HF，23℃で30分間エッチングし，誘発フィッション・トラック密度を計数することにより求めた。なお，年代算出の際，壊変定数については，$\lambda f=7.03\times10^{-17}y^{-1}$を，$\beta$，$\xi$についてはそれぞれ$5.79\times10^{9}$n t^{-1}，348を用いた。

以上の手順により得られた年代測定結果を表－1に示す。また同様にウラン濃度についても併せて示す。

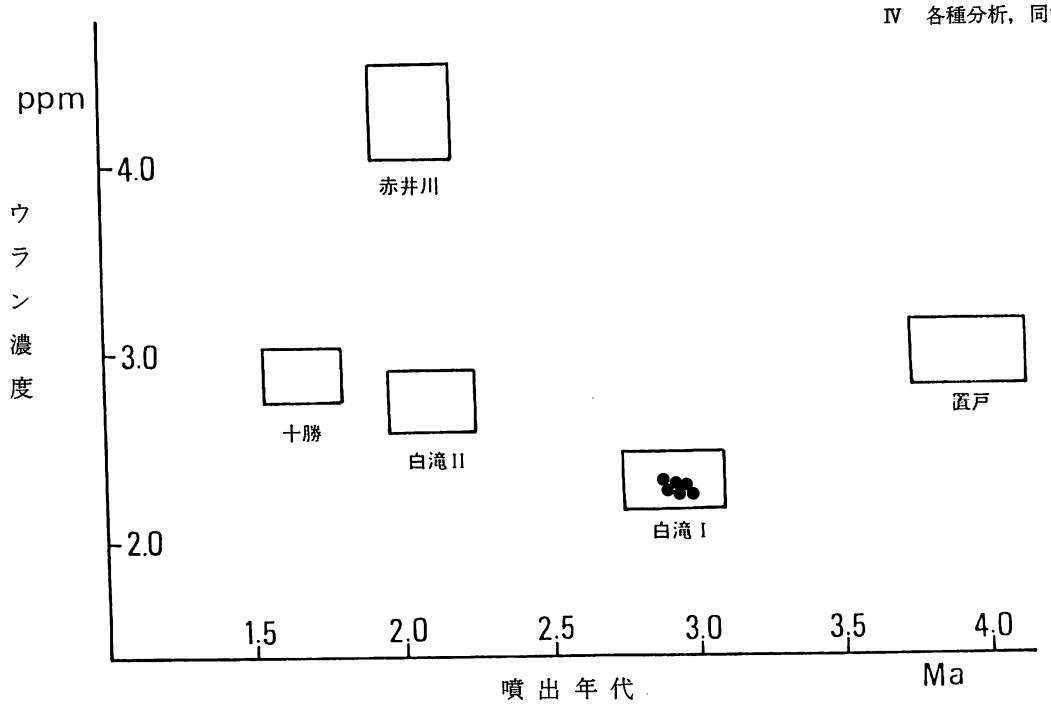
このうち，IS－1については黒曜石に特有な光沢を失っており，一見して熱を受けたと判断される試料である。これについて測定されたフィッション・トラック年代値は13300年B.P.であり，旧石器時代の編年に寄与するものと思われる。

噴出年代
ウラン濃度

また，IS－2～IS－7については，各々その噴出年代とウラン濃度を明らかにすることができた(表－1)。そこで，北海道内に一般的に知られている主要な黒曜石原産地について，既に明らかにされている噴出年代とウラン濃度の関係図（興水，1981）を基に，今回の測定値を比較してみた。その結果，これら6試料はいずれも白滝Ⅰ（1,100m峰）に原産地が求められた（図－1）。なお，IS－1について明らかにされたウラン濃度（2.35ppm）

表Ⅳ－6　黒曜石片の水和層年代測定結果

試　　料	測　定　数	水和層厚X±δ(μm)	水和層年代(年B.P.)	黒曜石産地
IS － 4	10	4.61 ± 0.16	12700 ± 900	白滝 － Ⅰ



北海道における黒曜石製石器の主要原産地の噴出年代とウラン濃度の関係図および本遺跡出土黒曜石片6箇の分析結果（表Ⅳ－5を参照）。

図Ⅳ－11　本遺跡出土黒曜石片6個の分析結果

も，やはり白滝－Ⅰに対応するものであり，肉眼観察からもこれを支持する。

今回原産地を明らかにした試料は本遺跡から出土した黒曜石片の極く一部に過ぎないのではあるが，当時の人々は本包含層に比較的近い原産地である赤井川よりも，より遠方の白滝産の黒曜石を石器の原材料として使用していたことになる。もちろん，このことから赤井川産の黒曜石を使用していなかったとは結論されないが，白滝の黒曜石が直線距離にして約300kmの遠方にある本遺跡に運び込まれている。その移動経路や移動方法の詳細については，なお不明である。しかし，このようにして優秀な石材を求める人の動きが，交易とか文化の伝播というものを促したのであろう。

白　滝

3　水和層年代測定

前述のようにして原産地の明らかにされた黒曜石片6箇のうちの1箇については，更に水和層年代測定を実施した。

水和層年代

さて，現在北海道における黒曜石製石器の原産地の主要なものとしては，赤井川，十勝，置戸，白滝の四地域が一般に知られている*。従って，水和速度に関する検量線についても，やはり原産地ごとに独自のものが明らかにされていなければならない。しかし，今のところそこまで至っていない。この問題に関しては，各種の放射年代値と水和層年代に関する基礎的データを相互に積み重ねることにより，将来解決されなければならない。そのために，水和層年代測定を実施する際に，試料となる黒曜石の原産地を常に明らかにすることが望ましい。

検　量　線

ところで，KATSUI and KONDO（1976）により求められた〝北海道の黒曜石〟の検量線は，主に白滝産の黒曜石を材料としている。そこで，今回原産地が前述のように白滝に

求められた黒曜石について水和層年代測定を実施した。従って，今回の実験で用いた検量線については大きな矛盾はないものと判断する。

水和層厚測定のための黒曜石薄片製作は，KATSUI and KONDO (1976) の方法によった。水和層厚の測定は総合倍率1500×の鏡下で直接読みとった。得られた結果は表－2の通りある。この年代値（12,700年 B.P.）は前述の焼けた黒曜石のフィッション・トラック年代（13,300年 B.P.）と概ね一致するものである。

＊ これらの他に小規模の原産地が最近いくつかわかってきた。それらの黒曜石について明らかにされた事実については別の機会に述べる。

文　献

KATSUI, Y. and KONDO, Y. (1976) Variation in obsidian hydration rates for Hokkaido, northern Japan. *Advances in obsidian glass studies* (ed. R. E. TAYLOR), 120—140, Noyes Press (New Jersey)

興水達司（1981） 石狩低地帯に出土する黒曜石片の原産地，地球科学，35，267—273

興水達司（1985） 北海道の黒曜石の産地と判別法—同位体化学の利用—，続北海道5万年史，187—194.

Ⅴ まとめ

今回の調査で発見された縄文時代以降の遺構は，住居跡13軒，フラスコ状ピット6基，円形・楕円形ピット48基，Tピット61基，焼土5ヵ所，旧石器時代の遺構は，焼土ブロック1ヵ所，炭化木片ブロック4ヵ所である。遺物は，総数43,608点，そのうち縄文時代以降の土器，石器などは34,827点，旧石器時代の石器類は8,781点である。以下，大きく縄文時代と旧石器時代に分けていくつかの点について検討する。

1 縄文時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

13軒のうち1軒は早期のⅠ群A類土器(貝殻文)の時期で，他の12軒は中期中葉のⅢ群A_3類土器の時期である。図Ⅴ－1に隣接する桔梗2遺跡の住居跡と共に平面図を示した。桔梗2遺跡では19軒の住居跡が確認され，そのうち14軒について時期を決めることができた(㈶北海道埋蔵文化財センター 1988a)。時期はいずれも中期で，初頭のⅢ群A_1類土器の時期1軒，中葉のⅢ群A_3類土器の時期7軒，後半のⅢ群B類土器の時期6軒である。また，後に述べるが，桔梗2遺跡のⅢ群A_3類土器群は全体的にみて，石川1遺跡のⅢ群A_3類土器群より古い要素をもつものが多い。以下，二つの遺跡の中期の住居跡について，平面形，床面積，溝，柱穴，炉，附帯施設，炭化材などを整理してみたい。

桔梗2

平面形 初頭（KH－19）と末葉（KH－7）を除いて，楕円形ないし隅丸長方形・方形が主体である。初頭のKH－19は二段構造がみられる点などから，いわゆる「日ノ浜型住居址」(高橋 1974)に近いが，平面形，主柱穴の状況などが異っている。また，中葉から後半にかけては，五角形のいわゆる「サイベ沢型住居址」(高橋 1974) と明確にいえるものはなく，楕円形から隅丸長方形ないし方形へ変化する傾向がみられる。末葉とみられるのはKH－7の1例だけであるが，円形に近い。石川1，桔梗2遺跡の中期の住居平面形の変遷は，概ね五角形→楕円形，隅丸長方形・方形→円形？と考えられる。

日ノ浜型

サイベ沢型

床面積 全体の形がわかる23軒について床面積の平均を求めると19.2m²となる。これは縄文時代全期を通してみた北海道の18.8m²よりわずかに大きく，関東地方の19.3m²に近い(宮本 1984)。規模をみると，10m²以下は6軒(H－11，13，KH－5，7，12，15)，10～20m²は11軒(H－2，5，6，12，KH－3，6，10，11，14，16，18)，20～30m²は0軒，30～40m²は3軒 (H－1，4，KH－8)，40～50m²は1軒 (KH－19)，50m²以上は2軒 (H－3，KH－17) で，10～20m²規模の住居が多い。また，20m²以下の小型住居の割合は全体の74％を占め，北海道における縄文時代全期を通してみた小型住居の割合67.2％（宮本 1984）よりわずかに多い。

床面積の平均

小型住居

溝 壁際に一周するいわゆる周溝がみられるのは26軒中15軒，半周に近いものまで含めると18軒となり，全体の約7割を占める。また，壁際に併行して2条ないし3条の周溝がみられるH－1，3，5，6，KH－3などは拡張，建替の可能性がある。しかし，壁際の周溝と一定の間隔をもってさらに内側に溝がめぐるH－2，5，KH－11，12などの例は，拡張，建替の結果ではなく，当初より二重に溝があった可能性が強い。例えばH－2などの溝は

周溝

5本の主柱穴の内側に壁と一定の間隔を保ちながらコの字状に作られ，その内側には埋甕炉があり，周囲は堅くしまっている。これは住居空間の一定の区画を意味し，いわゆる二段構造のある「日ノ浜型住居址」(高橋 1974)，「O形住居・L形住居」(宇田川 1979) などの段状の区画と同様の意味をもつものと考えられる。内側の溝は住居空間の区画と同時に，排水，湿気取りなどの効果があったのではなかろうか。

日ノ浜型 O形・L形

主柱穴

柱穴 床面で確認された小ピットのうち，位置，深さなどから主柱穴とみられるものは図Ⅴ－1の青色部分である。全体の状況がわかる22軒で主柱の数をみると，無いのは4軒(H－11，KH－7，12，15)，2本は3軒(H－13，KH－10，11)，4本は1軒(KH－18)，5本は7軒 (H－1，2，6，12，KH－5，14，16)，6本は4軒 (H－4，5，KH－3，19)，10本は3軒 (H－3，KH－8，17) である。以下，構造上の特徴について橋本正氏による主柱配置を重視した分類 (橋本 1976) と比較検討してみたい。

主柱がみられないものは，いずれも10m²以下の小型のもので，2本のものもH－13を除き10m²前後の小型のものである。KH－10，11は主軸上に2本の主柱がある「2本主柱Y型」に相当する。主柱が4本のものは「4本主柱X型」，5本のものは「5本主柱YX型」に相当し，平面形は長方形に近く，大きさは10～20m²である。KH－18は4本主柱で，炉の横に浅い小ピットがある。このピットは柱穴とは考えられず，いわゆる「中央ピット」(高橋 1974) に相当するものかもしれない。5本主柱のH－1，2，6，12，KH－5，14，16は単純な4本主柱構造を基本とし，主軸上に1本の主柱が配置されたもので，主柱配置は「日ノ浜型住居址」「サイベ沢型住居址」(高橋 1974) と近似している。しかし、主軸上の主柱の位置は「日ノ浜型」や「サイベ沢型」ほど壁に寄っていない。そのような点から主軸上のピットを「中央ピット」と理解することも可能であるが，ここでは深さなどから主柱穴と判断した。その点は，「中央ピット」の再考を提示している宇田川洋氏の見解と一致する (宇田川 1979)。主柱の6本あるもののうちH－5は「5本主柱XY型」の変形，KH－3は同時期の「2本主柱Y型」のKH－10，11と比較して，「2本主柱Y型」から「4本主柱X型」への建替の可能性があり，純粋に6本主柱のものはH－4，KH－19の2軒だけである。いずれも「6本主柱X型」である。主柱の10本あるもののうちH－3は「6本主柱X型」から「8本主柱X型」への拡張の可能性が考えられる。また，KH－8は何度かの建替がみられ，最終的な状態が「10本主柱X型」である。KH－17は上部が削平され，柱穴のみで推定した住居で，未確認のものを推定すると「10本主柱X型」になる。以上，主柱配置の明らかになった18軒 (KH－3を2軒とみる) をみると，主軸上に主柱のないX型は7軒，主軸上にのみ主柱のあるY型は3軒，X型とY型の複合であるXY型は8軒である。この傾向は，橋本氏の「中期段階に入ると，北海道・東北・北関東地方まではXY型が主流となり，それにX型と稀にY型が加わる」という仮説と一致する。また，Y型の3軒はいずれもⅢ群B類土器の時期で，X型，XY型に後続するものである。

中央ピット

全国的傾向

炉 炉のある23軒をみると，地床炉のみ20軒，地床炉と埋甕炉のあるもの1軒，埋甕炉のみ1軒，石組炉のみ1軒である。時間的な変遷は，概ね地床炉→埋甕炉→石組炉と考えられる。地床炉は床面を掘り込んだ固定的なものは8軒だけで，他は床面が焼けているものである。数は1ヵ所のもの12軒，2ヵ所以上のもの8軒で，規模の大きなものほど多い傾向があり，H－3などは16ヵ所にみられる。位置は基本的に主軸上の中央よりやや片側に寄った部分で，数の多いH－1，3などは北半部に集中している。

地床炉

時期	土器	石川1遺跡	桔梗2遺跡
早期	ⅠA	H-10	KH-19
中期	ⅢA3		
	ⅢA3	H-3, H-1, H-6, H-12, H-5, H-11, H-4, H-13, H-8,9, H-2	KH-8, KH-17, KH-16, KH-18, KH-14, KH-12, KH-15
	ⅢB		KH-3, KH-10, KH-11, KH-6, KH-5, KH-7
	ⅢB		

0 4m

図Ⅴ－1　石川1・桔梗2遺跡時期別住居跡集成図

埋甕炉はH－2とH－4でみられ，H－2は2個が併列し，H－4は1個のみである。 埋甕炉
H－2の埋甕は，土器の下半部を利用したものと，胴部の中央を利用したものがあり，底部のない方には下に同一個体とみられる土器片を敷いている。

附帯施設 初頭のKH－19にのみ二段構造がみられる。段が全周する「O形住居」(宇田川 1979) のタイプである。 O形住居

炉の周辺には浅いピットがみられるものが多く，「中央ピット」(高橋 1974) と呼ばれているものに相当する可能性がある。しかし，その用途を確定できるものはない。 中央ピット

炭化材 石川1遺跡では1軒(H－5),桔梗2遺跡では6軒 (KH－2，5，11，14，16，18) の火災住居が確認された。石川1遺跡のH－5は部分的に炭化材が残っていただけなので，上屋構造などを検討することはできないが，桔梗2遺跡のKH－5，14，16などは竪穴全体に炭化材を検出することができた。その詳細については報告書 (財北海道埋蔵文化財センター 1988a) を参照していただきたい。

H－5の炭化材は93点について観察，樹種同定などを行った。炭化材は住居の構造材と考えられ，径数cmの丸太状のもの，割板，半割，4分割などの割材状のものなどがみられた。樹種はすべてクリで，用材としての有用性から選択的に利用された可能性が考えられる (Ⅳ1(3)参照)。また，桔梗2遺跡のKH－14の場合も，クリ材が77%を占め，他にトリネコ属，カバノキ属などの樹木がわずかに利用されている。クリ材の利用率が高い点は石川1遺跡と同一である。一方，時期的に新しい，木古内町新道4遺跡のCH－2 (後期末葉) の場合をみると，その状況は大きく異なる (財北海道埋蔵文化財センター 1988b)。ヤチダモあるいはコバノトネリコと思われるトネリコ属の樹木が65%を占め，次にイチイ属が11%あり，その他はシナノキ属，ニレ属，クワ属，クリ属，カエデ属，カツラ属，ヤナギ属，クルミ属などがわずかにみられる。 桔梗2 クリ材多用 新道4 トネリコ属多用

石川1，桔梗2遺跡と新道4遺跡の相違は遺跡の立地または地域的なちがいと考えられるが，時期的な植生のちがいが大きく反映している可能性がある。

(2) フラスコ状ピット

6基のフラスコ状ピットはいずれも縄文時代中期中葉のⅢ群A_3類土器の時期のものである。形状，崩落の状況，遺物の出土状況などから二種類に分けることができる。一つは，確認面および底面が円形で，底面の中央に小ピットがあり，崩落がほとんどみられないP－23，26，29のタイプである。出土遺物は全体に少なく，覆土中に散在している。もう一つのタイプは大型で深さが2m前後のP－2，34，56で，P－2，34の確認面は方形になっている。いずれも崩落が著しく，掘り上がりは円筒状に近い。出土遺物の量は非常に多く，底面より50cm程度上の面にベンガラ，炭化物を含んだ薄層がみられ，その面およびその下から，土器がまとまって出土する。ベンガラ，多数の土器の出土などから，墓の可能性も考えられるが，人骨，土器以外の副葬品などはみられず，積極的に墓と考えることはできない。また，覆土の堆積の観察からも人為的な埋め戻しの痕跡は確認できない。しかし，ベンガラを含んだ薄層の存在，多量の土器の存在などから，何らかの意識的な行為が行われた可能性がある。 二つのタイプ 意識的行為

(3) 土　　器（図Ⅴ－2～6）

土器の総数は28,479点，その94％が中期の土器，3％が早期の土器で，残りの3％が早，中期以外の時期の土器である（図Ⅴ－2）。

早期の土器は調査区域の中央部東側に分布しているが，特に集中区域はなく，全体に散在している。すべてⅠ群Ａ類とした貝殻文土器で，特徴的な文様帯などはみられないが，条痕文，連続押引文，腹縁文とそれらと沈線，刺突文などの組み合わされたもの，無文のものなどがみられる。すべて破片であるが，底部はいずれも砲弾状の尖底で，平底とみられるものはない。

Ⅰ群Ａ類

中期の土器は調査区域の中央部東側を中心に全域にみられ，Ｍラインより東側からの出土が多い。Ⅲ群土器はA_1類がわずかにあるだけで，大部分はA_3類の土器である。そのⅢ群A_3類土器は，いくつかに細分できるが，今回は遺構単位で示すだけにする（図Ⅴ－3～1）。また，桔梗2遺跡のＫＨ－14，19出土の復元土器を集成したので比較していただきたい（図Ⅴ－6），石川1，桔梗2遺跡のⅢ群A_3類土器は，従来「朝顔形の器形」，「胸骨文や菱形・木葉形のモチーフ」の「貼付帯で構成される文様帯」が特徴のサイベ沢Ⅵ式，「2・3本組の沈線で凸レンズ，弧状を描く」文様が特徴のサイベ沢Ⅶ式，「口辺部文様帯がほぼ消失し，斜行縄文のみが残」り，胴部から「垂直に降りるか，張り出す底部」の見晴町式といわれている（高橋 1981）ものが含まれる。また，Ⅲ群A_3類土器の大部分を占めるサイベ沢Ⅶ式は，「2種2対の突起をもつか，結節・綾くりの縄文が施文される」Ⅶa式と「山形の小突起をもち貼付帯はその周辺のみに簡略化されて付」き，「地文は斜行縄文がほとんどで，結束をもつ縄文はわずか」なⅦb式に細分される，という（高橋 1981）。

Ⅲ群A_3類
サイベ沢Ⅵ式
サイベ沢Ⅶ式
見晴町式
サイベ沢Ⅶa式
サイベ沢Ⅶb式

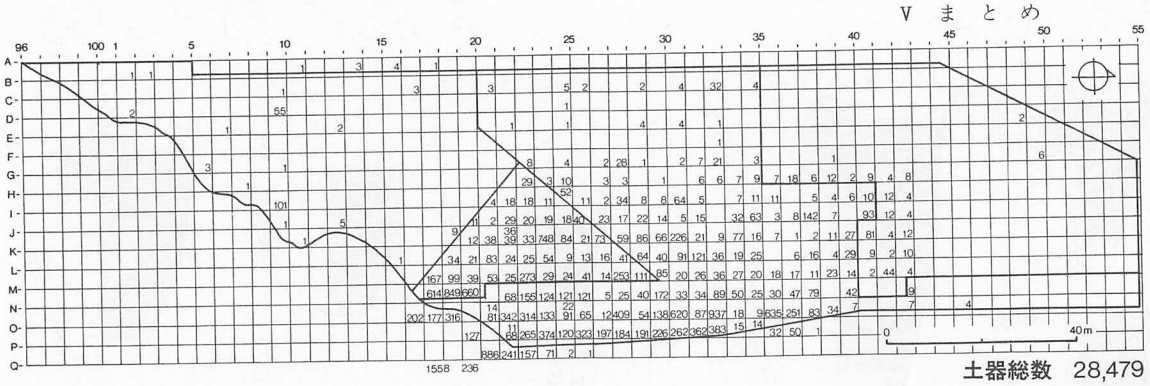
石川1遺跡の場合は，貼付帯による文様帯のあるサイベ沢Ⅵ式はほとんどなく，沈線による文様帯のあるサイベ沢Ⅶ式が主体で，斜行縄文のみの見晴町式に近いものがわずかにみられる。Ｈ－3（図Ⅴ－4），Ｐ－56（図Ⅴ－5）などではサイベ沢Ⅶa式とⅦb式が混在し，Ｈ－1，2，4，6，Ｐ－2，34（図Ⅴ－3）などではサイベ沢Ⅶb式，見晴町式がみられる。

桔梗2遺跡のＫＨ－14，ＫＨ－19（図Ⅴ－6）の覆土中・上の場合は，細い貼付帯のあるサイベ沢Ⅵ，Ⅶa式，沈線文のサイベ沢Ⅶa式などが混在し，サイベ沢Ⅶb式，見晴町式に相当するものはほとんどみられない。

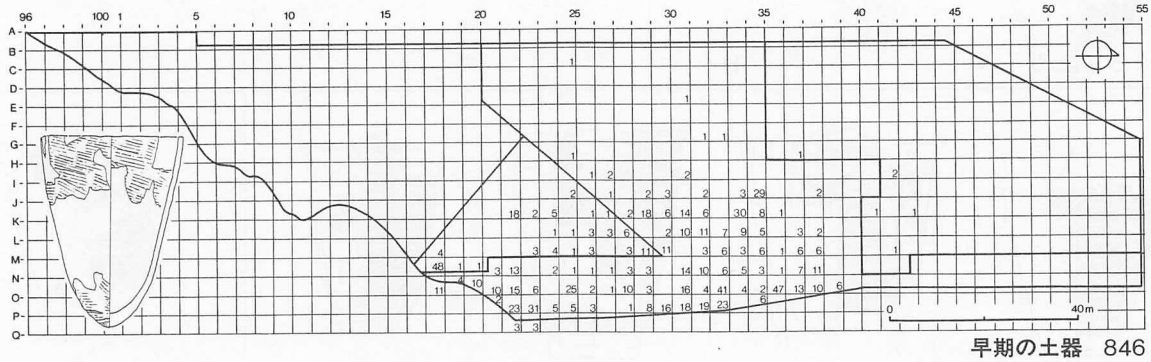
以上の傾向から，Ⅲ群A_3類土器は，大きく桔梗2遺跡の古段階と，石川1遺跡の新段階の二つの段階があることが考えられる。それは従来のサイベ沢Ⅵ式→サイベ沢Ⅶa式→サイベ沢Ⅶb式→見晴町式という変遷（高橋 1981）と矛盾することなく，貼付帯の文様帯→沈線の文様帯→文様帯なし，結束のある縄文→結束のない縄文へという流れが看取できる。しかし，高橋氏のいうサイベ沢Ⅵ式，サイベ沢Ⅶa，Ⅶb式，見晴町式がそれぞれ独立した段階をもつものであるかは問題の残るところで，ここでは，サイベ沢Ⅶ式を中心にその前後のサイベ沢Ⅵ式と見晴町式の一部を含めた土器群が大きく二つの段階に分かれる可能性があることを指摘しておく。

また，注目すべきものの一つとして，Ｈ－4出土のニシンタイプの魚骨回転文土器がある（図Ⅲ－33－4）。この種の土器は破片の状態のものが多く，器形全体がわかるものは少ない（大沼 1985）。さらに包含層からもサケタイプとみられる魚骨回転文土器の破片が2点

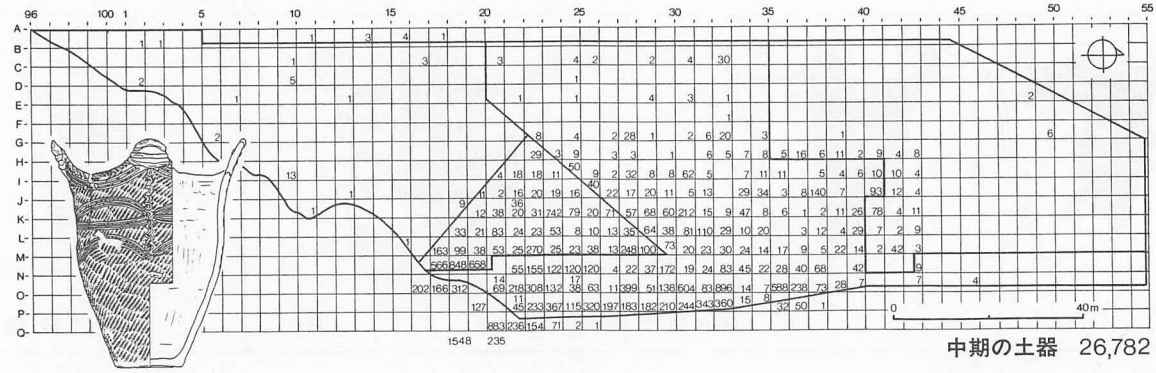
ニシンタイプ
サケタイプ



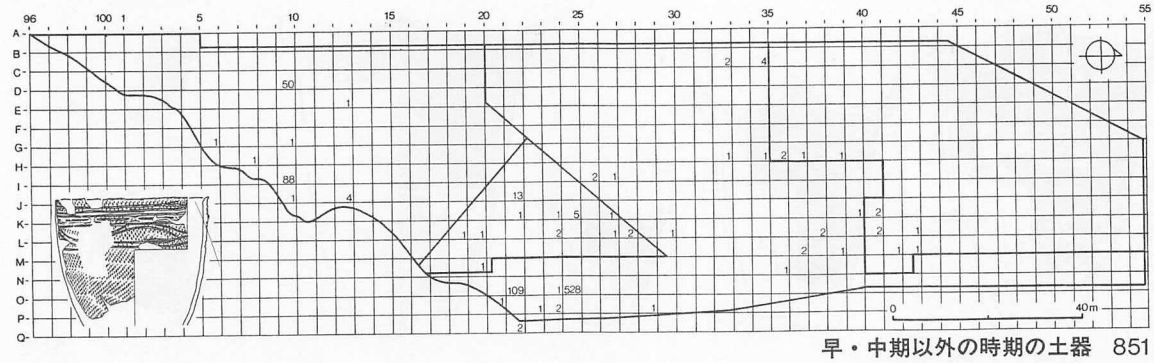
土器総数　28,479



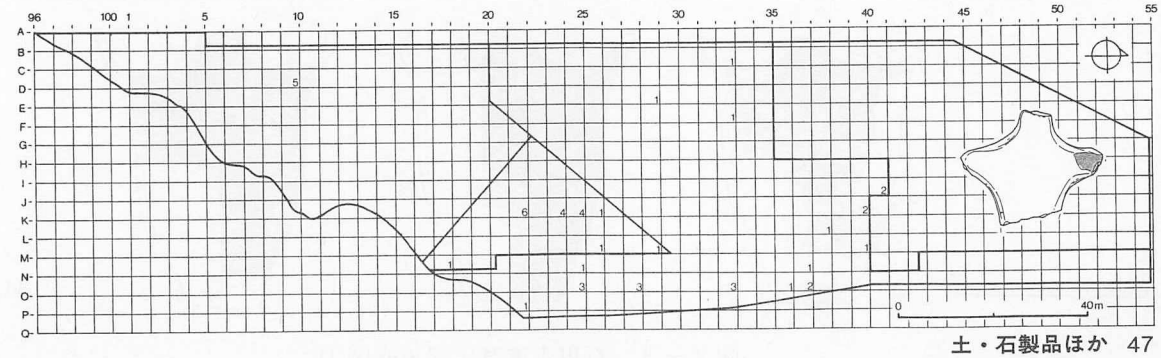
早期の土器　846



中期の土器　26,782

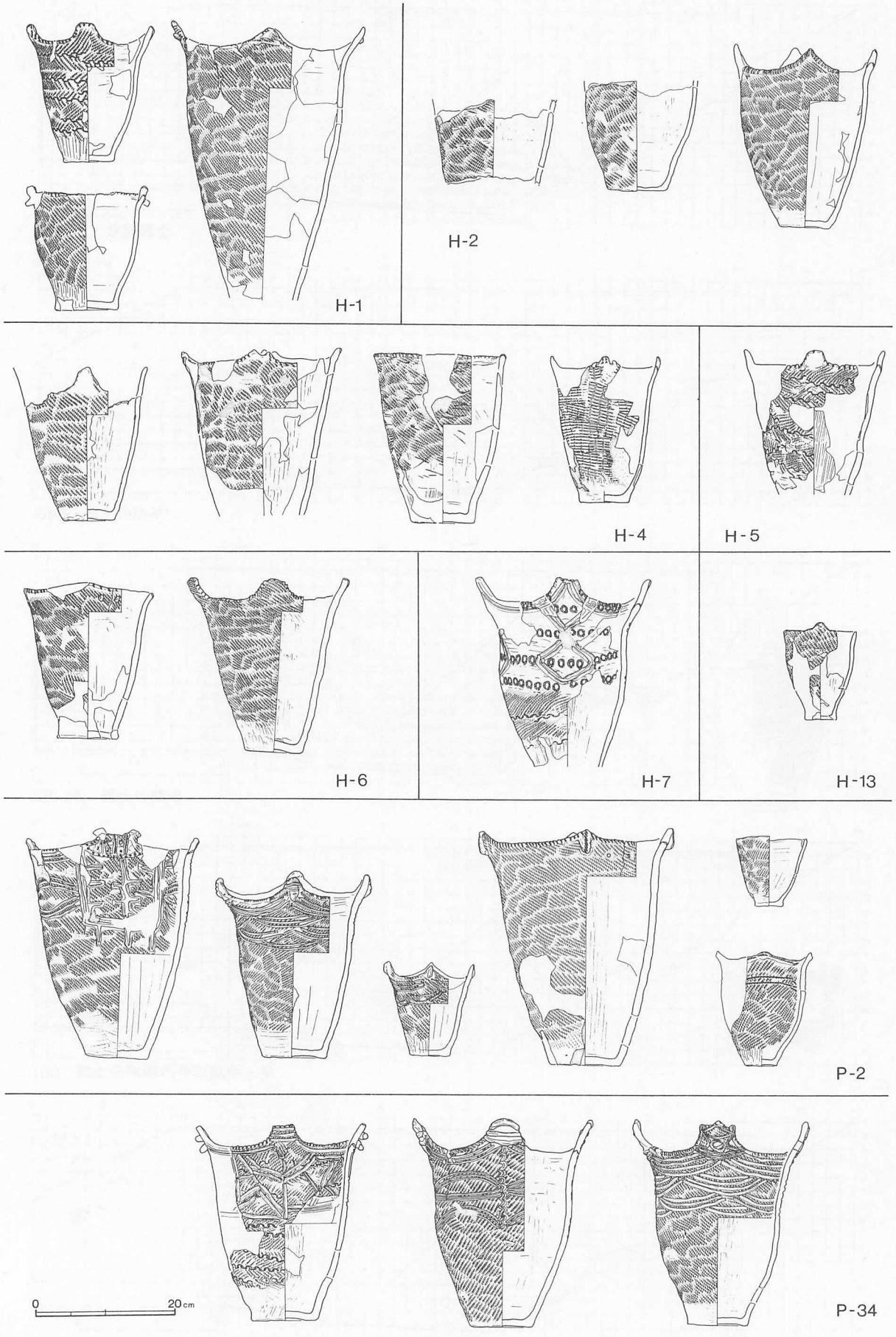


早・中期以外の時期の土器　851

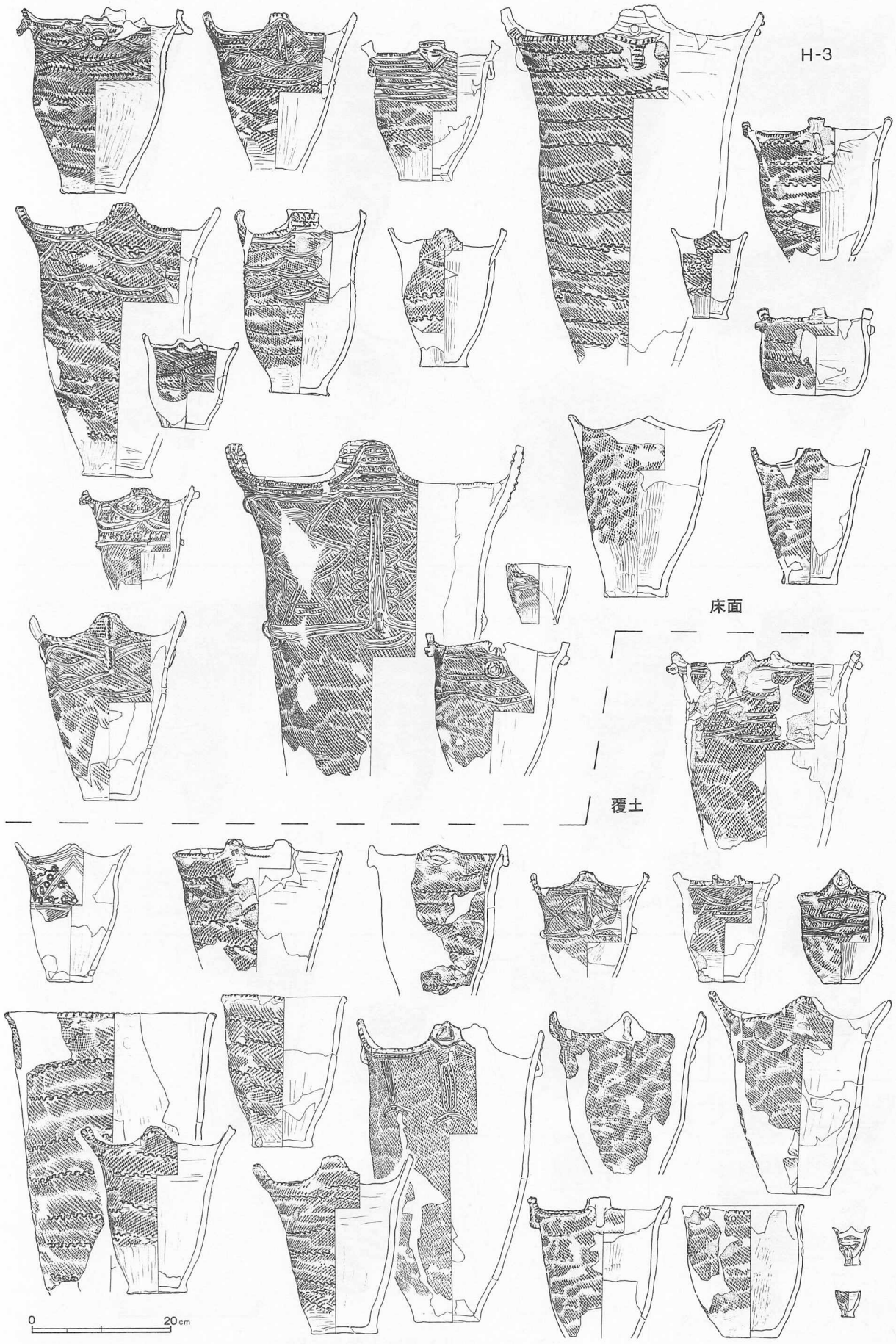


土・石製品ほか　47

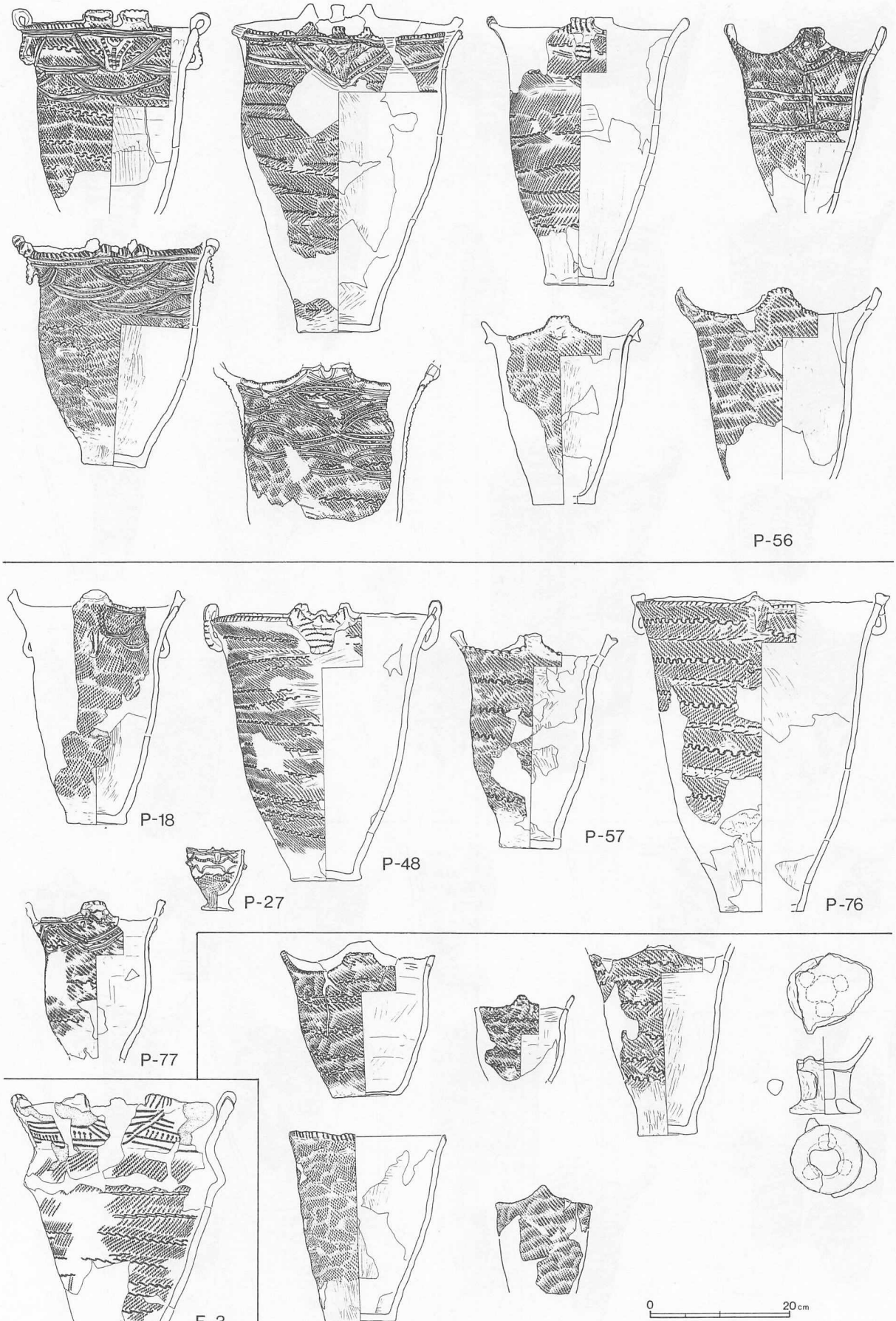
図Ⅴ－2　発掘区，時期別土器出土点数



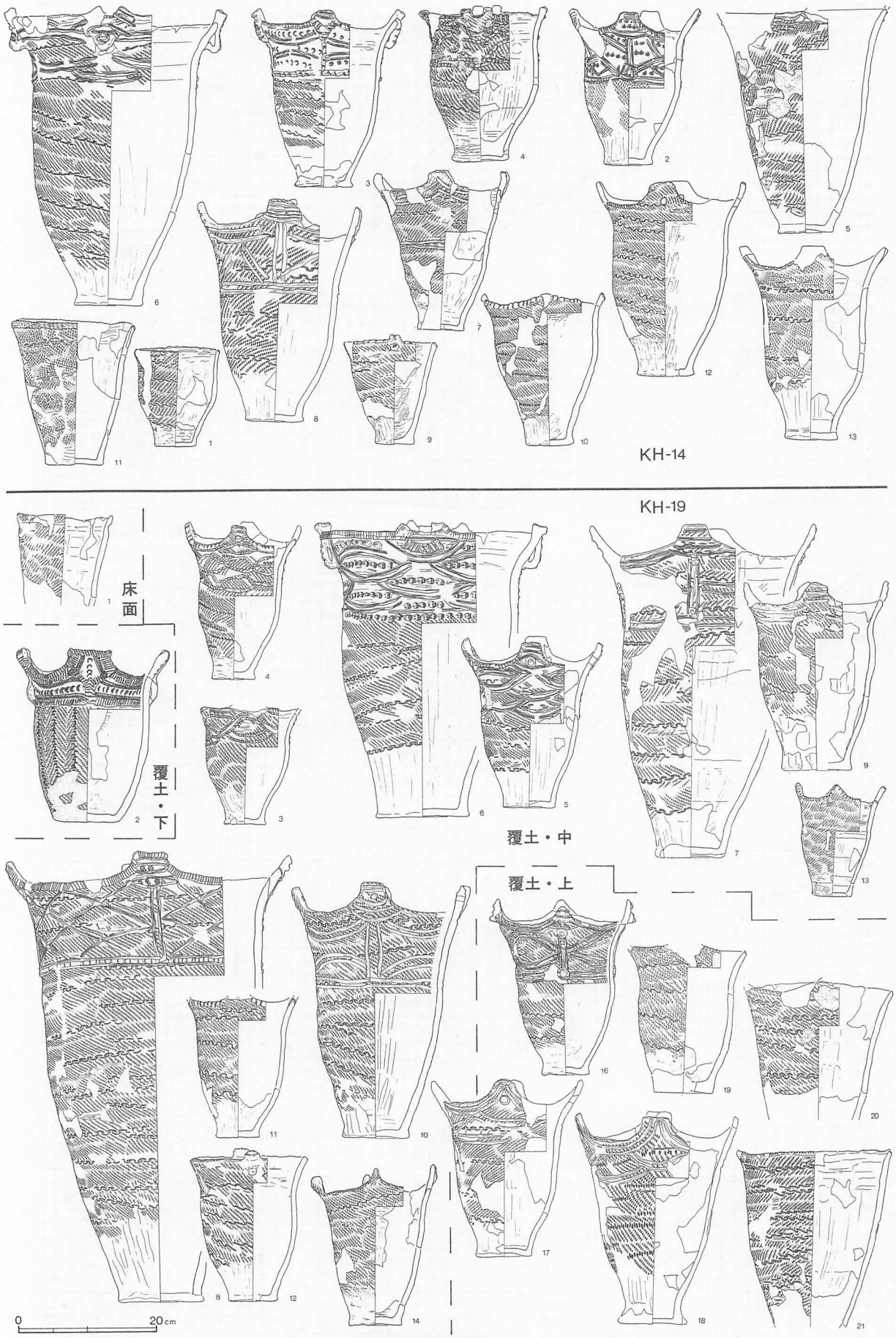
図Ⅴ－3　石川１遺跡土器集成図(1)



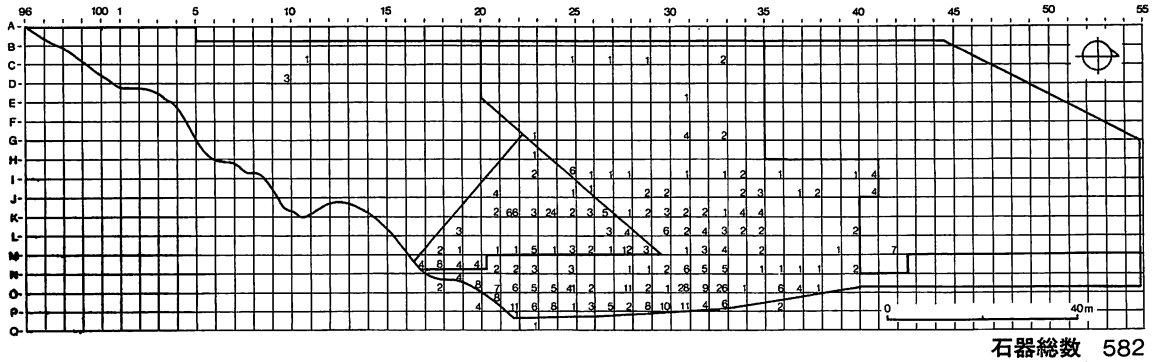
図Ⅴ－4　石川１遺跡土器集成図(2)



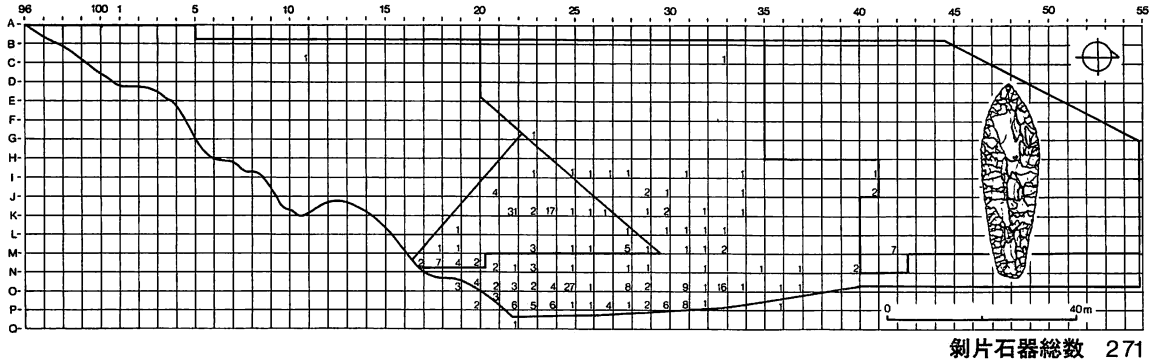
図Ⅴ－5　石川１遺跡土器集成図(3)



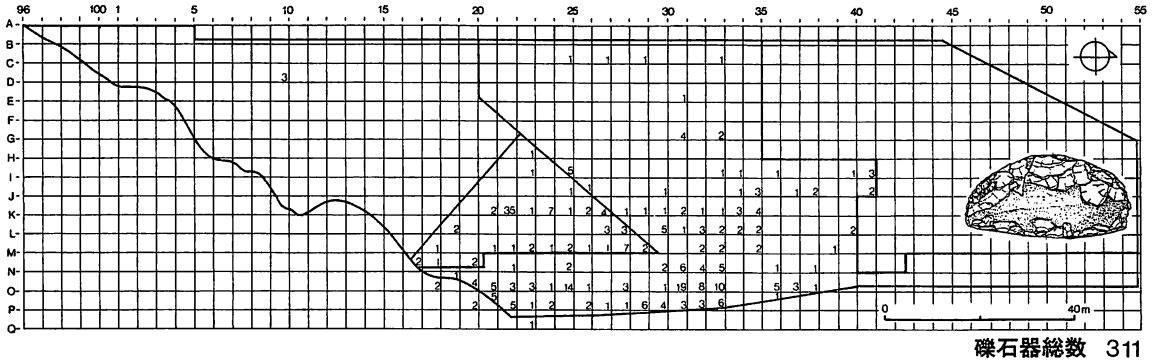
図Ⅴ－6　桔梗2遺跡 KH－14，19土器集成図



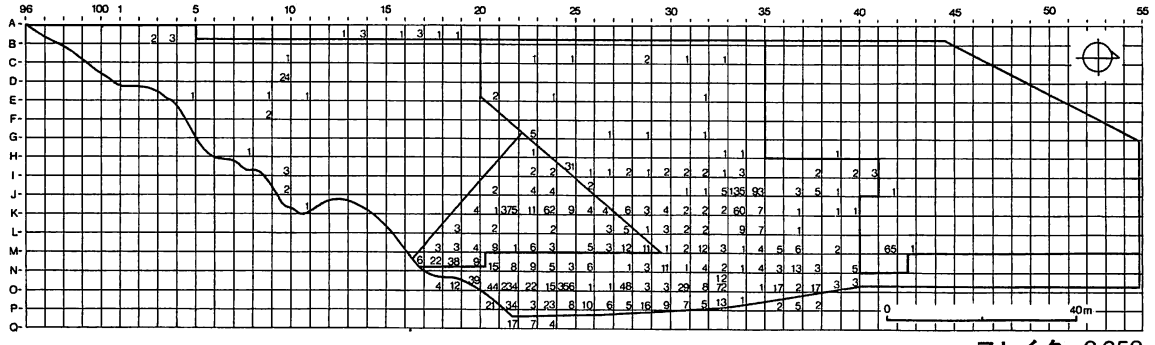
石器総数　582



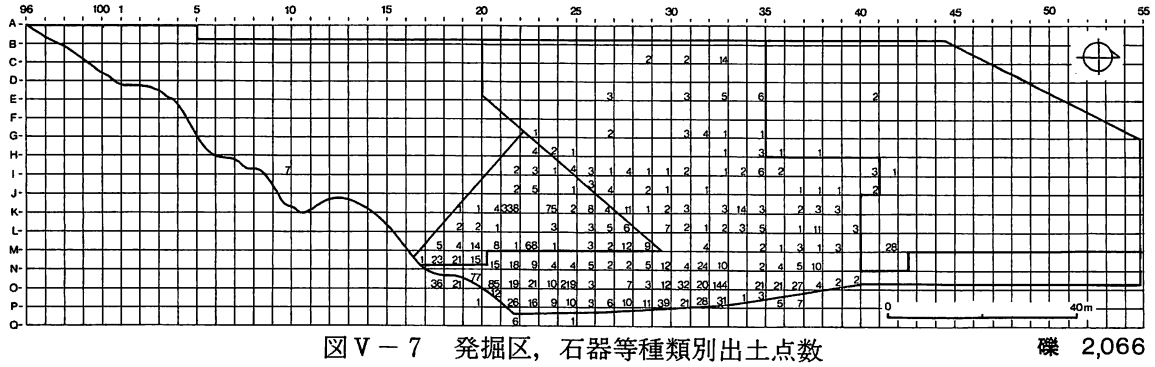
剝片石器総数　271



礫石器総数　311

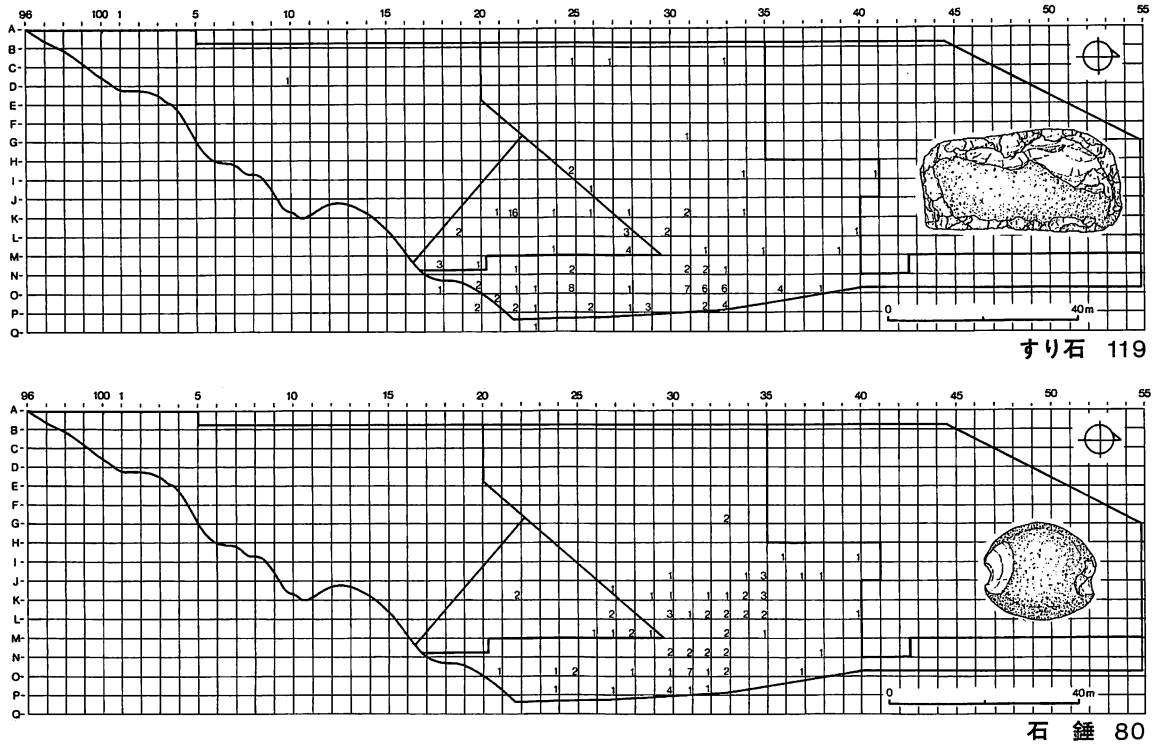


フレイク　3,653



礫　2,066

図Ⅴ－7　発掘区，石器等種類別出土点数



図Ⅴ－8　すり石，石錘発掘区別出土点数

（図Ⅲ－126－148，149）あり，この種の土器の類例を増やすことができた。

(4) 石　　器（図Ⅴ－7，8）

石器の総数は582点，その47％の271点が剝片石器，53％の311点が礫石器で，礫石器がわずかに多い。フレイクと礫を含めてもその数量は土器の1/5弱で，非常に少ない。

剝片石器

剝片石器は，全体に量が少なく，大きな特徴は見い出せないが，つまみ付ナイフが少なく，縦長剝片素材の加工の粗いスクレイパー類が多い傾向がある。

礫石器

礫石器ではすり石と石錘が多い。すり石は，断面三角形のものと北海道石冠がわずかにあるが，大部分は，扁平な礫の周縁を打ち欠いたものである。断面三角形で稜にすり面がみられるものは早期のⅠ群Ａ類土器，扁平な礫を加工したものは中期のⅢ群Ａ類土器に伴うものとみられる。石錘は包含層および遺構の覆土中からの出土で，時期は確定できないが，分布状況が早期のⅠ群Ａ類土器と一致する点や，第Ⅲ層からの出土がみられる点などから，早期のⅠ群Ａ類土器に伴うものと考えられる。

(5) 土 製 品

側縁有溝土製品

N309

青苗

ヘロカルウス

土製品は25点であるが，ミニアチュア土器や土器の脚や台の一部が含まれている。ここでは，「側縁有溝土製品」と土偶について少しふれてみたい。「側縁有溝土製品」（図Ⅲ－141－15，図Ⅴ－9－1）としたものは，卵形の土製品で，側縁に浅い溝と細かい刺突列があり，片面中央部に丸いくぼみがみられるものである。形態的に類似したものは，杉山寿栄男が昭和８年に紹介した小樽市富岡町出土の「有溝石器」（杉山 1929），札幌市Ｎ309遺跡出土の「有溝石製品」（図Ⅴ－9－2）（上野・高橋 1975），奥尻町青苗遺跡出土の「三角形側縁有溝石器」，「楕円形側縁有溝石器」，「側縁有溝石器」（佐藤ほか 1979），泊村ヘロカルウス

遺跡A，D地点出土の「三角形側縁有溝石器」（図Ⅴ－9－3～5）（河野 1984，1985，川内編 1987）同村茶津遺跡出土の「楕円形側縁有溝石器」（河野 1984，1985）などがあるが，これらはいずれも石製品である。土製品は初の出土ではないかと思われる。土製品は伴出土器および胎土や調整の特徴から中期中葉のⅢ群A_3類土器に伴うものである。石製品の時期も，N309遺跡では，サイベ沢Ⅵ～Ⅶ式（上野・高橋 1975），青苗，ヘロカルウス，茶津遺跡は円筒土器上層式（河野 1985）で，土製品とほぼ同じ時期といえる。大きさや形状は異なる点もあるが，時期的な同一性などから両者は強い関連性をもった遺物といえる。その用途，性格についてはわからないが，上野氏は石錘の可能性（上野・高橋 1975），河野氏は「定形石器」であるが，その用途，用法は謎（河野 1985），としている。

茶津

土偶

土偶は2個体分出土している（図Ⅲ－142－16～18，図Ⅴ－9－6～8）。包含層およびH－3の覆土中からの出土で，胎土や調整の状態から，いずれも縄文時代中期中葉，Ⅲ群A_3類土器の時期と考えられる。体部の下半が欠損している1点は，両腕と顔に相当する部分はみられるが，具体的な顔や乳房の表現はなく無文である。もう1個体は，左腕のつけ根と腹部の破片で，全体を復元すると，高さが30cm程度の大型品になる可能性がある。表，裏共に刺突列による文様がみられ，腕には縦の貫通孔がある。

桔梗2遺跡でも同時期の土偶が2個出土している（図Ⅴ－9－9～10）が，形態，文様などが石川1遺跡のものと若干異なり，その系譜が異なる可能性がある。

サイベ沢・権現台場・白坂・栄浜1・ヘロカルウス

北海道における縄文時代中期の土偶は，昭和33年に紹介されたサイベ沢遺跡（児玉ほか 1958）のものが有名であるが，近年，函館市権現台場（田原ほか 1981），松前町白坂（久保ほか 1983），八雲町栄浜1（三浦・柴田 1983），泊村ヘロカルウス（川内編 1987）遺跡などで出土し，細かな時期または形状などによって分類が可能な状況になっている。現在，北海道内の土偶の集成作業を進めているので，稿を改めて検討したい。

2 旧石器時代の遺構と遺物

(1) 旧石器の発見と遺跡の立地

発見の経過

旧石器時代の遺構，遺物の発見は，当初から予想されていたものではなく，昭和61年度の調査時に初めて確認された。最初は第Ⅰ～Ⅲ層の包含層や住居跡の覆土中から出土した石器類の中に，縄文時代の石器とは異った特徴をもち，表面にロームの付着した石器を何点か確認しただけであった。その後は，旧石器の疑いのある石器を出土した発掘区を中心に第Ⅳ層のローム層を掘り下げ，プライマリーな状態で各種の石器を発見することができた。

北海道南西部の旧石器時代の遺跡については，かって分布状況を整理した（㈶北海道埋蔵文化財センター 1984a）が，その時点では，7カ所の集中域が認められ，集中域の最南端の上八雲地区より南は，遺跡が若干みられるだけであった。しかし，その後，昭和61年度には木古内町新道4遺跡（㈶北海道埋蔵文化財センター 1988b），函館市石川1遺跡，昭和62年度には，函館市桔梗2遺跡（㈶北海道埋蔵文化財センター 1988a）が確認され，空白地帯が徐々に埋まりつつある。これらの3遺跡はすでに知られている知内町湯の里4遺跡（㈶北海道埋蔵文化財センター 1984b）を含めて，津軽海峡遺跡群とも呼べるもので，いずれも現海岸線より数km内陸に入った河川の右岸に位置している。その状況は，海と「非親和的」な「現海岸線から一定距離内陸部」に入った「孤島状の分布」という全国的

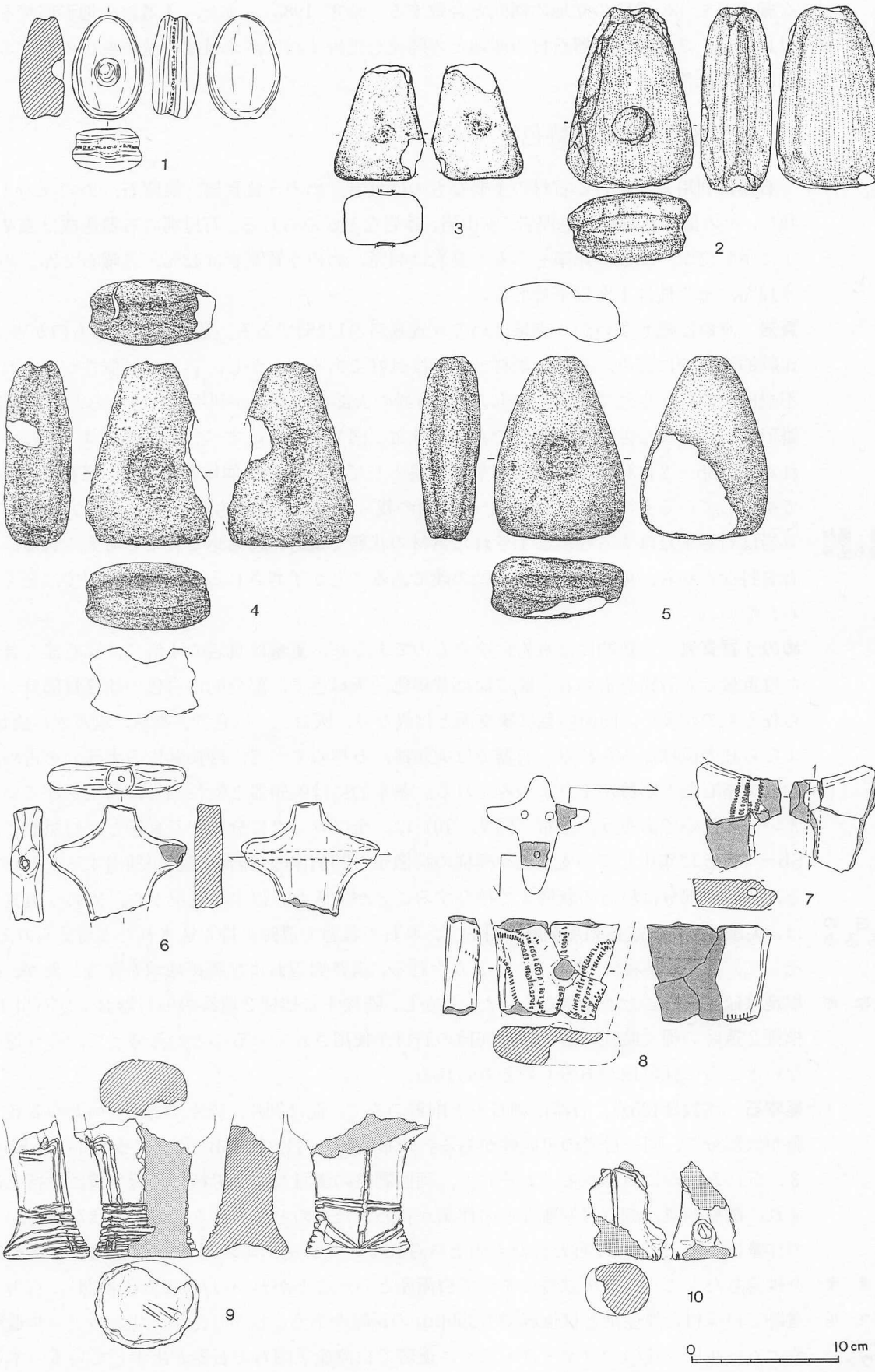
上八雲

新道4

桔梗2

湯の里4

津軽海峡遺跡群



図Ⅴ－9　側縁有溝土製品・石製品，土偶

な細石刃文化の遺跡の立地の傾向と合致する（鈴木 1985）。また，4遺跡の地形環境を十分比較し，さらに，石器石材の産地との関連を把握すれば，未確認の遺跡検出の手立も得られる可能性がある。

(2) 石器石材の特色

石器に利用されている石材の主要なものは頁岩，めのう質頁岩，黒曜石，めのうの4種類で，その他礫石器に緑色泥岩，安山岩，砂岩などがみられる。石材別の石器組成は表Ⅴ－1に示したが，点数の比率をみると頁岩は44%，めのう質頁岩は42%，黒曜石2%，めのう12%，その他は1%以下である。

頁岩　点数は最も多いが，重量はめのう質頁岩の1/4弱である。色は褐色系のものが多く，比較的珪質分に富み，石器の素材としては良好である。しかし，岩石の剝離性がみられ，不規則な割れが生じているものもある。石器の大部分は頁岩が利用されているが，尖頭器，錐形石器，石核などは他の石材である。分布（図Ⅴ－10）はすべての石器ブロックにみられるが，Sb－2，3，7に多い。母岩別資料として抽出した6個体をみると，原石の状態まで接合しているものはない。また，礫皮面の残っている剝片類も少ない。以上の状況から，

石器・素材の持ち込み

頁岩は石器またはある程度加工された素材の状態で遺跡に持ち込まれたと考えられる。接合資料などから，原石はかなり大型の礫であることが予想されるが，遺跡周辺では全くみられない。

めのう質頁岩　点数的には頁岩に次ぐものであるが，重量は頁岩の4倍で，礫石器を含めた総重量でも57%を占める。礫皮面は黄褐色～灰緑色で，部分的に白色の珪藻質部分がみられるものが多い。内面の色は礫皮面とは異なり，灰白色～灰色で，網状，斑点状，縞状，まだら状の模様がみられる。石器では尖頭器，石核のすべて，縦長剝片の大部分を占め，両面調整石器と彫器が1点ずつみられる。基本的には尖頭器と縦長剝片に利用されているといって良いであろう。分布（図Ⅴ－10）は，全ブロックに分布する頁岩とは対照的で，Sb－4，5に集中している。色や模様の特徴から23個体の母岩別資料が抽出することができ，その大部分は原石の状態まで接合することができた。以上の状況から，めのう質頁岩

原石の持ち込み

は，尖頭器製作，縦長剝片剝離の目的で，原石の状態で遺跡に持ち込まれたと考えられる。そして，その作業場はSb－4，5とみられる。遺跡周辺および隣接地域を踏査したが，採

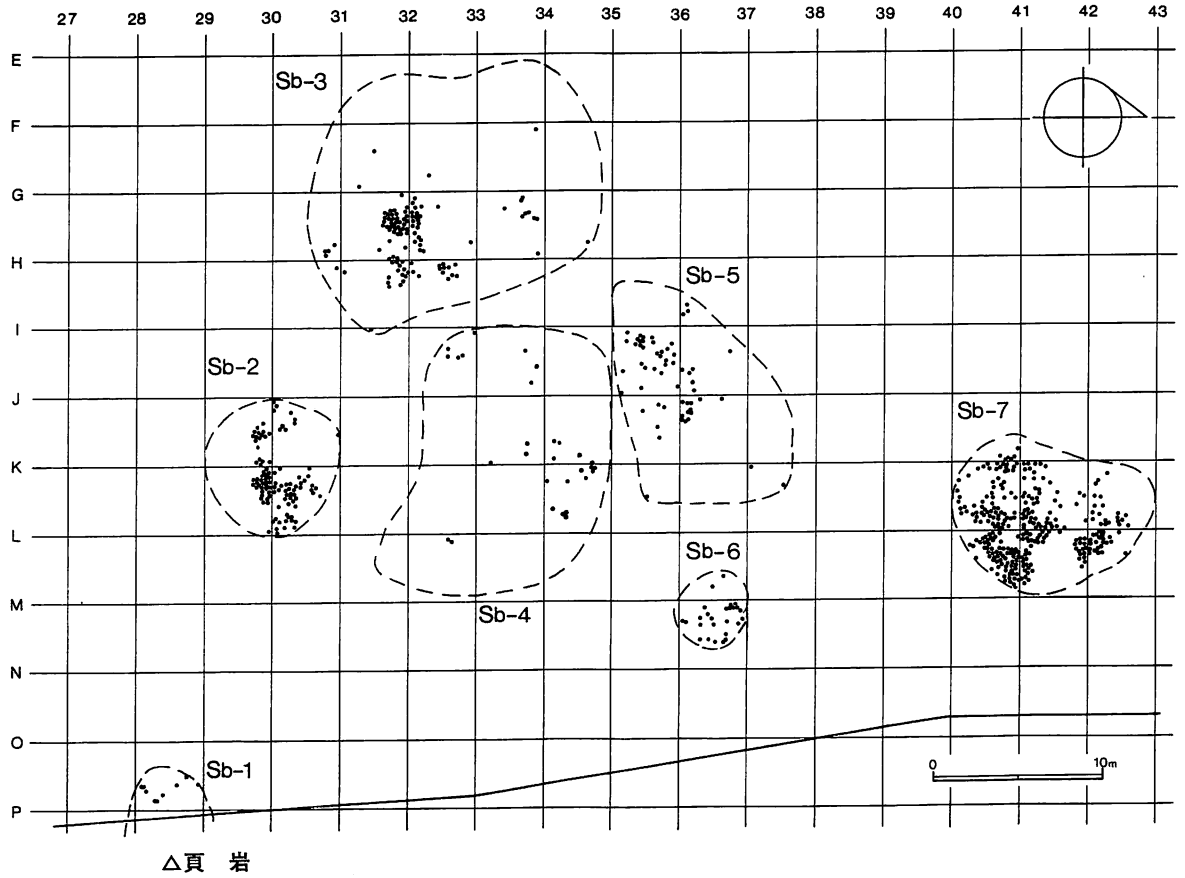
採取地

取地は確認することができなかった。しかし，隣接する桔梗2遺跡の旧石器および石川1，桔梗2遺跡の縄文時代の石器にも同種の石材が使用されていることから考えて，そう遠くないところに採取地があるものとみられる。

黒曜石　点数は135点，石器は細石刃と削器のみで，他は剝片，砕片である。いわゆる花十勝が大部分で，同一母岩の可能性がある。分布（図Ⅴ－11）は，Sb－2，7が中心で，Sb－3，5にわずかにみられる。おそらく，両面調整の素材か細石刃核の状態で遺跡に持ち込まれ，調整剝離，細石刃剝離などの作業が行われたものと思われる。分布の状況から，その作業はSb－2，7で行われたものとみられる。フィッション・トラック法によって産地

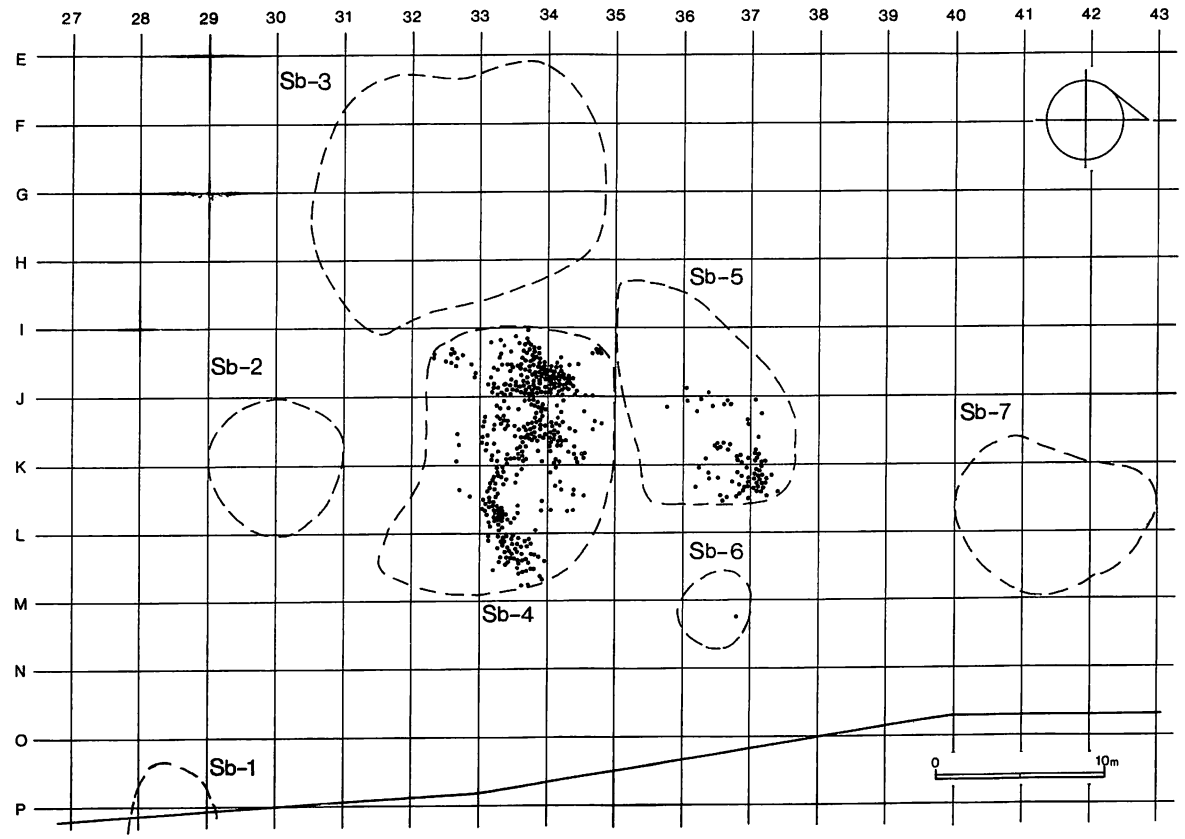
白滝産ソコル・マラヤ・ガーヴァニ

を推定したところ，分析試料はすべて白滝産ということがわかった（Ⅳ 3 (1)参照）。石川1遺跡と白滝村の原産地とは直線でも350kmの距離がある。しかし，サハリンのソコル遺跡やアムール川下流のマラヤ・ガーヴァニ遺跡で白滝産黒曜石の石器が出土している（木村1985，1987）ことから考えれば，陸続きの函館で出土しても何ら不思議ではない。津軽海

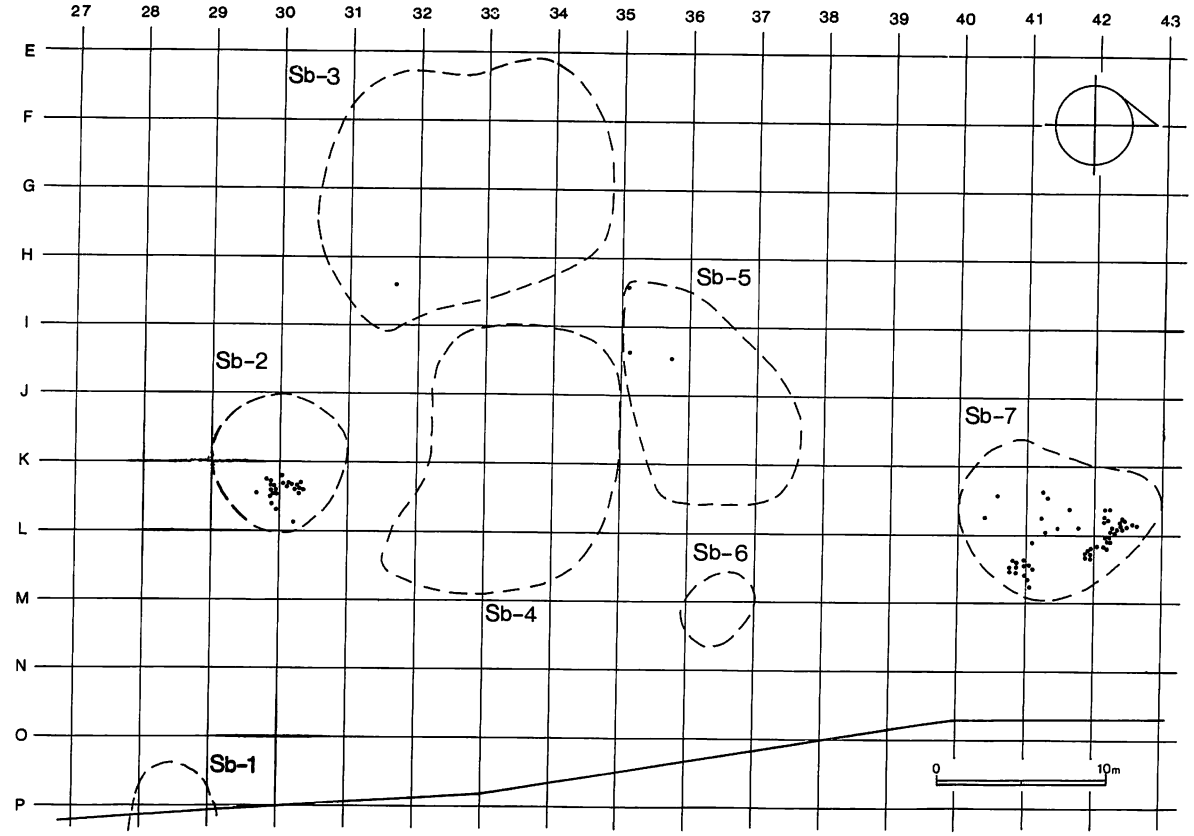


△頁　岩

▽めのう質頁岩

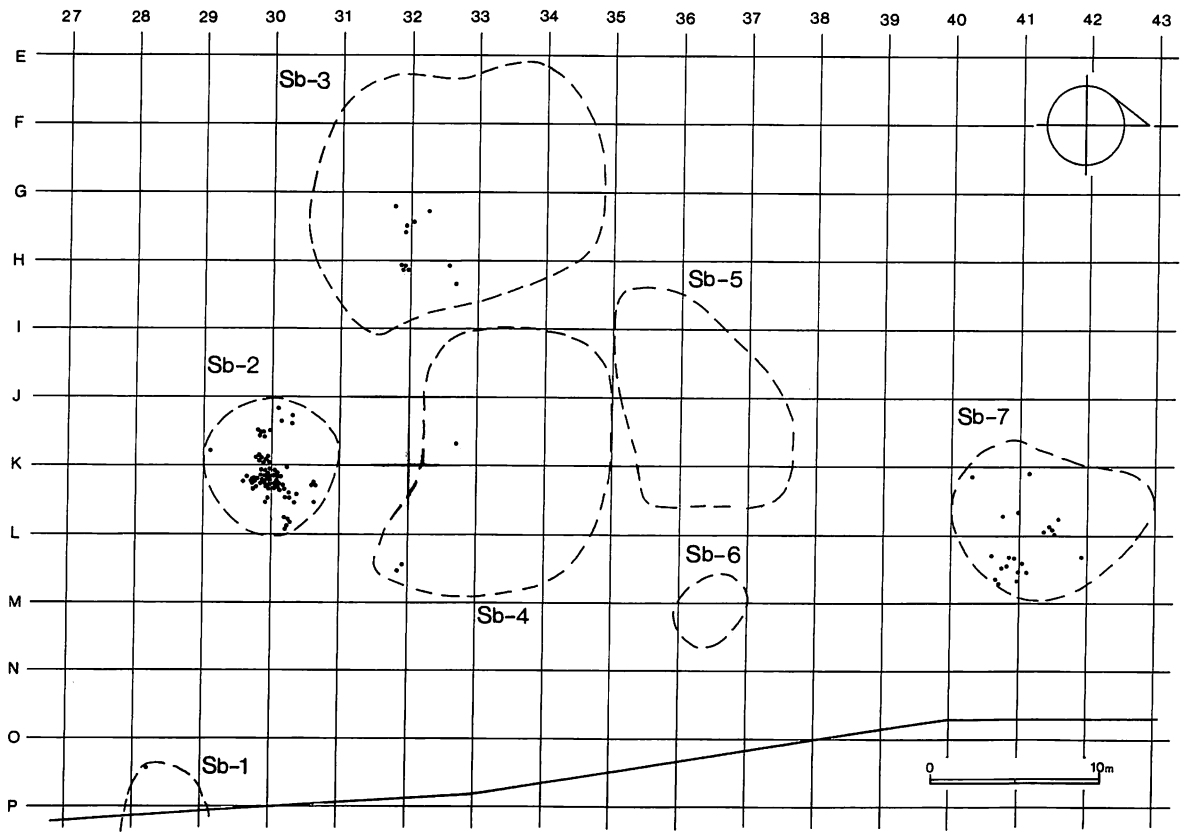


図Ⅴ－10　頁岩とめのう質頁岩の分布



△黒曜石

▽めのう



図Ⅴ－11　黒曜石とめのうの分布

表V－1　石器，石材別の点数と重量

器種＼石材	石材										計	
	頁岩		めのう質頁岩		黒曜石		めのう		その他			
	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量
細石刃	60	8.5			28	2.1					88	10.6
細石刃核	2	44.1									2	44.1
尖頭器			10	747.8							10	747.8
両面調整石器	16	1,048.9	1	23.4							17	1,072.3
彫器	22	106.9	1	2.5							23	109.4
錐形石器							8	4.3			8	4.3
掻器	4	58.5									4	58.5
削器	23	366.3			3	41.9					26	408.2
縦長剝片	7	60.4	44	622.3							51	682.7
石核			7	3,150.4							7	3,150.4
ストーン・リタッチャー									3	1,348.4	3	1,348.4
台石									11	5,054.1	11	5,054.1
石器合計	134	1,693.6	63	4,546.4	31	44.0	8	4.3	14	6,402.5	250	12,690.8
剝片	676	1,601.9	1,834	8,503.5	29	84.3	7	2.6			2,546	10,192.3
砕片	2,983	145.0	1,819	328.2	75	4.8	827	32.1			5,704	510.1
削片	63	69.0					210	69.2			273	138.2
礫									8	509.0	8	509.0
剝片など合計	3,722	1,815.9	3,653	8,831.7	104	89.1	1,044	103.9	8	509.0	8,531	11,349.6
総合計	3,856	3,509.5	3,716	13,378.1	135	133.1	1,052	108.2	22	6,911.5	8,781	24,040.4

峡ではすでに知内町湯の里4遺跡でも白滝産黒曜石製の石器の出土は知られ（(財)北海道埋蔵文化財センター 1984b），木古内町新道4遺跡でも出土が確認された(財)北海道埋蔵文化財センター 1988b)。いずれの場合も，量は少なく，石器の形で持ち込まれている。 湯の里4 新道4

また，フィッション・トラック法による年代測定では，13,300±1,100y.B.P.，水和層法による年代測定では，12,700±900y.B.P.という値が得られている（V 3(1)参照)。

めのう　点数は1,052点，点数的には黒曜石を大きく上まわるが，重量は108.2gと少ない。石器は錐形石器のみで，他は剝片，削片，破片である。分布（図V－11）はSb－2が最も多く，Sb－3，4，7などにみられる錐形石器を製作する目的だけで持ち込まれたと考えられる。色は灰白色で透明感があるが，火を受け白色化または黒変しているものもある。Sb－2から集中して出土している点などから，同一母岩の可能性が強く，礫皮面をもつ剝片がない点などから，ある程度加工された両極打法用の石核の形で持ち込まれているのかもしれない。遺跡周辺には原石は全くなく，肉眼的には今金町美利河，花石地区で採取されるめのうと近似している。 両極打法

(3) 石器の特色

細石刃と細石刃核　細石刃剝離に関する接合資料は5点，うち4点は同一母岩で，同一の技術基盤のもとに作業が行われたものと考えられる。また，細石刃剝離の行われた残核は1点しか出土していないが，頁岩の細石刃はいずれも同種の細石刃核から得られたものとみられる。細石刃剝離過程は次のように整理できる。

1：両面調整素材の準備，形状は柳葉形ではなく，台形に近い。横断面形は凸レンズ形に近いがD字形である。また，次の削片剝離の打点を確保するため，長軸方向の剝離 素材の特色

を行い，コンケーブした側縁を作出し，ストップリッジを設けている。

剥離の特色　2：削片剥離（打面形成・再生），第一次の削片は断面三角形で，二次以降はスキー状削片である。削片剥離の加撃方向は左右両方向から行われ，甲板面が階段上または傾斜した場合は，随時側面からの甲板面調整，甲板面からの側面調整を行う。

細石刃の特色　3：細石刃剥離，細石刃の剥離は基本的に削片剥離の際の加撃方向の面で行われる。得られた細石刃は，バルブが小さく両側縁は直線的で，カールは比較的少ない。平均的な大きさは長さ26.8mm，幅4.9mm，厚さ1.5mmで，側縁の加工，二次的損傷はほとんどみられない。

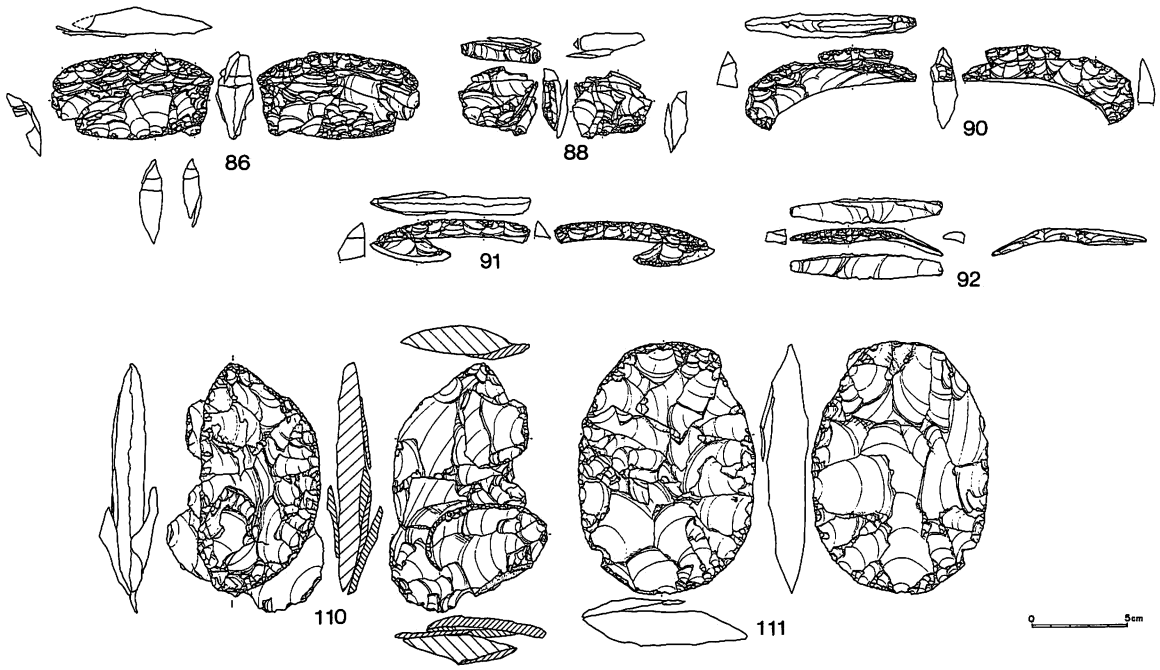
システムA　両面調整素材を縦割にし，短軸方向に細石刃剥離を行う状況は小林達雄氏の「システムA」（小林 1970），その石核は鶴丸俊明氏の「削片系石核」（鶴丸 1979）の範ちゅうに入るもので，技術的には「美利河技法」（㈶北海道埋蔵文化財センター 1984a）と「湧別技法」（吉崎 1961）の両方の特徴がみられる。断面三角形の一次削片などは「湧別技法」的で甲板面や側面の調整は「美利河技法」的である。しかし，両面調整素材の形状，大きさ，コンケーブする側縁の作出，残核の形状などは，現在知られている両技法や両技法による細石刃核と異なった特徴をもっている。したがって，今回の資料は既存の型式に単純にあてはめることは困難である。また，木古内町新道4遺跡ではいくつもの細石刃核を含み母岩段階まで復元できた接合資料が多数あり，それらは全体的に「美利河技法」の特徴がみられる（㈶北海道埋蔵文化財センター 1988b）ので，それらとの比較も必要と考えられる。

削片系石核
美利河技法
湧別技法

「美利河技法」，「美利河型細石刃核」については，その類例などについて十分な検討を行っていない。また，「美利河技法」について異論を唱える意見（藤野 1986）もあるが，今回の資料および新道4遺跡の資料など従来の「湧別技法」（吉崎 1961）の枠では説明できない資料も増えつつある。「美利河技法」の提唱の意味は，単純に「湧別技法」と対峙することを目的としたものではなく，「湧別技法」の再検討を意図したもので，「湧別技法」の概念の把え方によっては「湧別技法」AとかBとかいう形でも良いものかもしれない。しかし，一定枠内での細分は同一レベルでの技術基盤の検討がなされなければ，かえって混乱をまねく可能性がある。「美利河技法」については接合資料はあるものの，残核の類例の検討が不十分で，「湧別技法」については残核は豊富にあるが，接合資料に乏しい。従って，現時点では，それぞれの不十分な要素を埋めていく作業が必要で，その段階では，初現の名称をそれぞれ使用した方が良いと考えられる。そのような点から「湧別技法」は接合資料で示された限定した範囲で把える必要があり，特にバラエティのある「札滑型」（吉崎 1961）についての再検討が急務である。「美利河技法」については類例の提示が急務であるが，現在，美利河1遺跡の資料の詳細な検討を行い，その技術基盤を整理しつつあるので，稿を改め，さらに今回の資料も含めて再考したいと考えている。また，美利河技法の資料整理段階で，頻繁に行われる側面からの打面調整を細石刃剥離段階の前と考えた。しかし，その後の剥離面を含めた詳細な検討および今回の資料の状況などからみて，打面調整は，細石刃剥離後，削片剥離前と考えられる。

札滑型

両面調整石器　円形，楕円形，卵形など各種の形状がある。また，大きさも長さ4～13cmの幅があり，バラエティーに富んでいる。また，大型の2点（図Ⅲ－154－99，100）は接合剥片があり，相似形に小型化していった状況がみられる。さらにその接合資料（図Ⅴ－110，111）の周縁は摩滅が著しく，削器として使用されたことが考えられ，小型化は刃部の再生



図Ⅴ－12　細石刃核，削片，両面調整石器接合資料

の結果とみられる。松沢亜生氏によれば，実験的な動物の解体作業を行ったところ，図Ⅲ－154－100のような大型のものが，初期の大雑把な解体には非常に有効である，とのことである。また，A.P.デレビャンコ氏などのソ連の学者が，石川１遺跡の資料を実見した際，彼らが「スクレブロ」とよんでいるものに形状，大きさなどが近いのは図Ⅲ－155－102である，とのことであった。

スクレブロ

さらに注目すべき点は，両面調整石器の調整剝片が彫器，掻器，削器の素材として利用されていることである。これはあくまで推定の域を出ないが，円盤状に近い石核からの縦長剝片の剝離，石核の両面調整石器化，両面調整石器の再調整とポイントフレイクの獲得などの流れが，初期の段階から意図的に行われたのではないだろうか。つまり，両面調整石器の一部のものは石核と削器の二種類の性格をもった複合石器といえるのではないだろうか。この問題は，細石刃剝離に伴うスキー状削片が目的剝片か，副次的剝片かという問題と同様の内容を含んでおり，十分な証明が必要と思われるが，可能性を指摘しておく。

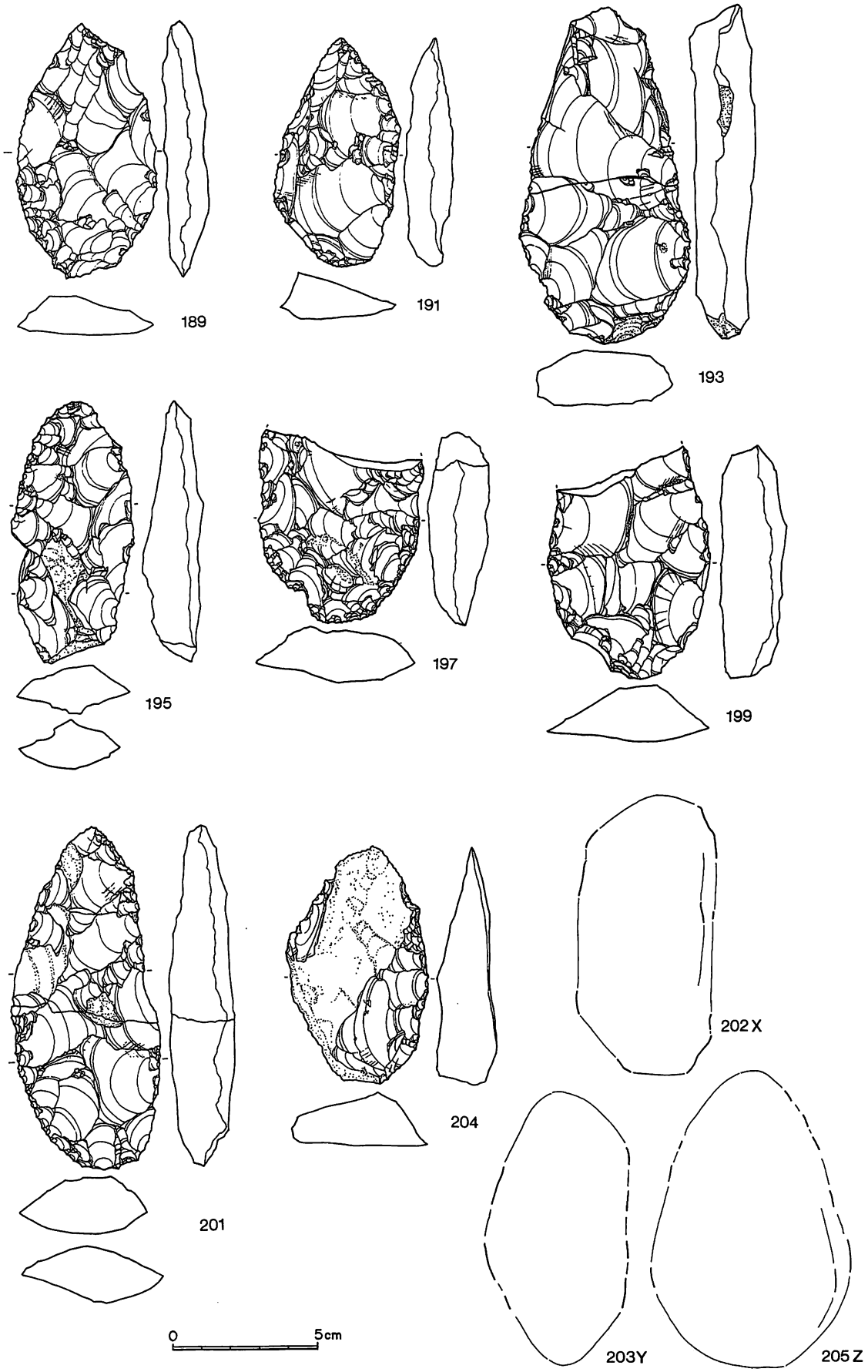
複合石器

彫器　左斜刃の「荒屋型彫器」（芹沢 1959）の範ちゅうに入るが，幅広の木の葉形の形状が特徴的である。長幅比は最小1.3，最大2.0で，平均は1.6である。比較的まとまっている今金町美利河１遺跡のSb－１～３の荒屋型彫器28点の場合は，長幅比の最小2.1，最大は4.9で，平均は3.0である。石川１遺跡の場合は美利河１遺跡の場合の倍の幅広さといえる。素材は石刃といえるものはなく，すべて縦長剝片かポイントフレイクとみられる。調整は両側縁に浅く行われ，基部は尖頭状に作出されている。主剝離面の調整は基部にのみみられ，着柄がかなり意識されている。

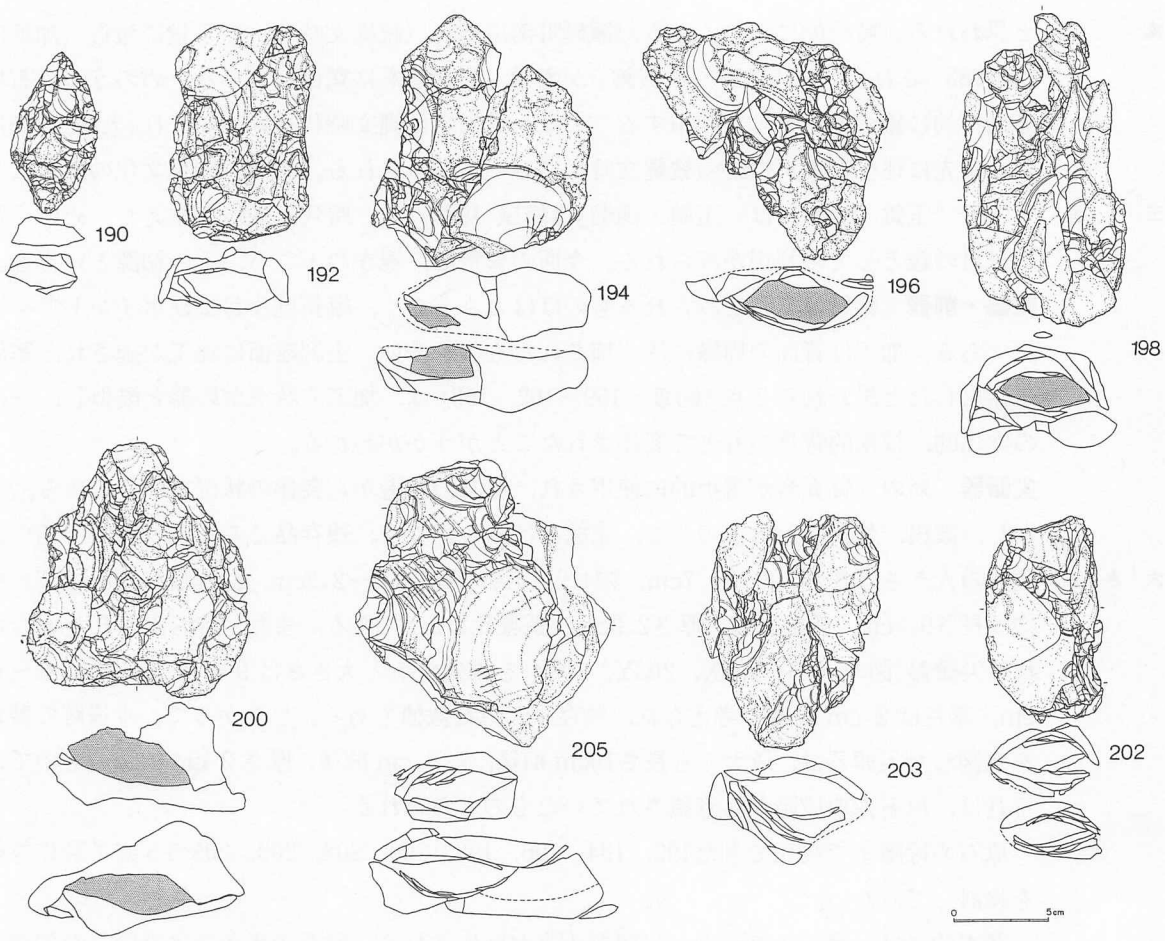
荒屋型彫器

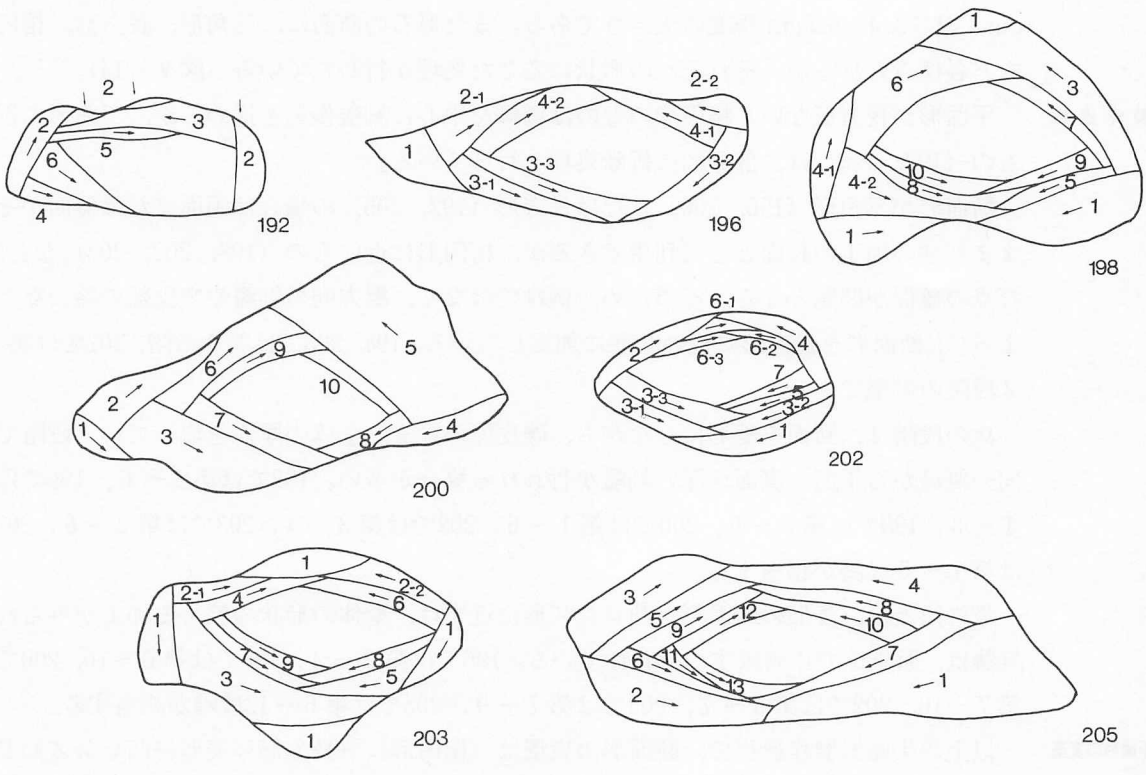
錐形石器　めのう製で，角柱状の削片の一端を加工し，刃部を作出したものである。素材の削片は両極打法によって得られた両極剝片の特徴（岡村 1976，1983）をもっている。このようなめのう製の棒状の錐は，道内の旧石器では初出で，全国的にみても類例は少ない

両極打法



図Ⅴ－13　尖頭器





図Ⅴ－14　尖頭器製作剝離工程模式図

南　川

と思われる。時代的に新しくなるが瀬棚町南川遺跡（続縄文時代）で多量に報告（加藤ほか 1983）されている「CⅣ型の石錐」が素材，形状ともに類似している。めのう質の石材を選択的に錐の素材として利用することは，道内では縄文時代後期に知られ(大塚 1976)，さらに先に述べた南川遺跡の続縄文時代においてもみられる。また，弥生文化の遺跡にお

玉　錐

いても「玉錐」の素材は「玉髄・瑪瑙」(蜂屋 1985) で，時代，地域を越えた，めのう質の石材の錐としての利用がみられる。今回の資料は，現在のところ，その初源といえる。

掻器・削器　素材は石刃とみられるものはほとんどなく，縦長剝片およびポイントフレイクである。加工は背面の周縁に浅く施されたものが多い。主剝離面に加工が施され，基部を作出したと思われる２点（図Ⅲ－159－162，163）は，加工の状況が彫器と酷似し，一連の文化的，技術的背景のもとで製作されたことがうかがわれる。

尖頭器　めのう質頁岩が選択的に使用され，原石の段階から製作の状況を復元できる。しかし，破損，欠損品があるのみで，完成品はみられない。残存品でみると（図Ⅴ－13）尖

大きさ

頭器の大きさは長さ7.8～11.7cm，幅4.2～5.9，厚さ1.3～2.3cm，長幅比は1.8～2.3，平均は長さ9.7cm，幅5.1cm，厚さ2.0cm，長幅比は2.0である。また，持ち出されたとみられる尖頭器(図Ⅴ－13－202X，203Y，205Z)を推定すると大きさは９～10cm，幅は４～６cm，厚さは２cm程度と考えられ，残存品と似た数値である。したがって，本遺跡で製作を意図した尖頭器は，最大でも長さ10cm前後，幅５cm前後，厚さ２cm前後のもので，それは，原石採取段階から意識されていたものとみられる。

原石の段階まで復元できた192，194，196，198，200，202，203，205の８点で製作技術を検討してみたい。

基本的には，原石１点から，尖頭器１点が製作される。原石の大きさは意図した尖頭器

原石の大きさ

の大きさ(10×５×２cm)を大きく上まわるものでなく，長さ10.8～13.4cm，幅6.2～13.1cm，厚さ3.4～6.5cm程度の大きさである。また原石の断面は，三角形，長方形，楕円形など各種みられるが，それぞれの形状に応じた処理が行われている（図Ⅴ－14)。

製作過程

平面形が長方形ないし楕円形のものは側縁を中心に剝離作業を進めるが，三角形に近いもの（192，196）は，部分的に折断処理を行っている。

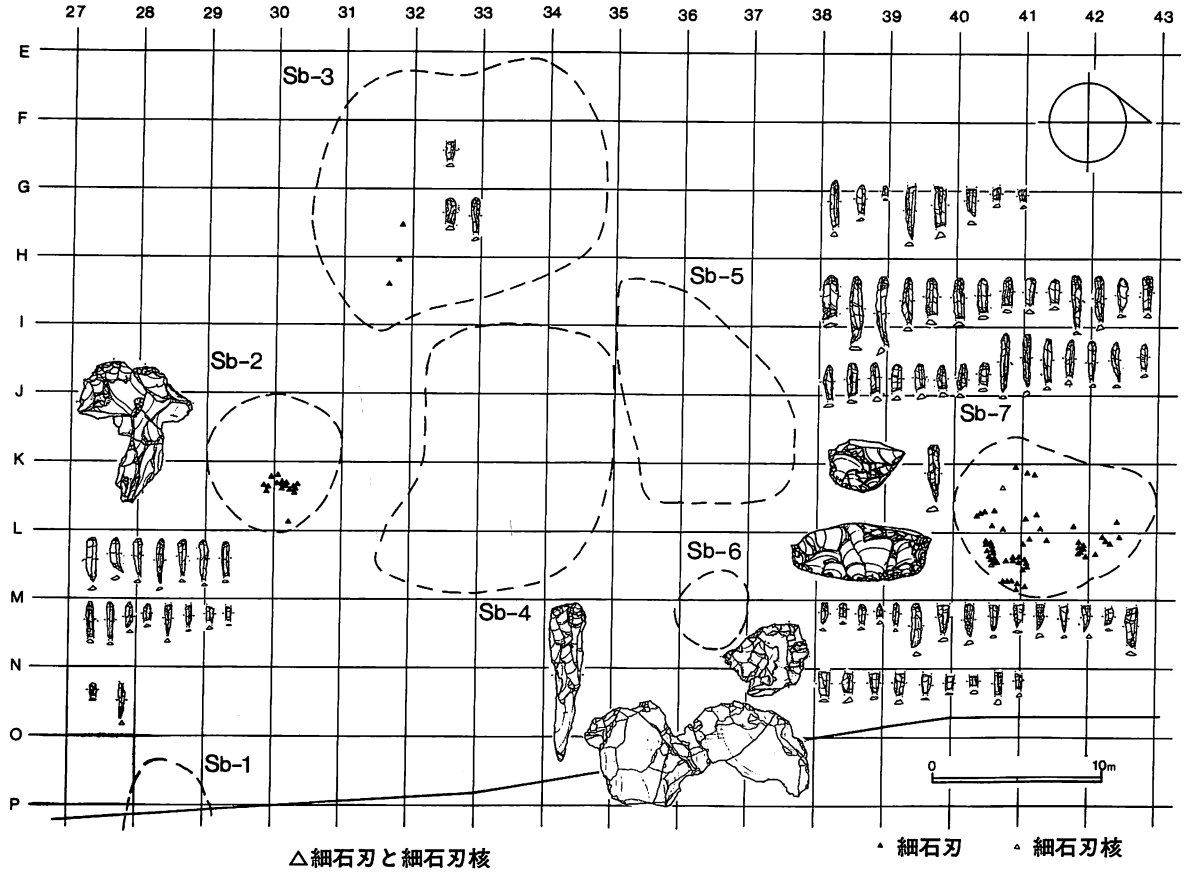
断面形が三角形（196，200）または長方形（192，205）の場合は両面または側面がそのまま初期の加工の打面として利用できるが，楕円形に近いもの（198，202，203）などは，打点の確保が問題となる。そのため，側縁ではなく，縦方向の剝離や突出部の除去などによって，断面形を長方形に近い状態に加工している。198，203では第１段階，202では第１，２段階の剝離である。

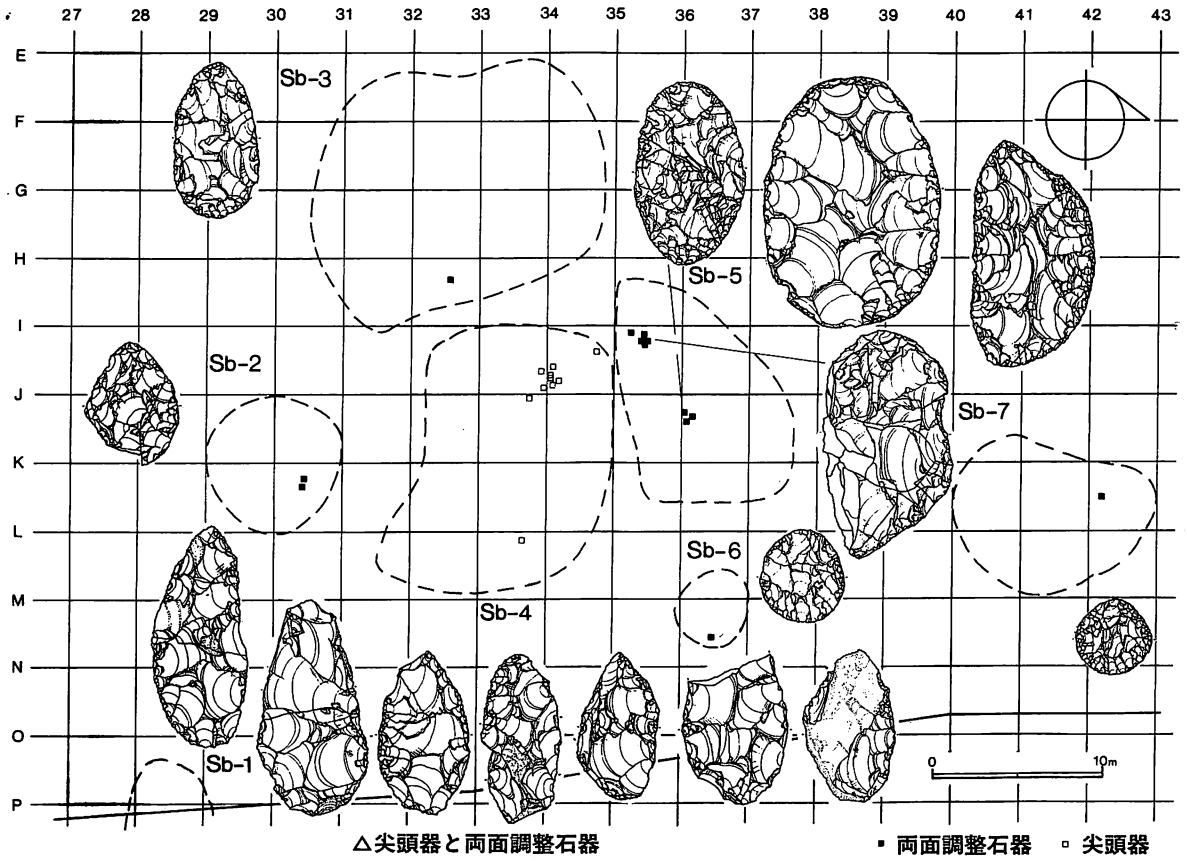
次の段階は，断面を菱形にしながら，礫皮面の除去と全体の厚みを取っていく段階で，同一側縁から正面と裏面へ深い剝離が行われる場合が多い。192では第１～６，196では第１～３，198では第３～６，200では第１～６，202では第３～４，203では第２～６，205では第１～５段階が相当する。

最終段階は，菱形の断面形を凸レンズ形に近ずけ，全体の形状の整える加工がみられ，剝離は，面単位で片側縁ずつ行われている。196では第３～４，198では第６～10，200では第７～10，202では第５～７，203では第７～９，205では第６～13段階が相当する。

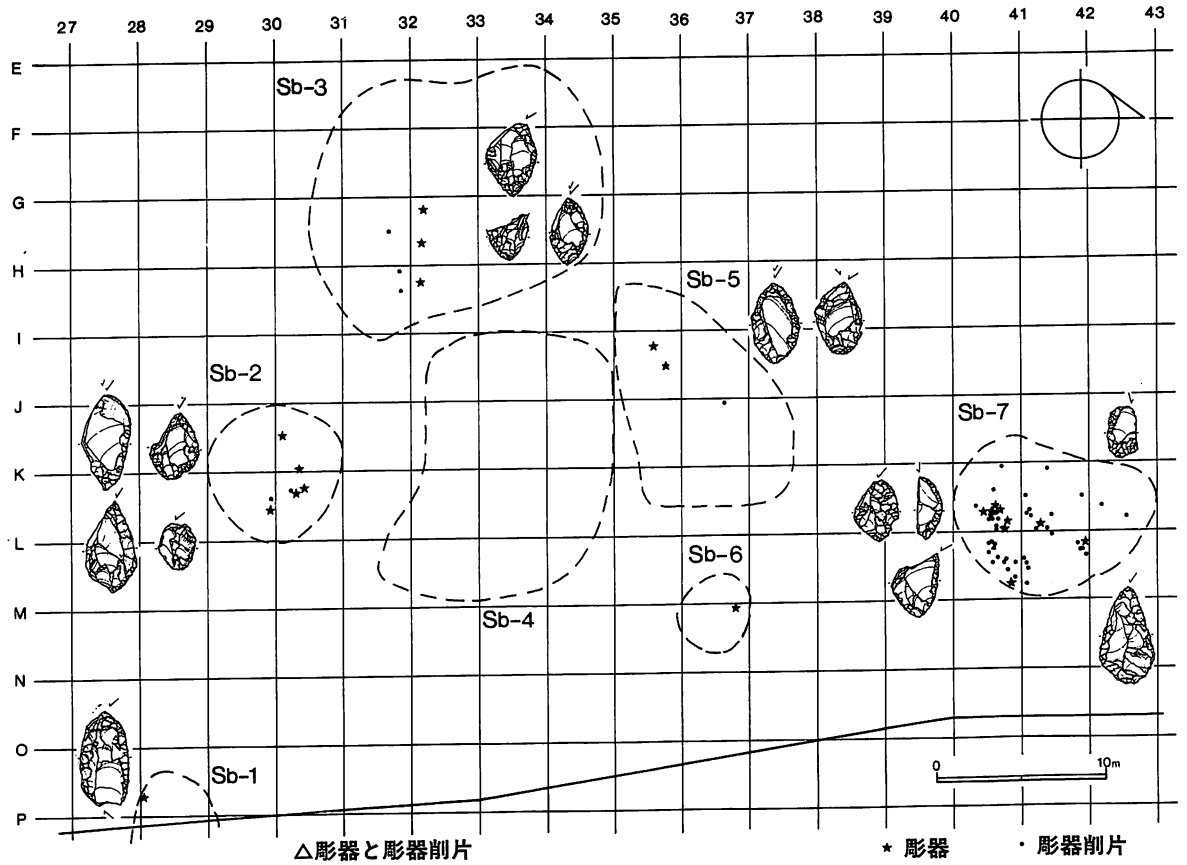
断面形の変遷

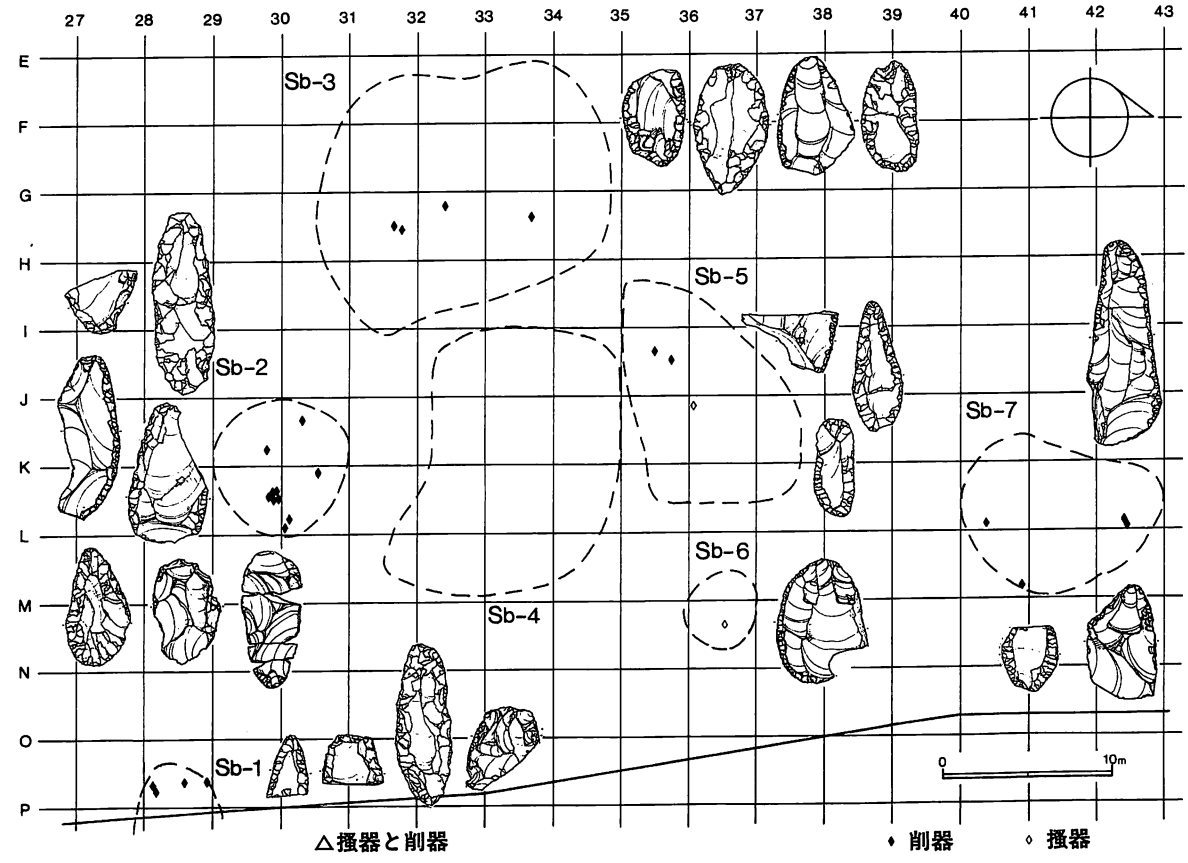
以上の尖頭器製作過程で，断面形の変遷は（楕円形）→長方形→菱形→凸レンズ形と考えられることができ，その流れは礫皮面の除去，打面の確保など一連の作業を含めて，原



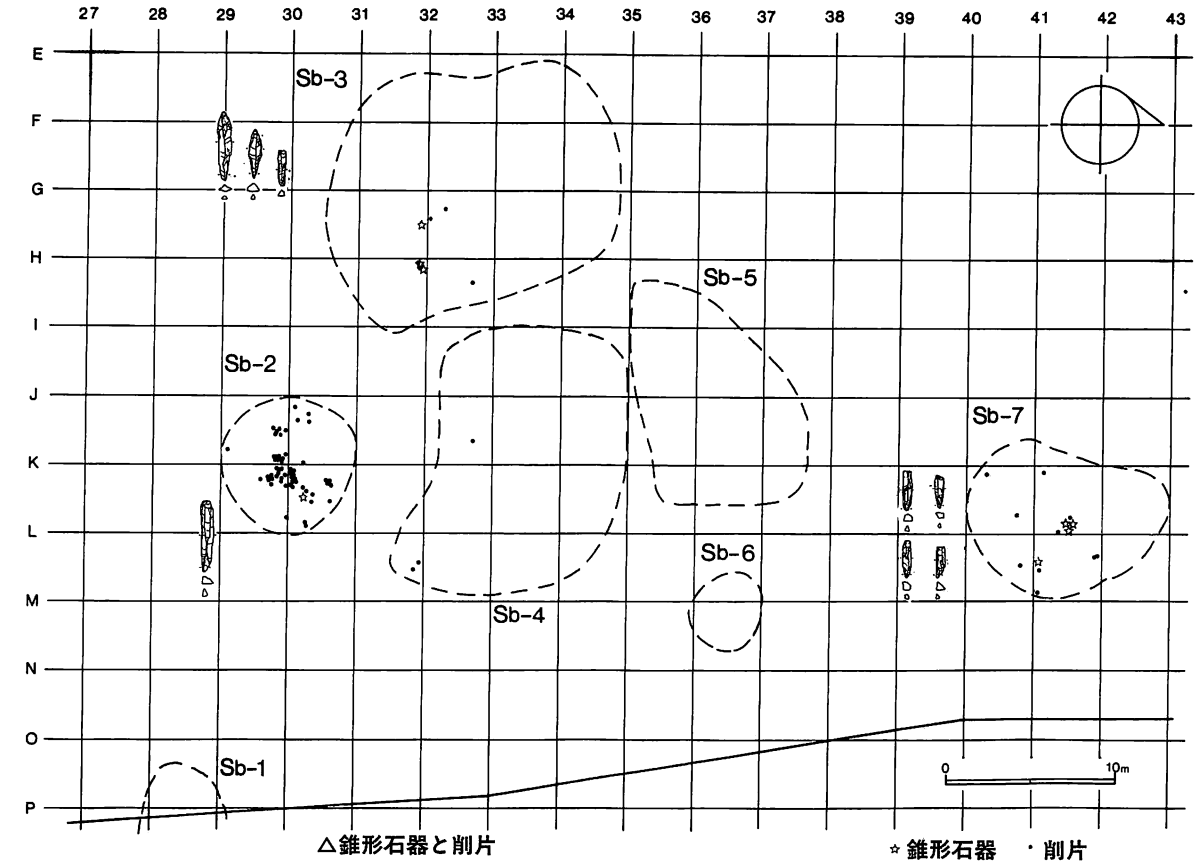


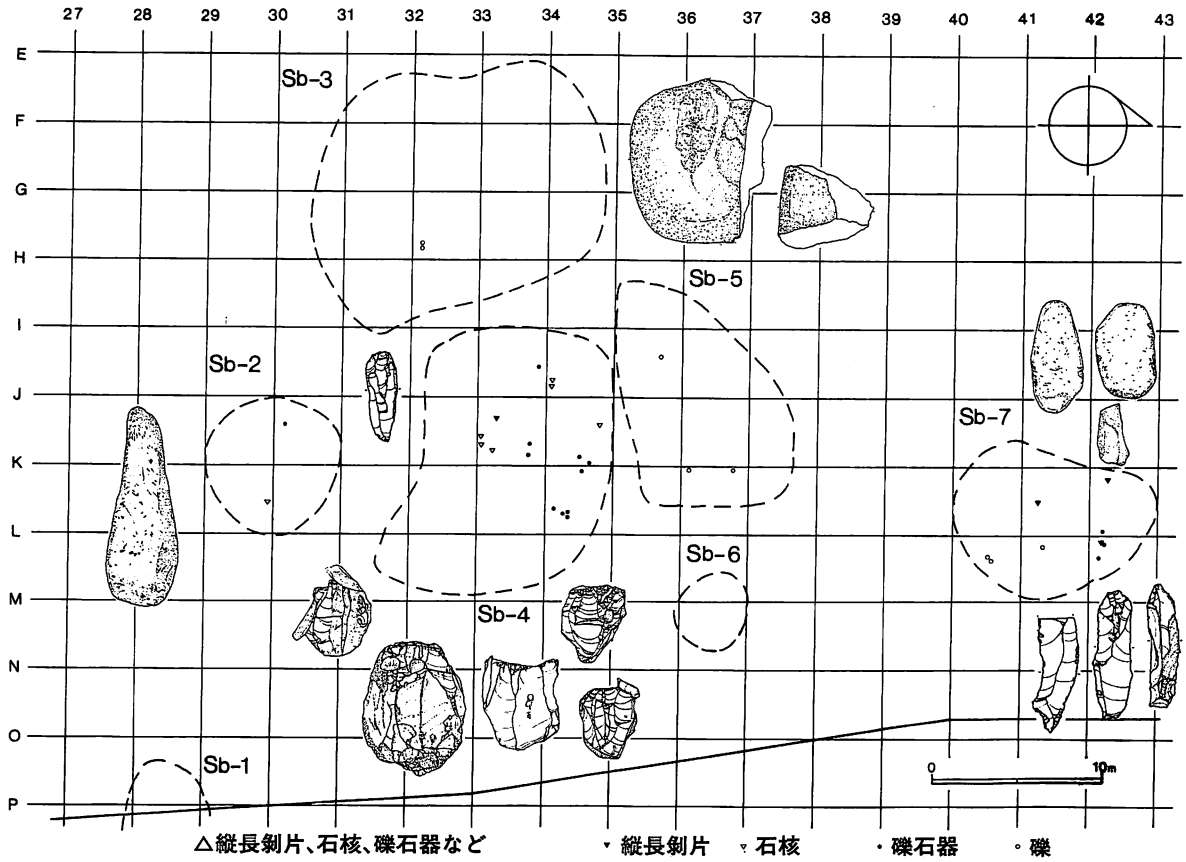
図Ⅴ－15　器種別分布図(1)





図Ⅴ－16　器種別分布図(2)





図Ⅴ－17　器種別分布図(3)

石の状況に応じて，合理的に行われていることがわかる。このような原石段階からの尖頭器製作技術が，石川１遺跡だけのものであるのか，それとも旧石器時代の一般的な状況であるのかは，検討の価値がある。今回の資料のように接合例が豊富であれば，比較も十分可能と思われるが，類例は少ない。しかし，尖頭器の剥離過程の復元作業(松沢 1959，山崎 1977)などと比較していけば，接合資料がなくてもある程度可能ではないかと考えている。また，尖頭器は，縄文時代にも製作されており，それらの比較によって，同一石器を介した石器製作技術の比較検討も可能で，さらに使用石材の状況などによって地域的な状況も検討できるかもしれない。すでに，縄文時代草創期の秋川市前田耕地遺跡などでは，工程のシステム化が試みられており（橋口 1985），それらとの比較を含めて，今後も検討していきたい。

前田耕地

(4) 石器ブロックの特色と性格

器種別分布の特色（図Ⅴ－15～17）

細石刃と細石刃核（図Ⅴ－15） 細石刃はSb－２，３，７にみられるが，Sb－２，７に集中している。また，黒曜石の細石刃は３ヵ所共みられるが，Sb－２，７が多く，さらにSb－２，７では細石刃核の調整剥片もみられることなどから，それらの場所で細石刃剥離作業が行われた可能性がある。頁岩の細石刃は大部分がSb－７で出土し，同時に細石刃核，削片などもみられるので，頁岩の細石刃剥離作業は主にSb－７で行われたと考えられる。

両面調整石器と尖頭器（図Ⅴ－15） 両面調整石器は，Sb－４以外で，尖頭器はSb－４だけで出土し，対照的な在り方を示している。剥片の出土状況，接合資料の分布状況などからみても，Sb－４は尖頭器製作場所と考えられる。

彫器と削片（図Ⅴ－16） 彫器はSb－４以外のブロックでみられるが，Sb－２，７が多い。彫刃面の作出，再生の削片はSb－２，３，５，７でみられるが，Sb－７に集中している。つたまり，Sb－７が彫器の使用頻度が高い場所であったことが考えられる。

掻器と削器（図Ⅴ－16） Sb－４以外のSb－１～３，５～７のブロックでみられ，Sb－２では７個体，Sb－１，３，５，７では３～４点，Sb－６では１点の出土である。その分布状況は彫器の分布状況と一致している。

錐形石器と削片（図Ⅴ－17） 錐形石器はSb－２，３，７でみられ，素材の削片はSb－２～４，７にみられる。Sb－２，３，７では錐形石器と削片が同時に出土しているので，素材の作出と石器の使用が行われ，出土点数から素材の作出はSb－２が中心であったとみられる。

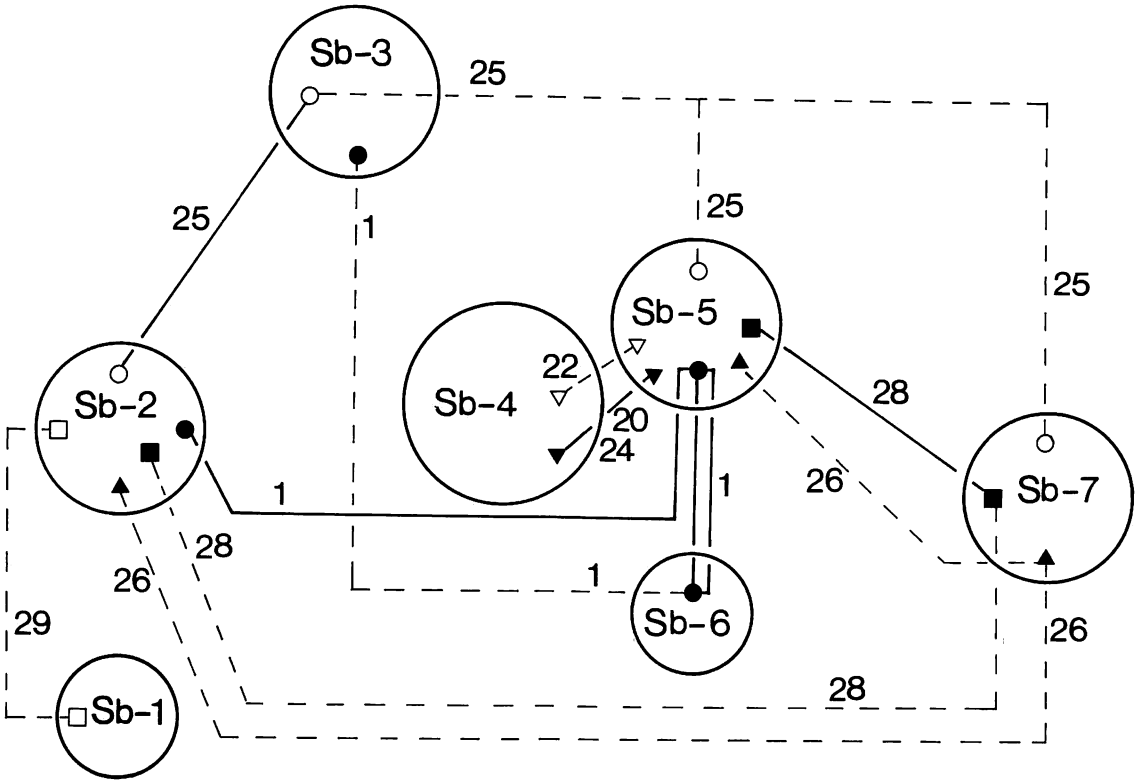
縦長剥片・石核と礫石器（図Ⅴ－17） めのう質頁岩，縦長剥片と石核はその大部分がSb－４から出土している。尖頭器同様，Sb－４がめのう質頁岩の石器製作場所であったと考えられる。礫石器は出土点数が少ないが，台石はすべてSb－４からの出土で，めのう質頁岩の尖頭器製作，縦長剥片作出などの際に利用されたことが考えられる。

石器ブロックの石器組成と性格（図Ⅴ－18）

各石器ブロックの石器組成を図Ⅴ－18に示した。再三述べているようにSb－４は他のブロックとは石器組成が大きく異っている。Sb－４の石器は尖頭器，縦長剥片，石核，礫石器のみで，その他は剥片類である。また，尖頭器接合，尖頭器製作剥片接合，縦長剥片・石核接合などの資料が多数ある。以上の状況から，Sb－４はめのう質頁岩の原石を持ち込

ブロック / 器種	Sb－1	Sb－2	Sb－3	Sb－4	Sb－5	Sb－6	Sb－7
細石刃							
細石刃核							
尖頭器							
両面調整石器							
彫器							
錐形石器							
掻器							
削器							
縦長剥片							
石核							
礫石器							

図Ⅴ－18　石器ブロック別の石器組成



※実線は接合，破線は母岩の共有を示す。

図Ⅴ－19　石器ブロック間の接合，母岩共有関係

んで，尖頭器の製作，縦長剝片の作出などを行った場，と考えられる。また，Sb－5の東側にも縦長剝片の接合資料があり，Sb－4と関連する作業場とみられる。

石器製作の場

Sb－1～3，5の西側，6，7の6ヵ所のブロックは石器組成のうえから大きく二つに分けられる。一つはSb－2，3，7で，細石刃，両面調整石器，彫器，錐形石器，削器が共通し，Sb－2，7ではストーン・リタッチャー，Sb－3では掻器，Sb－7では細石刃核が加わる。もう一つはSb－1，5の西側，6で，いずれも小ブロックで点数も少ないが，両面調整石器，掻器が共通し，Sb－1，5では彫器と削器が加わる。つまり，後者は前者の石器組成から細石刃と錐形石器を除いた石器組成ということになる。また，Sb－2，3，7はいずれも炭化木片ブロックが伴い，それらを中心とした生活空間であることが想定できる。以上のことから，7つのブロックの中で，最も豊富な石器組成と炭化木片ブロックがみられるSb－2，3，7は，石川1遺跡の中心的な石器ブロックといえる。そして，それから，細石刃，錐形石器などが除かれたSb－1，5，6は副次的な石器ブロックと考えられる。さらに関題を一歩進め，その性格を考えると，Sb－2，3，7は居住空間，Sb－1，5，6は二次的な道具を使用する作業場ということが想定できる。したがって，7つの石器ブロックの性格と分布を重ね合わせると，石器製作の作業場（Sb－4）と二次的な道具を使用する作業場（Sb－5，6）を中心に，三ヵ所の居住空間（Sb－2，3，7）が存在する状況が想定できる。さらに7ヵ所の石器ブロック間の接合関係，同一母岩の共有関係などをみると（図Ⅴ－19），それらは相互に関連性をもっていることがわかる。三つの居住空間と考えられる石器ブロックが同時に存在したものか，それとも同一の人間集団によって時間的

生活空間

作業場

間隔をもって残されたものかは，単純に判断できないが，一応，同時に存在したものと理解しておく。したがって，石川１遺跡の旧石器群は，石器や母岩を共有する三つの人間集団によって残されたものといえる。その集落景観は，共通の作業空間を中心に三つの独立した居住空間をもつ状況で、鈴木忠司氏の言葉を借りれば三つの「世帯ユニット」で構成される「交叉型集落」（鈴木 1982，1984）とでも呼べるものであろうか。

集落景観

「交叉型集落」

(5) 石器群の編年的位置と年代

７ヵ所の石器ブロックは，三つの異った性格をもつものの，接合関係，母岩の共有などから相互に関連性を有する三つの人間集団によって残された可能性が強いことはすでに説明した。したがって，石川１遺跡の石器群は，７ヵ所の石器ブロックの石器組成の最大公約数としてとらえることができ，細石刃，細石刃核，尖頭器，両面調整石器，彫器，錐形石器，掻器，削器，縦長剝片，石核，ストーン・リタッチャー，砥石，台石などがある。これらのうち，特徴的とみられるものは，細石刃核，尖頭器，両面調整石器，彫器，錐形石器などであるが，単純に他の遺跡と比較できるものはほとんどない。以下，特徴を列挙する。

石器組成

細石刃核および細石刃剝離の過程は，先に述べたように「美利河技法」，「湧別技法」との関連が考えられる。尖頭器は幅広タイプで，有茎のものは含まれない。両面調整石器は大きさ，形状にバラエティーに富み，削器として使用された可能性が強い。類例は，小型で円形のものは帯広市暁遺跡第１地点出土の「掻器」（佐藤・北沢 1985），楕円形のものは帯広市空港南Ｂ遺跡スポット３出土の「削器」（佐藤・北沢 1986），今金町美利河１遺跡Ｓｂ－８出土の「両面調整石器」（㈶北海道埋蔵文化財センター 1984a），大型の10cmと越えるものは白滝村服部台２遺跡の「両面加工のスクレイパー」（千葉ほか 1982）などがあげられる。彫器は木の葉形で幅広，長幅比の平均は1.6である。「荒屋型彫器」の範ちゅうに入る。錐形石器はめのう製で，両極打法で得られた削片を素材としている。類例はないが，逆に他の遺跡で検出に努めれば，標準的な資料となり得る。

細石刃核

両面調整石器

暁

空港南Ｂ
美利河１

服部台２

彫器

錐形石器

以上のことから，編年的目安になるのは，やはり細石刃剝離技術で，「美利河技法」との関連から，「美利河ⅡＡ石器群」（㈶北海道埋蔵文化財センター 1984a）に近い時期といえる。また，「湧別技法」との関連で考えれば，千葉英一氏のⅢb期（14,000～12,000y.B.P.）（千葉 1985）に相当する可能性が強い。

美利河ⅡＡ

Ⅲｂ期

理科学的には，フィッション・トラック法，黒曜石水和層法，^{14}C法などによって，年代測定を行い，以下の数値が得られた。

年代

フィッション・トラック法	13,300±1,100y.B.P.
黒曜石水和層法	12,700± 900y.B.P.
^{14}C 法	13,400± 160y.B.P.

以上の三つの方法によって得られた数値は，概ね整合性があり，前述の編年観とも矛盾しないものである。

引用，参考文献

上野秀一・高橋和樹編　1975　『札幌市文化財調査報告書XII　N309遺跡』札幌市教育委員会

宇田川　洋　1979　「北海道縄文時代中期の住居址」『茅沼遺跡群』標茶町教育委員会

大塚和義　1976　「北海道の縄文後期における穿孔技術とその展開」『考古学ジャーナル』No.120　ニューサイエンス社

大沼忠春　1985　「魚骨文の新例について」『北海道考古学」第21輯　北海考古学会

岡村道雄　1976　「ピエス・エスキーユについて」『東北考古学の諸問題』東北考古学会編

岡村道雄　1983　「ピエス・エスキーユ，楔形石器」『縄文文化の研究』7　雄山閣

鏡山　猛　1972　「原生期の織布」『九州考古学論攷』（『史淵』84，86，89輯初出）吉川弘文館

加藤邦雄・上野秀一・羽賀憲二・田部淳ほか　1983　『瀬棚南川』瀬棚町教育委員会

川内基編　1987　『ヘロカルウス遺跡』北海道文化財研究所調査報告書第3集　北海道文化財研究所

木村英明　1985　『マンモスを追って』北海道考古学教室1　一光社

木村英明　1987　「ノヴォペトロフカ文化と北海道の石刃鏃文化」『日本人と文化の起源をたずねて』日本対外文化協会

久保泰・井上真理子・石本省三・鈴木正語ほか　1983　『白坂』松前町教育委員会

河野本道　1984　「〝謎〟だらけの考古学(Ⅰ)」『ひばり』第4号　北海道文化財研究所

河野本道　1985　「〝謎〟だらけの考古学(Ⅱ)」『ひばり』第5号　北海道文化財研究所

児玉作左衛門・大場利夫・武内収太　1958　『サイベ沢遺跡』市立函館博物館

小林達雄　1970　「日本列島に於ける細石刃インダストリー」『物質文化』16　物質文化研究会

佐藤訓敏・北沢実　1985　『帯広・暁遺跡』帯広市埋蔵文化財調査報告第1冊　帯広市教育委員会

佐藤訓敏・北沢実　1986　『帯広・空港南B遺跡』帯広市埋蔵文化財調査報告第2冊　帯広市教育委員会

佐藤忠雄・河野本道ほか　1979　『奥尻島青苗遺跡図版編』　函館土木現業所・奥尻町教育委員会

杉山寿栄男　1933　『北海道原始文化聚英』犀川会

鈴木忠司　1984　『先土器時代の知識』考古学シリーズ3　東京美術

鈴木忠司　1985　「再論日本細石刃文化の地理的背景」『日本原史』吉川弘文館

鈴木忠司・山下秀樹・保坂康夫ほか　1982　『野沢遺跡』大沢野町教育委員会

鈴木　守・長谷川　潔・三谷勝利　1969　5万分の1地質図幅「東海」北海道開発庁

瀬川秀良　1974　『日本地形誌北海道地方』朝倉書店

瀬川秀良　1974　「西桔梗遺跡と段丘形成について」『西桔梗』函館圏開発事業団

芹沢長介　1959　「新潟県荒屋遺跡における細石刃文化と荒屋型彫刻刀について（予報）」『第四紀研究』第1巻5号　第四紀研究会

高橋正勝　1974　「日ノ浜型住居址」『北海道考古学』第10輯　北海道考古学会

高橋正勝　1981　「北海道南部の土器」『縄文文化の研究』4　雄山閣

田原良信　1985　『サイベ沢遺跡』函館市教育委員会

田原良信・鈴木正語　1986　『サイベ沢遺跡Ⅱ』函館市教育委員会

田原良信・野辺地初雄・前田正憲　1981　『権現台場遺跡発掘調査報告書』函館市教育委員会

千葉英一・畑宏明・小栗法韶　1982　『服部台2遺跡・近藤台1遺跡』白滝村教育委員会

千葉英一　1985　「日本の旧石器―北海道(3)―」『考古学ジャーナル』No.249　ニューサイエンス社

千代肇編　1974　『西桔梗』函館圏開発事業団

鶴刃俊明　1979　「北海道地方の細石刃文化」『駿台史学』第四十七号　駿台史学会
日本貨幣商協同組合　1986　『日本貨幣型録』1987年版
橋口美子　1985　「縄文時代草創期の尖頭器製作について」『東京考古』第3号　東京考古学会
橋本　正　1976　「竪穴住居の分類と系譜」『考古学研究』第23巻3号　考古学研究会
長谷川　潔・鈴木　守　1964　5万分の1地質図幅「五稜郭」北海道地下資源調査所
蜂屋晴美　1985　「石錐」『弥生文化の研究』5　雄山閣
春成秀爾　1985　「鉤と霊」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集　国立歴史民俗博物館
藤野次史　1986　「書評　長沼孝編『今金町美利河1遺跡－美利河ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘報告書』」『考古学研究』第33巻第1号　考古学研究会
㈶北海道埋蔵文化財センター　1984a　『今金町美利河1遺跡』㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告第23集
㈶北海道埋蔵文化財センター　1984b　『湯の里遺跡群』㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告第18集
㈶北海道埋蔵文化財センター　1987　『木古内町建川2・新道4遺跡』㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告第43集
㈶北海道埋蔵文化財センター　1988a　『函館市桔梗2遺跡』㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告第46集
㈶北海道埋蔵文化財センター　1988b　『木古内町新道4遺跡』㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告第52集
松沢亜生　1959　「石器研究におけるテクノロジーの一方向」『考古学手帖』7
三浦孝一・柴田信一　1983　『栄浜』八雲町教育委員会
三浦孝一・柴田信一　1987　『栄浜1遺跡』八雲町教育委員会
三谷勝利・小山内　熙・松下勝秀・鈴木　守　1965　5万分の1地質図幅「函館」北海道立地下資源調査所
三谷勝利・鈴木　守・松下勝秀・国府谷盛明　1966　5万分の1地質図幅「大沼公園」北海道立地下資源調査所
宮本長二郎　1984　「縄文時代の竪穴住居―北海道地方の場合―」『季刊考古学』7号　雄山閣
山崎信二　1977　「尖頭器について」『考古学論集』松崎寿和先生退官記念事業会
山内清男　1979　『日本先史土器の縄紋』先史考古学会

表1　住居跡一覧

遺構	発掘区	平面形	規模				土器		石器		その他		備考
			確認面(m)	床面(m)	深さ(m)	床面積(㎡)	床面	覆土	床面	覆土	床面	覆土	
H－1	I・J・K－23・24	楕円形	8.70 × 5.76	7.88 × 5.36	0.55	33.90	中122	早5、中597	スクレイパー2、石核1、フレイク6、石斧1、台石・石皿1、礫55	石鏃3、つまみ付ナイフ2、スクレイパー7、Uフレ2、フレイク50、たたき石1、すり石1、台石・石皿3、礫19	土製品1	土製品2 石製品1	
－2	K・M－22 L－21・22・23	隅丸長方形	4.97 × 3.53	4.80 × 3.41	0.46	14.45	中22	早5、中149	スクレイパー1、台石・石皿1、礫2	Uフレ1、石斧2、礫60			
－3	I・J－20・21・22 K－19・20・21	楕円形	12.77× 6.97	11.60× 6.67	0.57	51.68	早1、中434	早15 中3,485	やり先・ナイフ1、スクレイパー2、Uフレ2、石核1、フレイク30、たたき石1、すり石1、台石・石皿2、礫40	石鏃4、やり先・ナイフ5、スクレイパー4、Uフレ12、フレイク344、石斧2、たたき石7、すり石15、台石・石皿2、砥石2、石錘2、礫298		土製品6	
－4	M・N・O－23・24	楕円形	8.52 × 5.37	8.32 × 5.21	0.50	37.00	中109	早25 中1,595	Uフレ1、フレイク1、すり石2、台石・石皿2、礫7	石鏃2、スクレイパー5、フレイク79、両面調整石器1、石斧1、すり石6、石錘2、礫123	石製品2	石製品1	
－5	N・O－27・28	隅丸方形	4.29 × 3.88	4.04 × 3.58	0.51	11.99	中36	早9、中338	スクレイパー1、Uフレ2、フレイク14、すり石1、礫7	スクレイパー1、Uフレ4、フレイク30、たたき石1、石錘1	土製品3		
－6	N・O－31・32	隅丸長方形	5.39 × 3.98	5.30 × 3.84	0.49	17.27	早2、中72	早27 中361	石鏃1、やり先・ナイフ1、Uフレ3、フレイク3、すり石4、礫6	石鏃1、つまみ付ナイフ1、スクレイパー3、ドリル1、Uフレ2、フレイク1,255、石斧1、すり石1、礫84		石製品1	
－7	O－23	不明	(1.30)× 2.75	(1.27)× 2.60	0.18	(2.47)		中99		スクレイパー1、Uフレ2、フレイク3、石斧1、礫2			
－8	O－30	隅丸長方形	(1.64)×(1.20)	(1.41)×(1.40)	0.28	(2.51)	中1	早10 中141	Uフレ1、フレイク1礫1	石鏃1、Uフレ2、フレイク5、石斧1、礫6			
－9	O－29・30	隅丸長方形	(4.00)× 2.63	(3.90)× 2.51	0.25	(2.98)		早9、中71	スクレイパー1、Uフレ2、石錘1、掻器1、礫1				
－10	J・K－33・34	楕円形	7.40 × 5.12	7.06 × 4.84	0.16	26.44	早8		石錘1、礫12	フレイク28			
－11	H－39・40 I－40	隅丸長方形	3.33 × 2.64	3.20 × 2.49	0.08	6.65	中8		フレイク1、すり石1、礫2	Uフレ1、フレイク2、石斧2、礫1			
－12	L・M－41	楕円形	4.48 × 3.46	4.16 × 3.22	0.42	10.57	中25	早1、中17	スクレイパー1、Uフレ1、礫17	フレイク65、細石刃・削片等5、礫11			
－13	M－24	隅丸長方形	2.22 × 1.78	2.08 × 1.62	0.24	2.91		中89		フレイク1、すり石1、礫3		土製品1	

表2　住居跡付属ピットの深さ一覧

住居跡番号	HP	深さ(cm)	住居跡番号	HP	深さ(cm)	住居跡番号	HP	深さ(cm)	住居跡番号	HP	深さ(cm)	住居跡番号	HP	深さ(cm)
H － 1	1	42	H － 2	4	33	H － 3	14	10	H － 5	1	78	H － 6	16	3
〃	2	54	〃	5	10	〃	15	50	〃	2	75	〃	17	5
〃	3	55	〃	6	12	〃	16	15	〃	3	93	〃	18	7
〃	4	70	〃	7	22	〃	17	10	〃	4	65	H － 7	1	9
〃	5	49	〃	8	27	〃	18	10	〃	5	40	H － 8	1	35
〃	6	9	〃	9	28	〃	19	5	〃	6	68	H － 9	2	26
〃	7	60	〃	10	27	H － 4	1	70	〃	7	10	〃	3	27
〃	8	42	〃	11	16	〃	2	86	〃	8	40	〃	4	29
〃	9	30	〃	12	10	〃	3	34	H － 6	1	63	〃	5	4
〃	10	36	〃	13	19	〃	4	62	〃	2	56	〃	6	5
〃	11	11	H － 3	1	10	〃	5	55	〃	3	65	〃	7	10
〃	12	12	〃	2	68	〃	6	42	〃	4	52	〃	8	7
〃	13	19	〃	3	76	〃	7	19	〃	5	54	H － 11	1	25
〃	14	5	〃	4	104	〃	8	20	〃	6	10	H － 12	1	60
〃	15	5	〃	5	96	〃	9	48	〃	7	7	〃	2	54
〃	16	5	〃	6	96	〃	10	5	〃	8	18	〃	3	30
〃	17	5	〃	7	80	〃	11	9	〃	9	47	〃	4	46
〃	18	5	〃	8	74	〃	12	28	〃	10	25	〃	5	51
〃	19	5	〃	9	82	〃	13	15	〃	11	6	〃	6	8
〃	20	8	〃	10	62	〃	14	7	〃	12	5	H － 13	1	43
H － 2	1	38	〃	11	3	〃	15	5	〃	13	39	〃	2	45
〃	2	49	〃	12	10	〃	16	7	〃	14	5			
〃	3	38	〃	13	5	〃	17	36	〃	15	7			

表3　土壙一覧

遺構	発掘区	平面形	規模			土器		石器		その他		備考
			確認面(m)	壙底面(m)	深さ(m)	壙底面	覆土	壙底面	覆土	壙底面	覆土	
P－1	L-28	円形	0.95 × 0.82	0.95 × 0.83	0.38		中4	フレイク2、礫1				
－2	L-27·28	〃	2.36 × 2.12	2.50 × 2.28	2.02		早3、中216		石鏃2、スクレイパー1、フレイク10、すり石3、礫2			フラスコ状ピット
－3	L-25	楕円形	1.52 × 1.22	1.42 × 1.04	0.33		早3、中16		石錘1			
－4	L-24	長楕円形	3.04 × 0.64	3.23 × 0.10	1.06		中2					Tピット
欠番												
－6	I·J-24	円形	1.00 ×(0.96)	0.90 ×(0.84)	0.06							
－7	H·I-24	長楕円形	2.84 × 50	2.80 × 0.16	0.94		早2、中3					Tピット
－8	I-23	円形	0.87 × 0.82	0.61 × 0.60	0.25							
－9	H-22·23	〃	1.11 × 1.07	0.70 × 0.63	0.23							
－10	J·K-18	長楕円形	3.01 × 0.56	2.16 × 0.08	0.80		中8					Tピット
－11	K-18	〃	2.30 × 0.36	2.30 × 0.07	1.08		中1					〃
－12	L-18	楕円形	0.87 × 0.67	0.70 × 0.53	0.14			礫1				
－13	G-21·22	長楕円形	2.30 × 0.47	2.53 × 0.90	0.98							Tピット
－14	J-21	円形	1.03 ×(0.91)	(0.57)× 0.53	0.45		中3		フレイク1、石斧1			
－15	I·J-24	〃	(0.55)×(0.40)	(0.31)×(0.23)	0.25							
－16	M-25	楕円形	2.07 × 1.26	1.65 × 1.14	0.51		中12		フレイク1			
－17	N-25	〃	15.5 × 1.10	13.3 × 1.00	0.22		早2、中1					
－18	〃	円形	0.93 × 0.79	0.83 × 0.74	0.29	中29	中20	台石·石皿1、礫2	Uフレ1、フレイク1			
－19	N-22	〃	1.20 × 1.16	0.97 × 0.91	0.22		早1、中25	台石·石皿1、すり石1	フレイク1、礫3			
－20	M·N-22	長楕円形	3.62 × 0.36	3.94 × 0.14	0.76		早4、中12		礫2			Tピット
－21	O－23	楕円形	0.96 × 0.83	0.81 × 0.66	0.12		中8					
－22	O·P-24	円形	1.88 × 1.46	(1.87)×(1.40)	0.90	中4	早1、中14	礫5	礫1			
－23	O·P-25	〃	1.71 × 1.58	2.16 ×(1.76)	1.34	早1、中34	早1、中262	フレイク2	石鏃1、フレイク6 すり石1、礫2			フラスコ状ピット
－24	N-26	長楕円形	(0.74)× 0.30	(0.80)× 0.13	0.50		早1、中11		フレイク1			Tピット
－25	M-28	楕円形	1.29 × 1.11	1.12× 1.03	0.90							
－26	O-28	円形	0.89 × 0.87	2.51 × 2.50	1.49		早7、中126		つまみ付ナイフ1、Uフレ1、フレイク7、たたき石2、台石·石皿1、すり石2、礫9			フラスコ状ピット
－27	M-25	円形	(0.84)× 0.82	0.68 × 0.56	0.28		早1、中78					
－28	M·N-20	長楕円形	2.39 × 0.42	2.22 × 0.10	1.02		早2、中36					Tピット
－29	M-32	円形	1.53 × 1.43	2.40 × 23.6	1.76		早1、中66		たたき石1			フラスコ状ピット
－30	O-24·25	楕円形	1.18 × 1.03	0.95 × 0.70	0.37							
－31	M-31	円形	0.95 × 0.88	0.76 × 0.56	0.20		中1	礫1				
－32	N-31	円形	0.78 × 0.74	0.62 × 0.58	0.37		中16	Uフレ1	フレイク3、すり石3			
－33	N·O-31	〃	0.76 × 0.68	0.67 × 0.67	0.33		中57	スクレイパー1、フレイク1、すり石1、礫1				
－34	N·O-30	〃	2.39 × 1.91	2.40 × 2.12	2.24	中16	早11 中462		つまみ付ナイフ2、スクレイパー1、Uフレ5、フレイク25、石斧1、たたき石3、すり石5、石錘7、礫21			フラスコ状ピット
－35	L·M-24	〃	0.30 × 0.28	0.26 × 0.24	0.13				石斧2			
－36	O-21	長楕円形	2.63 × 0.40	2.39 × 0.18	0.51		早3、中12		フレイク1、礫1			Tピット
－37	O-21·22	円形	0.92 ×(0.66)	0.64 ×(0.53)	0.34		早3、中11		スクレイパー1、礫2			
－38	K-32	楕円形	0.78 × 0.65	0.65 × 0.53	0.14		中2					
－39	F-30·31	長楕円形	2.89 × 0.78	2.87 × 0.12	1.28				礫1			Tピット
－40	M-33	〃	3.80 × 0.67	4.31 × 0.19	1.10		早5、中18		フレイク1			〃
－41	O-27	楕円形	0.55 × 0.40	0.47 × 0.36	0.08		中2					
－42	L-31	円形	0.82 × 0.77	0.68 × 0.55	0.21		中3		Uフレ、フレイク11			
－43	K·L-33·34	長楕円形	2.42 × 0.49	2.37 × 0.12	1.01		中1		フレイク2、すり石1、石錘1			Tピット
－44	K·L-30·31	〃	3.26 × 0.48	3.53 × 0.13	0.95		中2		石核1、フレイク1			〃
－45	L-31	〃	2.04 × 0.40	2.42 × 0.21	1.09		早3、中6		フレイク1			〃
－46	K-30	楕円形	1.26 × 0.98	1.10 × 0.83	0.11							
－47	J·K-30	円形	0.70 × 0.64	0.44 × 0.41	0.15							
－48	J-30	〃	0.75 × 0.67	0.66 × 0.50	0.17		早3、中135		すり石2、礫1			
－49	J-28	楕円形	1.47 × 1.00	1.34 × 0.86	0.11		中12		Uフレ1			
－50	I-25	長楕円形	2.61 × 0.69	2.73 × 0.20	1.02		中7					Tピット
－51	H·I-26	〃	1.90 × 0.52	1.90 × 0.12	1.03				フレイク1			〃
－52	J-29	〃	1.70 × 0.45	1.61 × 0.16	0.98		中1					〃

遺構	発掘区	平面形	規模			土器		石器		その他		備考
			確認面(m)	壙底面(m)	深さ(m)	壙底面	覆土	壙底面	覆土	壙底面	覆土	
P−53	K-31	円形	0.63 × 0.50	0.38 × 0.37	0.55		中45					
−54	I-27	長楕円形	2.82 × 0.78	2.37 × 0.18	1.11							Tピット
−55	K-31	円形	0.61 × 0.57	0.45 × 0.41	0.34		早2、中1					
−56	N-35	〃	1.24 × 1.24	2.34 × 2.33	1.79		早27、中446	すり石1	石鏃1、フレイク11、たたき石1、すり石3、礫11			フラスコ状ピット
−57	H-30	〃	0.67 × 0.65	0.50 × 0.47	0.18		中50		石鏃1、フレイク2、礫1			
−58	I-27	〃	0.97 × 0.84	0.65 × 0.64	0.24		中6					
−59	D・E-32	長楕円形	24.9 × 0.62	23.5 × 0.12	1.13		中1			土製品1		Tピット
−60	M・N-33・34	〃	19.2 × 0.72	1.90 × 0.18	1.06		中14		フレイク4、礫2			〃
−61	J-30	円形	0.64 × 0.64	0.35 × 0.35	0.22							
−62	K-30・31	楕円形	1.00 × 0.70	0.80 × 0.52	0.20							
−63	N・O-36	長楕円形	(2.66)× 0.74	(2.60)× 0.18	1.27		中8		礫5			Tピット
−64	J-37・38	〃	2.99 × 0.64	3.17 × 0.20	0.92							
−65	G・H-29	円形	0.73 × 0.72	0.43 × 0.41	0.25		中5		フレイク1、礫1			
−66	G・H-28・29	長楕円形	2.75 × 0.68	2.65 × 0.13	1.24		中5		礫1			Tピット
−67	C・D-30	〃	2.73 × 0.53	3.05 × 0.16	0.73							〃
−68	K-37・38	〃	2.93 × 0.47	3.21 × 0.13	1.10		中1					〃
−69	M-36	楕円形	1.13 × 0.78	0.60 × 0.50	0.30				Uフレ1、礫2			
−70	G-34	長楕円形	2.58 × 0.50	2.65 × 0.12	0.88			礫1				Tピット
−71	F-30	円形	0.75 × 0.75	0.62 × 0.59	0.24		中1	たたき石1、すり石1 台石・石皿2、礫2				
−72	G-24	長楕円形	1.77 × 0.50	1.99 × 0.15	1.07							Tピット
−73	G-22	円形	0.71 × 0.66	0.61 × 0.56	0.14	中3	中2	礫1				
−74	E-21	長楕円形	1.62 × 0.61	1.72 × 0.11	1.20							Tピット
−75	I・J-35	楕円形	1.70 × 1.20	1.58 × 1.12	0.26		中3					
−76	I-37	円形	0.36 × 0.34	0.23 × 0.22	0.12		中119					
−77	I-40	楕円形	(0.90)× 0.81	0.30 × 0.37	0.17	中28	中60	礫1	スクレイパー2	土製品2		
−78	M-35	円形	0.81 × 0.72	0.65 × 0.59	0.11		中5		礫2			
−79	O-33	楕円形	1.22 × 0.87	1.11 × 0.72	0.19			礫1				
−80	F-27	〃	0.54 × 0.45	0.40 × 0.30	0.12							
−81	M-46・47	長楕円形	2.42 × 0.59	2.32 × 0.20	0.88							Tピット
−82	J-40・41	〃	2.23 × 0.59	2.18 × 0.14	1.14		中1					〃
−83	B-15・16	円形	0.97 × 0.87	0.42 × 0.36	0.36		中3					
−84	E-13	長楕円形	2.41 × 0.41	2.57 × 0.22	0.56							Tピット
−85	G-12	円形	0.86 × 0.79	0.66 × 0.56	0.17							
−86	H・I-86	長楕円形	2.37 × 0.57	2.42 × 0.20	0.84							Tピット
−87	H-10	〃	3.01 × 0.58	3.29 × 0.23	0.79							〃
−88	J-10	〃	2.10 × 0.40	2.21 × 0.19	0.78		中1		フレイク1			〃
−89	H-9	円形	1.04 × 0.99	0.87 × 0.76	0.22		中9、後32		フレイク1、礫7			
−90	F-9	長楕円形	3.29 × 0.48	3.52 × 0.10	0.79		前1					Tピット
−91	C-8	〃	2.41 × 0.38	2.53 × 0.22	0.51							〃
−92	C-6	〃	2.90 × 0.38	2.93 × 0.24	0.65							〃
−93	A-100	〃	3.44 × 0.35	3.25 × 0.10	0.81							〃
−94	D・E-14	長楕円形	2.26 × 0.36	2.13 × 0.14	0.53							〃
−95	H-8・9	〃	2.25 × 0.68	2.17 × 0.21	0.91		中4、後56		フレイク2			〃
−96	B-36・37	〃	2.19 × 0.37	2.20 × 0.11	0.80							〃
−97	D・E-35	〃	2.70 × 0.69	3.15 × 0.30	1.15							〃
−98	F-38	〃	2.92 × 0.63	2.57 × 0.17	1.15		中1					〃
−99	C・D-40	〃	2.38 × 0.57	2.46 × 0.15	0.97				礫2			〃
-100	B・C-41	〃	2.81 × 0.60	2.92 × 0.12	1.14							〃
-101	C-42・D-41	〃	1.90 × 0.45	1.94 × 0.16	0.84							〃
-102	D・E-43	〃	1.34 × 0.37	0.68 × 0.16	0.72							〃
-103	I-43	〃	2.89 × 0.56	3.00 × 0.16	1.08							〃
-104	I-43・44	〃	2.46 × 0.55	2.43 × 0.16	0.96							〃
-105	F・G-44・45	〃	2.26 × 0.45	2.90 × 0.11	0.93							〃
-106	D-47・48	〃	(1.03)× 0.35	(1.20)× 0.11	0.94		中2					〃
-107	F-48・49	〃	1.72 × 0.37	1.86 × 0.14	0.80		中6					〃
-108	I-46・47	〃	1.81 × 0.48	1.83 × 0.12	0.92							〃
-109	J-48・49	〃	1.64 × 0.45	1.67 × 0.17	0.94							〃

遺構	発掘区	平面形	規模			土器		石器		その他		備考
			確認面(m)	壙底面(m)	深さ(m)	壙底面	覆土	壙底面	覆土	壙底面	覆土	
P-110	I-50	〃	3.43 × 0.60	4.40 × 0.08	1.08							Tピット
-111	G・H-51	〃	1.51 × 0.61	1.69 × 0.14	0.98							〃
-112	H-53	〃	1.39 × 0.50	1.54 × 0.14	0.97							〃
-113	J-51・52	〃	2.96 × 0.65	3.10 × 0.10	0.96							〃
-114	J・K-52	〃	3.02 × 0.56	3.04 × 0.24	0.80							〃
-115	L-51	〃	1.55 × 0.31	1.76 × 0.11	0.88							〃
-116	K・L-15	〃	2.86 × 0.57	2.74 × 0.22	0.82							〃

表4　焼土一覧

遺構	発掘区	規模(m)	上面のレベル(m)	出土遺物			備考
				土器	石器	その他	
F－1	J－20	1.16 × 1.07	31.38	縄文109	フレイク221		
－2	N－21	0.58 × 0.30	31.57				
－3	N－19	0.74 × 0.57	30.5	中217			
－4	M・N・O-23・24	0.30 × 0.25	29.48	晩526	石錐8、スクレイパー4、Uフレ3、石核2、フレイク262、砥石1、礫89		
－5	H－13	0.70 × 0.65	29.50				

表5　H－1　実測土器一覧

挿図	図版	番号	遺物番号	層位	大きさ(cm)			分類	接合破片数	接合状況	備考
					口径	底径	器高				
III－5		1	3　他	覆土他	(13.0)	7.3	(12.3)	IIIA_3	21	H-1フIX、床3	
〃	34－1	2	1　他	〃	18.5	7.3	19.8	〃	28	H-1フIX、床1	
〃	34－2	3	2　他	〃	(15.3)	9.1	17.4	〃	33	H-1フIX、床2、22、47、48、49	
〃	34－3	4		〃	27.7	—	39.3	〃	59	H-1VII、H-1IX、K-23	

表6　H－1　出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類
III－5	5	5	床	IIIA_3	III－5	12	18	床	IIIA_3	III－5	19		覆土IX	IIIA_3
〃	6	31	〃	〃	〃	13	53	〃	〃	〃	20		〃 VII	〃
〃	7		床　HP-1	〃	〃	14	9	〃	〃	〃	21		〃 IX	〃
〃	8	86	床	〃	〃	15		覆土 VII	〃	〃	22		〃 VII	〃
〃	9	6		〃	〃	16		〃 IX	〃	〃	23		〃 〃	〃
〃	10		床　HP-12	〃	〃	17		〃 VII	〃	〃	24		〃 IX	〃
〃	11	92	〃　HP-1	〃	〃	18		〃 IX	〃					

表7　H－1　出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	層位	挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	層位
III－6	25	1	つまみ付ナイフ	(8.1)× 1.8×0.8	(14.8)	Che.	HP	III－7	36		つまみ付ナイフ	10.9 × 2.9×0.7	23.8	Sh.	IX
〃	26	21	スクレイパー	6.9 × 4.2×1.9	42.8	Sh.	床	〃	37		スクレイパー	7.5 × 3.5×1.2	30.9	〃	〃
〃	27	29	〃	(6.6)× 4.2×1.7	(48.0)	〃	XI	〃	38		〃	(16.3)× 2.6×0.9	(17.8)	〃	〃
〃	28	2	Uフレイク	6.7 × 2.4×0.9	12.6	〃	床	〃	39		〃	(6.1)× 2.5×0.7	(10.8)	〃	〃
〃	29		〃	7.8 × 4.6×1.6	47.0	〃	IX	〃	40		〃	11.0 × 7.0×1.9	141.0	〃	〃
〃	30	27	石斧	14.6 × 6.7×3.1	510.0	Sa.	床	〃	41		〃	7.2 × 3.4×0.5	18.6	〃	〃
〃	31	32	台石・石皿	14.7 ×14.1×8.4	2,110.0	And.	〃	〃	42		〃	8.1 × 3.9×1.9	62.2	〃	〃
〃	32・33		土製品	土・石製品一覧表参照				〃	43		すり石	9.0 ×14.4×3.0	570.0	And.	VII
III－7	34		石鏃	3.2 × 1.4×0.5	1.4	Diat.	IX	〃	44・45		石製品・土製品	土・石製品一覧表参照			
〃	35		〃	(2.6)× 1.6×0.5	(1.3)	Sh.	VII								

表8　H－2　実測土器一覧

挿図	図版	番号	遺物番号	層位	大きさ(cm)			分類	接合破片数	接合状況	備考
					口径	底径	器高				
III－10	34－4	1		埋甕	—	—	(12.2)	IIIA_3	2		
〃	24－5	2		〃	—	8.6	(15.7)	〃	1		
〃	34－6	3		覆土	(20.5)	7.2	25.6	〃	48	H-2 II77	

表9　H－2　出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－10	4	171	床	ⅢA$_3$	Ⅲ－10	8	63	覆土	ⅢA$_3$	Ⅲ－10	12	133	覆土	ⅢA$_3$
〃	5	194	〃	〃	〃	9	15	〃	〃	〃	13	195	〃	〃
〃	6	136	覆土	ⅠA	〃	10	154	〃	〃					
〃	7	165	〃	〃	〃	11	85	〃	〃					

表10　H－2　出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	層位	挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	層位
Ⅲ－10	14	167	スクレイパー	(7.6)× 3.7× 1.2	(37.7)	Ba.	床	Ⅲ－10	16	100	石斧	(8.3)× 5.0×(2.8)	(165.0)	Gr-Mud.	Ⅱ
〃	15	26	台石・石皿	37.0 ×15.5× 8.3	6,500.0	And.	Ⅱ	〃	17	86	〃	10.0 × 5.1× 2.4	216.0	〃	〃

表11　H－3　実測土器一覧

挿図	図版	番号	遺物番号	層位	大きさ(cm) 口径	底径	器高	分類	接合破片数	接合状況	備考
Ⅲ－15	35-1･47-1	1	18他	Ⅳ他	25.2	9.4	26.3	ⅢA$_3$	37	H-3CⅣ、CⅣCT、床、Ⅲ、18	
〃	35-2･47-2	2	1他	床他	22.2	7.5	23.7	〃	17	H-3床Ⅰ1,6、H-3CⅣ	
Ⅲ－16	35-3･47-3	3	4他	〃	(29.4)	10.2	39.1	〃	35	H-3床Ⅱ-4,5,6,7,8,9,10,11,12,13,14,15,16,17,18,19,20,21,22、P-2、AⅣP	
〃	35-4･48-1	4	34他	覆土他	(20.1)	7.8	20.0	〃	34	H-3フクⅣ、34,35,36,37,38,39、C-3床Ⅳ16,21	
〃	35－5	5	9他	床他	13.9	6.8	13.1	〃	11	H-3床Ⅳ-9、H-3Ⅳ、H-3BⅣ	
Ⅲ－17	35－6	6	23他	覆土他	18.9	8.8	26.1	〃	25	H-3フクⅣ、H-3床Ⅳ-23,24,27,28	
〃	36－1	7	3他	床他	(17.0)	7.2	19.6	〃	16	H-3床Ⅰ、H-3床Ⅳ-3,4,14、H-3Ⅳ、H-3BⅣ	
〃	36－2	8	31他	床他	28.3	—	(52.3)	〃	70	H-3床Ⅷ-31,32,32,41,42,43,44,45,51,57,58,59,63,65,66,68,69	
〃	36－3	9	30他	床他	(10.9)	5.1	12.7	〃	8	H-3床Ⅳ-30、H-3BⅣ	
〃	36－4	10	20他	床他	21.5	—	(20.5)	〃	41	H-3床Ⅲ、床Ⅲ-20,21,22,33,34,35,37、AⅣフ、CⅣ	
Ⅲ－18		11	12他	床他	20.3	—	(13.8)	〃	17	H-3床-12、床Ⅰ	
〃		12	33他	〃	—	9.7	(36.5)	〃	12	H-3床Ⅳ-33	蓆目圧痕？
〃	36－5	13	2他	Ⅳ他	16.7	10.7	12.4	〃	22	H-3Ⅳ、H-3床Ⅰ-2,3,4,5,7,8,9、CⅣ、AⅣフ	
〃	36-6･48-2	14		床他	17.3	—	(14.5)	〃	21	H-3床Ⅰ、H-3CⅣ	
〃	37－1	15	10	床	9.3	5.3	8.6	〃	5	H-3床10	
〃	37－2	16	15他	床他	(22.2)	(9.3)	(24.3)	〃	20	H-3床Ⅳ-15,17、H-3BⅣ、H-3床Ⅰ12,15	
〃	37－3	17	1他	Ⅳ他	17.0	8.0	19.4	〃	25	H-3D-Ⅳ、H-3床Ⅸ-1,2,3,4,5,8,9,10	
Ⅲ－19	37-4･48-3	18	2他	床他	43.0	—	(47.9)	〃	53	H-3床Ⅳ-2,3、H-3-3,7、H-3BⅢ、H-3B4Ⅳ、H-3BⅣ	
Ⅲ－20	37-5･49-1	19	24他	床他	(22.7)	6.7	26.8	〃	41	H-3床Ⅱ-24,25,26,27,28,29,35	
〃	37－6	20	2他	Ⅳ他	(21.0)	—	(19.4)	〃	17	H-3A、H-3CⅣ、H-3床Ⅳ-2,3,8,9	
Ⅲ－21	38－1	21		覆土	—	6.6	(17.9)	〃	23	H-3フ	
〃		22		Ⅳ	(20.6)	(11.2)	(21.5)	〃	10	H-3CⅣ、H-3BⅣ	
〃		23		〃	(19.9)	—	(13.4)	〃	3	H-3BⅣ、H-3AⅣ	
〃	38－2	24		〃	24.4	—	(18.8)	〃	24	H-3AⅣ	
〃	38－3	25		Ⅲ他	23.0	9.6	25.7	〃	41	H-3BⅢ、H-3BⅣ、BⅡ	
〃	38－4	26	4他	Ⅴ	22.4	8.8	24.2	〃	6	H-3、P-4内Ⅴ4	
〃	38－5	27		Ⅳ	30.6	—	(40.3)	〃	49	H-3BⅣ	
〃	38－6	28	7他	〃	(18.1)	8.8	21.7	〃	21	H-3AⅣP、H-3AⅣ、H-3CⅣ、H-3A7,18	
〃		29		〃	—	9.8	(16.9)	〃	15	H-3AⅣ	
Ⅲ－22		30		〃	—	10.7	(16.9)	〃	19	H-3BⅣ	
〃	39－1	31		〃	(26.8)	9.6	43.6	〃	57	H-3BⅣ、H-3B、AⅣ	
〃	39－2	32		Ⅳ他	17.1	—	(15.0)	〃	23	H-3D、H-3DⅣ、H-3BⅣ、H-3Cフ、H-3CⅣ	
Ⅲ－23	39－3	33	31他	Ⅳ	28.0	—	(28.1)	〃	50	H-3BⅣ、H-2床Ⅳ-31,32	
〃	39－4	34		〃	15.4	6.8	15.6	〃	16	H-3CⅣ、H-3AⅣ	
〃	39-5･49-2	35		〃	16.4	5.0	12.8	〃	21	H-3BDⅣ、H-3BⅣ	
Ⅲ－24		36		〃	(22.6)	—	(23.2)	〃	7	H-3AⅣ、H-3BⅣ、H-3CⅣ、H-3AフⅣ下、H-3AⅣP	
〃	39－6	37		〃	26.3	9.2	28.6	〃	54	H-3AⅣP、H-3AフⅣF	
〃	40－1	38		〃	20.7	—	(20.1)	〃	45	H-3BⅣB	
〃		39		〃	(16.0)	—	(8.6)	〃	6	H-3BⅣ、H-3BAⅣ	
〃	40－2	40		〃	(17.5)	7.8	19.0	〃	22	H-3BⅣ、H-3BCⅣ	
〃		41		〃	—	8.6	(14.4)	〃	15	H-3CⅣG	
〃	40－3	42		〃	3.7	2.0	3.9	〃	2	H-3CⅣ	
〃	40－3	43		覆土	(5.4)	2.4	(5.0)	〃	4	H-3、P-18フ	

表12　H－3　出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－25	44	2	床 Ⅳ	ⅢA$_3$	Ⅲ－25	60		覆土 Ⅲ	ⅢA$_3$	Ⅲ－26	76		覆土	ⅢA$_3$
〃	45	29	床	〃	〃	61		〃 Ⅳ	〃	〃	77		覆土 Ⅳ	〃
〃	46	5	床 V HP-4	〃	〃	62		〃 〃	〃	〃	78		〃 〃	〃
〃	47		覆土 Ⅳ	ⅠA	〃	63		〃 〃	〃	〃	79		〃 〃	〃
〃	48		〃 〃	〃	Ⅲ－26	64	J－21	覆土	〃	〃	80		〃 〃	〃
〃	49		〃 〃	〃	〃	65		覆土 Ⅳ	〃	〃	81		〃 〃	〃
〃	50		〃 〃	〃	〃	66		〃 〃	〃	〃	82		〃 Ⅲ	〃
〃	51		〃 〃	〃	〃	67		〃 〃	〃	〃	83		〃 Ⅳ	〃
〃	52		〃 〃	〃	〃	68		〃 Ⅲ	〃	〃	84		〃 〃	〃
〃	53		〃 〃	〃	〃	69		〃 Ⅳ	〃	〃	85		覆土	〃
〃	54		〃 〃	ⅢA$_3$	〃	70		〃 〃	〃	〃	86		覆土 Ⅳ	〃
〃	55		〃 〃	〃	〃	71		〃 〃	〃	〃	87		〃 〃	〃
〃	56		〃 〃	〃	〃	72		〃 〃	〃	〃	88		〃 〃	〃
〃	57		〃 〃	〃	〃	73		〃 〃	〃	〃	89		〃 〃	〃
〃	58		〃 〃	〃	〃	74		〃 〃	〃	〃	90		覆土	〃
〃	59		〃 〃	〃	〃	75		〃 〃	〃					

表13　H－3　出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	層位	挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	層位
Ⅲ－27	91	71	やり先・ナイフ	(7.5)× 3.3 × 1.2	(26.4)	Aga-Sh.	C床	Ⅲ－28	115		石斧	13.1 × (5.5)× 2.8	(270.0)	Gr-Mud.	BⅣ
〃	92	11	台石・石皿	37.0 × 33.5 ×11.0	2,500.0	And.	Ⅳ	〃	116		〃	(5.6)× 4.0 × 1.1	(40.0)	〃	〃
〃	93	40	〃	43.0 × 30.0 × 9.0	2,020.0	〃	Ⅲ	〃	117		ストーン・リタッチャー	5.0 × 3.0 × 1.8	13.0	Diat.	DⅢ
〃	94		石鏃	(3.5)× 1.4 × 0.6	(3.4)	Aga-Sh.	BⅣ	〃	118		〃	5.0 × 3.0 × 1.0	6.8	Tuff.	〃
〃	95		〃	(3.5)× 1.4 × 0.4	(1.4)	Diat.	DⅣ	Ⅲ－29	119		たたき石	7.5 × 5.2 × 3.5	56.2	And.	AⅣ
〃	96		〃	(3.3)× 1.4 × 0.5	(1.9)	Aga-Sh.	CⅣ	〃	120	7	〃	(7.0)× 6.0 × 5.7	(258.0)	〃	C
〃	97		〃	(3.4)× 1.2 × 0.4	(1.2)	Sh.	DⅢ	〃	121		〃	12.7 × 4.7 × 3.3	220.0	Mud.	BⅣ
〃	98		やり先・ナイフ	(4.0)× 1.5 × 0.3	(2.6)	Aga-Sh.	CⅣ	〃	122		〃	12.6 × 7.4 × 3.4	345.0	And.	〃
〃	99		〃	(4.7)× 2.8 × 1.2	(4.3)	Sh.	DⅢ	〃	123		〃	13.6 × 10.4 × 3.6	712.0	〃	CⅣ
〃	100		〃	5.2 × 1.8 × 1.0	7.6	Aga-Sh.	D覆土	〃	124		すり石	9.5 × 12.6 × 2.4	548.0	〃	CⅢ
〃	101		〃	8.2 × 3.5 × 1.5	40.4	〃	DⅣ	〃	125		〃	10.5 × 15.2 × 3.4	660.0	Tuff.	CⅣ
〃	102	H－1と接合	〃	16.6 × 6.7 × 3.0	262.0	〃	Ⅸ.CⅣ	〃	126		〃	7.6 × 13.9 × 3.4	420.5	And.	AⅣ
Ⅲ－28	103		スクレイパー	3.0 × 2.4 × 0.7	5.2	Sh.	CⅣ	〃	127	7	〃	14.0 × 7.7 × 3.6	550.0	〃	〃
〃	104		〃	3.1 × 3.5 × 1.1	9.9	〃	A	〃	128		〃	7.7 × 15.1 × 2.5	252.0	〃	AⅢ
〃	105		〃	3.3 × 2.4 × 0.8	5.8	Aga-Sh.	CⅣ	〃	129		〃	15.2 × 8.8 × 3.0	500.0	〃	CⅣ
〃	106		〃	6.2 × 3.2 × 0.7	14.5	Sh.	BⅢ	〃	130		〃	10.6 ×(12.7)× 5.7	(900.0)	〃	BⅣ
〃	107		〃	(6.8)× 3.1 × 0.8	(18.6)	〃	CⅢ	〃	131		石錘	5.9 × 7.8 × 1.5	124.6	〃	〃
〃	108		〃	6.3 × 4.7 × 1.3	36.1	〃	CⅣ	〃	132		〃	(6.4)× 8.0 × 1.9	(138.2)	〃	〃
〃	109		〃	8.1 × 4.7 × 1.7	77.2	Aga-Sh.	DⅣ	〃	133	7	砥石	(5.4)× (4.2)×(3.5)	(79.2)	〃	AⅣ
〃	110		〃	10.6 × 5.4 × 1.6	73.8	〃	DⅣ	〃	134		台石・石皿	(10.8)× (7.0)× 5.0	(680.0)	〃	C
〃	111		〃	11.6 × 3.0 × 1.3	3.7	Sh.	BⅣ	〃	135	〃	〃	(24.0)×(16.0)× 5.8	(4,000.0)	〃	AⅣ
〃	112		〃	6.3 × 4.7 × 1.3	36.1	Aga-Sh.	AⅣ	〃	136		〃	(28.0)×(12.5)× 5.7	(3,600.0)	〃	BⅣ
〃	113		〃	5.3 × 3.7 × 0.9	18.1	Obs.	DⅢ	〃	137		〃	(18.4)× (6.2)× 4.1	640.0	〃	〃
〃	114		〃	7.3 × 6.6 × 1.0	(42.2)	Sh.	DⅣ	Ⅲ－30	138～142		土製品	土・石製品一覧表参照			

表14　H－4　実測土器一覧

挿図	図版	番号	遺物番号	層位	大きさ (cm) 口径	底径	器高	分類	接合破片数	接合状況	備考
Ⅲ－33	40－4	1		床他	(22.5)	—	(22.5)	ⅢA$_3$	20	H-4床、H-4SP-1	
〃	40－5	2		〃	19.0	9.0	24.0	〃	27	H-4SP-2	
〃	41－1	3	16	埋甕	(19.2)	7.3	21.8	〃	21	H-4-16床	
〃	40－6	4		覆土	(15.8)	7.3	25.6	〃	20	H-4SP-7、H-4-フ	魚骨文

表15　H－4　出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－33	5		床　HP－2	ⅢA$_3$	Ⅲ－33	16		覆土　Ⅳ	ⅠA	Ⅲ－34	27		覆土　Ⅵ	ⅢA$_3$
〃	6		〃　HP－7	〃	〃	17		〃　Ⅳ	〃	〃	28		〃　Ⅳ	〃
〃	7		〃　HP－4	〃	〃	18		〃　Ⅴ	〃	〃	29		〃　Ⅴ	〃
〃	8		〃　HP－1	〃	Ⅲ－34	19		〃　Ⅵ	ⅢA$_3$	〃	30		〃　Ⅵ	〃
〃	9		〃　HP－7	〃	〃	20		〃　〃	〃	〃	31		〃　〃	〃
〃	10		〃　HP－4	〃	〃	21		〃　Ⅳ	〃	〃	32		〃　〃	〃
〃	11	3	床	〃	〃	22		覆土	〃	〃	33		〃　〃	〃
〃	12		覆土	ⅠA	〃	23		〃	〃	〃	34		〃　Ⅲ	〃
〃	13		覆土　Ⅲ	〃	〃	24		覆土　Ⅳ	〃	〃	35		〃　Ⅵ	〃
〃	14		〃　Ⅳ	〃	〃	25		覆土	〃					
〃	15		〃　〃	〃	〃	26		覆土　Ⅵ	〃					

表16　H－4　出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	層位	挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	層位
Ⅲ－34	36		Uフレイク	3.7×3.0×0.5	5.6	Aga-Sh.	床直上	Ⅲ－35	50		スクレイパー	(3.4)×3.6×0.7	(9.9)	Sh.	覆土
〃	37		たたき石	11.2×6.7×6.2	570.0	And.	〃	〃	51		〃	2.8×3.9×0.9	15.6	〃	Ⅲ
〃	38		〃	10.7×5.0×5.8	680.0	Sh.	〃	〃	52		〃	6.7×2.3×0.8	12.3	〃	〃
〃	39		〃	10.9×13.0×9.0	1,900.0	And.	〃	〃	53		〃	(7.2)×3.1×0.6	(19.5)	〃	Ⅵ
Ⅲ－35	40	11	すり石	8.8×(14.1)×3.1	(530.0)	〃	床	〃	54		〃	8.0×4.1×0.8	(12.8)	〃	覆土
〃	41	15	〃	9.7×(11.3)×6.0	(1,000.0)	Diab.	〃	Ⅲ－36	55		石斧	10.2×5.7×2.4	(174.0)	Gr-Mud.	〃
〃	42	12	台石・石皿	22.3×19.2×8.3	2,900.0	Sa.	〃	〃	56		すり石	7.6×15.6×3.2	441.2	And.	〃
〃	43		〃	39.7×23.4×9.3	13,800.0	And.	床直上	〃	57		〃	8.8×14.4×3.7	611.0	〃	Ⅴ
〃	44		礫	9.3×8.2×6.5	2,165.0	Sa.	〃	〃	58		〃	(7.4)×14.8×3.1	(560.0)	〃	Ⅵ
〃	45		石製品	土・石製品一覧表参照				〃	59		〃	16.1×9.7×3.9	813.0	〃	覆土
〃	46		両面調整石器	(4.5)×6.0×1.2	34.3	Sh.	覆土	〃	60		石錘	(6.2)×(10.6)×(2.6)	208.4	Sa.	Ⅵ
〃	47		石鏃	(2.6)×1.2×0.5	(0.8)	Obs.	〃	〃	61		〃	(6.4)×7.7×2.2	141.8	And.	〃
〃	48		〃	(2.4)×1.3×0.4	(1.0)	Aga-Sh.	〃	〃	62		石製品	土・石製品一覧表参照			
〃	49		スクレイパー	(3.4)×4.3×1.1	(12.5)	Sh.	Ⅲ								

表17　H－5　実測土器一覧

挿図	図版	番号	遺物番号	層位	大きさ(cm) 口径	底径	器高	分類	接合破片数	接合状況	備考
Ⅲ－39	41－2	1	2　他	Ⅱ　他	(20.2)	－	(20.5)	ⅢA$_3$	17	H-5Ⅱ床、H-5Aフ、H-5フ2、H-5CⅣ、H-5Cフ、H-5dフ2	

表18　H－5　出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－39	2	15、16	床	ⅢA$_3$	Ⅲ－39	8		覆土　Ⅳ	ⅢA$_3$	Ⅲ－39	14		覆土　Ⅱ	ⅢA$_3$
〃	3	18	〃	〃	〃	9		〃　Ⅰ	〃	〃	15		覆土	〃
〃	4		覆土	ⅠA	〃	10		〃　〃	〃	〃	16		覆土　Ⅳ	〃
〃	5		〃	〃	〃	11		〃　Ⅱ	〃	〃	17		〃　Ⅰ	〃
〃	6		覆土　Ⅱ	〃	〃	12		〃　Ⅰ	〃	〃	18		〃　〃	〃
〃	7		〃　〃	ⅢA$_3$	〃	13		〃　Ⅱ	〃					

表19　H－5　出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位	挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚.(cm)	重さ(g)	材質	層位
Ⅲ－39	19	11	スクレイパー	5.6×2.7×0.8	12.4	Sh.	床	Ⅲ－39	23	72	Uフレイク	6.5×3.6×1.5	24.3	Sh.	－
〃	20	72	〃	(4.8)×3.4×1.2	(21.3)	〃	HP	〃	24		たたき石	11.6×10.0×6.7	938.0	And.	BF
〃	21	4	〃	(3.2)×5.1×1.7	(33.4)	Aga-Sh.	覆土SP	〃	25		石錘	7.3×7.6×2.7	235.7	Sa.	DⅣ
〃	22	17	すり石	(8.7)×(7.8)×(3.1)	(286.1)	And.	床	〃	26・27		土製品	土・石製品一覧表参照			

表20　H－6　実測土器一覧

挿図	図版	番号	遺物番号	層位	大きさ(cm) 口径	底径	器高	分類	接合破片数	接合状況	備考
Ⅲ－43	41－3	1	349	床	18.6	8.9	22.1	ⅢA$_3$	27	H-6-349	
〃	41－4	2	348	覆土	23.1	8.3	25.2	〃	16	H-6-348	

表21　H－6　出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－43	3	332	床	ⅢA$_3$	Ⅲ－43	11	106	覆土	IA	Ⅲ－43	19	96	覆土	ⅢA$_3$
〃	4	44	覆土	IA	〃	12		〃	〃	〃	20	82	〃	〃
〃	5	339	〃	〃	〃	13	114	〃	〃	〃	21	264	〃	〃
〃	6	161	〃	〃	〃	14	185	〃	ⅢA$_3$	〃	22	18	〃	〃
〃	7	331	〃	〃	〃	15	17	〃	〃	〃	23	115	〃	〃
〃	8	203	〃	〃	〃	16	203	〃	〃	〃	24	77	〃	〃
〃	9	143	〃	〃	〃	17	236 HP-56-2	覆土 HP-56	〃	〃	25	303	〃	〃
〃	10	9	〃	〃	〃	18	163	覆土	〃					

表22　H－6　出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	層位	挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	層位
Ⅲ－44	26	330	石鏃	(3.2)× 1.8 × 0.8	(3.0)	Diat.	床	Ⅲ－44	36	144	つまみ付ナイフ	5.6 × 1.8 × 0.6	6.5	Aga-Sh.	覆土
〃	27	318	やり先・ナイフ	10.3 × 3.1 × 1.0	32.3	Sh.	〃	〃	37	210	スクレイパー	6.2 × 2.8 × 0.9	20.0	Sh.	〃
〃	28	324	スクレイパー	9.7 × 6.8 × 1.6	101.0	Aga-Sh.	〃	〃	38	232	〃	(7.0)× 4.4 × 1.1	(57.2)	〃	〃
〃	29	317	〃	10.1 × 7.7 × 1.7	133.0	Sh.	〃	〃	39	116	〃	(4.7)× 3.5 × 1.3	(17.8)	〃	〃
〃	30	319	すり石	8.1 × 15.9 × 3.0	490.8	And.	〃	〃	40	295	〃	(3.6)× 3.1 × 0.7	(9.7)	〃	〃
〃	31	344	〃	(8.9)×(15.9)×(2.8)	(413.4)	〃	〃	〃	41	300	〃	10.5 × 5.0 × 2.2	97.4	〃	〃
〃	32	320	〃	8.8 × (9.9)× 2.2	(303.6)	〃	〃	〃	42		〃	3.3 × 4.2 × 0.7	7.5	Aga-Sh.	〃
〃	33	321	〃	8.1 × (8.7)×(2.5)	(295.0)	〃	〃	〃	43	250	すり石	8.3 × 13.8 × 2.6	454.6	And.	〃
〃	34		石鏃	3.0 × 1.4 × 0.7	2.0	Sh.	覆土	〃	44		石製品	土・石製品一覧表参照			
〃	35		ドリル	3.4 × 0.9 × 0.6	1.2	〃	〃								

表23　H－7　実測土器一覧

挿図	図版	番号	遺物番号	層位	大きさ(cm)			分類	接合破片数	接合状況	備考
					口径	底径	器高				
Ⅲ－45	41－5	1		覆土	(25.0)	—	(27.0)		36	H-7ア、O-23Ⅰ、O-23Ⅱ	

表24　H－7　出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－45	2		覆土	ⅢA$_3$	Ⅲ－45	5		覆土	ⅢA$_3$	Ⅲ－45	8		覆土	ⅢA$_3$
〃	3		〃	〃	〃	6		〃	〃					
〃	4		〃	〃	〃	7		〃	〃					

表25　H－7　出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	層位	挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	層位
Ⅲ－45	9		スクレイパー	7.6 × 4.7 × 1.2	46.5	Sh.	覆土	Ⅲ－45	11		石斧	(7.8)× 2.9 × 1.1	(30.2)	Gr-Mud.	〃
〃	10		Uフレイク	3.3 × 3.7 × 0.8	10.5	〃	〃								

表26　H－8　出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－48	1	63	覆土	IA	Ⅲ－48	8	189	覆土	ⅢA$_3$	Ⅲ－48	15	18	覆土	ⅢA$_3$
〃	2	57	〃	〃	〃	9	9、144	〃	〃	〃	16	91	〃	〃
〃	3	100	〃	〃	〃	10		〃	〃	〃	17	93	〃	〃
〃	4	149	〃	〃	〃	11	64	〃	〃	〃	18	162	〃	〃
〃	5		〃	ⅢA$_3$	〃	12	136	〃	〃	〃	19	59	〃	〃
〃	6	109	〃	〃	〃	13	188	〃	〃					
〃	7	135	〃	〃	〃	14	92	〃	〃					

表27　H－8　出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	層位	挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	層位
Ⅲ－48	20	161	スクレイパー	7.5 × 4.1 × 1.2	37.2	Sh.	床	Ⅲ－48	23		スクレイパー	13.9 × 8.1 × 1.9	195.0	Sh.	覆土
〃	21		〃	4.5 × 3.1 × 0.7	4.6	〃	〃	〃	24	78	石斧	(6.0)× 5.0 × 2.5	(109.6)	Ser.	〃
〃	22	62	石鏃	3.5 ×(1.5)× 0.5	(2.8)	〃	覆土								

表28　H－9　出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－49	1	118	覆土	ⅠA	Ⅲ－49	4	122	覆土	ⅢA$_3$	Ⅲ－49	7	46	覆土	ⅢA$_3$
〃	2	69	〃	〃	〃	5	192	〃	〃	〃	8	39	〃	〃
〃	3	121	〃	ⅢA$_3$	〃	6	67	〃	〃	〃	9	71	〃	〃

表29　H－9　出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	層位	挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	層位
Ⅲ－49	10	123	スクレイパー	5.7×3.7×1.0	15.0	Sh.	床	Ⅲ－49	12	124	Uフレイク	5.9×3.1×0.3	7.3	Sh.	床
〃	11	72	掻器	7.5×3.1×0.6	15.3	〃	〃	〃	13	23	石錘	11.0×6.5×2.8	275.1	And.	〃

表30　H－10　出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－51	1	J-33-33	床	ⅠA	Ⅲ－51	2	J-33-48	床	ⅠA

表31　H－10　出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	層位	挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	層位
Ⅲ－51	3		石錘	6.6×7.3×1.9	137.0	Sa.	床	Ⅲ－51	4		台石・石皿	23.1×19.4×8.5	4,900.0	And.	〃

表32　H－11　出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－53	1	4	床	ⅢA$_3$	Ⅲ－53	2	9	床	ⅢA$_3$

表33　H－11　出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	層位	挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	層位
Ⅲ－53	3	7	すり石	7.7×14.9×3.1	530.0	And.	床	Ⅲ－53	5		石斧	(7.9)×2.6×1.2	(44.4)	Gr-Mud	覆土
〃	4		スクレイパー	7.5×3.1×1.1	22.5	Sh.	覆土	〃	6		〃	12.4×5.9×3.4	324.1	〃	〃

表34　H－12　出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－56	1	61	床 Ⅵ	ⅢA$_3$	Ⅲ－56	4	107	床 Ⅵ	ⅢA$_3$	Ⅲ－56	7	69	覆土 Ⅳ	ⅢA$_3$
〃	2	104	〃 〃	〃	〃	5	84	覆土 Ⅳ	ⅠA					
〃	3	14	〃 〃	〃	〃	6	41	〃 Ⅴ	ⅢA$_3$					

表35　H－12　出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	層位	挿図	番号	遺物番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	層位
Ⅲ－56	8	10	スクレイパー	6.0×6.9×1.3	47.7	Sh.	Ⅵ	Ⅲ－56	10	10	Uフレイク	9.0×3.5×1.0	29.1	Sh.	Ⅵ
〃	9	12	細石刃	3.1×0.4×0.1	0.2	〃	〃								

表36　H－13　実測土器一覧

挿図	図版	番号	遺物番号	層位	大きさ(cm) 口径	底径	器高	分類	接合破片数	接合状況	備考
Ⅲ－57	41－6	1		覆土	(10.6)	(4.6)	13.8	ⅢA$_3$	19	P-5ヲ	

表37　H－13　出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－57	2		覆土 HP-5	ⅢA$_3$	Ⅲ－57	4		覆土 HP-5	ⅢA$_3$
〃	3		〃 〃	〃	〃	5		〃 〃	〃

表38　フラスコ状ピット実測土器一覧

挿図	図版	番号	遺構	遺物番号	層位	大きさ(cm) 口径	底径	器高	分類	接合破片数	接合状況	備考
III－60	42-1・49-3	1	P－2	15他	覆土	(24.7)	8.9	32.5	IIIA_3	38	P-2フ下、15、17、18、21、21、29、30、31、32、35、36、38、40、41	
〃	42-2・50-1	2	〃	24他	〃	22.4	9.2	26.5	〃	16	P-2フ下、12、23、24、25	
〃	42-3・50-2	3	〃	1	〃	13.2	5.9	13.3	〃	1	P-2フ1	
III－61	42－4	4	〃	4他	〃	27.4	10.0	33.7	〃	23	4、6、8、12、23、27	
〃	42－5	5	〃		〃	10.2	4.2	10.0	〃	7	P-27	
〃	42－6	6	〃		〃	(14.0)	4.6	16.2	〃	5	P-2フ	
〃		7	〃		〃	(14.5)	(7.7)	(14.1)	〃	4	P-2フ	
III－67	43－1	1	P－34	27他	〃	(24.5)	9.8	28.3	〃	16	P-34フ、26、27、28、39、67、69、70、76、79	
〃		2	〃	2他	〃	—	13.2	(17.4)	〃	11	P-34-2、40、46、64、71、P-34フ	
〃	43-2・50-3	3	〃	1他	〃	25.7	8.6	30.0	〃	17	P-34-1、2、3、4、5、6、13	蓆目圧痕
III－68	43-3・51-1	4	〃	1他	〃	(25.1)	8.6	29.3	〃	24	P-34-1、2、3、4、5、7、8、9、10、12、13、14、15、100、101	
III－72	43-4・51-2	1	P－56	67他	〃	28.4	—	(28.6)	〃	20	P-56-67、70、75	
〃	43-5・51-3	2	〃	24他	〃	28.4	9.2	33.0	〃	25	P-56-フ、24、29、33、40、42、45、52	
III－73	43－6	3	〃	57他	〃	(33.1)	11.9	(45.0)	〃	51	P-56-フ、57、59、64、78、79、80、82	
〃	44－1	4	〃	31他	〃	(19.0)	10.0	37.8	〃	35	P-56-31、35、37、59、66、69、72、76、N-32・I、O-32・I	
〃		5	〃	60他	〃	(34.4)	—	(22.4)	〃	8	P-56-フ、60、61	
III－74	44－2	6	〃	4他	〃	(23.3)	—	(26.6)	〃	22	P-56-フ、4、11、34、51、53、55、62、63、86	
〃	44－3	7	〃	46他	〃	29.4	—	(27.1)	〃	25	P-56-フ、46、47、48、50	
〃	44－4	8	〃	17他	〃	(23.0)	(9.1)	26.7	〃	6	P-56-フ、17、18	

表39　フラスコ状ピット出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺構	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺構	遺物番号	層位	分類
III－61	8	P－2		覆土	IA	III－68	11	P－34	B2	覆土	IIIA_3
〃	9	〃		〃	〃	〃	12	〃	2	〃	〃
〃	10	〃		〃	〃	〃	13	〃	2	〃	〃
〃	11	〃		〃	IIIA_3	〃	14	〃	2	〃	〃
〃	12	〃		〃	〃	〃	15	〃	84	〃	〃
〃	13	〃		〃	〃	〃	16	〃		〃	〃
〃	14	〃		〃	〃	〃	17	〃		〃	〃
III－64	1	P－23		〃	IA	〃	18	〃	53	〃	〃
〃	2	〃		〃	IIIA_3	〃	19	〃	B2	〃	〃
〃	3	〃		〃	〃	〃	20	〃	2	〃	〃
〃	4	〃		〃	〃	〃	21	〃	96	〃	〃
〃	5	〃		〃	〃	〃	22	〃	99	〃	〃
〃	6	〃		〃	〃	〃	23	〃	36	〃	〃
〃	7	〃		〃	〃	〃	24	〃	24	〃	〃
〃	9	P－26		〃	IA	III－69	25	〃	74	〃	〃
〃	10	〃		〃	〃	〃	26	〃		〃	〃
〃	11	〃		〃	〃	〃	27	〃		〃	〃
〃	12	〃		〃	〃	〃	28	〃	90	〃	〃
〃	13	〃		〃	〃	〃	29	〃		〃	〃
〃	14	〃		〃	IIIA_3	〃	30	〃	B2	〃	〃
〃	15	〃		〃	〃	〃	31	〃	2	〃	〃
〃	16	〃		〃	〃	〃	32	〃	82	〃	〃
〃	17	〃		〃	〃	〃	33	〃	45	〃	〃
〃	18	〃		〃	〃	〃	34	〃	53	〃	〃
〃	19	〃		〃	〃	〃	35	〃		〃	〃
〃	23	P－29		〃	IA	III－74	9	P－56		〃	IA
〃	24	〃		〃	IIIA_3	〃	10	〃		〃	〃
〃	25	〃		〃	〃	〃	11	〃		〃	〃
III－68	5	P－34		〃	IA	〃	12	〃		〃	〃
〃	6	〃		〃	〃	〃	13	〃		〃	〃
〃	7	〃		〃	〃	〃	14	〃		〃	〃
〃	8	〃		〃	〃	〃	15	〃		〃	〃
〃	9	〃		〃	〃	〃	16	〃		〃	〃
〃	10	〃		〃	〃	〃	17	〃		〃	〃

挿図	番号	遺構	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺構	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－74	18	P－56		覆土	ⅠA	Ⅲ－75	28	P－56		覆土	ⅢA$_3$
〃	19	〃		〃	〃	〃	29	〃		〃	〃
Ⅲ－75	20	〃		〃	ⅢA$_3$	〃	30	〃		〃	〃
〃	21	〃		〃	〃	〃	31	〃	81	〃	〃
〃	22	〃	45	〃	〃	〃	32	〃	38	〃	〃
〃	23	〃		〃	〃	〃	33	〃	1・41	〃	〃
〃	24	〃	31・32	〃	〃	〃	34	〃		〃	〃
〃	25	〃		〃	〃	〃	35	〃		〃	〃
〃	26	〃	2	〃	〃	〃	36	〃		〃	〃
〃	27	〃		〃	〃						

表40　フラスコ状ピット出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺構	遺物番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	層位	挿図	番号	遺構	遺物番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	層位
Ⅲ－61	15	P-2		石鏃	3.0 × 1.3 × 0.9	2.7	Diat.	覆土	Ⅲ－69	41	P-34	50	すり石	8.3 ×(10.3)× 3.2	402.3	And.	覆土
〃	16	〃		〃	4.1 × 1.4 × 0.7	5.6	Aga-Sh.	〃	〃	42	〃		たたき石	10.9 × 5.9 × 3.8	400.5	〃	〃
〃	17	〃		スクレイパー	8.7 × 3.2 × 0.7	20.7	Sh.	〃	〃	43	〃		石錘	6.3 × 8.5 × 2.0	166.6	〃	〃
〃	18	〃	9	すり石	9.5 × 10.1 × 2.5	436.7	And.	〃	〃	44	〃	34	〃	8.1 × 9.2 × 2.4	246.0	Sa.	〃
〃	19	〃		〃	8.7 × 6.7 × 2.4	210.8	〃	〃	〃	45	〃		〃	6.5 × 9.7 × 1.9	156.5	〃	〃
Ⅲ－64	8	P-23		石鏃	(2.4)× 1.3 × 0.5	(1.4)	Aga-Sh.	〃	〃	46	〃		〃	7.5 × 8.9 × 2.8	259.4	〃	〃
〃	20	P-26		つまみ付ナイフ	(3.8)× 2.8 × 0.6	(6.3)	Sh.	〃	〃	47	〃		〃	8.7 × 8.9 × 1.9	211.0	〃	〃
〃	21	〃		すり石	9.2 × (8.7)× 2.5	(211.8)	And.	〃	〃	48	〃		〃	7.9 × (8.4)× 2.4	180.1	And.	〃
〃	22	〃		たたき石	7.7 × 13.6 × 3.3	(502.6)	Sa.	〃	Ⅲ－75	37	P-56		石鏃	3.4 × 1.5 × 0.9	3.0	Aga-Sh.	〃
〃	26	P-29		〃	10.9 × 4.7 × 7.2	545.0	And.	〃	〃	38	〃	9	すり石	7.5 × 16.5 × 3.5	560.0	And.	〃
Ⅲ－69	36	P-34		つまみ付ナイフ	(5.9)× 4.1 × 0.5	(8.7)	Aga-Sh.	〃	〃	39	〃	10	〃	8.5 × 15.4 × 3.7	615.0	〃	〃
〃	37	〃	1	スクレイパー	(7.8)× 4.4 × 1.5	(32.4)	Sh.	〃	〃	40	〃		〃	9.4 × (7.9)× 2.9	(342.1)	〃	〃
〃	38	〃	2	すり石	8.0 ×(10.8)× 1.4	(270.8)	And.	〃	〃	41	〃	26	たたき石	9.6 × 7.4 × 5.6	532.0	〃	〃
〃	39	〃		〃	9.6 × 14.8 × 2.7	488.7	〃	〃	〃	42	〃		石錘	3.0 × 7.7 × 1.6	125.0	〃	〃
〃	40	〃		〃	7.7 × 13.1 × 2.3	420.8	〃	〃									

表41　円形・楕円形ピット実測土器一覧

挿図	図版	番号	遺構	遺物番号	層位	大きさ(cm) 口径	底径	器高	分類	接合破片数	接合状況	備考
Ⅲ－79	44－5	12	P－18	4他	床	(25.4)	8.6	33.3	ⅢA$_3$	19	P-18床-4、5、P-18フ	
Ⅲ－80	44－6	25	P－27		覆土	8.4	4.7	9.0	〃	1	P-27フⅢ	
Ⅲ－83	45－1	52	P－48	2他	〃	34.1	10.2	39.4	〃	51	P-48-フ、2、9、12、13、17、18、19、20、21、23、25、26、27、28、33、34、35、36、37、38、40、42、43、44	
〃		53	〃	8他	〃	—	10.0	(17.4)	〃	25	P-48フ、8、33	
〃		63	P－53	2他	Ⅱ	(22.0)	10.3	(21.4)	〃	44	P-53Ⅱ、2、3、4、5、8、10、12、13、14、16、17、18、19	
Ⅲ－84	45－2	65	P－57	3他	覆土	(23.6)	8.8	30.7	〃	38	P-57・フ、3、4、5、6	
Ⅲ－86	45－3	81	P－76		〃	(37.0)	(12.0)	45.2	〃	75	P-76フ	
〃	45－4	82	P－77		〃	(20.2)	—	(23.1)	〃	37	P-77-フ、I-40Ⅱ、H-11フ	

表42　円形・楕円形ピット出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺構	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺構	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－88	1	P－1		覆土	ⅢA$_3$	Ⅲ－89	21	P－22		底	ⅢA$_3$
〃	2	P－2		〃	ⅠA	〃	22	〃		覆土	〃
〃	3	〃		〃	〃	〃	23	〃		〃	〃
〃	4	〃		〃	ⅢA$_3$	〃	24	〃		底	〃
〃	5	〃		〃	〃	〃	26	P－27		覆土	ⅠA
〃	6	〃		〃	〃	〃	27	〃		〃	ⅢA$_3$
〃	9	P－16		〃	ⅠA	〃	28	〃		〃	〃
〃	10	〃		〃	ⅢA$_3$	〃	29	〃		〃	〃
〃	11	P－17		〃	ⅠA	〃	30	〃		〃	〃
〃	13	P－18		〃	ⅢA$_3$	〃	31	〃		〃	V
〃	15	P－19		〃	ⅠA	〃	33	P－32		〃	ⅠA
〃	16	〃		〃	ⅢA$_3$	〃	34	〃	9	〃	ⅢA$_3$
〃	18	P－21		〃	〃	〃	35	〃		〃	〃
〃	19	〃		〃	〃	〃	38	P－33		〃	〃
ill－89	20	P－22		〃	ⅠA	〃	39	〃		〃	〃

挿図	番号	遺構	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺構	遺物番号	層位	分類
Ⅲ－89	40	P－33		覆土	ⅢA$_3$	Ⅲ－91	68	P－58		覆土	ⅠA
〃	41	〃		〃	〃	〃	69	P－65		〃	ⅢA$_3$
Ⅲ－90	46	P－37		〃	ⅠA	〃	70	〃		〃	〃
〃	47	〃		〃	〃	〃	74	P－71		〃	〃
〃	48	〃		〃	〃	Ⅲ－92	77	P－73		〃	〃
〃	50	P－38		〃	ⅢA$_3$	〃	78	〃		底	〃
〃	54	P－48		〃	ⅠA	〃	79	〃		覆土	〃
〃	55	〃		〃	〃	〃	80	P－75		〃	ⅠA
〃	56	〃		〃	ⅢA$_3$	〃	83	P－77		底	ⅢA$_3$
〃	57	〃		〃	〃	〃	84	〃		覆土	〃
Ⅲ－91	59	P－49		〃	〃	〃	85	〃		〃	〃
〃	60	〃		〃	〃	〃	86	〃		底	〃
〃	61	〃		〃	〃	〃	89	P－78		覆土	〃
〃	64	P－55		〃	ⅠA	〃	90	P－89	11～17・19	〃	ⅣA
〃	67	P－58		〃	〃						

表43　円形・楕円形ピット出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺構	遺物番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	層位	挿図	番号	遺構	遺物番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	層位
Ⅲ－77	7	P-3		石錘	(6.4)×(3.3)×(1.7)	(37.1)	And.	覆土	Ⅲ－82	51	P-42		スクレイパー	(6.3)× 3.0 × 0.7	(12.2)	Sh.	覆土
Ⅲ－78	8	P-14		石斧	(5.1)× 2.7 × 1.4	(25.4)	Bl-Mud.	〃	Ⅲ－83	58	P-48		すり石	5.9 × (6.5)× 5.8	(189.8)	And.	〃
Ⅲ－79	14	P-18		スクレイパー	(4.8)× 4.7 × 1.1	(31.0)	Sh.	〃	〃	62	P-49		スクレイパー	4.1 × 3.5 × 1.1	13.3	Aga-Sh.	〃
〃	17	P-19		すり石	9.3 × 16.7 × 3.2	739.0	And.	床	Ⅲ－84	66	P-57		石鏃	4.0 × 1.2 × 0.6	2.2	Sh.	〃
Ⅲ－81	36	P-32	7	スクレイパー	3.5 × 5.7 × 0.6	12.7	Sh.	覆土	Ⅲ－85	71	P-69		スクレイパー	6.2 × 4.3 × 0.6	25.5	〃	〃
〃	37	〃	1	すり石	8.3 ×(11.6)× 3.4	(500.0)	And.	〃	〃	72	〃		たたき石	9.9 × 11.5 × 4.3	750.0	And.	〃
〃	42	P-33	1	スクレイパー	7.1 × 2.8 × 1.0	19.8	Sh.	〃	〃	73	〃		〃	8.0 × 13.6 × 3.8	660.0	Diab.	〃
〃	43	〃	10	すり石	8.6 × 15.8 × 3.5	550.0	And.	〃	〃	75	P-71	4	すり石	8.5 × 12.8 × 6.3	915.0	And.	床
〃	44	P-35		石斧	9.9 × 5.1 × 2.4	196.5	Gr-Mud.	〃	〃	76	〃	1	台石・石皿	13.5 × 18.3 × 4.6	1,550.0	〃	〃
〃	45	〃		〃	13.8 × 5.7 × 3.0	424.2	〃	〃	Ⅲ－86	87	P-77		Uフレイク	(3.1)× 2.0 × 0.7	(3.5)	Sh.	覆土
Ⅲ－82	49	P-37		スクレイパー	(3.8)× 2.6 × 0.8	(7.6)	Sh.	〃	〃	88	〃		〃	(3.6)×(2.8)× 0.7	(6.9)	〃	〃

表44　Tピット出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺構	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺構	遺物番号	層位	分類
Ⅲ -115	1	P－4		覆土	ⅢA$_3$	Ⅲ -115	20	P－36		覆土	ⅢA$_3$
〃	2	P－7		〃	ⅠA	〃	21	〃		〃	〃
〃	3	〃		〃	ⅢA$_3$	〃	22	P－40		〃	ⅠA
〃	4	P－10		〃	〃	〃	23	〃		〃	〃
〃	5	〃		〃	〃	〃	24	〃		〃	ⅢA$_3$
〃	6	P－20		〃	ⅠA	〃	25	〃		〃	〃
〃	7	〃		〃	〃	〃	27	P－44		〃	〃
〃	8	〃		〃	ⅢA$_3$	〃	28	〃		〃	〃
〃	9	〃		〃	〃	〃	29	P－45		〃	ⅠA
〃	10	P－24		〃	ⅠA	〃	30	〃		〃	〃
〃	11	〃		〃	ⅢA$_3$	〃	31	〃		〃	〃
〃	12	P－28		〃	ⅠA	Ⅲ -116	32	P－50		〃	ⅢA$_3$
〃	13	〃		〃	ⅢA$_3$	〃	33	〃		〃	〃
〃	14	〃		〃	〃	〃	36	P－60		〃	ⅠA
〃	15	〃		〃	〃	〃	37	〃		〃	ⅢA$_3$
〃	16	〃		〃	〃	〃	38	〃		〃	〃
〃	17	P－36		〃	ⅠA	〃	39	P－63		〃	〃
〃	18	〃		〃	〃	〃	40	P－68		〃	〃
〃	19	〃		〃	〃	〃	41	P－95		〃	ⅣA

表45　Tピット出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺構	遺物番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	層位	挿図	番号	遺構	遺物番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	層位
Ⅲ-115	26	P-43		すり石	6.4 ×(5.9)× 6.0	(348.5)	And.	覆土	Ⅲ-116	35	P-59		土製品	土・石製品一覧表参照			
Ⅲ-116	34	P-51		たたき石	7.0 × 6.7 × 4.4	220.1	〃	〃									

表46　焼土実測土器一覧

挿図	図版	番号	遺構	遺物番号	層位	大きさ (cm) 口径	底径	器高	分類	接合破片数	接合状況	備考
Ⅲ－117	45－5	9	F － 3		床	(32.1)	(12.0)	34.4	ⅢA$_1$	81	F-3床	
Ⅲ－119	45－6	10	F － 4	H-4-37	Ⅲ	(20.1)	—	(16.7)	Ⅴc	21	H-4-37Ⅲ	
〃		11	〃	〃	〃	—	7.2	(9.6)	〃	17	〃	
〃		12	〃	H-4-31	〃	—	7.4	(11.6)	〃	23	H-4-31Ⅲ	

表47　焼土出土の拓影掲載土器一覧

挿図	番号	遺構	遺物番号	層位	分類	挿図	番号	遺構	遺物番号	層位	分類
Ⅲ -117	1	F － 1	H－3AⅢ	H － 3 覆土	Ⅵ	Ⅲ -119	14	F － 4	H－4Ⅲ	H － 4 覆土	Ⅴc
〃	2	〃	H－3AⅣ	〃	〃	〃	15	〃	〃	〃	〃
〃	3	〃	H－3AⅢ	〃	〃	〃	16	〃	〃	〃	〃
〃	4	〃	H－3DⅢ	〃	〃	〃	17	〃	〃	〃	〃
〃	5	〃	〃	〃	〃	〃	18	〃	H－4Ⅳ	〃	〃
〃	6	〃	〃	〃	〃	〃	19	〃	H－4Ⅲ·37	〃	〃
〃	7	〃	H－3AⅣ	〃	〃	〃	20	〃	H－4Ⅲ	〃	〃
〃	8	〃	〃	〃	〃	〃	21	〃	H－4	〃	〃
Ⅲ -119	13	F － 4	H－4Ⅲ	H － 4 覆土	Ⅴc	〃	22	〃	〃	〃	〃

表48　焼土出土の掲載石器一覧

挿図	番号	遺構	遺物番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	層位	挿図	番号	遺構	遺物番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	層位
Ⅲ-119	23	F-4	4	石鏃	(3.6)× 1.2 × 0.4	(1.4)	Sh.	H-4·Ⅲ	Ⅲ-119	28	F-4	1	石鏃	(2.6)× 1.0 × 0.4	(0.4)	Sh.	H-4·Ⅲ
〃	24	〃	5	〃	(3.0)× 1.1 × 0.5	(1.5)	〃	〃	〃	29	〃	7	スクレイパー	(2.8)× 2.3 × 0.5	(2.5)	〃	〃
〃	25	〃	6	〃	(2.7)× 1.2 × 0.5	(1.0)	Aga-Sh.	〃	〃	30	〃	8	〃	(4.3)× 2.7 × 1.9	(22.5)	Aga-Sh.	〃
〃	26	〃	3	〃	(2.5)× 1.2 × 0.5	(1.0)	Sh.	〃	〃	31	〃	10	〃	3.4 × 4.4 × 1.5	25.1	〃	〃
〃	27	〃	2	〃	(2.2)× 0.9 × 0.4	(0.6)	〃	〃									

表49　包含層実測土器一覧

挿図	図版	番号	発掘区	遺物番号	層位	大きさ (cm) 口径	底径	器高	分類	接合破片数	接合状況	備考
Ⅲ－120	46－1	1	M － 17		Ⅰ	(18.8)	—	(25.0)	ⅠA	23	M-17Ⅰ	
〃	46－2	2	Ⅰ － 34	118 他	Ⅲ	—	—	(11.5)	〃	19	Ⅰ-34Ⅲ、Ⅰ-34-118	
〃	46－3	3	O － 32		Ⅰ 他	23.1	9.9	21.4	ⅢA$_3$	36	O-32Ⅰ、Ⅱ	蓆目圧痕
〃		4	N － 32		Ⅰ	(13.4)	—	(13.1)	〃	7	N-32、Ⅰ、Ⅱ、H-6-69	
〃	46－4	5	N － 17		Ⅱ	—	8.6	(26.9)	〃	41	N-17Ⅱ	
〃		6	O － 31		Ⅰ 他	—	12.8	(23.7)	〃	51	O-31·Ⅰ、Ⅱ	
〃	46－5	7	K － 28		Ⅱ	(22.4)	9.9	27.6	〃	50	K－28Ⅱ	
〃		8	M － 19		〃	13.8	—	(15.6)	〃	10	M-19Ⅱ	
〃	46－6	9	M － 8		〃	—	(9.8)	(11.7)	〃	7	M-8Ⅱ	

表50　包含層出土の拓影掲載土器一覧

挿図	図版	番号	発掘区	層位	分類	挿図	図版	番号	発掘区	層位	分類	挿図	図版	番号	発掘区	層位	分類	挿図	図版	番号	発掘区	層位	分類
Ⅲ-121	52−1	10	O−31	Ⅰ	ⅠA	Ⅲ-122	52−2	64	K−29	Ⅰ	ⅠA	Ⅲ-124	53−2	118	N−19	Ⅱ	ⅢA$_3$	Ⅲ-127	55−1	172	N−32	Ⅰ	ⅢA$_3$
〃	〃	11	N−32		〃	〃	〃	65	O−23	Ⅲ	〃	〃	〃	119	M−17	〃	〃	〃	〃	173	O−32	Ⅱ	〃
〃	〃	12	N−21	Ⅰ	〃	〃	〃	66	N−37	Ⅱ	〃	〃	〃	120	M−18	Ⅰ	〃	〃	〃	174	〃	〃	〃
〃	〃	13	O−21	〃	〃	Ⅲ-123	〃	67	N−36	Ⅰ	〃	〃	〃	121	O−23	〃	〃	〃	〃	175	M−29	撹乱	〃
〃	〃	14	M−21	〃	〃	〃	〃	68	L−36	〃	〃	〃	〃	122	O−31	〃	〃	〃	〃	176	N−19	Ⅱ	〃
〃	〃	15	K−24 F−31	〃 Ⅲ	〃	〃	〃	69	O−31	〃	〃	Ⅲ-125	〃	123	M−16	Ⅱ	〃	〃	〃	177	O−31	〃	〃
〃	〃	16	M−32	Ⅰ	〃	〃	〃	70	Ⅰ−37	〃	〃	〃	〃	124	M−1	〃	〃	〃	〃	178	N−20	〃	〃
〃	〃	17	K−32	〃	〃	〃	〃	71	O−21	Ⅱ	〃	〃	〃	125	N−21	Ⅰ	〃	〃	〃	179	N−20	Ⅰ	〃
〃	〃	18	N−36	〃	〃	〃	〃	72	J−21		〃	〃	〃	126	M−17	Ⅱ	〃	〃	〃	180	K−30	〃	〃
〃	〃	19	O−24	Ⅲ	〃	〃	〃	73	O−22	Ⅰ	〃	〃	〃	127	J−27	Ⅰ・Ⅱ	〃	〃	〃	181	M−32 M−33	〃	〃
〃	〃	20	J−30	〃	〃	〃	〃	74	〃	〃	〃	〃	54−1	128	J−24	Ⅱ	〃	〃	〃	182	Ⅰ−22	〃	〃
〃	〃	21	L−30	Ⅰ	〃	〃	〃	75	O−21	Ⅱ	〃	〃	〃	129	N−20	〃	〃	〃	〃	183	O−32	Ⅱ	〃
〃	〃	22	K−26		〃	〃	53−1	76	O−22	Ⅰ	〃	〃	〃	130	〃	〃	〃	〃	〃	184	M−37	〃	〃
〃	〃	23	K−29	Ⅰ	〃	〃	〃	77	J−26	〃	〃	〃	〃	131	O−20	〃	〃	〃	〃	185	N−20	Ⅰ	〃
〃	〃	24	J−30	Ⅱ	〃	〃	〃	78	H−27	〃	〃	〃	〃	132	M−19	〃	〃	〃	〃	186	M−16		〃
〃	〃	25	〃	〃	〃	〃	〃	79	M−30	〃	〃	〃	〃	133	O−19	〃	〃	〃	〃	187	O−20	Ⅱ	〃
〃	〃	26	J−22		〃	〃	〃	80	N−19	Ⅱ	〃	〃	〃	134	N−20	〃	〃	〃	〃	188	N−19	〃	〃
〃	〃	27	O−22	Ⅰ	〃	〃	〃	81	N−18	〃	〃	〃	〃	135	N−32	〃	〃	〃	〃	189	N−32	Ⅰ	〃
〃	〃	28	L−29	〃	〃	〃	〃	82	O−31	Ⅰ	〃	〃	〃	136	N−19	Ⅰ	〃	〃	〃	190	N−19	〃	〃
〃	〃	29	N−32	〃	〃	〃	〃	83		表採	〃	〃	〃	137	N−32	Ⅱ	〃	〃	〃	191	N−32	〃	〃
〃	〃	30	N−19	Ⅱ	〃	〃	〃	84	M−21	Ⅰ	〃	〃	〃	138	O−31	Ⅰ	〃	〃	〃	192	〃	〃	〃
〃	〃	31	O−25	Ⅰ	〃	〃	〃	85	N−37	Ⅲ	〃	〃	〃	139	N−20	Ⅱ	〃	〃	〃	193	N−31	〃	〃
〃	〃	32	N−33		〃	〃	〃	86	N−36	Ⅰ	〃	〃	〃	140	K−31	Ⅰ	〃	〃	〃	194	〃	〃	〃
〃	〃	33	J−30	Ⅱ	〃	〃	〃	87	L−32	〃	〃	〃	〃	141	N−20	Ⅱ	〃	Ⅲ-128	55−2	195	L−17	Ⅱ	〃
〃	〃	34	J−33	Ⅲ	〃	〃	〃	88	O−32	Ⅱ	〃	〃	〃	142	M−33	Ⅰ	〃	〃	〃	196	N−20	〃	〃
〃	〃	35	M−21	Ⅰ	〃	〃	〃	89	K−30	Ⅰ	〃	〃	〃	143	M−18	Ⅱ	〃	〃	〃	197	〃	〃	〃
〃	〃	36	O−32	Ⅱ	〃	〃	〃	90	J−31	〃	〃	〃	〃	144	N−19	〃	〃	〃	〃	198	N−35	〃	〃
〃	〃	37	K−26		〃	〃	〃	91	M−30	〃	〃	Ⅲ-126	〃	145	〃	Ⅰ	〃	〃	〃	199	J−29	Ⅰ	〃
〃	〃	38	N−38	Ⅰ	〃	〃	〃	92	J−30 J−31	Ⅱ Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	〃	〃	〃	146	M−17		〃	〃	〃	200	B−32	撹乱	〃
〃	〃	39	L−33	〃	〃	〃	〃	93	J−37		〃	〃	〃	147	N−18	Ⅱ	〃	〃	〃	201	N−32	Ⅰ	〃
〃	〃	40	O−21	Ⅱ	〃	〃	〃	94	N−19	Ⅱ	〃	〃	〃	148	N−30	Ⅰ	〃	〃	〃	202	G−24	Ⅱ	〃
〃	〃	41	L−17		〃	〃	〃	95	N−27	Ⅰ	〃	〃	〃	149	N−31	〃	〃	〃	〃	203	M−17	〃	〃
〃	〃	42	J−28	Ⅱ	〃	Ⅲ-124	〃	96	M−30	〃	〃	〃	54−2	150	M−17	Ⅱ	〃	〃	〃	204	N−20	Ⅰ	〃
〃	〃	43	N−21	Ⅲ	〃	〃	〃	97	K−31	〃	〃	〃	〃	151	O−21	Ⅰ	〃	〃	〃	205	O−21	〃	〃
Ⅲ-122	〃	44	J−37	〃	〃	〃	〃	98	O−32	Ⅱ	〃	〃	〃	152	Ⅰ−25		〃	〃	〃	206	M−16	Ⅱ	〃
〃	〃	45	O−34	Ⅰ	〃	〃	〃	99	J−34	撹乱	〃	〃	〃	153	N−18	Ⅱ	〃	〃	〃	207	O−27	Ⅰ	〃
〃	52−2	46	K−33	〃	〃	〃	〃	100	K−30	Ⅰ	〃	〃	〃	154	N−20	〃	〃	〃	〃	208	M−16		〃
〃	〃	47	N−36	〃	〃	〃	〃	101	O−32	〃	〃	〃	〃	155	O−20	〃	〃	〃	〃	209	N−18	Ⅱ	〃
〃	〃	48	N−34	〃	〃	〃	〃	102	M−17	〃	〃	〃	〃	156	J−30	〃	〃	〃	〃	210	N−20	Ⅰ	〃
〃	〃	49	K−27		〃	〃	〃	103	L−37	Ⅱ	〃	〃	〃	157	N−32	〃	〃	〃	〃	211	O−20	Ⅱ	Ⅴc
〃	〃	50	O−32	Ⅱ	〃	〃	〃	104	L−29	Ⅰ	〃	〃	〃	158	N−18	〃	〃	〃	〃	212	N−23	Ⅰ	〃
〃	〃	51	N−20	Ⅲ	〃	〃	〃	105	L−29 M−28	〃	〃	〃	〃	159	F−32	Ⅰ	〃	〃	〃	213	L−20		〃
〃	〃	52	O−32	Ⅱ	〃	〃	53−2	106	N−18	Ⅱ	ⅢA$_1$	〃	〃	160	N−19	Ⅱ	〃	〃	〃	214	J−21		〃
〃	〃	53	M−37	Ⅰ・Ⅱ	〃	〃	〃	107	N−20	〃	〃	〃	〃	161	O−20	〃	〃	〃	〃	215	O−32	Ⅰ	〃
〃	〃	54	L−36 L−37	Ⅱ Ⅰ	〃	〃	〃	108	O−20	〃	〃	〃	〃	162	L−31	Ⅰ	〃	〃	〃	216	N−20	〃	〃
〃	〃	55	H−25	〃	〃	〃	〃	109	〃	〃	〃	〃	〃	163	M−19	〃	〃	〃	〃	217	Ⅰ−21		Ⅵ
〃	〃	56	N−21 O−22	〃	〃	〃	〃	110	H−36	Ⅰ	ⅢA$_3$	〃	〃	164	N−36	〃	〃	〃	〃	218	O−23		〃
〃	〃	57	K−25		〃	〃	〃	111	N−36	〃	〃	〃	〃	165		排土	〃	〃	〃	219	Ⅰ−21		〃
〃	〃	58	K−33	Ⅰ	〃	〃	〃	112	D−22	〃	〃	〃	〃	166	N−19 N−20	Ⅱ Ⅰ	〃	〃	〃	220	〃		〃
〃	〃	59	〃	〃	〃	〃	〃	113	D−20	Ⅱ	〃	〃	〃	167	M−19	〃	〃	〃	〃	221	〃		〃
〃	〃	60	L−34	〃	〃	〃	〃	114	M−17	〃	〃	〃	〃	168	P−21	Ⅱ	〃	〃	〃	222	〃		〃
〃	〃	61	M−21	〃	〃	〃	〃	115	N−22	Ⅰ	〃	Ⅲ-127	55−1	169	J−30	〃	〃	〃	〃	223	〃		〃
〃	〃	62	M−33	〃	〃	〃	〃	116	M−16	Ⅱ	〃	〃	〃	170	N−19	〃	〃	〃	〃	224	〃		〃
〃	〃	63	O−22	〃	〃	〃	〃	117	D−23	〃	〃	〃	〃	171	H−27	Ⅰ	〃						

表51　包含層出土の掲載石器一覧

挿図	図版	番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	発掘区	層位	挿図	図版	番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	発掘区	層位
III-129	56-1	1	石鏃	(1.9)× 1.5 × 0.3	(1.1)	Sh.	M-39	I	III-131	57-1	57	スクレイパー	8.2 × 4.9 × 1.4	47.2	Sh.	J-29	I
〃	〃	2	〃	3.2 × 1.5 × 0.4	2.0	〃	M-32	〃	〃	〃	58	〃	(7.0)× 3.7 × 1.5	(37.4)	〃	M-34	〃
〃	〃	3	〃	3.2 × 1.9 × 0.4	2.0	〃	O-21	〃	〃	〃	59	〃	5.1 × 4.5 × 1.9	45.6	〃	M-31	〃
〃	〃	4	〃	4.1 × 1.8 × 0.5	3.0	〃		表採	〃	〃	60	〃	5.7 × 4.4 × 0.7	15.0	〃	M-29	〃
〃	〃	5	〃	5.0 × (1.8)× 0.4	(1.8)	〃	I-33	I	〃	〃	61	〃	(5.1)× 3.5 × 0.6	(9.8)	〃	K-29	〃
〃	〃	6	〃	(3.2)× 1.1 × 0.5	(1.2)	〃	M-22	〃	〃	〃	62	〃	3.2 × 3.1 × 0.4	4.1	〃	O-29	〃
〃	〃	7	〃	(3.1)× 1.4 × 0.6	(2.1)	Aga-Sh.	N-21	〃	III-132	57-2	63	〃	6.5 × 4.2 × 0.9	27.7	〃	N-32	〃
〃	〃	8	〃	(3.3)× 1.4 × 0.5	(1.8)	〃	J-33	III	〃	〃	64	〃	(4.9)× 3.9 × 1.1	(27.8)	〃	L-32	〃
〃	〃	9	〃	(2.9)× 1.4 × 0.4	(1.4)	Sh.	O-20	II	〃	〃	65	〃	6.6 × 4.5 × 0.9	29.3	〃	K-27	〃
〃	〃	10	〃	(3.9)× 1.5 × 0.7	(3.3)	〃	N-20	〃	〃	〃	66	〃	5.7 × 6.7 × 0.8	22.6	〃	J-29	〃
〃	〃	11	〃	(3.7)× 1.7 × 0.7	(3.1)	〃	L-24		〃	〃	67	〃	6.0 × 7.8 × 2.0	78.2	〃	M-16	
〃	〃	12	〃	3.2 × 1.4 × 0.4	1.1	Diat.	H-25	I	〃	〃	68	Uフレイク	12.8 × 7.0 × 1.0	62.0	〃	I-34	III
〃	〃	13	〃	2.8 × 1.1 × 0.6	1.0	Sh.	N-19	II	〃	〃	69	〃	8.0 × 5.2 × 1.5	59.0	〃	L-17	II
〃	〃	14	〃	(3.0)× 1.9 × 0.5	(1.9)	〃	M-18	I	〃	〃	70	〃	6.3 × 5.7 × 1.3	34.5	〃	M-18	〃
〃	〃	15	ドリル	(3.1)× 0.8 × 0.3	1.8	〃	M-17	II	〃	〃	71	〃	5.8 × 2.7 × 0.7	8.7	〃	H-4	III
〃	〃	16	〃	5.2 × 1.8 × 0.5	(11.5)	〃	M-20	I	〃	〃	72	〃	6.8 × 4.3 × 0.9	21.6	〃	K-31	I
〃	〃	17	〃	6.4 × 3.6 × 0.8	18.4	〃	J-31	I	〃	〃	73	〃	5.3 × 4.3 × 1.1	24.8	〃	I-28	〃
〃	〃	18	〃	3.9 × 1.8 × 0.8	4.0	〃	J-24		〃	〃	74	〃	5.9 × 3.4 × 1.4	27.4	〃	M-20	〃
〃	〃	19	〃	4.4 × 3.0 × 0.4	5.4	Aga-Sh.	I-28	I	III-133	58-1	75	石斧	13.1 × 5.3 × 2.2	219.2	Gr-Mud.	L-20	
〃	〃	20	やり先・ナイフ	(5.2)× 1.7 × 0.9	(4.6)	Diat.	J-22		〃	〃	76	〃	(10.3)× 5.7 × 2.4	(251.0)	Sch.	H-24	I
〃	〃	21	〃	3.7 × 1.7 × 0.7	3.6	Aga-Sh.	I-20		〃	〃	77	〃	(6.3)× 6.1 × 3.0	(155.6)	Gni.	D-30	〃
〃	〃	22	〃	(7.9)× 3.2 × 1.1	(29.4)	Sh.	M-22	I	〃	〃	78	〃	(9.7)× 5.7 × 2.6	(236.5)	Ser.	N-17	〃
〃	〃	23	〃	3.9 × 2.4 × 1.0	8.2	Aga-Sh.	N-19	〃	〃	〃	79	〃	10.3 × 5.3 × 2.7	236.2	〃		表採
〃	〃	24	〃	(6.6)× 2.6 × 1.4	(23.5)	Sh.	O-22	〃	〃	〃	80	〃	(5.2)× 5.4 × 2.7	(83.1)	Gr-Mud.	H-22	
〃	〃	25	〃	(2.1)× 1.9 × 0.7	(1.6)	Diat.	O-20	II	〃	〃	81	〃	(7.1)× 4.7 × 2.5	(120.2)	Ser.	J-20	
〃	〃	26	〃	(3.6)× 2.5 × 1.3	(11.0)	Aga-Sh.	O-22	I	〃	〃	82	〃	(8.7)× 4.6 × 2.2	(115.8)	Gr-Mud.	N-21	I
〃	〃	27	〃	(5.6)× 4.0 × 1.5	(32.0)	〃	M-19		〃	〃	83	〃	(4.4)× 3.5 × 1.2	(27.5)	Mud.	B-28	〃
〃	〃	28	〃	(6.9)× 5.1 × 1.3	(31.4)	〃		表採	III-134	〃	84	〃	(11.6)× 5.0 × 3.0	(261.5)	Ser.		表採
〃	〃	29	〃	(5.2)× 5.2 × 1.1	(25.6)	Sh.	K-18		〃	〃	85	〃	9.9 × (4.2)× 2.6	(160.9)	Gr-Mud.	N-22	I
〃	〃	30	〃	5.2 × (6.1)× 2.3	(65.7)	Aga-Sh.	O-30	I	〃	〃	86	〃	(3.7)× 3.2 × 1.6	(25.6)	〃	N-20	〃
III-130	56-2	31	つまみ付ナイフ	2.2 × 4.1 × 0.9	6.8	〃	O-23	I	〃	〃	87	〃	(7.0)× 5.0 × 3.3	(154.6)	Gni.	M-36	〃
〃	〃	32	〃	(4.7)× 2.6 × 0.5	(7.9)	Sh.	I-29	I	III-135	58-2	88	すり石	8.4 × 16.3 × 7.6	1,075.0	And.	B-24 B-26	II
〃	〃	33	〃	5.0 × 2.4 × 0.5	(5.1)	Aga-Sh.	L-28		〃	〃	89	〃	6.4 × 14.5 × 6.5	760.0	〃	N-21	〃
〃	〃	34	〃	7.2 × 2.3 × 0.8	18.1	Sh.	A-14	I	〃	〃	90	〃	7.8 × 15.2 × 5.9	977.0	〃	J-33 N-30	I
〃	〃	35	〃	7.5 × 2.9 × 0.6	12.6	〃	N-18	II	〃	〃	91	〃	10.3 × 14.9 ×10.2	1,075.0	〃	M-36	I
〃	〃	36	〃	(8.3)× 2.2 × 0.8	(12.6)	〃	N-32	I	〃	〃	92	〃	8.1 × 13.0 × 8.1	460.0	Sa.	O-21	II
〃	〃	37	スクレイパー	7.0 × 3.3 × 1.5	29.1	Aga-Sh.	M-16	II	〃	〃	93	〃	5.8 × (8.3)× 5.7	(330.1)	And.	N-37	I
〃	〃	38	〃	8.4 × 5.7 × 1.9	90.7	Sh.	L-32	I	〃	〃	94	〃	8.6 × 14.9 × 4.9	735.0	〃	M-31	〃
〃	〃	39	〃	7.1 × 3.3 × 0.8	24.7	〃	F-22	I	〃	〃	95	〃	7.5 × 12.7 × 3.7	416.8	〃	O-25	〃
〃	〃	40	〃	6.0 × 3.5 × 1.5	29.8	〃	G-22		〃	〃	96	〃	6.4 × 10.8 × 2.8	243.8	〃	O-27	〃
〃	〃	41	〃	(8.0)× 4.9 × 2.3	(84.7)	〃	N-23	I	〃	59-1	97	〃	6.2 × (9.6)× 2.5	(175.2)	〃	O-20	II
〃	〃	42	〃	5.1 × 3.4 × 0.9	16.8	〃	M-17		〃	〃	98	〃	6.3 × (7.6)× 3.2	(246.2)	〃	P-22	I
〃	〃	43	〃	5.1 × 4.5 × 0.7	19.4	Aga-Sh.	M-39	I	〃	〃	99	〃	8.5 × 16.6 ×(3.8)	(719.0)	〃	N-31	〃
〃	〃	44	〃	4.0 × 3.1 × 0.7	11.4	Sh.	M-21	〃	〃	〃	100	〃	6.9 × 16.0 × 2.2	540.0	Gni.	O-31	〃
〃	〃	45	〃	4.8 × 3.0 × 0.6	9.2	〃	O-35	〃	〃	〃	101	〃	9.5 × 13.8 × 3.5	639.0	And.	N-31	〃
〃	〃	46	〃	5.9 × 3.6 × 0.7	18.8	〃	P-21	II	〃	〃	102	〃	8.5 × 12.7 × 2.5	328.8	Sa.	N-19	〃
III-131	57-1	47	〃	5.5 × 2.0 × 0.8	10.0	〃	L-18		III-136	〃	103	〃	8.2 × 13.8 ×(2.5)	(385.2)	And.	O-32	II
〃	〃	48	〃	5.3 × 2.7 × 0.6	11.0	〃	N-36	I	〃	〃	104	〃	10.0 ×(15.2)×(4.6)	(780.0)	〃	M-35	〃
〃	〃	49	〃	(6.1)× 3.5 × 0.6	(15.2)	〃	H-27	〃	〃	〃	105	〃	9.8 × 14.7 ×(3.2)	(670.0)	〃	M-35	〃
〃	〃	50	〃	5.5 × 3.9 × 1.3	13.2	〃	H-22		〃	59-2	106	〃	8.6 × 14.2 ×(3.0)	(376.8)	〃	O-32	I
〃	〃	51	〃	8.7 × 4.6 × 1.4	80.6	〃	H-26 H-33	I、II	〃	〃	107	〃	8.1 × 15.9 × 2.3	440.0	〃	J-25	
〃	〃	52	〃	6.7 × (5.7)× 0.9	(40.4)	〃	N-28	I	〃	〃	108	〃	7.5 × 13.8 × 2.8	325.0	〃	M-16	
〃	〃	53	〃	9.2 × 4.5 × 0.8	36.1	〃	M-17		〃	〃	109	〃	8.9 ×(16.2)×(2.7)	(473.9)	〃	J-20	
〃	〃	54	〃	7.5 × 5.7 × 1.1	39.6	〃	〃	II	〃	〃	110	〃	7.0 × 12.3 × 2.5	324.4	〃	K-27	I
〃	〃	55	〃	6.3 × 4.4 × 1.8	37.9	〃	K-26		〃	〃	111	〃	10.4 × 18.6 × 3.5	830.0	〃	O-20	〃
〃	〃	56	〃	(4.2)× 4.9 × 1.3	(26.6)	〃	J-25		〃	〃	112	〃	7.8 × 14.9 ×(2.3)	(378.4)	〃	N-19	II

挿図	図版	番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	発掘区	層位	挿図	図版	番号	名称	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	発掘区	層位
Ⅲ-136	59-2	113	すり石	9.7 × 16.8 × 3.0	570.0	And.	L-31	I	Ⅲ-138	60-2	148	石錘	7.0 × 7.1 × 1.8	106.1	And.	M-32	I
〃	〃	114	〃	9.1 × 15.7 × 2.4	605.0	〃	O-19	II	〃	〃	149	〃	6.7 × 9.4 × 2.5	119.6	〃	J-29	〃
Ⅲ-137	60-1	115	〃	5.3 × 9.0 × 5.3	261.4	〃	M-17	I	〃	〃	150	〃	7.0 × 8.6 × 1.5	(120.5)	Mud.	L-26	表土
〃	〃	116	〃	8.4 ×(11.6)× 6.4	(948.0)	〃	J-25		〃	〃	151	〃	6.5 × 7.8 × 2.3	121.0	And.	O-26	I
〃	〃	117	〃	5.1 × 5.5 × 2.6	92.9	〃	O-21	II	〃	〃	152	〃	7.0 × 8.2 × 2.6	122.1	And.	K-29	〃
〃	〃	118	たたき石	10.1 ×(10.3)× 4.4	(411.8)	Sa.	H-33	〃	〃	〃	153	〃	7.9 × 9.6 × 1.7	122.3	Mud.	K-26	
〃	〃	119	〃	7.5 × 5.2 × 5.2	231.5	And.	N-30	I	〃	〃	154	〃	6.8 × 9.9 × 1.6	123.1	〃	L-31	I
〃	〃	120	〃	8.9 × 8.1 × 5.1	388.1	〃	N-20	II	〃	61-1	155	〃	5.3 × 7.7 × 2.3	125.5	And.	M-29	II
〃	〃	121	〃	11.3 × 8.5 × 5.0	555.0	〃	O-21	〃	〃	〃	156	〃	6.2 × 8.2 × 1.9	127.5	〃	L-29	I
〃	〃	122	〃	13.3 × 6.9 × 4.1	383.9	〃	N-18 O-20	〃	〃	〃	157	〃	6.2 × 6.5 × 1.9	128.1	〃	K-26	
〃	〃	123	〃	8.5 × (7.7)×(3.5)	(343.4)	〃	K-26		〃	〃	158	〃	6.1 × 6.9 × 2.6	141.8	〃	K-32	I
〃	〃	124	〃	5.8 × 6.8 × 2.0	98.2	〃	L-17		〃	〃	159	〃	7.0 × 8.2 × 2.7	144.7	〃	J-31	〃
〃	〃	125	砥石	(4.3)× 6.1 × 2.5	(63.2)	Tuff.	N-36	I	〃	〃	160	〃	7.2 × 8.7 × 1.8	148.6	〃	I-29	〃
〃	〃	126	〃	(7.4)× (7.9)× 1.6	(75.2)	Sa.	O-20	III	〃	〃	161	〃	5.6 × 9.3 × 2.1	153.2	〃	N-23	〃
〃	〃	127	〃	12.5 × 8.4 × 4.1	410.4	And.	K-27		〃	〃	162	〃	6.5 × 8.8 × 2.3	154.9	Sa.	N-32	〃
〃	〃	128	〃	9.3 × 12.3 × 3.6	448.4	〃	K-18		〃	〃	163	〃	7.2 × 6.7 × 2.6	158.6	And.	I-34	III
〃	〃	129	〃	8.0 × 9.1 × 3.1	265.0	Sa.	H-32	I	〃	〃	164	〃	8.4 × 8.8 × 1.2	159.2	〃	L-32	I
Ⅲ-138	60-2	130	石錘	6.4 × 4.6 × 0.9	34.7	〃	K-31	〃	〃	〃	165	〃	7.8 × 8.7 × 2.3	162.5	Sa.	L-29	〃
〃	〃	131	〃	4.4 × 7.2 × 1.1	37.3	Mud.	O-29	〃	Ⅲ-139	〃	166	〃	7.2 × 8.9 × 2.9	177.2	〃	K-27	
〃	〃	132	〃	5.3 × 6.2 × 1.1	40.0	〃	N-20	〃	〃	〃	167	〃	7.5 × 8.7 × 2.3	183.2	Sa.	L-32	I
〃	〃	133	〃	6.8 × 5.2 × 1.2	46.2	And.	J-32	〃	〃	〃	168	〃	7.8 × 8.8 × 2.8	217.2	Qua.	K-30	〃
〃	〃	134	〃	5.4 × 5.6 × 1.5	47.0	Mud.	K-34	〃	〃	〃	169	〃	7.4 × 8.8 × 2.6	224.1	And.	M-30	〃
〃	〃	135	〃	5.1 × 6.0 × 1.8	48.7	And.	N-36	〃	〃	〃	170	〃	9.8 × 7.9 × 4.7	281.2	〃	O-30	〃
〃	〃	136	〃	5.7 × 5.4 × 1.7	48.7	〃	K-31	〃	〃	〃	171	〃	7.6 × 8.8 × 3.4	285.0	〃	J-28	II
〃	〃	137	〃	6.1 × 7.5 × 1.0	49.7	Mud.	J-34	〃	〃	〃	172	〃	8.1 × 9.9 × 3.0	303.8	〃	O-29	I
〃	〃	138	〃	5.5 × 6.7 × 1.4	51.8	〃	L-31	〃	〃	〃	173	〃	8.0 × 10.0 × 3.2	339.4	〃	N-32	〃
〃	〃	139	〃	5.8 × 7.3 × 1.1	55.8	〃	F-32	〃	Ⅲ-140	61-2	174	台石・石皿	33.3 × 24.4 × 7.4	7,800.0	〃	I-40	攪乱
〃	〃	140	〃	6.5 × 6.6 × 1.6	63.7	And.	J-34	〃	〃	〃	175	〃	22.7 × 19.7 × 5.1	2,700.0	〃	I-37	I
〃	〃	141	〃	5.5 × 7.1 × 1.5	73.3	Sa.	I-34	III	〃	〃	176	〃	25.3 × 14.7 ×10.2	4,400.0	〃	N-31	〃
〃	〃	142	〃	6.0 × 7.3 × 1.3	73.7	Mud.	O-31	I	〃	〃	177	〃	21.0 × 11.5 × 4.1	915.0	〃	I-40	II
〃	〃	143	〃	6.5 × 9.1 × 1.6	81.8	〃	N-31	〃	〃	〃	178	〃	18.0 × 15.2 × 8.2	3,000.0	〃	L-31	I
〃	〃	144	〃	6.5 × 6.0 × 1.6	88.0	And.	O-23	〃	〃	〃	179	〃	37.2 × 20.1 × 9.9	9,200.0	〃	M-35	II
〃	〃	145	〃	7.3 × 8.9 × 1.5	94.3	Sa.	K-33	〃	〃	〃	180	〃	26.3 × 12.5 × 8.3	4,500.0	〃	N-19	〃
〃	〃	146	〃	(5.7)× (7.3)×(2.4)	(102.5)	〃	I-26	〃	〃	〃	181	〃	16.1 × 22.0 × 9.8	4,500.0	〃	〃	I
〃	〃	147	〃	5.6 × 8.9 × 1.6	103.0	And.	I-33	〃									

表52　土製品・石製品・金属製品一覧

挿図	図版	番号	名称	大きさ 長さ	大きさ 幅	大きさ 厚さ(cm)	重量(g)	材質	遺構・発掘区	層位	備考
Ⅲ－141	62－1	1	ミチアチュア土器	(4.6)	8.5	8.3	(51.6)	土製	H－3－D	覆土	
〃	〃	2	〃	(2.3)	3.6	(3.5)	(6.5)	〃	H－3－C	Ⅳ	
〃	〃	3	〃	(2.8)	2.2	(2.2)	(8.4)	〃	L－28	I	
〃	〃	4	注口	(2.7)	(3.0)	(4.0)	(11.4)	〃	H－1・P－1	覆土	
〃	〃	5	〃	(3.3)	(2.6)	(4.5)	(12.5)	〃	P－59	〃	
〃	〃	6	台	(2.5)	(6.5)	(8.0)	(50.1)	〃	M－23・F－30	I	
〃	〃	7	〃	(4.6)	(2.8)	(2.4)	(32.7)	〃	H－3－A	Ⅳ	
〃	〃	8	棒状土製品	(3.2)	0.8	0.7	(1.8)	〃	O－21	I	
〃	〃	9	スタンプ状土製品	(1.5)	3.3	2.9	(5.4)	〃	H－1－93	床	
〃	〃	10	くぼみのある土製品	2.1	2.5	1.3	4.4	〃	H－3	覆土	
〃	〃	11	有孔土製品	4.1	4.0	1.1	15.8	〃	H－5－d	床	
〃	〃	12	〃	2.8	2.4	0.7	4.1	〃	H－5・SP－5	覆土	
〃	〃	13	垂飾	2.9	1.2	0.9	3.2	〃	M－17	II	
〃	〃	14	〃 ?	6.2	3.1	3.0	36.0	〃	H－1	Ⅸ	
〃	62－2	15	側縁有溝土製品	7.0	4.9	3.1	88.0	〃	P－27	覆土 II	
Ⅲ－142	〃	16	土偶	(7.7)	9.5	2.2	(102.8)	〃	M－24	I	
〃	〃	17	〃	(7.3)	(6.0)	2.0	(51.6)	〃	G－24	II	
〃	〃	18	〃	(6.8)	(8.6)	2.5	(85.0)	〃	H－3－A	Ⅳ	
〃	62－1	19	垂飾	10.0	3.3	1.1	25.0	Mud.	H－1	II	

挿図	図版	番号	名称	大きさ			重量(g)	材質	遺構・発掘区	層位	備考
				長さ	幅	厚さ(cm)					
Ⅲ－142	62－1	20	垂飾	3.9	4.7	1.0	18.9	Mud.	M－36	Ⅰ	
〃	〃	21	〃	3.3	2.9	0.9	9.3	〃	H－4	覆土	
〃	〃	22	〃	3.3	2.3	1.4	10.2	〃	H－6－59	〃	
〃	〃	23	〃	3.0	3.6	2.4	23.0	〃	H－4－6	床	
Ⅲ－143		1	不明銅製品	17.9	8.0	0.2	54.6	銅	C－9	Ⅰ	
〃		2	北宋銭(皇宋通宝)	2.4	2.4	0.1	3.0	〃	J－25	〃	
〃		3	1銭銅貨	2.7	2.7	0.2	5.2	〃	B－32	〃	
〃		4	1銭アルミ貨	1.6	1.6	0.2	0.6	アルミ	L－39	〃	
〃		5	〃	1.6	1.6	0.2	0.6	〃	D－28	〃	

表53　掲載旧石器一覧

挿図	図版	番号	名称	石器ブロック	発掘区	遺物番号	長さ×幅×厚さ(cm)	重さ(g)	材質	母岩No.	層位	備考
Ⅲ-149	67－1	1	細石刃	Sb－2	K－30	114	2.3 × 0.5 × 0.2	0.2	Obs.		Ⅳ	
〃	〃	2	〃	Sb－7	L－41	72	(2.5)× 0.5 × 0.2	(0.2)	〃		〃	
〃	〃	3	〃	Sb－2	K－30	106	1.9 × 0.5 × 0.2	0.1	〃		〃	
〃	〃	4	〃	〃	〃	14	1.9 × 0.5 × 0.1	0.1	〃		〃	
〃	〃	5	〃	Sb－7	K－41	106	(1.5)× 0.5 × 0.1	(0.1)	〃		〃	
〃	〃	6	〃	Sb－2	K－30	68	2.4 × 0.4 × 0.2	0.1	〃		〃	
〃	〃	7	〃	〃	〃	76	1.9 × 0.4 × 0.2	0.1	〃		〃	
〃	〃	8	〃	〃	〃	11	(2.1)× 0.4 × 0.1	(0.1)	〃		〃	
〃	〃	9	〃	〃	〃	10	(2.3)× 0.4 × 0.1	(0.1)	〃		〃	
〃	〃	10	〃	〃	〃	23	(1.9)× 0.4 × 0.1	(0.1)	〃		〃	
〃	〃	11	〃	〃	〃	22	(2.0)× 0.4 × 0.2	(0.1)	〃		〃	
〃	〃	12	〃	〃	〃	6	0.8 × 0.4 × 0.1		〃		〃	
〃		13	〃	〃	K－29	99	(0.9)× 0.4 × 0.1		〃		〃	
〃		14	〃	Sb－7	L－41	73	(0.5)× 0.3 × 0.1		〃		〃	
〃		15	〃	〃	L－40	6	(2.9)× 0.5 × 0.1	(0.2)	〃		Ⅲ	
〃		16	〃	Sb－2	K－30	153	(1.5)× 0.4 × 0.2	(0.1)	〃		Ⅳ	
〃		17	〃	〃	〃	166	(1.1)× 0.3 × 0.1		〃		〃	
〃		18	〃	Sb－7	K－41	87	(2.2)× 0.6 × 0.3	(0.3)	〃		〃	
〃		19	〃	〃	L－42	57	(1.5)× 0.5 × 0.1	(0.1)	〃		〃	
〃		20	〃	Sb－3	H－31	17	(0.9)× 0.5 × 0.2		〃		〃	
〃		21	〃	Sb－2	K－20	129	(0.9)× 0.4 × 0.1		〃		〃	
〃		22	〃	Sb－7	K－41	71	(0.7)× 0.4 × 0.1		〃		〃	
〃		23	〃	〃	L－40	117	(0.6)× 0.4 × 0.1		〃		〃	
〃		24	〃	Sb－2	K－29	656	(0.7)× 0.3 × 0.1		〃		〃	
〃	67－2	25	〃	Sb－7	L－41	53	2.8 × 0.8 × 0.3	0.3	Sh.	26	〃	
〃	〃	26	〃	〃	L－40	85	3.1 × 0.7 × 0.2	0.6	〃		〃	
〃	〃	27	〃	〃	〃	16	3.6 × 0.6 × 0.3	0.6	〃	28	〃	
〃	〃	28	〃	〃	L－41	115	2.4 × 0.6 × 0.2	0.2	〃		〃	
〃	〃	29	〃	〃	L－40	58	(2.0)× 0.6 × 0.2	(0.3)	〃	28	〃	
〃	〃	30	〃	〃	L－42	7	(2.1)× 0.6 × 0.1	(0.2)	〃		Ⅲ	
〃	〃	31	〃	〃	〃	56	(1.8)× 0.6 × 0.1	(0.2)	〃	26	Ⅳ	
〃	〃	32	〃	〃	K－40	133	(1.5)× 0.6 × 0.1	(0.2)	〃	28	〃	
〃		33	〃	〃	L－41	70	(1.5)× 0.6 × 0.2	(0.2)	〃		〃	
〃		34	〃	〃	L－40	380	(1.3)× 0.6 × 0.1	(0.1)	〃		〃	
〃		35	〃	Sb－3	H－31	36	(1.4)× 0.6 × 0.1	(0.2)	〃		〃	
〃	67－2	36	〃	Sb－7	L－41	160	2.7 × 0.5 × 0.2	0.3	〃	26	〃	
〃	〃	37	〃	〃	〃	94	2.4 × 0.5 × 0.2	0.2	〃		〃	
〃		38	〃	〃	L－40	285	1.9 × 0.5 × 0.1	0.1	〃	26	〃	
〃	67－2	39	〃	〃	K－40	55	(1.8)× 0.5 × 0.2	(0.2)	〃	〃	〃	
〃	〃	40	〃	〃	L－40	92	(1.8)× 0.5 × 0.1	(0.2)	〃	28	〃	
〃	〃	41	〃	〃	〃	55	(1.8)× 0.5 × 0.1	(0.1)	〃	26	〃	
〃	〃	42	〃	〃	〃	139	(1.6)× 0.5 × 0.2	(0.2)	〃	28	〃	
〃		43	〃	〃	K－40	90	(1.5)× 0.5 × 0.2	(0.2)	〃		〃	
〃		44	〃	〃	L－40	312	(1.4)× 0.5 × 0.2	(0.2)	〃	26	〃	
〃		45	〃	〃	K－40	100	(1.2)× 0.5 × 0.2	(0.1)	〃		〃	

挿図	図版	番号	名称	石器ブロック	発掘区	遺物番号	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ (g)	材質	母岩No.	層位	備考
Ⅲ-149		46	細石刃	Sb-7	K-40	56	(1.4)× 0.5 × 0.2	(0.1)	Sh.		Ⅳ	
〃		47	〃	〃	L-40	134	(1.2)× 0.5 × 0.1	(0.1)	〃	28	〃	
〃	67-2	48	〃	〃	H-12	12	3.1 × 0.4 × 0.1		〃	26	覆土	住居跡H-12出土
〃	〃	49	〃	〃	L-40	260	2.7 × 0.4 × 0.2	0.3	〃	〃	Ⅳ	
〃	〃	50	〃	〃	〃	235	(2.3)× 0.4 × 0.1	(0.2)	〃		〃	
〃	〃	51	〃	〃	K-40	115	(1.4)× 0.4 × 0.2	(0.2)	〃	26	〃	
〃	〃	52	〃	〃	L-40	82	(2.0)× 0.4 × 0.2	(0.1)	〃	〃	〃	
〃	〃	53	〃	Sb-3	G-31	152	(1.4)× 0.4 × 0.1	(0.1)	〃		Ⅳb	
〃	〃	54	〃	Sb-7	K-41	2	2.1 × 0.4 × 0.1	0.1	〃		Ⅲ	
〃	〃	55	〃	〃	L-41	320	(1.4)× 0.4 × 0.1	(0.1)	〃		Ⅳ	
〃		56	〃	〃	K-41	113	(1.1)× 0.4 × 0.1		〃	26	〃	
〃		57	〃	〃	L-41	280	(0.7)× 0.4 × 0.1		〃		〃	
〃		58	〃	〃	L-40	268	(1.0)× 0.4 × 0.1	(0.1)	〃		〃	
〃		59	〃	Sb-2	K-29	654	(0.6)× 0.4 × 0.1		〃		〃	
〃		60	〃	Sb-7	K-40	122	(0.7)× 0.4 × 0.1		〃		〃	
〃		61	〃	〃	L-40	285	(1.1)× 0.3 × 0.1	(0.1)	〃		〃	
〃		62	〃	〃	L-42	21	(2.3)× 0.6 × 0.1	(0.2)	〃		〃	
〃		63	〃	〃	L-41	6	(1.5)× 0.6 × 0.1	(0.1)	〃		Ⅲ	
〃		64	〃	〃	〃	329	(2.2)× 0.5 × 0.2	(0.2)	〃		Ⅳ	
〃		65	〃	〃	K-42	18	(0.8)× 0.5 × 0.1	(0.1)	〃		Ⅲ	
〃		66	〃	〃	K-41	105	(1.1)× 0.5 × 0.1		〃	26	Ⅳ	
〃		67	〃	Sb-2	K-29	225	(1.8)× 0.4 × 0.2		〃		〃	
〃		68	〃	Sb-7	L-40	299	(1.3)× 0.4 × 0.2	(0.1)	〃		〃	
〃		69	〃	〃	L-41	2	(1.4)× 0.4 × 0.1	(0.1)	Sh.		Ⅲ	
〃		70	〃	〃	L-40	265	(1.4)× 0.4 × 0.1	(0.1)	〃		Ⅳ	
〃		71	〃	〃	〃	118	(0.9)× 0.4 × 0.1		〃		〃	
〃		72	〃	〃	L-41	290	(1.6)× 0.7 × 0.2	(0.3)	〃		〃	
〃		73	〃	〃	L-40	263	(1.3)× 0.6 × 0.1	(0.1)	〃	26	〃	
〃		74	〃	〃	L-42	8	(1.1)× 0.6 × 0.2	(0.1)	〃	26	Ⅲ	
〃		75	〃	〃	L-40	268	(1.0)× 0.6 × 0.1	(0.1)	〃		Ⅳ	
〃		76	〃	〃	〃	306	(1.2)× 0.5 × 0.2	(0.1)	〃	28	〃	
〃		77	〃	〃	L-41	267	(1.0)× 0.5 × 0.1		〃		〃	
〃		78	〃	〃	L-40	399	(0.7)× 0.5 × 0.1		〃	26	〃	
〃		79	〃	〃	〃	245	(0.5)× 0.5 × 0.1		〃		〃	
〃		80	〃	〃	〃	402	(1.2)× 0.4 × 0.2	(0.1)	〃		〃	
〃		81	〃	〃	L-41	195	(0.8)× 0.4 × 0.2		〃		〃	
Ⅲ-150	67-3	82	剝・片	〃	K-41	6他	5.5 ×11.8 × 0.6	30.4	Obs.		Ⅲ	7点
〃	〃	83	〃	Sb-2	K-29	19他	7.3 × 6.0 × 0.6	14.7	〃		Ⅳ	5点
〃	〃	84	〃	Sb-7	K-42	13他	3.9 × 4.5 × 0.6	8.0	〃		Ⅲ	2点
〃	〃	85	〃	Sb-2	K-29	4	8.3 × 2.0 × 0.7	7.6	〃		Ⅲ	
Ⅲ-151	68-1	86	細石刃核接合	Sb-7	K-40	10他	8.6 × 4.5 × 1.6	56.6	Sh.	26(1)	Ⅲ、Ⅳ	9点
〃	68-2	86-1	剝片	〃	L-40	27	2.5 × 2.5 × 0.3	1.2	〃	〃	Ⅳ	
〃	〃	-2	〃	〃	〃	238	(1.8)× 1.7 × 0.2	(0.6)	〃	〃	〃	
〃	〃	-3	〃	〃	K-40		(3.8)× 1.7 × 0.2	(1.2)	〃	〃	Ⅲ	
〃	〃	-4	〃	〃	〃	24	2.8 × 1.1 × 0.2	0.5	〃	〃	Ⅳ	
〃	〃	-5	剝片	〃	〃	20	8.2 × 1.9 × 1.4	8.6	〃	〃	〃	
〃	〃	-7	〃	〃	K-41	50	1.7 × 0.2 × 1.0	0.4	〃	26	Ⅳ	
〃	〃	-8	〃	〃	K-42	24	1.6 × 0.2 × 1.0	0.5	〃	〃	〃	
〃	〃	-11	〃	〃	K-40	6	6.8 × 1.7 × 1.6	10.3	〃	〃	Ⅲ	
〃	〃	87	細石刃核	〃	〃	10	7.4 × 3.1 × 1.7	32.3	〃	〃	〃	
Ⅲ-152	68-1	88	細石刃核接合	〃	L-40	232他	4.2 × 3.6 × 1.2	15.7	〃	〃	Ⅳ	5点
〃	68-2	88-1	剝片	〃	L-42	19	2.9 × 1.7 × 0.2	0.7	〃	〃	Ⅳ	
〃	〃	-2	〃	〃	L-40	90	2.4 × 2.4 × 0.4	1.5	〃	〃	〃	
〃	〃	-6	削片	〃	〃	17	(2.9)× 0.8 × 0.6	(1.3)	〃	〃	〃	
〃	〃	-9	細石刃	〃	〃	316	3.0 × 0.6 × 0.2	0.4	〃	〃	〃	
〃	〃	89	細石刃核	〃	〃	232	4.0 × 2.3 × 1.0	11.8	〃	〃	〃	
〃	68-1	90	削片接合	〃	K-40	9他	9.1 × 4.3 × 1.5	25.0	〃	〃	Ⅲ	2点
〃	68-2	90-1	削片	〃	〃	3	(4.0)× 0.9 × 0.7	(2.0)	〃	〃	〃	

挿図	図版	番号	名称	石器ブロック	発掘区	遺物番号	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ (g)	材質	母岩No.	層位	備考
Ⅲ-152	68－2	－3	削片	Sb－7	K－40	9	9.1 × 3.7 × 1.5	23.0	Sh.	26	Ⅲ	
Ⅲ-153	68－1	91	削片接合	〃	〃	107他	8.5 × 2.2 × 1.2	13.4	〃	27	Ⅳ	2点
〃	68－2	91－1	削片	〃	〃	107	(8.1)× 1.3 × 0.9	(7.5)	〃	〃	Ⅳ	
〃	68－1	92	削片接合	〃	〃	33他	8.1 × 1.5 × 1.3	7.7	〃	26	Ⅲ、Ⅳ	3点
〃	〃	92－3	削片	〃	K－41	40	4.3 × 0.5 × 0.3	1.5	〃	〃	Ⅲ	
〃	〃	－5	〃	〃	K－40	33	6.3 × 1.0 × 1.3	5.4	〃	〃	Ⅳ	
〃	〃	－7	〃	〃	L－40	20	2.9 × 0.3 × 0.9	0.8	〃	〃	〃	
〃	〃	93	〃	Sb-7？	I－41		(6.1)× 0.7 × 1.1	(6.8)	〃		I	
Ⅲ-154	69－1	94	両面調整石器	Sb－7	K－42	2	4.0 × 4.0 × 0.8	11.9	〃		Ⅲ	
〃	〃	95	〃	Sb－6	M－36	34	5.0 × 4.5 × 1.1	23.4	Aga.		〃	
〃	〃	96	〃	Sb－3	H－32	15	8.1 × 4.6 × 1.5	45.7	Sh.		Ⅳ	
〃	〃	97	〃	Sb－2	K－30	34他	(5.7)× 5.0 × 1.3	(31.9)	〃		〃	2点
〃	〃	98	〃	Sb－5	J－36	36他	9.5 × 5.9 × 1.8	94.6	〃	25	Ⅳ下	3点
〃	69－2	99	〃	Sb－6	L－36		11.9 × 6.4 × 1.8	132.4	〃	1	Ⅲ	
〃	〃	100	〃	〃	〃		13.2 × 9.4 × 2.2	281.4	〃	1	〃	
〃	〃	101	〃	Sb-1？	H－4		(4.8)× 6.0 × 1.7	(34.3)	〃		覆土	住居跡
Ⅲ-155	69－1	102	〃	Sb－3	H－31		9.1 × 5.1 × 1.8	87.0	〃		I	
〃	〃	103	〃	Sb－1	O－28		9.7 × 8.2 × 2.3	179.8	〃		〃	
〃	〃	104	〃	Sb－5	I－35	11他	12.1 × 6.9 × 4.0	248.6	〃	25	Ⅲ、Ⅳ	12点
〃	〃	105	〃	Sb－3	H－32	21他	11.9 × 4.8 × 3.7	137.1	〃	〃	Ⅳ	14点
〃		106	剝片	〃	G－30	4	7.4 × 4.7 × 0.6	29.4	〃	〃	Ⅳ	
〃		107	〃	Sb－5	H－36	3	7.4 × 4.1 × 0.4	13.7	〃	〃	〃	
〃		108	〃	Sb－3	G－33	2	4.7 × 4.2 × 0.8	18.4	〃	25	Ⅳ	
〃		109	〃	〃	G－31	154	4.2 × 3.4 × 0.5	1.0	〃	〃	Ⅳb	
Ⅲ-156		110	両面調整石器接合	Sb－6	M－36	20他	12.9 × 8.4 × 2.9	183.2	〃	1	Ⅰ、Ⅲ、Ⅳ	9点
〃	69－2	110－1	剝片	〃	〃	11	1.1 × 1.4 × 0.2	0.3	〃	〃	Ⅳ	
〃	〃	－2	掻器	〃	〃	20	6.6 × 4.8 × 0.6	17.8	〃	〃	〃	
〃	〃	－3	剝片	〃	〃	21	3.8 × 3.1 × 0.5	4.1	〃	〃	Ⅲ	
〃	〃	－4	〃	Sb－2	J－29	16	5.4 × 5.2 × 0.4	9.7	〃	〃	Ⅳ	
〃	〃	－5	〃	Sb－6	L－36		4.5 × 3.2 × 0.4	4.8	〃	〃	I	
〃	〃	－6	〃	Sb－5	K－37	1	3.6 × 4.1 × 0.3	4.4	〃	〃	Ⅲ	
〃	〃	－7	〃	Sb－6	M－36	16	4.7 × 3.2 × 0.4	5.0	〃	〃	〃	
〃	〃	－8	〃	〃	〃	32	3.4 × 4.3 × 0.4	4.8	〃	〃	〃	
Ⅲ-157		111	両面調整石器接合	Sb－5	J－36	40他	13.2 × 9.4 × 2.5	297.9	〃	〃	Ⅰ、Ⅳ / Ⅳ下	4点
〃	69－2	111－1	剝片	〃	〃	40	4.9 × 3.8 × 0.5	7.2	〃	〃	Ⅳ下	
〃	〃	－2	〃	Sb－6	L－36		3.6 × 3.2 × 0.3	3.1	〃	〃	I	
〃	〃	－3	〃	〃	〃	1	5.2 × 3.2 × 0.4	6.2	〃	〃	Ⅳ	
〃	〃	112	〃	〃	M－36	15	7.0 × 3.8 × 0.9	19.7	〃	1	〃	
〃	〃	113	〃	Sb－3	G－30	3	5.9 × 3.5 × 0.5	10.2	〃	〃	Ⅳ	
〃	〃	114	〃	Sb－6	M－36	40	4.3 × 3.3 × 0.3	2.9	〃	〃	〃	
〃	〃	115	〃	〃	〃		3.8 × 2.5 × 0.3	2.5	〃	〃	I	
〃	〃	116	〃	Sb－3	H－31	34	4.1 × 2.5 × 0.3	3.3	〃	〃	Ⅳ	
Ⅲ-158	70－1	117	彫器	Sb－7	L－41	25	5.1 × 2.9 × 0.9	13.0	〃		Ⅲ	
〃	〃	118	〃	Sb－2	K－29	20	4.7 × 2.7 × 0.8	10.2	〃		Ⅳ	
〃	〃	119	〃	Sb－1	O－28	1	5.1 × 2.6 × 0.7	10.5	〃		〃	
〃	〃	120	〃	Sb－2	J－30	11	5.0 × 2.6 × 0.5	6.0	〃		〃	
〃	〃	121	〃	Sb－5	I－35	22	4.2 × 2.6 × 0.7	8.2	〃		Ⅲ	
〃	〃	122	〃	Sb－3	H－32	2	3.8 × 2.7 × 0.6	6.4	〃		Ⅳ	
〃	〃	123	〃	Sb－5	I－35	15	3.7 × 2.4 × 0.8	7.3	〃		Ⅲ	
〃	〃	124	〃	Sb－2	K－30	35	3.5 × 2.6 × 0.7	5.7	〃		Ⅳ	
〃	〃	125	〃	Sb－7	K－40	27	3.3 × 2.5 × 0.6	4.7	〃		〃	
〃	〃	126	〃	〃	〃	22	3.2 × 2.4 × 0.7	5.4	〃		〃	
〃	〃	127	〃	Sb－3	G－32	21	3.5 × 2.0 × 0.5	3.5	〃		〃	
〃	〃	128	〃	Sb－7	K－40	28	3.2 × 1.3 × 0.4	2.3	〃		〃	
〃	〃	129	〃	Sb－3	G－32	5	(2.3)× 2.1 × 0.6	(2.1)	〃		〃	
〃	〃	130	〃	Sb－2	K－30	21	2.4 × 2.0 × 0.5	2.5	〃		〃	
〃	〃	131	〃	Sb－7	K－41	24	2.7 × 1.6 × 0.5	2.5	〃		Ⅲ	
〃	〃	132	〃	〃	H－12	31	2.7 × 1.6 × 0.5	2.6	Aga-Sh.		V	住居跡

挿図	図版	番号	名称	石器ブロック	発掘区	遺物番号	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ (g)	材質	母岩No.	層位	備考
III-158		133	削片	Sb－7	L－40	101	2.0 × 4.0 × 0.3	0.2	Sh.		IV	
〃		134	〃	〃	〃	328	1.4 × 0.4 × 0.3	0.1	〃		〃	
〃		135	〃	〃	L－41	22	1.5 × 0.5 × 0.2	0.2	〃		III	
〃		136	〃	Sb－5	J－36	8	1.7 × 0.5 × 0.2	0.2	〃		IV	
〃		137	〃	Sb－7	K－40	63	2.5 × 0.4 × 0.2	0.2	〃		〃	
〃		138	〃	〃	L－41	85	2.2 × 0.6 × 0.3	0.4	〃		〃	
〃		139	〃	〃	〃	152	1.9 × 0.6 × 0.3	0.2	〃		〃	
〃		140	〃	〃	K－41	47	1.9 × 0.5 × 0.2	0.2	〃		〃	
〃		141	〃	〃	K－40	57	2.3 × 0.5 × 0.2	0.3	〃		〃	
〃		142	〃	〃	L－40	57	2.1 × 0.4 × 0.2	0.2	〃		〃	
〃		143	〃	Sb－3	H－31	10	1.5 × 0.4 × 0.2	0.1	〃		〃	
〃	71－1	144	錐形石器	Sb－2	K－30	26	3.8 × 0.6 × 0.4	1.1	Aga.		〃	
〃	〃	145	〃	Sb－3	H－31	28	3.6 × 0.8 × 0.4	0.9	〃		〃	
〃	〃	146	〃	〃	G－31	58	2.6 × 0.7 × 0.4	0.7	〃		〃	
〃	〃	147	〃	Sb－7	K－41	95	2.1 × 0.5 × 0.4	0.4	〃		〃	
〃	〃	148	〃	〃	L－41	322	2.0 × 0.5 × 0.4	0.4	〃		〃	
〃	〃	149	〃	〃	K－41	91	1.8 × 0.5 × 0.3	0.3	〃		〃	
〃	〃	150	〃	〃	〃	93	1.7 × 0.5 × 0.4	0.3	〃		〃	
〃	〃	151	〃	Sb－3	H－31	5	1.9 × 0.5 × 0.3	0.2	〃		〃	
〃	〃	152	削片	Sb－2	J－29	27	2.6 × 1.0 × 0.7	1.2	〃		〃	
〃	〃	153	〃	〃	K－29	549	2.3 × 1.2 × 0.3	0.8	〃		〃	
〃	〃	154	〃	〃	〃		2.2 × 0.8 × 0.6	1.4	〃		IV	
〃	〃	155	〃	Sb－3	H－32	26	2.5 × 0.8 × 0.4	0.5	〃		〃	
〃	〃	156	〃	Sb－7	K－40	8	3.8 × 0.7 × 0.6	1.5	〃		III	
III-159	70－2	157	掻器	Sb－5	J－36	26	5.1 × 2.2 × 0.7	7.3	Sh.		IV下	
〃	〃	158	〃	Sb－3	G－32	23	5.8 × 3.1 × 0.9	18.2	〃		IV	
〃	〃	159	〃	Sb－1	H－9	72	7.5 × 3.1 × 0.6	15.3	〃		床	住居跡
〃	〃	160	削器	Sb－1	O－28	9	8.6 × 3.0 × 1.4	36.6	〃		III	
〃	〃	161	〃	Sb－2	J－30	21	9.5 × 3.1 × 1.8	54.2	〃		IV	
〃	〃	162	〃	〃	K－29	16	6.2 × 3.4 × 1.2	25.3	〃	25	〃	
〃	〃	163	〃	Sb－5	I－35	29	6.9 × 2.7 × 0.8	13.8	〃		III	
〃	〃	164	〃	Sb－7	K－40	11	(3.5)× 3.1 × 0.5	(6.6)	〃		〃	
〃	〃	165	〃	Sb－1	O－28	2	(3.4)× 2.2 × 0.6	(4.0)	〃	25	〃	
〃	〃	166	〃	Sb－3	G－31	52	5.1 × 3.3 × 0.8	14.8	〃		IV	
〃	〃	167	〃	Sb-1?	M－29		7.2 × 3.0 × 1.0	21.2	Obs.		〃	
〃	〃	168	〃	Sb－3	G－31	7	6.8 × 4.0 × 1.0	29.4	Sh.		〃	
〃	〃	169	〃	Sb－2	K－29	379	7.4 × 4.2 × 0.7	20.2	〃		〃	
〃	〃	170	〃	Sb－1	O－28	7	(2.6)× 3.2 × 0.6	(8.4)	〃		III	
〃	〃	171	〃	Sb－2	J－29	23	(3.2)× 3.9 × 0.7	(11.1)	〃		IV上	
〃	〃	172	〃	Sb－1	O－28		(4.8)× 4.6 × 5.0	(11.4)	〃		I	
III-160	〃	173	〃	Sb－7	K－42	14他	10.7 × 3.7 × 1.0	29.6	〃	26	IV	2点
〃	〃	174	〃	Sb－2	K－29	54	8.6 × 3.2 × 0.9	23.4	〃		IV	
〃	〃	175	〃	Sb－3	G－32		(7.2)× 3.7 × 0.8	(21.9)	〃		II	
〃	〃	176	〃	〃	G－33	11	6.2 × 4.1 × 0.5	11.1	〃		IV	
〃	〃	177	〃	Sb－7	L－40	234	6.1 × 3.7 × 1.2	18.5	〃		〃	
〃	〃	178	〃	Sb－1	O－28	3	(4.4)×(3.6)× 0.9	(13.5)	〃	29	III	
〃	67－2	179	〃	Sb－2	K－29	304	5.6 × 3.6 × 0.9	10.4	Obs.		IV	
〃	〃	180	〃	Sb－5	I－35	32	(3.2)×(5.1)× 0.6	(10.3)	〃		IV下	
〃	70－2	181	〃	Sb－2	K－29	49他	7.3 × 3.1 × 0.8	12.2	Sh.		IV	4点
〃	〃	181－1	〃	〃	〃	49他	6.0 × 3.1 × 0.8	11.1	〃		〃	3点
〃	〃	－2	〃	〃	〃	49他	5.1 × 3.1 × 0.8	9.7	〃		〃	2点
〃	〃	182	縦長剥片	Sb－7	K－40		9.6 × 2.4 × 0.8	11.8			III下	
〃	〃	183	〃	〃	K－42	43	6.8 × 2.0 × 0.7	6.6	Sh.		IV	
〃	〃	184	〃	〃	L－42	2	6.5 × 1.6 × 0.7	6.0	〃		III	
〃	〃	185	〃	〃	K－41	10	(6.1)× 2.4 × 0.5	5.2	〃		〃	
〃	〃	186	〃	Sb－3	H－31		6.4 × 3.3 × 1.0	17.9	〃		I	
〃	〃	187	〃	Sb－7	K－40		7.0 × 3.1 × 0.6	10.2	〃		III	
〃	〃	188	〃	Sb－4	J－33	91	4.7 × 1.7 × 0.3	2.7	Aga-Sh.		IV	

挿図	図版	番号	名称	石器ブロック	発掘区	遺物番号	長さ×幅×厚さ (cm)	重さ (g)	材質	母岩No.	層位	備考
III-161	72	189	尖頭器	Sb－4	J－33	279	8.7 × 4.9 × 1.3	56.4	Aga-Sh.		Ⅳ	
〃	〃	190	尖頭器接合	〃	L－33	33他	8.5 × 4.5 × 2.4	61.2	〃	23	〃	9点
〃	〃	191	尖頭器	〃	L－33	33	7.8 × 4.3 × 1.7	47.5	〃	〃	〃	
III-162	〃	192	尖頭器接合	〃	I－33	183他	11.5 × 7.8 × 4.0	315.4	〃	6	〃	43点
〃	〃	193	尖頭器	〃	〃	183他	11.4 × 5.9 × 2.2	128.6	〃	〃	〃	2点
III-163	〃	194	尖頭器接合	〃	I－34	104他	13.2 ×11.5 × 4.1	450.0	〃	3	〃	17点
〃	〃	195	尖頭器	〃	〃	104	8.9 × 4.2 × 2.2	57.1	〃	3	〃	
III-164	73	196	尖頭器接合	〃	I－32	1他	12.2 ×13.1 × 3.4	340.9	〃	14	〃	36点
〃	〃	197	尖頭器	〃	埋土		(6.6)× 5.7 × 2.1	(66.5)	〃	〃		
III-165	〃	198	尖頭器接合	〃	I－33	78他	15.7 × 8.7 × 6.5	667.3	〃	5	Ⅳ	63点
〃	〃	199	尖頭器	〃	〃	78	8.0 × 5.6 × 2.3	88.8	〃	〃	〃	
III-167	74	200	尖頭器接合	〃	I－34	587他	13.4 ×11.3 × 6.2	698.7	〃	4	〃	161点
〃	〃	201	尖頭器	〃	〃	587	11.7 × 5.2 × 2.3	113.7	〃	〃	〃	2点
III-168	75	202	尖頭器製作剝片接合	〃	I－33	41他	10.8 × 6.2 × 4.5	190.6	〃	2	〃	65点
III-169	76	203	〃	〃	I－34	351他	12.6 × 9.6 × 5.9	327.2	〃	16	〃	62点
〃		204	尖頭器	〃	〃	351	8.1 × 4.9 × 2.1	71.2	〃	〃	〃	
III-170	77	205	尖頭器製作剝片接合	〃	I－33	30他	15.2 ×13.5 × 5.2	735.0	〃	11	〃	78点
III-171	75	206	〃	〃	〃	217他	10.8 × 9.9 × 2.7	106.9	〃	19	〃	22点
III-172	79	207	縦長剝片接合	〃	K－33	62他	10.7 ×10.7 × 7.6	341.9	〃	8	〃	15点
〃	〃	208	石核接合	〃	J－33	13他	8.3 × 6.8 ×11.3	352.4	〃	〃	〃	8点
III-173	〃	209	縦長剝片接合	Sb－5	J－36	22他	10.3 × 7.9 ×11.4	340.0	〃	20	〃	31点
〃	〃	210	石核接合	〃	J－34	27他	8.4 × 6.3 × 5.3	228.5	〃	〃	〃	6点
〃	80	211	〃	Sb－4	J－33	9他	10.0 × 8.0 × 5.0	359.2	〃	24	〃	2点
〃	〃	212	〃	〃	〃	16他	14.4 ×11.0 × 8.2	1,185.0	〃	10	〃	9点
III-174	〃	213	〃	〃	I－34	580他	9.6 × 8.2 ×10.3	615.0	〃	9	〃	8点
〃	78－2	214	縦長剝片接合	〃	〃	176他	19.9 × 9.6 ×11.4	1,010.0	〃	15	〃	70点
III-175	71－2	215	ストーン・リタッチャー	Sb－7	K－42	10	11.7 × 5.6 × 1.6	127.6	Gr-Mud.		Ⅲ	
〃	〃	216	〃	〃	L－42	3	10.0 × 6.3 × 1.5	140.3	〃		〃	
〃	〃	217	〃	Sb－2	J－30	13	20.9 × 7.7 × 5.2	1,080.0	〃		Ⅳ	
〃	〃	218	砥石	Sb－7	L－42	23	6.5 × 3.2 × 2.1	29.8	Sa.		〃	
III-176		219	台石	Sb－4	J－34	20	17.0 ×(14.9)×10.8	(4,000)	And.		〃	
〃	71－2	220	〃	〃	J－34	17	(8.8)×(9.9)× 7.3	(620.0)	〃		〃	
	78－1	221	尖頭器製作剝片接合	〃	I－34	559他	19.5 ×11.5 × 6.2	1,185.0	Aga-Sh.	7	〃	38点
	80	222	石核	Sb－2	K－29	172	9.5 × 6.2 × 4.0	290.0	〃	17	〃	
	〃	223	〃	Sb－4	J－33	53他	10.0 × 9.1 × 5.4	301.0	〃	18	〃	4点
	〃	224	〃	〃	I－34	511他	12.7 × 7.0 × 5.4	481.2	〃	13	〃	2点

㈶北海道埋蔵文化財センター調査報告書　第45集

函館市

石　川　1　遺　跡

一般国道5号函館新道道路改良用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

昭和63年3月31日発行

編集・発行　財団法人　北海道埋蔵文化財センター
〒064 札幌市中央区南26条西11丁目
☎011(561)3131

印　　刷　㈱　総　北　海　札幌支社
〒001 札幌市北区北30条西5丁目菊地ビル4F

この報告書は、函館開発建設部のご了解を得て増刷したものです。